岐阜県文化財保護センター調査報告書　第44集

牛　垣　内　遺　跡

丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）

埋蔵文化財発掘調査報告書　第３集

１９９８

岐　　阜　　県

財団法人　岐阜県文化財保護センター

序

五味原遺跡群が所在する丹生川村折敷地の地名は木地師が作る「おしきじ」に由来するものであるといわれます。遺跡群の上流には「木地屋渓谷」の地名も残っています。また、折敷地地区は江戸時代から昭和初期にかけて主要な木炭の産出地でありました。脈々と続く人々と山林資源の結び付きを物語っています。

このたび、県土木部宮川上流河川開発工事事務所が行う丹生川ダム建設に伴い、埋蔵文化財の記録保存を行うために、五味原遺跡群のひとつ牛垣内遺跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は宮川上流河川開発工事事務所から岐阜県教育委員会に委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが担当しました。

今回の調査の中で、平安時代の住居跡が検出されました。それに伴って出土した灰釉陶器に記された墨書はまさに文字文化をもった人々の存在を意味しています。荒城川最上流部の山々に囲まれた地にも確実に文字文化が伝播していたことを示す貴重な資料と言えます。

最後になりましたが、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成にあたりましては、関係諸機関各位の温かい御理解御協力を賜り感謝申し上げます。また、現地における調査に際しましては、地元の方々の多大なるご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

財団法人岐阜県文化財保護センター
理事長　篠　田　幸　男

例　　言

1．本書は岐阜県大野郡丹生川村折敷地字牛垣内に所在する牛垣内遺跡（遺跡番号21601-00315）の発掘調査報告書である。

2．本調査は丹生川ダム建設に伴うもので、岐阜県土木部宮川上流河川開発工事事務所から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は、平成６・７年度に実施し、渡辺誠名古屋大学文学部教授の指導のもとに野村宗作・上嶋善治（平成６年度）、野村宗作・伊藤秀雄（平成７年度）が担当した。

4．本書に記載した遺物の実測は、次の者が主に行った。

土器（拓本含む）清田由美子　所　洋子　牛丸富士子　柚村幸子　瀬戸幸子
白栗由美　岩田　舞　田井孝子　谷口尚子　荒井尚子　大西和子
横井さだ子　垣添敦子　畠中裕子　柚村幸子　田村由美子

石器・石製品　前畑裕美　大石崇史　上嶋善治

土製品　古田奈緒子　大石崇史

5．遺構図面・遺物実測図のトレースは次の者が主に行った。

中村映子　柚村幸子　脇淵純子　白栗由美

6．遺物の写真撮影は佐藤右文氏に依頼した。

7．本書の執筆は、第２章第１節は清見村立清見小学校教頭岩田修氏に、第４章第５節６と第６章第３節は名古屋大学文学部教授渡辺誠氏に玉稿を賜った。他は野村宗作・谷口和人・伊藤秀雄・上嶋善治・古田奈緒子が担当分担し、執筆者名は文末に示した。編集は上嶋が行った。

8．事前地形測量は㈱イビソクに委託して行った。

9．空中写真撮影は㈱イビソクに委託して行った。

10．残存脂肪分析は㈱ズコーシャ総合科学研究所に委託して行った。

11．発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

樋口昇一　神村　透　会田　進　山田昌久　能登　健　小島敦子　神谷佳明
森　浩一　狩野　睦　神保孝造　小島俊彰　南　久和　小坂　大　河合英夫
中田武司　和田　萃　藤田富士夫　田口昭二　佃　幹雄　館野和己　戸田哲也
早川万年　大江　命　垣水富郎　藤本健三　吉朝則富　岩田　修　小熊博史
金子直行　領塚正浩　矢野健一　田村陽一　神谷和孝　傳田伊史　白沢勝彦
綿田弘実　長野県立歴史館　岐阜県警察科学捜索課　飛騨考古学会

12．発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には、次の方々の参加・協力を得た。

古田奈緒子　稲本　嗣　岩佐　勇　黒木明三　清水佐市　白田良恵　白石和代
田中靖久　竹本朋生　矢嶌和子　上村かな枝　山田博子　飯塚八十子　伊藤世志光
大平　勇　川浦　泉　高橋公芳　高橋なよ　高原みか　川合美智子　青木　茂
倉谷　渡　野中一郎　玉田忠男　川上　正　岩下てつ　小椋あや子　田口慶子
大霜安芳　石本国夫　浦西正幸　谷口香代子　平野はるえ　坂谷正道　角岡恵美子

蒔田利光　渡瀬　保　岩佐いと　沖本一雄　金子鈴子　倉本正幸　谷畠喜代三
田邊直子　坊田洋子　宮ノ脇季信　石坂昭義　岩佐　泰　中田信子　川上百合子
野村三鈴　松山夏子　清田由美子　所　洋子　牛丸富士子　柚村幸子　瀬戸幸子
脇淵純子　白栗由美　岩田　舞　前畑裕美　田井孝子　谷口尚子　中村映子
荒井尚子　大西和子　横井さだ子　垣添敦子　畠中裕子

13. 遺構記号は次の通りである。SB：住居跡　SF：焼礫集積遺構　SK：土坑　P：ピット
14. 土層および遺物の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』(1994) を参照した。
15. 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　　次

序
例言
第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の経緯……2
第２章　遺跡の環境……7
　第１節　地形的、地質的環境……7
　第２節　歴史的環境……11
第３章　遺　構……14
　第１節　基本的層序……14
　第２節　焼礫集積遺構……18
　第３節　竪穴住居跡……23
　第４節　その他の遺構……36
第４章　遺　物……38
　第１節　概　要……38
　第２節　遺構出土の遺物……40
　第３節　包含層出土の縄文土器……80
　第４節　包含層出土の石器……159
　第５節　その他の遺物……204
第５章　自然科学的分析……212
第６章　考　察……220
　第１節　押型文土器を中心とする縄文早期の土器群について……220
　第２節　縄文後晩期の土器について……223
　第３節　編布圧痕の土器について……224
引用・参考文献……227

図 版 目 次

図版１　１．遺跡遠景　２．遺跡全景　３．Ａ地点全景　４．Ｂ地点全景　５．Ｃ地点全景
図版２　１．作業風景（平成６年度）　２．作業風景（平成７年度）　３．土層断面Ｇ－７～９
４．土層断面Ｐ－12北壁　５．遺物出土状況
図版３　１．第１号住居跡　２．第１号住居跡竈　３．第２号住居跡　４．第２号住居跡炉
５．第２号住居跡石棒出土状況　６．第２号住居跡と第９号住居跡
図版４　１．第３号住居跡　２．第３号住居跡埋設土器　３．第４号住居跡　４．第５号住居跡
５．第６号住居跡表土　６．第６号住居跡
図版５　１．第７号住居跡　２．第８号住居跡　３．第８号住居跡炉　４．第10号住居跡
５．第10号住居跡埋甕
図版６　１．SF１　２．SF４　３．SF２上層　４．SF２　５．SF３上層　６．SF３
７．木杭　８．竈跡
図版７　１～４．灰釉陶器
図版８　１～８．灰釉陶器
図版９　１～６．第２号住居跡出土縄文土器
図版10　１・２．第２号住居跡出土縄文土器
図版11　１・２．第２号住居跡出土縄文土器
図版12　１．第２号住居跡出土縄文土器　２．第２号住居跡出土土製品
３．第３号住居跡出土縄文土器　４．第５号住居跡出土縄文土器
図版13　１～４．第６号住居跡出土縄文土器
図版14　１．第６号住居跡出土縄文土器　２・３．第７号住居跡出土縄文土器
図版15　１～３．第７号住居跡出土縄文土器
図版16　１・２．第７号住居跡出土縄文土器
図版17　１．第７号住居跡出土縄文土器　２．第８号住居跡出土縄文土器
３．第９号住居跡出土縄文土器
図版18　１・２．第８号住居跡出土縄文土器
図版19　１．第８号住居跡出土縄文土器　２．第９号住居跡出土縄文土器
図版20　１．第９号住居跡出土縄文土器　２・３．第10号住居跡出土縄文土器
図版21　１・２．住居跡出土石器
図版22　１～６．包含層出土縄文土器Ｉ群
図版23　１～４．包含層出土縄文土器Ｉ群
図版24　１・２．包含層出土縄文土器Ｉ群
図版25　１・２．包含層出土縄文土器Ｉ群
図版26　１・２．包含層出土縄文土器Ｉ群
図版27　１・２．包含層出土縄文土器Ｉ群
図版28　１．包含層出土縄文土器Ｉ群　２．包含層出土縄文土器II群

図版29　1・2．包含層出土縄文土器III群1～4類
図版30　1・2．包含層出土縄文土器III群5類
図版31　1・2．包含層出土縄文土器III群5～9類
図版32　1・2．包含層出土縄文土器III群9・10類
図版33　1．包含層出土縄文土器IV群1・2類　2．包含層出土縄文土器IV群2類
図版34　1．包含層出土縄文土器IV群2・3類　2．包含層出土縄文土器IV群3類
図版35　1～4．包含層出土縄文土器IV群3類
図版36　1・2．包含層出土縄文土器IV群3類
図版37　1・2．包含層出土縄文土器IV群3類
図版38　1～4．包含層出土縄文土器IV群3類
図版39　1・2．包含層出土縄文土器IV群4類
図版40　1・2．包含層出土縄文土器IV群4類
図版41　1・2．包含層出土縄文土器IV群4類
図版42　1・2．包含層出土縄文土器IV群4類
図版43　1・2．包含層出土縄文土器IV群4類　3．包含層出土縄文土器IV群5類
図版44　1～3．包含層出土縄文土器IV群5類
図版45　1～4．包含層出土縄文土器IV群5類
図版46　1～3．包含層出土縄文土器IV群5類
図版47　1・2．包含層出土縄文土器IV群5類
図版48　1．包含層出土縄文土器IV群6類　2．包含層出土縄文土器IV群7類
　　3．弥生土器・土師器
図版49　1．包含層出土石器　石鏃・石錐　2．包含層出土石器　削器・掻器
図版50　1．包含層出土石器　石匙・両極剥離痕のある石器・二次加工のある剥片
　　2．包含層出土石器　使用痕のある剥片・異形石器・石核
図版51　1．包含層出土石器　打製石斧　2．包含層出土石器　磨製石斧
図版52　1・2．包含層出土石器　磨石・凹石・敲石類
図版53　1．包含層出土石器　有溝石錘・砥石　2．包含層出土石器　石皿　3．石製品
図版54　1．土製品　2．木製品
図版55　植物遺体
図版56　編布圧痕と参考資料

挿　図　目　次

第1図　牛垣内遺跡の位置……1
第2図　牛垣内遺跡周辺の地形……8
第3図　遺跡付近の荒城川縦断面図……9
第4図　土壌層の諸性質……10

第５図　丹生川村内の遺跡（弥生時代以降）……13
第６図　土層図……15
第７図　牛垣内遺跡の地形図及び発掘全体図……17
第８図　礫原形組成図……18
第９図　礫現状形組成図……18
第10図　被熱状況組成図……18
第11図　各遺構の重量分布……18
第12図　焼礫集積遺構……19
第13図　遺構配置図（Ｂ・Ｃ地点）第２～10号住居跡・竈跡・木杭……21
第14図　第１号住居跡……24
第15図　第２号住居跡・第９号住居跡……25
第16図　第２号住居跡出土遺物分布図……26
第17図　第３号住居跡……27
第18図　第４号住居跡……28
第19図　第５号住居跡……29
第20図　発掘前の第６号住居跡表土……30
第21図　第６号住居跡……31
第22図　第６号住居跡出土遺物分布図……32
第23図　第７号住居跡……33
第24図　第７号住居跡出土遺物分布図……34
第25図　第８号住居跡……35
第26図　第８号住居跡出土遺物分布図……36
第27図　第10号住居跡と埋甕……37
第28図　竈跡……37
第29図　木杭……37
第30図　平成６年度発掘（Ａ地点）の遺物出土分布図……38
第31図　平成７年度発掘（Ｂ・Ｃ地点）の遺物出土分布図……39
第32図　第１号住居跡・Ｌ７区等出土土器……43
第33図　Ｌ７区等出土土器……44
第34図　第２号住居跡出土縄文土器(1)……45
第35図　第２号住居跡出土縄文土器(2)……47
第36図　第２号住居跡出土縄文土器(3)……48
第37図　第２号住居跡出土縄文土器(4)……49
第38図　第２号住居跡出土縄文土器(5)……51
第39図　第２号住居跡出土縄文土器(6)……52
第40図　第２号住居跡出土縄文土器(7)……53
第41図　第２号住居跡出土石器……54

第42図　第３号住居跡出土縄文土器・石器……56
第43図　第５号住居跡出土縄文土器……56
第44図　第６号住居跡出土縄文土器(1)……58
第45図　第６号住居跡出土縄文土器(2)……60
第46図　第６号住居跡出土縄文土器(3)・石器……61
第47図　第７号住居跡出土縄文土器(1)……62
第48図　第７号住居跡出土縄文土器(2)……63
第49図　第７号住居跡出土縄文土器(3)……64
第50図　第７号住居跡出土縄文土器(4)……66
第51図　第７号住居跡出土縄文土器(5)・石器……67
第52図　第８号住居跡出土縄文土器(1)……69
第53図　第８号住居跡出土縄文土器(2)……70
第54図　第８号住居跡出土縄文土器(3)……72
第55図　第８号住居跡出土縄文土器(4)・石器……73
第56図　第９号住居跡出土縄文土器(1)……75
第57図　第９号住居跡出土縄文土器(2)……77
第58図　第９号住居跡出土縄文土器(3)・石器……78
第59図　第10号住居跡出土縄文土器・石器……79
第60図　押型文文様種……83
第61図　Ｐ14・包含層出土縄文土器Ｉ群（Ａ地点：11類、Ｂ地点：１類～２ｂ類）……85
第62図　包含層出土縄文土器Ｉ群（Ｂ地点：２ｂ類）……86
第63図　包含層出土縄文土器Ｉ群（Ｂ地点：２ｃ類～３ｂ類）……88
第64図　包含層出土縄文土器Ｉ群（Ｂ地点：３ｃ類・３ｄ類）……90
第65図　包含層出土縄文土器Ｉ群（Ｂ地点：３ｄ類）……92
第66図　包含層出土縄文土器Ｉ群（Ｂ地点：４ａ類・４ｂ類）……93
第67図　包含層出土縄文土器Ｉ群（Ｂ地点：５類・６類）……96
第68図　包含層出土縄文土器Ｉ群（Ｂ地点：６類～８類）……98
第69図　包含層出土縄文土器Ｉ群（Ｂ地点：９類・10類、Ｃ地点：１類～３ａ類）……100
第70図　包含層出土縄文土器Ｉ群（Ｃ地点：３ａ類・４類・８類・９類）……102
第71図　包含層出土縄文土器II群……109
第72図　包含層出土縄文土器III群(1)……109
第73図　包含層出土縄文土器III群(2)……111
第74図　包含層出土縄文土器III群(3)……113
第75図　包含層出土縄文土器III群(4)……115
第76図　包含層出土縄文土器III群(5)……116
第77図　包含層出土縄文土器III群(6)……118
第78図　包含層出土縄文土器III群(7)……119

第79図　包含層出土縄文土器III群(8) ……120
第80図　包含層出土縄文土器IV群(1) ……122
第81図　包含層出土縄文土器IV群(2) ……124
第82図　包含層出土縄文土器IV群(3) ……125
第83図　包含層出土縄文土器IV群(4) ……128
第84図　包含層出土縄文土器IV群(5) ……129
第85図　包含層出土縄文土器IV群(6) ……130
第86図　包含層出土縄文土器IV群(7) ……131
第87図　包含層出土縄文土器IV群(8) ……132
第88図　包含層出土縄文土器IV群(9) ……134
第89図　包含層出土縄文土器IV群(10) ……136
第90図　包含層出土縄文土器IV群(11) ……137
第91図　包含層出土縄文土器IV群(12) ……138
第92図　包含層出土縄文土器IV群(13) ……140
第93図　包含層出土縄文土器IV群(14) ……141
第94図　包含層出土縄文土器IV群(15) ……142
第95図　包含層出土縄文土器IV群(16) ……143
第96図　包含層出土縄文土器IV群(17) ……146
第97図　包含層出土縄文土器IV群(18) ……147
第98図　包含層出土縄文土器IV群(19) ……148
第99図　包含層出土縄文土器IV群(20) ……149
第100図　包含層出土縄文土器IV群(21) ……150
第101図　包含層出土縄文土器IV群(22) ……151
第102図　包含層出土縄文土器IV群(23) ……152
第103図　包含層出土縄文土器IV群(24) ……153
第104図　包含層出土縄文土器IV群(25) ……154
第105図　包含層出土縄文土器IV群(26) ……155
第106図　包含層出土縄文土器IV群(27) ……156
第107図　底部残存率別組成図 ……157
第108図　器形別個体数 ……157
第109図　底径別破片数 ……157
第110図　底部圧痕組成図 ……157
第111図　器形別個体数 ……158
第112図　底径別破片数 ……158
第113図　底部圧痕組成図 ……158
第114図　網代分類別組成図 ……158
第115図　包含層出土石器(1)石鏃 ……161

第116図　包含層出土石器(2)石錐……163
第117図　包含層出土石器(3)削器……164
第118図　包含層出土石器(4)掻器・石匙……166
第119図　包含層出土石器(5)両極剥離痕のある石器・二次加工のある剥片……167
第120図　包含層出土石器(6)使用痕のある剥片・異形石器・石核……168
第121図　包含層出土石器(7)打製石斧……170
第122図　包含層出土石器(8)磨製石斧……172
第123図　包含層出土石器(9)磨石・凹石・敲石類(1)……173
第124図　包含層出土石器(10)磨石・凹石・敲石類(2)……174
第125図　包含層出土石器(11)有溝石錘・砥石・石皿……176
第126図　包含層出土石製品……177
第127図　地点ごとの石器組成……178
第128図　包含層出土弥生土器・土師器……204
第129図　包含層出土土製品……207
第130図　木杭……208
第131図　包含層出土木製品……209
第132図　脂肪酸分析のため土壌を採取した場所……218
第133図　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成……218
第134図　試料中に残存する脂肪のステロール組成……218
第135図　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図……219
第136図　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関……219
第137図　Ⅰ期の土器……221
第138図　各種の編布（上）・同圧痕（下）のタテ糸とヨコ糸の間隔……226

付　表　目　次

第１表　丹生川村内の遺跡（弥生時代以降）……12
第２表　土器観察表（第１号住居跡及びＬ７区等出土灰釉陶器）……41
第３表　押型文土器観察表……104
第４表　石鏃の石材と形態分類……160
第５表　石錐の石材と形態分類……162
第６表　石器一覧表……178
第７表　植物遺体一覧表……211
第８表　クリ計測値一覧表……211
第９表　試料の残存脂肪抽出量……218
第10表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合……218
第11表　土器分類編年対応表……220

第１章　調 査 の 経 緯

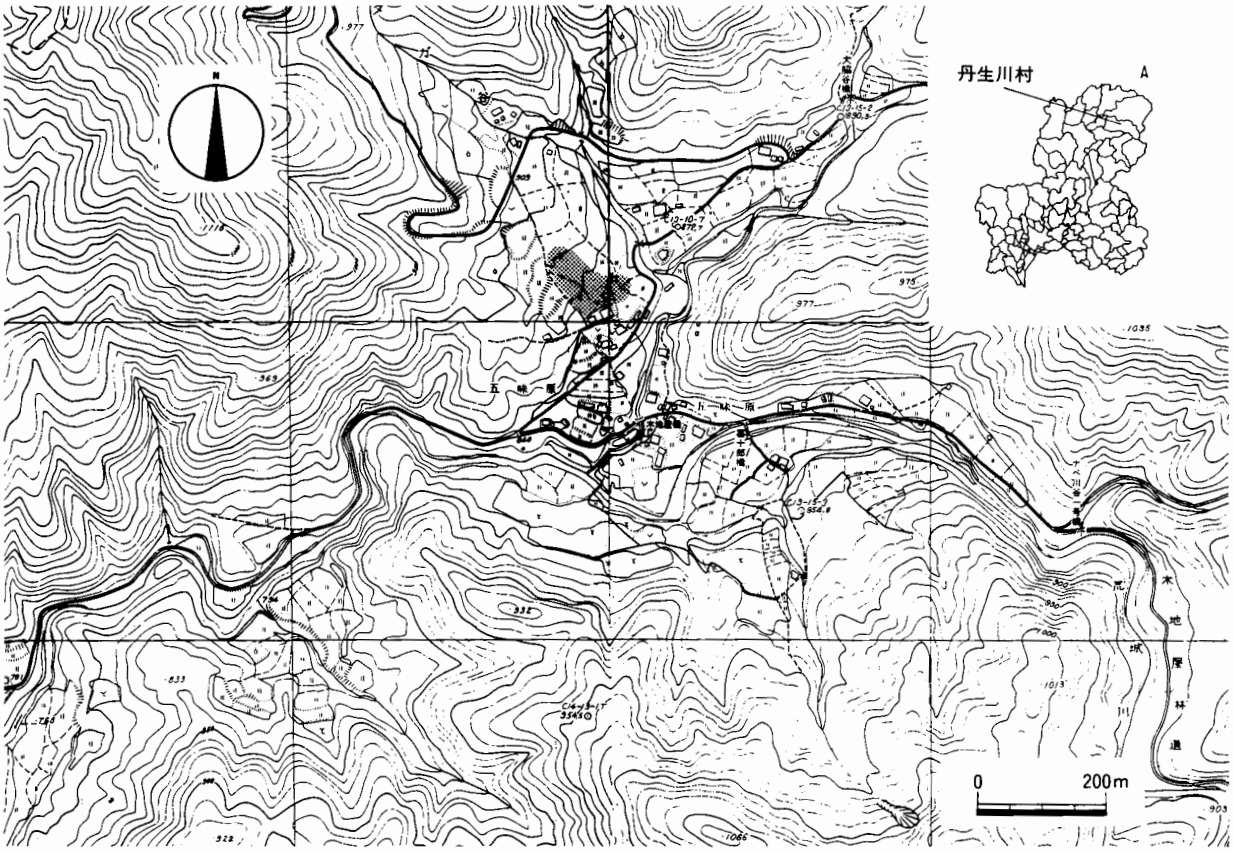
第１節　調査に至る経緯

今回の発掘調査で牛垣内遺跡が対象となったのは、岐阜県宮川上流河川開発工事事務所による丹生川ダム建設による。丹生川ダム水没地内埋蔵文化財緊急発掘調査の経緯については「西田遺跡」の発掘調査報告書にて記述されているので割愛する。牛垣内遺跡は平成６年度に2,500㎡、平成７年度に2,100㎡、計4,600㎡の発掘調査を行う計画であった。

平成５年度に㈶岐阜県文化財保護センターによって丹生川ダム水没地内埋蔵文化財緊急発掘調査が開始された時点で、牛垣内遺跡の周辺において遺跡の広がりを確認する必要から、平成５年７月に小型重機を利用して試掘を行った。その結果、発掘調査予定地の西側に遺跡の広がりは認められなかった。しかし、南方約150ｍの地点の２か所のトレンチからは遺物が出土し、遺跡の存在の可能性が高くなった。この地点に関しては、平成６年５月の試掘調査により範囲を確定し、新たに「丸山遺跡」として新発見の遺跡となった。

平成６年度には、予定の発掘調査範囲を調査しながら、遺跡の北方および東方、伝助谷を挟んだ地点で同様に試掘調査を行った。その結果、新たな遺跡の広がりは確認されなかった。従って、当初の予定通りに4,600㎡の発掘調査を行った。

（上嶋　善治）



第１図　牛垣内遺跡の位置

第2節　発掘調査の経緯

発掘調査は平成6年度と平成7年度の2期に分けて行った。平成8年度までに一次整理作業を終え、平成9年度に報告書作成作業を行った。発掘調査にあたっての地区の設定は、国土座標に合わせて、8×8mの区画を設けた。1列は、国土座標第Ⅶ系のX＝23984、A列は同じくY＝18850となっている。整理作業の段階で、便宜的に遺跡を3地点に分けることにした。平成6年度の発掘調査区域で、グリッド表示ではG6及びH7区より山側をA地点とし、平成7年度の発掘調査区域で、O5～O9区より西側をB地点、残りの東北側をC地点とした。

以下、現地での発掘調査の経緯を2期に分けて記述する。

平成6年度

5月上旬までに、現場の遠景写真・地形測量・現場事務所の設置などの準備を行い、5月9日より作業を開始し、12日に調査始め式を行った。以下、調査経過を週毎に記述する。

第1週（5.9～13）

地区の設定をしB－11・12・13より発掘を開始した。C－11・12・13へと順次掘削範囲を広げた。第Ⅱ層から縄文晩期と思われる土器片が出土する。

第2週（5.16～20）

D－11・12・13、E－11・12へと掘削範囲を拡大する。比較的遺物が多く、土器の小破片等を除いてコンピュータ・システム（株）の「サイト」（以下サイトという）で取り上げる。しかし、黒土層の下は岩石が連なった礫層であり、岩石の間からも遺物が出土し、掘削に時間がかかる。遺構らしきもの見えてこず。

第3週（5.23～27）

D－13、E－12、F－11・12の掘削続行。帯状に遺物が集中して出土する。C－12で焼土や炭化物が面でとらえられ遺物も集中して出土したため「SX1」として精査。

第4週（5.30～6.3）

先週に続き各グリッドを掘削。D－11で磨製石斧2点出土。B－12完掘、遺物なし。SX1は焼土らしき面が検出され、遺物・炭化物は多く出土するも遺構の性格ははっきりしない。C－9・10、D－9・10、E－9・10に掘削範囲拡大。E－10で石刀片らしき石製品が出土。

第5週（6.6～10）

掘削中の各グリッドを礫層（地山）まで掘削清掃して、順次掘削範囲を拡大して行く。SX1は精査掘削を続ける。C－10で管玉出土。E－10は遺物多し。E－13は遺物出土せず。SX1をサイトにて実測する。

第6週（6.13～17）

C－10・12、D－9・10・11、E－9の掘削を続行、依然として遺構らしきもの見られず。SX1は精査続行。しかし、セクションはもぐらによって破壊され遺構らしさは消える。

第7週（6.20～24）

先週の各グリッドの掘削と並行して、D－12、E－8、F－8・9、G－7に掘削範囲を広げる。

Ｆ－８では北東より南西に向けて水の流れに沿い、砂利層の中より遺物が多く出土した。Ｃ－９にて有溝石錘５個出土する。他のグリッドからは磨製石斧、土器片など出土する。

第８週（６.27～７.１）

Ｃ－９、Ｄ－８の掘削終了。Ｆ－８、Ｇ－７・８の掘削。Ｆ－８に続く流れに沿って遺物出土する。29日、Ｇ－７より灰釉陶器出土する。

第９週（７.４～８）

あまり変化のない週であった。６日は非常に暑い１日であったが、Ｆ－８より砂岩の玉が出土し全員元気をだして発掘する。

第10週（７.11～15）

Ｅ－７、Ｆ－７・８、Ｇ－７・８・９、Ｈ－８の掘削。13日Ｇ－８より石剣出土、15日、灰釉陶器の墨書土器出土。隅丸方形の住居跡らしきものが見えてくる。

第11週（７.18～22）

Ｇ－７・８・９・10、Ｈ－７・８・９の掘削。Ｈ－７にて10世紀の石組の竈をもつ住居跡を検出しSB１とする。本年は梅雨もなく暑い日が続く。

第12週（７.25～29）

Ｇ－７・８・９・10・11・12、Ｈ－７の掘削。Ｇ－７～８セクションの土層図作成。

第13週（８.１～５）

Ｇ－11・12、Ｈ－11・12の掘削。Ｈ－11・12では砂礫層より縄文晩期と思われる遺物が多く出土。遺構の存在を考えたが土器の出土状況、土質、地形的に可能性はないと判断する。セクション図の作成も考えたが土質からみて無理と判断する。５日、Ｇ－12の地山近くより環状磨製石斧、「岩版」、及び、木器らしき物出土。暑さがピークに達するも炎天下のもと発掘は順調に進む。また、Ｈ－12の東側できれいな地下水が湧水し、近くに飲み水を得ることができて大変助かった。

第14週（８.８～11）

掘削場所は先週と同一。遺物の出土量が多くサイトで取り上げるにも時間がかかる。９日、Ｇ－12で独鈷石、Ｈ－11より小型の砲弾型石製品、Ｈ－12より完形に近い小型の壷がそれぞれ出土。

第15・16週（８.15～26）

先週と同一場所の掘削を続ける。依然として遺物の出土量多し。24日にはサイトにて遺物810点取り上げる。26日に至り遺物の出土は峠を越した。

第17週（８.29～９.２）

Ｇ－11・12、Ｈ－11・12の掘削を漸く中断し、Ｄ－12・13、Ｅ－12・13の掘削に向かう。遺物の出土量少なくなる。

第18週（９.５～９）

Ｄ－12・13、Ｅ－12・13、Ｆ－11・12の掘削を行う。Ｄ－13、Ｅ－13は泥沼で作業は困難であった。遺物の出土量は少ない。９月に入っても暑さは依然として厳しい。

第19週（９.12～16）

14日、予定面積の発掘を終了。写真撮影（空撮）に向けての準備に入る。

第20・21週（９.19～30）

全グリッドの清掃。SB１の実測を残して発掘を終了し、西田遺跡の発掘作業を手伝った。

第22週（10．３～７）

空撮に向けて遺跡全体の清掃。６日㈱イビソクにより空撮。SB１の竈実測。

第23～25週（10.10～29）

西田遺跡発掘作業手伝い(27日まで)。28日、現地説明会に向けた準備。29日、現地説明会。河合英夫氏の指導を受ける。

第26週（10.31～11．４）

N－６で旧地主谷口氏が庭木を移動しようと一部掘ったところ、多くの縄文中期の土器片が出土した。そのため、次年度の発掘予定範囲ではあったが、遺構・遺物の破壊を防ぐため、植木を中心に発掘。キャリパー型の土器がまとまって出土。円形のプランらしきものが見えてくる。しかし、撹乱されている。

第27週（11．７～11）

先週に続き掘削。プランがはっきりしないまま長方形の炉跡検出。谷口氏により植木撤去。10日、有孔土製品、三脚石器出土。炉・柱穴・床面（掘り込み浅い）をはっきり検出。しかし、南方約３分の１は欠損している。大型石棒を有す縄文中期後葉の住居と確認。SB２とする。もう１基中期前葉の住居跡のプランがかすかに見えるが、撹乱が激しいようだ。炉、柱穴等掘削せず平板実測、写真撮影を終えシートを被せて埋め戻す。以下次年度。

平成７年度

第１週（４.17～21）

発掘準備。事務所設営、電気、水道、電話等取り付け、発掘用具搬入。

第２～４週（４.24～５.12）

発掘現場遠景写真。重機により表土剝ぎ。連休、雨天などでほとんど作業不可。

第５週（５.15～19）

重機による表土剝ぎが18日に完了。19日より８ｍ毎にグリッド設定（杭打ち）。

第６週（５.22～26）

グリッド設定。N－12・13、O－12・13より発掘開始。縄文中期土器片、灰釉陶器片少数出土。

第７週（５.29～６．２）

続けてN－12・13、O－12・13の掘削。P－12・13を掘削。このグリッドで円形のプランらしきものが見えてくる。４分割してセクションを残して掘削。１日、動物の頭のような縄文中期と推定される把手状の土製品出土。SB３とする。他のグリッド遺物少なし。

第８週（６．５～10）

５日、ベルトコンベア搬入、I－５～７、J－５～７に設置。ベルコン調子よく掘削順調に進む。遺物の出土は少ない。I－６より土偶出土。O－12より縄文早期ネガティブ系押型文土器片出土。P－13にて円形のプラン検出。SB４として４分割して掘削、遺物の出土無し。８日、長野県の樋口昇一・神村透・会田進各氏の指導を受ける。10日、群馬県埋蔵文化財調査事業団の能登健・神谷佳明両氏の指導を受ける。

第９週（６.12～16）

Ｉ－５～７、Ｊ－５～７を掘削。石匙、土器片等出土。遺物少し。

第10週（６.19～23）

Ｉ－５～７、Ｊ－５～７、Ｋ－５・６、Ｌ－６を掘削。Ｋ－６にてSB５？検出。Ｌ－６より縄文中期の土器片多く出土。

第11週（６.25～30）

Ｈ－４～６、Ｉ－４～６、Ｊ－５・６、Ｋ－５・６、Ｌ－６・７、Ｍ－６・７、Ｎ－６・７を掘削。Ｌ－６より縄文中期の土器片多く出土する。円形のプラン検出し、SB６・７とする。Ｍ－６のプランはSB８とする。Ｌ－７より灰釉陶器、Ｍ－７より縄文早期押型文土器が出土し、焼礫集積遺構検出。SB２の埋土を排除する。

第12週（７.３～７）

６日まで雨天のため作業不可。７日、先週の続きを掘削。

第13週（７.10～14）

この週も雨天多し。作業は10・13日のみ。SB６、SB７、SB４を掘削・撮影・セクション図作成。SB内から遺物多し。ベルコン使用は13日にて終了。

第14週（７.17～21）

この週も雨天多し。作業は18･19日のみ。SB６、SB７、SB４を掘削。SB７は柱穴を残し完掘、石囲炉無し。SB８の石囲炉検出。Ｎ－７・８を掘削。撹乱層より縄文早期・中期の土器片多数出土。

第15週（７.24～28）

Ｈ－７、Ｌ－７、Ｍ－７・８、SB６・８を掘削、縄文中期の土器も混入するが早期押型文土器出土多し。SB６より石囲炉検出、また、石壇も検出。SB６・８を完掘、まだ、柱穴は不明、セクション図は作成。平安時代の竈跡？検出、土師器片出土。26日に梅雨明け宣言があり、暑い日が続く。重機を依頼し表土剥ぎ、及び、人力では不可能な地域の掘削。

第16週（７.31～８.４）

Ｌ－７・８、Ｍ－７・８を掘削。31日、Ｌ－７より焼礫集積遺構検出、１日、Ｌ－８にて埋甕に続いて石囲炉検出し、SB10とする。水田敷直下のためプラン不明。３日、Ｎ－８で焼礫集積遺構検出。Ｏ－11～Ｏ－12のベルト掘削。その他、黒鉛入りを含め押型文土器片多く出土。

第17週（８.７～11）

Ｎ－７・８の掘削。押型文土器が比較的多く出土。Ｏ－11・12の掘削。遺物少し。但し、押型文土器の層（表土より140cm以上下層）確認。

第18週（８.14～18）

夏季休業。

第19週（８.21～25）

Ｎ－５～８、Ｏ－11・12、Ｐ－11・12の掘削。Ｐ－11より縄文早期の遺物少しまとまって出土。Ｎ－７以外は遺物少し。SB２・SB８・SB９の清掃、写真撮影。SB２のピット・炉の半割。Ｐ－12南方の水田にテストトレンチ２本入れる。西のトレンチ斬移層より縄文早期の遺物出土。

第20週（８.28～９.１）

Ｎ－５・６、Ｏ－11、Ｐ11・12の掘削。Ｎ－５・６は近年の埋立地の撹乱層であるが、縄文早期などの遺物が多く出土。SB６の清掃・写真撮影。重機にて排土除去及びＭ－９・10周辺の表土除去。沼地で作業難行。30日 SB３にて４分割のセクションを掘削中、縄文中期の甕約２分の１が逆位で出土。SB２・６の清掃・写真撮影。Ｏ－11～Ｑ－12セクション図作成・写真撮影。Ｐ－10、Ｏ－11で縄文早期の遺物出土。

第21週（９．４～８）

Ｎ－５・６、Ｐ－10・11、Ｑ－10・11の掘削。SB６の柱穴を検出。炉の半割、完掘、清掃、撮影、断面図作成。SB８のピットを掘削し、炉の半割を行った。石囲い土器敷き炉と判明し、実測して炉を完掘した。Ｐ－11～13のセクション図作成。SB２・６・７・８をサイトにて実測。SB２を平板実測。

第22週（９.11～15）

SB２・４・５・10の掘削および写真撮影。SF２・３の写真撮影。Ｎ－４・５、Ｐ－10、Ｑ－10の掘削。

第23週（９.18～22）

Ｎ－４～６、Ｐ－10、Ｑ－10、Ｏ－５～８掘削。SB７・８・10を平板実測し、断面図作成。SB５のセクション図を作成し掘削。SB10、SF１・２・３をサイトにて測定。

第24週（９.25～29）

調査区全面の掘削および清掃を行い、ピットを検出。SB５を完掘し、写真撮影・平板実測・断面図作成。

第25・26週（10．２～13）

２日、名古屋大学渡辺誠教授の指導を受ける。掘削もほぼ予定通り終り、各グリッドの清掃をする。SB３・４写真撮影。ピット群の掘削・実測。現地説明会に向けての準備。

第27週（10.15～20）

15日、現地説明会。藤田富士夫氏の指導を受ける。空撮に向けて全面清掃。18日、SB８土器敷き炉の土器取り上げ。17日、空撮完了。20日、SB10の埋甕を掘り上げた。

第28～30週（10.23～11.10）

重機により湧水地南方Ｍ－９・Ｎ－９近辺の土砂を移動し、掘削開始。中期縄文土器多く出土。Ｍ－９にて表土より約170cmの所で木柱検出。31日、東京都立大学山田昌久助教授の指導を受ける。木道の杭の可能性あり。さらに掘削範囲拡大。ホースを使い水で土砂を流しながらの掘削は大変であった。９日、杭の周辺の半割・写真撮影・実測の後、杭を取り上げた。

第31週（11.13～17）

焼礫集積遺構の実測。住居跡埋め戻し。後片付け。17日、用具の搬出を行い、作業を終了した。この日、同志社大学森浩一教授の指導を受ける。

以後、財団法人岐阜県文化財保護センター飛騨出張所にて整理作業に入る。

（野村　宗作）

第２章　遺 跡 の 環 境

第１節　地形的、地質的環境

牛垣内遺跡は、荒城川上流の五味原地区にある。五味原は、荒城川本流と主な支流である大脇谷との合流部に存在する小規模な段丘面と、この地域には珍しくよく発達した緩斜面とを利用して、一集落をなしていた。本遺跡は、北斜面側の大脇谷右岸と荒城川本流との合流付近に位置する。五味原地内には、本遺跡の他に、西田、カクシクレ、丸山、たのもとの各遺跡が見られるが、その中では、最も規模の大きな緩斜面上に存在している(第２図参照)。この緩斜面の形成と、牛垣内遺跡との関わりは大きいと考えている。

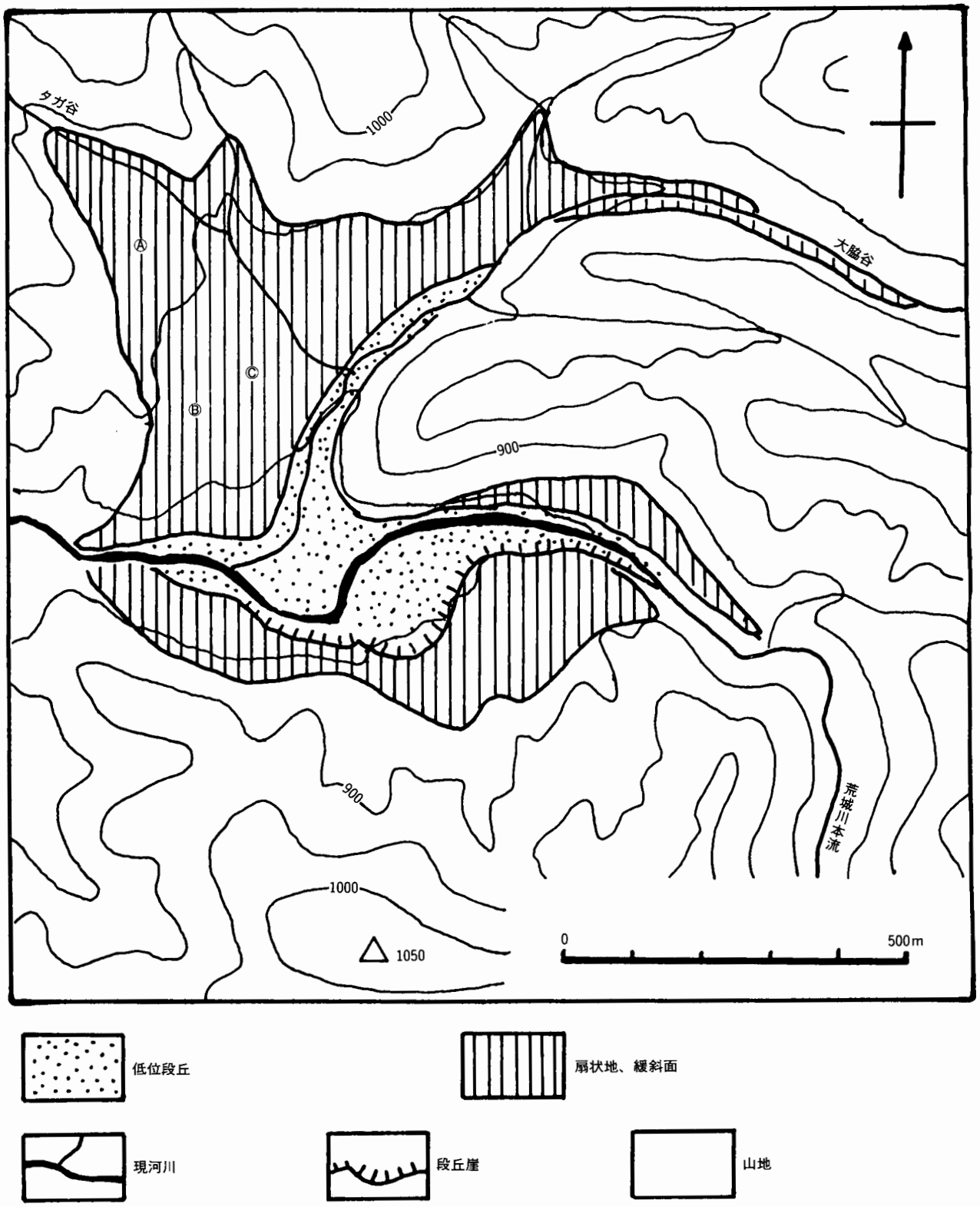
この付近を中心とした、荒城川の河川縦断面図を作成した(第３図参照)。急峻で、Ｖ字状の谷を下ってきた所で、五味原の集落付近では流れが緩やかになっている。ここに、低位河岸段丘と緩斜面が発達している所以である。さらに下流では再びやや急峻になり、そして折敷地集落では段丘等が発達し、河川の流れも緩やかになる。この五味原と折敷地間の谷にダムが形成されるのだが、五味原の緩やかな河川の流れは、その下流域が侵食されにくいことが理由と考えられる。ここは、五味原紋晶斑岩(グラノファイア）という岩石が分布する。この岩石は、五味原地域を形成している大雨見層群の溶結凝灰岩・流紋岩や上宝火砕流堆積物と比べると侵食されにくい。上宝火砕流堆積物は五味原とその上流域の最上部に厚く、広く分布している風化されやすい岩石である。

以上のように、岩質の違い（侵食されやすいかどうか）によって五味原地区の平坦面がつくられたのではないか。さらに、この地区の扇状地状の緩斜面が発達していることにもここを形作っている岩石の特徴によるのではないだろうか。つまり、風化されやすい溶接凝灰岩から成る地形だからと思われる。

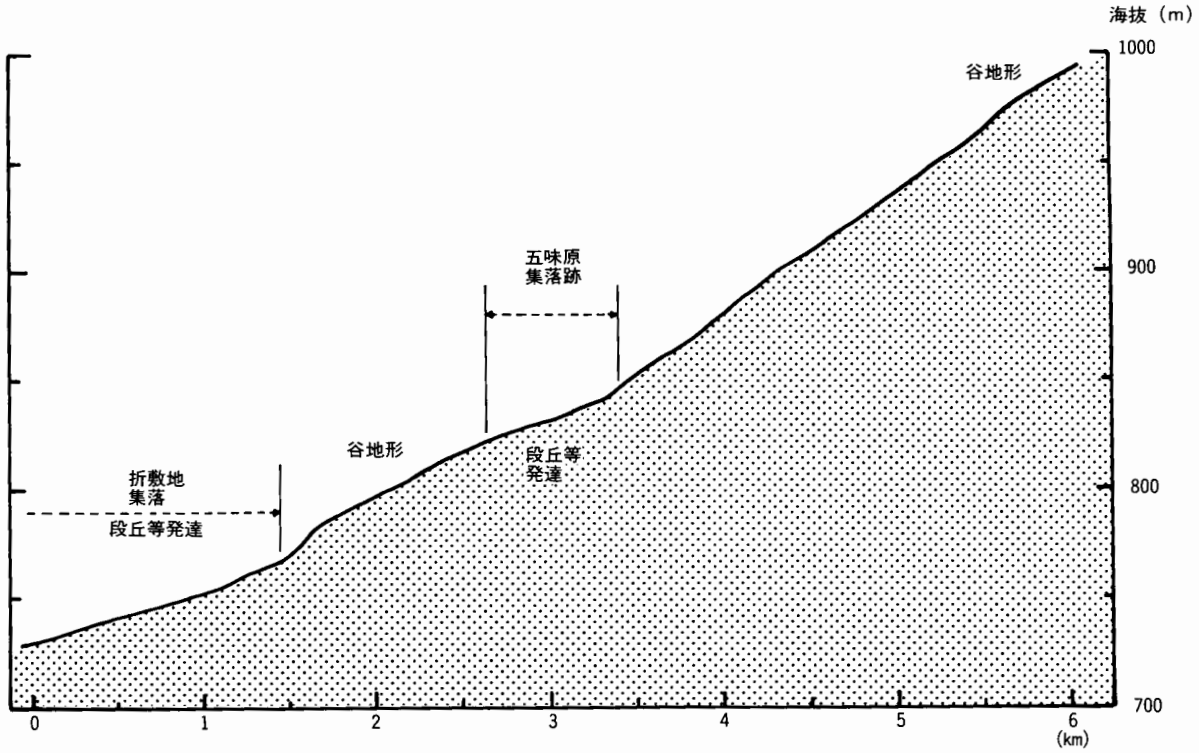
この緩斜面は、タガ谷（この谷の先端は、トヤ峠を経て吉城郡上宝村へ通ずる道路に沿う）の下流域に発達する扇状地のように見える。といっても長さ１㎞余のタガ谷半分を占める流域緩斜面になっているのは普通ではない。小さな谷にしては大きすぎる緩斜面を持っている。これは何故だろうか。

第２図のＢ地点には、１ｍを超す巨礫を中心とした角礫が周辺から盛り上がっている。これは、かつての土石流堆積物であったことを物語っている。しかも、この礫堆積物の下から、縄文中期の土器が出土していることから、この土石流はこの土器より後に起こったことになる。しかし、タガ谷の扇状地先頂部（第２図の北西端）には風化が激しい礫があり、粘土化していること、そして４万４千年ほど前に噴火・堆積したDKP（大山倉吉火山灰層）が、第２図のＡ地点で確認されたことから、この扇状地状緩斜面の上流域は４万年以上は安定していた地形であったことになる。Ａ地点とＢ地点は形成時期がかなり異なっていることになる。

Ｂ地点の東側のＣ地点は、少し砂が混じった土壌が堆積している（第４図参照)。第４図のように、ここでは約150㎝の厚さで数層の土壌が分類された。②～⑤までの層では、縄文中期前葉の土器が見られた。それより下層では、押型文土器が出土した。⑤層と⑥層の間には、砂を多く含んだ⑤層が特徴的に示しているように、その上下で不連続が見られる。この間に時間間隙があったのだろう。



第2図　牛垣内遺跡周辺の地形



第３図　遺跡付近の荒城川縦断面図

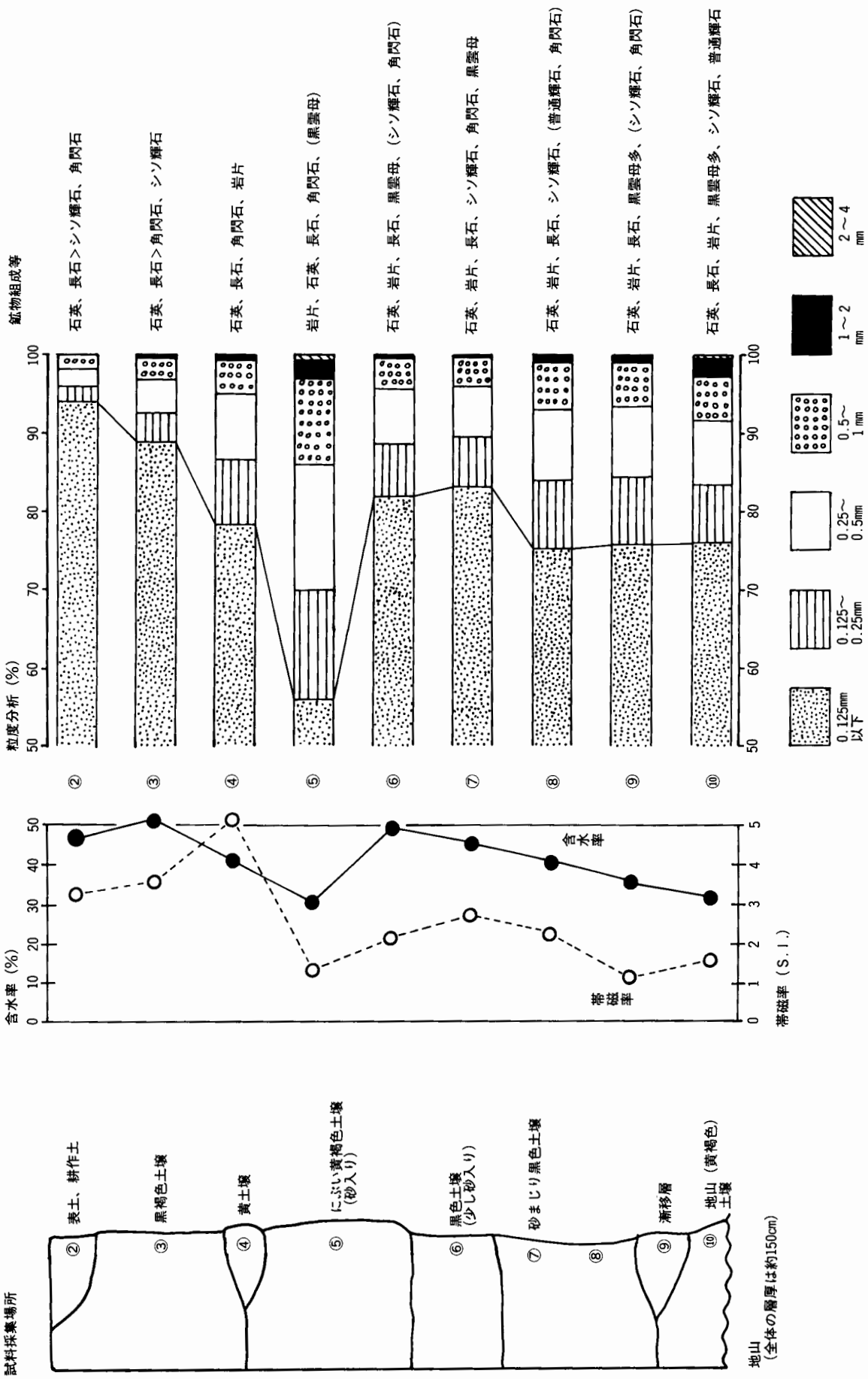
それにも関わらず、この土壌層の構成物質は基本的にはほとんど変化がないように見える。土壌に含まれる粒子は、流紋岩質の岩片・石英・長石・黒雲母・シソ輝石・角閃石と少量の磁鉄鉱などである。この土壌の基は、流紋岩質の溶結凝灰岩だったであろう。このような岩石は、五味原の後背山地を作る大雨見山層群の流紋岩に見られる、この土地一般的なものである。Ｃ地点は、１万年ほどは安定した堆積環境にあったといえるだろう。

Ａ地点、Ｃ地点と比べてＢ地点の巨礫を含む土石流は、狭い範囲を一気に崩し、堆積していったと考えるのが妥当であろう。

牛垣内遺跡には、縄文時代早期の遺物と中期の住居跡、晩期末の土器、それに平安時代の住居跡が発掘されている。土石流の激しい堆積と、土壌の静かな連続的な堆積があり、凝灰岩質の流紋岩がこの地形を造った。

南斜面のこの地は、日当たりもよく、タガ谷からは水が常に得られた。縄文以降、それなりに着目を浴びた土地であった。

（岩田　修）


試料採集場所
表土、耕作土
黒褐色土壌
黄土壌
にぶい黄褐色土壌（砂入り）
黒色土壌（少し砂入り）
砂まじり黒色土壌
漸移層
地山（黄褐色）土壌
地山（全体の層厚は約150cm）
含水率（%）
帯磁率（S.I.）
含水率
帯磁率
粒度分析（%）
鉱物組成等
石英、長石＞シソ輝石、角閃石
石英、長石＞角閃石、シソ輝石
石英、長石、角閃石、岩片
岩片、石英、長石、角閃石、（黒雲母）
石英、岩片、長石、黒雲母、（シソ輝石、角閃石）
石英、岩片、長石、シソ輝石、角閃石、黒雲母
石英、岩片、長石、シソ輝石、（普通輝石、角閃石）
石英、岩片、長石、黒雲母多、（シソ輝石、角閃石）
石英、長石、岩片、黒雲母多、シソ輝石、普通輝石
0.125mm以下
0.125～0.25mm
0.25～0.5mm
0.5～1mm
1～2mm
2～4mm

第4図　土壌層の諸性質

第２節　歴 史 的 環 境

牛垣内遺跡が所在する岐阜県大野郡丹生川村折敷地の五味原地区は、宮川の支流荒城川の最上流部に位置する。歴史的な環境については、同じ五味原遺跡群の西田遺跡の報告書で丹生川村における縄文遺跡を中心にその概要等について述べている(伊藤1997)。ここでは、丹生川村の弥生時代以降の遺跡を中心に、その概要等を述べたい。

丹生川村における弥生時代以降古代の遺跡の地点を図示し(第５図)、表にまとめると第１表のようになる。これは、主として『丹生川村史』資料編一（丹生川村史編集委員会1997）をもとに作成したものである。

弥生時代以降の遺跡については、従来よくわからなかったのであるが、村史編纂に伴う精力的な調査によって数多くの遺跡の存在が明らかになった点は評価できる。

弥生時代の遺跡としては小規模なものがほとんどである。太型蛤刃石斧を出土しているのが河度遺跡、森ケ城馬場遺跡、風野遺跡などであり、偏平片刃石斧を出土しているのが宮ノ前遺跡である。土器が出土した遺跡の多くは中期のもので、砂畑遺跡、下手洞遺跡、千蔵寺遺跡、広殿遺跡、山グロ遺跡などである。あまいだいら遺跡では水神平式土器が出土しており(吉朝1985)、長森遺跡では、大地式土器が出土している点が注目される（藤本1994)。

五味原遺跡群では、牛垣内遺跡で弥生前期と思われる甕の口縁部片が出土している。丸山遺跡からは、中期末から後期初頭にかけての甕が出土している。

丹生川村内には、古墳の存在は知られていない。古墳時代以降の須恵器、土師器等がわずかに出土した遺跡（越山遺跡、上上野遺跡、下手洞遺跡、千蔵寺遺跡など）が散在する。吹ケ洞遺跡では、石製模造品と思われる有孔円板が１点見つかっている点が注目される。五味原遺跡群では、牛垣内遺跡でＳ字口縁の甕が見つかっている。

「日本書紀」の仁徳紀に出てくる両面宿儺討伐の記述は、大和政権の飛騨への勢力拡大を物語るものといわれるが、この怪人として描かれている両面宿儺にまつわる伝説が村内にもあり、日面の出羽が平に両面窟なる洞窟もある。

丹生川村の名の由来は、「万葉集」巻七の「飛騨人の真木流すとふ丹生の川言は通へど船そ通はぬ」の歌に因んでいる。丹生川村は、律令体制下では、小八賀川流域は大野郡山口郷に入り、荒城川流域は、荒城郡荒城郷に含まれていた。五味原地区は、荒城川沿いに位置する折敷地集落のさらに上流に入った所である。折敷地の地名の由来は、木地師により折敷などの木製品を産出したことによると言われている(斐太後風土記)。さらに、五味原集落の上流には、木地屋渓谷がある。木地師の子孫である小椋家には、諸道具・系図などが伝わっている。

奈良時代以降の遺物が出土している遺跡は、越山遺跡、下野中遺跡などわずかであるが村内にもある。牛垣内遺跡では、平安時代の竪穴住居跡１軒と、住居跡は明らかにならなかったが竈跡が１基見つかっている。住居跡出土の灰釉陶器には、墨書のあるものが数点あり、注目される。山グロ遺跡では、「今」の字が墨書された灰釉陶器が出土している。

五味原遺跡群の他の遺跡では、西田遺跡で「屋敷田」と称されていた地点から灰釉陶器がまとまって出土しており、たのもと遺跡でも灰釉陶器が出土している。いずれも牛垣内遺跡とほぼ同様の時期

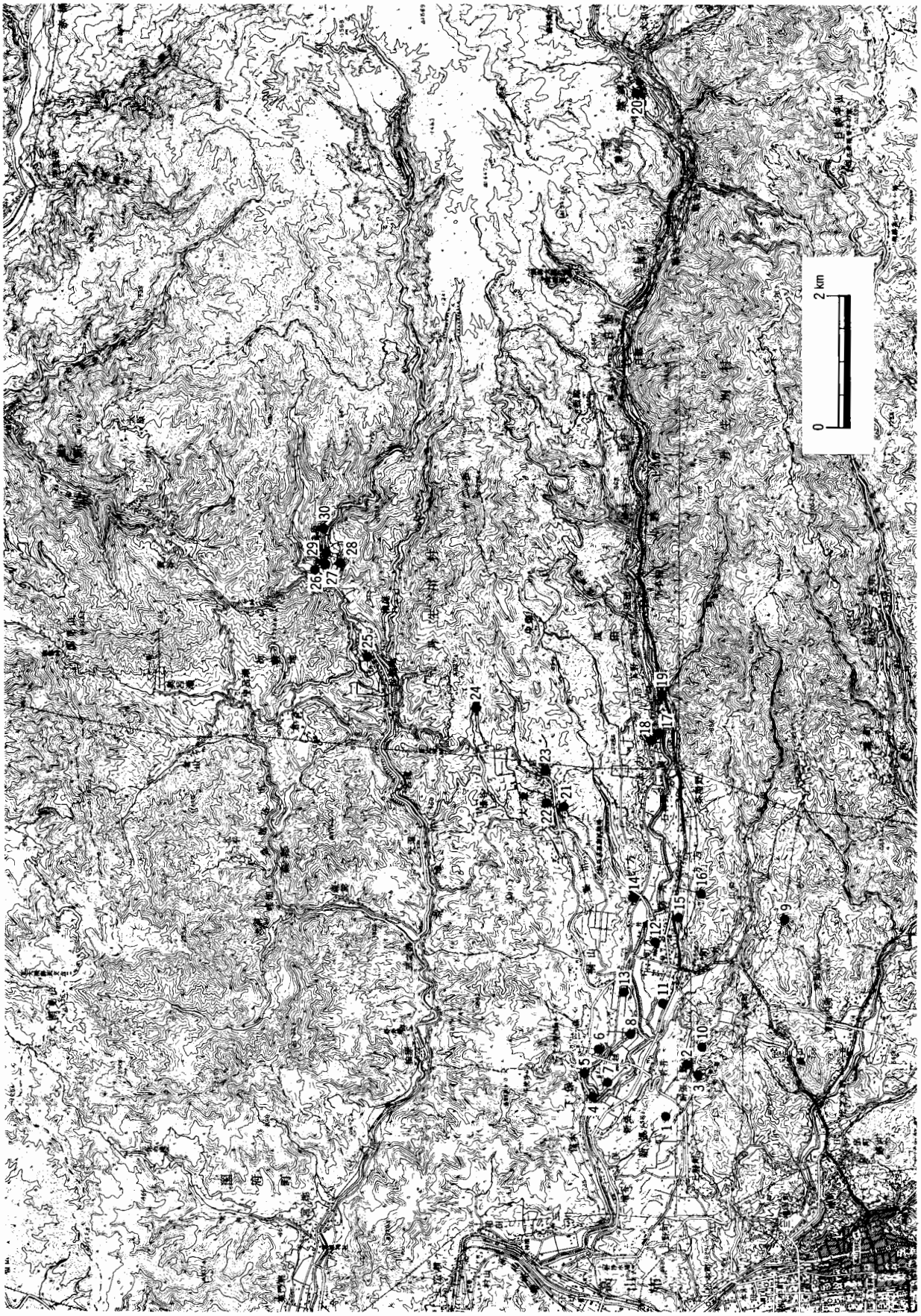
のものと推定される。カクシクレ遺跡C地点では、巨大炭化木や炭化材集中出土地点があり、年代測定の結果は暦年代でAD1200年代の数字が出ている。

（上嶋　善治）

第1表　丹生川村内の遺跡（弥生時代以降）

番号	遺跡名	所在地	備考
1	越山遺跡	大野郡丹生川村新張上野	古墳時代・古代
2	ゴードノ遺跡	大野郡丹生川村新張上野	古墳時代
3	上上野遺跡	大野郡丹生川村新張上野	古墳時代
4	牧野遺跡	大野郡丹生川村下保	古墳時代
5	清水遺跡	大野郡丹生川村下保	古墳時代
6	河渡遺跡	大野郡丹生川村下保	弥生時代
7	砂畑遺跡	大野郡丹生川村細越	弥生時代
8	長森遺跡	大野郡丹生川村細越	弥生時代・古墳時代
9	あまいだいら遺跡	大野郡丹生川村山口	弥生時代
10	猿楽場遺跡	大野郡丹生川村町方	古墳時代
11	下野中遺跡	大野郡丹生川村町方	古墳時代・古代
12	千蔵寺遺跡	大野郡丹生川村町方	弥生時代
13	広殿遺跡	大野郡丹生川村北方	弥生時代・古墳時代・古代
14	山グロ遺跡	大野郡丹生川村北方	弥生時代・古墳時代・古代
15	赤田遺跡	大野郡丹生川村坊方	古墳時代
16	柳畑遺跡	大野郡丹生川村坊方	古墳時代
17	風野遺跡	大野郡丹生川村法力	弥生時代
18	森ケ城馬場遺跡	大野郡丹生川村法力	弥生時代
19	向田遺跡	大野郡丹生川村大洞	古墳時代
20	月出遺跡	大野郡丹生川村旗鉾	古墳時代
21	吹ケ洞遺跡	大野郡丹生川村大萱	古墳時代
22	下手洞遺跡	大野郡丹生川村大萱	弥生時代・古墳時代
23	宮ノ前遺跡	大野郡丹生川村大萱	弥生時代
24	日面山遺跡	大野郡丹生川村大萱	古墳時代
25	戸垣内遺跡	大野郡丹生川村折敷地	古墳時代
26	牛垣内遺跡	大野郡丹生川村折敷地	弥生時代・古墳時代・古代
27	丸山遺跡	大野郡丹生川村折敷地	弥生時代
28	カクシクレ遺跡	大野郡丹生川村折敷地	古代（C地点）
29	西田遺跡	大野郡丹生川村折敷地	古代・中世
30	たのもと遺跡	大野郡丹生川村折敷地	古代

丹生川村史編集委員会『丹生川村史』資料編一（1997年）をもとに作成。



第５図　丹生川村内の遺跡（弥生時代以降）

第3章　遺　　構

第1節　基本的層序

土層は、畑であった所と水田であった所とでは異なる様相を呈している。前者では、表土である耕作土の厚さが20～30cmで、その下に腐植土の遺物包含層がやはり20～30cmつづき、その下に、岩石が連なる礫層もしくは地山となる。水田以外の所の土層も概ねこのような層位となっている。これをG7～9区で見ると次のようになる。

1層　灰褐色土（5YR5/2）粘性なし。

2層　黒色土（10YR2/1）粘性なし。

3層　黒褐色土（7.5YR3/2）少ししまりがあり、やや粘性もある。

しかし、谷状になった所ではD12～13区のように、かなり複雑な様相を呈する。詳しくは次のようになる。

1層　暗褐色土（5YR3/3）粘性なし。

2層　暗褐色土（10YR2/2）しまりあり、粘性ややあり。

3層　暗褐色土（7.5YR3/2）しまりあり、粘性ややあり。

4層　黒色土（5YR1.7/1）全体に礫多し、しまり、粘性あり。鉄分、炭化物多し。

5層　黒色土（7.5YR1.7/1）しまり、粘性あり。

6層　黒色土（7.5YR2/1）しまり、粘性あり。鉄分、炭化物を含む。

7層　黒褐色土（2.5YR3/2）しまり、粘性あり。鉄分、炭化物を含む。

8層　暗オリーブ褐色土（2.5YR3/3）しまり、粘性あり。鉄分、炭化物を含む。

9層　黒色土（10YR2/1）しまり、粘性あり。黄褐色小石を少し含む。

10層　黒色土（10YR2/1）9層より色調は少し明るめで、しまり、粘性ともに9層より少し強い。

11層　黒色土（10YR2/1）しまり、粘性あり。黄褐色小石を少し含む。鉄分の沈殿層。

12層　黒色土（10YR1.7/1）しまり、粘性あり。全体に鉄分、炭化物を含む。

13層　暗褐色土（10YR3/3）しまりややあり。粘性ややあり。

14層　黒褐色土（10YR2/2）しまり普通、粘性ややあり。鉄分を含む。

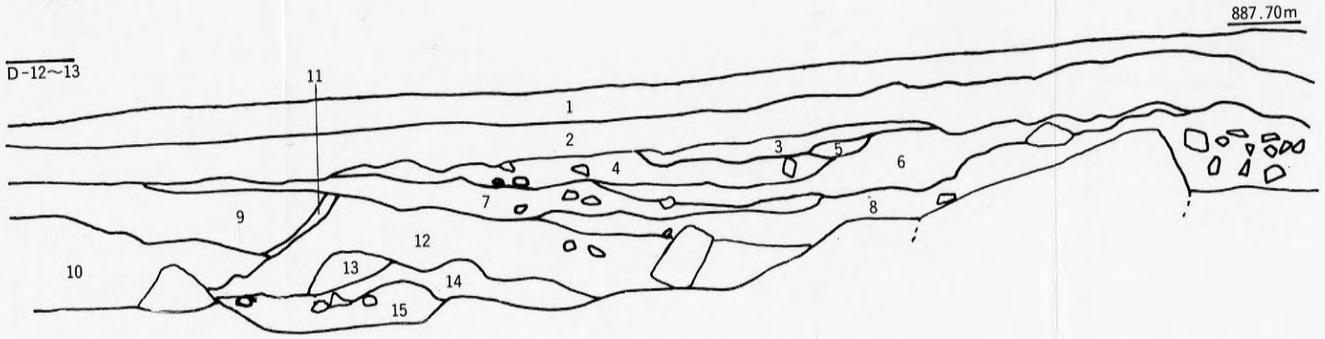
15層　黒色土（10YR2/1）鉄分の沈殿が見られる。

以下第6図に示した通りであるが、P11～13区は地山までが深く、3層で縄文中期前葉の土器片、7～8層で押形文土器やそれに伴う石器が出土した。

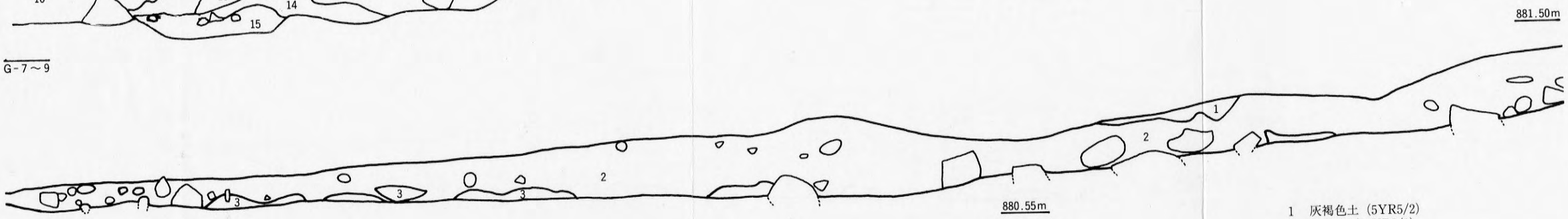
水田であった所は、耕作土の厚さ15～20cm、鉄分を含む水田敷が厚さ5cmあまりで、その下は地山となっている。しかし、水田普請時に埋め立てられたと思われる所からは、縄文早期の押形文土器片や縄文中期の土器片、石器などの遺物が混じって出土した。

ただし、同じ水田でも沼地であった水田は深く、かつ、どろどろで、地山近くで多くの遺物が出土したが、掘削後は川となり、土層断面図を作成することは不可能であった。

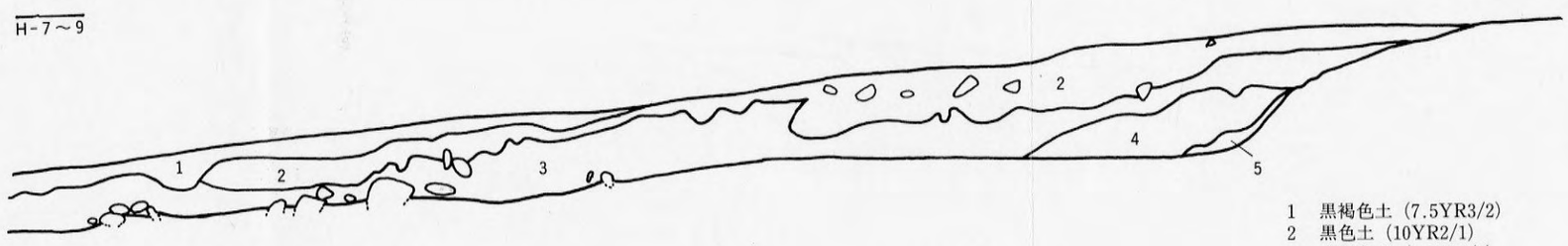
（野村　宗作）



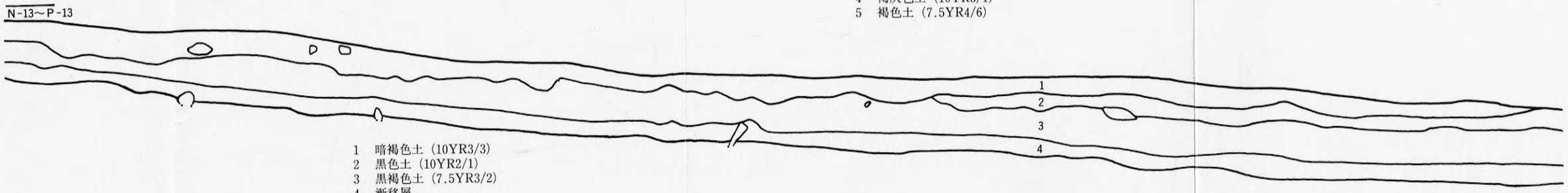
1　暗褐色土（10YR3/3）
2　暗褐色土（10YR2/2）
3　暗褐色土（7.5YR3/2）
4　黒色土（5YR1.7/1）
5　黒色土（5YR1.7/1）
6　黒色土（7.5YR2/1）
7　黒褐色土（2.5Y3/2）
8　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）
9　黒色土（10YR2/1）
10　黒色土（10YR2/1）
11　黒色土（10YR2/1）
12　黒色土（10YR1.7/1）
13　暗褐色土（10YR3/3）
14　黒褐色土（10YR2/2）
15　黒色土（10YR2/1）



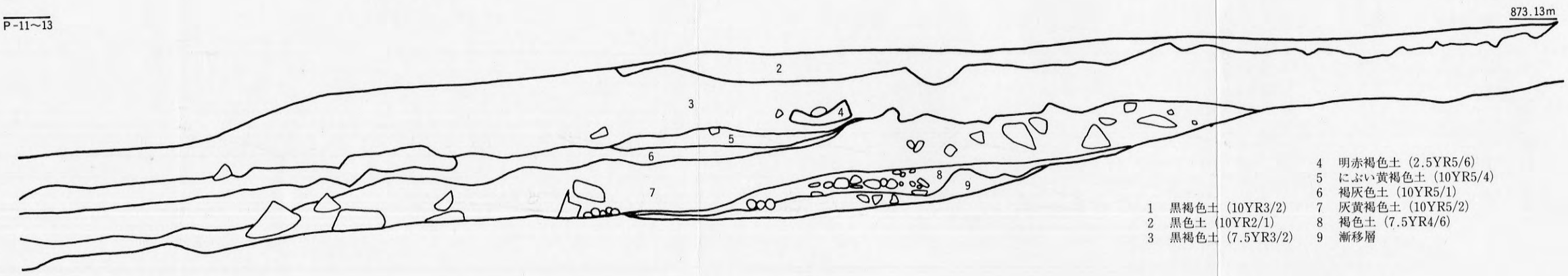
1　灰褐色土（5YR5/2）
2　黒色土（10YR2/1）
3　黒褐色土（7.5YR3/2）



1　黒褐色土（7.5YR3/2）
2　黒色土（10YR2/1）
3　暗褐色土（10YR3/3）
4　褐灰色土（10YR5/1）
5　褐色土（7.5YR4/6）

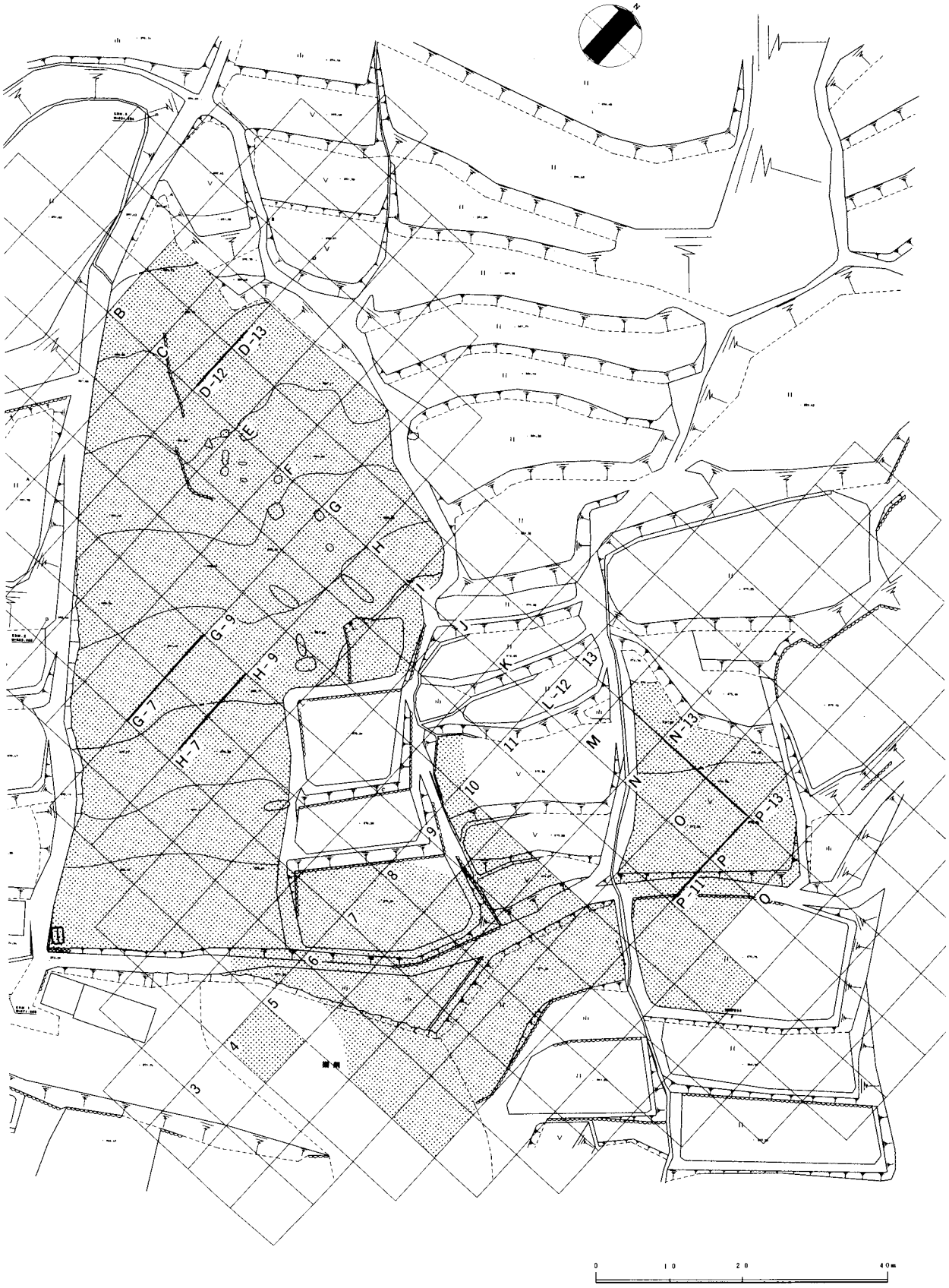


1　暗褐色土（10YR3/3）
2　黒色土（10YR2/1）
3　黒褐色土（7.5YR3/2）
4　漸移層



1　黒褐色土（10YR3/2）
2　黒色土（10YR2/1）
3　黒褐色土（7.5YR3/2）
4　明赤褐色土（2.5YR5/6）
5　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
6　褐灰色土（10YR5/1）
7　灰黄褐色土（10YR5/2）
8　褐色土（7.5YR4/6）
9　漸移層

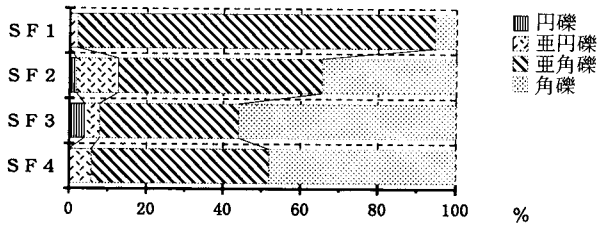
第6図　土層図



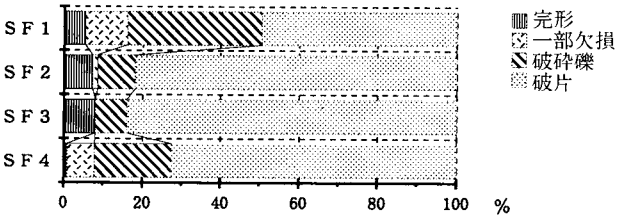
第７図　牛垣内遺跡の地形図及び発掘全体図（スクリーントーン部）

第2節　焼礫集積遺構

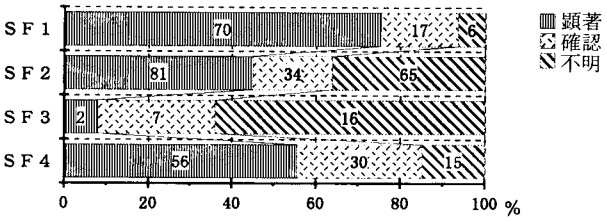
4基の焼礫集積遺構（SF）が確認された。確実な共伴遺物はなく、所属時期は明確ではないが、形態的な特徴が縄文時代早期に属する遺構に類似している。4基の詳しい検出状況は不明であるため、以下、特に焼礫の計測結果を中心に各遺構の特徴を記述する。



第8図　礫原形組成図



第9図　礫現状形組成図



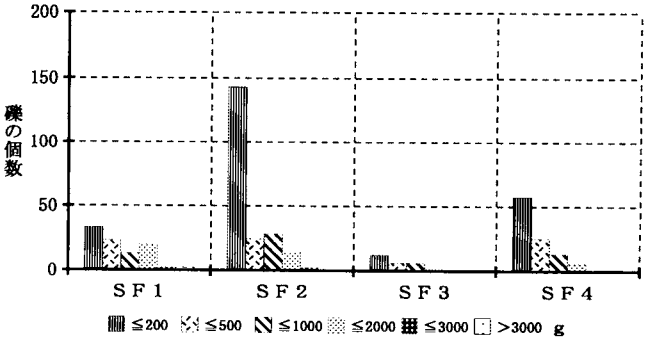
第10図　被熱状況組成図

SF 1

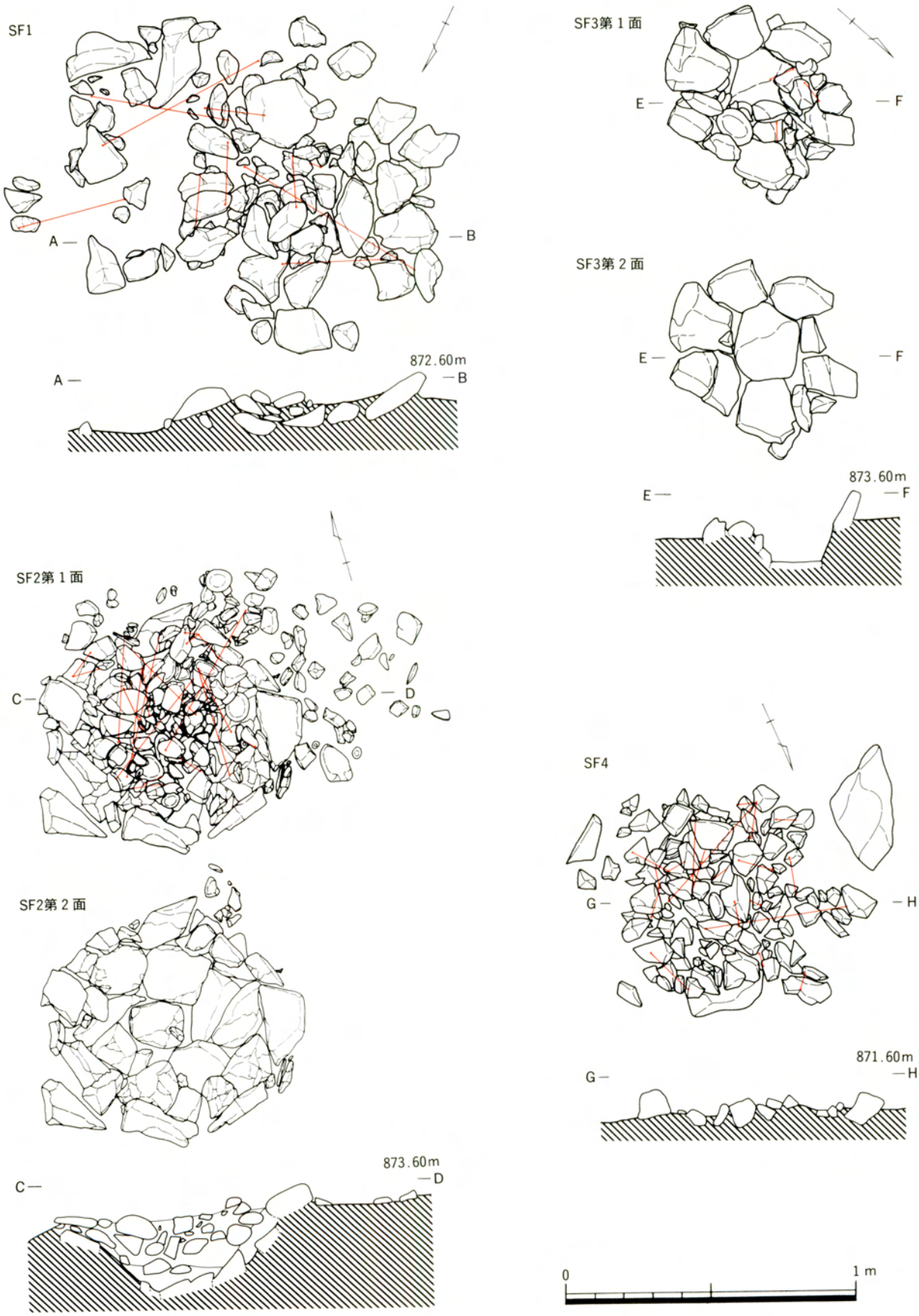
C地点（N12区）に位置する。直径1m程の範囲に焼礫の集積が確認された。下部構造は不明である。礫は大半が破砕礫で、8割近くに焼化が認められた。接合礫は遺構内に広く散らばっており、破砕後、人為的に移動されたものと思われる。平面的な集石であることも考え合わせると廃棄ブロック等の可能性もある。石質は95%が凝灰岩であった。礫は0.5kg以下の小型のものが多数を占める一方で、2kgを越える礫の占める割合が他と比較して多いのが特徴であり、これらの多くは遺構外縁に集中していた。本遺構が以下に述べるSF 2のような施設を有する遺構に由来すると仮定すると、これらの大型の礫は坑内施設を構成する礫であった可能性もある。

SF 2

B地点（M7区）に位置する。本遺跡内において、もっとも大きな焼礫集積遺構である。擂り鉢状の土坑内全面に大型の礫を敷いたものである。これらの礫の形状は不明であるが、比較的偏平な面を内側にして構築されていた。土坑内には251個の礫が充塡されていた。これらは多くが破砕礫であり、接合する礫もある。接合により完形になった礫では0.5～1kgの礫が主体であった。量的に突出している0.2kg以下の礫の多くは破砕礫で遺構内で接合するものと思われる。石質は凝灰岩が74%と他に比較して少ないが、本遺跡にはほとんどみられない亜円礫が多く含まれている事による。磨石等の石器も含まれているなど、石質（形）を選択して充塡した可能性も指摘できる。礫の充塡状況や覆土は不明だが、断面図で判断する限り礫は上部が密で下部が粗であり、被覆型の遺構に近い様態を呈する。土坑外の西側に点在している石は、一部が遺構内の礫と接合したことから、本来土坑内で焼かれ破砕後取り出されたものと



第11図　各遺構の重量分布



第12図　焼礫集積遺構（SF1～SF4）

推定される。また、検出時中央にあった礫は充塡礫の中では大型で、一面のみに焼化が認められることから、本来坑内施設を構成していた礫の一部であった可能性がある。

SF 3

B地点（L 7区）に位置する。1枚の底石と7枚の壁石からなる花弁状の土坑内に焼礫を充塡したものである。充塡礫の90％が凝灰岩である。坑内施設の石質は不明である。充塡礫は焼化が不明なものが多く、接合のみられた礫もあまり拡散していないなど、本遺構の使用は1回限りと推定される。また、充塡礫は北側半分が残っていたが、南側は存在しなかった。周囲に焼礫が散逸していた。これらと本遺構の充塡礫との関係の有無は確認されていないが、使用後の様態を示したものと考えられる。土坑北東部は堅固な壁で立ち上がりも急であるのに対して南西部は礫が小さく立ち上がりも緩やかで、ここに焼いた礫を取り出した「開口部」が想定される。

SF 4

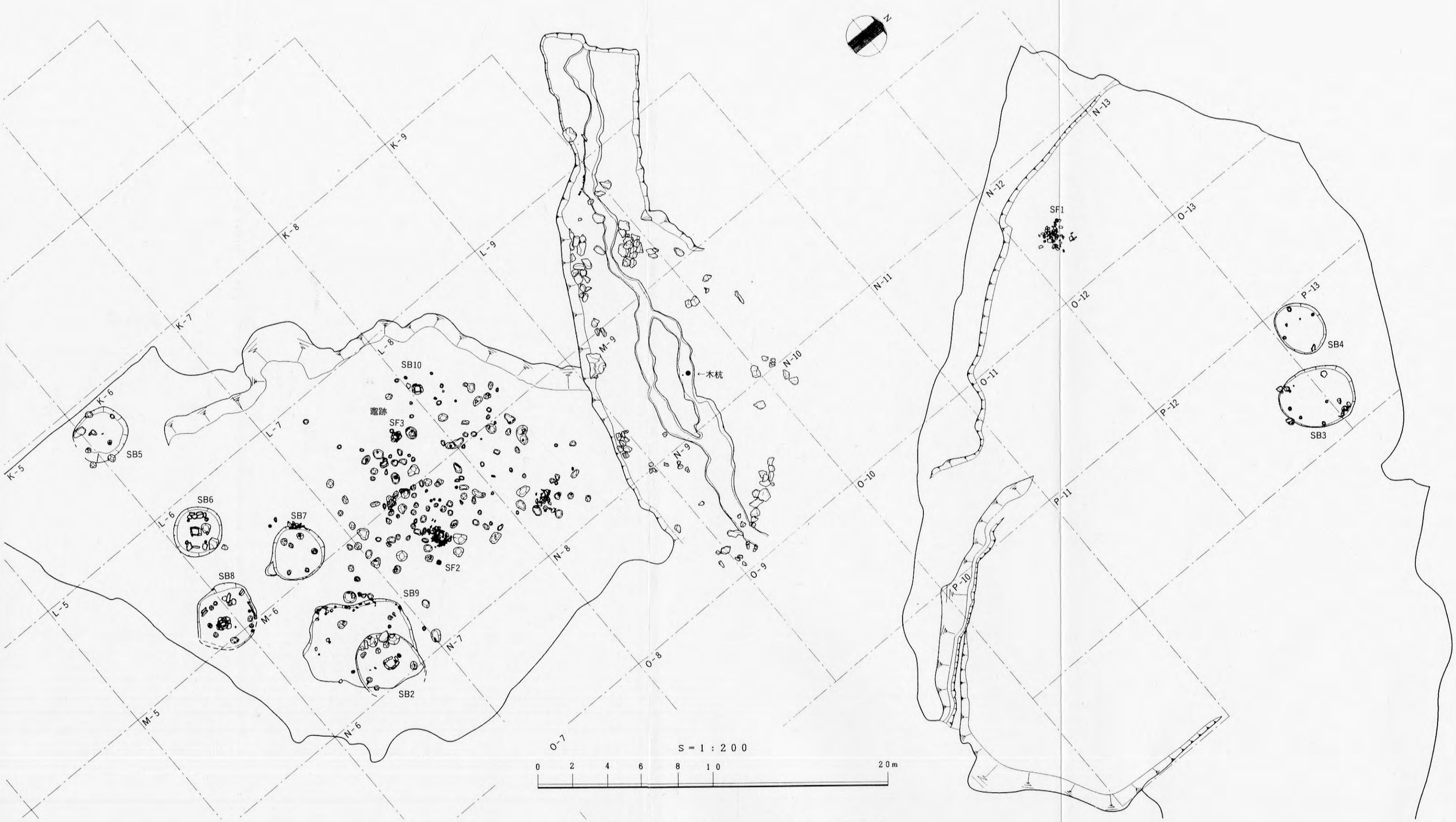
B地点（L 4区）に位置する。南西に緩やかに傾斜する斜面上で確認されている。1m程の範囲内に比較的密に集積されていた。礫は破砕した角礫や亜角礫で完形礫は1点しかなかった。接合により完形になった礫などから破砕前には1kg前後の礫が多かったものと推定される。石質は98％が凝灰岩であり、意図的な選択も看取されるがその意図など不明である。破砕礫は比較的近い地点のものの接合が多く、破砕後移動していない可能性が高い。また、4kgを越える大型の礫も含まれているが、これは一面（一部）のみに焼化が確認されており、この礫の上部で礫の燃焼が行われたものと推測される。

以上、本遺跡で確認した焼礫集積遺構は2形態に大別できる。1方は底石や壁石によって構成された土坑内に焼礫を充塡したタイプのものである。SF 2と SF 3がこれに該当する。他方は平地に焼礫の集積がみられるタイプで SF 1と SF 4がこれに該当する。

SF 2は礫がやや被覆気味に充塡されている。内部には炭化材などは検出されておらず、充塡礫の加熱を遺構外で行った可能性もある。SF 3は小規模で壁石は1段の構成である。このタイプは、はつや遺跡（吉朝1989）や下田遺跡（大江1987）で確認されている。両遺跡とも沢式土器を主体とする遺跡であり、本遺跡との関連性も認められる。また、近接する西田遺跡では早期全般にわたり本タイプの遺構が認められているが、前半期（本遺跡Ⅰ群3類併行期）ではこのタイプに限られている。以上から共伴した土器はないが、Ⅰ群2類もしくは3類に伴う遺構である可能性がある。

SF 1、SF 4はこういった施設を伴わない焼礫集積遺構である。共に下部構造は不明とはいえ、平地に焼礫を集積した遺構である可能性が高い。集積の粗密の違いが認められ、これが機能の違い（廃棄、燃焼、備蓄など）に拠る可能性も指摘できる。このタイプの遺構は他の遺構と関連して機能していたと思われ、周辺に関連遺構の存在した可能性が高い。この時期も不明であるが SF 1はC地点上層で確認されており早期後葉以降に属するであろう。SF 4は茅山下層式土器（295）の出土より早期後葉に属すると思われる。

（谷口　和人）



第13図　遺構配置図（B・C地点）第2～10号住居跡、竈跡、木杭

第３節　竪 穴 住 居 跡

検出された住居跡は10軒である。１軒は平安時代のものであるが、あとは、すべて縄文時代中期のものである。検出された順に遺構番号をつけた。住居跡については番号順に記述する。

第１号住居跡（第14図、図版３）

〈遺構の位置〉Ｇ８区・Ｈ８区に位置する。

〈平面形・規模〉一辺が約５ｍの隅丸方形を呈する。床面積約24.1㎡。主軸方向はＮ－48°－Ｗである。

〈覆土〉１層、黒褐色土層。２層、黒色土層。３層は岩石が連なる礫層の地山。

この近辺は全体が畑で、縄文土器片は出土するが、住居跡の検出は困難と考えられた。しかし、Ｈ８区を掘削中灰釉陶器が出土し、それに続いて住居跡の壁面と推定できる掘込み、及び「かまど」と推測される石組を検出し住居跡と想定した。残る覆土は全面黒褐色で、北側と東側一部で色調の違う地層から遺構全体のプランを推測した。幸い「かまど」周辺で赤土（ローム）を、叩き締めた床面が検出されたので、その床面を追求しながら想定したプラン内を掘削した。

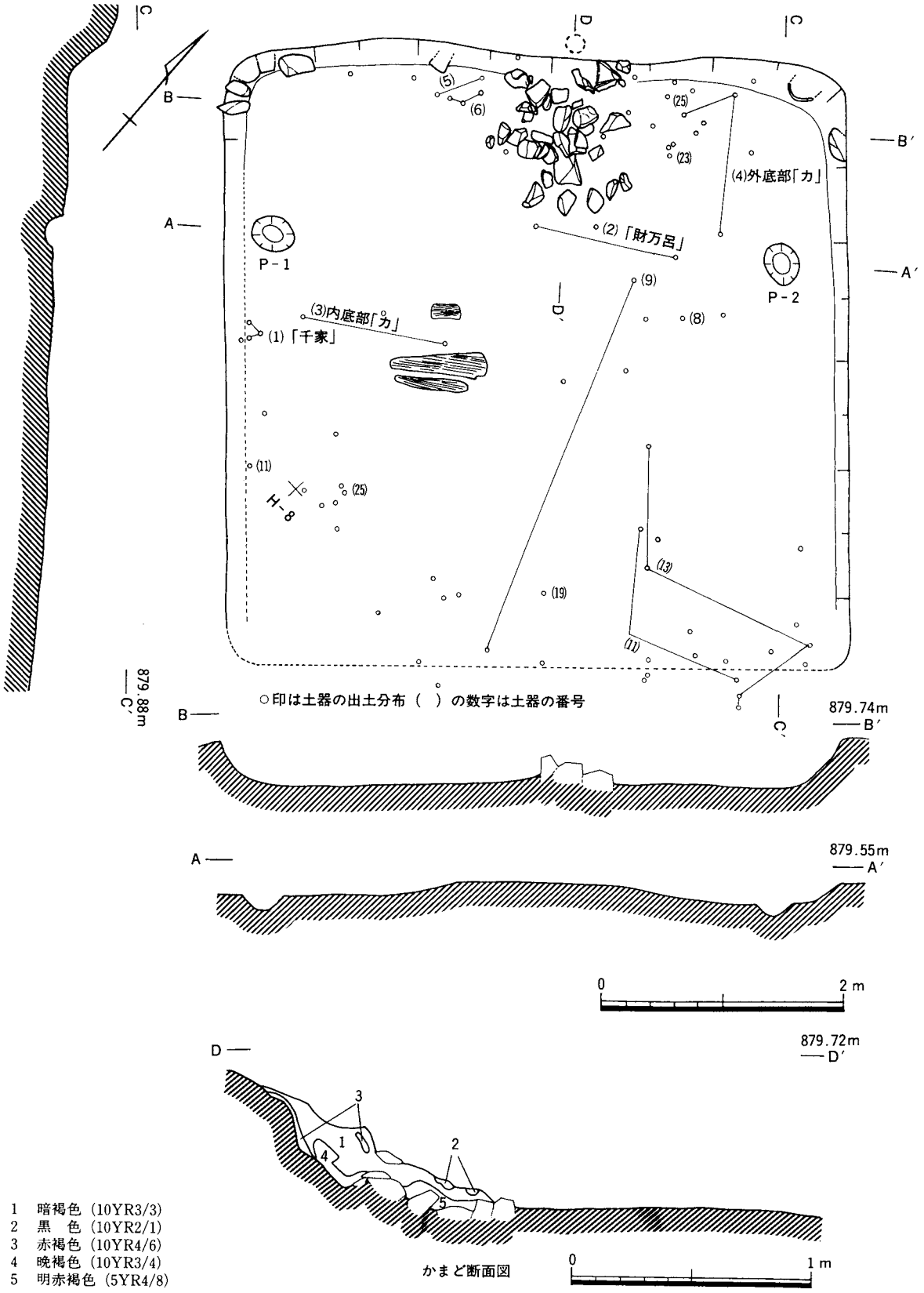
〈床面・壁〉叩き締めの床面は北西部３分の１しか残存せず、また、奥壁の高さ36～40cmと全面残存していたが、東壁は最大40cmで次第に消滅し、他の壁面は検出不可能であった。従って、遺構全体のプランは正確に把握できなかった。

〈柱穴〉柱穴は P_1・P_2で、「かまど」を中心に左右に検出された。２本の柱穴は径30cm、深さ15cmであった。他の柱穴は床面が黒色土層で硬化面もみられず検出できなかった。遺構の中央近くで炭化材（御用松か樅の木）が出土した。従って、火災にあった可能性も否定できない。

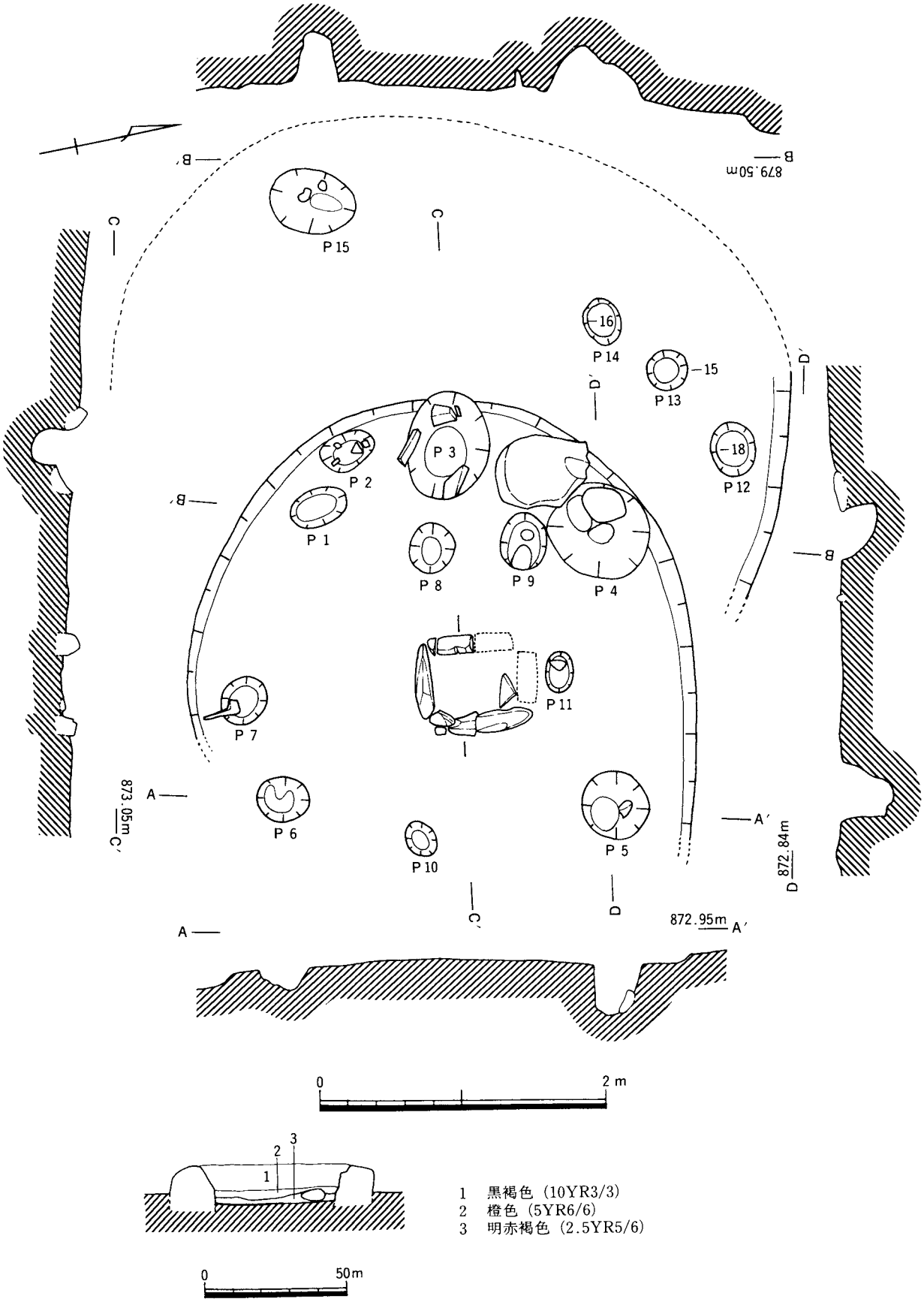
〈かまど〉石組の「かまど」跡とそれに伴う煙道口もはっきり検出できた。「かまど」は奥壁中央部に向かって30個以上の角礫を使用して築かれていたが、崩壊が激しく全容を捉えることはできなかった。最終的に検出された範囲で確認できたのは、焚口から奥壁の立ち上がりまで、緩やかな傾斜で登り、全長110cmであった。「かまど」の床面には焼けた角礫と焼土（明赤褐色）があり、焼土の深さは８cmであった。煙道は壁面で急角度（約80°）で立ち上がり、煙道口の径は24cmであった。煙道は遺存度が良く煤状の土が柔らかく詰まっていた。袖石は確認できなかったが、角礫を粘土で固めたと思われる痕跡がわずかに認められた。焚口から40cm程の所で、中央よりやや外れるが、８cm四方の支脚と思われる一部焼けている石が直立しているのが観察でき、高さ20cmを測るが途中で折れており全長は不明である。

〈出土遺物〉出土した遺物としては灰釉陶器がある。時期は美濃編年の光ヶ丘－１～大原－２であり、墨書土器（第32図１～４・図版７）や土師器も出土している。

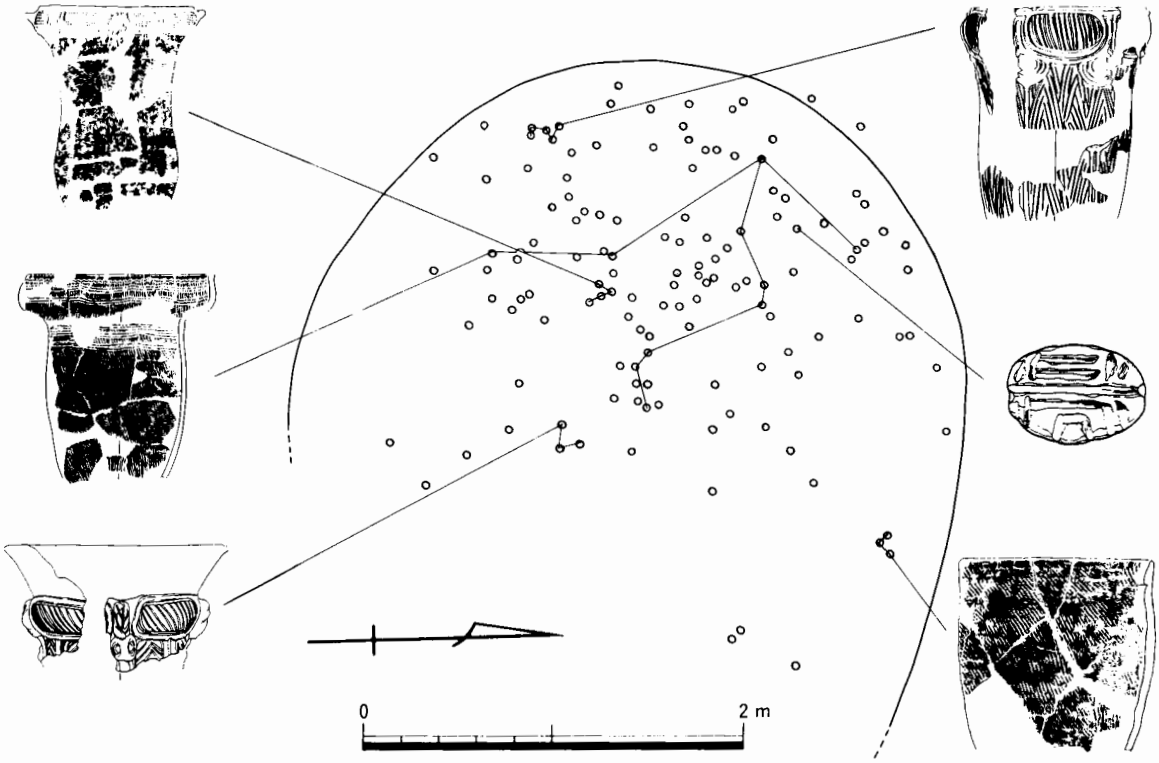
〈時代〉10世紀中葉以後である。


C
D
C
B
B′
A
A′
(5)
(6)
(25)
(23)
(4)外底部「カ」
(2)「財万呂」
P-1
P-2
(9)
D′
(3)内底部「カ」
(1)「千家」
(8)
(11)
(25)
H-8
(13)
(19)
(11)
879.88m
C′
○印は土器の出土分布（　）の数字は土器の番号
B
C′
879.74m
B′
A
879.55m
A′
0
2 m
D
879.72m
D′
3
1
2
4
5
かまど断面図
0
1 m
1　暗褐色（10YR3/3）
2　黒　色（10YR2/1）
3　赤褐色（10YR4/6）
4　晩褐色（10YR3/4）
5　明赤褐色（5YR4/8）

第14図　第1号住居跡



第15図　第2号住居跡・第9号住居跡（点線内）



第16図　第2号住居跡出土遺物分布図

第2号住居跡（第15図、図版3）

〈遺構の位置〉M6区・N6区に位置する。

〈平面形・規模〉南北の径は3.2mでプランは楕円形状を呈するが、南方約3分の1以上は削り取られていて、プランの全容を把握することはできなかった。主軸方向はN—10°—Eである。

〈覆土〉何か所かに庭木が植えてあり、ほとんど黒褐色の撹乱層であった。

〈床面・壁〉本住居は第9号住居跡の床面（ローム層）を掘り込んで作られており、全体に良くしまっており、高低差はほとんどなく平坦である。壁は検出面で6～10cmと浅かったが、しっかり残存していた。

〈柱穴〉ピットは11基検出されたが、主柱穴はP_1・P_4・P_5・P_6でそれぞれの深さ34・38・36・20cmを測る。他のピットについては第9号住居跡と重なっているためはっきりしない。

〈炉址〉炉の位置はやや北に偏るが、内法は60×40cmの石囲炉で、深さは10cmで床面より少し低い程度である。炉石はすべて研磨されたように滑らかく、かなり長期にわたり使用されたと考えられる。床面にはよく焼けた石が数個あり、土はかなり焼けて赤褐色化していた。点線で表してある2個の石は意図的に抜かれたと考えられ、その痕跡は明確であった。

〈出土遺物〉遺物は比較的多く、石器としては大型石棒（第41図・図版3）や、三脚石器等も出土している。床面直上でまとまって出土した土器（第37図・図版9）は、加曽利E式の影響を受けたものであり、また、里木II式類似の土器もほぼ器形が復元できた（第36図76・図版9）。また、その他、唐

草文系のII～III期に類似した土器片も出土している。

〈時期〉縄文中期後葉である。

第3号住居跡（第17図、図版4）

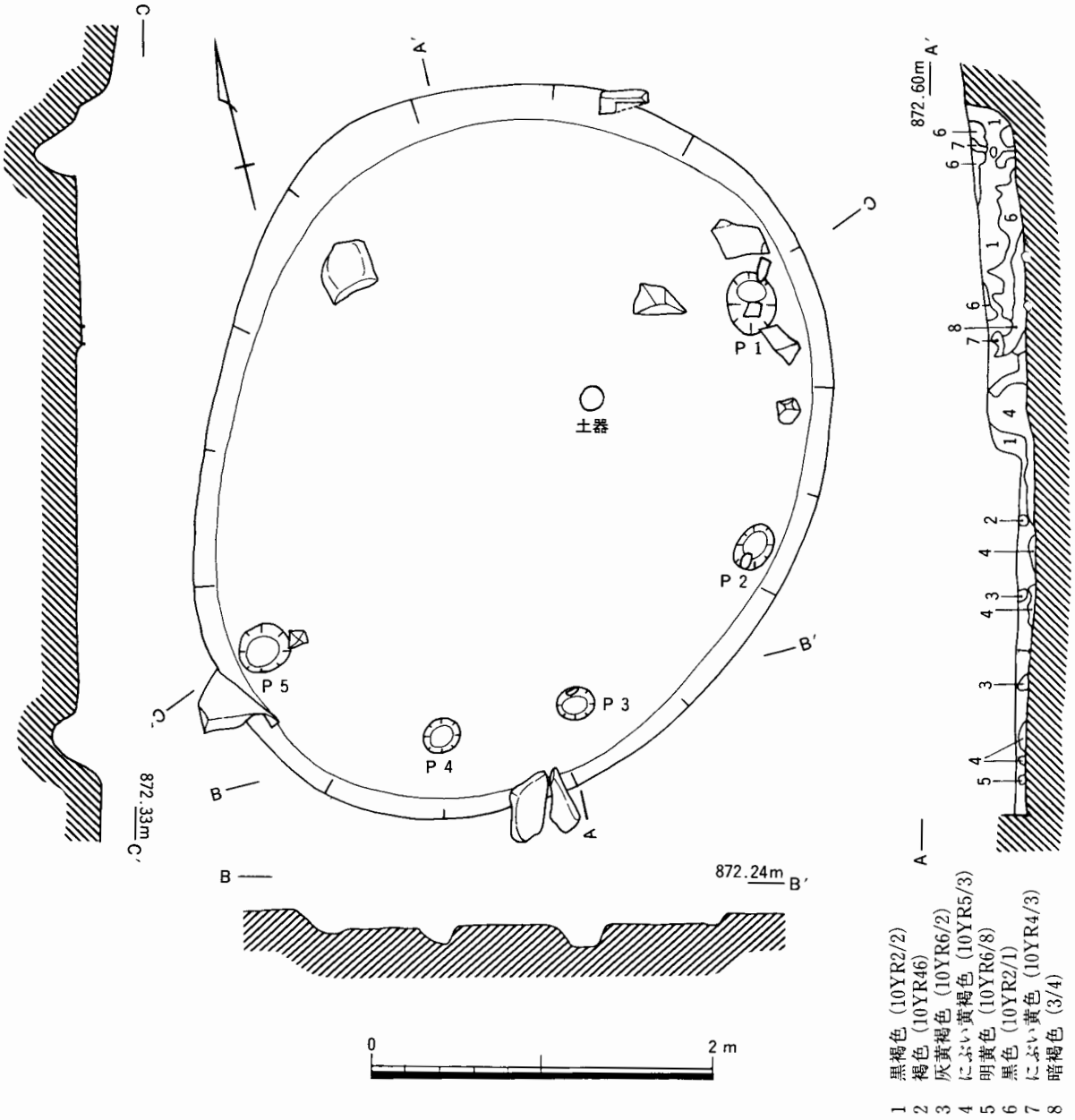
〈遺構の位置〉P12区・Q13区に位置する。

〈平面形・規模〉4.2×3.25mの楕円形のプランを呈する。床面積10.69m²、主軸方向ははっきりしない。

〈覆土〉黒褐色、灰黄褐色、暗褐色等少し粘性のある土層でやや複雑である。

〈床面・壁〉床面は平坦ではあるが、あまり硬化していない。壁面の高さは約15～20cmで、あまり差はない。

〈柱穴〉柱穴は5か所検出された。主柱穴はP_1・P_2・P_5と推定される。P_3・P_4は入口の柱穴と推定し



第17図　第3号住居跡

たいがはっきりしない。深さは8～15cmである。

〈炉跡〉なし。

〈出土遺物〉遺物の出土は少ないが、少しかわった爬虫類の頭部と考えられる把手（第42図11）と、中央部よりやや西寄りに唐草文系Ⅰ期類似の土器約3分の1（第42図1・図版4）が逆位の状態で埋められていた。

〈時代〉縄文中期後葉である。

第4号住居跡（第18図、図版4）

〈遺構の位置〉第3号住居跡の西、P13区に位置する。

〈平面形・規模〉3.05×2.30mのやや楕円形のプランを呈する。面積は5.45m²。

〈覆土〉黒褐色、暗褐色土層である。

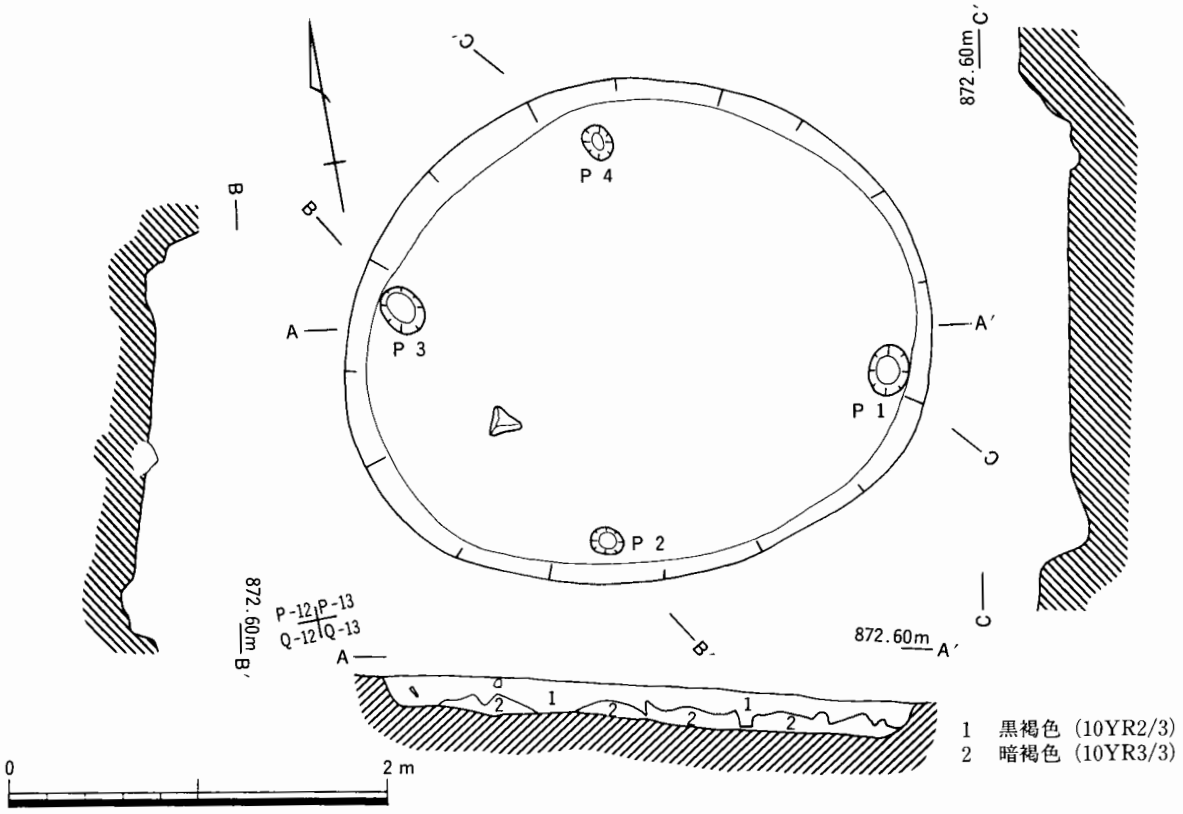
〈床面・壁〉床面ははっきりしているが締まりがない。南に少し傾いている。壁面の高さは20～30cmで掘込みははっきりしている。

〈柱穴〉柱穴は4か所確認されたが不均合な点が感じられる。深さは5～10cmである。

〈炉跡〉無し。

〈出土遺物〉無し。

〈時期〉不明。



第18図　第4号住居跡

第５号住居跡（第19図、図版４）

〈遺構の位置〉Ｋ６区に位置する。

〈平面形・規模〉約3.10×2.95ｍの楕円形のプランを呈する。面積は推定で5.35㎡。

〈覆土〉黒褐色、暗褐色、黄褐色土層である。

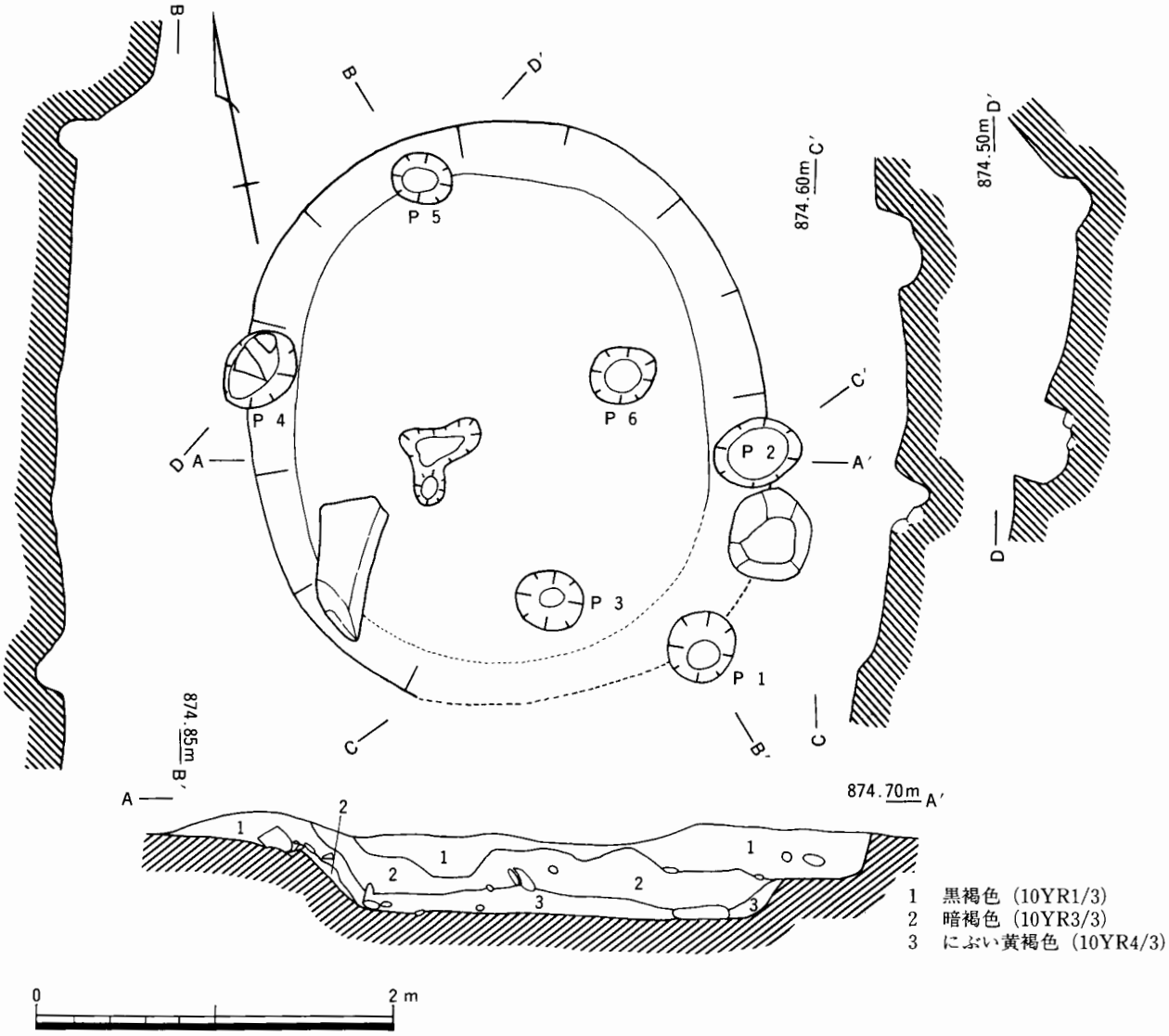
〈床面・壁〉床面は南に緩やかに傾斜しているがはっきりしている。締まりはあまりない。北の壁は緩やかに立ち上がり、高さ48㎝を測るが、南に向かい低くなり、壁面の南３分の１は完全に破壊されていて全貌を把握することはできなかった。

〈柱穴〉ピットは６か所で検出されたが、不均合で主柱穴は検討を要する。深さは５～15㎝である。

〈炉跡〉無し。

〈出土遺物〉早期押型文土器が５点（第43図、図版12）出土している。

〈時期〉縄文早期である。



第19図　第５号住居跡

第6号住居跡（第21図、図版4）

〈遺構の位置〉Ｌ6区に位置する。

〈平面形・規模〉2.84×2.88ｍのほぼ円形を呈する。床面積4.62㎡、主軸方向はＮ―50°―Ｅである。

〈覆土〉プランが確認された段階で上層部には第20図のように、意図的に投げ込まれたと推定される岩石で覆われていた。掘削する段階でも比較的多くの岩石が、遺物と共に混入していた。土層は大きくは2層で1層黒色土層、2層暗褐色土層であるが、中に少量の褐灰色土層・灰黄褐色土層が混入している。

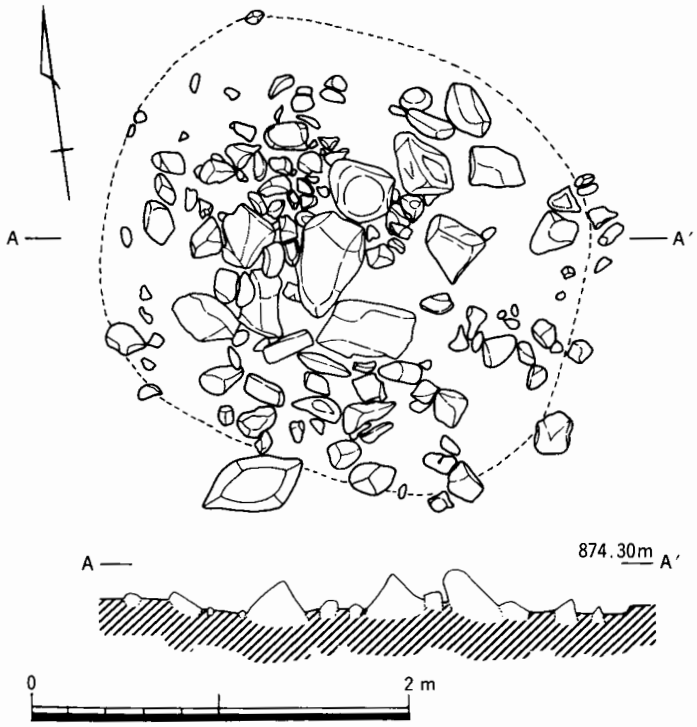
〈床面・壁〉黄褐色の地山（ローム層）を掘り込んで作られており、小礫が認められるがよく締っている。しかし、東方面から大きな自然石が入り込んで、床面積を狭めている。

壁はすべて検出され、北側30、東側30、南側26、西側40cmである。壁面は床面と同じ土層であり拳大、もしくはそれ以下の礫がかなり入っている。

〈柱穴・土坑〉柱穴は4基検出され径14～24cm、深さ10～18cmであり、配置も考え合わせると、主柱穴と考えられる。

土坑1は炉のやや北側に床面を掘り込み径60cm、深さ16cmのほぼ円形で内部から東海系の土器片が出土した。

〈炉跡〉住居跡の中央に位置する。4個の偏平な石と3個の角礫を用いた石囲炉である。石囲いの内法は南北30cm、東西38cmである。西側の礫は相対する東側のそれより約10cm高く置かれ奥壁が意識される。炉跡の内部は床面から8cm掘り下げられているが、断面はほぼ水平である。覆土は暗褐色土のみであった。底面は赤褐色土層で、火熱による変化と認められるがあまり顕著でない。

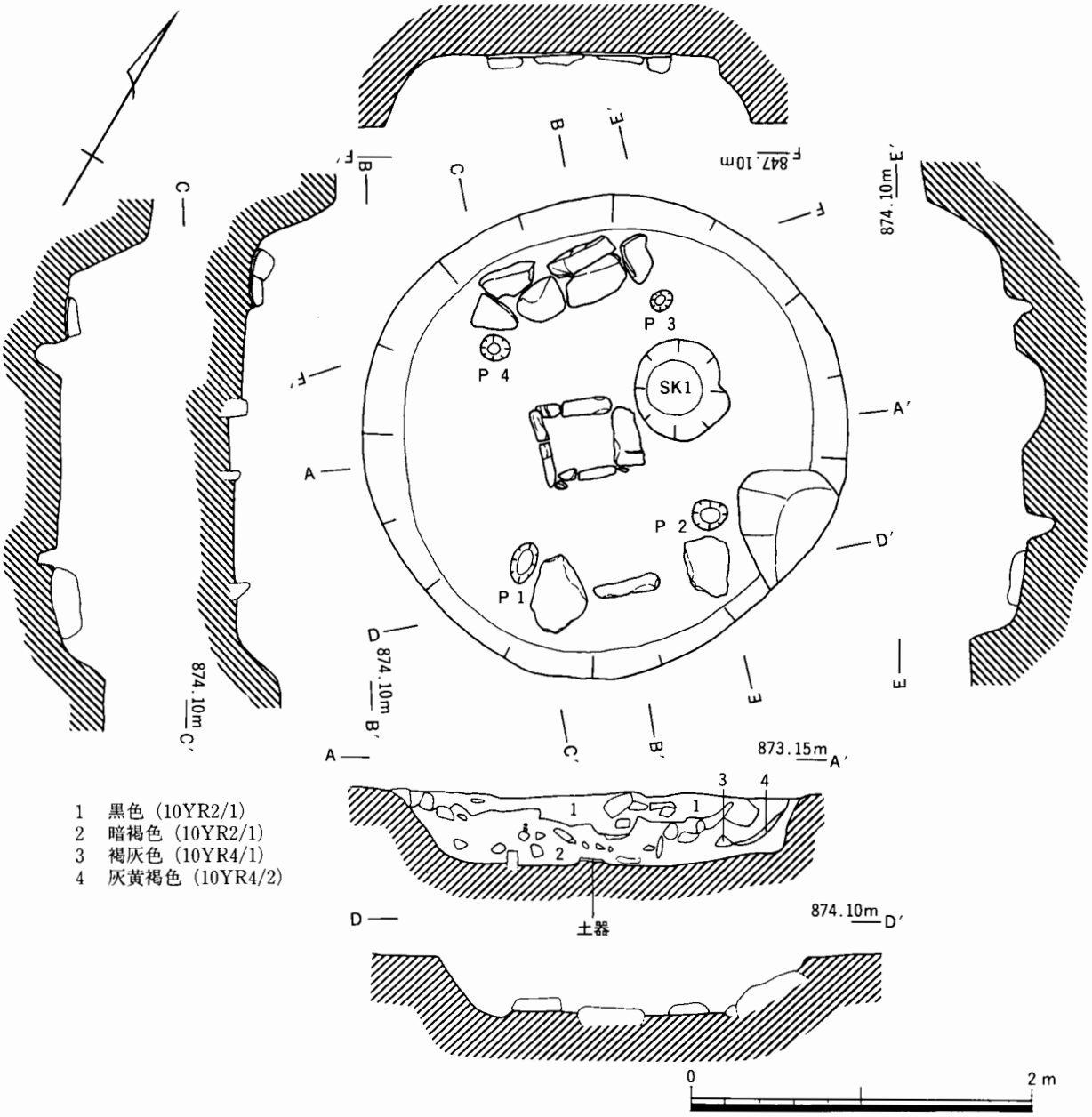


第20図　発掘前の第6号住居跡表土

〈石壇〉石壇は6個の偏平な石を炉の北西に2列に配列し幅40cm、長さ110cmである。また、南東側にも意図的と推定できる配石が見られる。石囲炉の左右に石壇等の配石があるのは珍しく注目したい。

〈出土遺物〉東海系キャリパー型土器（第45図32・図版13）、唐草文系II～III期の土器や同様の土器片も出土している。石器は石鏃やミニチュアの石皿等が出土している。

〈時期〉縄文中期後葉である。



第21図　第６号住居跡

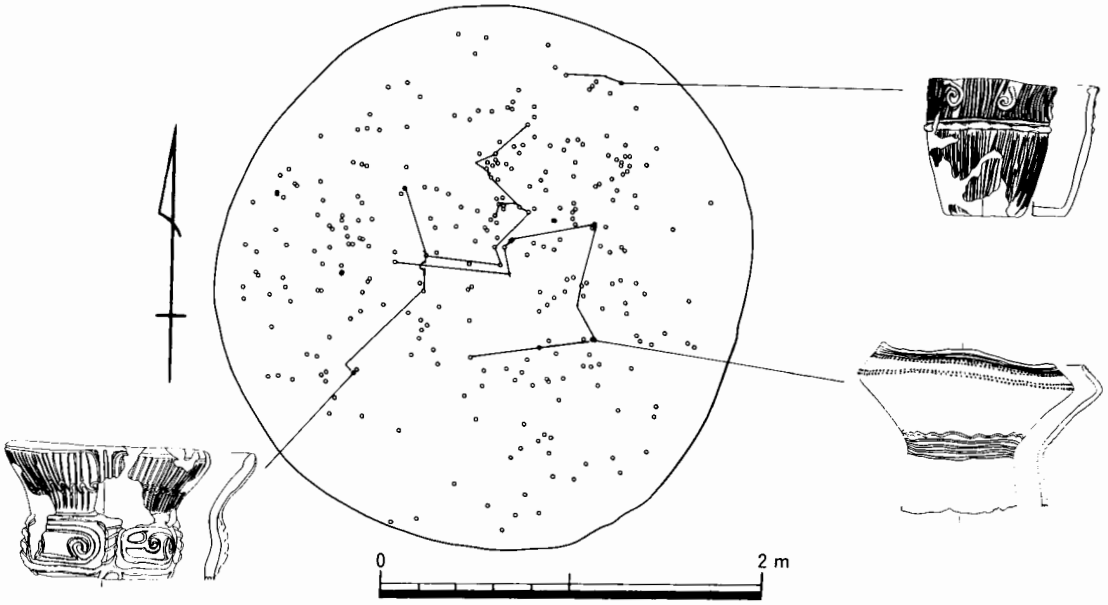
第７号住居跡（第23図、図版５）

〈遺構の位置〉Ｌ６区に位置する。

〈平面形・規模〉2.8×2.4ｍのほぼ円形を呈する。床面積5.98㎡、主軸方向は柄鏡型住居と仮定すればＮ－15°－Ｅである。

〈覆土〉プランが確認された段階で、第６号住居跡と同様に意図的に投入されたと思われる多くの岩石で覆われていた。従って、内部も同様に比較的、多くの岩石が混入していた。土層は灰黄褐色、黄褐色、黒褐色、暗褐色土層等である。

〈床面・壁〉黄褐色の地山（ローム層）を掘り込んで作られており、礫もほとんど無くよく締まっていて、ほとんど平坦である。壁はすべて検出され10～30cmであった。



第22図　第6号住居跡出土遺物分布図

〈柱穴〉柱穴は6基検出された。主柱穴は配置から考えるとP_1～P_5で、深さは8～10cm、特にP_3～P_5は角礫で柱を固定したと思われる。

〈炉跡〉無し。

〈出土遺物〉石器では石鏃、打製石斧等、土器ではあまり多い量ではないが唐草文系II～III期のものが出土している。なお、栗と思われる炭化物が30～40個出土している。

〈時期〉縄文中期後葉である。

第8号住居跡（第25図、図版5）

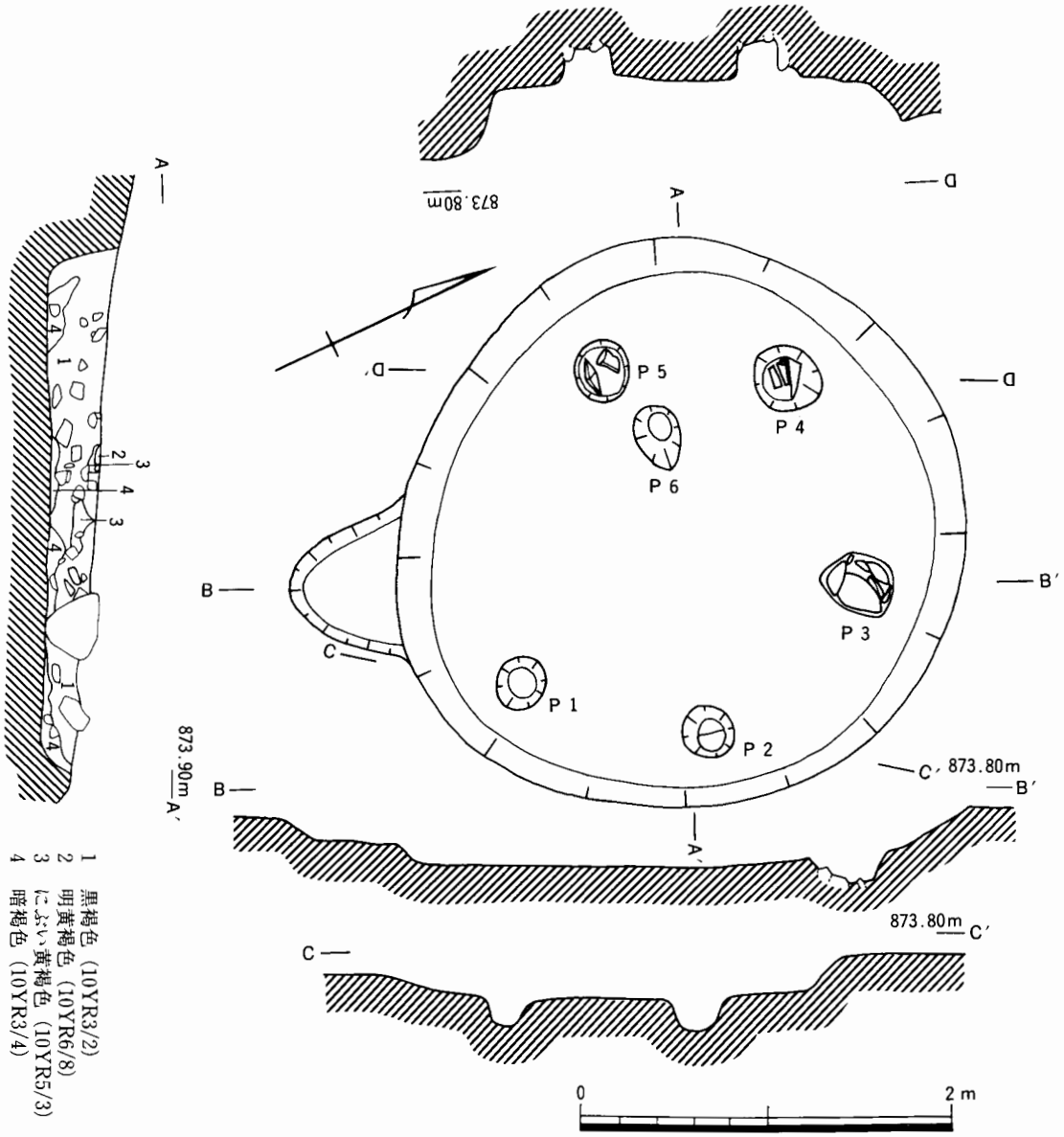
〈遺構の位置〉L5区・L6区に位置する。

〈平面形・規模〉約3.20×3.0mの隅丸方形を呈する。床面積は推定9.56m²、主軸方向はN－30°－Eである。

〈覆土〉プランが確認された段階で西方約2分の1は削平されていたが、第6号住居跡と同様に岩石が意図的に投入されていたことが推定された。従って、覆土の中にも相応の岩石が混入していた。土層は、にぶい黄褐色、黒褐色、暗褐色土層等である。

〈床面・壁〉黄褐色の地山（ローム層）を掘り込んで作られており、礫もほとんど無くよく締まっていて、ほとんど平坦である。床面は南側が一部削平されており、全面検出はできなかった。壁面は北側ではそのほとんどが検出でき、高い所では54cmとはっきりしていたが、南側へと次第に低くなり（削平されていて）、約2分の1近くは検出することはできなかった。

〈柱穴・周溝〉柱穴は11基検出された。P_6・P_{10}は主柱穴と考えられるが、他のピットについては一度建て替えがあったのかはっきりしない。P_7・P_8は入口の主柱であろう。周溝は入口方向に見られ幅8cm、深さ6cmであった。

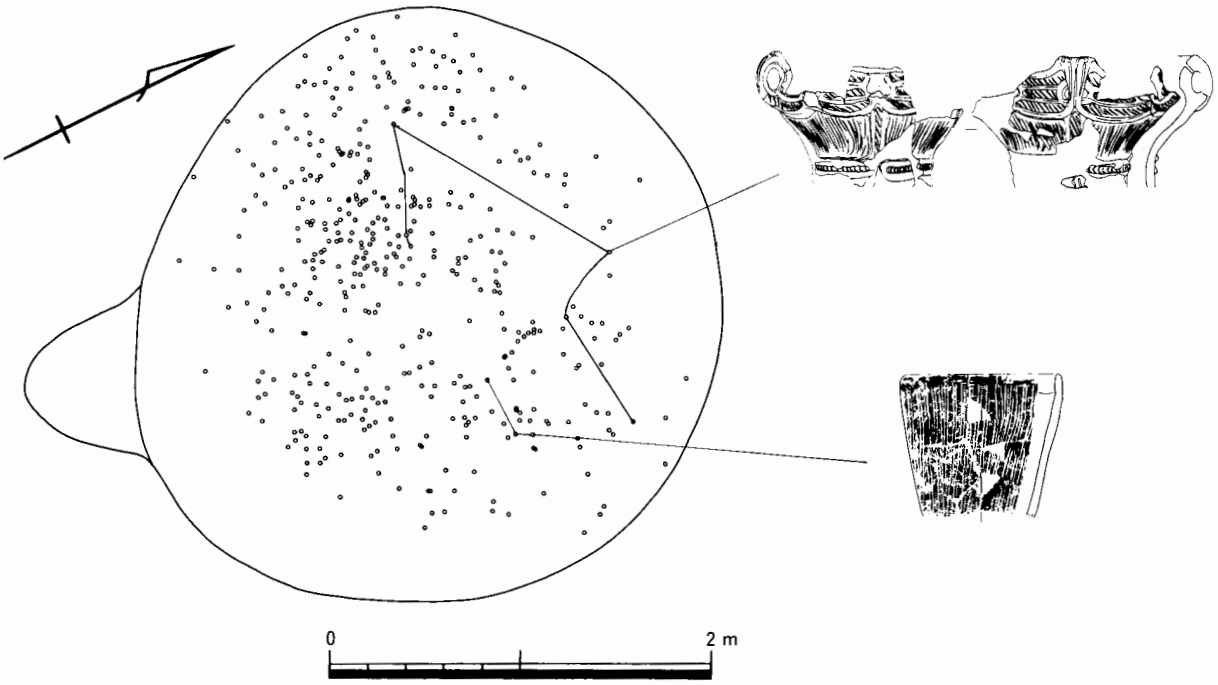


第23図　第７号住居跡

〈炉跡〉中央よりやや南寄りの位置にあり、方形の石囲い土器敷き炉である。内法は南北52cm、東西40cm、深さ28cmである。入口側の偏平な石は６か所に割れ目が入っている。奥壁の石は壊れていて少し低くなっていた。炉内底部には一面に割られた土器が敷き詰められていた。土器は内側を上にして敷かれていたが、一部に煮こぼれの焦付と思える炭化物が付着していた。炉内覆土は黒色土、黒褐色土等であったが低部は炭と灰混じりの層であった。土器の下は５cm程深くまで焼けていたが、直接焼けたのではなく、土器の上から焼けたものと思われ、炭や灰は認められなかった。さらに土器との間にはすき間があり、木の根もかなり入り込んでいた。

〈出土遺物〉石器と土器が出土している。石器は石鏃、打製石斧、凹石等である。土器は信州系の土器を中心に数十片出土しているが、炉内に敷かれていた唐草文系Ⅱ期の土器（第52図18、図版17）が時期を決めると言えよう。

〈時期〉縄文中期後葉唐草文系Ⅱ期である。



第24図　第7号住居跡出土遺物分布図

第9号住居跡（第15図・図版3）

〈遺構の位置〉Ｎ6区に位置する。

〈平面形・規模〉北側及び、西側に一部残存するが、大部分は第2号住居跡により削平され不明。

〈覆土〉黒褐色の撹乱層。

〈床面・壁〉第2号住居跡の西側に残存し、黄褐色で締まっている。しかし、プランがはっきりせず床面積不明。北側の壁面で約10cmの立ち上がりで長さ1.4mが検出されたのみである。

〈柱穴〉4か所ほぼ平面で検出された。柱穴は第2号住居跡の続きでP_{12}・P_{13}・P_{14}・P_{15}であり、深さは14～18cmである。第2号住居跡のピットとの区別は難しい。

〈出土遺物〉撹乱されたことにより第2号住居跡の遺物が混入していたが、第9号住居跡の床面にはりつくように新崎II式の土器が約4分の1以上出土した（第57図18・図版17）。この土器は、第9号住居跡が廃棄された後も、動いていないと判断できた。また狢沢式比定の土器片も何点か出土した。

〈時期〉縄文中期前葉で新崎II式が指標となろう。

第10号住居跡（第27図・図版5）

〈遺構の位置〉Ｌ7区・Ｌ8区に位置する。

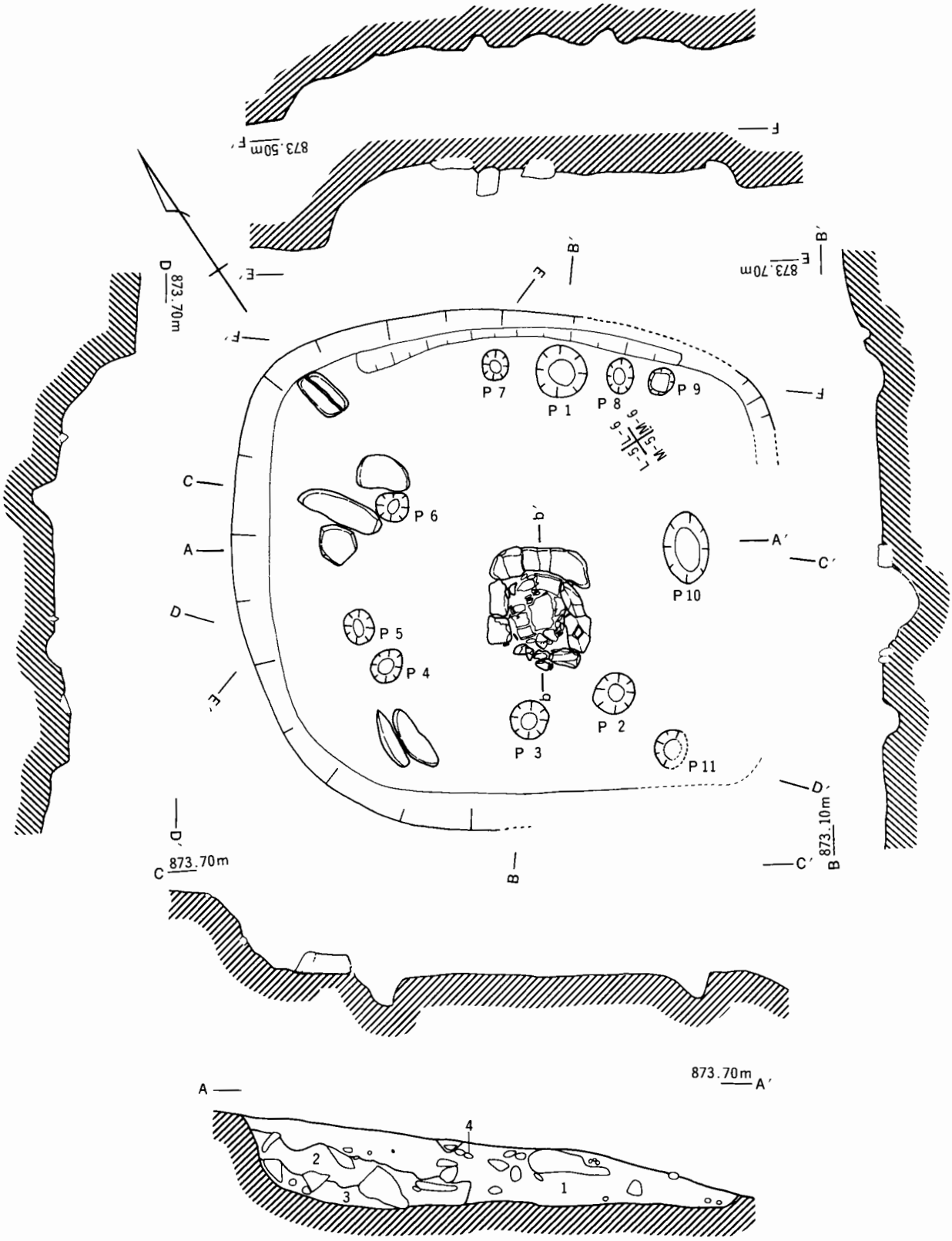
〈平面形・規模〉プラン・床面積不明。主軸方向N－40°－E。

〈覆土〉水田の敷（赤褐色土層）

〈床面・壁〉床面は黄褐色の地山（ローム層）を掘り込んだと推測できる。平坦でよく締まっている。床面はすべて検出されたが、壁は水田普請の際完全に削平されてしまったのであろう。

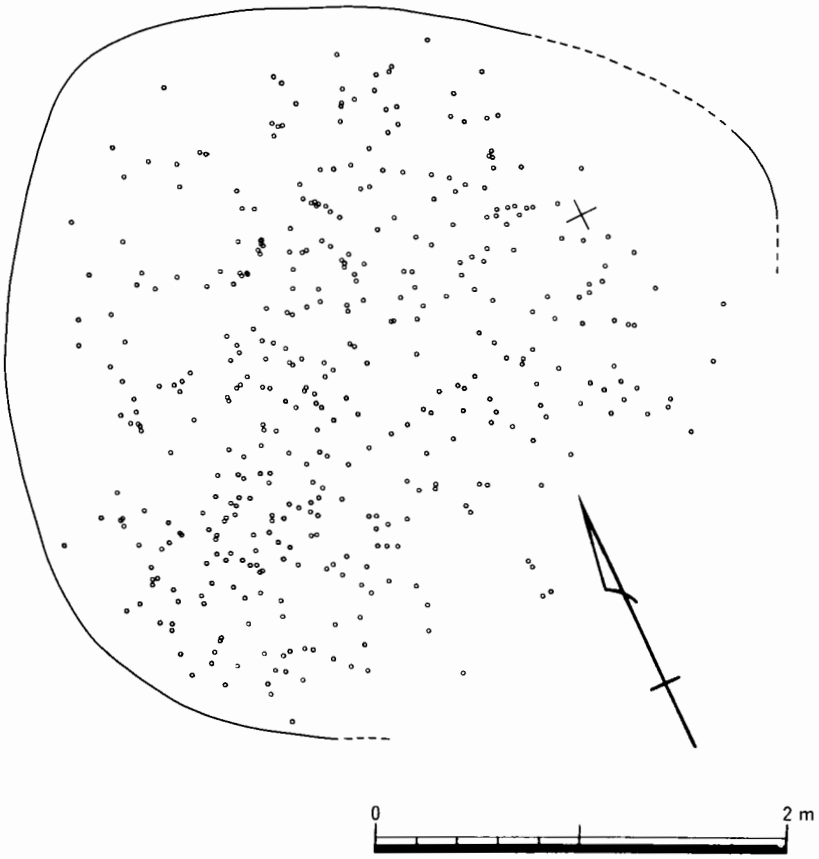
〈柱穴〉主柱穴4基が検出された。深さは16～24cmである。

〈炉跡〉中央より西側に位置する。角礫を用いた石囲炉である。内法は34×24cm、深さは15cmである。



1　にぶい黄褐色（10YR4/3）
2　黒褐色（10YR3/2）
3　暗褐色（10YR3/3）
4　褐色（10YR4/4）

第25図　第8号住居跡



第26図　第8号住居跡出土遺物分布図

南側の礫は北側のそれよりやや高く、奥壁が意識される。断面は少々皿状を呈している。底面は熱による色調の変化は著しくない。

〈埋設土器〉炉跡の北東1.0mの主軸線上に位置する。いわゆる埋甕で、口径約22.0cm、器高約24.5cmの深鉢（第59図1）で、床面を掘り込み、ほぼ完全な形で正位に埋設されていた。

〈出土遺物〉縄文土器1点、炉跡の南側に石皿として使用されたと認められるもの、及び、埋甕のみである。埋甕は串田新Ⅰ式で時期を決める指標となろう。

〈時期〉縄文中期後葉である。

第4節　その他の遺構

竈跡（第28図、図版6）

〈遺構の位置〉L7区に位置する。灰釉陶器（第32図27～32）・土師器（第33図38）が出土し、住居跡の検出を試みたが、そのプランを確認することはできなかった。

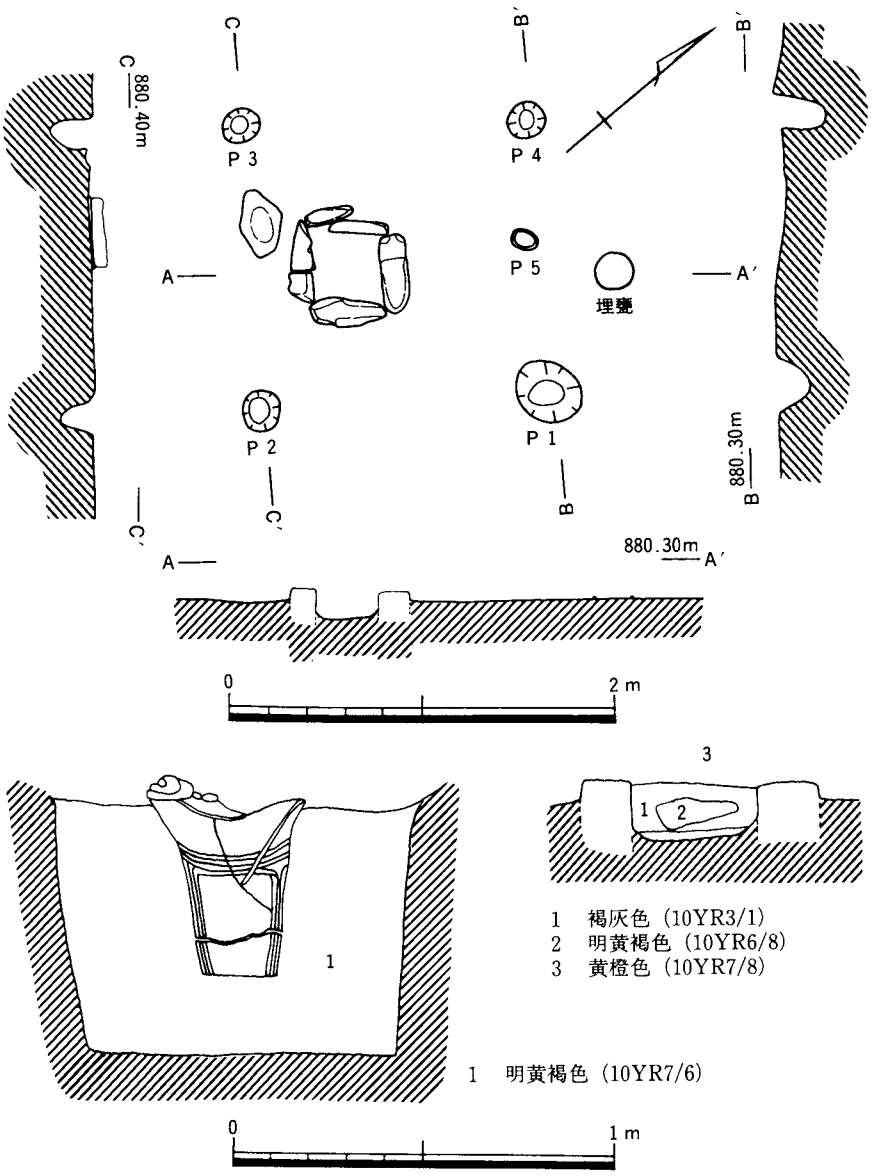
〈竈〉南北の石で囲まれた部分を中心によく焼けており明赤褐色土層となっていた。そのプランは約45cm四方を計り、厚さは30cm程であったが支え石は認められなかった。

ピット群

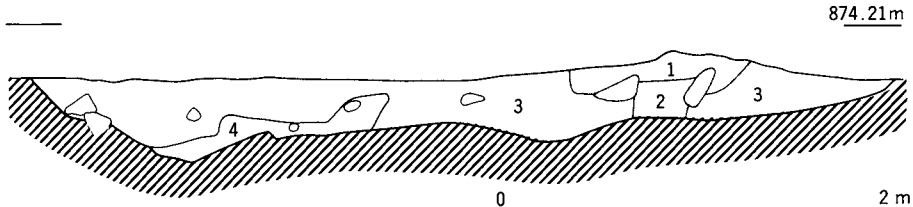
M7区からN8区にかけて、幅20cm～45cm、深さ12cm～50cmの不定形のピットが133か所検出された。しかし、P14から縄文早期押型文土器が約2分の1個体出土したのみで、他のピットからは遺物らしきものは何も出土しなかった。また、人工的と思われるものも少なく、検討した結果全体の遺構図に記載することにし、個々の報告は省くことにした。なお、このピット群の周辺からは押型文土器片や縄文中期の土器片が多く混在して出土したが、これは水田普請の際撹乱されたためと思われる。

木杭（第29図、図版6）

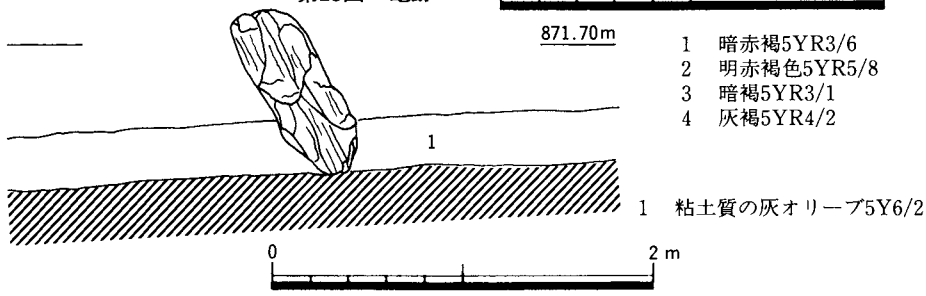
M9区の水田下約170cmで検出された。この水田は沼田で深く当初は発掘困難と思われた。しかし、表土を除去した後、ホースで土砂を洗い流しながら掘削することにより作業は順調に進んだ。遺物も



第27図　第10号住居跡と埋甕



第28図　竈跡



第29図　木杭

多く出土した。そんな中で上部が摩滅した木杭が粘土層の中に、打ち込まれたような状態で下流にやや傾斜して出土した。材は楢か櫟で加工痕がはっきり認められ、大きさは長さ42cm、幅20cmであった。木道の可能性を考慮に入れて調査を進めた[1)]。

湧水地点は出土した杭の北西25ｍにあり、この水を利用して水田耕作が行なわれていた。縄文時代も当然この水を利用していたと考えられる。検出された竪穴住居跡のうち第２号住居跡、第６号住居跡、第８号住居跡、第10号住居跡の入口はこの水辺に向かっている。もし木道があったとすれば、川を隔て北側に存在した住居跡（第３号住居跡）などに続く道路であったと推測したい。

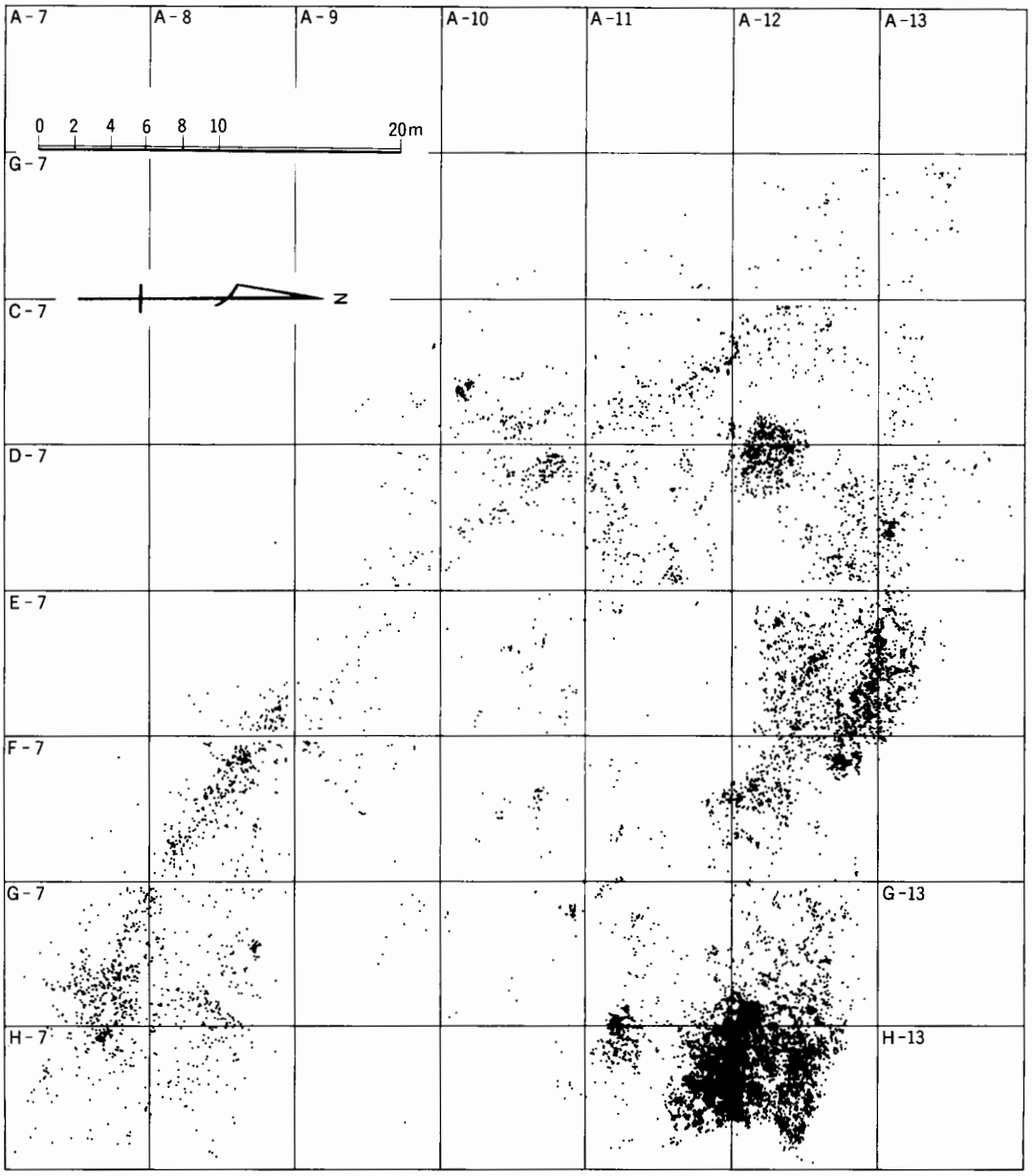
1）山田昌久氏のご指導を賜った。

（野村　宗作）

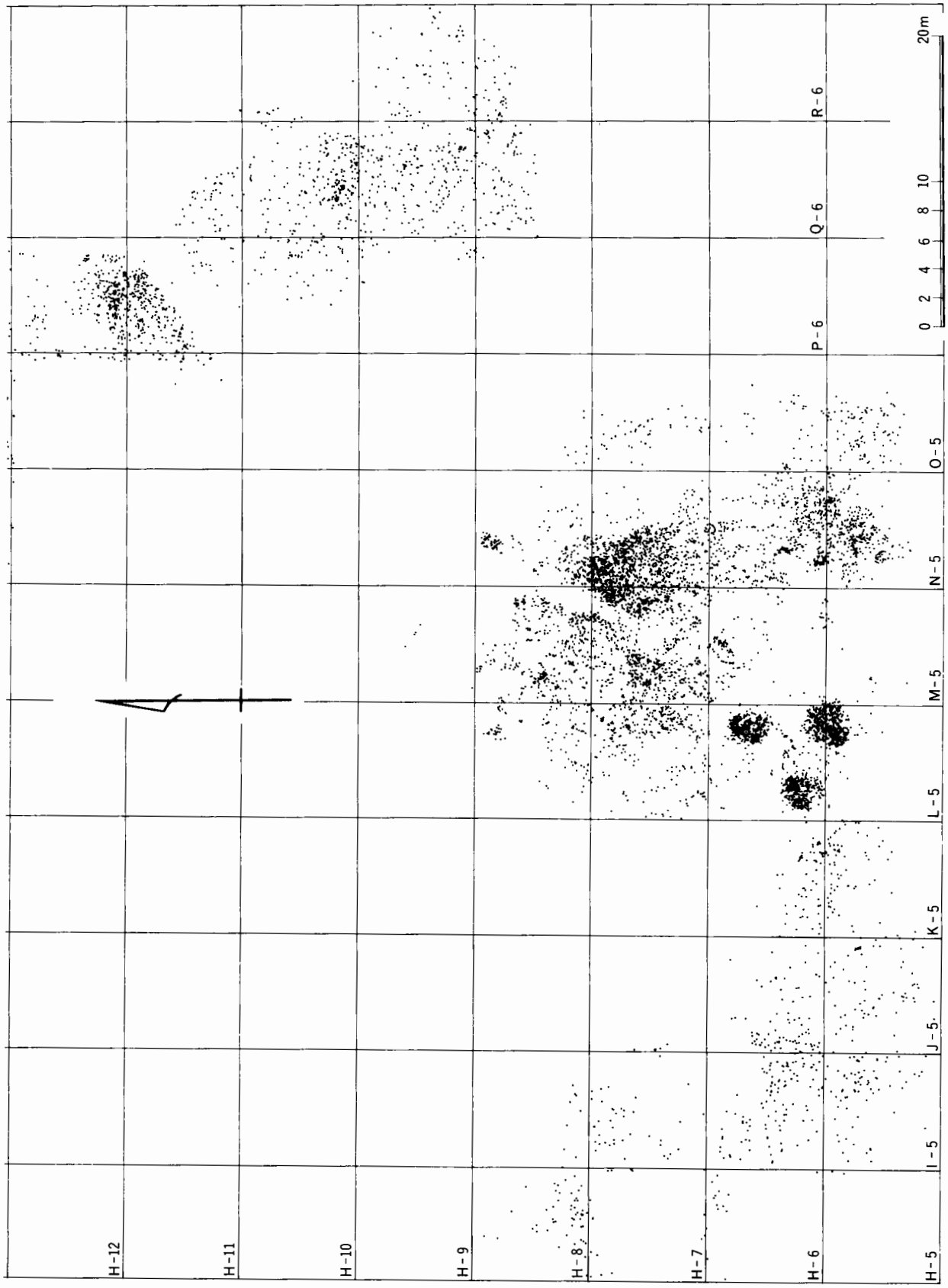
第4章　遺　　物

第1節　概　　要

牛垣内遺跡の発掘調査では縄文早期押型文土器から縄文晩期浮線文系土器まで、各時期の土器が出土している。地点によって時期差があり、A地点は後晩期、B・C地点は早期・中期と大別される。また、歴史時代の灰釉陶器（10世紀中葉）も出土している。なお、特筆すべきものは、多量に出土した縄文後晩期の土器片に混じって弥生土器片および古墳時代のS字甕口縁部片が出土していることである。これらの遺物については別記される。ここでは竪穴住居跡出土の遺物を中心に記述するが、縄



第30図　平成6年度発掘（A地点）の遺物出土分布図



第31図　平成7年度発掘（B・C地点）の遺物出土分布図

文前期から縄文中期末の土器については遺構外包含層出土の土器についても記述する。

第1号住居跡は平安時代の遺構で、出土した灰釉陶器から美濃編年の光ヶ丘―1から大原―2の時期に比定されるもので平成6年度の調査で検出された。第2号住居跡以下は第5号住居跡を除いて縄文時代中期の遺構で平成7年度の調査で検出されたものである。出土した土器は信州系、北陸系が中心を占めているが、中には関東系や関西系の各要素が折衷されたような土器も見られる。

信州系の土器は唐草文系土器が主流で、長野編年の中期後葉Ⅰ～Ⅳ期に類似すると思われる土器が目立つ。また、同時期の北陸系では古府Ⅱ式、串田新Ⅰ式に類似すると思われる土器が出土している。尚、時期は前後するが第9号住居跡に関係する土器は、中期前葉の土器で北陸系の新崎Ⅰ～Ⅱ式から上山田式類似と思われる土器が出土している。

遺構外の土器では縄文前期北白川系が少量出土しているが、縄文中期の土器では、遺構内出土の土器類とあまり変わりがなく、遺構内の土器片と接合するものもあった。その場合は遺構内の遺物として扱った。

（野村　宗作）

第2節　遺構出土の遺物

縄文時代の竪穴住居跡9軒と平安時代の竪穴住居跡1軒、平安時代の竈跡1基（L7区検出）に関連する遺物について第1号住居跡より順を追って記述する。しかし、L7区竈跡1基周辺より出土した灰釉陶器等については第1号住居跡の灰釉陶器に続いて記述する。

第1号住居跡および竈跡周辺出土の土器（第32・33図、図版7・8）

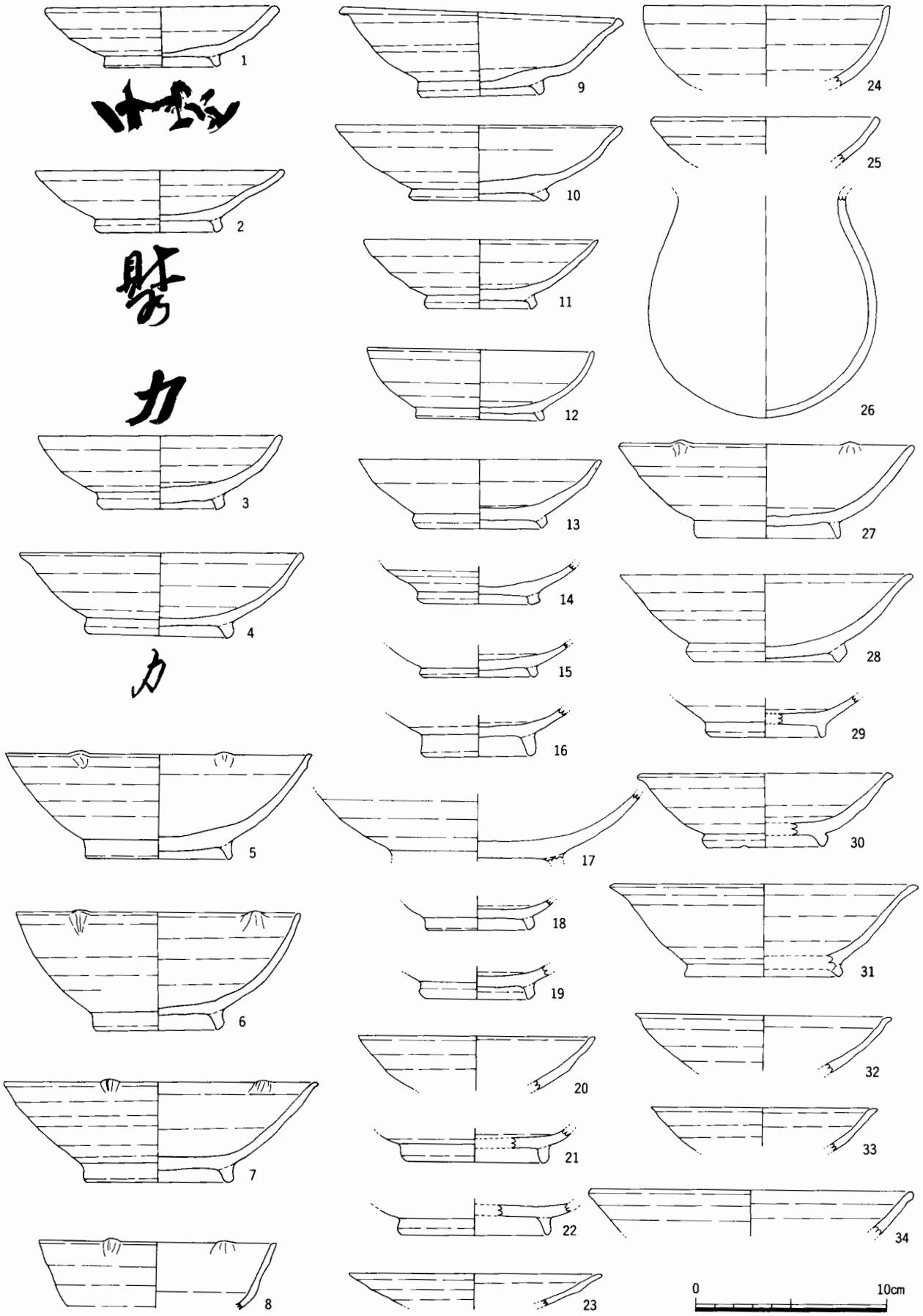
第1号住居跡より灰釉陶器および土師器が出土している。灰釉陶器はほとんどが2分の1以下の破片で検出された。出土状況は第14図のとおりである。灰釉陶器で接合できた遺物は20個体余り、総個体数では約30個体弱と推測した。この灰釉陶器は高山市上切町のよしま古窯のものと一致する[1]。尚、注目されるべき点は、これらの中に「墨書土器」が4点混在していたことである。字体は後記するが（1）は「千家也　か」これは吉祥句で「豊かになれる。または、平安になれる。」の意[2]。（2）は「財万呂」で「人名」[3]（3）、（4）は「力」である。文字は（1）の他は大変薄く岐阜県警察捜査課、長野県立歴史館傳田伊史氏、白沢勝彦氏、奈良国立文化財研究所佃　幹雄氏のご協力を得てようやく写真解読できるようになった。個々の観察については第2表にまとめたが、27以下はL7区の竈近辺等で出土したものある。

1）野村宗作の所持する未発表資料に対する多治見市文化財保護センター田口昭二氏の鑑定による。尚、第1号住居跡出土の遺物はすべて田口昭二氏に実見鑑定していただいた。
2）京都教育大学教授和田萃氏の解読による。また、奈良国立文化財研究所史料調査室長舘野和己氏以下2名は「千家□ヵ」、「千定ヵ」「千空ヵ」とも読まれている。
3）財万呂（たかまろ）奈良国立文化財研究所の史料調査室長舘野和己氏他2名の解読による。また、岐阜大学教育学部助教授早川万年氏は「財前」ではとも読まれている。

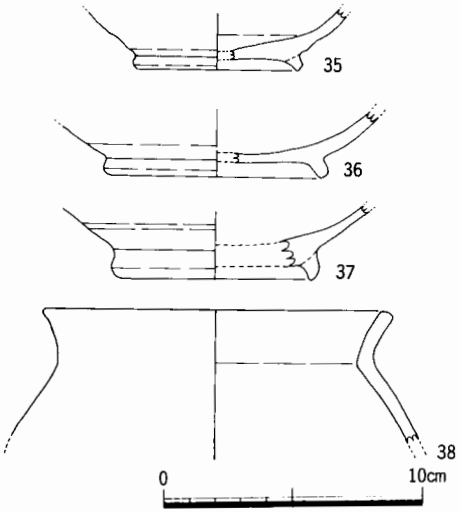
第２表　土器観察表（第１号住居跡及びＬ７区等出土灰釉陶器）

番号	器種	出土区	法量（cm）			胎土	焼成	色調	遺存％	備考
			口径	器高	高台径					
1	灰釉陶器 椀	SB１	11.8	3.2	5.6	密	普通	灰白	95	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。外胴部墨書「千家」。大原－２。
2	灰釉陶器 椀	SB１	12.7	3.3	5.9	密	普通	灰白	80	ロクロ仕上。刷毛調整。ヘラ削り、底をナデ調整。外底部墨書「財万呂」。大原－２。
3	灰釉陶器 椀	SB１	12.5	3.9	5.9	密	普通	灰白	80	ロクロ仕上。刷毛調整。ヘラ削り、底をナデ調整。内底部墨書「力」。大原－２。
4	灰釉陶器 椀	SB１	14.5	4.6	7.1	密	良好	灰白	80	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底が一部残存する。ナデ調整。外底部墨書「力」。大原－２。
5	灰釉陶器 輪花椀	SB１	15.8	5.6	7.3	密	普通	灰白	70	ロクロ仕上。刷毛調整。内部に施釉痕残存。重ね焼の部分が少し黒くなっている。糸切底をナデ調整。輪花は４。大原－２。
6	灰釉陶器 輪花椀	SB１	14.6	6.3	6.1	密	普通	灰白 一部口縁 赤褐色	70	ロクロ仕上。刷毛調整。重ね焼きの内部が黒くなっている。糸切底をナデ調整。胴部の張った深目の椀。輪花は４。大原－２。
7	灰釉陶器 輪花椀	SB１	16.2	5.2	7.4	密	普通	灰白	50	ロクロ仕上。刷毛調整。重ね焼きの内部が少し黒くなっている。糸切底が一部残存する。ナデ調整。輪花は４。大原－２（光ヶ丘－１の要素が残る）。
8	灰釉陶器 輪花椀	SB１	11.8			密	普通	灰白	30	ロクロ仕上。刷毛調整。輪花は４。大原－２。
9	灰釉陶器 椀	SB１	14.4	3.9～4.8	6.0	密	普通	灰白	60	ロクロ仕上。刷毛調整。重ね焼きの内部が黒くなっている。糸切底をナデ調整。大原－２（光ヶ丘－１の要素が残る）。
10	灰釉陶器 椀	SB１	14.6	4.0	8.7	密	普通	灰白	50	ロクロ仕上。刷毛調整。重ね焼きの内部が一部やや黒い。糸切底をナデ調整。外底部もやや黒い。光ヶ丘－１。
11	灰釉陶器 椀	SB１	11.9	3.6	5.3	密	普通	灰白	95	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。大原－２。
12	灰釉陶器 椀	SB１	11.5	3.7	6.1	密	普通	灰白	85	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底が一部残る。ナデ調整。大原－２。
13	灰釉陶器 椀	SB１	12.2	3.6	6.2	密	普通	灰白 一部灰 オリーブ	50	ロクロ仕上。刷毛調整。ヘラ削り。底をナデ調整。意図的に周囲を割っている。光ヶ丘－１。
14	灰釉陶器 椀	SB１			5.5	密	普通	灰白	50	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底が一部残る。ナデ調整。大原－２。
15	灰釉陶器 椀	SB１			5.0	密	普通	灰白	40	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底が一部残る。ナデ調整。大原－２。
16	灰釉陶器 椀	SB１			5.4	密	普通	灰白	40	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。大原－２。
17	灰釉陶器 椀	SB１			7.7	密	不良	灰白 褐灰	40	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。高台が取れている。
18	灰釉陶器 椀	SB１			5.0	密	普通	灰白	40	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。大原－２。

番号	器　種	出土区	法　量（cm）			胎土	焼成	色　調	遺存%	備　　考
			口　径	器　高	高台径					
19	灰釉陶器 椀	SB 1			5.3	密	普通	灰白	30	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。大原－2。
20	灰釉陶器 椀	SB 1	11.6			密	普通	灰白	30	ロクロ仕上。刷毛調整。大原－2。
21	灰釉陶器 椀	SB 1			7.0	密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。大原－2。
22	灰釉陶器 椀	SB 1			7.4	密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。大原－2。
23	灰釉陶器 椀	SB 1	13.0			密	普通	外面灰白 内面灰 オリーブ	20	ロクロ仕上。刷毛調整。内面の灰オリーブ色は点々と残り、ザラザラしている。大原－2。
24	灰釉陶器 椀	SB 1	12.3			密	普通	灰白	40	ロクロ仕上。刷毛調整。大原－2。
25	灰釉陶器 椀	SB 1	11.4			密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。大原－2。
26	土師器甕	SB 1 かまど内	頸部径 8.8	胴部径 12.0		粗	普通	褐灰 黒褐	40	頸部はくびれ外反するが、口径は不明である。胴部に張りがあり、底部は丸くなっている。
27	灰釉陶器 輪花椀	L－7	15.1	4.9	7.1	密	普通	灰白	50	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。大原－2。
28	灰釉陶器 椀	L－7	14.6	4.6	6.7	密	普通	灰白	40	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。大原－2。
29	灰釉陶器 椀	表　採			3.4	密	普通	外面灰白 内面暗 オリーブ	30	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。暗オリーブは釉薬である。光ヶ丘－1。
30	灰釉陶器 椀	L－7	12.6	3.9	5.6	密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。光ヶ丘－1。
31	灰釉陶器 椀	L－7	15.6	5.0	7.2	密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。糸切底をナデ調整。大原－2。
32	灰釉陶器 椀	L－7 表　採	12.6			密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。大原－2（光ヶ丘－1の要素が残る）。
33	灰釉陶器 椀	M－9	11.6			密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。大原－2（光ヶ丘－1の要素が残る）。
34	灰釉陶器 椀	O－12	16.8			密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。大原－2。
35	灰釉陶器 椀	O－7			6.0	密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。大原－2。
36	灰釉陶器 椀	I－4			8.0	密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。大原－2。
37	灰釉陶器 椀	J－5			7.2	密	普通	灰白	20	ロクロ仕上。刷毛調整。大原－2。
38	土師器甕	L－7	12.8	頸部径 5.9		普通	良好	褐灰	20	外面に刷毛調整が見られる。



第32図　第１号住居跡・Ｌ７区等出土土器



第33図　L７区等出土土器

第２号住居跡出土の縄文土器・石器（第34～41図、図版９～12・21）

覆土の上層部は庭木等が植えてありかなり撹乱されていたが、比較的多くの遺物が出土した。飛驒は縄文文化の接点と言われている通り各地の文化が流入し何種類かの系統に類別される。そこで、縄文土器に関しては次の７類に分類して記述する。

１類　信州系の土器
２類　関西系の土器
３類　北陸系の土器
４類　関東系の土器
５類　在地的な土器
６類　縄文が主体の土器
７類　その他の土器

１類　信州系の土器（第34・35図、第36図70～75、図版９～11）

曽利Ⅰ式期、及び、唐草文系土器を一括した。１・２は波状口縁櫛形文土器の同一個体で、接点はないが上下関係の土器である。器形は口縁が大きく山形状に波状口縁となっているのが特徴である。文様は波状口縁の部分に隆帯で菱形に近い不整円形に区画し、内部を縦の半截竹管による沈線でうめている。器形はほぼ中央で細まり頸部を作り口頸部と胴部を分ける。頸部から外反してきた口縁部は波頂部の口縁が内彎気味となっている。色調は暗褐色・赤褐色を呈し、胎土に白い砂粒を多く含む。中期後葉曽利Ⅰ式期と言えよう。

３は文様がややはっきりしないが唐草文系Ⅰ期の土器と思われる。４～６も同様の土器で櫛歯状工具や半截竹管による施文が見られる。胎土に砂粒・雲母を含む。

７～30は唐草文系Ⅱ～Ⅲ期の土器であろう。渦巻文あるいは口縁部や頸部に隆帯で区画文を施し、地文は斜位平行沈線や「ハ」の字状・矢羽状で充塡するもの、櫛歯状工具による条線等が見られる。８は頸部に４単位の楕円形区画文を施し、中は平行沈線で充塡し区画文の間に、３本で組み紐状にした把手をもつのが特徴的である。明赤褐色を呈し胎土に白い砂粒を多く含む。頸部から上は無文で丁寧なナデ調整である。

14～16は隆帯及び沈線の蛇行懸垂文が施され、左右はRLの縄文であるが上部は８と同様の楕円形区画になると思われる。17・19は交互刺突による波状文も見られる。

21から38まで25、28、34を除いて同一個体で、胎土に少し白い砂粒を含み褐色もしくは暗褐色である。

40はキャリパー状で口縁部に６単位の楕円形区画文を施し、中は櫛歯状工具による沈線で充塡している。区画文はやや高めの隆帯で間隔をとり、その隆帯は下方で低くなり左右に伸び区画文を二重にし、次の隆帯に続く。胴部には隆帯が３単位で縦に施し、地文は矢羽状沈線で充塡している。胎土に白い砂粒を含む。にぶい黄橙色である。

第34図　第２号住居跡出土縄文土器(1)

41・42は同一個体で腕骨文を伴う土器であろう。43は3条の隆帯が施され地文は条線で充塡してある。

44～69まで櫛歯状工具により雑な文様も見られるが、同時期の土器であると思われる。ただし、51・60は半截竹管が使用されており、他の土器と異なると思われる。

上記に類似する土器は、対岸のカクシクレ遺跡、国府町荒城神社遺跡、古川町中野山越遺跡、高山市垣内、江名子糠塚、無手無冠農場遺跡等飛騨各地の遺跡で出土している。

70・71は同一個体である。2本の隆帯を縦に平行に施し地文は矢羽状沈線で充塡している。胎土に白い砂粒を含み黒褐色を呈している。時期は唐草文系Ⅳ期の土器と思われる。72も同じである。73～75は条線を地文としている。何れも同時期の土器であろう。

2類　関西系の土器（第36図76～79、図版9・11）

76は里木Ⅱ式土器で地文が撚糸文で充塡されている。胴部上方でややくびれて外側に広がりやや内彎しながら立ち上がる。口縁部は2本の平行した波状文が竹管状工具でつけられている。撚糸文は口縁部と胴部に二分されていて、頸部はへらみがきの無文帯となっているが、この図には表せなかった。波状文の下は全面に付けられた撚糸文に竹管状工具による弧状沈線文や、平行沈線文が施されている。色調はにぶい黄橙色で胎土に白い砂粒を多く含み、石英もわずかに含んでいる。この土器に類似する土器は久々野町堂之上遺跡、清見村門端遺跡、古川町岡前遺跡にも出土している。77～79も同時期の土器である。

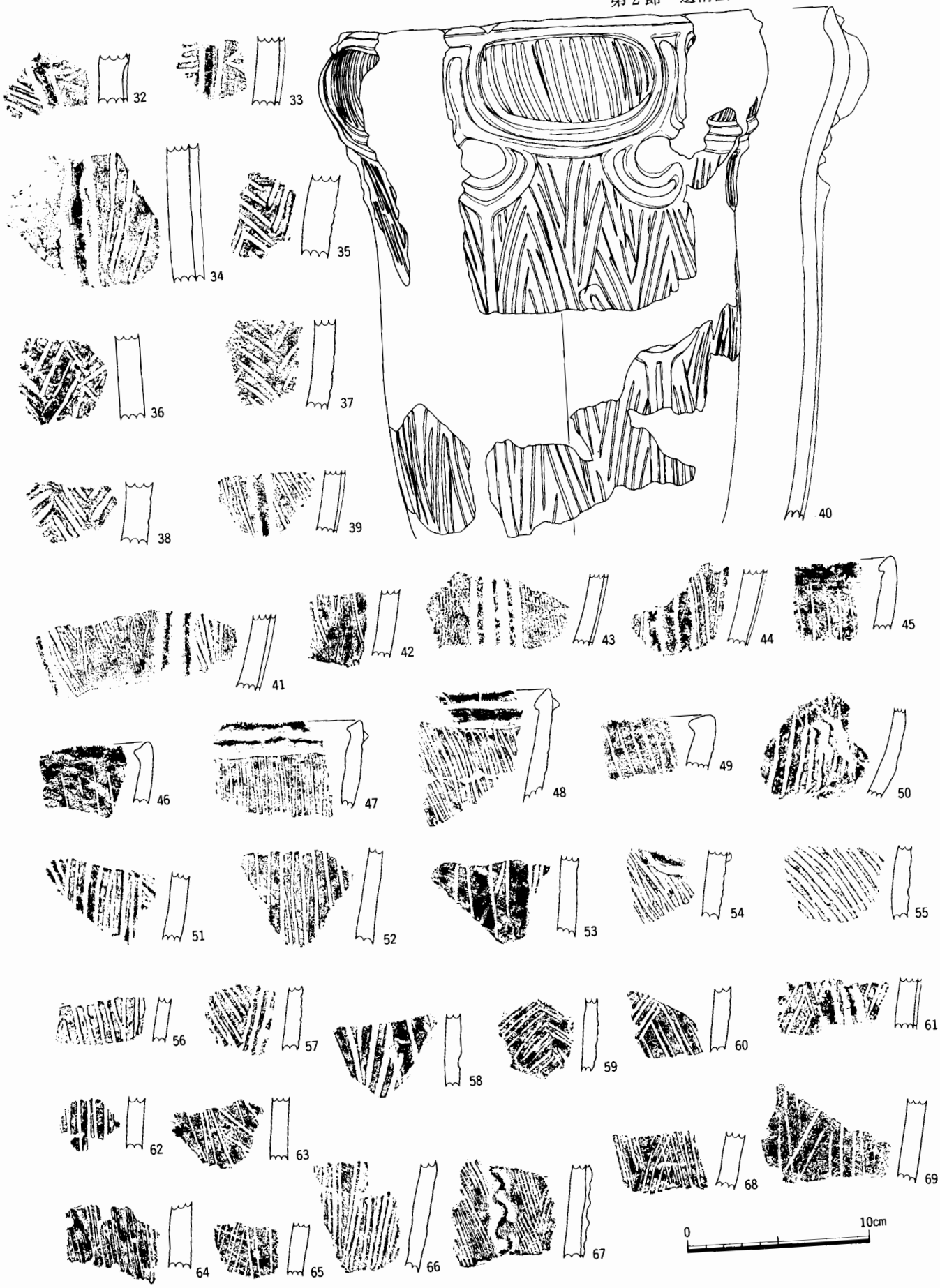
3類　北陸系の土器（第36図80～83、図版11）

第2号住居跡からは4点出土している。80は平行する沈線の間を櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。古府Ⅰ式に比定される土器と考えられる。にぶい黄橙色を呈している。83は半截竹管の地文の上に三角状の隆帯を付け、両サイドに櫛歯状工具による連続刺突が施されている。古府Ⅰ式と考えられる。

81・82は幅広の半截竹管により施文されている。古府式類似の土器であろう。

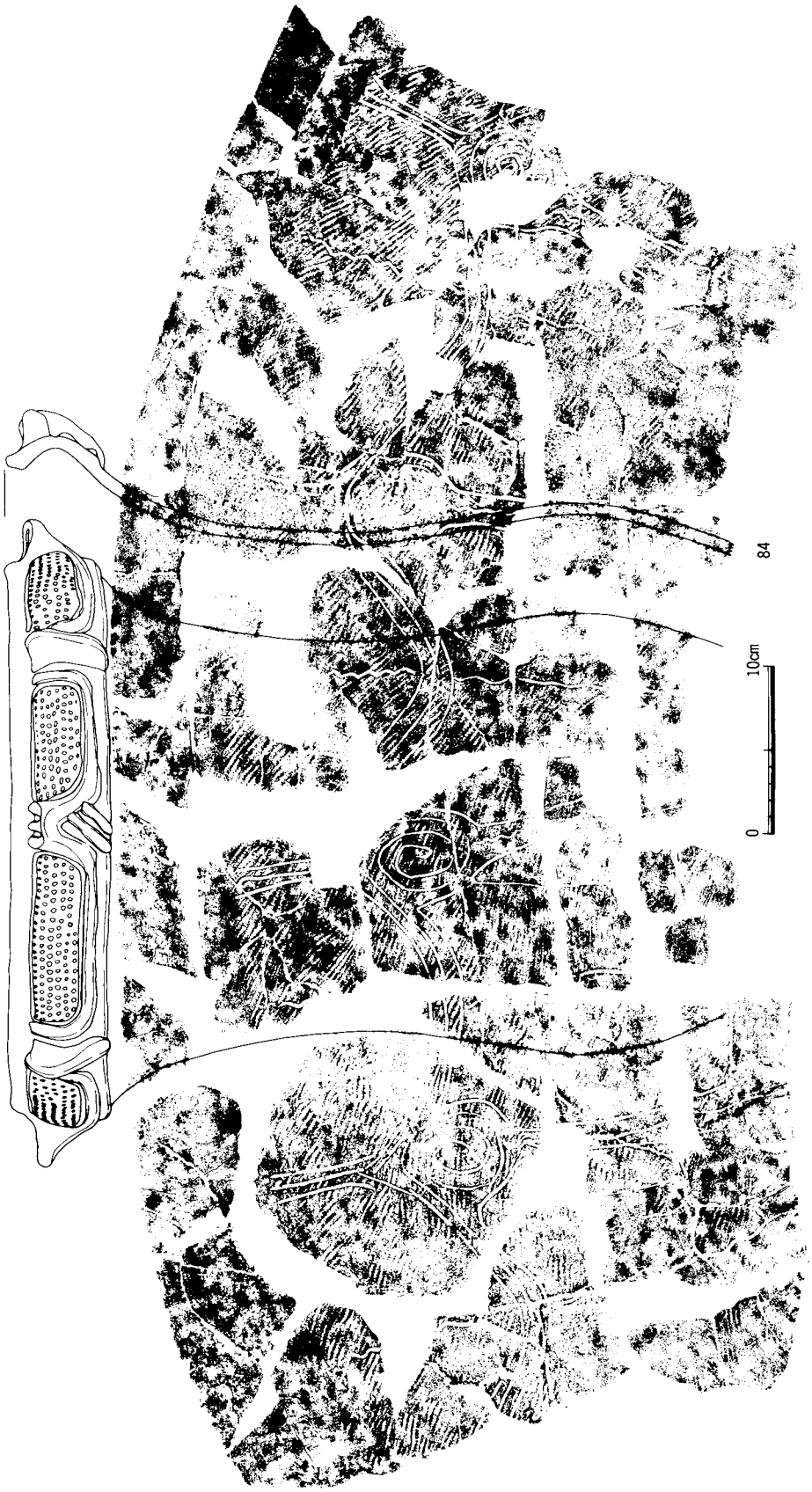
4類　関東系の土器（第37図84、図版9）

84は第2号住居跡の床面に近い覆土よりまとまって出土した。底部は不明であるが、胴下半部で膨らみを持ち、胴中央部ではすぼまり、頸部で外反しながら立ち上がり口縁で強く内彎するキャリパー状の深鉢である。文様は口縁部の内湾する部分は一見8分割と思えるが、実は幅広の高隆帯で4単位に分割されている。分割されている中央には装飾的な突起が付けられ、下方で左右に分かれ隆帯で8区画文を形成する。区画文内部は棒状工具による丸い刺突で充塡している。頸部は無文帯であるが、胴部より全面を細かいRLの縄文で充塡し、その上に原則として3本の沈線が弧状に施され4単位で胴部をめぐっている。弧状の分岐点の下部には時計回りの渦巻文がみられるが、3本の弧状沈線の中央の1本で描かれている。渦巻き文の下にも3本の沈線が見られるが、これも弧状沈線の続きである。ただし、蛇行懸垂文は独立している。胎土に白い砂粒を多く含み、雲母も多少含まれている。丁寧なナデ調整で、色調は黒褐色・にぶい黄橙色を呈している。加曽利E式の影響と考えられる。



第35図　第２号住居跡出土縄文土器(2)

第36図　第2号住居跡出土縄文土器(3)



第37図　第２号住居跡出土縄文土器(4)

5類　在地的な土器（第38図85～93、図版11）

貼り付け隆帯を指で連続的に押しつぶしたような文様をリボン状突帯と言い、飛騨地方の中期後半の土器に多く見られる。

85～91はリボン状突帯を有する土器である。85は頸部1条のリボン状突帯を有し底部に向けて、撚糸文のみで施文した深鉢でる。底部は1本超え、1本潜り、1本送りの網代圧痕であると思われるが明確ではない。胎土に白い砂粒を含み灰褐色もしくはにぶい褐色を呈している。他のリボン状突帯を有する土器はRL、LRの縄文を下部に施文されている。口縁部は無文であると思われるものが多いが、ここでは完形品が無いためはっきりしない。このリボン状突帯をもつ土器は古川町岡前遺跡、国府町荒城神社遺跡、高山市寺東、垣内遺跡などで出土している。92・93は同一個体である。焼成は良く内部もきれいに調整されている。表面に不規則な沈線が施されており在地性の強い土器と言えよう。

6類　縄文が主体の土器（第38図94～103、第39図、第40図126～133、図版11・12）

ここでは施文が縄文のみの土器を一括した。104は撚糸文であるがこの土器は頸部にリボン状突帯を有する可能性がある。胎土に砂粒、石英を含み色調は褐色、一部黒褐色を呈している。105は口縁から撚糸文を施している。122は口縁に帯状突帯を有するが、他はすべてLRの縄文のみで施文されている。色調は灰黄褐色を呈しているが、煤がかなり付着し黒くなっている。胎土に砂粒、石英、雲母を少し含む。

126はRLの縄文を丁寧に施しているが、表面はやや凸凹しており口唇部も含めて雑な作りである。内部調整も雑である。色調は黒褐色で胎土に白い砂粒、礫を含んでいる。127も6類に入れたが、これはLRの縄文の上に半截竹管による蛇行懸垂文が施されている、従って、これは在地的な要素をもつ5類に入れた方がよいかもしれない。他の128～133の土器は何れも破片が多く、色調は灰褐色・褐色・にぶい橙色・にぶい褐色などで胎土に白い砂粒含んでいる。

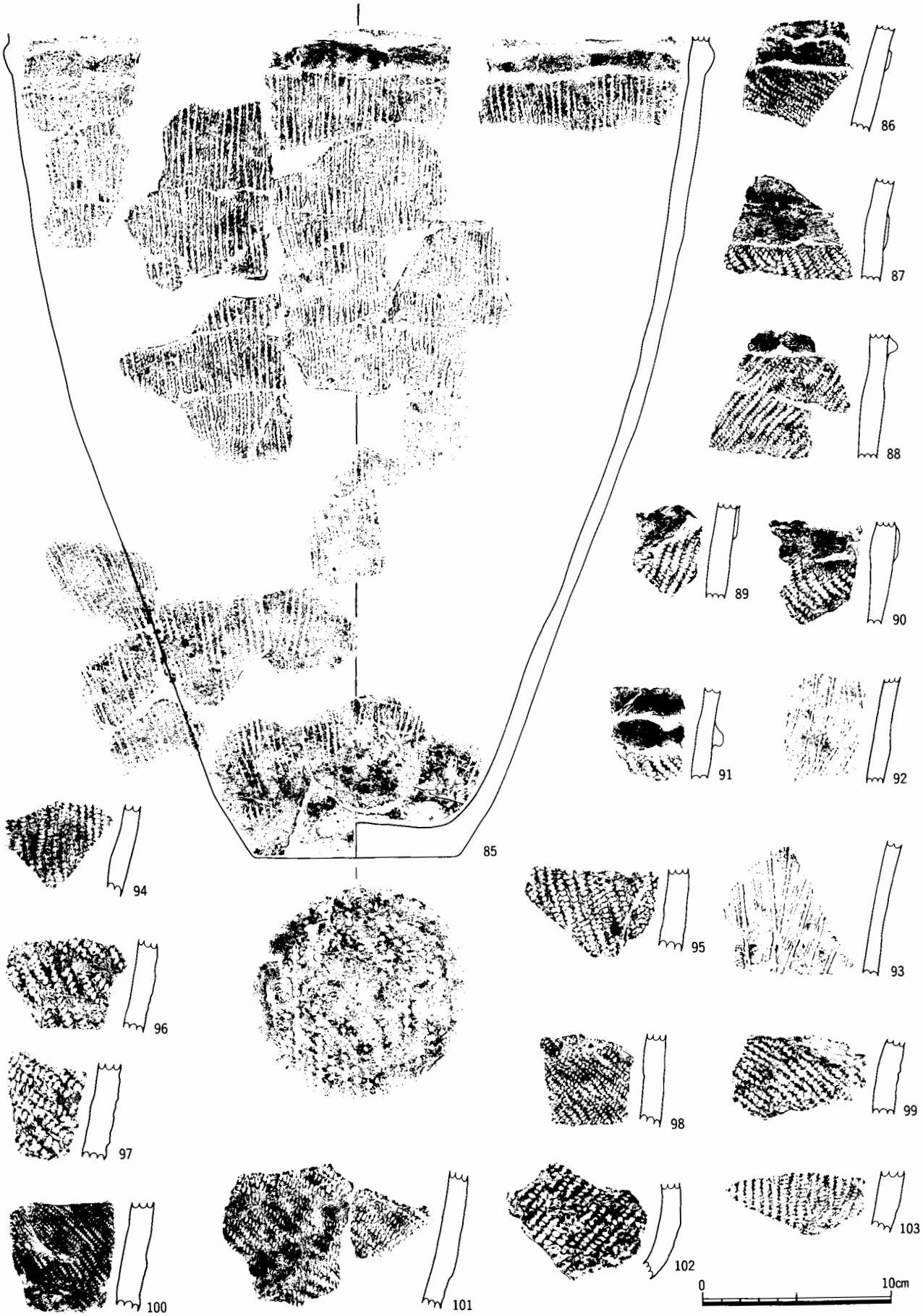
7類　その他の土器（第40図134～140、図版12）

134～137は底部である。134・135は1本超え、1本潜り、一本送りの網代底で、136・137は木の葉底である。

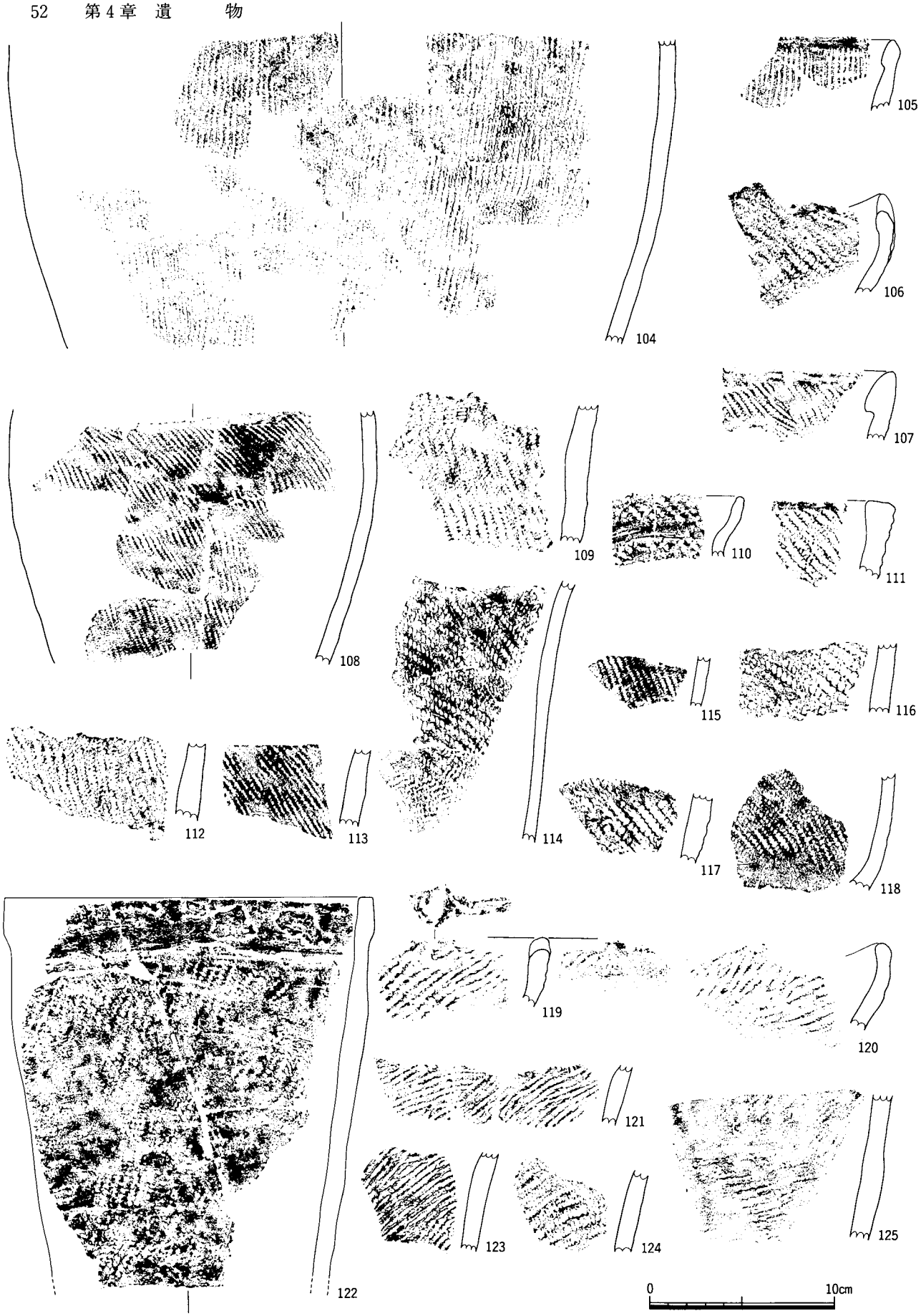
138は円盤状土製品であり、周りはきれいに磨かれている。1点のみ出土した。

139は炉跡内から出土した焼成粘土塊でよく焼けている。指痕と思われる所が認められる。胎土に白い砂粒を多く含み、雲母も含む。灰黄褐色（10YR3.5/2）である。重さは4.8gである。

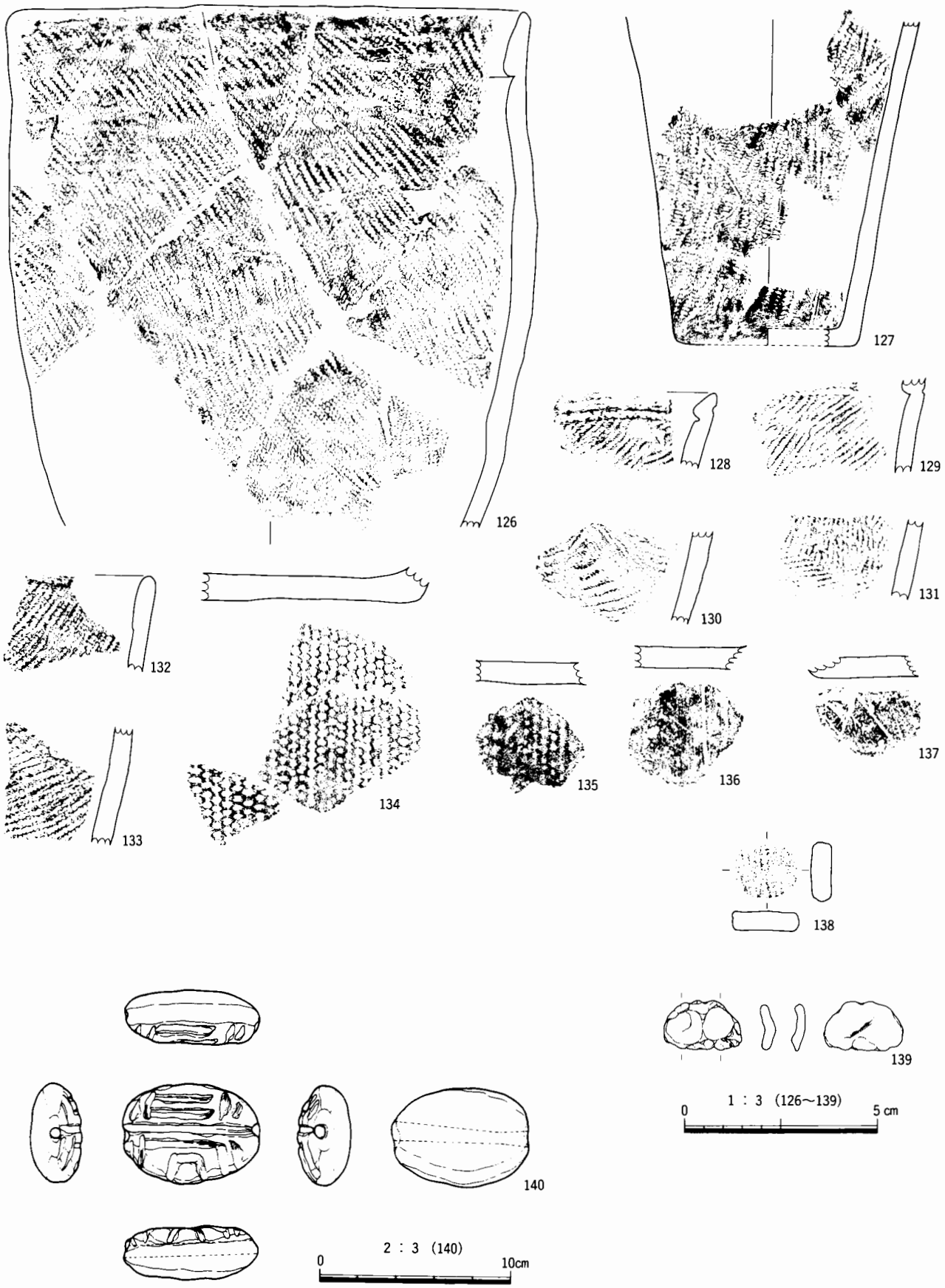
140は土製垂飾品である。楕円形の横位中央に沈線を施し、この沈線を境に上下で文様構成が異なる。施文に用いられたものは幅2㎜ほどの棒状に近い工具と考えられる。また穿孔に用いたのは直径2～2.5㎜ほどの棒状工具と推測される。孔の開口部は左右で大きさに若干の差があるが、孔中には明確な擦痕といったものが認められず、穿孔方向は明らかでない。良質の粘土が用いられているが、わずかに砂粒も含んでいる。焼成は普通である。色調はにぶい黄橙色を呈しているが、よくみると赤色塗料が一部残存しており、当時は赤い垂れ玉であった可能性がある。これに類似する土製装飾品は同じ丹生川村ゴード洞遺跡で1個出土している。



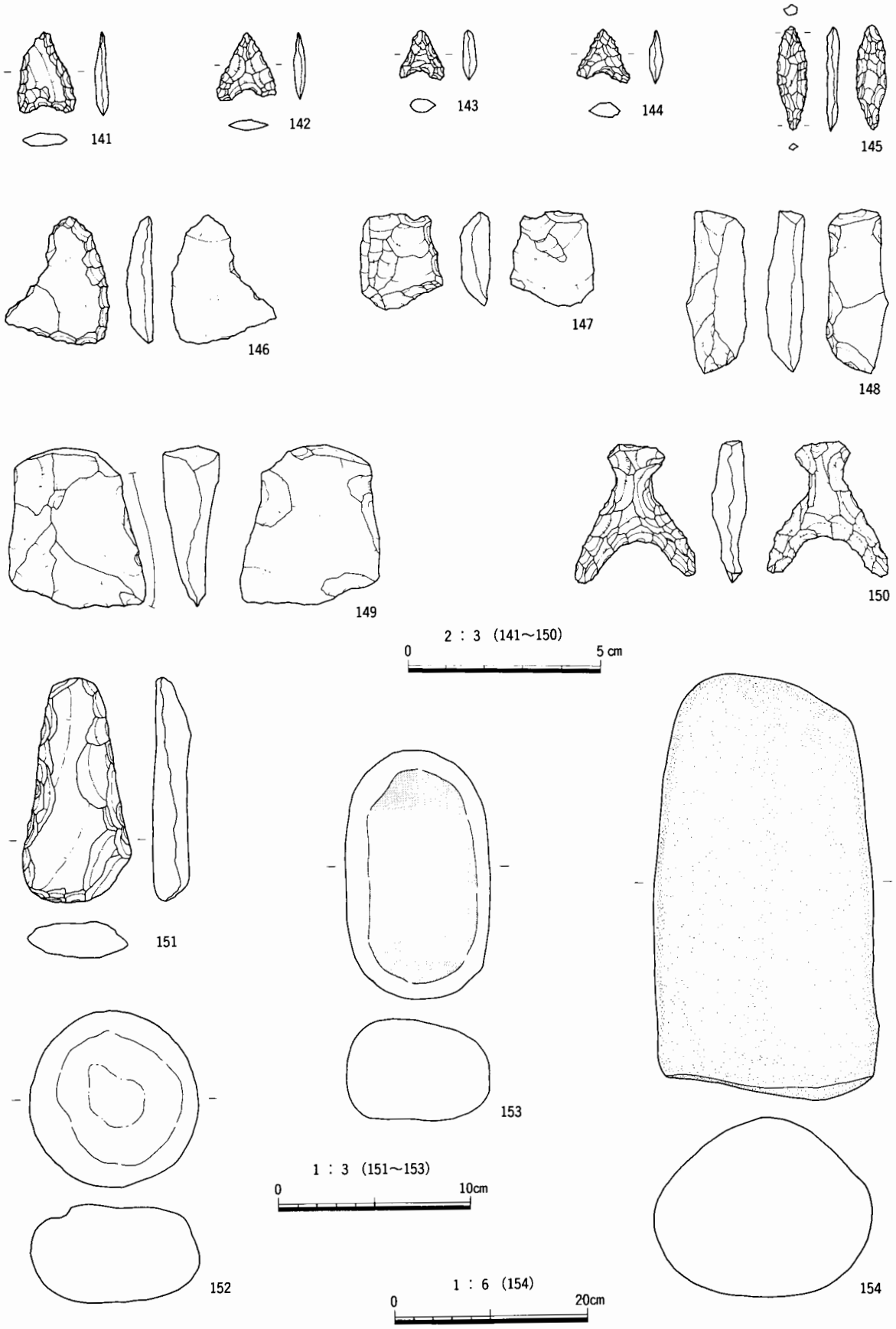
第38図　第２号住居跡出土縄文土器(5)



第39図　第2号住居跡出土縄文土器(6)



第40図　第２号住居跡出土縄文土器(7)



第41図　第2号住居跡出土石器

石器（第41図、図版21）

第２号住居跡からは多くの石器類が出土した。器種別では、石鏃18点(141～144)、石錐２点(145)、両極剝離痕のある石器１点、削器２点（146)、掻器７点（147)、二次加工のある剝片８点（148)、使用痕のある剝片６点(149)、打製石斧７点(151)、磨石類４点(152･153)、石皿１点、石棒１点(154)、三脚石器１点(150)、フレイク類221点(チャート80、下呂石76、黒曜石61、玉髄３、頁岩１）である。

150は三脚石器としたが、粗製の石器で三脚石器と呼ばれるものもあるので、つまみ付きの削器というべきものかもしれない。石材は下呂石で、下呂石製の同様のものが、古川町岡前遺跡からも出土している（上嶋1995)。

154は大型の石棒で、住居跡の西側の壁際に横になった状態で出土した。

第３号住居跡出土縄文土器・石器（第42図、図版12・21）

１は第３号住居跡のほぼ中央に逆位で、床面に埋められたかのような状態で出土した土器である。頸部は括れているが、緩やかに膨らみながら内彎し口縁に至る。口縁端部に貼り付け隆帯を有し、隆帯は頸部に向けて下がり、逆三角形もしくは三角形の16の区画文を形成する。三角形は８単位で区画内は無文である。逆三角形も８単位となっているが、櫛歯状工具による沈線で充塡されている４区画と、中央に太めの隆帯をもつ４区画に分かれている。頸部にも隆帯や沈線が施されている。胎土に白い砂粒を僅かに含み、にぶい橙色を呈している。信州的な要素をもつが、技法は飛騨的で唐草文系Ｉ期に比定されよう。

２は波状口縁に刻み、隆帯にも刻みを有している。にぶい赤褐色を呈している。中期中葉の土器と思われる。

３は唐草文系Ｉ期、４・５は同じくII～III期の土器であろうと思われる。６は薄手の土器で時期はわからない。７は土器の一部に貼り付けられたものである。８は無文土器で９は台付き土器の脚台の部分である。10は土器の一部に貼り付けられていた把手と思われる。

11は土器の装飾の部分であろう。何か動物の頭をイメージしたものと思い、樋口昇一氏、小島俊彰氏に信州、北陸方面を探していただいたが類例はみあたらなかった。時期は縄文中期である。

石器は打製石斧１点（12）の他、二次加工のある剝片２点、フレイク７点（チャート３、下呂石３、黒曜石１）であった。

第42図　第3号住居跡出土縄文土器・石器

第5号住居跡出土縄文土器（第43図、図版12）

本住居跡からは5点の押型文土器と2点の無文土器が出土した。1は樋沢Ⅰ式（中島1987）に比定される。2単位2条の山形文を縦位帯状施文した土器で、器厚が薄く、焼成は比較的良好である。2・3は胎土などから同一個体もしくは類似した土器の胴部の無文部分にあたると思われる。

4・5は西田遺跡ⅠA群2類土器に比定される。4は穀粒状の楕円文を横位に施文している。非重複施文で、無文部が山形状を呈する。5は楕円文山形文を併用したもので、楕円文を施文した後に山形文を施文したものと思われる。これらは繊維を含まず、器厚が薄い。焼成はやや不良である。

施文の特徴などから両者が共存した可能性は低く、4・5の土器から本住居は細久保Ⅰ式併行期に属すると考えられる。

第43図　第5号住居跡出土縄文土器

第６号住居跡出土縄文土器・石器（第44～46図、図版13・14・21）

第６号住居跡出土の土器も下記のような６類に分類して記述する。

１類　信州系の土器

２類　北陸系の土器

３類　東海系の土器

４類　関東系の土器

５類　在地的な土器

６類　縄文が主体の土器

１類　　信州系の土器（第44図１～23、図版13）

唐草文系の土器を一括した。１・２は唐草文系土器の胴部の一部で、３～５は口縁部で櫛歯状工具による沈線が施されている。６～９も同様の文様である。唐草文系Ⅰ期の土器であると思われる。11は胴部に丸い棒状の隆帯で４単位に分割し刻みを入れ、上下で左右に分かれ隆帯で区画文を形成する。区画の内部は、また、隆帯で渦巻き文を施している。胴部は樽状に張りその上は外反しながら立ち上がり口縁部でやや内彎する。口縁から胴部にかけて２本の隆帯が４単位で垂下し、２本の隆帯と隆帯の間は沈線で区画し、内部は櫛歯状工具による沈線で充塡している。この沈線の中央に真横に蛇行沈線が施されている。胎土に白い砂粒を含み灰黄褐色を呈している。唐草文系のⅠ～Ⅱ期に比定されるがローカル色も見られると思われる。

12～15は唐草文系Ⅱ期の土器と考えられ、16～23は同じくⅡ～Ⅲ期の土器であろう。尚、16～18は同一個体である。

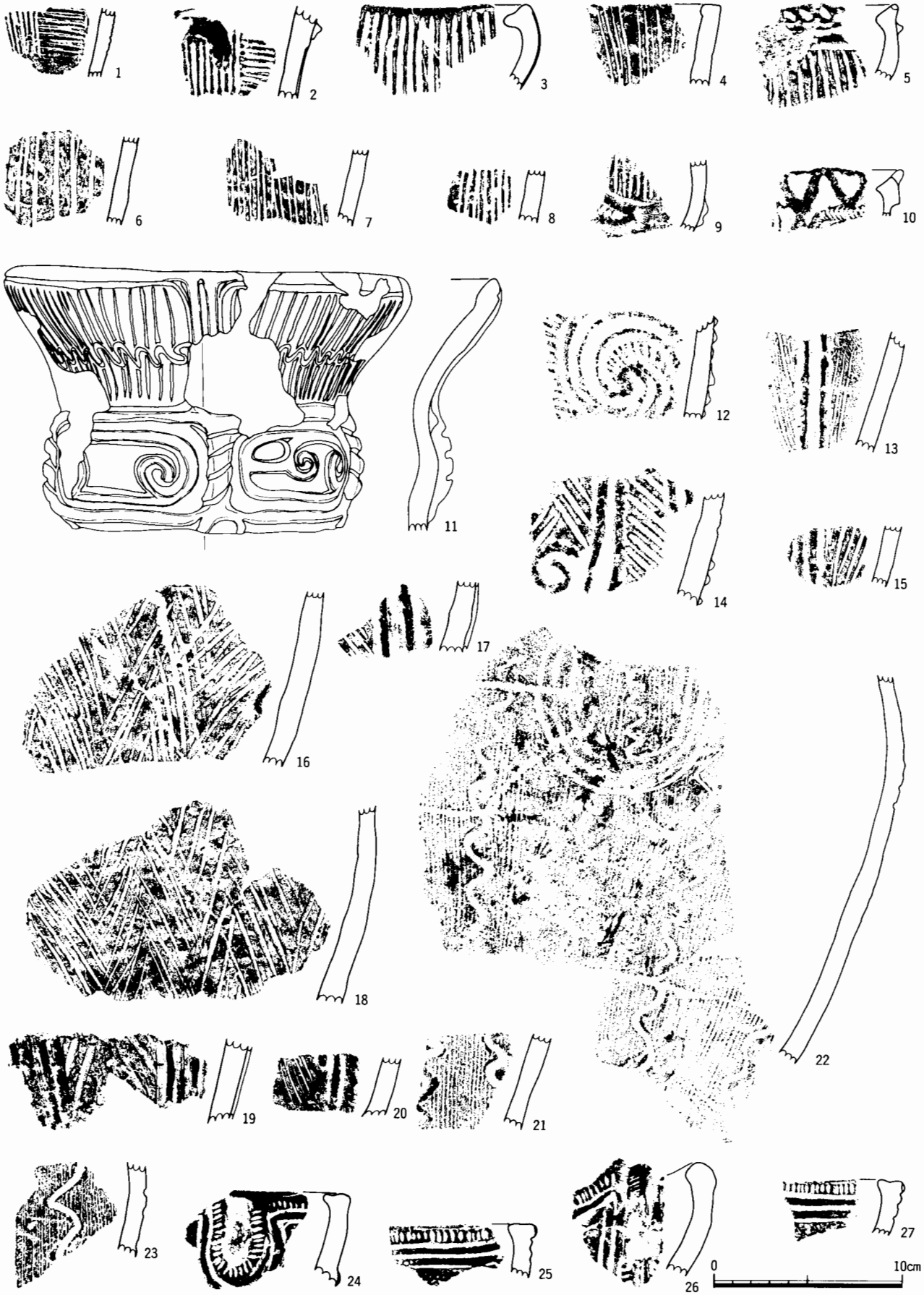
２類　北陸系の土器（第44図24～27、第45図28～30、図版13・14）

24～30は同一個体である。口縁部は内彎し隆帯に刻みを施すが、24ではＵの字に下がっている。また、26は波状口縁となっている。破片数が少ないので不明な点が多いが、半截竹管で施文しており串田新式類似の土器であろう。胎土に僅かに砂粒を含み、黒褐色、にぶい黄橙色を呈している。

３類　東海系の土器（第45図31・32、図版13・14）

31は住居跡の床面より出土した。頸部よりやや外反しながら立ち上がり、口縁部で僅かに内彎するキャリパー状を呈している。４単位の小さな波状がある。口縁部に横位沈線、２条の蛇行沈線を巡らせ、渦巻きも見られる。地文はRLの縄文で、波状部の下に蛇行懸垂を施している。胎土に砂粒、金雲母を含み色調は褐色である。咲畑式類似の土器と思われる。

32は頸部に４本の沈線、もしくは波状沈線を５条巡らせ、胴部よりやや細くなっているが沈線部より外反しながら立ち上がり、途中より口縁部に向けて「く」の字状に内彎する。口縁は四角ぽい波状となっており口縁部に沿って、角状工具により２条の沈線を巡らせ、更にそれと平行してやはり２条の円い連続刺突を巡らせている。「く」の字状に張った部分にも、円い連続刺突を巡らせている。その他は無文である。表面は褐灰色を呈し、胎土に白い砂粒を含む。口縁部には弧状沈線や渦巻き文は見られないが咲畑式系の土器と考えられ第６号住居跡の指標となると言える。



第44図　第6号住居跡出土縄文土器(1)

４類　関東系の土器（第45図33、図版14）

１点（33）のみ出土している。頸部よりやや外反しながら立ち上がり、口縁部でかるく内湾する。頸部に２条の隆帯を有し肥厚する口縁部の間はRLの縄文が施文してあり、そのうえに１条の沈線も見られる。胎土にわずかに砂粒を含み明褐色を呈している。加曽利Ｅ式系の土器であろう。

５類　在地的な土器（第45図34～42、図版13・14）

34・35は同一個体で地文に撚糸文が施され、その上から沈線による鉤の手文を施している。胎土に白い砂粒を多く含み明褐色を呈している。

36～38も同一個体である。頸部より外反し波状口縁をなす。口縁部に隆帯を巡らし、波頂部の下より、やはり隆帯で頸部を巡る隆帯に垂下し区画文を形成する。区画文内は条線で充塡し、中央に蛇行懸垂文が施される。胎土に白い砂粒を含みにぶい褐色を呈している。信州的な要素も見られるが技法は在地的と考えられる。39も信州的な要素ををもつ土器であるがリボン状突帯を有する。突帯の上部は櫛歯状工具による沈線で、下部は条線が全面に施されている。底部は１本超え、１本潜り、１本送りの網代を利用している。胎土に白い砂粒を含み褐色もしくは明褐色を呈している。40・41は同一個体である。

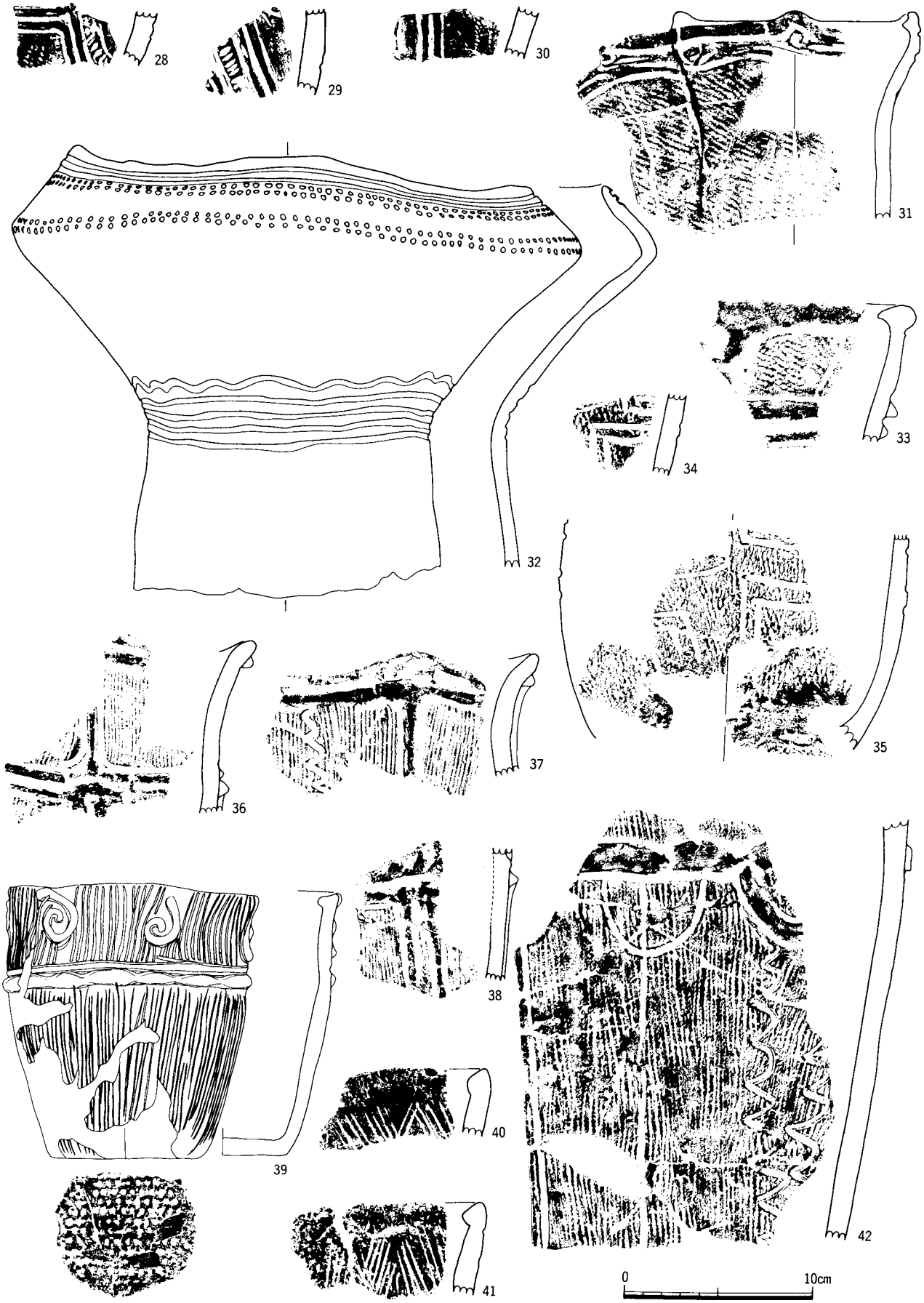
42は地文には全面撚糸文を施し、頸部にリボン状突帯を巡らせている。突帯の下部には沈線による弧状、貼り付け隆帯による弧状文が交互に見られる。また、沈線が直線で垂下していたり蛇行懸垂文が施されているなどの特徴が見られる。胎土に砂粒を多く含み、にぶい黄褐色を呈している。

６類　縄文が主体の土器（第46図43～52、図版14）

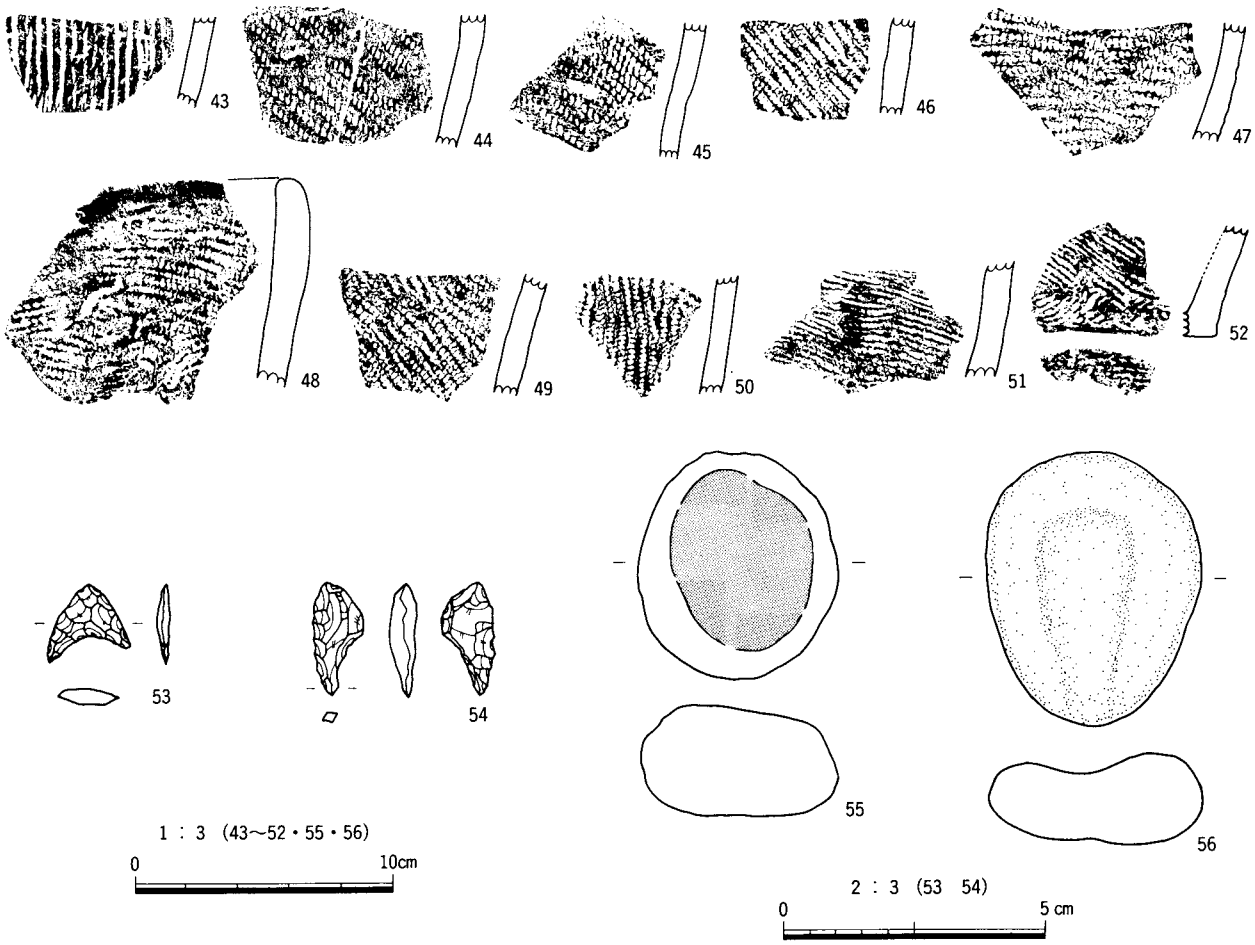
43は撚糸文で、44～52まではRLの縄文で、51･52は同一個体である。いずれも胎土に砂粒を含み、黄褐色、にぶい黄褐色、褐灰色を呈している。

石器（第46図53～56、図版21）

第６号住居跡出土の石器は、石鏃４点（53）、石錐３点（54）、二次加工のある剥片１点、使用痕のある剥片１点、磨石類２点（55）、石皿１点（56）、フレイク35点（チャート15点、下呂石16点、黒曜石４点）である。56は小型の石皿である。



第45図　第6号住居跡出土縄文土器(2)



第46図　第６号住居跡出土縄文土器(3)・石器

第７号住居跡出土縄文土器・石器（第47～51図、図版14～17・21）

第７号住居跡の土器の系統はあまり多くないが信州系が中心となる。下記の４類に分けて記述する。

１類　信州系の土器

２類　北陸系の土器

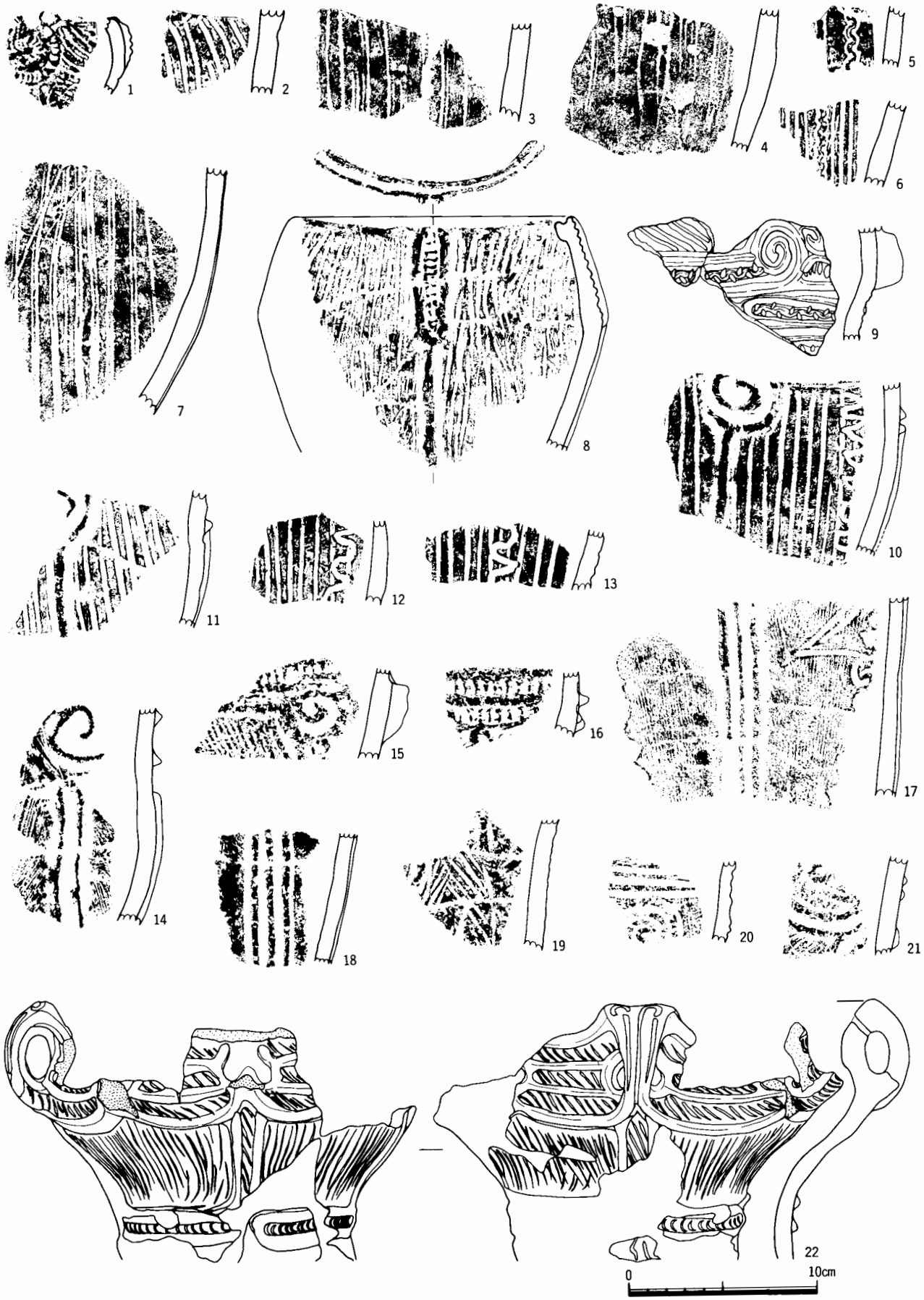
３類　在地的な土器

４類　縄文が主体の土器

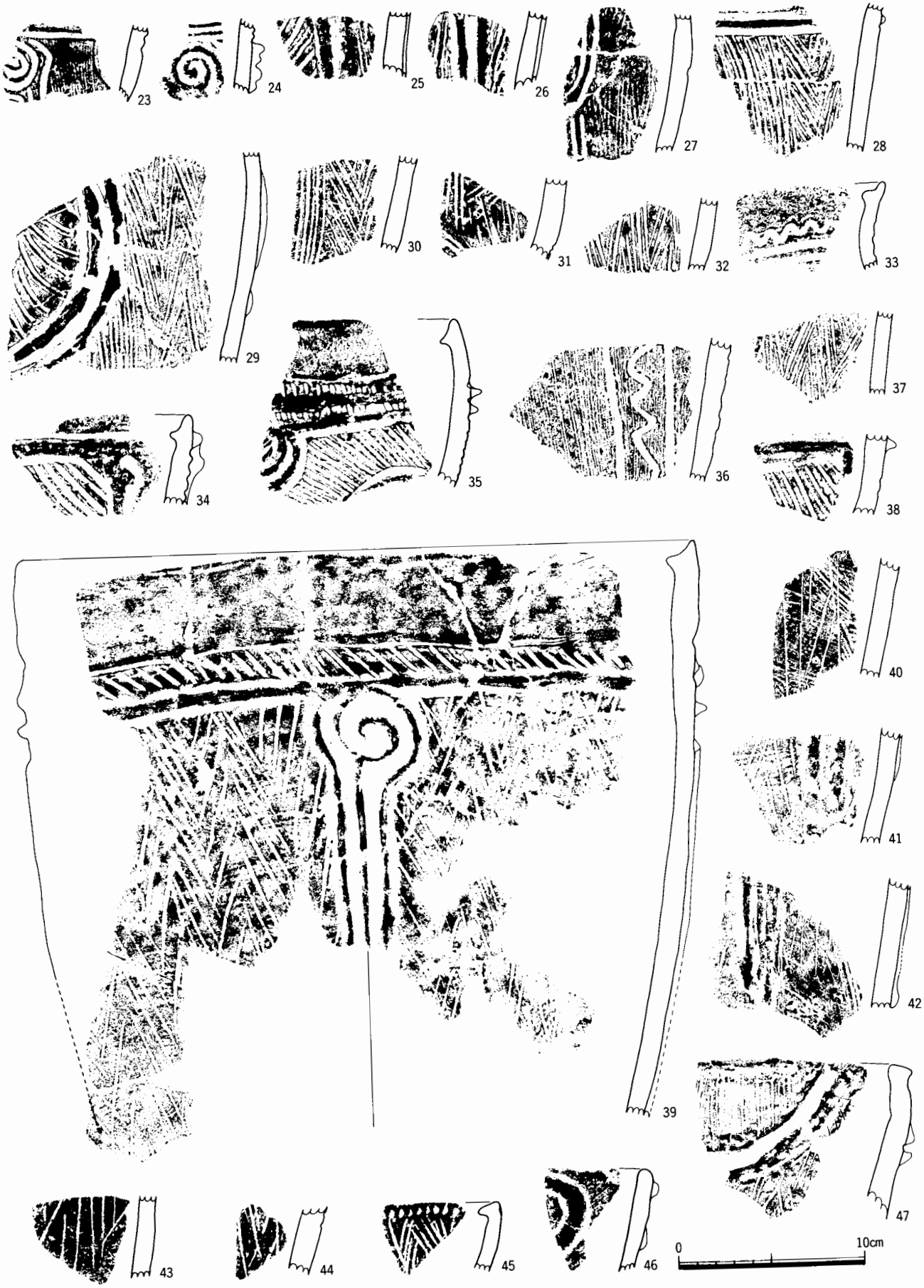
１類　信州系の土器（第47～49図、第50図72～75、図版14～17）

１は渦巻き状に爪形文が見られ２～４・７は櫛歯状工具による平行沈線が施されており、いずれも唐草文系Ⅰ～Ⅱ期の時期と考えられる。５・６は半截竹管による平行沈線にコンパス文を施している。北陸の影響も受けた土器で、１時期早い中期中葉に遡る可能性もある。これに類似する土器は古川町中野山越遺跡や、岡前遺跡でも出土している。

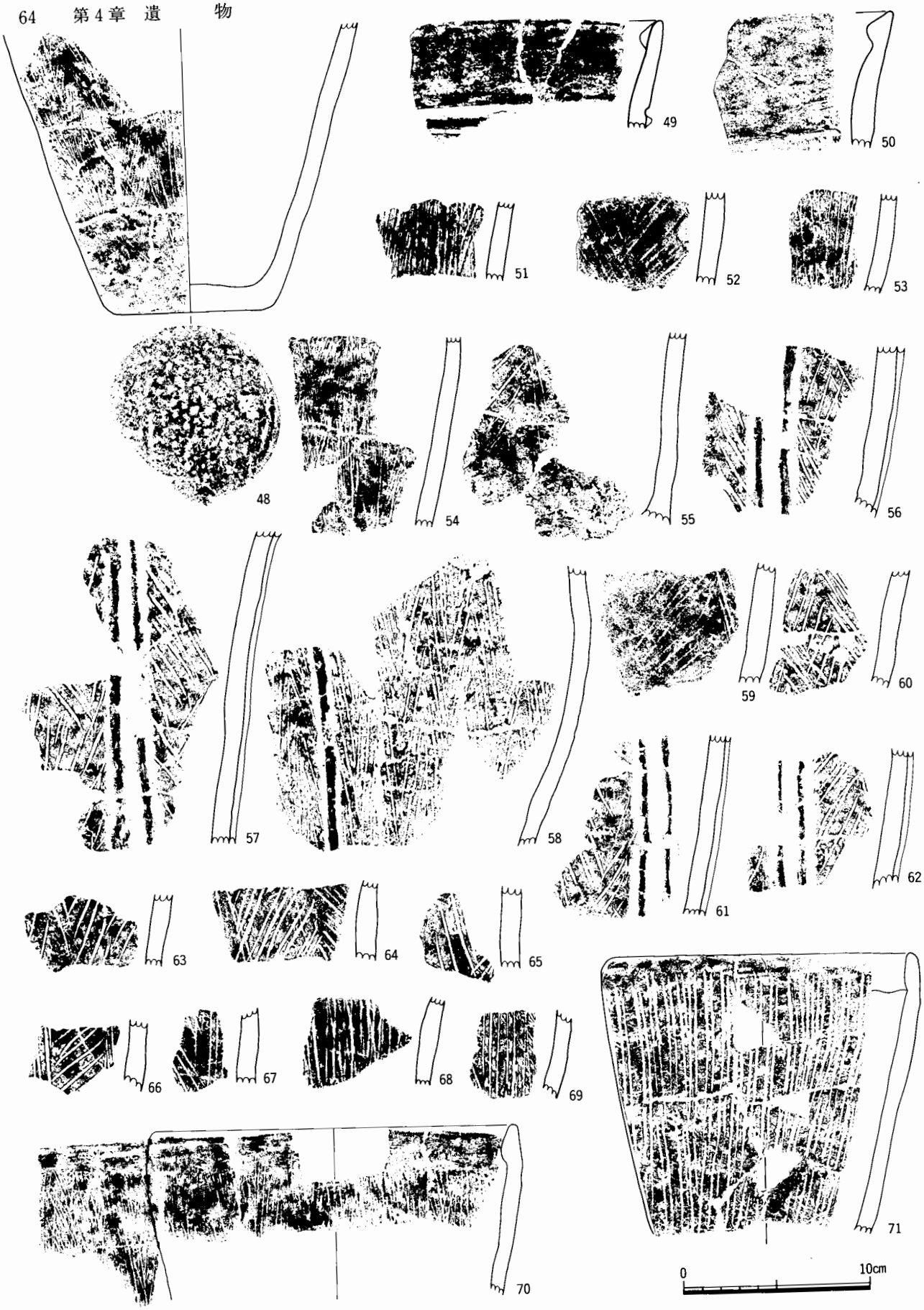
８は胴部で「く」の字状に内彎し、口唇部に沈線を巡らす。胎土に砂粒を多く含み、橙色もしくは黒褐色を呈している。９は渦巻文や、交互刺突文が施されて、明褐色を呈している。



第47図　第7号住居跡出土縄文土器(1)



第48図　第７号住居跡出土縄文土器(2)



第49図　第7号住居跡出土縄文土器(3)

10～13は同一個体で、渦巻文や蛇行沈線が施されている。焼成はよく胎土に砂粒、石英、雲母を含み暗灰黄色を呈している。唐草文系II期と思われる。

15～27は渦巻文や２～３条の縦位隆帯を有し、地文に矢羽根状沈線、または条線で施文されている。22は橋状把手を４単位有し頸部には爪形文を施し、外反しながら立ち上がり橋状把手部は内彎する。胎土に白い砂粒を含み茶褐色を呈している。唐草文系II～III期の時期であろう。

28～32・37は同じ、唐草文系II～III期の時期であろうと考えられるが、地文に半截竹管を利用して施文する技法は、信州ではあまり見られない[1]。従って、この技法は、はっきり判らないが在地的であるかもしれない。23は胎土に砂粒や雲母を含み明赤褐色を呈している。この土器は曽利II～III式の時期であろう。

34～36・38は唐草文系III期の土器と言えよう。39は唐草文系III～IV期の土器と考えられる。具体的にどことは表現しにくいが、技法に在地的な要素の見られる土器である。胎土に白い砂粒を含み暗赤褐色を呈している。

40～45・47は唐草文系III～IV期の土器であろう。46も唐草文系であるが時期は不明である。48は網代底となっているがよく摩滅していてはっきりしない。48～55まで唐草文系III～IV期の土器であろう。56～67は「ハ」の字形や矢羽根状沈線が施され、１～２条の隆帯が縦位に施されている。いずれも胎土に白い砂粒を含み、にぶい黄橙色もしくは赤褐色を呈している。68～71は地文が条線で満たされている。これらの土器も胎土に白い砂粒を多く含み黒褐色を呈している。56～71まで唐草文系IV期の土器と言えよう。

72は２条の隆帯で右巻きの渦を描いている。渦の中は斜行沈線、渦の外は矢羽根状の沈線を半截竹管を使用して施している。これについては28～32・37で記述したのと同じである。

73～75は同一個体である。頸部に区画文を施し斜行沈線で充塡するなど、唐草文系と思われる。しかし、縄文を施文する技法は加曽利Ｅ式系か、下伊那、もしくは在地的と思われるがはっきりしたことはわからない[2]。

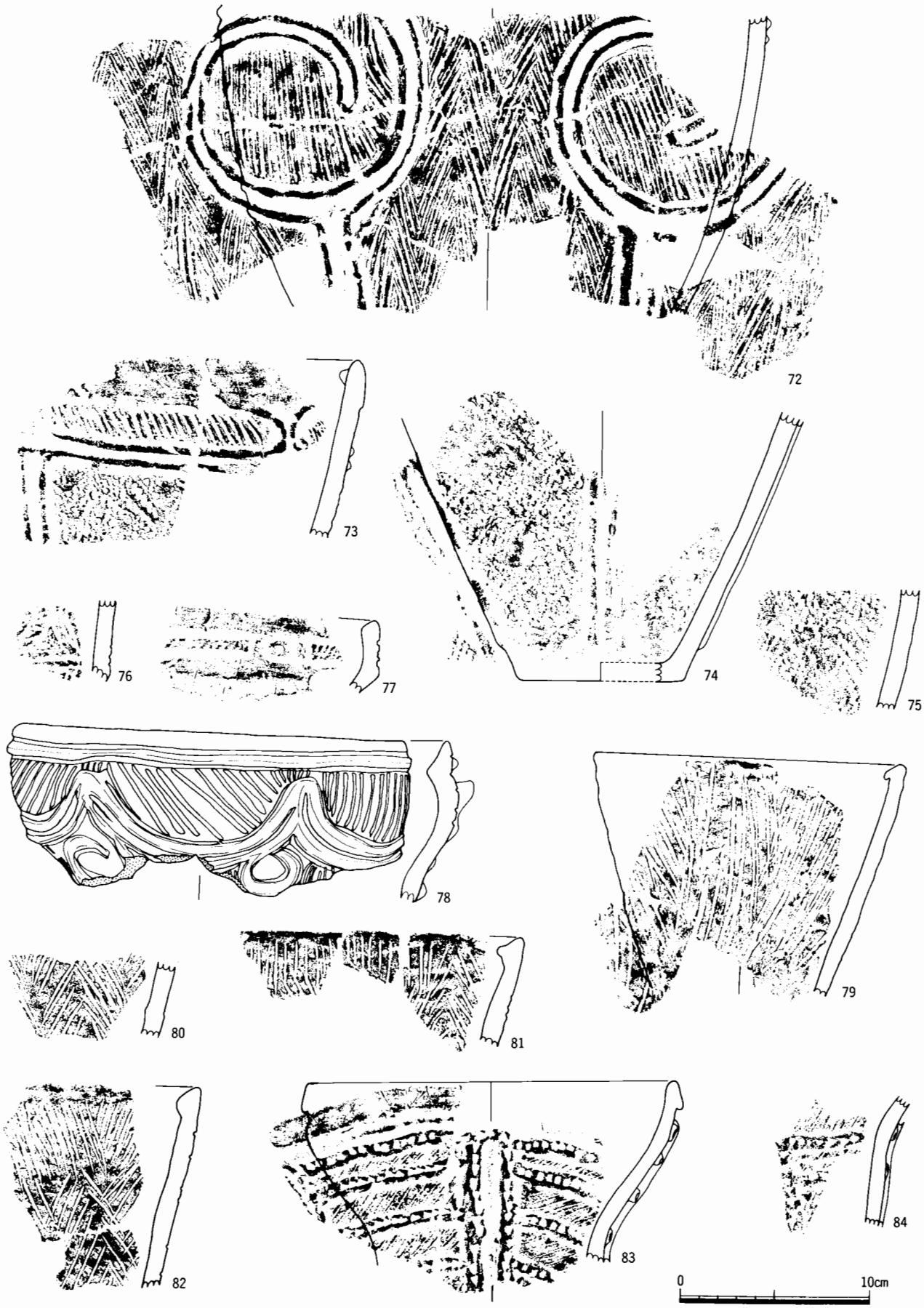
２類　北陸系の土器（第50図76・77、図版17）

北陸系の土器は２点出土している。76は半截竹管による施文が施され一部櫛歯状工具による連続刺突が見られる。古府式段階の土器と思われる。77は浅鉢と思われる。口縁部に棒状工具で２条の沈線を巡らし、その間は櫛歯状工具による連続刺突がみられる。また、２条の沈線を区切るかのように同様の沈線で楕円形の中央に刺突を施した文様は４単位となると思われる。胎土に白い砂粒や雲母を含み浅黄橙色を呈しており、丁寧にナデ調整されている。古串田新式に比定される土器であろう。

３類　在地的な土器（第50図78～84、図版17）

78は口縁部に沈線と隆帯を巡らせ、その下は２本の隆帯の連弧文で区画し内部は、斜行沈線で充塡している。連弧文の下には交互に左巻き、右巻きの渦が施されている。信州の影響は受けていると思われるが、技法は在地的と思われる。胎土に雲母、石英、白い砂粒を含み色調はにぶい黄橙色である。時期は信州の中期後葉II期併行と思われる。

79～82は沈線で矢羽根状、もしくは、条線が不規則に施されている。信州の影響を受けているので



第50図　第7号住居跡出土縄文土器(4)

あろうが、やはり技法は在地的である。中でも79の焼成は良い。いずれも胎土に砂粒を含みにぶい黄褐色を呈している。83・84は同一個体で胴部より外反しながら立ち上がり、口縁部に向かって内彎する有段口縁の土器である。貼り付け隆帯でいくつかに区画されている。隆帯には押し引き刺突が施されている。地文の斜行沈線は隆帯を貼り付けた後に施文されている。胎土に白い砂粒、金雲母を含んでいる。褐色を呈している。中期後葉の在地的な土器と思われる。

４類　縄文が主体の土器（第51図85～90、図版17）

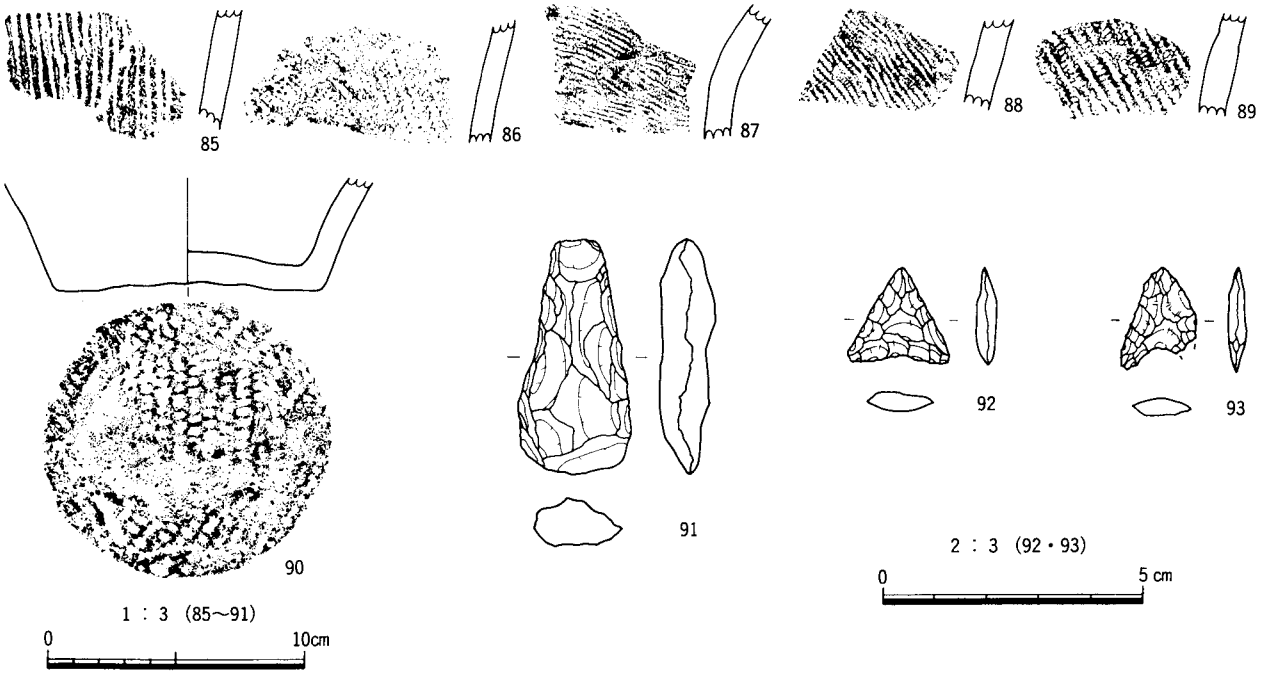
85は撚糸文で、86～89は RL の斜行縄文が施されている。90は土器底部で網代痕がみられる。いずれも中期後葉に伴う土器であろう。

石器（第51図91～93、図版21）

第７号住居跡出土の石器は、石鏃４点（92・93）、二次加工のある剥片３点、打製石斧３点（91）、磨石類３点、フレイク30点（チャート17、下呂石７、黒曜石６）である。

土器・石器以外の遺物としては、栗の炭化物が出土している。これについては第４章第５節で記述する。

１・２）神村透氏のご指導を賜った。



第51図　第７号住居跡出土縄文土器(5)・石器

第8号住居跡出土縄文土器・石器（第52～55図、図版17～19・21）

第8号住居跡出土の土器も信州系が中心となるが、次の5類に分けて記述する。

1類　信州系の土器

2類　北陸系の土器

3類　東海系の土器

4類　在地的な土器

5類　縄文が主体の土器

1類　信州系の土器（第52・53図、第54図56～62、図版17～19）

1は隆帯による渦巻き文の間に爪形文を施し、2はやはり隆帯の間に半截竹管による施文、及び、爪形文が見られる。3・4は櫛歯状工具による施文がはっきりしているが、4には区画文、爪形文が見られる。5～8は半截竹管による施文で、6は沈線間に押し引きによる連続爪形文が縦に施されている。9は隆帯による褶曲文であろう。10は把手で表面は粘土紐で渦巻き様に施文されている。何れも胎土に砂粒や雲母を含んでいる。これらは唐草文系I期の土器と考えられる。

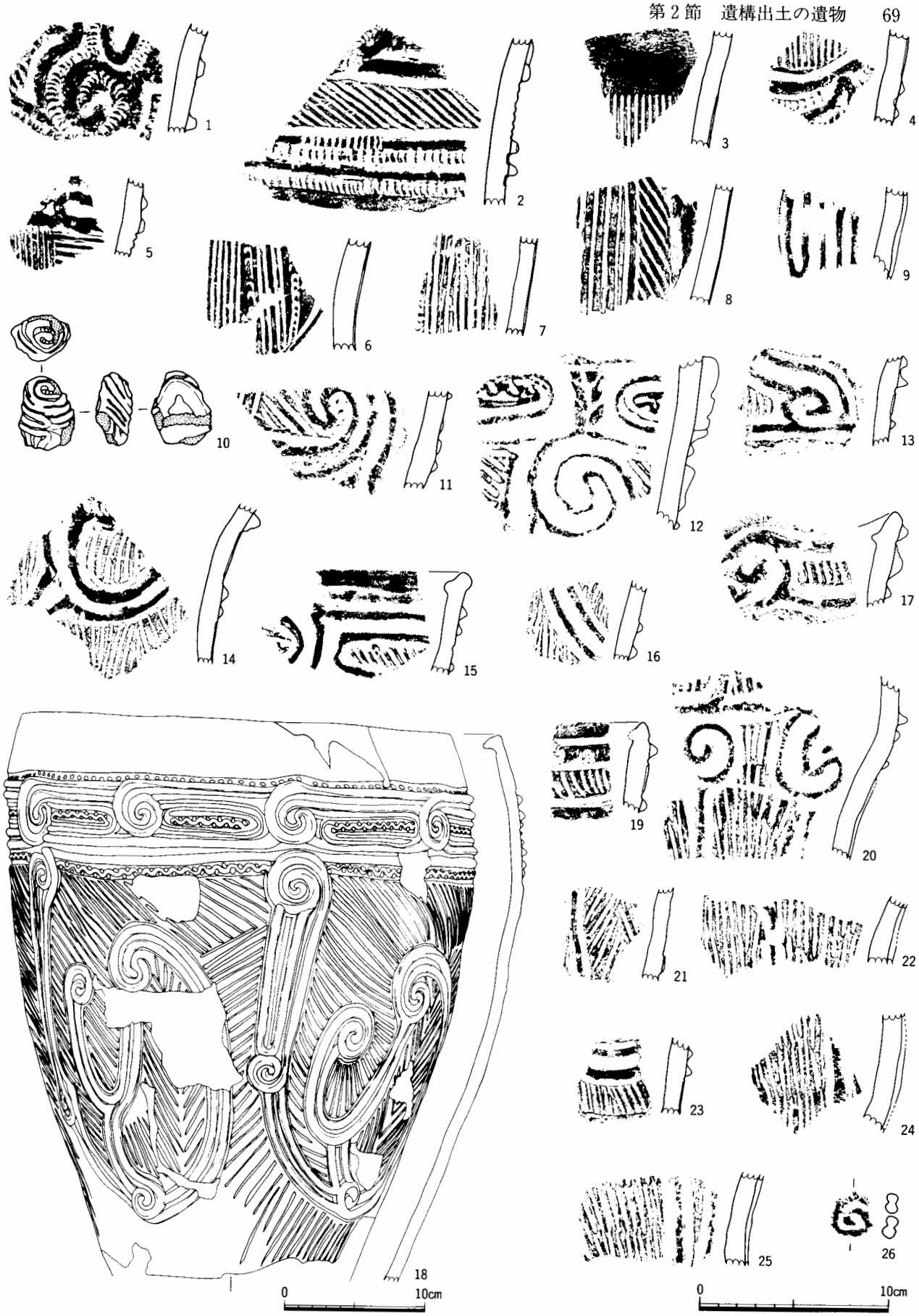
11～18は唐草文系II期の土器と言えよう。12は組み紐で何単位かに土器を分割している部分と思われる。

18は炉跡内に内面を上にして敷きつめられていた土器である。口縁部は無文帯であるが頸部文様帯は、渦巻き文で8分割し、その間は楕円区画とし交互刺突を施している。胴部文様は頸部渦巻き文より一つおきに腕骨文が垂下し、別に施文され垂下してきた腕骨文の渦巻き部で合流して1つの唐草文を形成する。この模様は胴部を4単位で分割し、その空間部は斜位もしくは逆「ハ」の字状沈線文によって充塡している。胎土に白い砂粒を含み下部は赤褐色、上部は灰褐色を呈している。本住居跡の指標となる土器である。19～25は唐草文系II～III期の時期の土器と思われる。26は土器の一部に貼り付けられていた渦巻き文である。

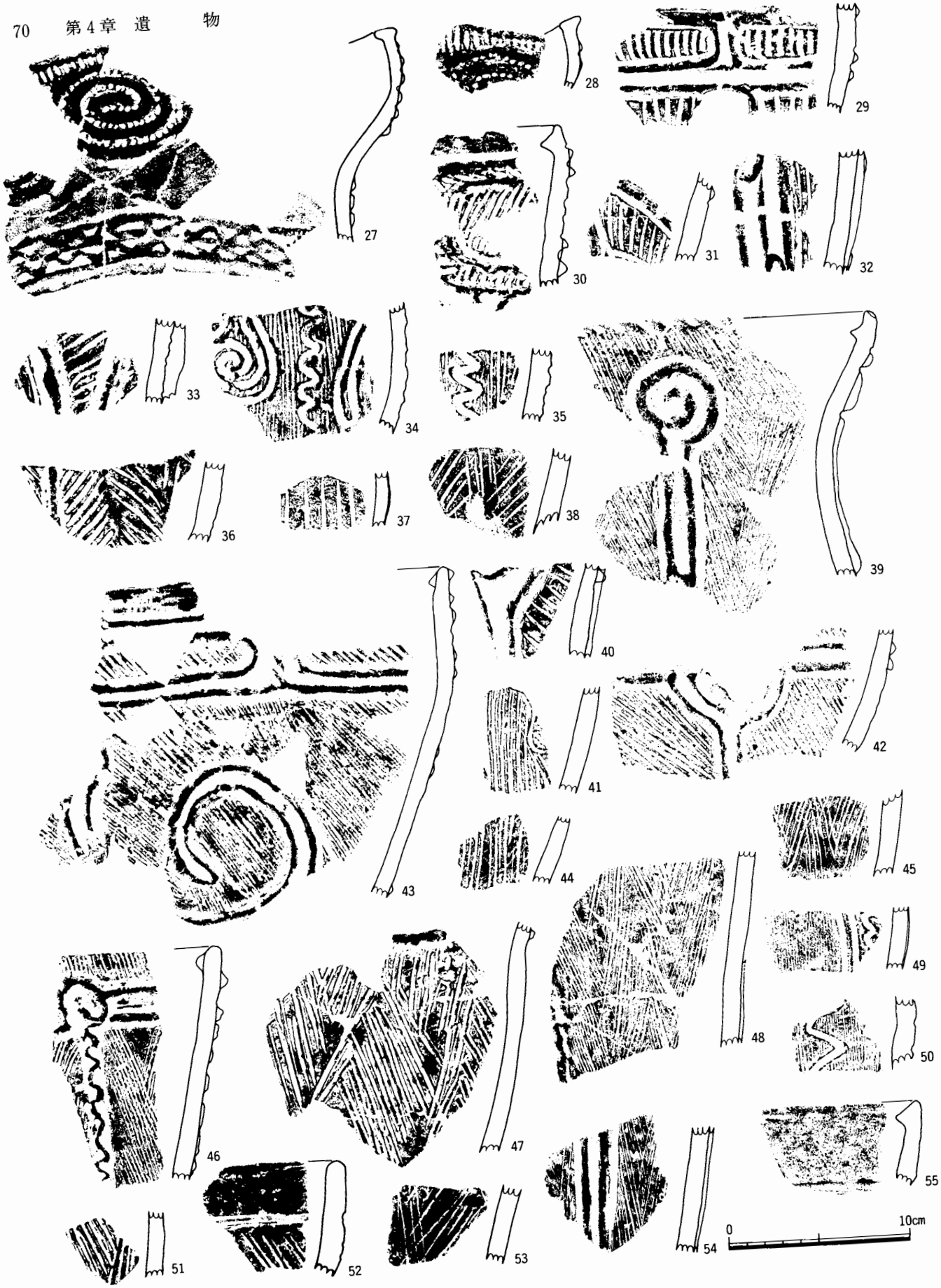
27は波状口縁をなす土器で28と同一個体である。口縁部に櫛歯状工具による短い沈線を有し、その下に右渦巻き文を隆帯で施し、隆帯間は連続刺突で充塡している。頸部は粘土紐による貼りつけ文が見られ唐草文系III期と考えたいが、渦巻きに刺突の技法は在地的かもしれない。胎土に雲母、白い砂粒を多く含みにぶい黄褐色を呈している。

29～42は区画文内に櫛歯状工具による沈線、地文を条線で埋めその上から蛇行懸垂文、また、渦巻き文や腕骨文などの施文が見られ、唐草文系II期の土器であろうと考えられる。

43は口縁部に区画文を有し内部は櫛歯状工具による斜行沈線で充塡されており、胴部も地文と同様の沈線で満たし、その上に2条の隆帯で左巻きの渦を施している。唐草文系II～III期の土器と考えられる。44～55までもII・III期の区別は難しく同じ段階の土器と考えたい。但し47・52は施文方法に半截竹管を使用しており、第7号住居跡出土縄文土器28～32・37で記述したが、在地的かも知れない。56～61も同一段階の土器と思われる。62は地文に縄文が施されており、第7号住居跡出土縄文土器73～75と同じ事が言えよう。



第52図　第８号住居跡出土縄文土器(1)



第53図　第8号住居跡出土縄文土器(2)

２類　北陸系の土器（第54図63～65、図版19）

63～65は串田新式類似の土器であろうと思われる。64は幅広の半截竹管を利用した施文と思われる。また、63・65は同一個体で口縁部が朝顔状に広がる器形であり、この系統に入ると考えた。

３類　東海系の土器（第54図66・67、図版19）

67は頸部で外反しながら口縁部で強く内湾するキャリパー状の深鉢で、口縁は少し波状となっている。口縁に沿って２条の沈線を巡らし、その外側にやはり２条の沈線が右巻き、左巻きの渦を形成しながら弧状に巡らせている。口径は約21cmである。胎土に白い砂粒を多く含み、他に雲母や石英も見られる。橙色を呈している。66も同じキャリパー状をした土器であるが、文様は隆帯で施されている。胎土などは同じである。いわゆる咲畑式に類似する土器で、高山市垣内遺跡、古川町中野山越遺跡、岡前遺跡等に出土例が見られる。

４類　在地的な土器（第54図68～75、図版19）

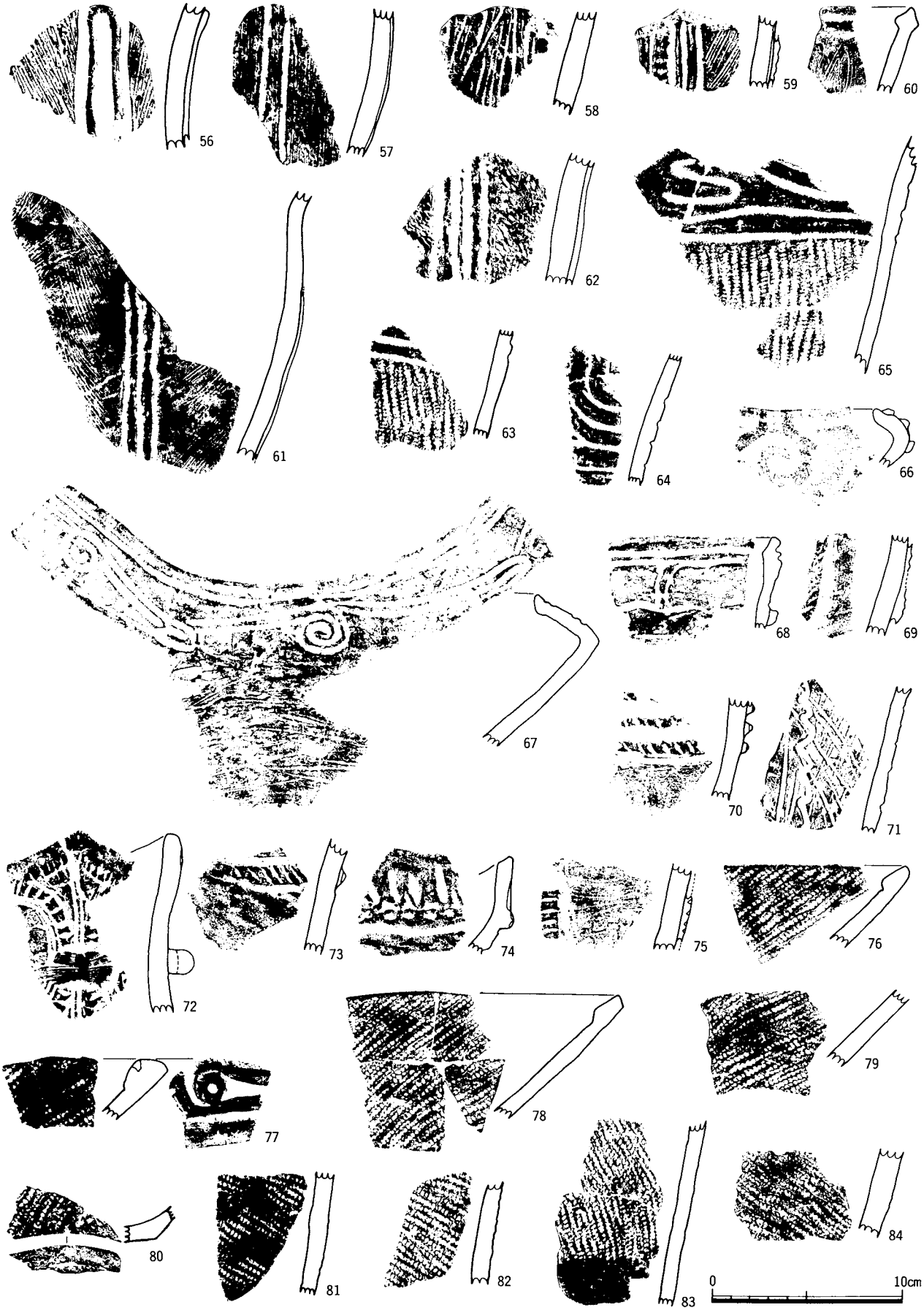
68はリボン状突帯を有している。69・70・73・75は隆帯にきざみが施されている。71は不規則な沈線の上に蛇行懸垂文が施されているが、これは加曽利Ｅ式等の影響と思われる。72は波状口縁に薄い隆帯を巡らしその上に沈線できざみを入れている。波頂部の下には半截竹管による沈線が垂下し、それを挟むかのようにキザミ入りの隆帯が弧状に下がる。この沈線と、隆帯の上に三角の橋状把手が付けられている。74も波状口縁の土器で、口縁部に縦の沈線を施し、その下に刺突のある隆帯を巡らせている。何れも粗製土器で在地的な土器であると思われる。

５類　縄文が主体の土器（第54図76～84、第55図85～97、図版19）

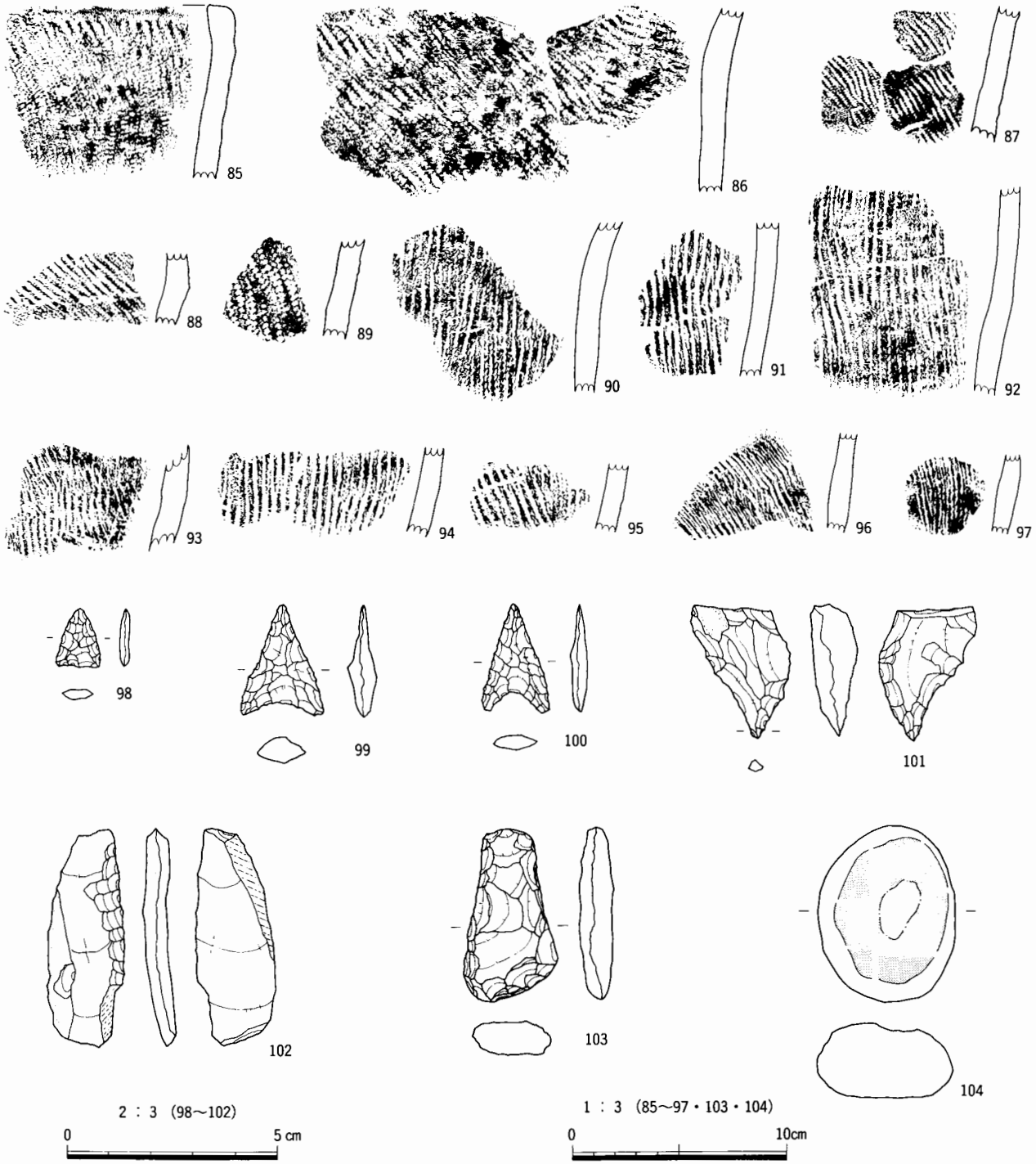
76～80は同一個体である。表面はLRの縄文一色であるが、口縁内部の有段部に玉抱き三叉文が施された精製の浅鉢である。焼成は大変良く胎土に白い砂粒や雲母を含むが、内外面とも研磨されたように滑らかである。５類に入れるべき土器ではないと思うが、不明のためここに配した。時期は中期後葉であろう。81～89はRLの縄文が施された土器である。90～97は撚糸文の土器である。ただし、97は少し欠けているが、土製円版である。伴出した土器から考えて中期後葉の土器であろう。

石器（第55図98～104、図版21）

第８号住居跡出土の石器は、石鏃７点（98～100）、石錐１点（101）、両極剥離痕のある石器１点、削器１点（102）、二次加工のある剥片１点、打製石斧４点（103）、磨石類４点（104）、フレイク56点（チャート28点、下呂石19点、黒曜石７点、凝灰岩２点）である。



第54図　第8号住居跡出土縄文土器(3)



第55図　第８号住居跡出土縄文土器(4)・石器

第9号住居跡出土縄文土器・石器（第56～58図、図版19～21）

第9号住居跡は中期前葉の住居で土器の出土量は北陸系が多い。4類に分けて記述する。

1類　北陸系の土器

2類　信州系の土器

3類　関東系の土器

4類　関西系の土器

1類　北陸系の土器（第56・57図、図版19・20）

1は頸部で半截竹管による（以下半截竹管文と言う）3条の隆帯で分割され口縁部と胴部の文様が異なる。キャリパー状で、胴部は樽状に張る器形である。口縁隆帯にはC字の爪形文が連続に施されている。その下に半截竹管による2条の隆帯が巡るが、頸部とつなぐ縦の隆帯（途中右に変化）により分断されている。隆帯は4単位と思われるが正確にはわからない。隆帯の1つは口縁の上に突起しており、口縁部文様帯の中央で左渦巻きとなり止まる。口縁部文様帯は半隆起線のB字状文により区画され、内部は地文にLRの縄文と縦沈線で充填している。胴部はLRの縄文一色で満たされているが、一部コケラ状になっている。胎土に白い砂粒を多く含み雲母もわずかにみられる。にぶい黄橙色を呈しているが黒色の部分も見られる。1～3は同一個体である。

4～8・11は1と同じ器形の土器の口縁部文様帯である。9・10・12～14は同じく頸部から下の部分である。15・16も胴部縄文の一部であろう。新崎I式に比定される土器であろう。17は底部で木の葉痕が見られる。一部崩れていてはっきりしないが同時期のものでないかと考えた。

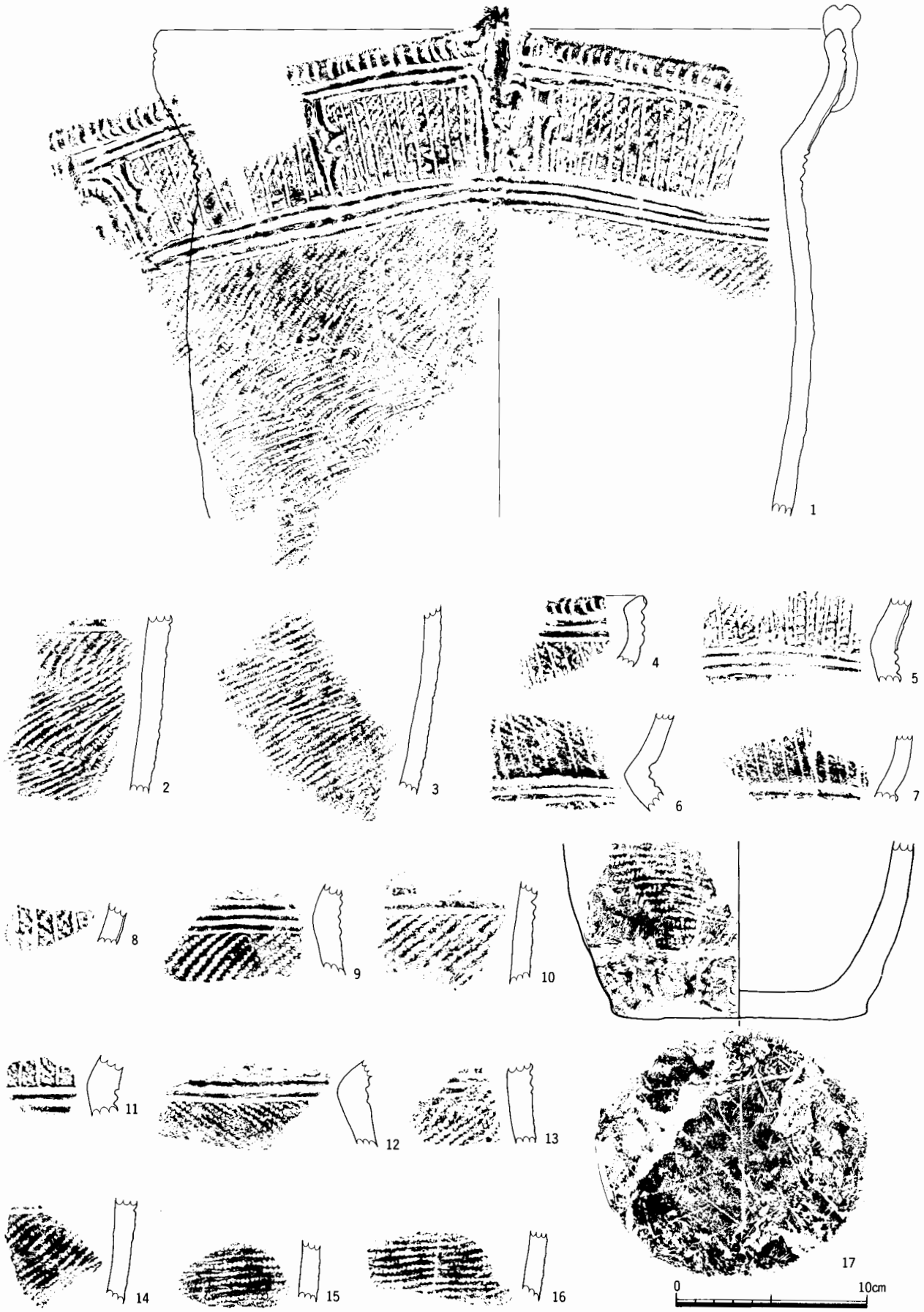
18～39は新崎II式に比定される土器である。18は住居跡の床面に密接して出土した。胴部はやや樽状に張るが口縁に向かって外反しながらゆるやかに立ち上がる。口縁にはC字状の爪形文が連続して施文されていて、1か所突起が見られる。口縁部の下は半截竹管文が6条横位に平行して施文されている。更に、2cm程の無文帯をおいて4条の半截竹管文が横走している。無文帯には「し」の字状の突起が5単位で施され竹管文と竹管文を連結させている。5単位の突起の両横には縦位2条の半截竹管文が垂下し、胴部中程で消滅している。胴部は半截竹管文以外はすべてLRの縄文が施されている。胎土に白い砂粒を含み灰褐色を呈している。この土器は、本住居跡の指標となると思われる。

19・20は同一個体でキャリパー状の土器である。口縁には「C」字状の爪形文が施され、半截竹管文や格子目文が見られる。尚、口唇部には鋸歯状の細い沈線が描かれている。

21・23には蓮華文が施されている。22は頸部と思われる部分の下に「し」字状の突起が見られ、24・25・27・35・37・38にも半截竹管文によるB字状文と思える文様や格子目文が見られ、30～32は半截竹管文の上に爪形文が施されている。33は半截竹管文の間に縄文が施されている。39は底部ときれいにはがれた土器片である。

40・41は半截竹管文の間に細かな刻みが見られる。この2個の土器は新崎III式段階のものと考えられる。これらに類似する土器は河合村下田遺跡、国府町宮ノ下遺跡、小坂町南垣内遺跡、門坂シズマ遺跡、高山市向畑遺跡他で出土している。

42・43は半截竹管文とコンパス文と思える施文が見られ、ここに配した。しかし、疑問の残る土器である。したがって、新崎式というより中期中葉の土器としておきたい。



第56図　第９号住居跡出土縄文土器(1)

45は半截竹管文による渦巻き文が施されており、口唇部には玉抱き三叉文と思える施文が見える。新崎III式～上山田式段階の浅鉢であろう。

48～52は半截竹管による施文がダイナミックで上山田II式併行の土器と考えられる。また、46･47･53も同時期のものと考える。この上山田・天神山式に類似する土器は高山市ツルネ遺跡、清見村門端遺跡、河合村下田遺跡、古川町中野山越遺跡等にも出土している。

2類　信州系の土器（第58図54～58、図版20）

54は隆帯の横に半截竹管による押し引き文（角押文）が施文されている。更に、楕円区画文の中央に、2条の波状角押文が横切る。55も同様の文様で縦列や横位に施文されている。焼成良く、胎土に雲母を少し含み褐色を呈している。56は「M」字状の施文に爪形文も見られる。この3個の土器は貉沢式段階に併行すると考えられる。

57は中期中葉の土器と思われ、58はモチーフから見て勝坂くずれの土器であろうとすれば、次の3類に入れるべきかもしれない。

3類　関東系の土器（第58図59～65、図版20）

59は口縁に爪形文が見られ、これに接して半截竹管文が施され、60も同様の施文にクサビ状陰刻文が見られる。61もクサビ状陰刻文が施されている。これらは五領ヶ台式に比定される土器であろう。または、北裏5群3類類似とも思えるが、次の62～65の縄文にクサリ状圧痕が施された土器の関連から考えて、五領ヶ台式系統の土器と考えられよう。これに類例する土器は小坂町味屋遺跡、国府町宮ノ下遺跡で出土している。

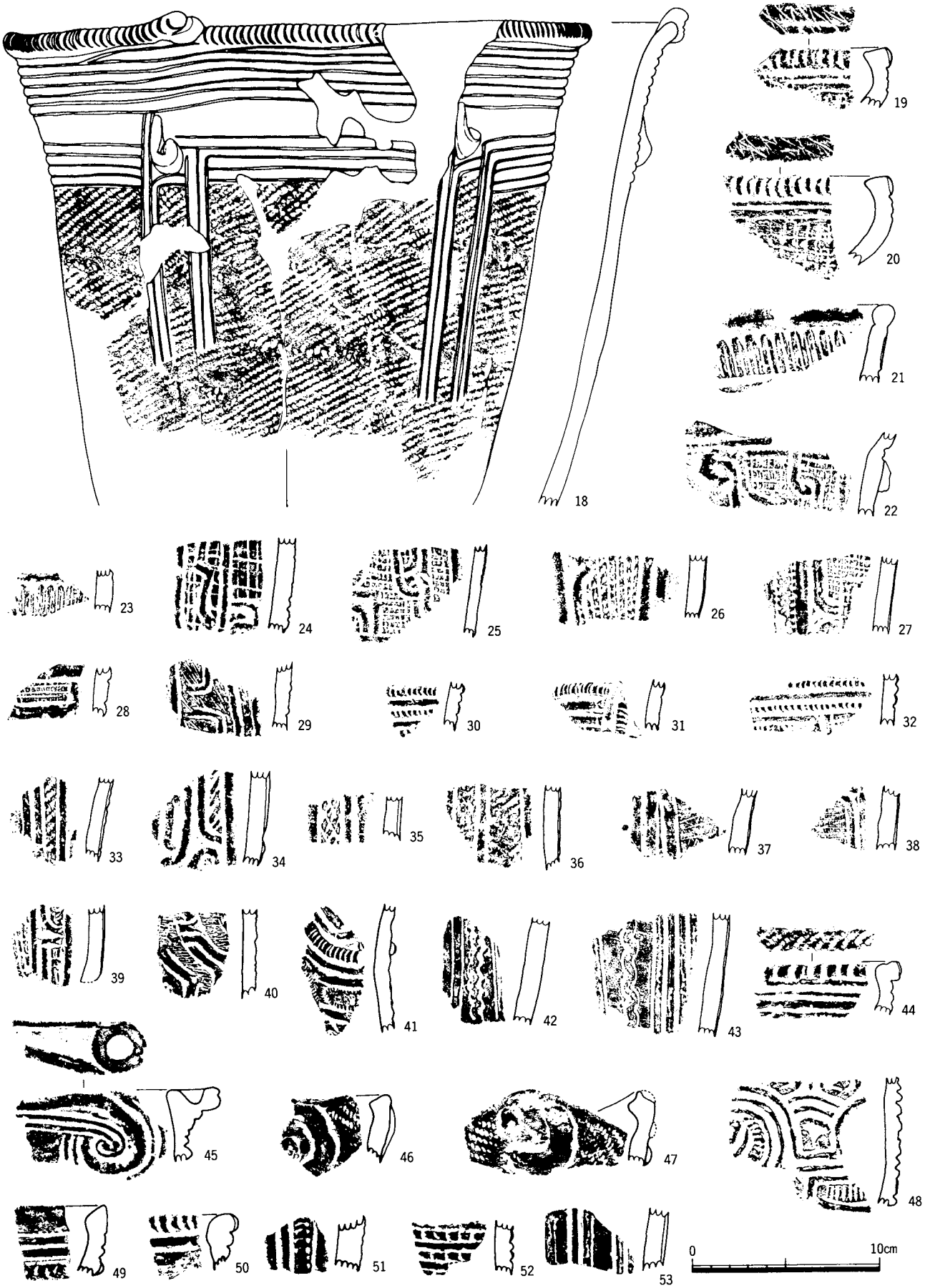
4類　関西系の土器（第58図66～69、図版20）

66～69は口縁部に爪形文、口縁内部に縄文が施されている。厚さは口縁部を除けば5～6㎜である。船元I式の土器であろうと考えられる。しかし、鷹島式や東海の北裏CI式とも類似しておりはっきりしたことは言えない。

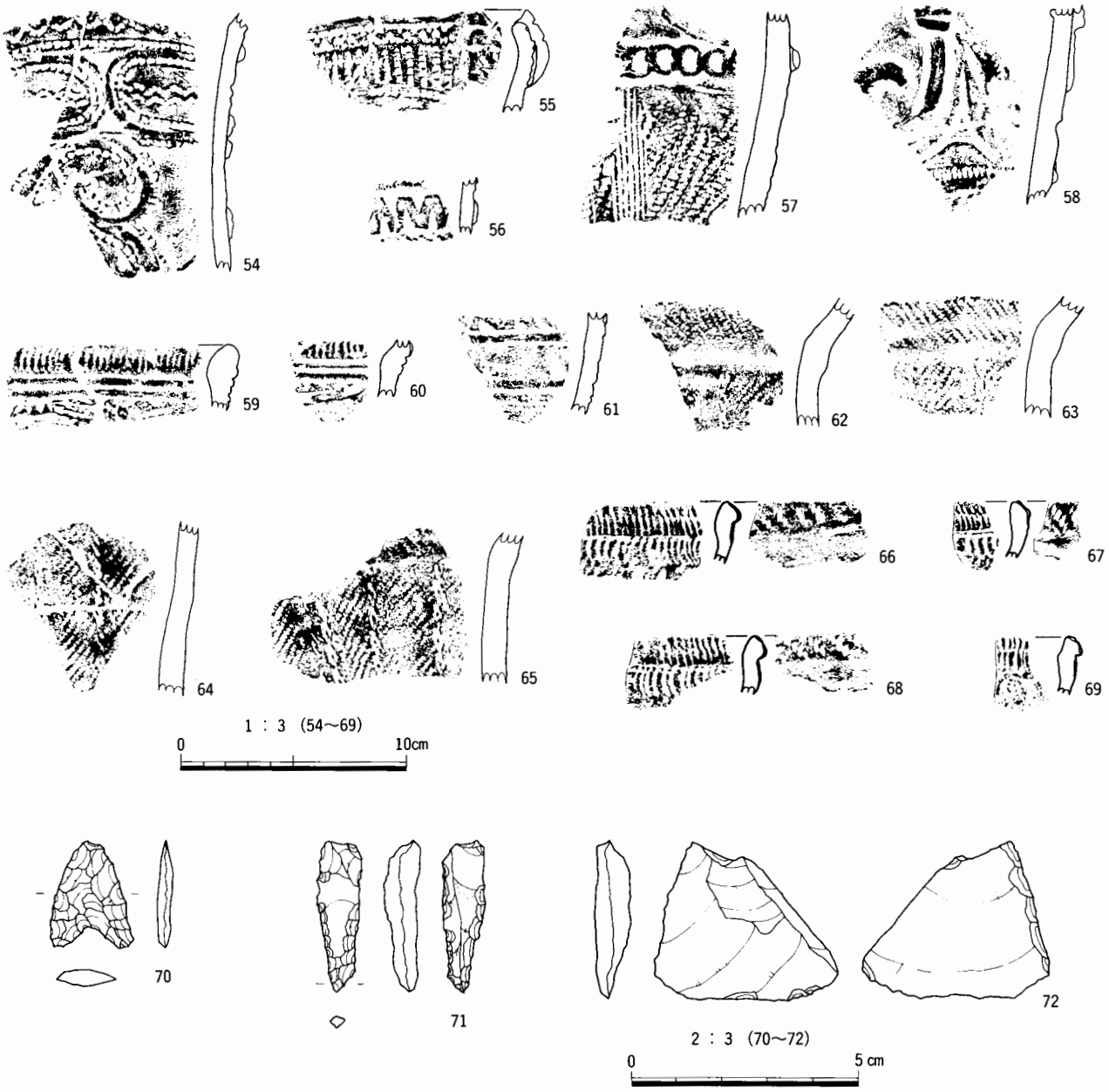
尚、この住居跡の土器は、第2号住居跡により撹乱されており時期的に一致しない土器が含まれている。

石器（第58図70～72、図版21）

第9号住居跡出土の石器は、石鏃3点（70）、石錐1点（71）、削器1点（72）、二次加工のある剥片1点、磨石類2点、フレイク4点（チャート2点、下呂石2点）である。



第57図　第９号住居跡出土縄文土器(2)



第58図　第9号住居跡出土縄文土器(3)・石器

第10号住居跡出土縄文土器・石器（第59図、図版20）

1は第10号住居跡の埋甕である。底部より緩やかに立ち上がり、頸部より朝顔状に外反し口縁波頂部では角度をもって内湾する。波状は4単位であるが、正面の1つは大きく中央に楕円形の窓を有し、その周りを幅広の沈線と隆帯が取り巻いている。隆帯には一部RLの縄文が施されている。また、口縁部内外とも同じく幅広の沈線を巡らせているが、外側波頂部では立ち上がり左巻きの渦となる。内部の沈線は波頂部で隆帯によって分断されている。頸部も同じ沈線で複雑な文様が描かれている。さらに、頸部文様帯の下胸部には2本の沈線が巡り、文様帯を上下に2分している。下部はすべてRLの縄文が施されている。しかし、施された縄文の上に胸部より2本の沈線を垂下させ4分割している。底部は網代痕が一部みられるが、破損していてはっきりしない。胎土に砂粒をわずかに含み、色調は

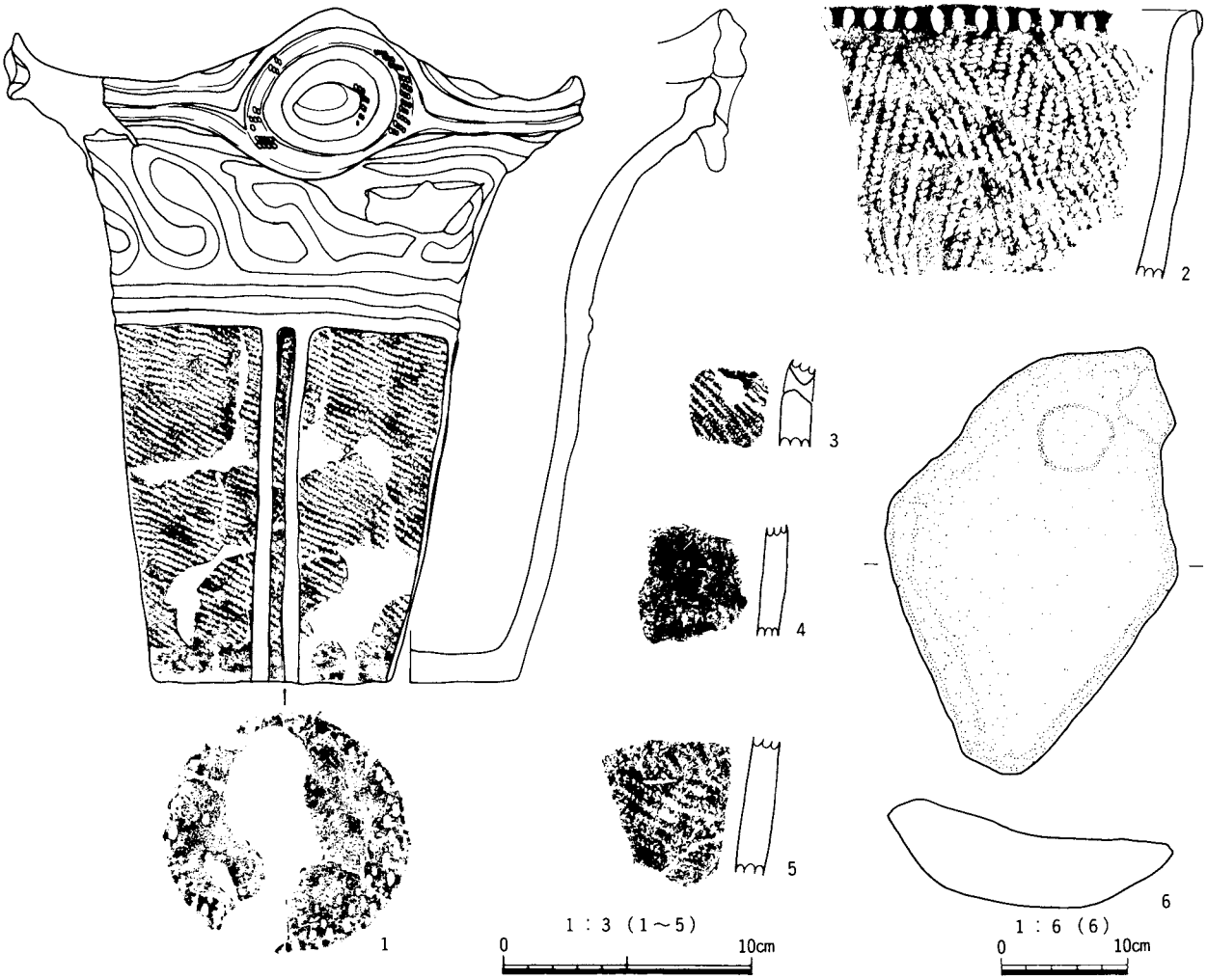
上部黒褐色、下部暗赤褐色を呈している。串田新Ⅰ式に比定されよう。

２は口縁に棒状工具によるキザミを入れ、他は全面 LR の縄文が一部重複して施文されている。にぶい黄橙色を呈している。３・５は RL の縄文が見られるが、３は補修孔と思われる穴がある土器片である。４は無文土器である。何れも中期後葉であろう。

なお埋甕内の土壌の一部をズコーシャに送り脂肪酸分析をしていただいた。これについては別記する。

石器の出土はわずかであった。石皿１点（６）、チャートのフレイク１点のみである。

（野村　宗作）



第59図　第10号住居跡出土縄文土器・石器

第3節　包含層出土の縄文土器

Ⅰ群　縄文早期～前期初頭の土器

1．分類と概要

1類　ネガティブ系の押型文土器群

1ａ類　ネガティブな楕円文を持ち、口唇に縄文を施文する土器。2点出土。

1ｂ類　いわゆる市松文を持つ土器。1点出土。

1ｃ類　いわゆる舟形沈文を持つ土器。Ｂ地点、Ｃ地点から出土。数点のみである。

1ｄ類　その他のネガティブ系押型文土器に併行する土器。Ｐ14など数か所で出土。

2類　帯状施文の押型文土器群

2ａ類　黒鉛を含有する土器群。本遺跡例からは文様の構成は明確ではないが、異方向帯状構成になると思われる。主にＢ地点から出土した他、Ｃ地点から1点出土した。

2ｂ類　異方向の帯状構成の土器群の内、黒鉛が認められないもの。口縁から底部まで判明した土器はないが、器形や文様構成が推定可能な土器がまとまっている。Ｂ地点から出土した。

2ｃ類　横位に広い無文帯を残して施文された土器。2ｂ類よりは少ない。Ｂ地点から出土した。

3類　非重複施文の押型文土器群

3ａ類　山形文や、山形と楕円の複合文を非重複施文した土器が9割以上を占めるＣ地点出土の土器群を本類として一括した。楕円文や連珠文もわずかに含まれる。

3ｂ類　連続的な楕円文や幅の広い山形文を横位に非重複施文した土器。連珠文や楕円文は3単位が主となる。Ｂ地点から出土した。

3ｃ類　薄手硬質な非重複全面施文の土器。楕円文が9割近い組成を示す。Ｂ地点から出土した。

3ｄ類　厚手硬質な非重複施文と重複施文が共存する土器群。砂粒の混入が顕著でザラザラした器質を特徴とする。重複施文への移行期の土器と考えられる。Ｂ地点から出土した。

4類　重複施文の押型文土器群

4ａ類　厚手で繊維を含有する重複全面施文の土器群。Ｂ地点から出土した他、Ｃ地点からも1点出土した。破片数は少ない。

4ｂ類　粗大楕円を施文する厚手の土器群。Ｂ地点から出土した。破片数は少ない。

4ｃ類　大きい山形文を施文する土器。Ｃ地点から出土した。2点を確認したのみである。

5類　沈線文系土器群

5ａ類　太沈線で施文する土器。Ｂ地点から3点（1個体）が出土した。

5ｂ類　細沈線によるクランク状文、波状文や貝殻腹縁刺突文などを特徴とする土器。Ｂ地点出土。

5ｃ類　その他所属の明確にならない沈線文系土器。

6類　無文土器群

胴部に一切の文様を持たない土器で、押型文期に併行すると思われる。Ｂ地点より出土。

7類　撚糸文土器群

押型文土器に併行する撚糸文土器。２群に大別される。主にＢ地点出土。

８類　縄文土器群

胎土に繊維を含む縄文施文の土器を一括した。Ｂ地点からわずかに出土している。押型文期に併行するものから前期初頭の一群まで存在する。

９類　絡状体圧痕文土器群

条痕文系の前・後半併行に大別される。Ｂ、Ｃ地点から出土している。

10類　条痕文系土器群

鵜ケ島台式併行から茅山下層式併行まで数点がＢ地点から出土した。

11類　早期末から前期初頭に属する土器群

早期末から前期初頭にかけての土器を一括した。ただし縄文施文土器は８類に一括した。

遺物は数か所の集中区があり、集中区毎に様相がわずかに異なるため、以下、各地点毎に土器の主な特徴を記述する。尚、押型文土器については以下の凡例により土器観察表に特徴を記した。

①　押型文土器の文様種の概略（第60図）

Ｎ１：ネガティブな楕円文が広い間隔で並ぶ。凹部はＵ字状に平滑な窪みである。

Ｎ２：ネガティブな楕円文が交互に並ぶいわゆる市松文。

Ｎ３：ネガティブな細長楕円文（いわゆる舟形沈文）が交互に並ぶ。

Ｎ４：ネガティブな細長楕円文（Ｎ３より長い）が１条で構成される。

Ｋ１：長方形を基本とする格子目文。糠塚遺跡のスダレ状押型文ａに酷似する。

Ｋ２：側辺のみが傾斜する格子目文。

Ｋ３：斜格子で凸部が直線的になる。

Ｋ４：斜格子で凸部が非直線的である。凹部がネガティブ楕円文に類似する。

Ｋ５：平行四辺形を基本とする格子目で、短辺側が非直線的である。

Ｙ１：凸部がミミズ腫れ状の平行線状文。一部で緩やかな山形状となる。

Ｙ２：Ｙ１に類似した凸部。山形は顕著となる。一部で山形の波長がずれて菱目文となる。

Ｙ３：凸部の細い山形文。

Ｙ４：凸部が比較的広い山形文。

Ｙ５：なだらかで直線的な山形文。

Ｙ６：Ｙ５に類似したなだらかな山形文で、不規則な山形となる。

Ｙ７：直線的な山形文。Ｙ３などの山形文と併用されており別種として位置付く。

Ｙ８：鋭角的な山形文。

Ｙ９：鋭角的な山形文で山形が大きい。

Ｙ10：波長・振幅とも大きい山形文。

Ｙ11：波長の長い山形文。緩い波状文となる。

Ｙ12：１単位の山形文が非連続的で１画毎に途切れる。

Ｙ13：極めて小振りな山形文。

Ｙ14：山形の波長をずらす事により作られた菱目文。

Y15：山形文で端部の一部が重層山形文となる。

Y16：いわゆる複合鋸歯文。中央にＹ７的な平行線状文を持つ。

Y17：大振りな複合鋸歯文。全体の構成は不明。

Y18：平行線状文は伴わない複合鋸歯文。

Ａ１：綾杉文。出土したのは細片１点のみであり、別の文様になる可能性もある。

Ｓ１：柵状文。角状の工具を回転した可能性もある。

Ｈ１：山形文の間に楕円文を持つ複合文。

Ｈ２：山形文の１端に楕円文を持つ複合文。

Ｄ１：楕円文。縦、横の配列が雑然としている。

Ｄ２：いわゆる刻粒状の楕円文。２単位が主体。

Ｄ３：菱形状の円形を呈する楕円文。２単位が主体。

Ｄ４：細長い刻粒状を呈する楕円文。

Ｄ５：Ｄ４の形態を持つ極めて小粒な楕円文。

Ｄ６：凹部が格子目状に整然と並ぶ楕円文。凸部は菱形状となる。

Ｄ７：円形に近いやや大きめの楕円文。

Ｄ８：粗大楕円文。個々の形態は円形に近いものが多い。

Ｄ９：楕円文が右方向に近接する。Ｔ２と極めて類似した楕円文である。

D10：１条の楕円文で基軸が傾斜している。連珠文的に近接している。

Ｔ１：凹部が３単位の鋸歯文となる。凸部は幅広の山形文状を呈する。

Ｔ２：幅広の山形文状を呈する特殊文。重複により作られた楕円文がみられる。

Ｔ３：凹部がＴ１に類似。凸部が縦長の楕円文状を呈する。

Ｔ４：Ｔ３に類似するが１条と思われ、凸部には文様は生成されていない。

Ｔ５：凹部がＴ１に類似。凸部は基軸の傾斜した縦長楕円文状を呈する。

Ｒ１：連珠文。３単位であるが単位が分離せず、雑然とした瘤が連続した形である。

Ｒ２：連珠文。独立した楕円文となる所や、山形文となる所などが共存している。

Ｒ３：連珠文。単位が分離しているが単位をつなぐ凸部が広く長い。

Ｒ４：連珠文。楕円文が横位に密接につながっている。

Ｒ５：連珠文。３単位の円形楕円文が連珠文的に横方向に並ぶ。

Ｒ６：連珠文。刻粒状の楕円文が連珠文的に並ぶ。

② 出土区・層位の記載は土器の注記記号によるもので、必ずしも土層図とは対応しない。

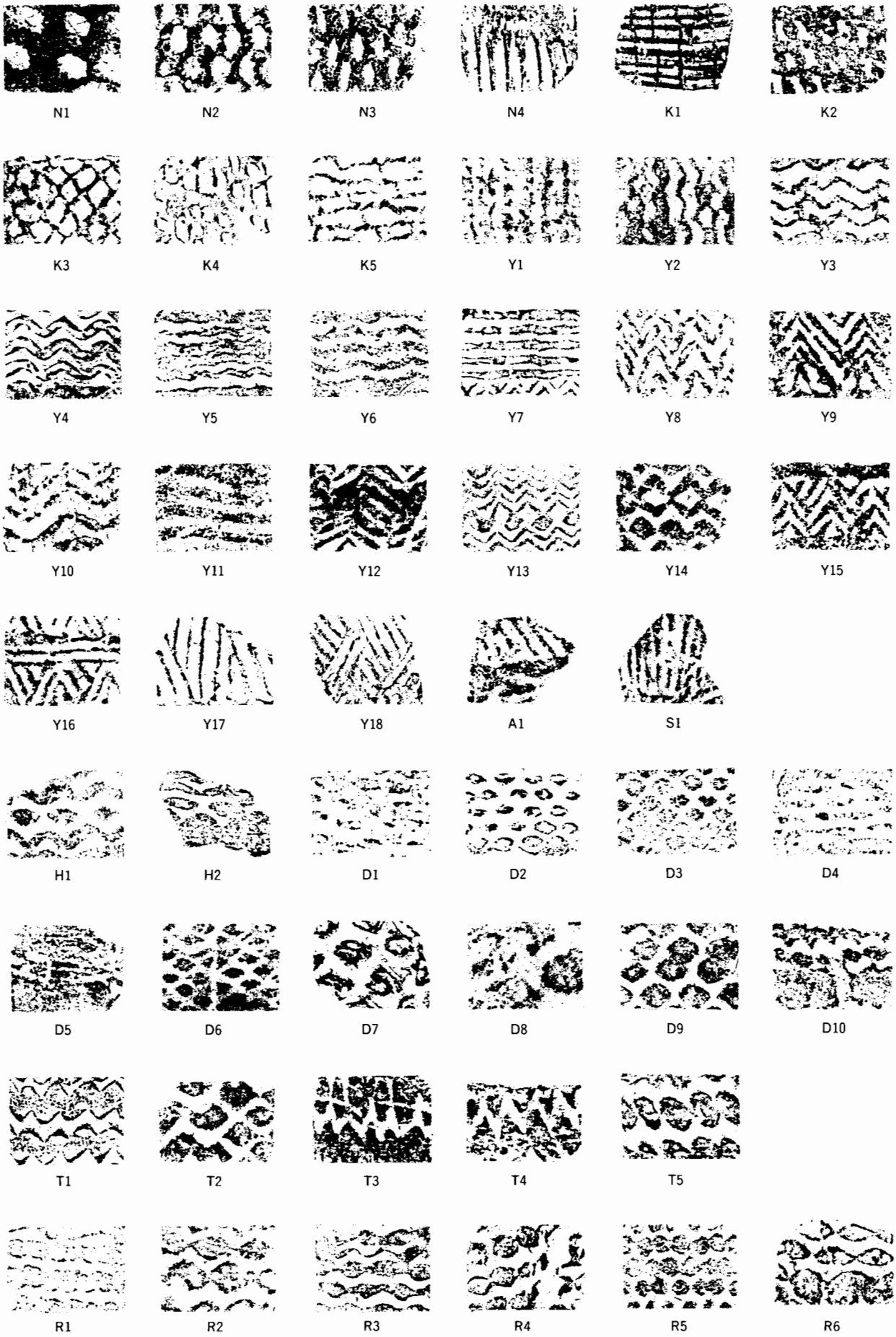
③ 器厚は平均的な部分を、㎜単位で計測した。

④ 原体の「ａ長」は１単位の回転方法の長さ、「ｂ長」はａに直交する長さを計測した。

④ 原体形状は明確な原体に限って計測した。

⑤ 端は「Ａ」は削ぎ落としがあり圧痕が波形か山形になる。「Ｂ」は削ぎ落としがなく直線的。

⑥ 文様構成は重なりが明確なものは「重複施文」、狭い無文帯を残すか重なりがほとんどないものは「非重複施文」、原体長以上の無文帯を残すと思われるものは「帯状施文」とした。不明確なものは回転方向のみを示した。


N1
N2
N3
N4
K1
K2
K3
K4
K5
Y1
Y2
Y3
Y4
Y5
Y6
Y7
Y8
Y9
Y10
Y11
Y12
Y13
Y14
Y15
Y16
Y17
Y18
A1
S1
H1
H2
D1
D2
D3
D4
D5
D6
D7
D8
D9
D10
T1
T2
T3
T4
T5
R1
R2
R3
R4
R5
R6

第60図　押型文文様種

2．P14出土の土器（第61図1～5、図版22）

1は3a類。大半がピットから出土し、口縁部の一部が包含層から出土した。胴下半部を欠く。口縁部は緩く外反し胴部にわずかの膨らみを持つ。口唇はそれほど強くない面取りを施している。原体は不揃いな連珠文である。2は1d類、3は3類に属するが、1を除いては細片で一括性は乏しい。

3．A地点出土の土器

11類（第61図6～9）

6～8は連続した刺突で凹線状の波状文や直線を描いており、塩屋中層B式に比定される。6は口縁に沿って3条が描かれている。3条目は緩い波状となっている。7には3条の刺突列がみられるが、3条目は浅い。8は口縁部で、4条みられる。2条目は細かい波状文を描いている。

9は櫛状工具により波状文を描いており、塩屋中層C式に比定される。繊維を含んでいる。

4．B地点出土の土器

1a類（第61図10、図版23）

10は押型文集中区からは離れて出土した。文様種N1類は刺突文にも類似するが反復が確認されることから押型文と判断した。また、口唇部と頸部以下に縄文が施文されている。

1b類（第61図11、図版23）

11はN2類の市松文である。やはり押型文集中区からはやや離れて出土した。

1c類（第61図12～14、図版23）

12～14はN3類の楕円文を施文したものである。12は外反する頸部で縦位に施文されている。焼成が不良で他2点と異なる。13は摩耗が激しい。14は楕円文が市松文状に密に並んでいる。

1d類（第61図15～19、図版23）

15、16は正格子目文で、3類にみられる格子目とは別類とした。16は2と同一個体と思われる。17は斜格子気味であるが、糠塚遺跡、峰一合遺跡の出土例から本類に含めた。

17は斜位にネガティブな楕円文に類似した凹部がみられる。口縁端部は角頭状を呈する。

18はN4類の楕円文であるが1条単位でポジティブな柵状文に類似している。

19は口唇を斜位に刻んでいる。山形文が横位に施文されている。胎土より本類に含めた。

2a類（第61図20～26、図版23）

20は無文の口縁部である。端部で短く外反する。細片のため、文様の有無が断定できない。21は口縁部付近の破片で内外に横位施文がみられる。23～26は胴部から底部にかけての破片である。いずれも山形文を縦位に施文している。本類は図示したものを含めて70片の破片が出土しているが何れも摩耗が激しい。また、20や21は黄色化しており、表面では黒鉛の含有は確認できにくい。

第61図　P14・包含層出土縄文土器Ⅰ群（Ａ地点：11類、Ｂ地点：１類～２ｂ類）

第62図　包含層出土縄文土器Ⅰ群（B地点：2b類）

２ｂ類（第61図27～31、第62図、図版22～24）

27～41は帯状施文土器の内、口縁内面に施文も持つ土器である。27～30は口縁に沿って１条施文され、以下縦位に施文されたのもである。横帯と縦帯は重複することなく施文されている。何れも外反する口縁で屈曲部の器厚がやや薄くなる。31は同様の施文と思われるが、山形文が緩く他と異なる。また、砂粒の混入が多くザラザラした感じを呈する。同一個体の可能性もある31-3、31-4には直交施文がみられる。32～33は口縁部と胴上部に横帯２条が施されたものである。32～34は縦帯と直交している。32の縦帯は長さが異なり底部付近でも重複することはない。35は縦帯がみられないが、間隔が広いか横帯２条目以下から縦帯が始まる可能性がある。36～41は口縁部破片で41は波状口縁部である。

42～46は内面に施文を持たない。42は凸部の細い山形文を口唇と外面に施文している。外面は縦位に施文した後、口縁端部に沿って横位施文しており一部重複している。43は口縁部と頸部に横位施文し、頸部より下に縦位施文している。内面は丁寧に調整されてるが、指頭の凸凹も残る。44は振幅の小さな山形文である。43同様、縦位施文は２段目よりみられる。45は横位施文は１条で縦位施文の後に施されている。46は波状口縁を呈する。口唇部に山形文を施文し、口縁直下には無文帯が残っている。縦横直交する破片もみられるが正確な部位は不明である。

47～53は本類の胴部で広い無文帯を残す縦位帯状施文がみられる。

54～56は文様種Ｙ５で、口縁端部より縦位に施文している。残存部では横位施文は存在しない。

２ｃ類（第63図57～61、図版24）

57は残存する破片が比較的多い。口縁から３段が帯状にされ、胴下半部でも広い無文帯が確認されるため、「横位帯状施文」に属すると判断される。58は57と同一原体であり、胎土も類似しているため、同一個体である可能性も否定できないが、やや端部が57より薄く整形され色調も異なる。59は堅緻な土器であり、わずかに繊維の混入がみられる。原体端部の一方が山形と反対に削ぎ落としてあるため、器面凹部が菱形状の連珠文になっている。60～63は小片で３ｃ類の可能性もある。

３ｂ類（第63図64～94、図版22～24）

64～80は器面凸部の形状は異なるが、凹部は類似しており、類似した原体による施文と思われる。両端を互い違いに三角形に削ぎ落とした形を基本とした原体を回転させたものと考えられ、上下の回転のズレや原体凸部のズレにより山形文状の凸部と楕円文状の凸部が表出される。比較的堅緻な土器で、器厚は６㎜前後である。口縁端部はそれほど強い面取りは施さず、輪積みの痕が特に口縁部破片にみられる。64～75は凸部は山形文となっている。67は凸部が縦長の楕円文に近い。また、68は胎土や凹部の形状から67と同一個体の可能性もあるが、凸部の形は山形文に近くその間隔も異なる。74は凹部の振幅が大きく鋸歯文的である。76-1、76-2は器面凹部の形状や胎土などから同一個体と考えられるが、凸部は連珠文的な部分と山形文的な部分が共存しており、１条構成の原体である。79は器面凸部に細長い楕円文を描く。80は器面凸部は傾斜する楕円文となっているが、１条構成の原体の回転によって表出された形である可能性が高い。凸部５段目は山形文となっている。

81、82は凸部の山形文は77に類似しているが、凹部の形状が異なり、原体凸部は細い山形文を呈している。81には右上がりに連続の楕円文がみられるが、重複施文によって生まれたものである。

第63図　包含層出土縄文土器Ⅰ群（B地点：２ｃ類～３ｂ類）

83～93は楕円文を連続的に彫刻した連珠文である。86は緩く外反しながら立ち上がる。端部は面取りされているが丁寧な整形ではない。２単位２条の不揃いな連珠文である。横位非重複施文を基本としており、広い無文帯を残す部分と、重複する部分が共存している。87は原体端部を長く削ぎ落としている。楕円文は小粒な円形である。88～92は比較的形の整った楕円文を連続させたものである。横位施文するものと、斜位に施文するものがみられる。93は縦長の楕円文を連続させており80と類似している。94は右上がりに連続した楕円文を彫刻しており、その形状は81の楕円文と酷似している。

３ｃ類（第64図95～123、図版22・25）

96～105は楕円文を施文したものである。95～100は楕円文を横位に施文したもので、狭い無文帯を残すものが多い。104は接点はないが、口縁端部から縦位に施文し胴下半部から横位に施文したものと推定される。極めて小粒な楕円文（102）とやや大粒な楕円文（103）もある。105は楕円文を施文した口縁端部に沿って環状の刺突（非回転）がみられる。押型文施文原体とは別原体である。

106～112は主に山形文を施文したものである。106は縦位と斜位の施文がみられる。内外の調整などやや粗い。107は横位山形文の下位に楕円文を縦位に施文したものと推定される。108･109は波長の長い山形文で108の軸は右に傾斜する特異な例である。111は破片が多く器形が復元できた。口縁で外反し端部を角頭状に整形する。山形文を横位に重複しない施文を特徴とし、頸部には広い無文帯を残している。頸部無文帯の中央には押型文施文原体と思われる棒（端部を楔状に刻んだ棒）で回転刺突している。また、胴下半部には一帯分の楕円文が横位に施文されている。112は同様の山形文であるが、頸部無文帯には細沈線により山形文が描かれている。沈線はシャープで一部が押型文におよんでいる。

113～116は格子目を施文したものである。113・114はＫ３類。115・116はＫ４類である。

117～121はいわゆる複合鋸歯文である。117・118は山形文を基本としているが一部に異形部分がみられる。119は片岡(1988)Ａ１ａ類に類する異形文であるが、２条の間が平行線文でつながれている。120は大振りな平行線を基本とした文様で、同じくＡ１ａ類に類すると思われる。下部には楕円文が併用されている可能性がある。121は同Ａ１ｂ類に類似した文様であるが、全容は不明である。

122～124は平行線文と併用したものである。122は口縁端部に格子目文を横位施文し、頸部付近に平行線文を施文し、胴部には山形文を横位に施文している。また、この平行線文施文帯に直交して山形文が縦位に施文されている部分がある。西田遺跡ＩＡ－２類Ｃ種（頸部無文帯にのみ縦位施文を充塡うする）に類すると思われる。123は山形文と平行線文の併用である。山形文は117に類似している。124は胴部に平行線文がみられる。また、山形文が部分的に縦位に施文されており、122と類似した施文である。122～124は平行線の原体は同一である。117～124は西田遺跡ＩＡ－２類にはほとんどみられないが、器厚、胎土、施文などから本類に含めた。類例を待って再検討を要する一群であろう。

３ｄ類（第64図125～132、第65図、図版22・25）

125～133は楕円文を横位に施文したものであるが、狭い無文帯を残しているものが多い。125は口径が約26cmでやや大型の深鉢である。口縁は緩く外反し、端部を角頭状に成形している。内面は丁寧になでて調整している。楕円文は横位を基本とし、一部で斜位になる。126は口縁端部が薄くなっている。非重複施文が規則的に施される。131は無文帯が狭くなり重複する部分も多いが、胴下半部に至るまで

第64図　包含層出土縄文土器Ⅰ群（B地点：3ｃ類、3ｄ類）

規則的に施文されている。132は下が上の施文に重複して無文部がない。133は底部付近の破片である。

134～137は山形文を横位に施文したもので無文帯がみられない。胎土から本類に含めた。

138と139は山形文と楕円文を併用したものである。施文が浅く、明確な無文帯はみられない。

140は規則的な非重複施文が施される。頸部より下の胴部破片で、頸部付近の内径が約10cmと小型の深鉢と推定される。141は楕円文を横位に施文した下位に格子目文Ｋ５類を横位に施文している。

142～151は横縦の施文を基本とする。口縁部は横位に１～２条、頸部以下には縦位に施文したものが多い。施文順は頸部以下を先にしているものが多い。143は横位施文と縦位施文の原体が異なる。また、頸部には縦位施文に重複して斜位施文がみられる。鋸歯状文等のモチーフを描く可能性もある。151は山形文による横縦施文で、縦の一部に広い無文部を残し、円形刺突を３列？施している。

152は楕円文を斜位に施文した上に山形文を１帯分重複して施文している。153は152に類似した山形文が楕円文に重複して横位施文されている。楕円文は153と異なる。

154～161は縦位施文を主体とする。156には内面に楕円文を横位に施文する。157は胴中央部は格子目文を、下半部以下は楕円文を縦に重複施文している。158は口縁端部より楕円文を縦位に施文したものである。口縁の外反は緩く、端部は丁寧に面取りされている。160は比較的硬質な土器である。

162は柵状文を口縁は横位、胴部は斜位に施文するが、細片で詳細は不明。脆弱な器質である。

４ａ類（第66図163～188、図版26）

163は直行気味に立ち上がる口縁で外反は緩い。胴下半部から縦位に施文している。

164・165は横位と斜位施文がみられる。165は横位施文に重複して斜位に施文されている。

166～180は特に横位施文のみがみられる。166は楕円文は細かく異質であるが、繊維を含む胎土や外反が緩く、丸頭気味の端部などから本類に含めた。169はＤ６類の楕円文で、深い施文など西田遺跡で特徴的にみられたものである。172は一部に狭い無文部がみられるが他は重複した施文である。180は楕円文の下（もしくは上）に綾杉文の一部と思われる平行線文が併用されている。

181～186は縦位や斜位施文がみられ、大半は方向が一定していない。183が底部付近の破片と思われる他は部位の特定はできない。

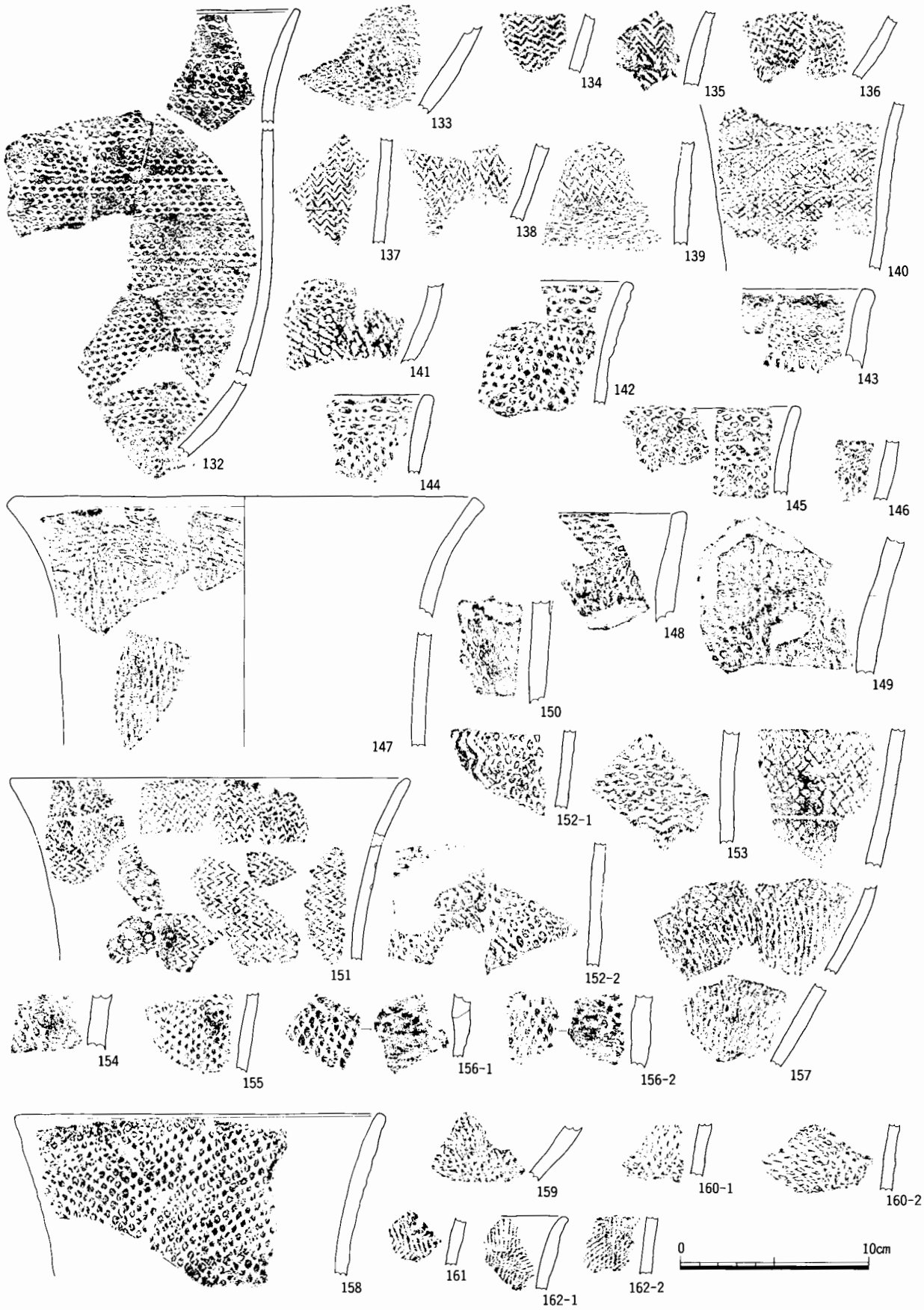
187・188は繊維を含む底部で明確な乳頭状の作りだしを持たない。

189は胎土や施文の特徴などから本類に含めた。緩い波状の山形文である。破片上部ではやや横位に施文され、下部では縦位に施文される傾向がある。

４ｂ類（第66図190～199、図版26）

190～192は円形に近い楕円文を施文したもので、長石を特徴的に含む脆い感じの土器である。190は口縁端部を薄く伸ばすように外反させている。193・194は粗大化した穀粒状の楕円文を斜行気味に施文している。

195～199は粗大な楕円文を施文した土器である。195は器厚が厚く、推定口径が45cmの大型の深鉢である。繊維と長石を特徴的に含む。口唇と内面には刺突列が施されている。楕円文は円形に近く、斜位に施文されている。196は内面に斜行する凹線がみられる。外面は明確ではないが195に類似した楕円文が施文されている。



第65図　包含層出土縄文土器Ⅰ群（B地点：3ｄ類）

第66図　包含層出土縄文土器Ⅰ群（Ｂ地点：４ａ類・４ｂ類）

5 a 類（第67図200、図版26）

200は太い円棒状工具により沈線文を施す。若干の繊維と石英を多量に含むやや硬質な土器である。口縁端部は外削ぎ気味に成形されている。沈線は端部の2本と胴部の1本が横走し、その区画内及び、胴部には右下がりに平行する沈線文が施されている。田戸下層式に併行する。

5 b 類（第67図201～241、図版26）

細い沈線文や貝殻腹縁刺突、押し引き沈線文などで施文する土器群である。繊維はほとんど含まず、白色の砂粒を特徴的に含むものが多い。比較的硬質であり、内面は丁寧にナデ調整を施している。一部に条痕調整の残るものもある。モチーフが明確になる個体はほとんどない。

201～210は直線と波状沈線、貝殻腹縁刺突等で施文する土器で、クランク状のモチーフが特徴となる。201は破片数は多いが、器形復元はできなかった。また、202～204も同一個体の可能性がある。頸部で大きく外反し、内彎しながら立ち上がる器形になるものと推定される。203-3は胴上部の破片と思われるが、口縁部の破片の可能性も否定できない。石英の細礫など砂粒の混入が多く、脆い土器である。繊維は含まない。201-1の内面に浅い条痕状の調整痕が見られるが全体的には平滑である。モチーフは円状棒工具で引かれた沈線と、貝殻腹縁とヘラ状工具による刺突により描かれている。口縁端部には貝殻腹縁刺突が施されている。口縁と胴上部には平行する沈線が施文され口縁文様帯を区画している。区画する沈線間にはヘラ状工具による刺突、波状沈線文が施されている。口縁部文様帯には平行する沈線で2段？のクランク状のモチーフが描かれたものと推定される。この沈線間には貝殻腹縁による刺突が充塡されている他、ヘラ状工具による刺突も併用されている。202～204は胴部破片である。斜行する沈線と沈線間の貝殻刺突がみられる。

205～208は202と同様の施文手法、モチーフを持つ土器と推定される。205は繊維を含まず内面調整等、極めて精緻な土器である。貝殻腹縁による細かい刺突が充塡されている。206は破片下位の沈線間には、小波状文を描くように貝殻刺突を横に連続的に施している。沈線による波状文との関連も注目される。207はわずかに外反する。208は内面を丁寧になでている。わずかに繊維を含んでいる。上端の貝殻刺突はクランク状の区画を越えて横走する沈線に沿って施されている。

209～210は口縁部に平行沈線とその間に波状沈線を施すものである。この下には貝殻腹縁刺突を充塡した平行沈線で山形状のモチーフを描くと推定される。これらの土器の波状沈線文は直線的であり、押し引き風に描いたり、緩く強弱を付けたりするだけである。209は角頭状を呈する口縁端部で、両端に貝殻腹縁による刻みを施している。210と211及び214、215は同一個体の可能性がある。丸頭気味の口縁端部にやはり貝殻腹縁により刻みを施している。口縁文様帯を波状沈線文を持つ平行沈線で区画し、区画内に大きな山形文もしくは入組文的なモチーフを描いたものと推定される。212は極めて硬質な土器である。平行沈線間の波状文はほとんど直線となる。213は繊維を含み内面に細かい条痕調整はみられる。沈線間の波状文は細かく、貝殻腹縁を横位に刺突した圧痕に類似する。

216～221は波状文はみられず、押し引き沈線と沈線でモチーフを描いている。216と217は同一個体の可能性がある。胴部に押し引き沈線文を持つ平行沈線を描いて口縁部文様帯を区画し、区画内に鋸歯状文を描いている。217はその口縁文様帯と思われる。施文は拓影左上から沈線？押し引き沈線→貝殻腹縁刺突→沈線→押し引き沈線→沈線である。218は外反する口縁文様帯と思われる。沈線は全て押

し引きで描かれている。施文具はペン先状の工具と思われる。沈線は一部でコ状に閉じている。また、貝殻腹縁刺突は区画内に垂直に充塡され、端部は羽状に充塡されている。220と221は胎土や施文手法が218に類似している。220は明確な押し引き刺突、刻み、貝殻腹縁刺突により施文する。口唇には押し引き状の沈線を施し、口縁端部両端は細かく刻む。口縁に沿って押し引き沈線を施文し、貝殻腹縁刺突を羽状に充塡させている。この押し引きの手法は明神裏III式と対比される[1]。221の押し引き沈線は強弱が不明確で直線的である。219は器厚が厚く沈線間も広いなど大型の土器になると推測される。沈線は全て押し引きによるが、一部では列点文状となる。貝殻腹縁刺突は中央の沈線間は垂直に、両脇では斜位に充塡されており218の手法と共通している。

222～226は沈線間に数条の押し引き状連続刺突がみられる。工具は櫛歯状工具や貝殻背面が考えられる。繊維をわずかに含み、内面を丁寧に調整している。222は口唇に沈線、外面端部に刻みが施されている。口縁には円棒状工具による沈線が3条横走するが3本目は途切れている。223の沈線は2本であるなど、3本目はモチーフを描いている可能性が高い。224は口縁部文様帯であろう。3本の沈線で入組文状のモチーフを描いているものと推定される。225は内折する。下辺中央に深い刺突を持つ。

227～233は沈線文と貝殻刺突文のほかの施文は判然としない。227は口縁端部に半隆起線状の沈線がみられる。細密な条痕を地文に持ち、沈線で区画された文様帯に大振りな貝殻腹縁による刺突が充塡されている。繊維が少し含まれる。228は口縁端部が面取りされ肥厚気味となる。外面端部と斜行する沈線間に小型の貝殻刺突が深く施されている。229･230は器厚が薄く硬質な土器である。229は曲線的な平行沈線間に貝殻腹縁刺突を充塡し、無文部に円形の刺突を施したものである。230は沈線と貝殻腹縁刺突がみられ沈線の末端に鋭い刺突が施されている。225は粗い器面で繊維をわずかに含む。細くシャープな沈線を横位と斜位に描き、右端の広い無文部に貝殻腹縁刺突文が充塡されている。232は外反する破片の上下に平行沈線が横走し、この区画内に貝殻腹縁による刺突が羽状に施されている。233は左側に4本の集合沈線が斜行し、無文帯に貝殻腹縁刺突が羽状？に施されている。

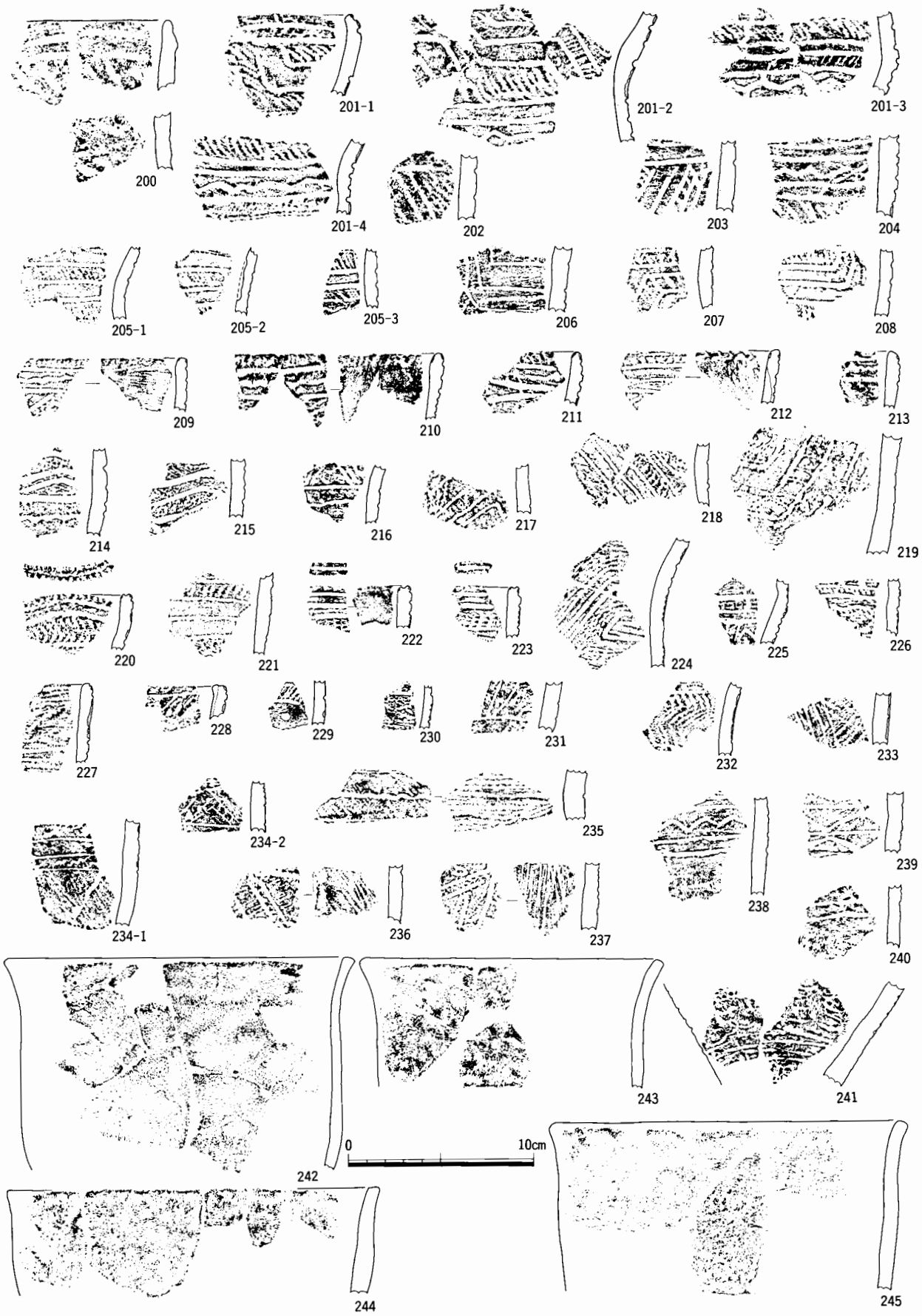
235～240は沈線文のみが確認される胴部破片である。235～237には内外ともに顕著な条痕がみられる。235は平行沈線間に緩い波状文を描いている。緩く外反する。236、237はU字状に先の閉じた平行沈線が斜行している。モチーフや部位は不明である。238は外面には横位の浅い擦痕がみられる。内面は平滑である･モチーフは円棒状工具により描かれている。239は鋸歯文的な波状文が縦に重なる。異質なモチーフである。240は238に類似した胴部破片であろう。

234は比較的繊維が多く、白色の砂粒は含まない。胴部に数条の沈線を横走させ、貝殻腹縁刺突を斜位に施している。口縁分文様帯には鋸歯文が描かれているものと推定される。施文手法やモチーフなど他と共通しているが沈線がやや稚拙な印象を受けることや異質な胎土などは特筆される。

241は底部付近の破片である。繊維をわずかに含むやや厚手の土器である。下位には沈線が乱雑に横走しているが、上部には馬蹄形状の刺突が施されている。所属など不明である。

6類（第67図242～245、第68図246～259、図版22・23・27）

242は口縁が緩く外反し、端部を面取りしている。繊維を含まず、器面調整は内外とも丁寧である。243も緩く外反する口縁で端部を面取りする。砂粒の混入はやや多い。247～250も同種の口縁部破片と考えられる。これらは押型文土器2類等の胎土に類似している。



第67図　包含層出土縄文土器Ⅰ群（B地点：5類・6類）

244～246は砂粒の混入が多く、赤褐色ないし黄褐色を呈する。直行気味に立ち上がり、口縁端部でわずかに外反している。表面は丁寧にナデられているが、内面の調整は粗い。251は同種の胎土であるが、口縁は内彎する。以上の土器は押型文土器３ｄ類の胎土に類似している。253～259は無文の底部である。258を除いては246等の底部破片と思われる。258は243に胎土や色調が類似している。

７類（第68図260～278、図版27）

260～268は器厚の薄い一群で、主に節の細かい撚糸文を施文している。260は口縁直下に無文部を残し斜行気味に施文している。261は深い施文が口縁直下より施されている。263は比較的硬質な土器で、細かい撚糸文が横走する。264は撚糸文が斜行気味に施されている。265は特に器厚が薄い。266～268は指頭による調整痕等で撚糸文は明瞭ではない。

269～277は器厚の厚い一群である。269～274は赤褐色を呈し、長石の細礫を多く含むほか繊維がわずかに認められる。269は角頭状を呈する口縁で、口唇にはヘラ状工具で浅い刻みが施されている。外面には無節の縄による撚糸文が縦に施されている。内面には同一の原体による撚糸文が斜行気味に施されている。270・271は同一個体の頸部破片と思われる。頸部で施文帯が分離しており、外面には頸部以下にも撚糸文が縦走するが、内面は無文となる。272は同一個体の胴下半部の破片と思われる。外面には縦位に交差しながら施文している所もある。以上は胎土や器厚、口唇への施文は195の押型文に酷似しており、４ｂ類に伴うものと推定される。273と274類似した器質で、共に節の明確な撚糸文が用いられている。274は繊維の混入が多い。275も胎土が類似する。３本の沈線状の凹部がみられる。横走する撚糸文の可能性もあり本類に含めた。276は底部付近の破片で、節の大きな撚糸文が横走している。277は撚糸文が交差し、網目状を呈する部分もある。

278は焼成不良な土器である。口縁端部を強くなでて外反させている。外面は縄文の可能性もある。

８類（第68図279～289、図版27）

279は硬質な土器で、表裏に縄文を施文する。内面は部分的にしか縄文がなく、内面の施文方法は特定できない。口縁端部に円棒状工具による押圧痕とハ字状の繊維痕が交差してみられる。280は角頭状を呈する口唇に太い刻みが施されている。281は緩く外反する器形で口唇部に刻みが施されている。283は繊維を多量に含む。回転方向を変えた羽状構成をとる所もある。285、286は厚手の土器で無節の縄で施文されている。286、287には結節の回転施文がみられる。

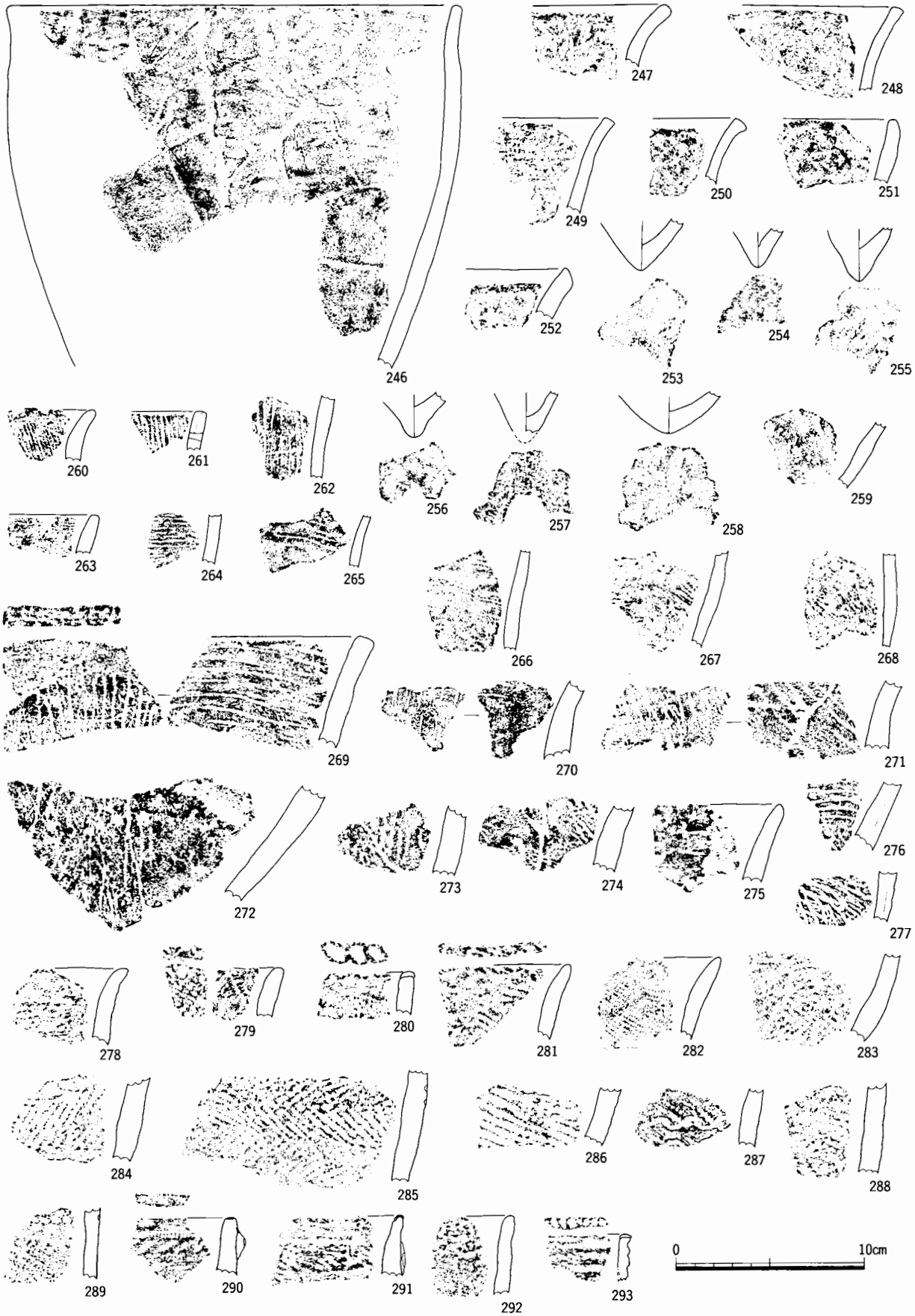
288は羽状縄文と刺突文を併用したもので繊維を多く含む。289はやはり胴部に刺突列がみられる。

９類（第68図290～293、図版27）

290は絡状体圧痕が施されている。白色砂粒を多く含み、繊維はわずかである。内面は丁寧なナデ調整を施している。絡状体圧痕は口唇部と隆帯上には斜位に施され、隆帯上端と下端には横位に施されている。硬質な胎土や横位に施文する絡状体圧痕より子母口式に併行する[2)]。

291は繊維を多量に含むやや脆い土器である。口縁直下に幅の広い隆帯を貼付し、幅８㎜ほどの絡状帯圧痕を施している。早期後葉に属すると思われる。

292・293は口縁部に縄の側面圧痕が３帯みられる。繊維を含む器厚の薄い土器である。



第68図　包含層出土縄文土器Ⅰ群（B地点：6類～8類）

10類（第69図294～302、図版27）

294は鵜ケ島台式に比定される。繊維をわずかに含む比較的硬質な土器である。口縁部に狭い無文帯を残し横走する浅い沈線で口縁部の文様帯が区画される。区画内には沈線で帯状の区画した無文部を残し、押し引きによる短沈線が充填される。

295は破片がＬ４区から比較的まとまって出土した。繊維を含むやや脆弱な土器である。口縁は内削ぎ状に整形される。口縁部は隆帯により２段に区画され、それぞれの区画内には刺突列によりモチーフが描かれている。それぞれの文様帯は３列の刺突列によって縦に区画される。上位の文様帯には平行する刺突列で横位の弧を描く。下位の文様帯には上下の隆帯に沿って平行する刺突列が描かれ、この間を斜行する刺突列がつないでいる。隆帯下位には横位の条痕文が顕著である。296は内傾しながら立ち上がり、端部は角頭状に整形される。口縁部文様帯には茎状の工具端による浅い平行沈線で連弧文を描いている。下位にも波状文がみられるが破片が少なく、モチーフは不明である。また口唇と外面には太い無節の縄文が地文として施されている。口縁の内面には横位に条痕が施されている。摩耗して断定できないが絡状体条痕のようである。297は内外に貝殻条痕文が施されている。平行する沈線で弧線を描き下部より沈線を垂下させている。以上は茅山下層式に比定される。

298～302は刺突列により施文する。何れも繊維を多量に含んでいる。298は外反部分に刺突列が施されている。一部に縄文が見られる。299は口縁部破片である。わずかに内湾する。本類にあっては器厚が薄い。ヘラ状工具などにＤ字状の刺突列が３条見られる。300～302は同一個体の可能性もある。砂粒を多量に含む粗い器面で、条痕文を地文に持つ。300は口縁で丸頭状に成形される。刻みは明確ではない。301は破片の上下で器厚が異なり、この段に沿って刺突列が横走している。302には刺突列が２条がみられる。上段は斜行し、下段は水平気味である。水平気味に横走する刺突列によって区画された文様帯に波状文を描いているものと推定される。以上は八崎Ｉ式に併行すると思われる。

11類（第69図303～305）

303は櫛歯状工具による波状文がみられる土器で、塩屋中層Ａ式に比定される。

304は櫛歯状工具による条線がみられる。木島Ⅳ式に併行する。

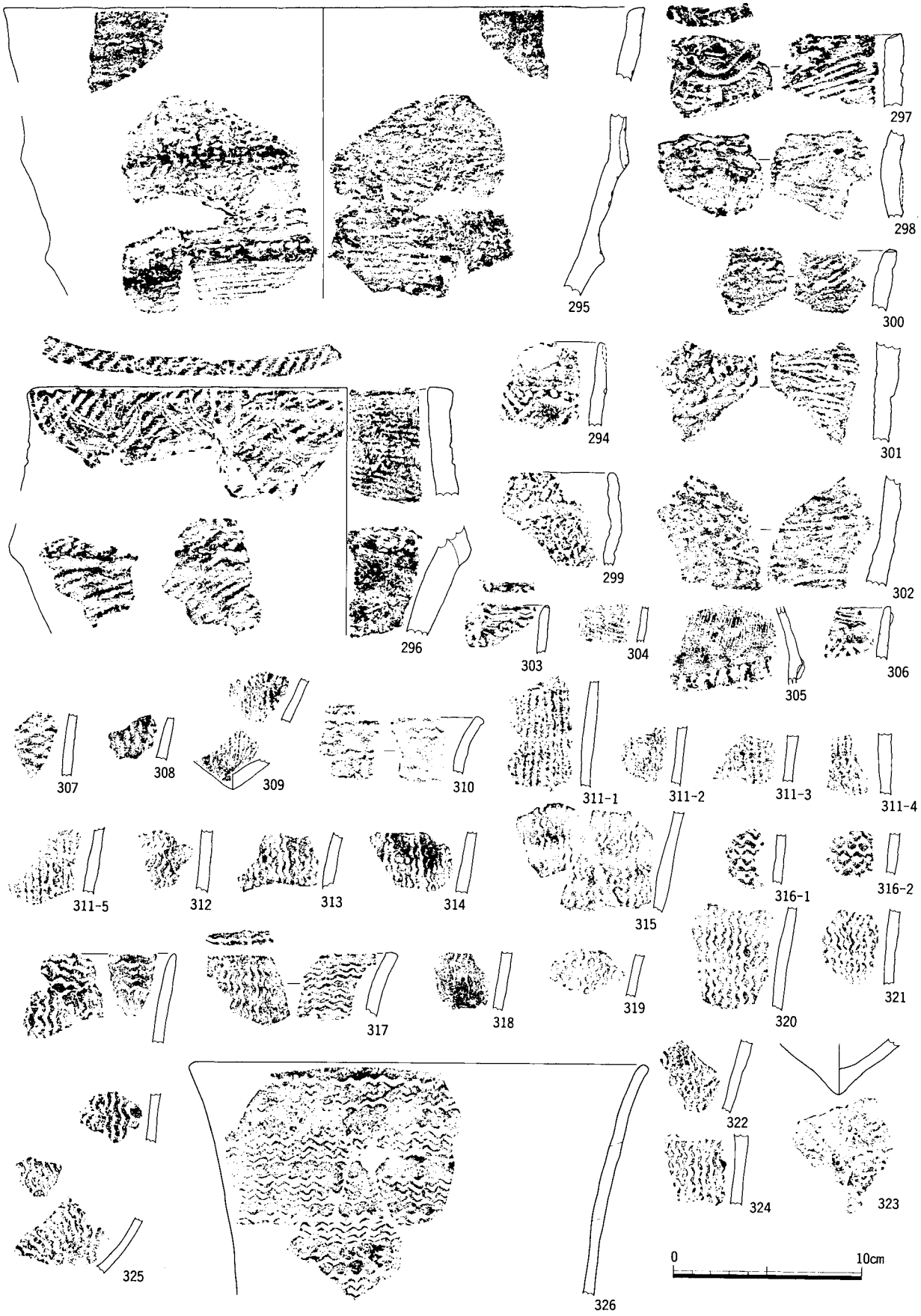
305は複合口縁で、屈曲部を摘んで小突起を連続させている。口縁部には櫛歯状工具で細密な条線が施されている。木島Ⅶ式に併行するものと思われる。

306は口縁直下に低隆帯を貼付し、細い撚糸文を横走させる。隆帯の下位には粘土の継ぎ目が残り無節の縄文が施文されている。薄手で硬質な土器である。時期等は不明である。

５．Ｃ地点出土の土器

１ｃ類（第69図307・308、図版27）

307、308はＢ地点出土の12等に酷似している。307は縦位に施文した頸部破片。308は横位に施文した胴部破片である。Ｃ地点の北よりの地点から出土した。



第69図　包含層出土縄文土器Ⅰ群（B地点：9類・10類、C地点：1類～3a類）

１ｄ類（第69図309、図版27）

309はＢ地点出土の15などと同一個体の可能性がある。底部破片で、横位に施文されたものである。

２ａ類（第69図310、図版27）

310の１点が出土した。混入の可能性は高いが本類の中で最も遺存状況が良好である。

３ａ類（第69図311～326・第70図327～358、図版27・28）

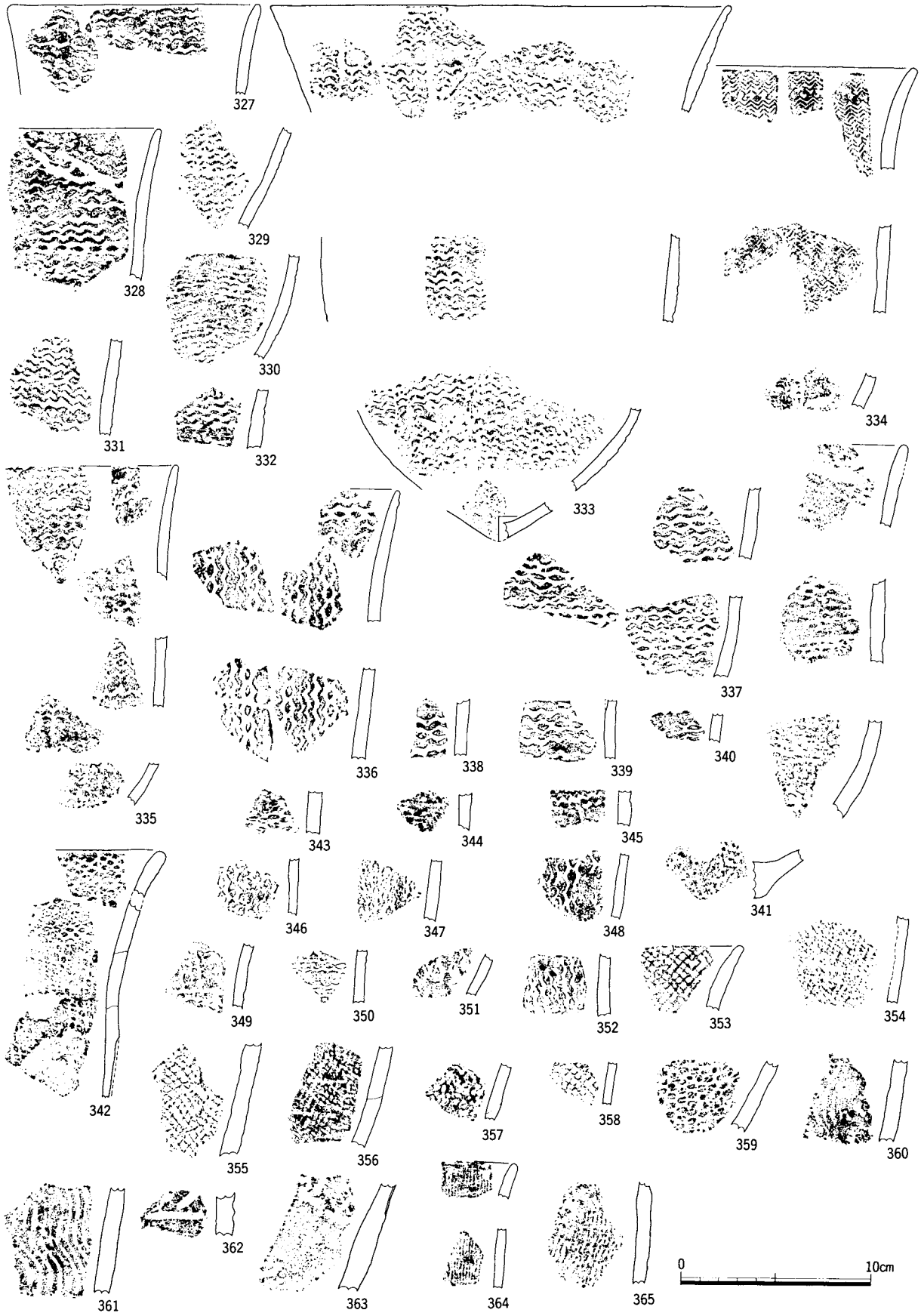
311は平行線状の不明瞭な山形文を縦位に施文している。Ｑ10区南よりの礫層直上からまとまって出土した。器厚が薄く、硬質な感じを呈するが割れやすい土器である。凸部はミミズ腫れ状を呈している。波状の無文部が残る破片があり、原体端部が楔状に刻まれていることが看取される。器面凹部には横方向に細かい筋状の原体圧痕が残る。同地点の最下層出土で、３ａ類に先行する可能性もある。

312～316は菱目文を施している。312～315は振幅の小さい山形文を縦位に施文している。４条の山形文であるが、３条目と４条目は山がずれて菱目文となっている。胎土と文様から311との関連が窺える。316は１条の菱目文を横位施文したもので、無文部は山形文や菱形状の楕円文になる。菱目文は上下の山形の分離が明確で異質であるが、基本的には卯ノ木遺跡１類（小熊1997）に類似する。

317～334は山形文を施している。317～325は縦位施文が主体となっている。317は内面と口唇に山形文を施文する。２ｂ類にみられる手法であるが、外面が端部より縦位に施文することや、内面には２段以上の施文が施されること、１単位に７条以上あることなどが大きく異なる。318～324は胴部から底部にかけて山形文を縦位に施文したものである。318を除いては凹凸の明確な施文である。319、320は同一個体と思われる。縦位非重複施文で無文部が楕円文を呈する。325は口縁部に横位、頸部以下に縦位非重複施文したものである。326～334は山形文を横位施文したものである。施文の特徴や山形文種は３ｃ類に共通する。326は口縁部が緩く外反し、端部を丸く成形している。３条の山形文を重複しないで横位に施文している。各段に無文帯が明確に残るが、その幅は狭いため帯状施文とは断定できない。上から４段目は下段を成形及び施文したあと、追加成形し施文したことによる重複施文である。328にはやはり狭い無文帯が残るが３段目の無文帯は形の整った楕円文が表出されている。333は頸部やや厚く、口縁端部に向かって薄くなる。頸部には一定の幅の無文帯が残るほか、底部まで非重複施文である。334は細かい山形文であることや一端の刻みが山と反対になるため、菱形状の凹部が残されていることなど、Ｃ地点の中ではやや異質である。外反しながら口縁に至り緩い面取りが施されている。329～332は山形文が横位に施文された胴部破片である。何れの破片にも狭い無文帯が残る。

335～340は複合文を施している。文様種Ｈ１、Ｈ２で、328など山形文の端部により作られた楕円文（328）との関連が窺える土器である。

335～339は山形文２条を向かい合わせ、間に楕円文を彫刻した原体を用いたものである。335はほとんど外反せずに立ち上がる。狭い無文部を残しながら横位に非重複施文を施している。楕円文は菱形状を呈する。336の外反も緩い。口縁端部は丸頭状を呈する。横位に１条と以下、縦位にわずかな無文帯を残しながら施文している。楕円文は穀粒状を呈する。337の山形はさらに緩く間の楕円文も長い。同一個体と考えられる破片はすべて横位施文で、狭い無文部も多くみられる。340は山形文２条以上の下端に楕円文が刻まれたものである。



第70図　包含層出土縄文土器Ⅰ群（C地点：3ａ類・4類・8類・9類）

341～345は楕円文を施している。341は破片が比較的まとまっている。口縁は緩く外反し、端部は丸頭状を呈する。砂粒を多く含み脆い。楕円文を横位に施文したものであるが、底部は縦位に施文している。楕円文は斜め隣と連結するなど配列がやや乱れている。原体の一端には刻みがみられないなど、原体の割り付けが未完成な印象を受ける。343も341と同様で楕円文が不規則に配列されている。345は１条の楕円文を横位に施文している。本遺跡唯一の例である。342は凹部が格子状を呈するＤ６種の楕円文で、他とは明らかに異なる。Ｐ11区より１個体（４片）が出土した。胎土や施文方法などは３ｄ類に共通する。口縁から頸部に横位施文され、胴部には斜位気味に縦位重複施文されている。本類からは除外される可能性が高い。

346～352は連珠文を施している。346～350は穀粒状の細長い楕円文が横に連結されたものである。346～348は縦位に施文されている。349、350は同一個体の可能性がある。頸部破片と思われる349-1には縦位の施文がみられる。351は348と同一個体の可能性もあるが、山形文との複合文も混在している。Ｂ地点出土の連珠文が３単位が主体だったのに対して２単位が主体であり、系統差がみられる。

353～358は格子目文。Ｃ地点から出土した格子目はＫ３種で、Ｂ地点にも多くみられる。従って３ｃ類等に分類される可能性も高いが、器厚が厚く、砂粒を多く含む土器はＣ地点に特徴的にみられた。

４ａ類（第70図359）

Ｎ12区Ⅱ層より底部付近の破片が１点出土した。繊維を多く含み、楕円文を斜位に施文している。重複が多く、原体が明確でない。

４ｃ類（第70図360・361、図版28）

波長が３㎝を越える山形文を施文したものである。相木式に併行する。

５ｃ類（第70図362・363、図版28）

362は繊維を含む。太い沈線による施文がみられる。Ｂ地点出土の200に類似している。363は繊維を多く含む厚手の土器である。器面はナデ調整が施されている。浅い沈線が斜行している。

７類（第70図364、図版28）

364は節の小さな撚糸文が縦位に施文されている。緩く外反する器形と思われる。砂粒を多く含む。

９類（第70図365、図版28）

365は細長い絡状体を押圧して施文したものである。繊維を多く含むやや脆い土器である。横位に施文されたものにやや斜行する部分がみられるが全体は不明である。早期後葉に属する。

１・２）領塚正浩氏のご教示による。

（谷口　和人）

第3表　押型文土器観察表(1)

図版番号	出土区	胎土	焼成	器厚	押型文原体			原体形状					文様構成等	分類
					形態	a長	b長	単位数・長		条数・長		端		
1	P14・M8III		普通	5	R1	3.5	4.5	3	14.8	3	20.5	A	横位非重複施文	3b
2	P14		良	4	K1	1.5	4.5	?		?		?	縦位施文	1d
3	P14		普通	5	Y4	6	3	2	13.4			A	縦位非重複施文	3?
4	P14		良	6	D3	?	?	?			?	A	横位施文	3b
5	P14	長石	普通	9	D3	7	5	?		?		?	横位施文	4a
10	I6II・J6II	石英・長石	普通	7	N1	6	4.5	2	20.1	3	23.1	?	口唇：縄文。横位施文。頸部：縄文？	1a
11	O5II		普通	6	N2	4	5	?		?		?	縦位施文	1b
12	M7II		不良	6	N3	1.5	5.5	?		?		?	縦位非重複施文	1c
13	N5II	石英	普通	6	N3	1.5	6	?		?		?	横位施文	1c
14	SB2II	石英多	普通	5	N3	1.5	5	?		?		?	横位施文	1c
15	N5II		普通	4	K1	1.5	4.5	?		?		?	縦位施文	1d
16	N5II	長石	普通	6	K2	2	4	?		?		?	横位施文	1d
17	M8	石英・長石	普通	7	?	?	?	?		?		?	縦位非重複施文	1d
18	M7III		普通	7	N4	2	15	3	19.5	1	29	?	縦位非重複施文	1d
19	M7II	石英多	普通	7	Y?								横位施文	1d
20	M7III	黒鉛	普通	5									無文	2a
21	M8III	黒鉛	普通	5	Y3	6.5	4	?		?		A	横位帯状施文？。内面：横位帯状施文？	2a
22	N5II	黒鉛	普通	6	Y3	7	3	?		?		A	縦位帯状施文	2a
23	N8III	黒鉛	普通	5	Y3		3	?		?		A	縦位帯状施文	2a
24	N7III	黒鉛	普通	6	Y3	6	3	2	11.5	4	14.1	A	縦位帯状施文	2a
25	M7III	黒鉛	普通	6	Y?							A	縦位帯状施文？	2a
26	N7III	黒鉛	普通	7	Y?								縦位帯状施文？	2a
27	SK1・N7IIIII M7IIIII・O7II N6II・N8III		良	5	Y3	4.5	3	2	8.9	3	12.5	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位（1条）、縦位帯状施文	2b
28	N7III		良	6	Y3	7	3	2	13.6	4	15.8	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位（1条？）、縦位帯状施文。	2b
29	M7III・M8IIIII		普通	6	Y3	6.5	5	2	13.2	3	13.6	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位（1条）、縦位帯状施文。	2b
30	N7IIIII・M7III M8III・O8III	長石	良	5	Y3	6.5	2.5	2	12.8	5	14.7	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位（1条）、縦位帯状施文。	2b
31	N7III・N8III M7IIIII	中粒砂多	普通	7	Y5	9	3	2	17.3	3	11.6	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位（2条）、頸部以下縦位帯状施文。	2b
32	M7IIIII・N7IIIII	長石・石英	普通	5	Y3	8	4.5	2	15.6	3	16.1	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位（2条）に縦位直交帯状施文。	2b
33	M7III・N7III K6III・N5II		普通	6	Y3	5	3	2	9.5	3	13.4	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位（2条）に縦位直交帯状施文。	2b
34	M7IIIII・N7III O7II	長石	普通	5	Y3	7	5	2	13.8	3	13.1	A	口唇、内面：横位施文（1条） やや斜行した横位（2条）帯状施文。	2b
35	N8III・N7III		普通	5	Y3	7	3.5	2	14.1	3	13	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位（2条）に縦位直交帯状施文か。	2b
36	O7II		普通	5	Y3	7	6	2	11.9	2	14.1	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位施文。	2b
37	O7II		普通	6	Y3	13.2	4.5	?		?		A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位施文。縦位帯状施文が直交。	2b
38	N5III		良	7	Y3	5.5	3	2	12.2	3	11.8	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位施文。	2b
39	N7II	石英	普通	7	Y3	7.5	5	2	16.5	3	17.1	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位帯状施文。	2b
40	N7II・III	長石・石英	普通	7	Y3	7	4	2	17.5	3	15.9	A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位施文。縦位帯状施文が直交。	2b
41	N7III		普通	5	Y3	8	4.5	?		?		A	口唇、内面：横位施文（1条） 横位施文。	2b
42	N7III・M7III	長石	良	5	Y3	7	3.5	2	14	3	11.4	A	口唇：横位施文。 横位施文（1条）。縦位帯状施文。	2b
43	M7IIIII・N7IIIII N5II		普通	6	Y6	6	3.5	2	11.1	3	13.2	A	口唇：横位施文。 横位施文（2条）。横2条目以下縦位施文。	2b
44	N7III・N8III M8III・M9II	繊維微	良	6	Y5	6.5	2.5	2	12.4	4	14.1	A	口唇：横位施文。 横位施文（2条）。縦位帯状施文直交。	2b
45	N7III・M7III SF2	石英・長石	良	6	Y3	7	4.5	2	14.7	3	16.6	A	口唇：横位施文。 横位施文（1条）。縦位帯状施文。	2b
46	N7IIIII・M7IIIII N8III	石英多	良	7	Y3	9.5	7	2	18.6	3	23.1	A	口唇：横位施文。端部無文？ 頸部？横位施文。以下縦位帯状施文。	2b
47	N7III・M7II	石英	良	7	Y3	5	4	2	10.5	4	14.9	A	縦位帯状施文	2b
48	M7III・M8III		普通	4	Y3	6	4	2	11.5	?		?	横位・縦位帯状施文	2b
49	N7III	石英	良	6	Y3	8	5	2	14.6	?		?	縦位帯状施文	2b
50	N7III・M8III	石英	良	5	Y3	8	4	2	14.5	?		?	縦位帯状施文	2b
51	N7III		良	7	Y3	6	4	2	13.5	?		A	縦位帯状施文	2b
52	N7III	石英	良	7	Y			?		?		?	縦位帯状施文	2b
53	N7III	石英	良	5	Y3	6.5	3.5	2	14.4	3	11.9	?	縦位帯状施文	2b
54	M7III		良	6	Y5	7		?		?		?	口唇：横位施文。縦位帯状施文	2b
55	N7III		普通	5	Y5			?		?		A	縦位帯状施文	2b
56	N7II		普通	5	Y5	5.5	4	?		?		A		2b
57	SB2・N7IIIII N5II・N6II	長石	良	6	Y3	6.5	5.5	2	11.3	4	21.8	A	横位帯状施文	2c

押型文土器観察表(2)

図版番号	出土区	胎土	焼成	器厚	押型文原体			原体形状					文様構成等	分類
					形態	a長	b長	単位数・長		条数・長		端		
58	N6III・N7IIIII M7II	長石	良	6	Y3	6.5	5.5	2	12.7	4	20.8	A	横位帯状施文	2c
59	N7III	繊維微少	良好	5	Y3	8	4.5	2	15.2	4	26.9	A	横位帯状施文	2c
60	M7III・M8III		良好	5	Y4	8.5	6.5	2	16.8	?		A	横位帯状？施文	2c？
61	N5II		良	5	Y3	8.5	5	2	16.8	6	21.7	A	横位施文	2c？
62	M8III		普通	6	Y3	5	2.5	2	9.5	?		A	横位帯状施文	2c？
63	M7II		良	6	Y3	6.5	5.6	2	14.4	4	21.1	A	横位施文	2c？
64	N8III		良	6	T1	5.5	7	3	16.5	1	7	A	横位非重複施文	3b
65	N7III		普通	5	T1	6	5.5	3	17.7	1	5.5	A	横位非重複施文	3b
66	M7III		普通	6	T1	6.5	5.5	?		?		A	横位施文	3b
67	M7III		不良	5	T1	6	7.5	3	16.7	1	7.5	A	横位非重複施文	3b
68	N5III		不良	5	T1	6	7.5	3	17.8	1	7.5	A	横位施文重複施文	3b
69	M7III		良	6	T1	5.5	7	3	16.1	1	7	A	横位非重複施文	3b
70	M7IIIII・N7IIIII O7II・N8III		良	7	T1	6	4	3	17.4	?		A	横位非重複施文	3b
71	M7III・N7III		良	5	T1	5.5	6	3	16.5	1	6	A	横位帯状施文	3b
72	M7III		普通	5	T1	5.5	5	3	15.6	1	5	A	横位非重複施文	3b
73	N7III		普通	7	T1	6.5	5.5	?		?		A	横位施文	3b
74	N6III		普通	6	T4	5	10	3	15.9	1	10	A	横位非重複施文	3b
75	M7III		良好	6	T1	6.5	8	3	16.8	1	8	A	横位非重複施文	3b
76	M7III		良	6	T1	6.5	6	3	16.5	1	6	A	横位非重複施文	3b
77	M7III		良	6	T1	6	6.5	3	18.5	1	6.5	A	横位非重複施文	3b
78	M7III		普通	6	T1	7	6	3	21.7	3	24.1	A	横位非重複施文	3b
79	O7II		普通	6	T3	3.5	9.5	3	13.2	1	9.5	A	横位非重複施文	3b
80	M7II		良	6	T5	7.5	7.5	3	17.9	1	7.5	A	横位非重複施文	3b
81	M8III		良	6	T2	10.5	5.5	?		?		A	横位施文	3b
82	M8III		普通	5	T2			?		?		A	横位施文。底部や斜位施文	3b
83	M7II		良	5	R2	7.5	7	2	16.8	2	20.4	A	横位非重複施文	3b
84	M8II		不良	6	R1	4	3.5	?		?		A	横位非重複施文	3b
85	M8II		不良	7	R			?		?		?	横位非重複施文	3b?
86	N7II・N6III	長石	良	6	R2	7	4.5	2	17.4	2	18.9	A	横位非重複施文	3b
87	SB2・M7III		普通	5	R5	3	4	3	10.6	3	20.7	A	横位施文	3b
88	M8III		普通	5	R4	5	4.5	3	15.1	?		?	横位施文	3b
89	M8II		良	5	R4	5	4	3	15.3	?		?	横位非重複施文	3b
90	M8III		普通	6	R4	5	4	?		?		A	横位施文と縦位施文が重複	3b?
91	SB2		良	5	R4	5.5	5	3	15.3	?		?	斜位施文の上部に横位施文が重複	3b
92	N6III		普通	6	R4	6.5	5	?		?		A	縦位施文	3b
93	N7III	繊維微少	普通	5	T5	4	7	?		?		A	横位非重複施文	3b?
94	M8III		普通	6	D9	7	5	2	15.1	?		A	横位施文	3b
95	M7IIIII・M8III		良	4	D2	4.5	3	2	19.7	4	16.7	A	横位非重複施文	3c
96	M7II		普通	4	D3	5	4	?		?		A	横位施文	3c
97	N6II		普通	5	D2	5	3	2	14.2	5	17.3	A	横位非重複施文	3c
98	M9		普通	4	D3	5	4	2	11.5	7	23.1	A	横位非重複施文	3c
99	N7III		良	6	D2	4	3	2	10.6	?		A	横位施文	3c
100	N7III		良	5	D2	4	2.5	2	9.1	?		A	横位非重複施文（下部は重複）	3c
101	N8III		良	5	D3	4.5	4	2	12.2	?		?	横位施文	3c
102	N7III		普通	5	D5	2.5	1.5	?		?		?	横位施文	3c?
103	M7II・M8II		良	6	D7	7.5	7	?		?		?	横位施文	3c?
104	M7IIIII・N7IIIII		良	5	D2	4.5	3	2	10.6	?		?	縦位施文。胴部から横位施文。	3c
105	N7III		良	7	D2	5.5	3	?		?		?	横位施文。端部に環状刺突（外径9.2㎜）	3c?
106	N7III		普通	6	Y3	6.5	5	2	12.6	?		?	縦位施文。下部に横位施文。	3c?
107	N6II		普通	5	Y3 D2	5.5 4.5	5 3	2 ?	12.2	? ?		B ?	横位非重複施文。下半部楕円文縦位施文	3c
108	N7IIIII		普通	5	Y12	15	5	1	15	8	20.5	B	横位非重複施文	3c
109	N6II		普通	7	Y3	14.1	6.5	?		?		?	横位施文	3c
110	N5II		良	5	Y3	5	4	?		?		?	縦位施文	3c
111	M7IIIII・N7IIIII		普通	6	Y3 D3	5.5 4.5	5.5 4	2 2	11.5 12.3	4 ?	18.7	A ?	横位比重複施文。頸部無文帯に回転刺突(径3.8㎜)。下半部に楕円文重複施文	3c
	L7III				D3	4.5	4	2	12.3	?		?		
112	N7III		普通	6	Y3	7.5	4.5	2	16.2	6	26.4	A	横位非重複施文。頸部に山形沈線	3c
113	N5II		普通	5	K3	3.5	4	2	12	?		B	横位施文	3c
114	N7III		不良	6	K3	2.5	2.5	?		?		B	横位帯状施文	3c?
115	N7III		良	7	K4			4	14.7	?		?	斜位非重複施紋？	3c
116	N7III		良	6	K4			4	14.3	?		B	横位非重複施文	3c
117	N7III		普通	5	Y15	9.5	6.5	2	17.7	4	12.7	B	横位非重複施文	3c
118	N5II		普通	6	Y15			?		?		B	横位施文	3c
119	N7III		普通	6	Y16			1	11.4	?		B	横位施文	3c
120	N7III		普通	6	Y17			1	25.2	?		B	横位施文。下位に楕円文併用か？	3c
121	N7III・L4		良	5	Y18			1	14.3	?		B	横位施文	3c
122	N7III・M7III		普通	5	K3 Y3 Y7	3 6	3.5 4.5	4 2 1	14.7 11.3 14.3	9 6 ?	23.1 18.	B B B	格子・平行線・山形文を横位非重複施文。頸部付近に山形文を縦位施文。	3c
123	N5II・N7III		普通	5	Y15 Y7	10.8	8.7	?	14.3	4	11.7	B	山形文・平行線文を横位施文	3c
124	N5II・SB2・N6II		普通	5	Y15 Y15	9.5	6.5	2	17.7 14.3	4	12.7	B	山形文を横位施文し一部で縦位に重複施文。 下位（胴部中央部）に平行線文。	3C

押型文土器観察表(3)

図版番号	出土区	胎土	焼成	器厚	押型文原体			原体形状					文様構成等	分類
					形態	a長	b長	単位数・長		条数・長		端		
125	N5II		良	8	D2	5	3.5	2	12.7	?		A	横位施文。不規則な無文帯もある。	3d
126	N7III・SB2		良	7	D2	5	3	2	12.5	6	19.9	A	横位非重複施文	3d
127	N7II		良	7	D2	5	2.5	2	12.4	4	15.8	A	横位非重複施文	3d
128	N5II		良	6	D2	5	3	2	13.6	7	27.2	A	横位非重複施文	3d
129	O5II		普通	7	D2	5.5	2.5	2	13.4	?		A	横位非重複施文	3d
130	K6II		普通	7	D2	5.5	3	?		?		?	横位施文	3d
131	N5IIIII		普通	7	D2	5.5	3	2	14.5	?		A	横位重複施文	3d
132	N5II・N7III M5II・N8III		普通	7	D2	3.5	2.5	2	19.5	6	23	A	横位非重複施文	3d
133	N5II		普通	8	D2	4.5	2	?		?		?	横位重複施文	3d
134	N7III		普通	6	Y3	7	4.5	2	17.5	?		?	横位施文	3d
135	N7III		普通	9	Y9	14.5	13.2	1	14.2	?		B	横位非重複施文	3d?
136	N7III		不良	6	Y3	7	6.5	2	15.5	?		?	横位施文	3d?
137	N8III		普通	6	Y3	7	5.5	2	14.8	5	19.8	B	横位非重複施文	3d?
138	N6II		普通	7	Y8 D2	7 5	9 2.5	? ?		? ?		? ?	横位重複施文。山形文の下位に楕円文	3d
139	N6II		普通	7	Y8 D4	7.5 6.5	8.8 2.3	2 ?	15.7	? ?		A ?	横位施文。山形文の下位に楕円	3d
140	N7IIIII		普通	7	K3	4.5	4.5	3	11.7	9	21.2	B	横位非重複施文	3d
141	N7III		普通	7	D2 K5	5.5 6	2.5 6.5	? ?		? ?		? ?	横位施文。楕円文の下位に格子目文。	3d
142	N6III		普通	6	D2 D3	7.5 5.5	5.6 4	? 2	 10.3	? ?		A A	口縁部横位施文。以下縦位から斜位施文。 原体は異なる	3d 3d
143	N5III・N6II		普通	9	D2	5	3.5	2	12.2	?		A	口縁横位重複施文。以下縦位重複施文	3d
144	N6II・L4	石英	良	7	D3	5	4	2	14.7	?		A	口縁横位施文。以下縦位施文	3d?
145	O7II	長石	不良	8	D2	7	3.5	2	15.4	?		A	口縁横位施文。以下縦位施文	3d?
146	N6III		普通	7	D2	6.5	3	?		?		?	横位施文。下位に縦位施文	3d?
147	N6II		普通	8	D4	7.5	2	2	14.8	?		?	口縁部横位施文。以下縦位施文	3d
148	N7III	繊維微少	普通	9	D2	5.5	3	?		?		?	口縁部横位施文。以下縦位施文	3d
149	N6II		良	9	D4	8	2.5	2	18.5	?		A	縦位施文	3d
150	N7III		良	9	D2	5.5	3	2	15.7	?		A	縦位から斜位施文	3d
151	N7IIIII	白色砂粒多	不良	6	Y3	5	7.5	2	10.2	?		A	口縁部横位施文。以下縦位施文。 縦位無文部に刺突列。	3d?
152	N5II		良	7	D2 Y10	6.5 18.5	3.5 7.5	2 ?	17.7	? ?		A	横位施文。以下斜位施文。一部に山形文	3d
153	N5II		良	8	D2 Y10	7.5 17	3.5 7.5	 ?		 ?		 ?	頸部下位？縦位施文。以下横位施文。 一部に山形文	 3d
154	N7II	石英	良	9	D2	6	3.5	2	16.2	?		?	縦位施文	3d
155	M7III		良	6	D2	4	3	2	10.1	?		?	横位施文。下位に縦位施文	3d?
156	SB7	繊維微少	普通	10	D6	6.5	4.5	?		?		?	縦位施文。内面に横位施文	3d?
157	N5II・N6II		良	7	K1 D4	7 5.5	5 2	2 2	15.5 16	? ?		?	縦位重複施文。格子目文の下位に楕円文	3d
158	N5II		良	9	D6	6	4	2	14.9	?		A	縦位重複施文	3d
159	N7III		普通	8	D4	5.5	2	?		?		A	縦位施文	3d
160	N6II・N5II		良	7	D2	5.5	2.5	2	16.1	?		B	横位施文。頸部破片に縦位施文。	3d?
161	L4		普通	7	Y3			?		?		?	縦位施文	3d?
162	N5II	砂粒多	不良	7	S1	1.5	17	?		?		B	口縁部～頸部横位施文。以下斜位施文交差	3d?
163	N6II・N7II	繊維微少	普通	9	D2	4	3	2	12	?		?	横位重複施文。下半部縦位施文	4a
164	N5II	繊維微少	普通	8	D2	7	2.5	?		?		A	口縁で横位に重複して縦位施文	4a
165	N6III	繊維少	良	9	D2	9	2.5	2	15.1	?		A	横位施文・斜位施文	4a
166	N6II	繊維少	不良	7	D4	5	1.5	2	11.7	?		A	横位重複施文	4a
167	M9	繊維微少	普通	8	D2	7	5	?		?		A	横位施文	4a
168	N7III	繊維微少	普通	9	D2	5.5	3.5	?		?		?	横位施文	4a
169	N6II	繊維	不良	8	D6	6.5	4	2	14.2	8	30.7	A	横位重複施文	4a
170	M8	繊維少	普通	9	D2	8	3	2	20.7	?		A	横位重複施文	4a
171	N5II	繊維多	普通	8	D2	7.5	4	2	18.5	?		A	横位重複施文	4a
172	N5IIIII	繊維	普通	7	D2	5.5	4	2	13.3	10	29.8	A	横位施文。重複と無文有り。	4a
173	N7III	繊維。石英	普通	8	D2	6.5	3	2	14.6	?		A	横位重複施文	4a
174	K5II	繊維	普通	7	D2	5	2.5	?		?		A	横位施文	4a
175	N6III	繊維多	普通	8	D2	7	4	2	17.4	?		A	横位重複施文。一部に無文あり	4a
176	N6II	繊維少	普通	9	D2	4.5	2.5	?		?		?	横位重複施文	4a
177	M7II	繊維少	普通	9	D2	7	3.5	?		?		A	横位施文	4a
178	N7III	繊維	普通	14	D2	6	3	?		?		A	横位重複施文	4a
179	N7III	繊維	普通	9	D2	6.5	4	?		?		?	横位重複施文	4a
180	N6III	繊維少	普通	9	D2 A1	6.5	2.5	?		?		?	横位非重複施文。楕円文の下位に綾杉？	4a?
181	N6II	繊維微少	普通	9	D7	6.5	6	?		?		A	重複施文	4b
182	N6II	繊維	普通	11	D7	7	5	?		?		?	横位から斜位に重複施文	4b
183	N7II	繊維	普通	10	D2	7	4	?		?		?	重複施文	4a
184	M7III	繊維少	普通	11	D2	9	4	2	20.3	?		?	縦位施文	4a
185	L4	繊維	不良	12	D2	5	3	?		?		?	縦位と斜位が重複施文	4a
186	L4	繊維	普通	8	D2	5	2	?		?		?	縦位施文	4a
187	SB8	繊維少	普通	6	D								横位施文	
188	N6II	繊維	普通	9	D2	6.5	3.5	2	16	?		A	縦位重複施文。一部に横位施文	4a
189	N5II・N6II	繊維多	不良	10	Y4	10	3	2	20.6	?		A	斜位重複施文	4a

押型文土器観察表(4)

図版番号	出土区	胎土	焼成	器厚	押型文原体			原体形状					文様構成等	分類
					形態	a長	b長	単位数・長		条数・長		端		
190	N6II	繊維・長石	不良	12	D７	7	6.5	2	16.5	?		A	縦位重複施文	4b
191	N6II	繊維・長石	不良	12	D７	7	7	2	20.8	?		?	重複施文	4b
192	N6II	繊維・長石	不良	11	D７	8	6	?		?		?	重複施文	4b
193	K5II	繊維・石英	不良	13	D２	9	4.5	?		?		?	縦位施文	4b
194	N5II	繊維・石英	不良	13	D２	8.5	4	?		?		?	斜位施文	4b
195	K6II	繊維・長石	普通	12	D８	10	8	?		?		A	口唇、内面：刺突列。外面：重複施文	4b
196	J5II	繊維・細礫	普通	13	D８	12.5	11	?		?		?	斜位施文	4b
197	L4	繊維	不良	10	D？								表面摩耗。内面：斜行凹線	
198	N7III	繊維少	普通	15	D８	16	12	?		?		?	横位施文？	4b
199	L4	繊維少	普通	12	D８	12	10	?		?		?	横位施文	4b
307	N12III		普通	5	N３	2	6	?		?		?	縦位施文	1c
308	O12III	石英	普通	5	N３	2	6	?		?		?	横位施文	1c
309	N12II		不良	5	K１	1.5	7	?		?			横位施文	1d
310	Q12VII	黒鉛	普通	5	Y３	7	4.5	2	13.2	3	17.4	A	口唇、内面：横位施文(1) 外面：横位施文の下位に縦位施文。	2a
311	Q10VVI		普通	5	Y１	7?	1.5	?				A	縦位施文	3a
312	P12VI		普通	6	Y４	11	4	?		?		?	縦位施文	3a
313	Q10VI		普通	5	Y２	6.5	3	2	12.7	3	12.5	A	縦位施文	3a
314	Q10VI		普通	6	Y２	6.5	3	2	12.7	?		A	縦位施文	3a
315	Q10VVI		普通	5	Y２	6.5	3	2	12.5	?		A	縦位施文	3a
316	P11VI・P12VI		不良	5	Y14	7	8.5	?		1	13.9	A	横位非重複施文	3a
317	N12II		普通	7	Y３	7	3	2	13.5	?		A	口唇：横位施文。内面：横位施文(2) 外面：縦位帯状？施文。	3a?
318	P10VII		普通	5	Y５	10.5	4	?		?		?	縦位非重複施文	3a?
319	P12VI	砂粒多	普通	6	Y４	7.5	3	?		?		?	縦位非重複施文	3a
320	P12VI	砂粒極多	普通	6	Y４	7.5	3	?		?		?	縦位非重複施文	3a
321	O11III		普通	6	Y３	6	2.5	2	13.4	?		A	縦位重複施文	3a
322	P11VI		普通	5	Y４	9	4	?		?		?	縦位重複施文	3a
323	P11VI		普通	6	Y４	9	4	?		?		A	縦位施文	3a
324	Q10V	砂粒多	不良	6	Y４	9	4.5	2	16.8	?		A	縦位施文	3a
325	P11VI・P12VIVIII	砂粒多	良	6	Y４	9	4	2	16.3	3	16.1	A	横位施文。以下縦位非重複施文	3a
326	P11VI	細繊維微少	普通	7	Y４	7.5	3.5	2	17.9	3	16.3	A	横位非重複施文	3a
327	P11VI		普通	5	Y４	7	3	2	14.3	3	15.9	A	横位非重複施文	3a
328	P12VI	石英	普通	6	Y４	8	4	2	17	3	18.1	A	横位非重複施文	3a
329	P12IVVII	長石	不良	6	Y４	7.5	3.5	2	12.6	?		A	横位施文	3a
330	Q11II	繊維微少	普通	6	Y５	7	2.5	2	14.7	5	19.8	A	横位施文。無文帯あり	3a
331	Q11VI		普通	6	Y３	8.5	3.5	2	15.2	3	16.6	A	横位非重複施文	3a
332	P12VI		普通	7	Y４	9	5	2	17.4	3	17.4	A	横位非重複施文	3a
333	P10V・P11IIVI P12VVI・Q10V N7III		普通	6	Y４	7	4	2	14.7	4	19.6	A	横位非重複施文	3a
334	O11IIIII・O12III P10VIVII・P11VI P12VVI・Q9VI Q10VVII・Q11VII		普通	6	Y13	6	3.5			4	13.7	A	横位非重複施文	3a
335	P11VIVII・P12III Q10V	砂粒多	普通	5	H１	7	10.5	2	14.3	1	15.9	A	横位非重複施文	3a
336	P11VI・P12IIIVI Q10IIVVIVII		普通	7	H１	8.5	14	2	17.3	1	18.2	A	横位施文。以下縦位非重複施文	3a
337	P11VVI・P12VIII P10V・O12IVVI		普通	7	H１	8	12	2	14.8	1	15.7	A	横位施文	3a
338	P13II		普通	6	H１	8.5	14	?		1	19.5	A	横位非重複施文	3a
339	SB4	砂粒	普通	4	H１	8	13.5	2	17.1	1	19.3	A	横位非重複施文	3a
340	Q10VI		普通	5	H２			?		?		A	横位非重複施文	3a
341	P11IIVI・P12VI	長石・石英	不良	6	D１	6	2	2	19.4	?		B	横位施文	3a
342	P11VI		普通	7	D２	5	2.5	2	14.1	?		A	横位施文（２条以上）。以下縦位施文	3d?
343	P11VI	石英多	普通	7	D１	6	2.5	2	18.9	?		?	横位施文	3a
344	P12VI	石英多	不良	6	D			?		?		?	横位施文	3a
345	P10VI		不良	7	D10	5	3	?		1	8	A	横位非重複施文	3a
346	Q10VIII		良	4	R６	8	4	2	17.8	?		A	縦位非重複施文	3a
347	P11VI		普通	7	R６	6	3					A	縦位重複施文	3a
348	Q11IX		良	4	R６	8	4	2	17.5	?		A	縦位施文	3a
349	Q11VI		普通	6	R６	6	4	?		?		A	横位施文。頸部に縦位施文。	3a?
350	Q11VI		良	6	R６	6	4	?		?		A	横位非重複施文	3a?
351	Q11IX		良	5	R６	8	4	?		?		A	縦位施文	3a
352	Q9VII		良	7	R３	6	3	2	14	2	12.1	A	縦位施文	3a
353	N12II		不良	7	K３	4	4	?		?		?	横位施文	3a?
354	Q10VI		普通	7	K３	3	3	?		?		?	横位施文？	3a?
355	Q10VII		不良	7	K３	3	3	?		?		?	横位施文？	3a?
356	O13III	砂粒多	不良	9	K３	3.5	4	4	16.2	?		?	縦位施文。下位に横位施文	3a?
357	P12IV		普通	7	K４			?		?		?	縦位施文	3a?
358	P12VI	砂粒多	不良	5	K３	4.5	4.5	?		?		?	横位施文	3a?
359	N12II	繊維多	普通	8	D２	5	3.5	2	11.1	?		?	斜位重複施文	4a
360	P12II	長石・繊維	不良	8	Y11	?		?		?		?	縦位施文	4c
361	P12IV	長石・繊維	不良	8	Y11					?		?	縦位施文	4c

II群　縄文前期の土器

前期の土器を本群とする。早期末から前期初頭にかけてはI群に含めた。次の1類のみである。

1類　北白川下層式系類似の土器（第71図1～15、図版28）

1は細い粘土紐を渦巻き状に貼りつけているが微隆起線様である。胎土にわずかに砂粒を含み灰黄色を呈している。2～5も細い粘土紐を細かく波状に貼り付けて文様帯を構成している。貼り付け文様の下は羽状縄文のようである。13も同様の土器で羽状縄文である。6・7も微隆起線文が見える。胎土に石英、雲母等を含み、色調はにぶい黄橙色、灰黄色、黒褐色である。9～12・14は羽状縄文である。時期は北白川下層IIC式併行と思われる。8・15も同時期のものであろう。

III群　縄文中期の土器

次の10類に分類して記述する

1類　関西系もしくは東海系中期前葉の土器
2類　関東系中期前葉の土器
3類　関東系中期後葉加曽利E式類似の土器
4類　北陸系の土器
5類　信州系の土器
6類　東海系の土器
7類　在地的な土器
8類　コンパス文のある土器
9類　縄文が主体の土器及び底部
10類　その他の土器

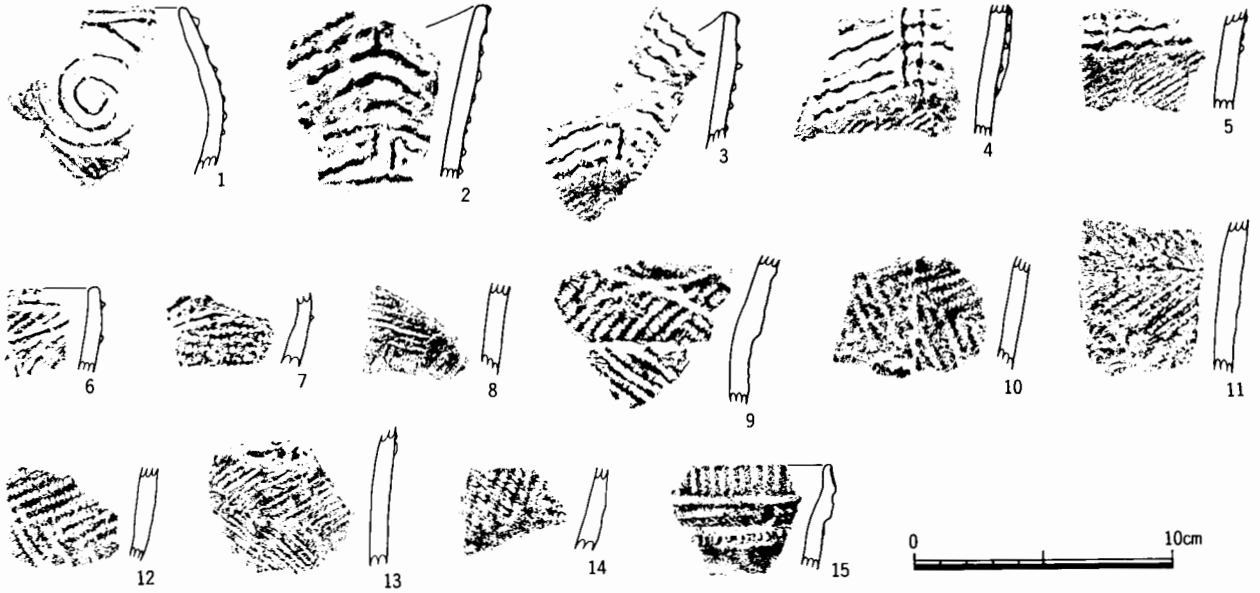
1類　関西系もしくは東海系中期前葉の土器（第72図・第73図25～28、図版29）

1a類　船元I式・東海系の土器（第72図1～22）

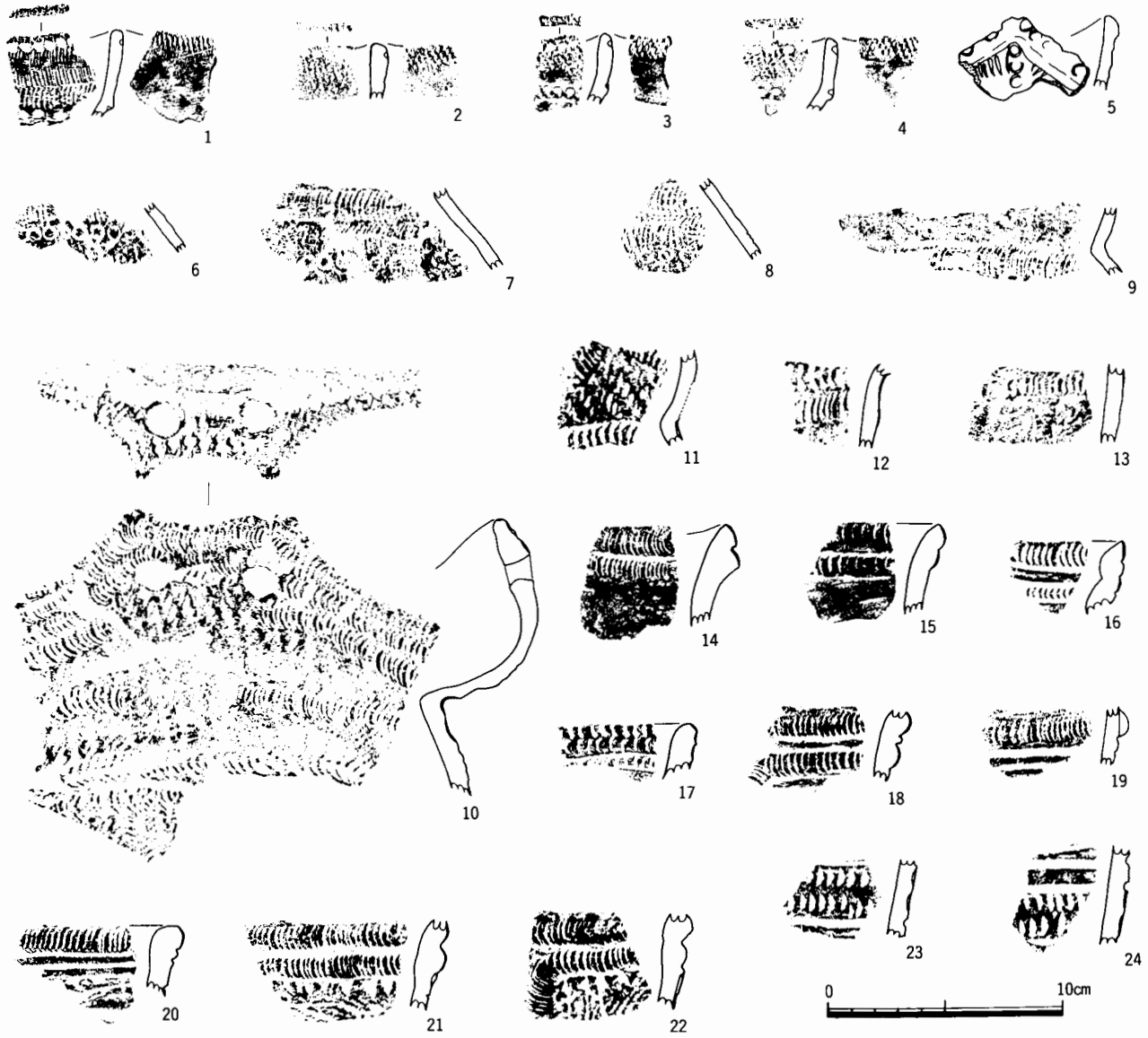
1は厚さ5～6㎜で、連続爪形文に加えて円形刺突文を連続させている。2～4は縄文に加えて円形刺突文を連続させている。口唇部にも文様を有し、口縁内面にも縄文が施文されている。色調はにぶい灰黄褐色である。5～8は爪形文に加えて竹管による円形刺突文を連続させている。9は爪形文がみえるが、くびれた（頸部と思われる）部分より上は無文である。

10はキャリパー状で全面に爪形文が施されている（爪形文の無い部分は剝がれている）。波状口縁で突起部近くに円孔を有し、口縁内面には縄文が施されている。胎土に砂粒をわずかに含み、色調は灰黄褐色を呈している。11も爪形文が剝がれている。12・13も含めて船元I式に類似する土器と思われる。これについては第9号住居跡の4類66～69でも記している。

14～22は口縁部に連続爪形文が施されており、第9号住居跡の4類66～69で述べたように、明確にはできない。また、20には半截竹管文が見られ、21には三角陰刻などが施されており、五領ヶ台式系との関連も考えなければならないであろう。



第71図　包含層出土縄文土器II群



第72図　包含層出土縄文土器III群(1)

1ｂ類　貝殻腹縁文を有する土器（第72図23・24、第73図25～28）

貝殻腹縁文的な土器が6個出土している。1～2条の沈線間に2列に貝殻腹縁文が施されている。厚さは6～7㎜で、胎土に砂粒を含み、色調は褐色、赤褐色である。どこかに類型が在るかもしれないが、現時点では勉強不足もあり不明である。しかし、時期は中期初頭であろうと、ご指導いただいた諸氏の一致する意見であった。

2類　関東系中期前葉の土器（第73図29～40、図版29）

2ａ類　五領ヶ台式系の土器（第73図29～34）

29～34は半截竹管文に接して三角陰刻を有し、そのモチーフから考えて五領ヶ台式土器に類すると考えられる。胎土に砂粒や石英を含み色調は明褐色を呈するものが多い。

2ｂ類　勝坂式系の土器（第73図35～40）

35～39は勝坂式系類似の土器と考えられる。35は隆帯による区画文の両サイドに連続爪形文的な文様を施し、中央を鋸歯状の沈線で分割している。胎土に砂粒や雲母を含み、暗褐色を呈している。39は趣を異にするが同類の土器であろう。40は三角の押し引き文が施され、勝坂式土器にも同類の施文がみられる。しかし、これに類似した新道式土器もあり明言は避けざるを得ない。

2ｃ類　阿玉台式系の土器（第73図41）

41は1点のみではっきりわからないが阿玉台式的な様相を呈した土器である。

3類　関東系中期後葉加曽利Ｅ式類似の土器（第73図42～45、図版29）

42～45は加曽利Ｅ式類似の土器と考えられる。胎土に砂粒、石英を含み色調は、何れも明赤褐色を呈している。

4類　北陸系の土器（第73図46～73・第74図74、図版29）

4ａ類　中期前葉新崎Ⅱ式土器、（第73図46～67）

この土器は第57図の第9号住居跡で記述したのと同類である。46～49は半截竹管文に蓮華文を施したもので、49には格子目文がみられる。51～54は口縁部であるが、何れも半截竹管文に爪形文が施されている。55～62も半截竹管文の間を格子目文で充塡されている。63～65は半截竹管文であるが、64は上山田・天神山式まで下がるかもしれない。66・67は同一個体で幅広の半截竹管により施文されている。底部に網代痕が一部残存している。同じく新崎Ⅱ式である。何れも胎土に砂粒、石英、雲母等を含み、色調はにぶい黄褐色や灰黄褐色を呈している。

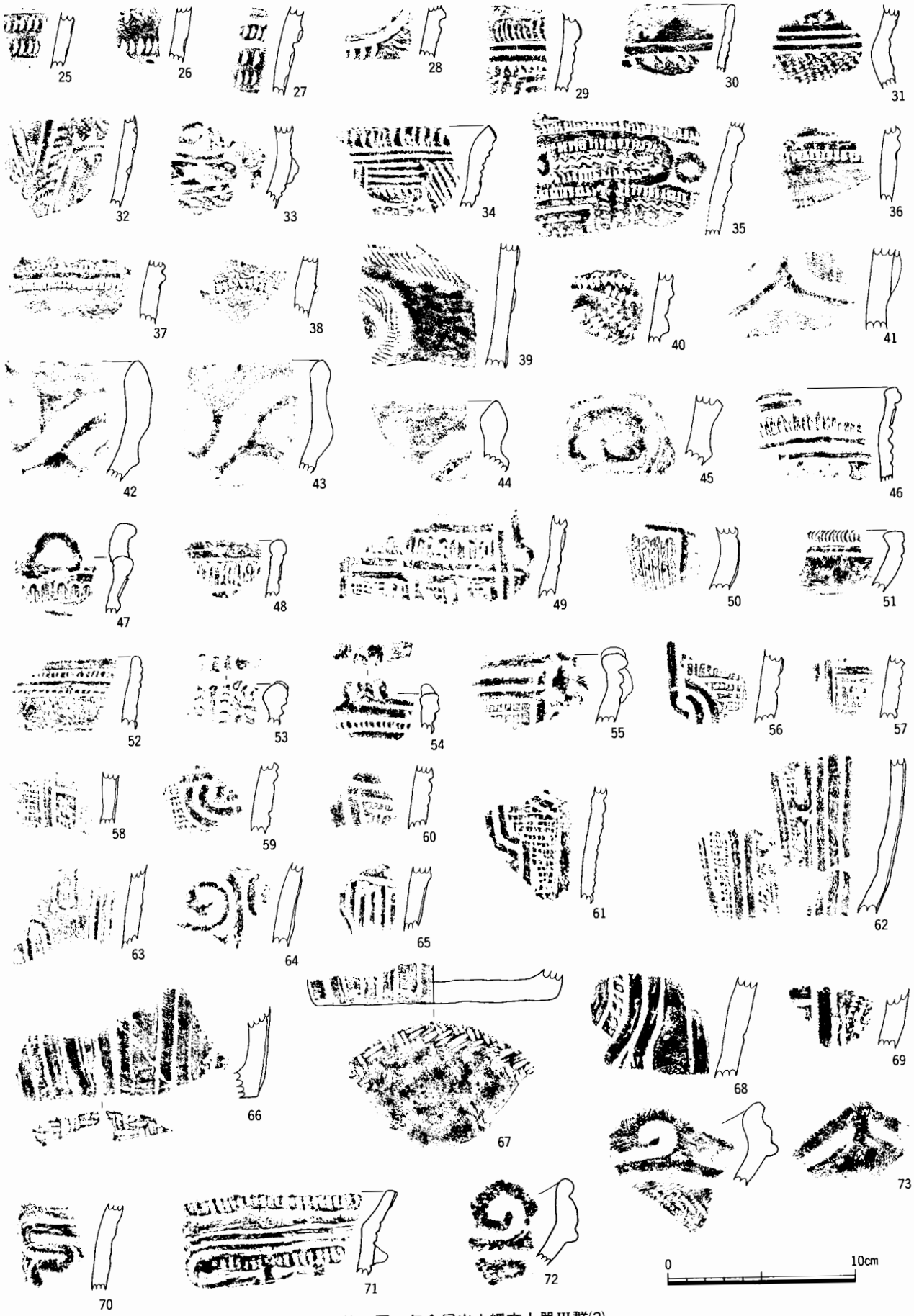
4ｂ類　中期中葉古府式類似の土器（第73図68～70）

68～70の3片である。幅広の半截竹管を使用して施文している。胎土に白い砂粒を含みにぶい橙色を呈している。

4ｃ類　中期後葉串田新式類似の土器（第73図71～73・第74図74）

これと同じ様式の土器については、第7号住居跡の2類と、第10号住居跡の埋甕でも記述している。

71は口縁部で角度を以て外反する。口縁部外縁および2本の半截竹管文の下には櫛歯状工具による連続刺突が施されている。胎土に白い砂粒、石英を含みにぶい黄色を呈している。72～74は同一個体



第73図　包含層出土縄文土器Ⅲ群(2)

で、口縁部は朝顔状に開く器形で、波頂部はやや内彎する。口縁部に幅広の沈線が巡り波頂部で左渦巻き様で止まる。口縁内部も同様の沈線が巡るが、波頂部で分断されている。胎土に白い砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈している。

5類　信州系の土器（第74図75～117・第75図・第76図156～182、図版30・31）

5ａ類　曽利Ⅰ式期の土器（第74図75～77）

75～77は波状口縁をなす土器で、隆帯で区画文を施し中を櫛歯状工具による縦沈線で充塡する。胎土に白い砂粒を含み、暗褐色を呈している。同類の土器は第2号住居跡の1類でも記述した。

5ｂ類　唐草文系Ⅰ期の土器（第74図78～117）

後葉Ⅰ期には中期中葉の貉沢～井戸尻式土器が変化する時期で、新たな文様体を確立させた時期といわれる。図示した土器は小破片で文様は十分わからないが、単純化された様相が窺える。

78・82・86は隆帯の間に爪形文が施されており、櫛歯状工具による沈線がみられる。79～81も同様の沈線が施されている。84・85は区画文内を半截竹管による沈線で充塡している。ただし、87は区画内を撚糸文で充塡している。

88～94は隆帯がどうなるか不明であるが櫛歯状工具による施文である。96～98は同一個体で、細目の半截竹管を使用して縦横に施文している。胎土に雲母、石英を含み、色調は褐灰色を呈している。96にはU字状隆帯がみえるが、97は拓影ではみえないが剝がれている。96・97は隆帯の上横に爪形文が施されている。これは、110・111・117にもみられるようにこの時期の1つの特徴であろう。

99～104は櫛歯状工具による施文でないものもあるが、縦の沈線に変わりなく、正直なところこの時期かどうか疑問がもたれる。104～106は内彎した口縁部であろう。109・112・113は隆帯にキザミがみられる。114～116は隆帯による渦巻き文に連続爪形文が施されている。

5ｃ類　唐草文系Ⅱ～Ⅲ期の土器（第75・76図156～172）

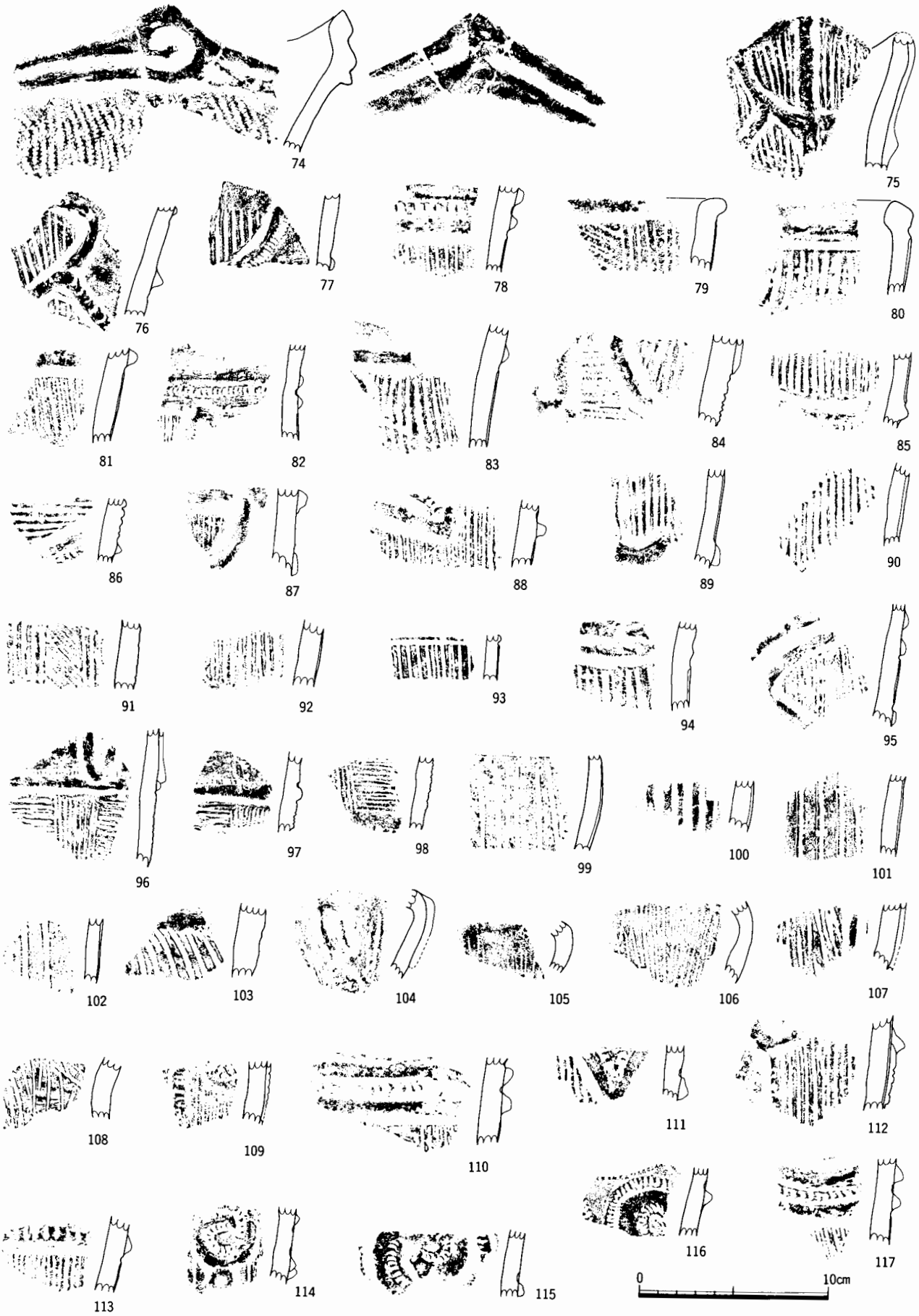
唐草文系Ⅱ～Ⅲ期の土器を明確に区別することは困難なためまとめて本類とした。118～120は隆帯の右渦巻き文が、121は左渦巻き文がそれぞれ波状口縁部に施されている。122は縦沈線の上に渦巻き文がみられ、123～125は胴部にやはり隆帯の渦巻き文が施されている。126は櫛歯状工具による施文や沈線の渦巻き様の文様がみられる。

127は左に流れる隆帯は唐草文になると思われ、垂下する隆帯は腕骨文と思われる。空間は斜位の沈線で充塡されている。この土器はⅡ期と言えよう。

128～134は隆帯による区画文が施されていると思われ、その内部が縦位もしくは斜位の沈線で充塡されていると思われる。135の隆帯はどのように流れるかわからないが、櫛歯状工具による沈線や、矢羽根状沈線が施されており、この類の時期と言えよう。136は曲がる隆帯の両サイドを沈線が同行している。唐草文になると思われる。

137～141・143～147は隆帯が垂下し、地文は斜位もしくは矢羽根状沈線で充塡されている。2～3本垂下する隆帯は腕骨文となる可能性があろう。148～153は矢羽根状沈線が主であるが、基本的には隆帯を伴う土器であろうと思われる。154・155は同一個体である。蛇行懸垂文が施されているが、隆帯を伴う土器で上記のものと同類と思われる。

157～160は、やや厚目であるが、隆帯や沈線は前述の土器と変わりはないであろう。156は口縁部に



第74図　包含層出土縄文土器Ⅲ群(3)

逆ハの字状に沈線文が施され、同様の沈線で胴部文様帯と区分される。胴部文様は欠けていてはっきりしないが、隆帯や区画文がみられ内部は櫛歯状工具による施文をうかがうことができる。従って、これも同類の土器と考えられる。

161･162は同一個体で隆帯により、口縁部無文帯と胴部矢羽根状文様帯がはっきり区分されている。163･164は条線の上に沈線で蛇行懸垂文が施されている。165は沈線による蛇行懸垂文以外はわからない。166・169は沈線が矢羽根状になると思われる。167・170は条線のみである。

168は第7号住居跡第48図28～32･37で述べたので重複するが、地文を半截竹管を使用して施文している。この技法は在地的な様相を呈していると思われる。

171は胴部沈線文様の末端で底部近くの破片である。172は地文は条線で、弧状の隆帯にキザミが施されている。

5ｄ類　唐草文系Ⅲ～Ⅳ期の土器（第76図173～182）

173の斜行沈線は半截竹管を使用している。174は垂下する2本の隆帯と地文を矢羽根状沈線で充塡しているが、その技法や胎土からみてⅣ期の土器と考えられよう。175は地文を縄文で充塡している。176～182はすべて条線で、他の文様がみられずこの時期の土器と考えた。

6類　東海系の土器（第76図183、図版31）

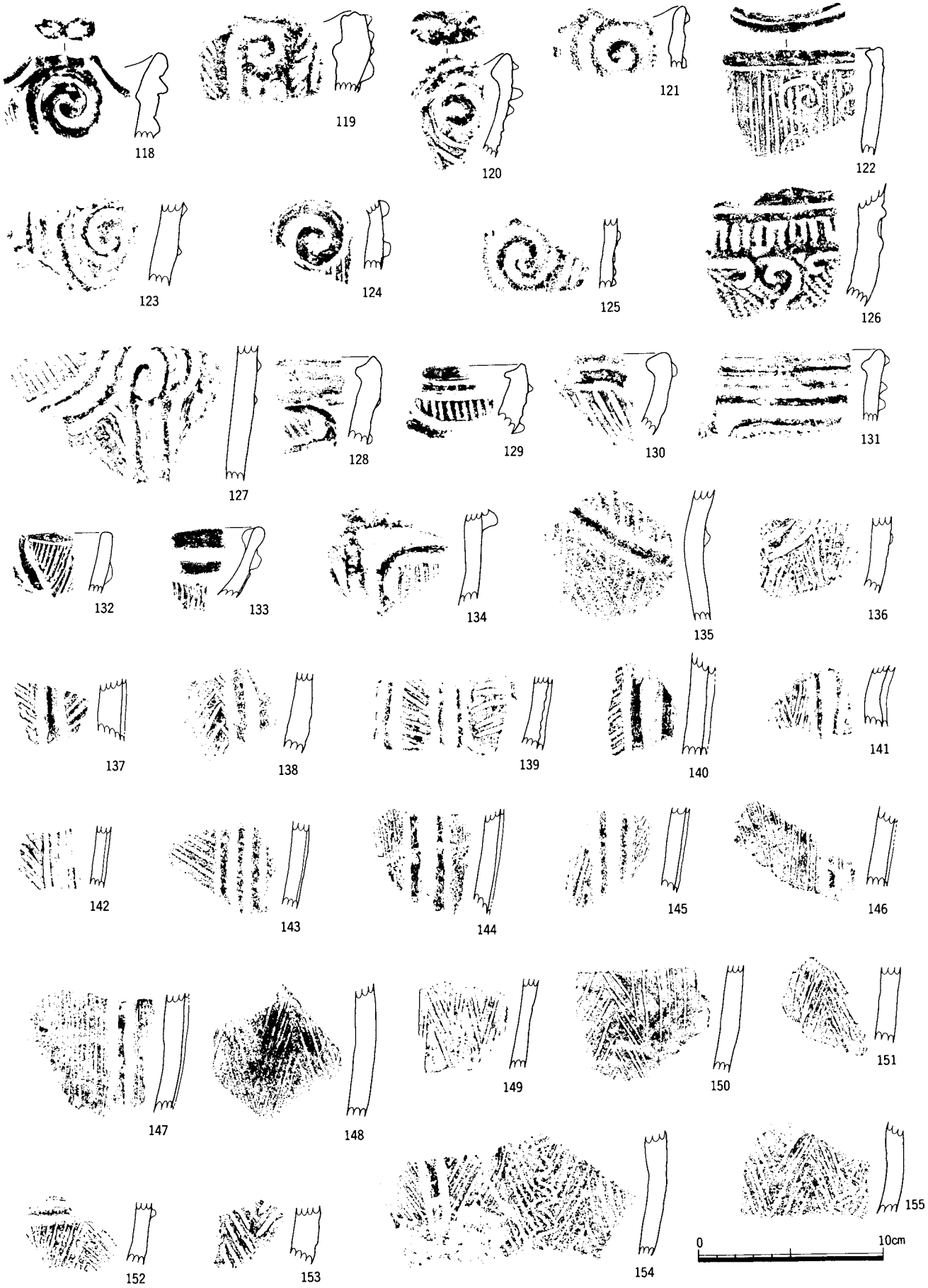
183一個のみである。これは第6号住居跡（第45図31）、第8号住居跡（第54図66）で記述した咲畑式土器と同一である。キャリパーの一部で弧状沈線の内部は RL の縄文で充塡されている。

7類　在地的な土器（第76図184～188・第77図189～204、図版31）

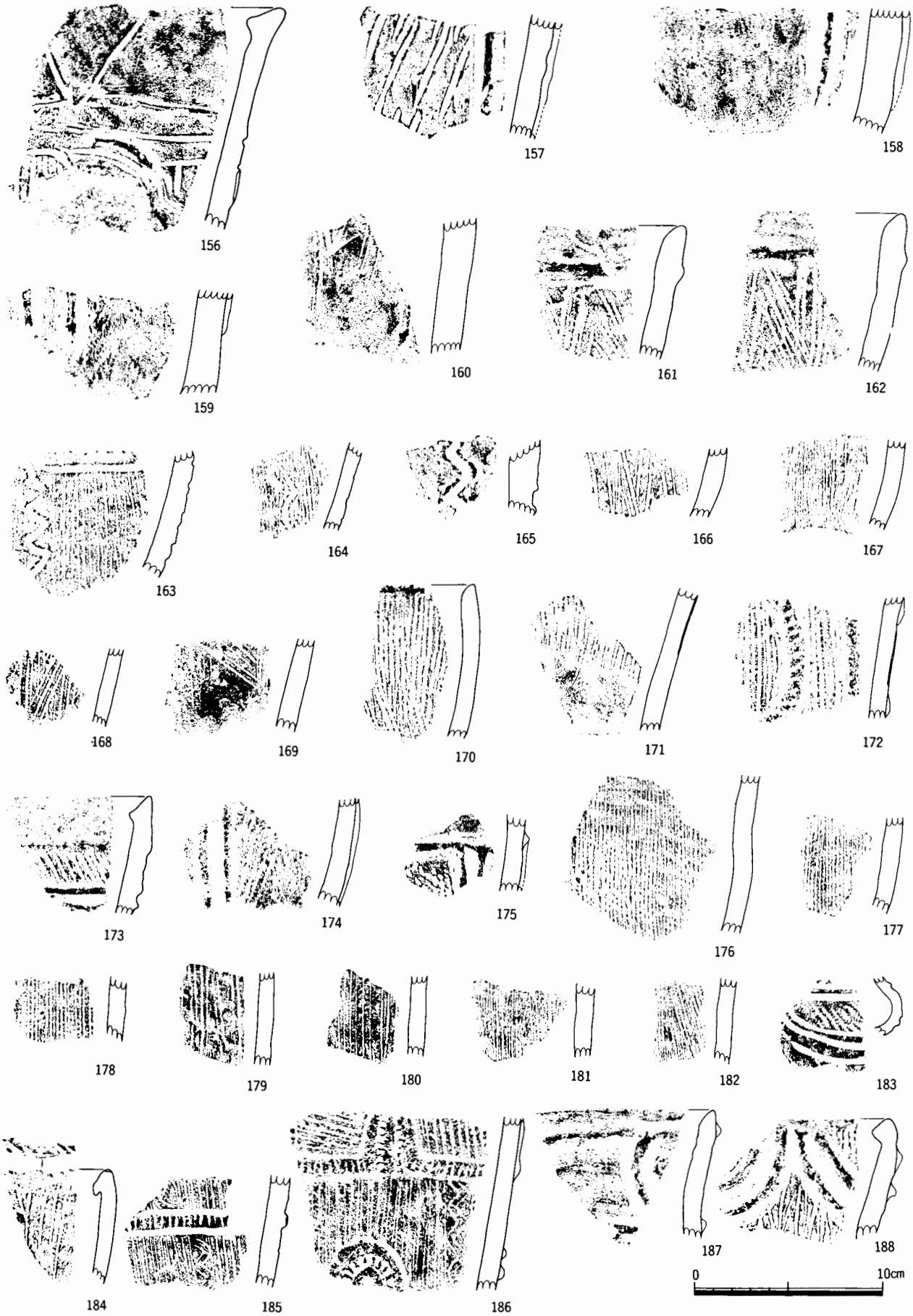
信州の影響をつよく受けていると思われるが、技法やモチーフに違いがあると思われるものを本類とした。184は縦の沈線で口唇部にキザミが施されている。192はキザミはないが共に在地的で、唐草文系Ⅰ期に併行すると考えられる。185・186は隆帯にキザミを入れ、地文の沈線、蛇行懸垂文は半截竹管を使用している。これについては何度か述べてきたが、ここでは在地的な類に入れてみた。胎土に白い砂粒、雲母、石英を含みにぶい黄褐色を呈している。時期は唐草文系Ⅱ～Ⅲ期であろう。

187は隆帯のみ、188の隆帯は区画文になると思われ、内部は櫛歯状工具による沈線で充塡されている。胎土に砂粒、石英を含み色調は黒褐色を呈している。時期は同じく唐草文系Ⅱ～Ⅲ期であろう。189は棒状工具で押し引き沈線を2本つけ、その間を隆帯とし三角の列点文が施されている。白い砂粒を含み明赤褐色。190は口縁部より段々状に形成され、段毎に櫛歯状工具による施文がみられる。191は櫛歯状工具を使用したと思える沈線の上に、蛇行懸垂文を施している。色調は共ににぶい黄橙色を呈している。時期は何れも中期後葉としか言えない。193～196も信州の影響を受けた在地色の強い土器と思われる。

197～204は条線や撚糸文等を地文として、頸部近くにリボン状突帯を有する土器で在地的と認識してきた。確かに幅広のリボン状突帯はそれで良いと思われる。しかし、幅の狭い同系の模様は勝坂式土器に多いことは広く認識されている。従って、ここに報告する土器は中期後葉であることは間違いないと思うが、なんらかの形で関東の影響を受けているのでないかと思われる。このことから考えると、205の土器はリボン状とはいえ、勝坂式土器に併行するのでないかと考える。



第75図　包含層出土縄文土器III群(4)



第76図　包含層出土縄文土器III群(5)

８類　コンパス文のある土器（第77図206～209、図版31）

コンパス文を有する土器については、第７号住居跡第47図の５・６、第９号住居跡の第57図の42・43でも述べたように、時期的判断の難しい土器でここに掲げたが、これも中期中葉と考えたい。

９類　縄文が主体の土器及び底部（第77図210～227・第78図・第79図266～277、図版31・32）

210・211は地文は縄文であるが、半截竹管による弧状沈線がみられ同類と考えられる。しかし、縄文はＬとＲである。210には補修孔がある。212も縄文に沈線がみえる。213～227は部位は各々だが、RL の縄文が施文されているものを掲げた。

228～247までは撚糸文を一括した。撚糸文土器については第２・６・７・８号住居跡でも、それぞれ述べてきたのと同類で重複するものもあると思う。228・229には弧状沈線がみられ、237～239には蛇行懸垂文が施されている。

248～257の土器は LR の縄文を一括した。252は口縁内部にも縄文が施されている。その他縄文の大きさや斜位に変わりはあるが、詳しくは撚糸も含めてわからない。

258～260は同一個体であり、262･263も含めて幅広の沈線による区画文が施されている。263は口縁部で外反してたちあがるが、北陸の影響だろうか。264も幅広の沈線がみられ、265は単なる沈線が施されている。何れも中期後葉の土器と思われる。

266～269は同一個体で、口縁部を除いて器形がうかがえる。地文は RL の縄文で胴部に幅広の弧状沈線が施されている。胎土に多くの白い砂粒や石英を含み明赤褐色を呈している。270もであるが、胴部に文様は無いようである。底部の網代痕は２本超え、２本潜り、１本送りである。

271～277は底部のみである。271～276は網代圧痕で、271～273は１本超え、１本潜り、１本送り、274は２本超え、２本潜り、１本送りで２本組で編んでいる部分もみられる。275は２本超え、１本潜り、１本送り、276は２本超え、２本潜り、１本送りである。277は簾状圧痕と思われる。

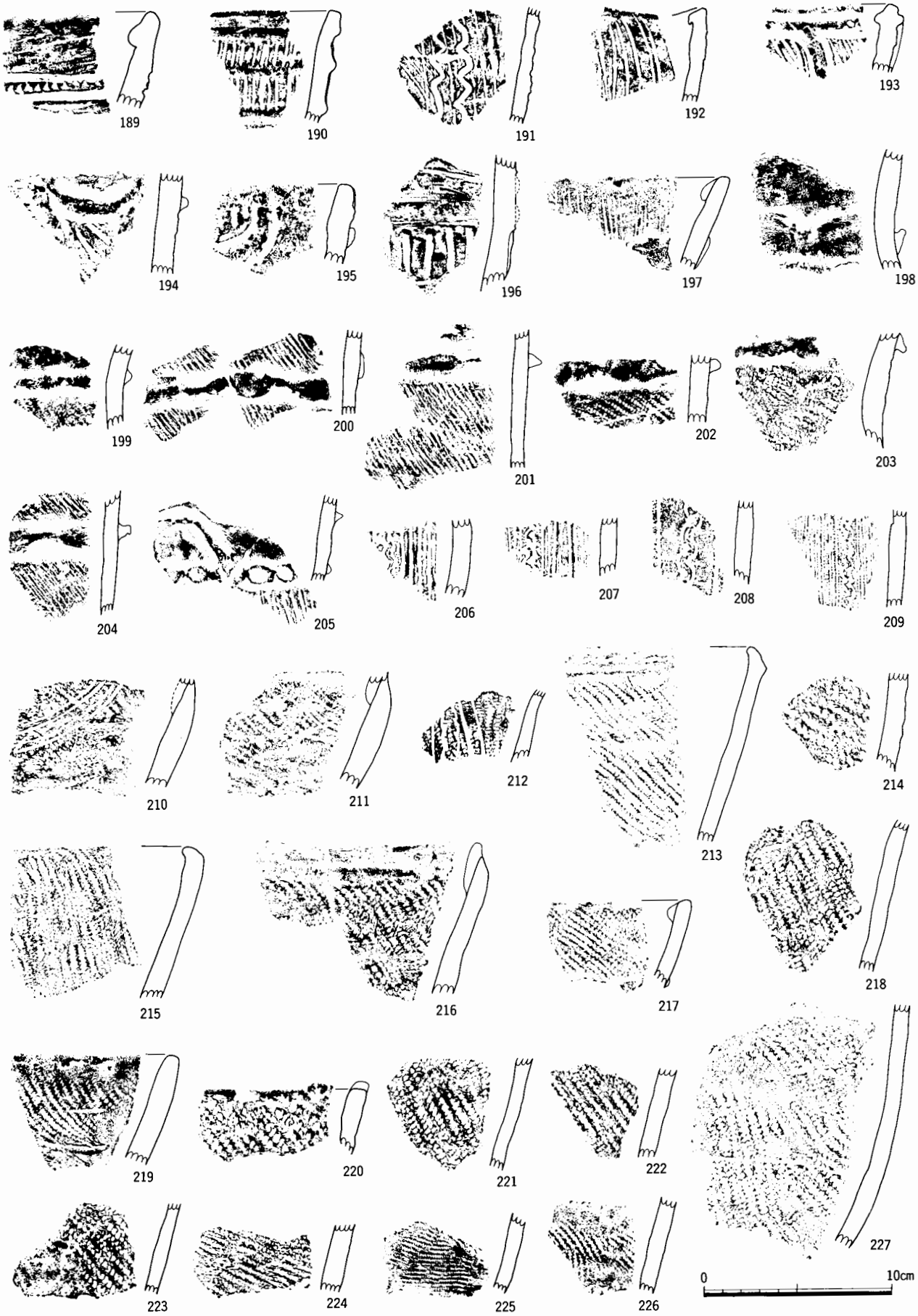
10類　その他の土器（第79図278～281、図版32）

278・279は同一個体である。口縁部で外反する。幅広の半截竹管を使用して、文様を施しているように見えるがはっきりしない。胎土に長石、石英を含み灰黄色を呈している。

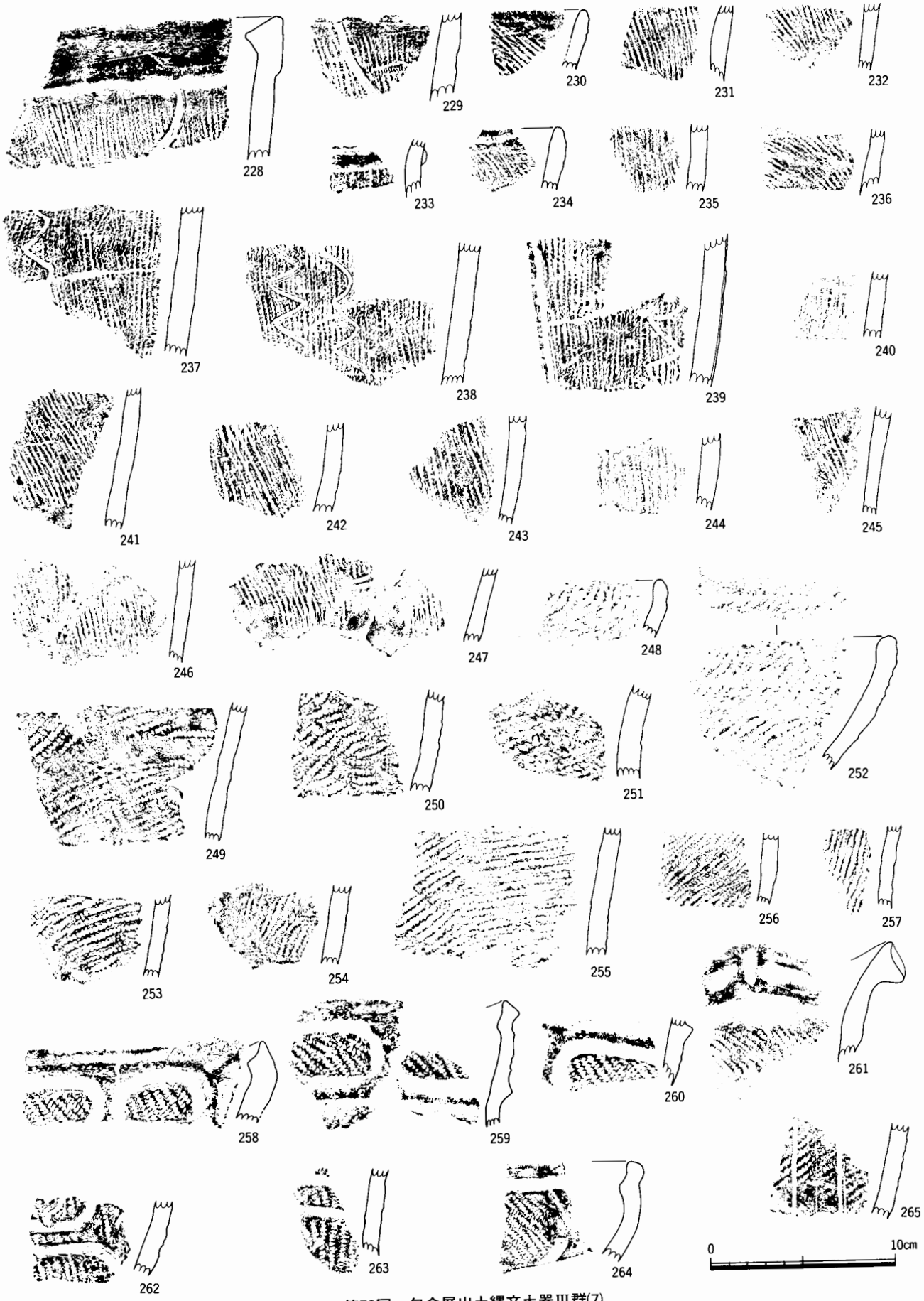
280はＭ９区から出土したものである。指紋を伴う指頭圧痕が認められる他、複数箇所に指紋が残る。裏面には粘土のヨレが何らかの圧痕かと推測される性格不明の溝状の凹が２段認められる。他の粘土塊に比べて素地が柔らかく、十分に捏ねられていない段階の粘土のようである。最大約1.4cmとし、直径0.8～１cmほどの白色礫が含まれる。浅黄色を呈する。

281は土製玉である。穿孔には直径２mm程の棒状工具が用いられ、孔内の観察から実測図の下から上に向って、工具を回転させながら貫通させていることが判る。上部の開口部から放射状に８本沈線が引かれている。施文に用いられたのは幅２mm程の平工具であると考えられる。個々の沈線の引き方は一様ではなく、工具をそのまま押しあてて引いた幅広のもの、工具圧痕と思われる微弱な細い線を残すものや、工具を器面に対して鋭角にあてて引いたと思われるＶ字状の断面をもつものが見られる。色調は橙色を呈する。焼成は普通である。

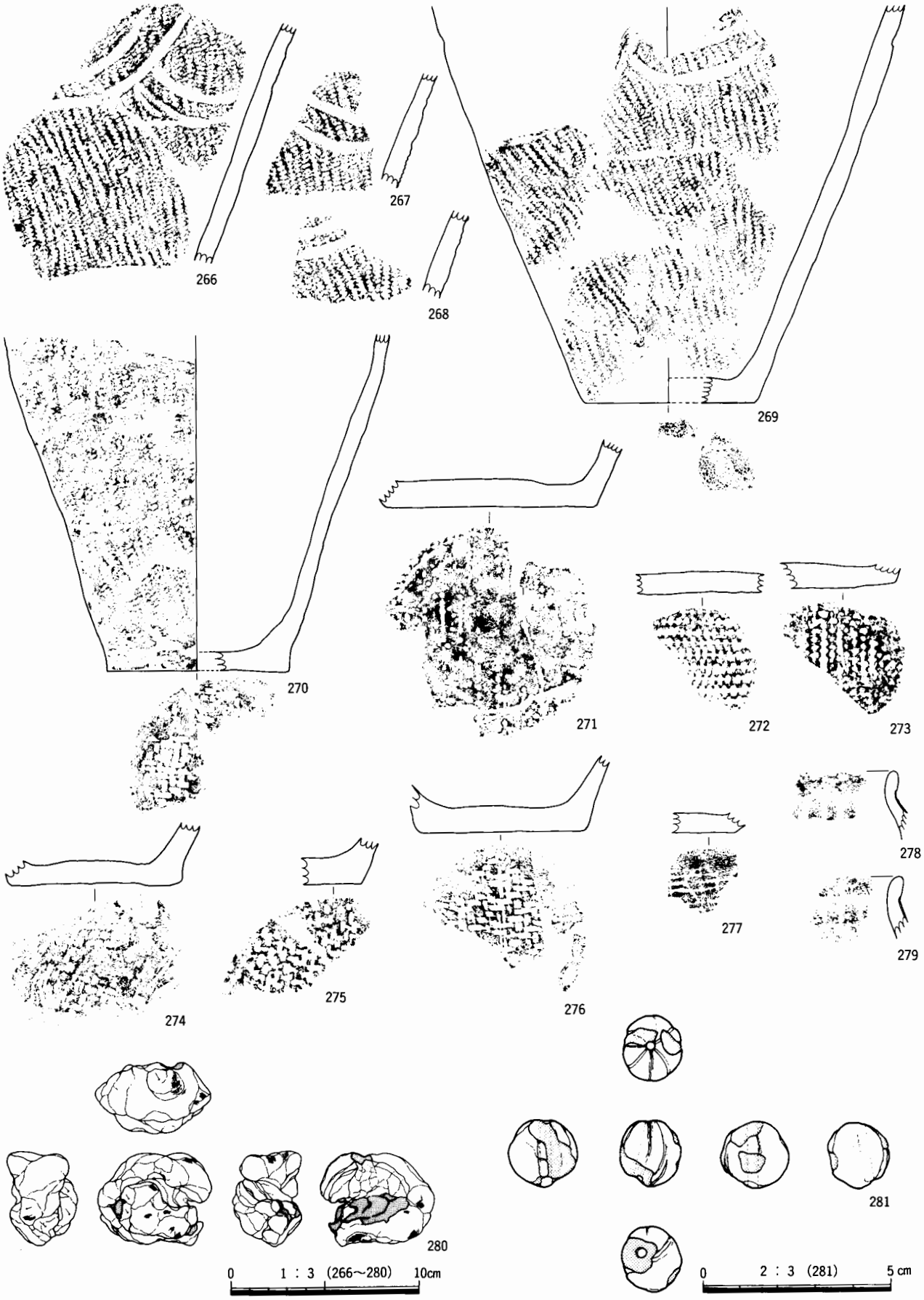
（野村　宗作）



第77図　包含層出土縄文土器Ⅲ群(6)



第78図　包含層出土縄文土器Ⅲ群(7)



第79図　包含層出土縄文土器Ⅲ群(8)

Ⅳ群　縄文後晩期の土器

縄文時代後期前半から晩期末までの土器である。ただし、平成６年度に調査されたＡ地点で出土した土器をⅣ群としたので、一部後晩期以外の土器も含まれる。７類に分類した。３類と４類については大洞Ｃ２式併行期までを晩期前半とし、大洞Ａ・Ａ′式併行期のものを晩期後半として分類した。詳細はそれぞれの所で記述する。

１類　後期前半の土器
２類　後期後半の土器
３類　晩期前半の土器
４類　晩期後半の土器
５類　粗製土器
６類　その他の晩期の土器
７類　その他の時期の縄文土器

１類　後期前半の土器（第80図１～15、図版33）

１は口縁部をＬ字状に内折させ、内折部で粘土をややせり出させる。細い隆帯と沈線で同心円状の文様を描く。口縁端部は破損しているが文様から半円形の波状口縁を呈すると思われる。２は内折部のせり出しが強くＴ字形を呈する。断面三角形状の細い隆帯で同心円の文様を描く。３は辛うじて口縁部が残存しており胴部上半までを図上復元した。１・２同様の細い隆帯で施文する。口縁と頸部の隆帯が交わる部分を三角形に区画し口縁では刺突を施している。地文は縦縄文である。

５～９は同一個体と思われる。５は口縁部で内外面に同様の文様を施す。９から判断して頸部でくびれ、胴部が膨らむ３のような器形の土器の可能性が考えられる。

10～13は沈線で区画しその内に縄文を充塡するものである。10は渦巻状の沈線を描く。12は外面に赤色塗彩されている。14は肥厚させた口縁部を縦の隆帯で区画しその内を沈線で横展開に施文する。

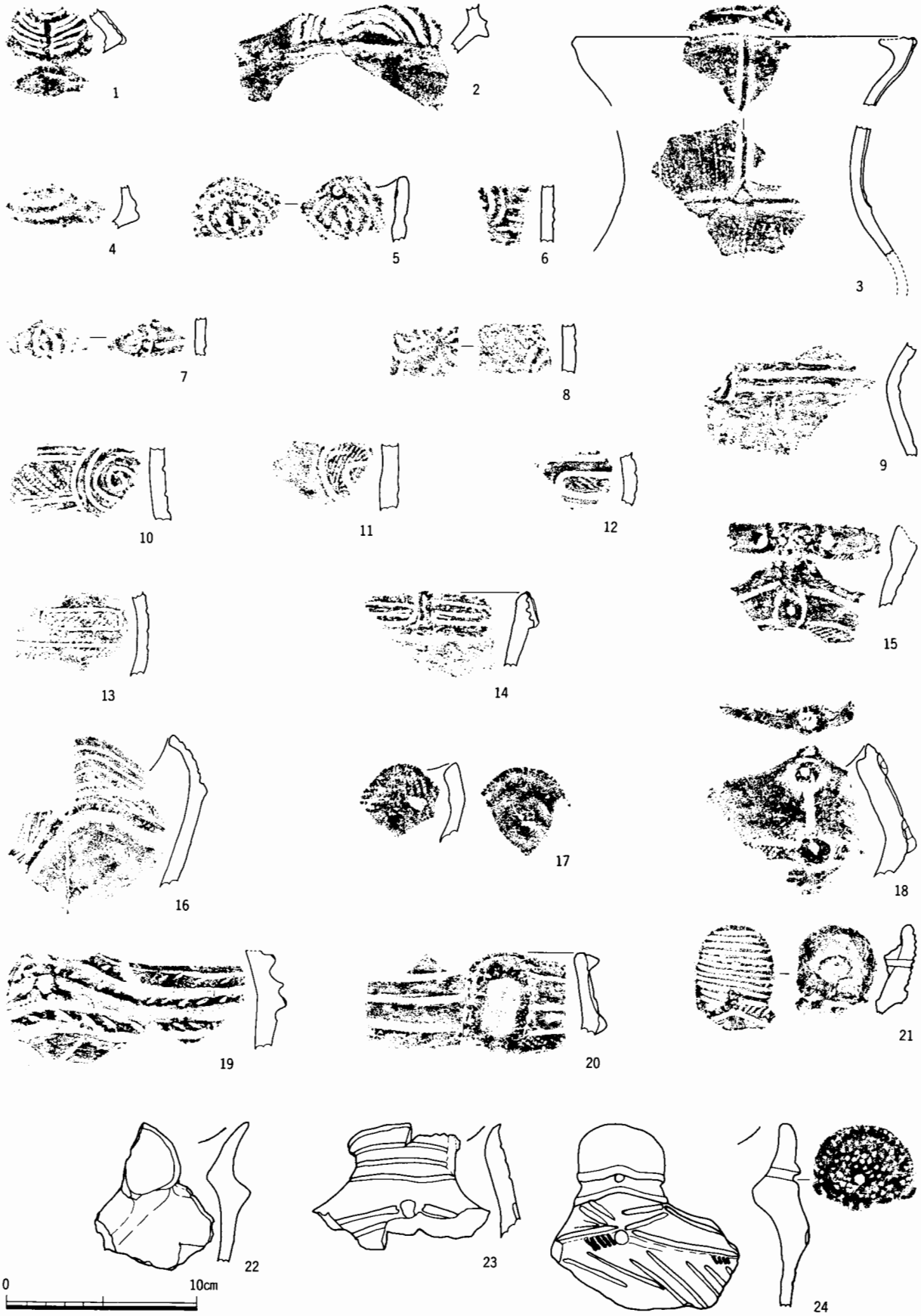
15は加曽利Ｂ式に比定される。（・）状の施文が波頂部直下に施されている。突起がついていたものと思われる。

２類　後期後半の土器（第80図16～24・第81図・第82図59～89、図版33・34）

器形・文様などから４細分する。

２ａ類　大波状口縁土器（第80図16～24）

16～24は大波状口縁を有する土器および大型の突起を有する土器である。16は口唇直下を隆帯で波状に区画しその上部を沈線で施文する。沈線は４本引かれそのうち３本が集約し、波底部の沈線と対称形を描く。17は縄文が施文される。18は波頂部内面に指圧痕状の刺突をつける。外面には粘土を小円形に貼付しその上から刺突を施し沈線で結ぶ。19は隆帯上を刻み波頂部外面に刺突を施す。21は24と同じような形状となる突起部。20は内彎する口縁を持つ鉢形土器で３条の沈線が引かれ、楕円形の貼り付け隆帯で区切る。隆帯および頸部に縄文が施されている。22は耳状の突起。23は突起中央に刺



第80図　包含層出土縄文土器IV群(1)

突を施しそこから沈線を左右に引く。24は矢羽状沈線を有し、突起部中央に23同様刺突を施し沈線が放射状に引かれる。突起上半中央に穿孔がある。擦痕は観察できない。突起内面全体に刺突を施す。

２ｂ類　矢羽状沈線を有する土器（第81図25～45）

25～38は矢羽状沈線を有する土器である。25は大波状口縁土器で、鋭く尖った施文具で矢羽状沈線を描く。口縁に沿った沈線も矢羽状沈線と同様の施文具で引いている。口縁内面を肥厚させ段を形成している。34は口縁部と胴部上端にLRの縄文を施しその下は縦縄文である。矢羽状沈線は右上がりと右下がりを交互に繰り返して３列を成す。矢羽状沈線の上下に２条の沈線を巡らせている。口縁内面を肥厚させ段を形成する。36は口縁部の縄文帯の上に矢羽状沈線を施している。

39～45は内彎する口縁を持つ鉢形土器である。頸部から内彎する口縁部に２～４条の凹線を引き瘤でそれを区切る。39・40・44・45の胴部には矢羽状沈線が展開する。39の内面には細い棒状具で粗い撫での痕跡がある。どれも口唇を丁寧に整形する。39は口唇に面を形成する。

39・40および44・45は２ｃ類の凹線が口縁外面を巡り、瘤・凹線・矢羽状沈線という３要素を持つ土器である。

２ｃ類　凹線文系土器（第81図46～58・第82図59～75）

47～58は口縁部以下全面地文に縄文が施され口縁部に数条の凹線が巡る一群である。凹線と呼ぶには幅が狭い沈線化したものもある。地縄文は胴部で縦に展開する傾向が伺える。59～62は口唇に沈線状の線の痕跡がある。粘土の貼り付けによるものか。67～75は５類粗製土器に含まれるべきものであろうが縄文施文の方法から後期のものと考えここに位置付けた。

２ｄ類　その他の後期後半の土器（第82図76～89）

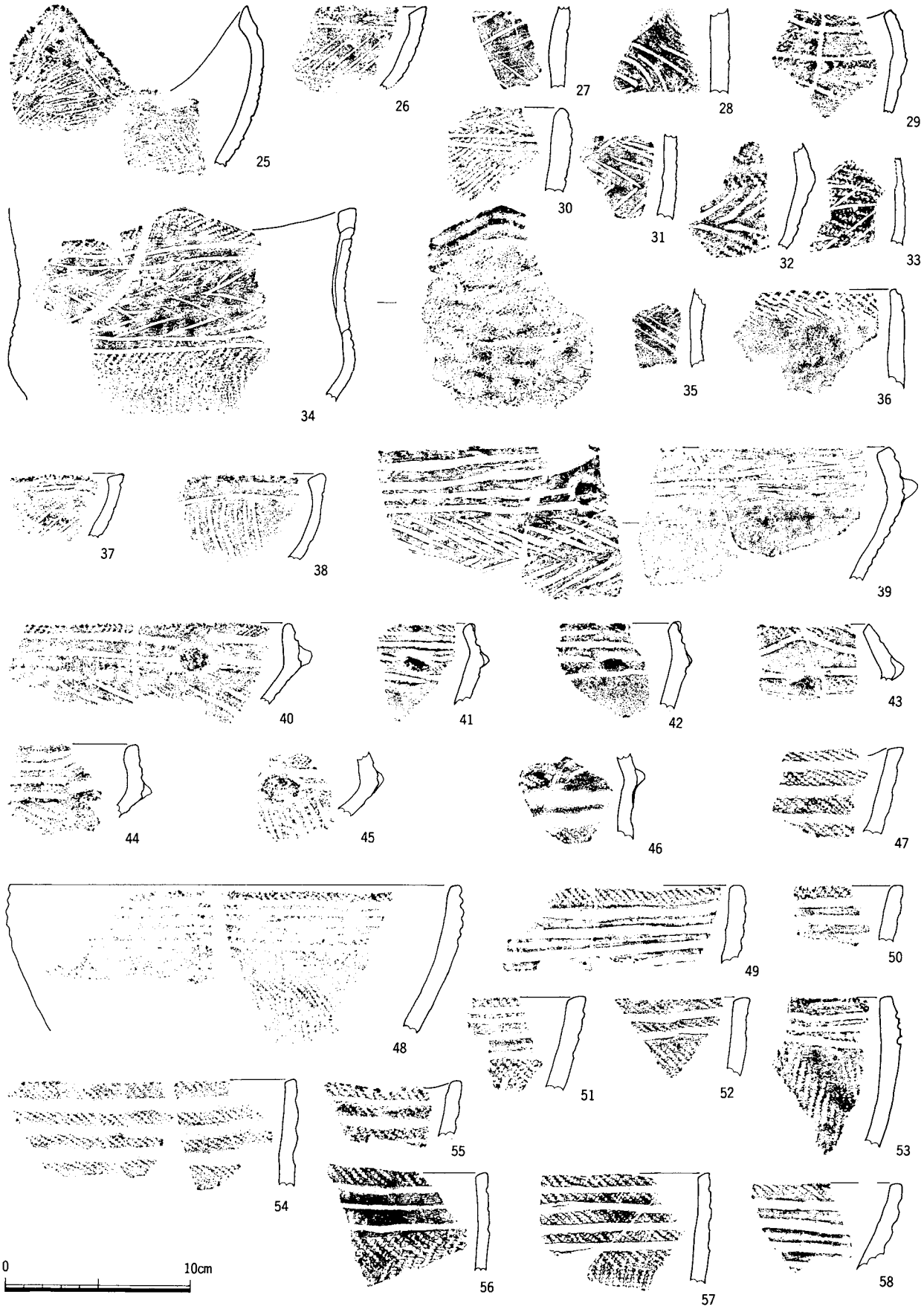
76・77は波状口縁深鉢の突起部で波頂部に指頭圧痕状の押圧痕がある。78・79は小波状を呈する。80は内彎する口縁外面に粘土瘤を貼付する。81と82は弧状に沈線で区画された内を擬縄文で充塡する。晩期に属するものかもしれない。83は口縁外面に１条の沈線を引き円形の刺突で止め、３条の縦短沈線で区切っている。

84・85は２ａ類かもしれない。

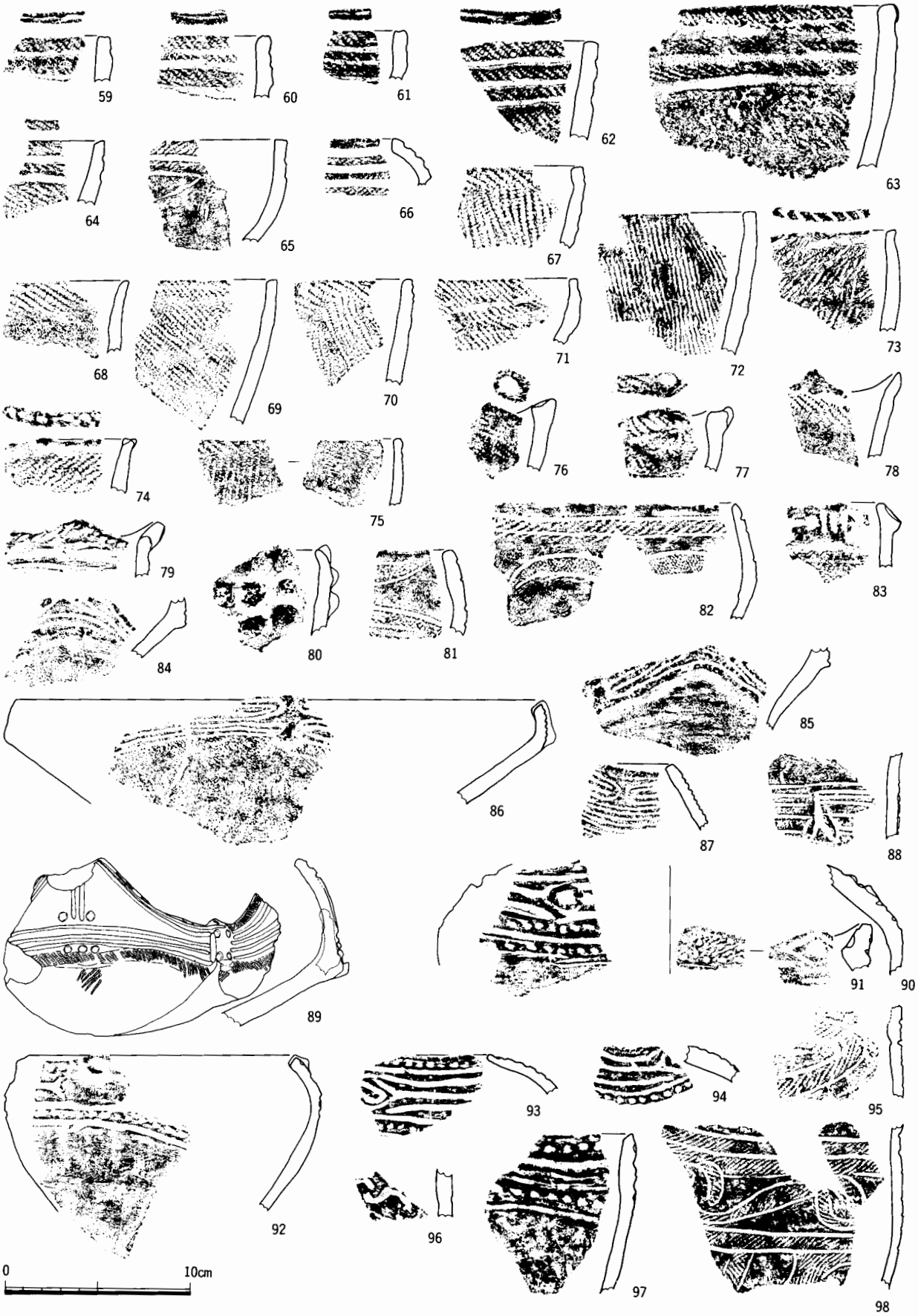
86～89は八日市新保式に比定される。86は口縁部が立つ浅鉢形土器である。７条の沈線が横走し縦に置かれた隆帯部で３ないし４条を単位として集約する。沈線を集約する手法は87でも同様である。88は楔形状に沈線を区切る八日市新保式特有のものである。89も２ａ類土器からの系譜を受け継ぐ土器である。器形は平面形が四角形状を呈する浅鉢形の土器であろう。84・85もこのような器形か。４単位と思われる大波状口縁の間には小波状が付く。瘤が付くことは２ｂ類の土器にもその影響を見ることができる。瘤は大小の波頂部に対応している。沈線を刺突によって止める手法は83の土器との繋がりを示唆している。細かな縄文が口縁部と胴上端にのみ確認できる。

３類　晩期前半の土器（第82図90～98・第83～88図、図版34～38）

器形・文様などから７細分した。



第81図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(2)



第82図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(3)

3ａ類　玉抱き三叉文、三叉文および入り組み文を有する土器（第82図90～98）

玉抱き三叉文、三叉文および入り組み文を指標とする晩期初頭の土器である。御経塚式に比定される。いずれも焼成堅緻である。91・94・96・97以外は比較的薄手である。２ないし３列の列点間に玉抱き三叉文や三叉文を描く。文様展開は頸部までで胴部は無文となる。90の胴部は黒く、磨かれている。91は波頂部内面に玉抱き三叉文を施し外面は地文擬縄文に刺突を施している。

3ｂ類　鍵手文を有する土器（第83図99～112）

99は浅鉢で、列点を境にしてそれより上半口縁までは地縄文の上に沈線で鍵手文を描く。鍵手文は上下の列点間に施される。列点より下部は無文である。外面に赤色塗彩がなされる。内面は丁寧に磨かれ口唇直下に１条の細い沈線を巡らせている。101･102は口縁部直下に鍵手文を持つ。101は波状口縁である。100・103～109は胴部に鍵手文を有する。105・106は頸部に列点、胴上半は無文、その下に鍵手文を有する文様帯を持つ。頸部は「く」の字状に屈曲し口唇に刻みを持つ。106・109は列点で囲まれた文様帯は地文が擬縄文である。110は「く」字状に屈曲する頸部を持つ深鉢で胴部に鍵手文の変形と思われる文様帯を持つ。列点を有しない。111と112は列点のみで鍵手文は確認できない。

3ｃ類　頸部に列点を有し口縁部が「く」の字に屈曲する器形の土器（第83図113～120、第84図121～129）

頸部に列点を有する土器を一括した。114～116・122・127は擬縄文を地文とする。いずれも頸部が「く」の字状に屈曲する器形である。口唇を刻むものとそうでないものがある。

113・121～129は口縁内面または口唇に凹線または沈線を引く。126は口唇に刻みを持ち頸部の列点と直行する２列の列点がある。波状口縁を呈する。124・125・128は沈線間に列点を持つ。

3ｄ類　列点間に「工字文」や「入組み風工字文」を有する土器（第84図130～146、第85図147～171）

列点間の文様帯に「工字」状および「入組み」状の文様を幅広の沈線によって描くものを一括した。器形は確認される限りでは内彎する口縁を持つ鉢と外反する口縁を持つものがある。列点間の文様帯は口縁部に付くものと胴部に付くものがある。列点は棒状施文具による刺突列で文様帯の上部は１列下部は２列という傾向があるが下部が１列のものもある。列点は２条の沈線間に施されるが文様帯上部のものは沈線の外に並ぶ場合が多い。

130は口縁が内彎する小型の深鉢である。口縁部に文様帯を持つ。小突起が付くが形状･数は不明である。６条の横走する沈線の上から３条目と４条目を上下交互に三角形に削り出している。底部から胴部にかけて煤が付着している。131は130と同器形となる深鉢である。文様構成・施文方法とも同様であるが文様帯下部の列点は２列である。また、突起は確認できる限りではＢ突起と一般に呼ばれるものを中央に配しその左右に小突起が付くものを１セットとし４単位で構成されることが予想される。胎土はにぶい橙色でこの時期のものに特有の胎土色である。132は本類中やや異色の文様構成を持つ。口縁部文様は他のものと同様の展開を見せているが胴部に垂下する列点と沈線が特徴的で、沈線端部は３ｅ類に見られる対称形の曲線を描く。口縁内面には沈線が巡り口唇はやや外反ぎみに立ち上がる。小突起付き小波状である。接点は確認できないが脚付きでワイングラス状の器形となる可能性

も考えられる。133は外反する口縁を持つ器形のもので文様帯は胴部に展開する。口縁内面には２条の凹線が巡り上１条は突起部で「枝」状となる。口唇には突起が配列される。134～146は口縁部破片で内彎するものが多い。134は口唇がやや外反する。135・136は波状口縁で136は外面に赤色塗彩が施される。137は小突起内に刺突痕を持つ。138は３条の列点を下部に持つ。文様は「入組み風工字文」である。144・145・146は突起または突起状の装飾を口唇に施す。144は口唇が外反気味にせりだす。146は大きくせりだす。147～165までは主に胴部文様と思われるものの破片である。にぶい橙色を呈する胎土のものが主体を占める。158・159は「入り組風工字文」の文様を持つもので確認できる限りではこの２点である。「工字文」の文様では直線的なものと150や155などのように相対する三叉状の削り出しにそって曲線化するものとがみられる。列点の刺突方法等については一定の傾向は見られない。157は頸部の屈曲部に隆帯を持ちその上に列点が施される。

３ｅ類　列点を伴わない「工字文」や「入り組風工字文」を有する土器（第85図172～185・第86図）

列点を伴わない「工字文」や「入り組風工字文」を有する１群である。３ｃ類に比べ文様が粗雑化・粗大化する傾向がある。数条の凹線を口縁外面や頸部・胴部上半に巡らせその凹線を３ｃ類同様の手法で拡張させる。口縁は平口縁と思われる口縁部破片もあるが多くは小突起が付く波状口縁で内彎して外半気味に立ち上がるものと頸部から緩やかに外反するものなどがある。鉢または深鉢が主体である。173は口縁内面に傾斜する面部を持ち沈線を意識したと思われる施文の痕跡がある。177・178は「入り組風工字文」の文様構成である。182は「工字」または「入り組風工字文」の文様は確認できないが口縁部の形や内面が131等に代表されるものであることから図上復元した。176の口唇には指頭圧痕状のきざみがある。190は頸部から緩やかに外反する平口縁深鉢である。８条の凹線の上から３条目に「工字」状文が窺え口縁内面には２条の凹線が巡る。192・198・205は擬縄文を施す。198は土器の上下が逆転するかもしれない。201・202は４ａ類に近い。203・204は小波状を呈し内面にも沈線を引く。205から210は沈線を三角形に拡張する「工字」文のものとは異なった文様展開を呈するもので４類に含まれるものであるかもしれない。204までは沈線によって施文し、205以下は彫刻的手法で施文する。211と212は４類の可能性が高く、205以下は４類に含めるべきであるかもしれない。

３ｆ類　沈線端部が対称形に曲線を描く土器（第87図213～218）

213は内彎する口縁を持つ鉢で口縁部に５条の沈線を引きその間の沈線に端部が対称形に曲線を描く。最上部の沈線には玉抱き三叉文状の文様が見られる。211から213はそれぞれ胴部に沈線によって対称形の文様が描かれる。214は口縁内面に描かれる。215は浅鉢で口縁外面に対称形に曲線を描く。

３ｇ類　その他の晩期前半の土器（第87図219～237）

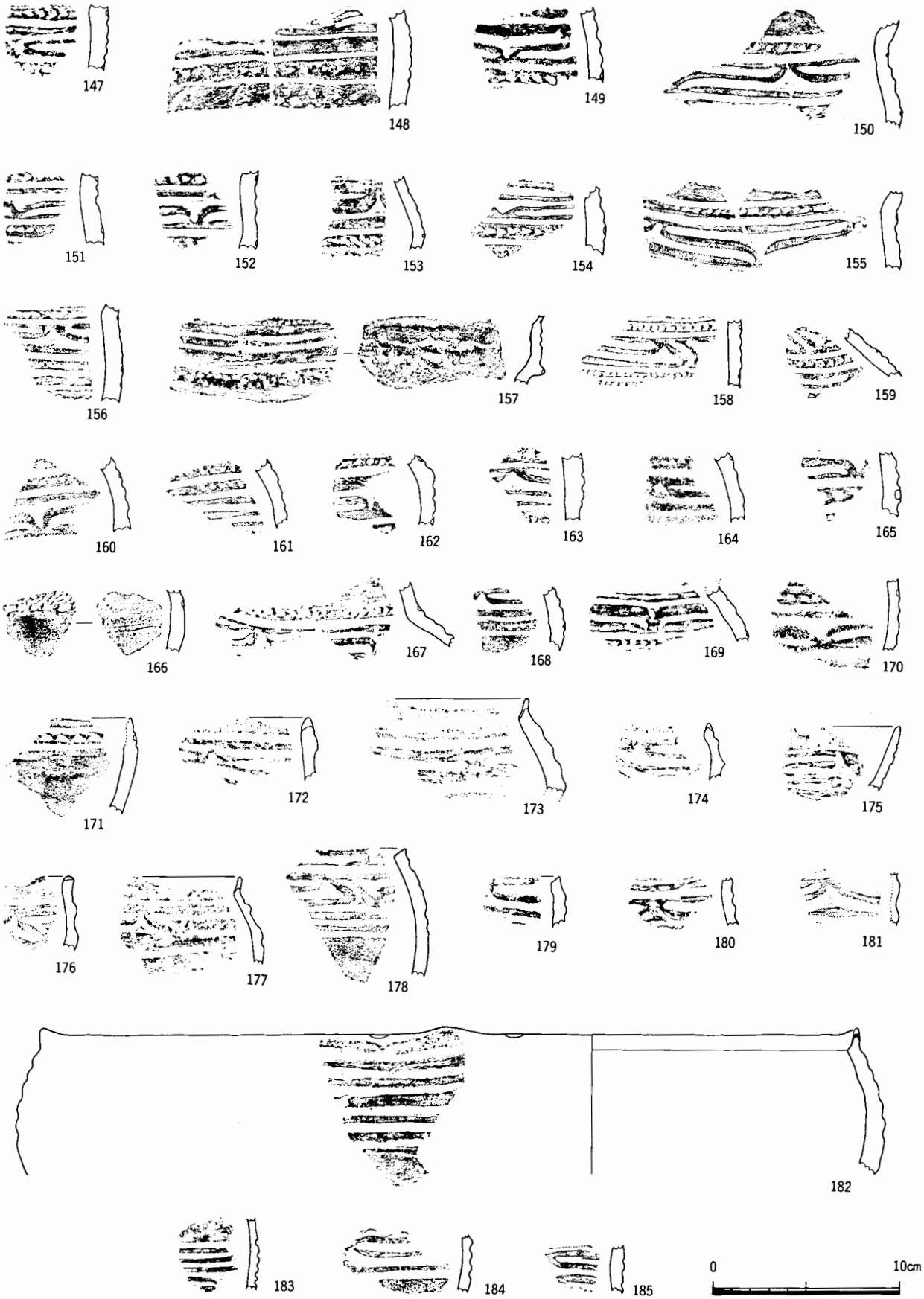
219～223は列点と沈線によってのみ文様を描く。列点は細く細かく施文される。焼成堅緻で器厚は薄い。

227・228は蓋か。227は沈線下に擬縄文が施される。229は矢羽状沈線状文様を沈線間に持つ。230の口縁外面は沈線のみであるが口唇には小突起が連続し沈線が巡る。

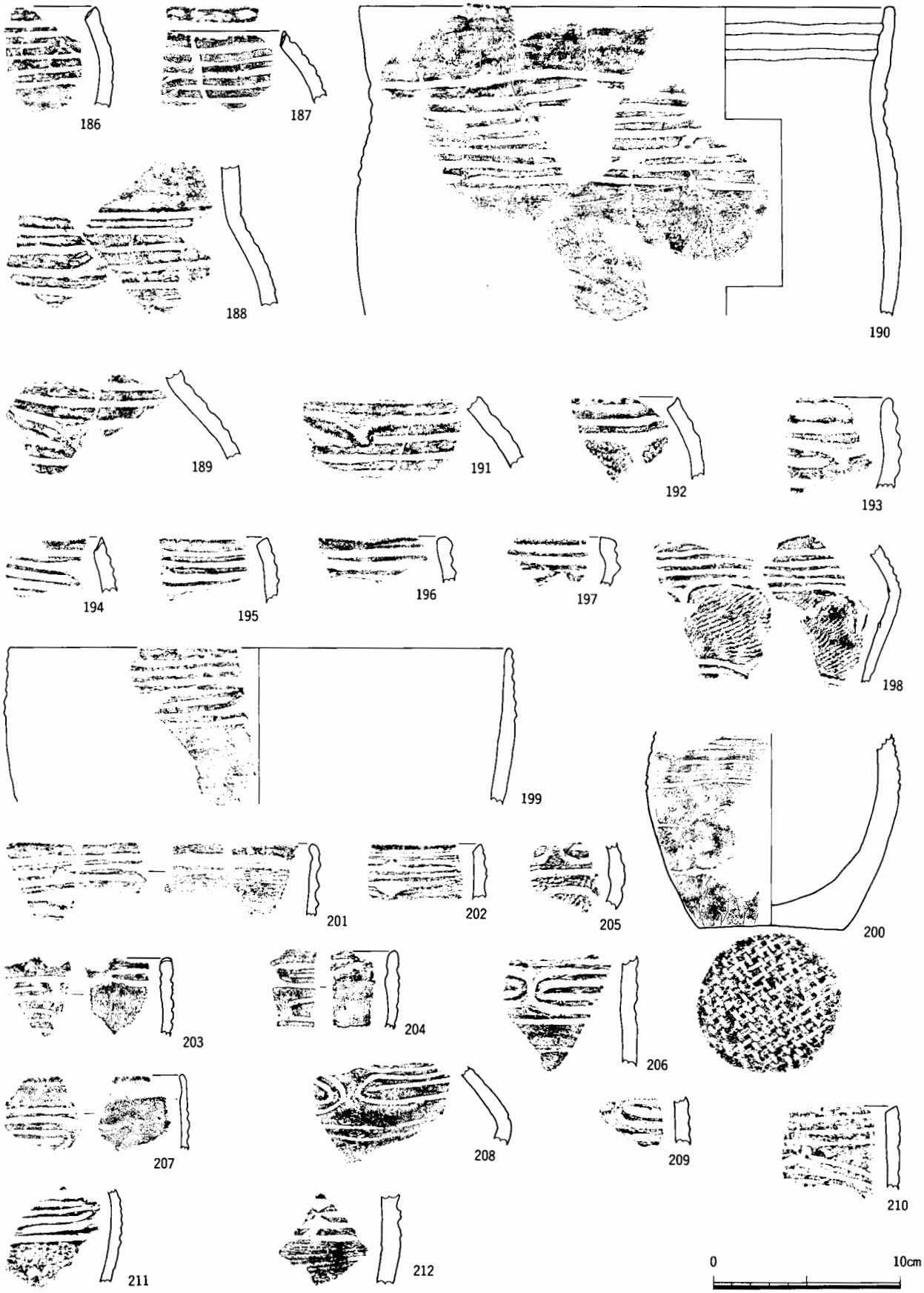
231・232はいわゆる隆帯文土器であろう。同一個体の可能性もある。断面三角形の隆帯を口縁外面

第83図　包含層出土縄文土器IV群(4)

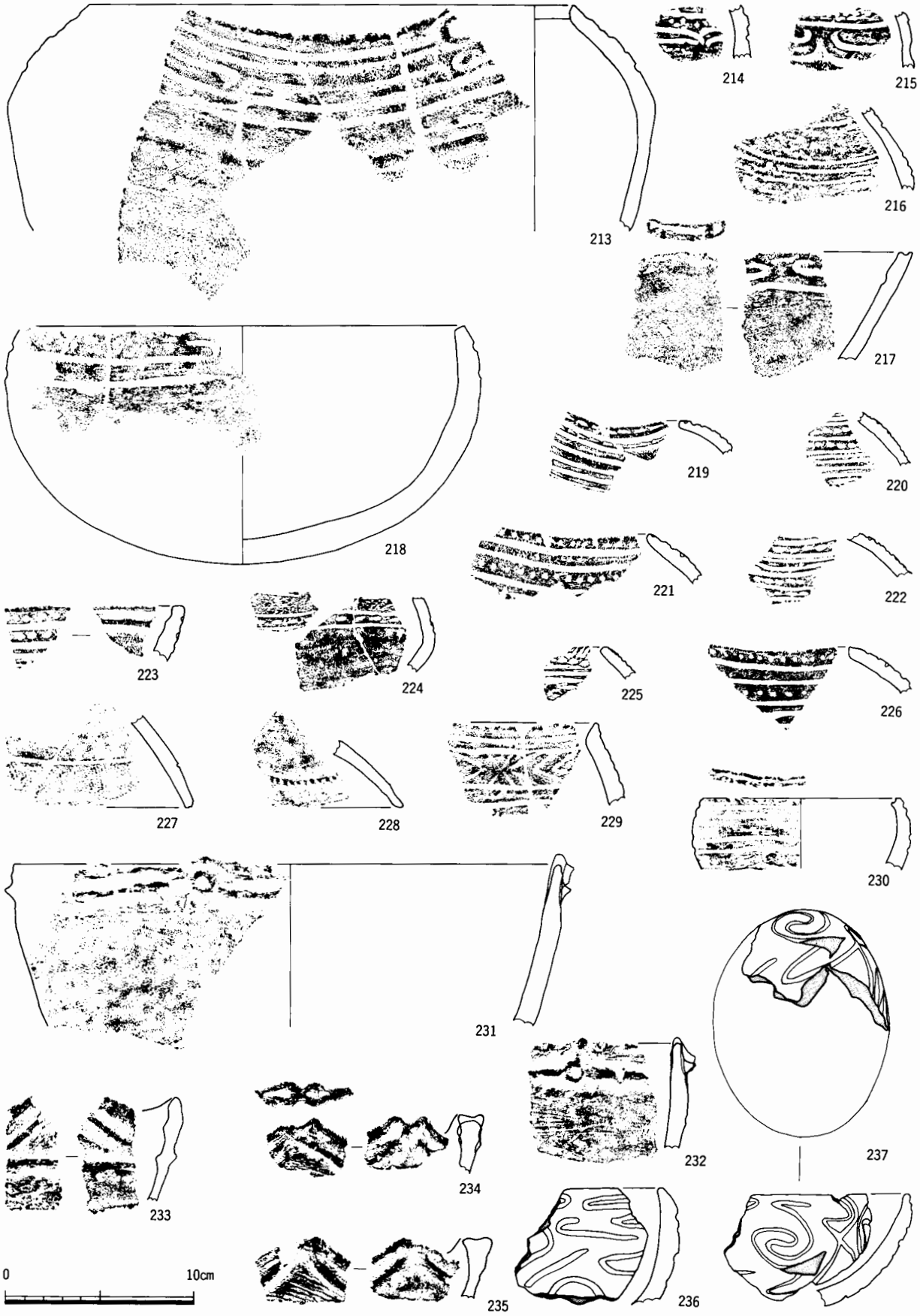
第84図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(5)



第85図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(6)



第86図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(7)



第87図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(8)

に巡らせ口縁突起下に押圧文を有する。

233～235は断面が三角形状となる隆帯を内外面に持つ。彫刻的な手法によることから４類に含まれるかもしれない。235は条痕が施される。

236・237は平面形が楕円となる椀状の小型土器で外面に沈線による独特の曲線文を描く。時期は不明であるが、あえてこの時期に位置付けた。237外面には赤色塗彩が施される。

３ｈ類　口縁内面に凹線を巡らせ突起を有し波状口縁となる半粗製土器（第88図238～254）

口縁内面の凹線が「枝状」の意匠をもつものが含まれる。土器外面の装飾は確認した限りでは皆無である。頸部に屈曲を持たせるものとそうでないものがある。器種は深鉢・鉢・壺形に頸部がすぼまるものあるいは坩形のものもある。

239は枝状の凹線を残す波頂部は１か所のみ残存した。４単位を想定して復元した。241は同様の器形であるが口縁は小突起が付くのみで波状にはならない。枝状の凹線が施されるかどうか不明である。240は坩状の器形である。内面に幅の広い凹線を巡らせ、１か所のみの突起を持つ。中央のやや大きい突起内面は三角形に削られる。

左右の小突起波頂部から刻みをいれる242は３個の突起をセットとする。突起の配列で恐らく４単位になると考えられる。中央の突起下内面で凹線は枝状になる。口縁内外面に一部赤色塗彩が見られる。

238は中央に刻みを持つ小突起を配しその左右に刻みのみを施す。４単位の小波状口縁の鉢である。内面には凹線を持たないが本類のなかに含めた。238から242までの土器の内外面は丁寧に調整されている。特に外面は丁寧ななで調整が施されている。242は内外面に煤の付着がみられる。243はわずかに外反する口縁で内面に面を形成し磨かれる。凹線が１条巡り粘土瘤を押圧した小突起が付き口唇に沈線を施す。244は１条の凹線が巡り口唇に瘤状粘土を押圧した小突起が付く。245は、波状口縁で内面に１条の凹線を巡らせる。246は波頂部下に枝状の凹線を持ち内外面が磨かれる。250も同様である。247は３条の凹線が巡り246同様に波頂部下に枝状の凹線を持つ。248は口唇を外反させるもので幅を持たせた口唇に沈線とそれを拡張させたり削ったりする装飾を展開させる。外面がよく磨かれる。249は内面を凹線と沈線によって描く。波頂部口唇に３か所の刻みを付けその中央の刻みに対して集束するように沈線を引く。254の枝状の凹線が変化したものと見る。

本類は外面に文様を持たないという点では粗製土器というとらえ方も可能である。しかし、胎土や外面の磨きなどから粗製の名に値しないものも多い。

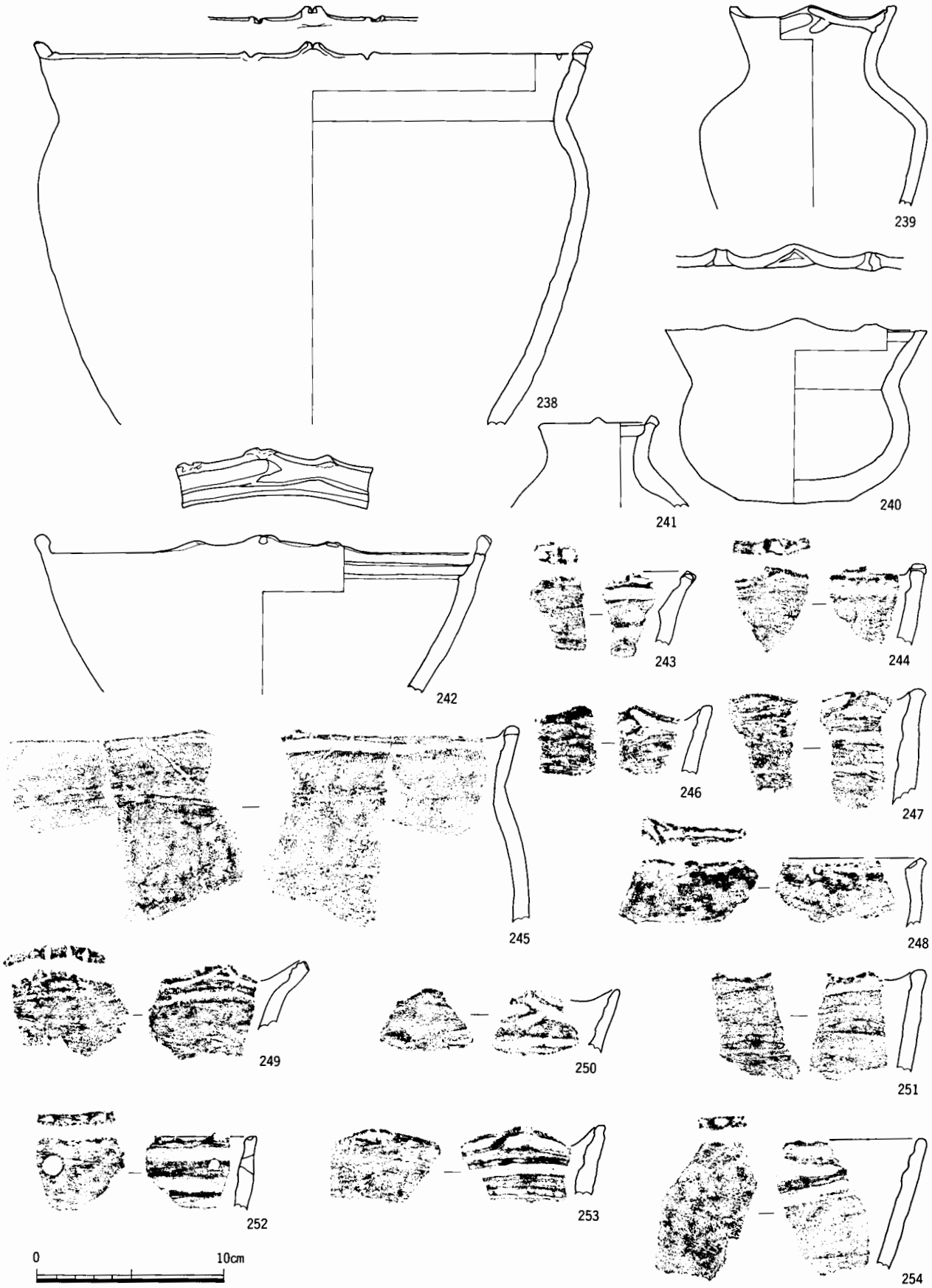
口縁内面の凹線については、大洞Ｃ２式以降に盛行するとされる。

４類　晩期後半の土器（第89～95図、図版39～43）

器形・文様などから11細分する。４類の主体はいわゆる浮線文と呼ばれるものである。ここでは施文の方法や形態によって細分し典型的なもののみを浮線文土器と呼称する。３ｅ類と類似するものがある。

４ａ類　沈線を上下に三角形状に拡張させ、沈線が集束する文様を描く土器（第89図）

225は一方向からのみ沈線を拡張させている。「工字文」をもつ３ｅ類に類似する。256は沈線の上下



第88図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(9)

を対称的に拡張させる手法と一方向のみを拡張させる手法の両者を合わせ持つ。さらに頸部では４ｃ類の突起を刻む技法も共存している。258は４段以上の沈線集束帯が粗雑に配列される。沈線の拡張には沈線を引いた棒状施文具が使用されていると思われ、施文具の繊維痕と考えられる微細な筋が観察できる。259も同様の手法で描かれていると思われるが外面に煤が付着し詳細には観察できない。260は内彎する口縁を持つ鉢形の器形である。261は粘土が柔らかい時に沈線の拡張を行っていることがよく分かる。262は沈線を拡張させた後にその拡張先端部に沈線を集束させる方法で施文する。279と同様の文様展開になるかもしれない。269は内面に赤色塗彩が見られ274は外面に残る。267・273・274は丁寧に磨かれ硬質となった器面に棒状施文具で集束する沈線を描く。277は口縁外面に短沈線が施され４ｉ類と共通する要素を持つ。土器製作時に開けられたと思われる穿孔がある。内面は細かな条痕を残し丁寧に調整される。278・279は丁寧に施文されて、279は文様展開の全体像が分かる資料である。４ｈ類に含めるべきものかもしれないが文様展開には本類の物との関連が深いと考え本類に位置付けた。穿孔が２個開けられる。補修孔ではない。小型の土器でいわゆる浮線文土器である。本類の中には丁寧に磨き出されたものと粗雑な施文方法のものがある。

４ｂ類　断面三角形状の突起を有するもの（第90図282～309）

断面三角形状の先端が尖る突起を有するもので、突起間は沈線で繋ぐ。沈線は彫刻的技法またはそれを意識したと思われるものが多い。また、無文部も磨かれることが多い。眼鏡状文またはレンズ状文と呼ばれるものがこの中に含まれだろう。口縁部破片以外は上下関係が不明なものも多い。頸部または胴上部に施文される場合と口縁外面に施文される場合がある。

288は口唇に沈線を巡らせる。291は口縁部に突起を伴う１条の沈線が巡り、凹線状に磨き出した無文部を挟んで３条の沈線を引く。292は口縁部は内傾し無文である。口縁内面が肥厚する。298は胴下半部は細密条痕が施される。293・307～309は小片だが丁寧な作りである。

４ｃ類　突起先端を刻むもの（第90図310～317）

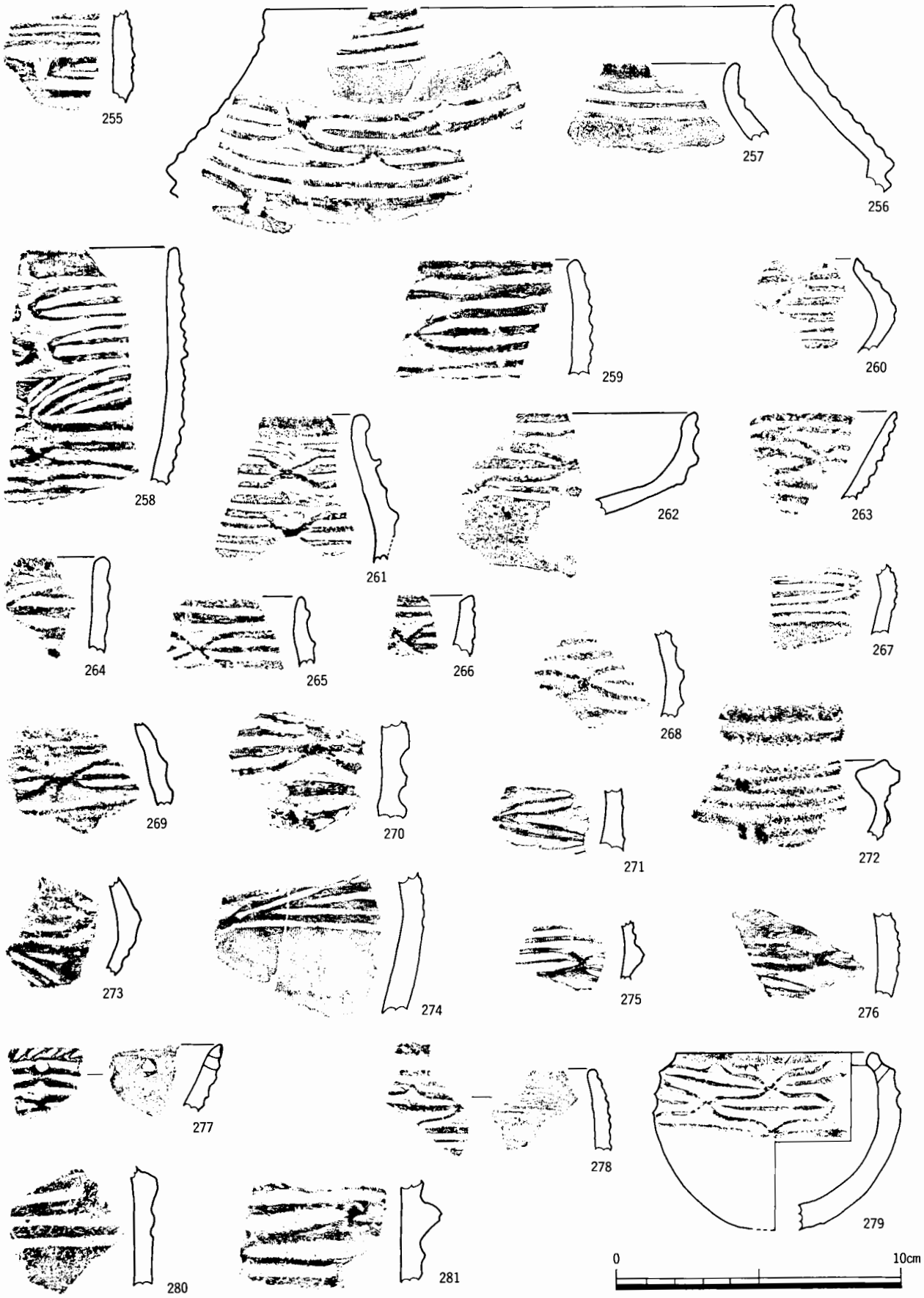
４ａ類に類似し瘤に対して複数の沈線が集束するものと４ｂ類に類似して１条の沈線で結ばれるものがある。刻み方は刺突状のものと大きな切れ込みとなるものとがある。310は口縁が内彎し口唇に沈線が巡る。314は穿孔を伴う。

４ｄ類　突起先端を押圧するもの（第91図318～329）

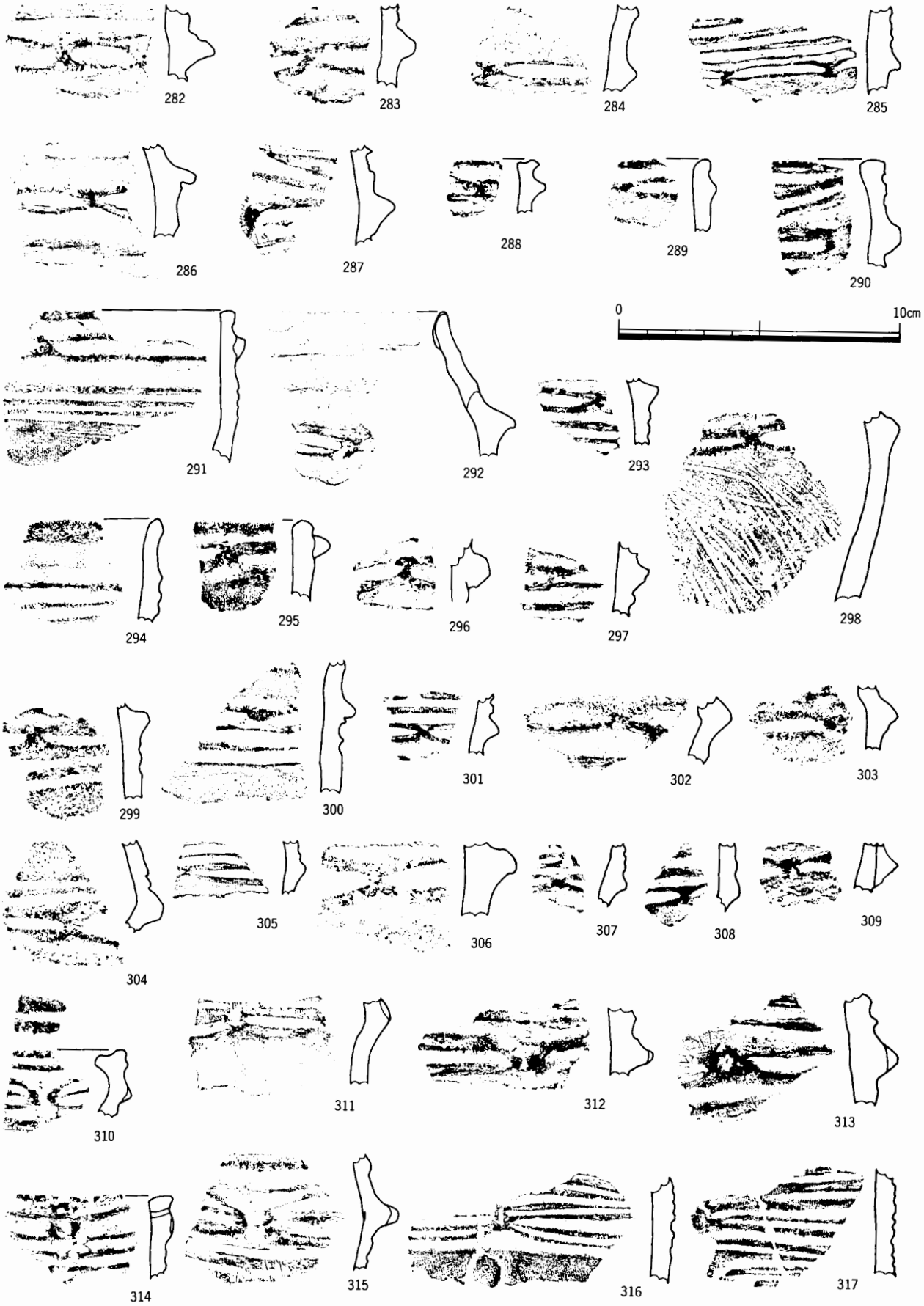
318・322は口縁部に突起がつく。325～328は胴部に突起がつき、周囲は条痕が施される。４ｉ類に含まれるものなのかもしれないが突起を伴うものとして本類に含めた。基本的には４ｂ類や４ｃ類と施文方法など共通する部分が多いと考えるが条痕を伴うものはやや系統を異にするかもしれない。325の突起は刻まれる。328の突起の形状は尖り326などとは異なる。326の条痕は目の粗い条痕で328は細密条痕である。

４ｅ類　粗大なレンズ状文を有するもの（第91図329～333）

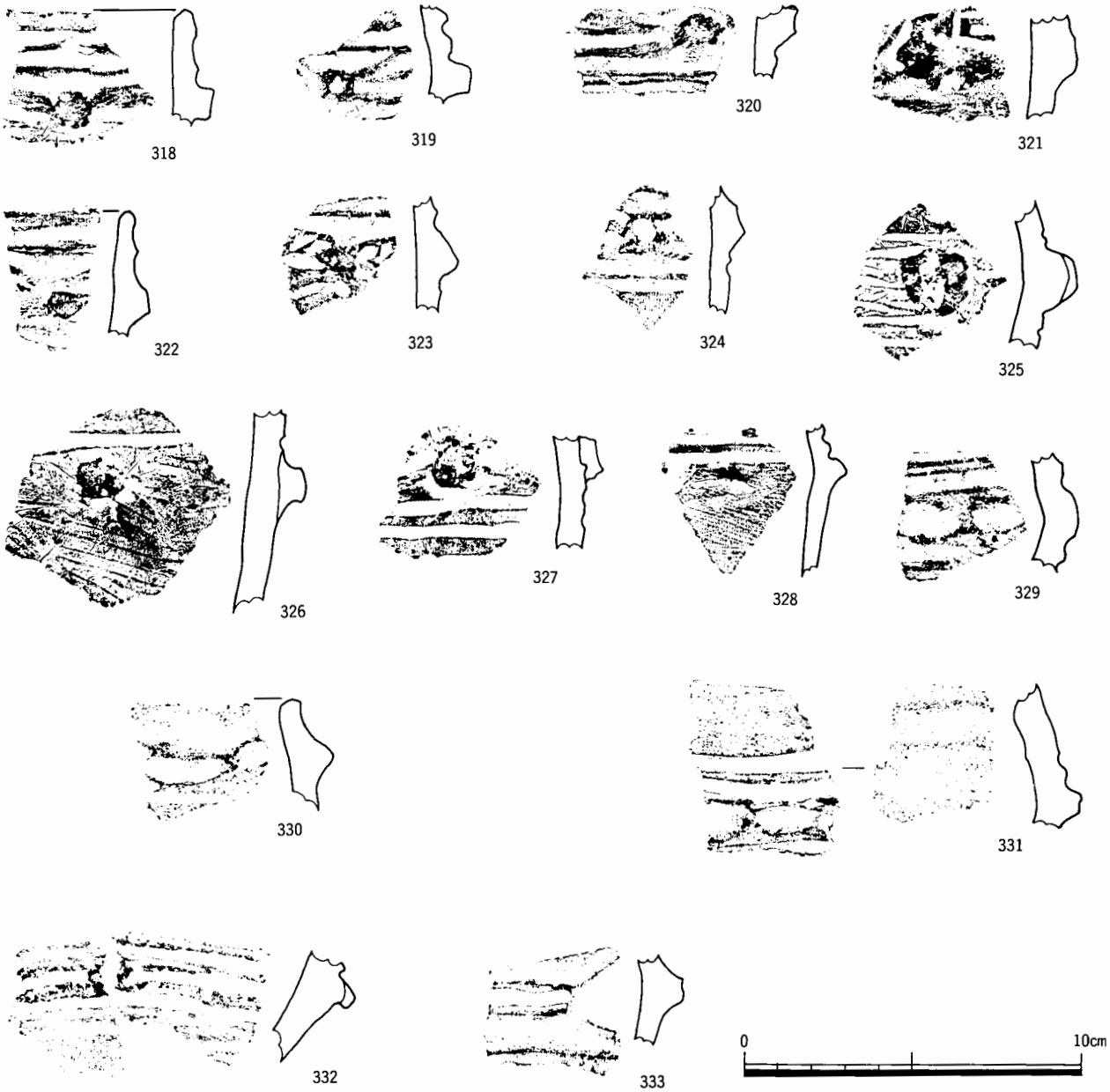
４ｂ類のレンズ状文が粗大化したと考えるものをまとめた。330・331はレンズ状文の沈線部が粗大



第89図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(10)



第90図　包含層出土縄文土器IV群(11)



第91図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(12)

化して連続していると考えた。332の上下の沈線は平行化している。突起を切る手法を持つ。焼成堅緻でにぶい橙色の胎土色である。

4 f 類　口縁外帯を有するもの（第92図）

小破片であるため器形や文様の全体像は明らかでない部分が多い。口縁外面端部に小突起を持ち、小突起が上向きになるものと水平であるものがある。前者は小波状の口縁形態をなし、後者は平口縁となる。また、小突起先端を刻むものと刻まないものがある。334から348までは口縁外帯と呼ばれるものに当てはまるものであるかどうか不明である。4 b類の施文方法に類似するものもある。354の口縁部は緩く外反している。その口唇にレンズ状文を施文する。352は同様のレンズ状文を口縁端部に施文し口唇には1条の細い沈線が巡る。347・348・354にも細沈線が巡っている。

４ｇ類　茸状突起を有するもの（第93図368～379）

突起を刻むものとそうでないものがある。突起に沈線が集束するというのが本類においても基本的なパターンである。それによって突起直下では三角形状の意匠が形成される場合が多い。この構成は３類233～235の土器の構成との関連性が類推される。369･379は内面に凹線または沈線が巡る。379は列点を持つ。

４ｈ類　浮線渦巻文の土器（第93図380～389）

底部が２点含まれる。胴部破片が主である。同心円状の文様の上部には４ａ類などの文様が展開する可能性も高い。

４ｉ類　斜傾短沈線・矢羽状沈線を有するもの（第93図390～399）

確認される資料としては４ａ・４ｇ・４ｆ類に斜傾短沈線が見られる。本類のものはいずれも焼成堅緻である。

４ｊ類　浮線網状文の土器（第94図400～405）

４ａ～ｉ類の土器と文様形態は類似するが雰囲気を異にし、施文方法も違い完全な彫刻技法を用いたものである。確認される土器では口縁部のみに施文され、401では内面にも同じような文様を描いている。405は立体的な彫刻技法である。器形は浅鉢であると類推できる口縁部破片が多い。402の口縁は緩やかに外反する。

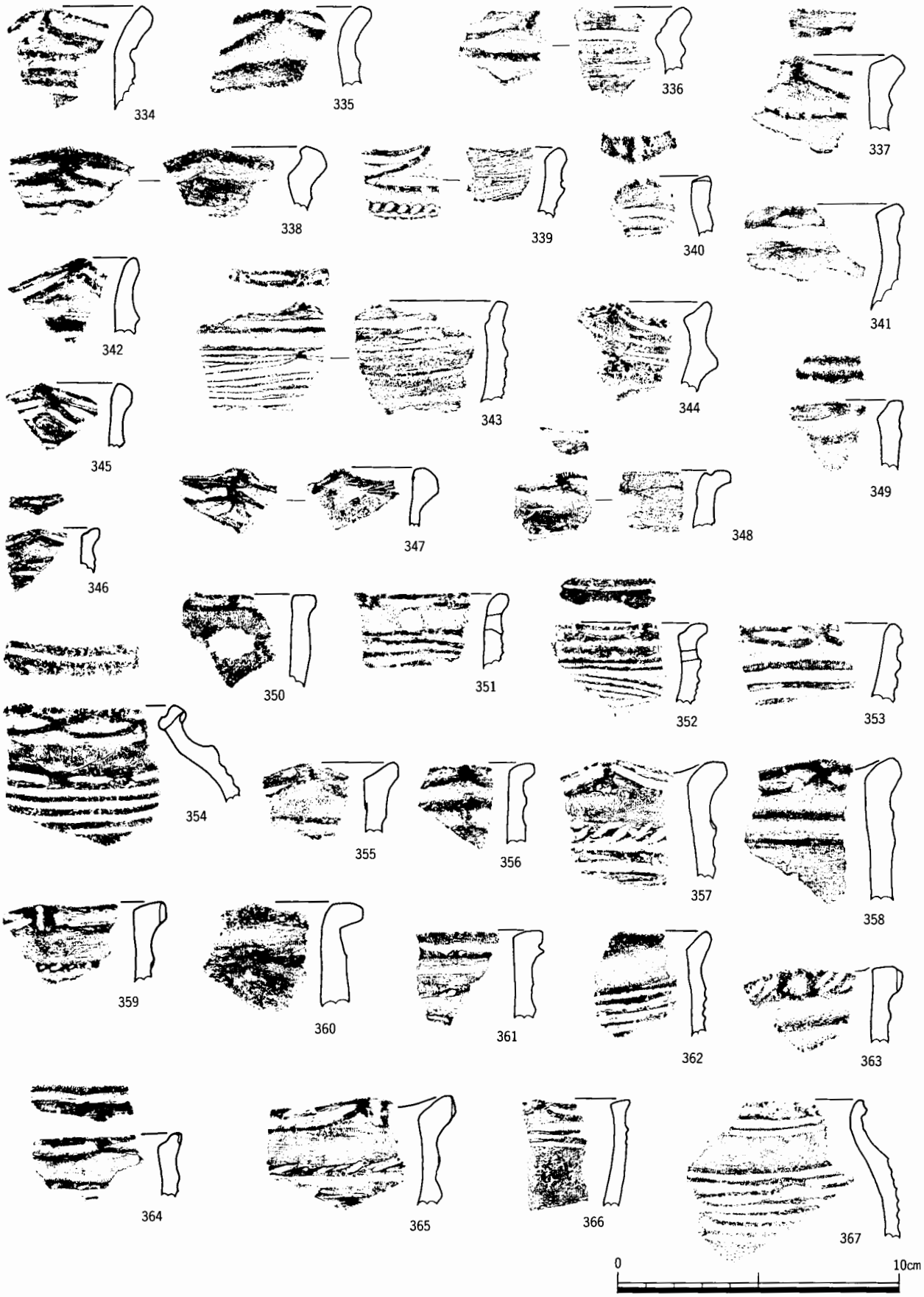
４ｋ類　凹線を巡らせるもの（第94図406～416・第95図）

口縁部または器上半に沈線・凹線を巡らせるものを一括したが時期的にも幅を持つものと考える。406～410は小波状口縁である。２～３条の凹線下は条痕が施される。416は壺形土器の口縁部。417は内外面に細密条痕を施す。418～422は丁寧に磨かれる。浮線文の技法のものか。425は刻みを持つ。

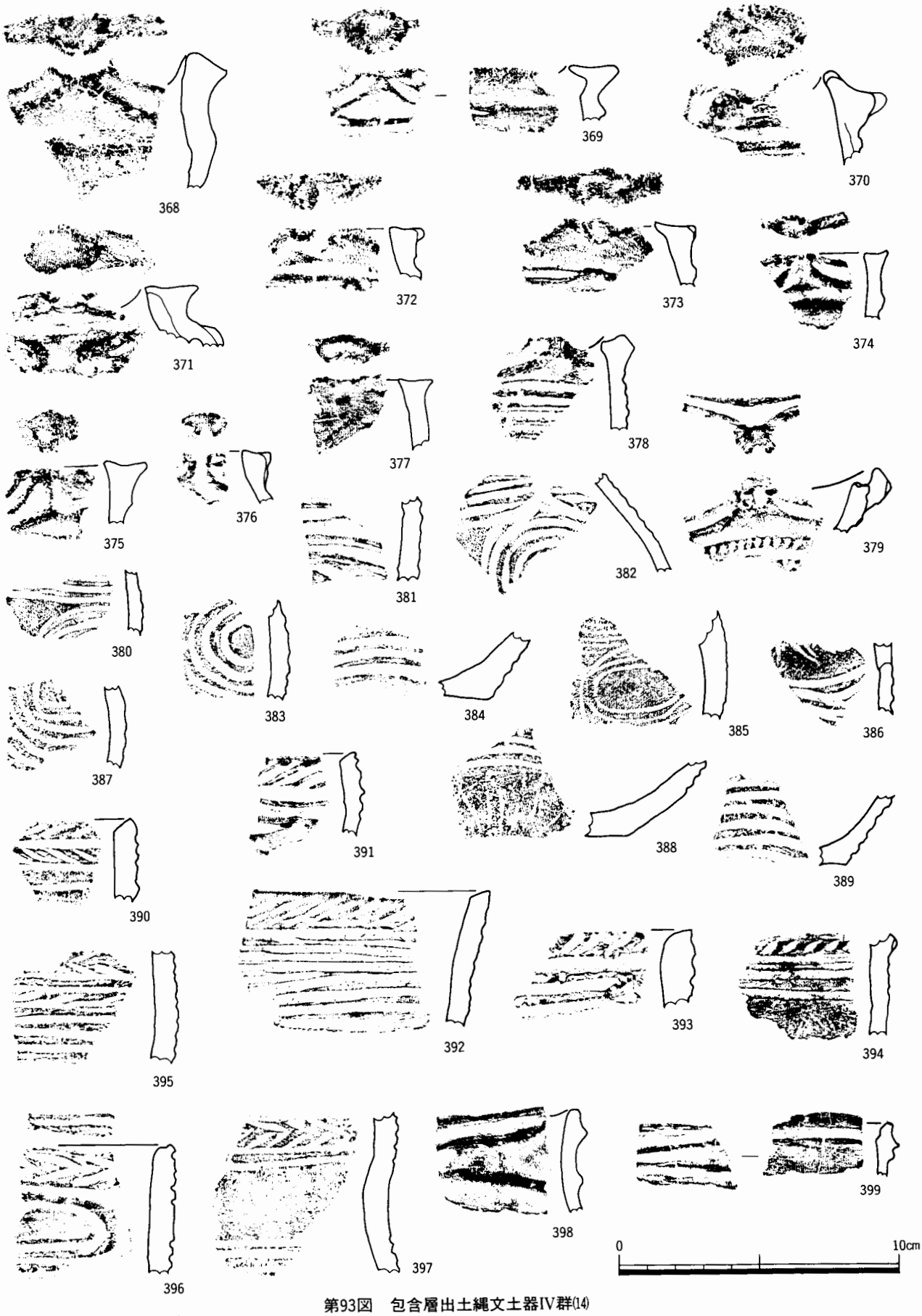
435～445はやや古い様相を呈し粗大な工字文を持つ３類のものかもしれない。

５類　粗製土器（第96～104図、図版43～47）

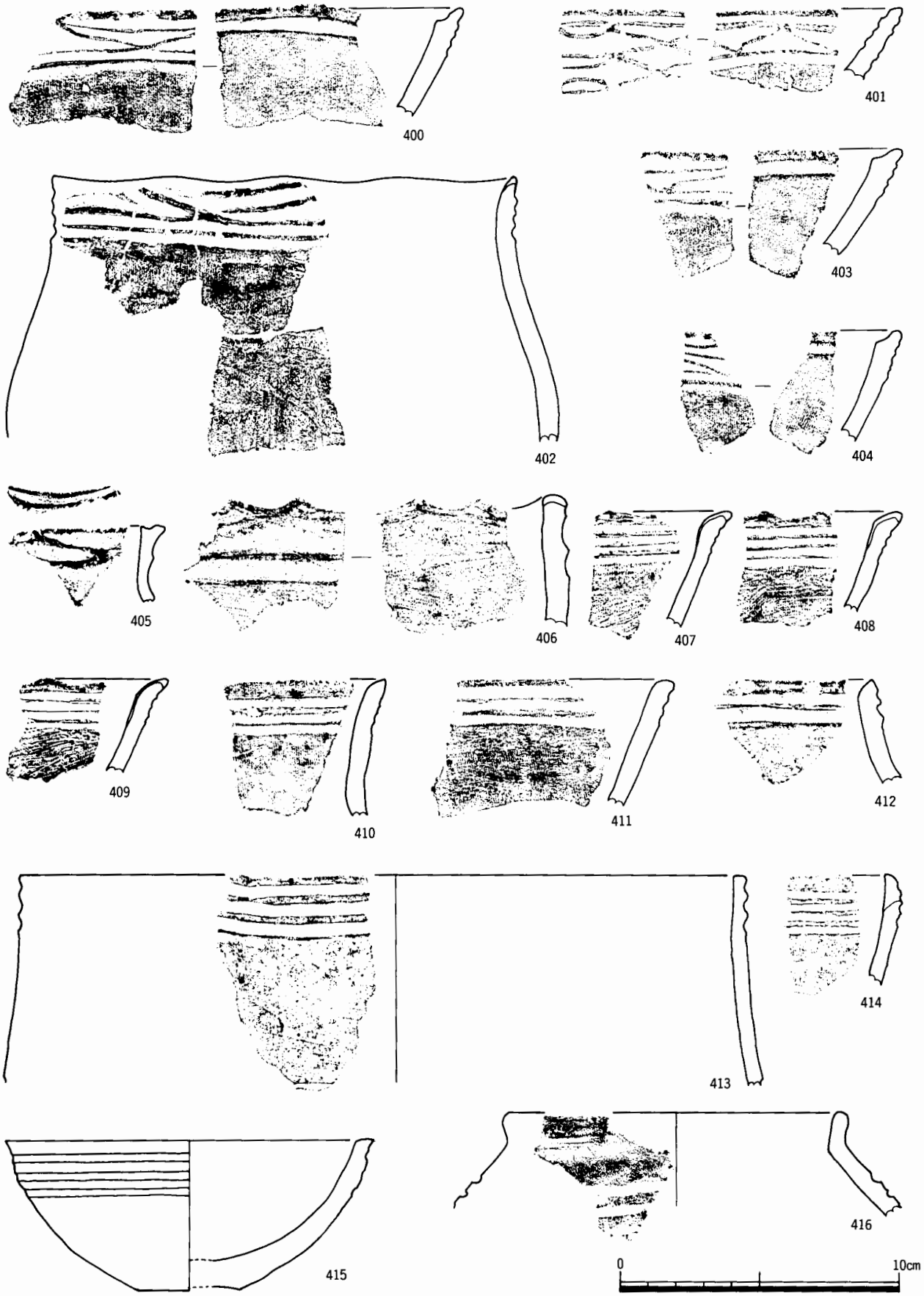
時期はⅣ群土器に対応しているものと考えるが、その中のどの時期に当てはまるのもであるかは不明な点が多い。また、１～４類土器のなかにも粗製の名に値するものもあり、ここで一括した土器と重複する器種・器形等がある。時期がおよそ特定できるものについてはその都度記述する。粗製土器はⅣ群の縄文土器のうちで圧倒的な組成率を占める。



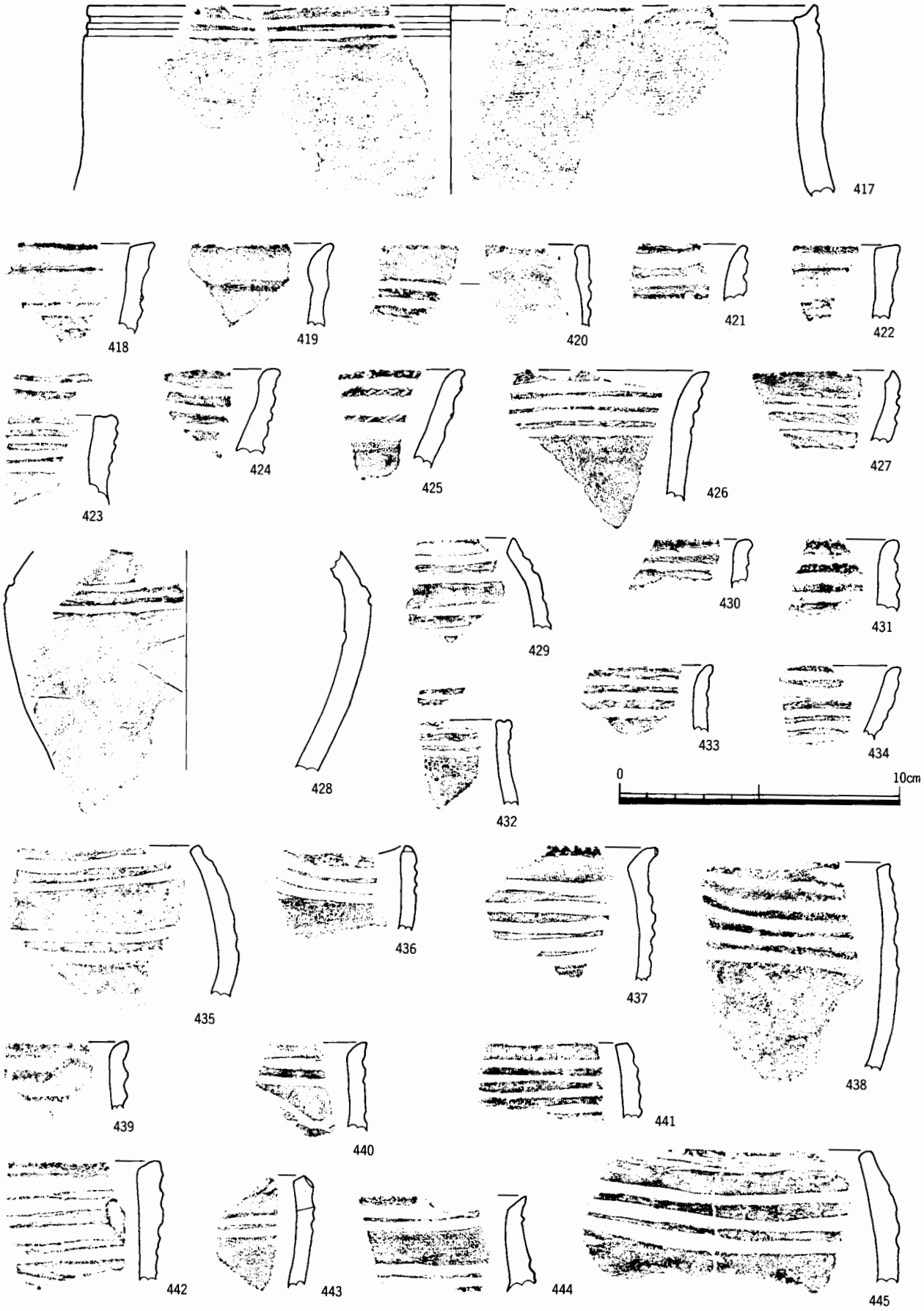
第92図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(13)



第93図　包含層出土縄文土器IV群(14)



第94図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(15)



第95図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(16)

5ａ類　口縁を刻むもの（第96・97図・第98図493～504・第99図508～511）

刻み方は指頭圧痕状に刻むものと、棒状施文具または箆状施文具などによって細かく刻むものがある。刻みの向きは同方向であるものと方向に変化を持たせるものがある。刻みの部位は口唇外側、口唇、口唇内側であるが意識された区別なのか明らかでない。器種はほとんどが深鉢である。器形は口縁が直立するもの、開いて立ち上がるもの、やや内彎気味の口縁を持つもの、「く」の字状に屈曲するものなどがある。

446は器形復元された口径約30cmの口縁がやや開き気味に立ち上がる深鉢である。底部は確認できなかったが推定で器高は32～33cm前後であると思われる。内外面に箆状施文具によって撫でられた条痕が残る。指頭圧痕状の刻みは等間隔に均一に施される。二次的な焼成痕は観察できない。458は破片から推定復元した。やや内彎する口縁を持つ。外面に煤の付着がわずかに観察できる。内外面とも比較的丁寧に撫で調整される。463も破片から推定復元した。指頭圧痕状の刻みは口唇内側に施される。輪積痕がわずかに残る。450から463までは指頭圧痕状刻みを施すものである。452の刻みは口唇外側に施されるが他は口唇に施される。450・454に煤の付着が確認できる。462・465は瘤状の小突起を付ける押圧または刺突を加えている。461外面には縦の刺突列が残る。461・464～469は棒状施文具による刺突を連続して施すものである。

475は器形復元された口径約18cmの筒形の器形を持つ深鉢である。底部は確認されなかったが推定で25cm前後であると思われる。刻みは斜めに棒状施文具によって均等に施される。口縁内面に1条の凹線が巡る。476も器形復元された深鉢である。刻みは口唇外側に施され口唇部は平たく調整される。477も同様に口唇外面に刻みを持つ。477と478の刻みは縦方向に施される。478～483も口唇外側に刻みをもつ口縁部破片である。

485は口唇に斜めの刻みを施し、外面には小突起が並ぶ。外面には条痕が細密に施される。条痕は縦方向に施され調整のためというより装飾を意識している印象がある。器厚は9㎜ほどで厚手である486・487は485同様に斜めの刻みを施す。488からは「く」の字状に屈曲する口縁を持つものである。488・489・491・492はジグザグに方向を替えて刻みを施す。493～504は指頭圧痕状の押圧を口縁に施すもので「く」の字に屈曲する口縁を有するものである。495は刻みである。口縁内面に凹線のあるものと無いものがある。496の内面には全体に煤が付着している。

5ｂ類　口縁内面に凹線を巡らせ口縁部を刻まないもの（第98図505～507、第99図510～531）

1ないし2条の凹線を口縁内面に巡らせる。凹線が突起部で枝状となるものの破片もふくまれる可能性がある。519～523は浅鉢。524～531の口唇部には沈線が巡る。

5ｃ類　装飾が全く無いもの（第100～102図・第103図659～673）

口縁部の形態によって4細分した。

5ｃ類―1　内彎する口縁を持つもの。

5ｃ類―2　やや開き気味に立ち上がる口縁を持つもの。

5ｃ類―3　浅鉢・椀状になるもの。

5ｃ類―4　頸部で折れ曲がり外反するもの。

主体となる器種は大型の深鉢である。内外面は丁寧に撫で調整されたものが多い。

５ｃ類―１の口唇部は面を形成するもの、丸くおさめるもの、粘土を折り曲げ気味に若干肥厚させるものなどがある。596～599は波状口縁のものであるがここに位置付けた。

５ｃ類―２の口唇部も面を形成するもの、丸くおさめるものがある。一部に壺形器形の口頸部かと思われるものも若干ある。

５ｃ類―３は浅鉢・椀形器形のものと小型土器を一括した。胴部破片の量からこの種の器形のものがかなりあるとおもわれる。

５ｃ類―４は頸部で折れ曲がり外反するものを一括した。「く」の字状に折れ曲がる様相を示すものと屈曲の度合いが少ない663のような器形のものがあると考えられる。

５ｄ類　輪積痕が残るもの（第103図674～686）

輪積痕が残る破片数は相当数ある。意識的に輪積痕を残したと思われるものとそうでないものがある。676は輪積痕が底部から意識的に残されたことを窺わせる。口縁内面に２条の凹線を巡らせる。681から686の口唇は刻まれている。時期の詳細は不明であるが後期から晩期までの時期幅があるものと思われる。

５ｅ類　条痕文の土器（第104図）

外面にのみ条痕を施すものと内外面に施すものがある。基本的には横方向に条痕が施されるが一部に縦方向の条痕が見られる。東海系土器に主体的に見られる貝殻条痕も少量あるが細密条痕が圧倒的に優位を示す。有文土器との関連を考えると中部高地との繋がりを示唆している。

６類　その他の晩期の土器（第105図・第106図734～741、図版48）

716～725は小型土器とその底部である。716の底部中心部は円形にくぼむ。

736～738は口縁部に刻みを持ち、頸部に隆帯を有する。736・738の頸部隆帯には刺突が施される。３点とも焼成堅緻である。

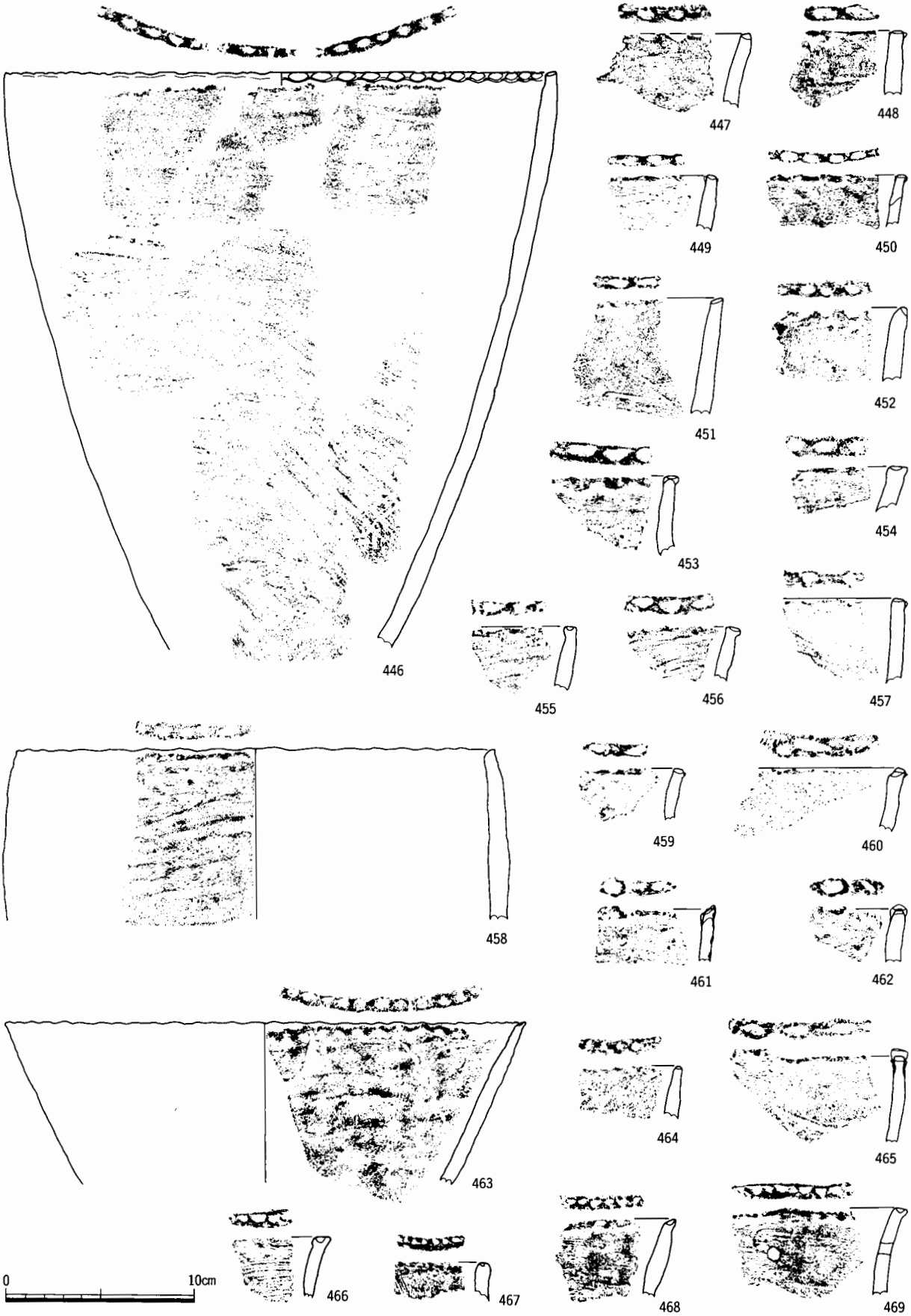
739は内面に凸帯状の隆帯をもつ。胎土は晩期のものと類似するが時期は不明である。741は口縁外面の隆帯に刺突と指頭圧痕状の押圧を加える。736から739までは凸帯文土器の系譜を持つ土器と考えられる。

734と735は口縁部に山形の小突起を持つ大型の粗製深鉢である。734の突起部下には補修孔が穿たれる。

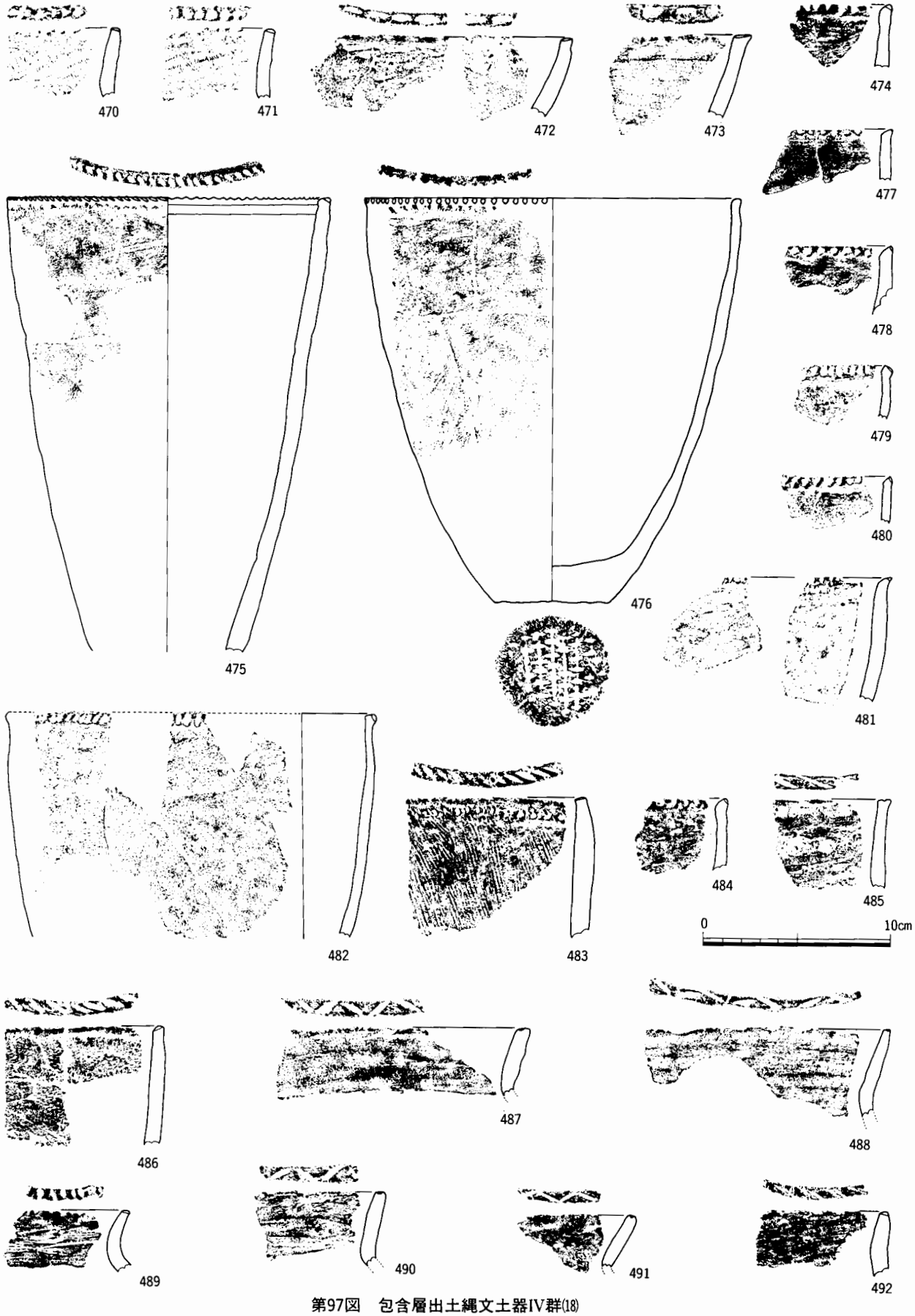
７類　その他の時期の縄文土器（第106図741～748、図版48）

741は口縁外面の隆帯上に刺突を施し、斜方向に引かれた２本の平行沈線間にも同様の刺突を施す。742は細隆線で胴上部を施文し胴下半分は細沈線で格子目状の文様を描く。中期後半ころのものか。744～747は同一個体である。半截竹管による平行沈線で施文する。748は縦の地縄文の上に縦に３本ずつの沈線が引かれる。上部に円形の文様展開が見られる。

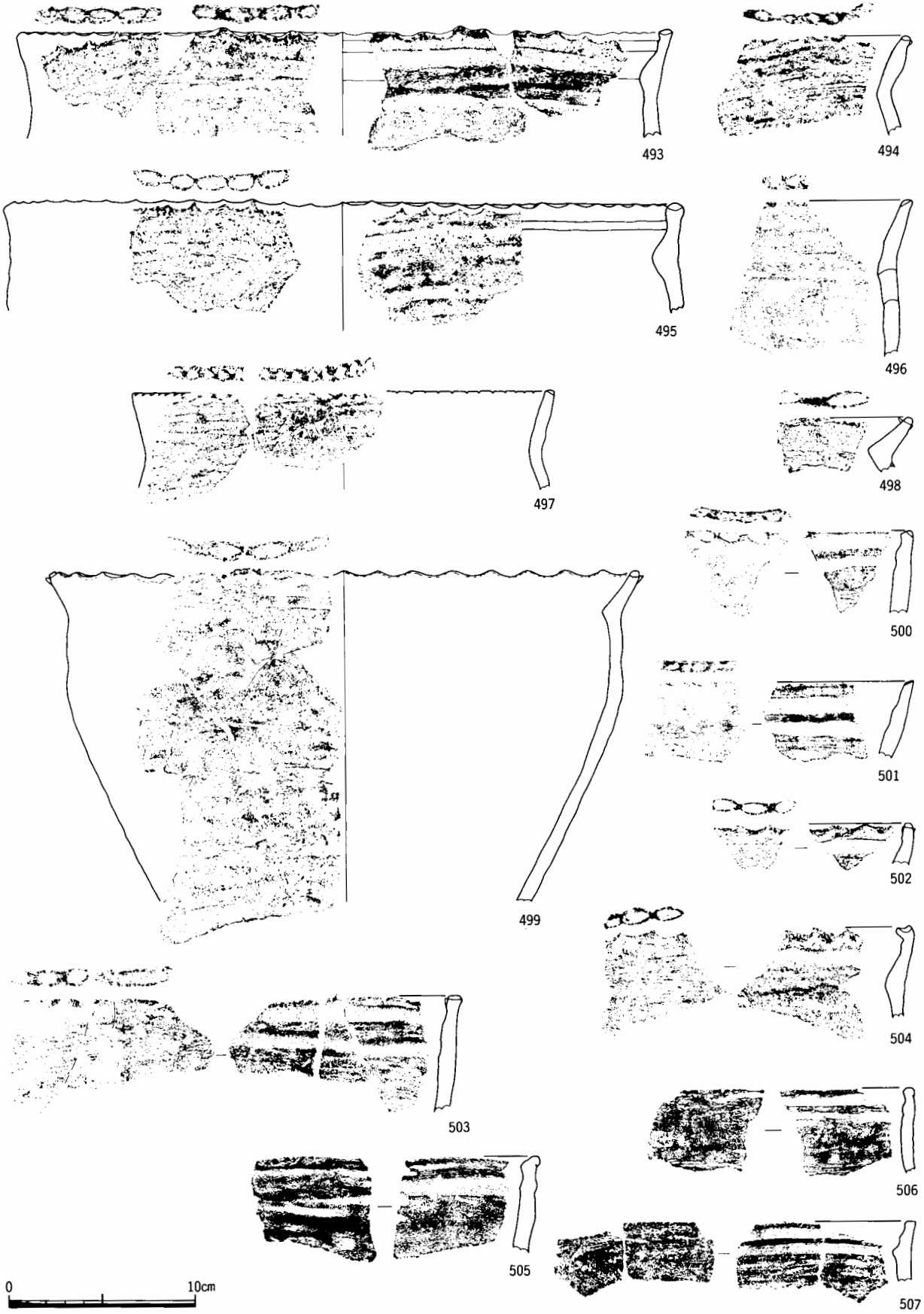
（伊藤　秀雄）



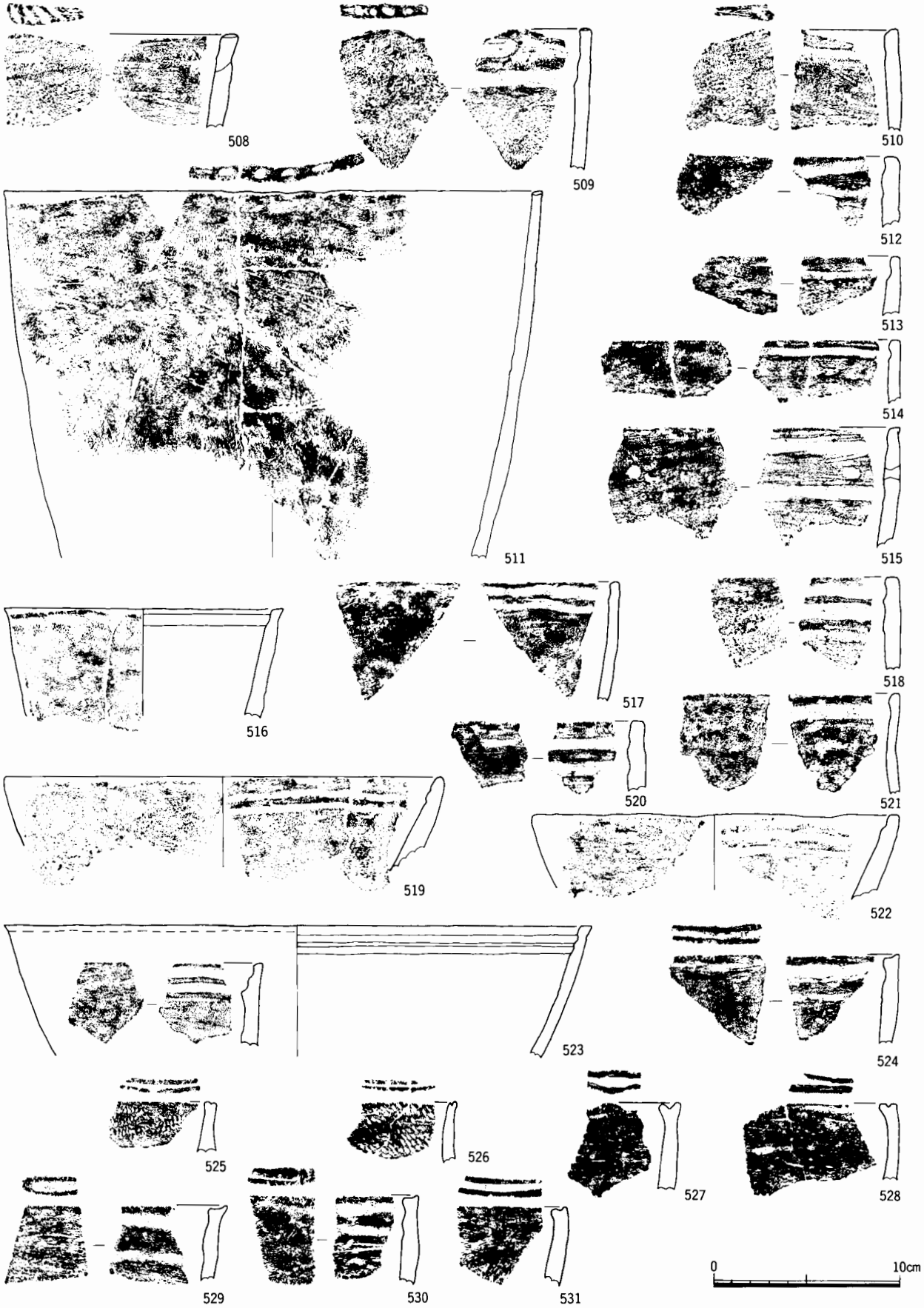
第96図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(17)



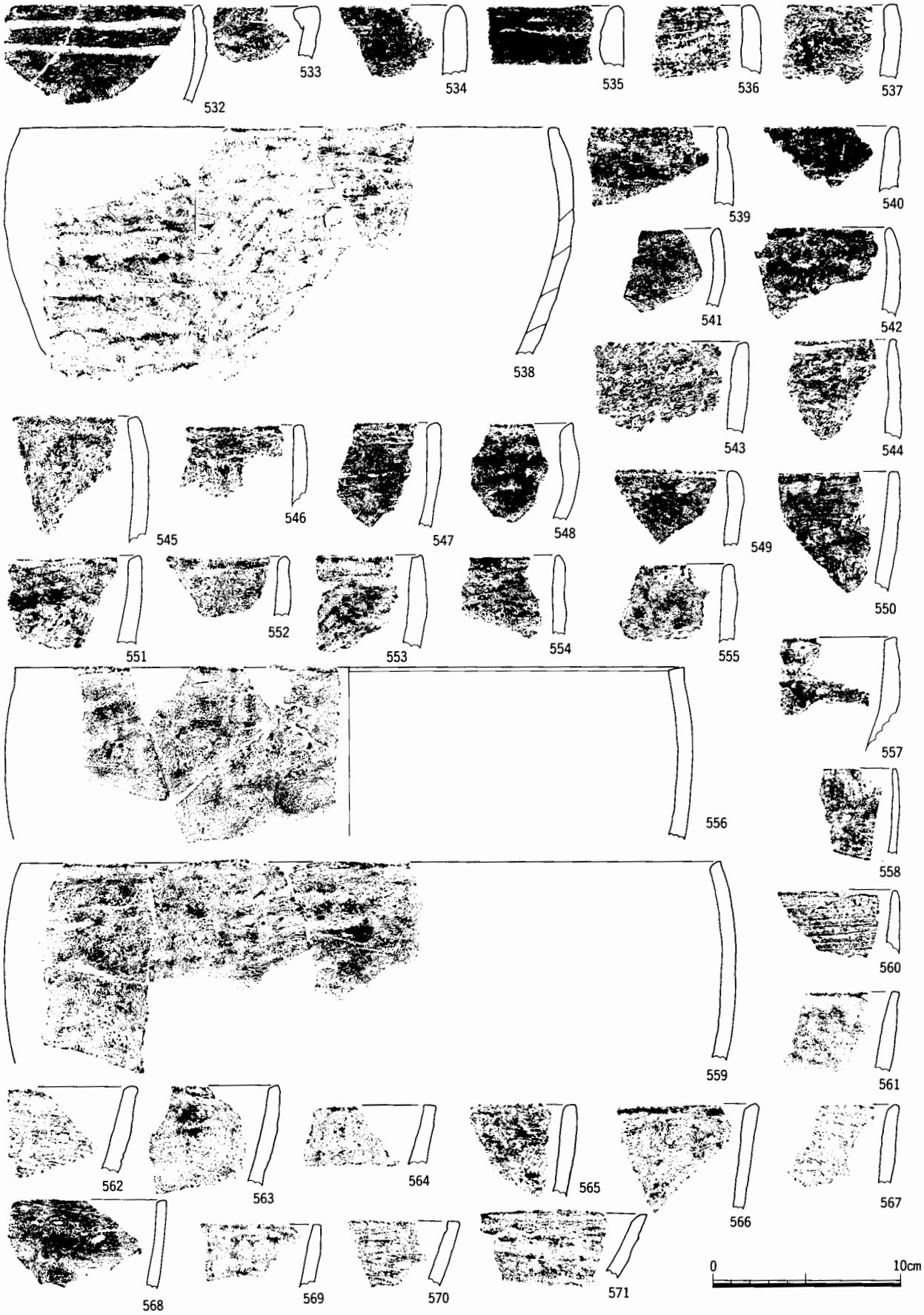
第97図　包含層出土縄文土器IV群(18)



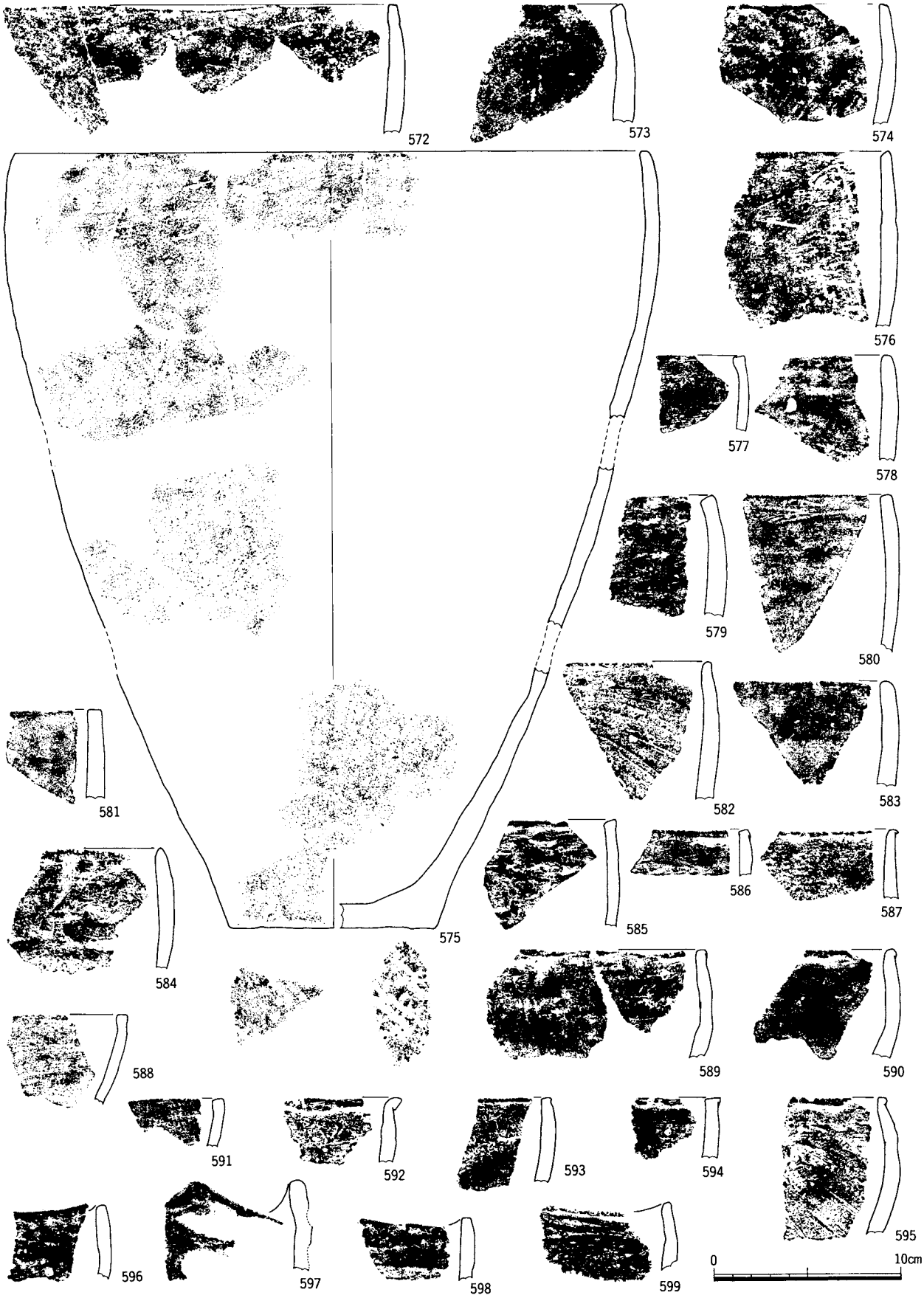
第98図　包含層出土縄文土器IV群(19)



第99図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(20)



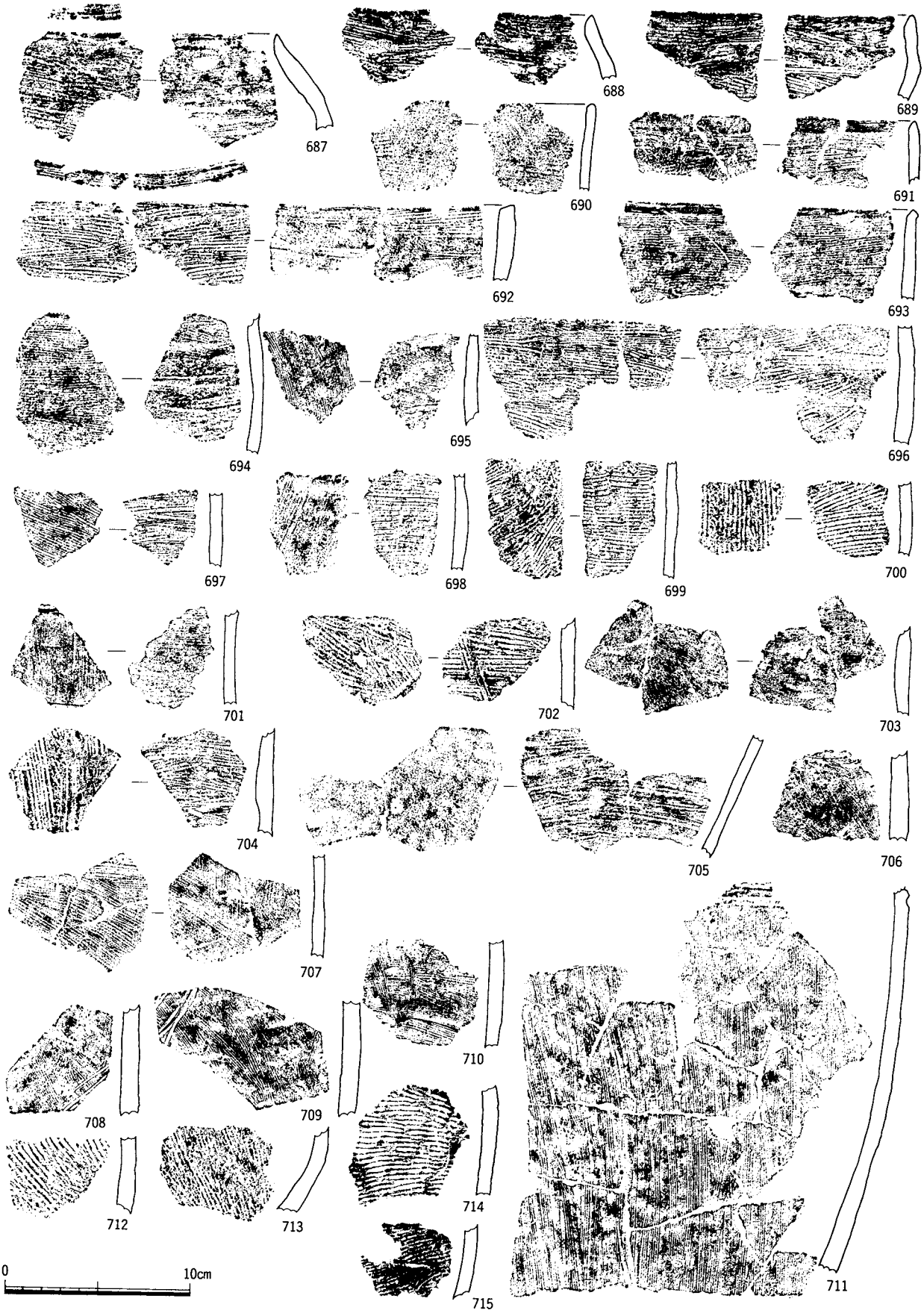
第100図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(21)



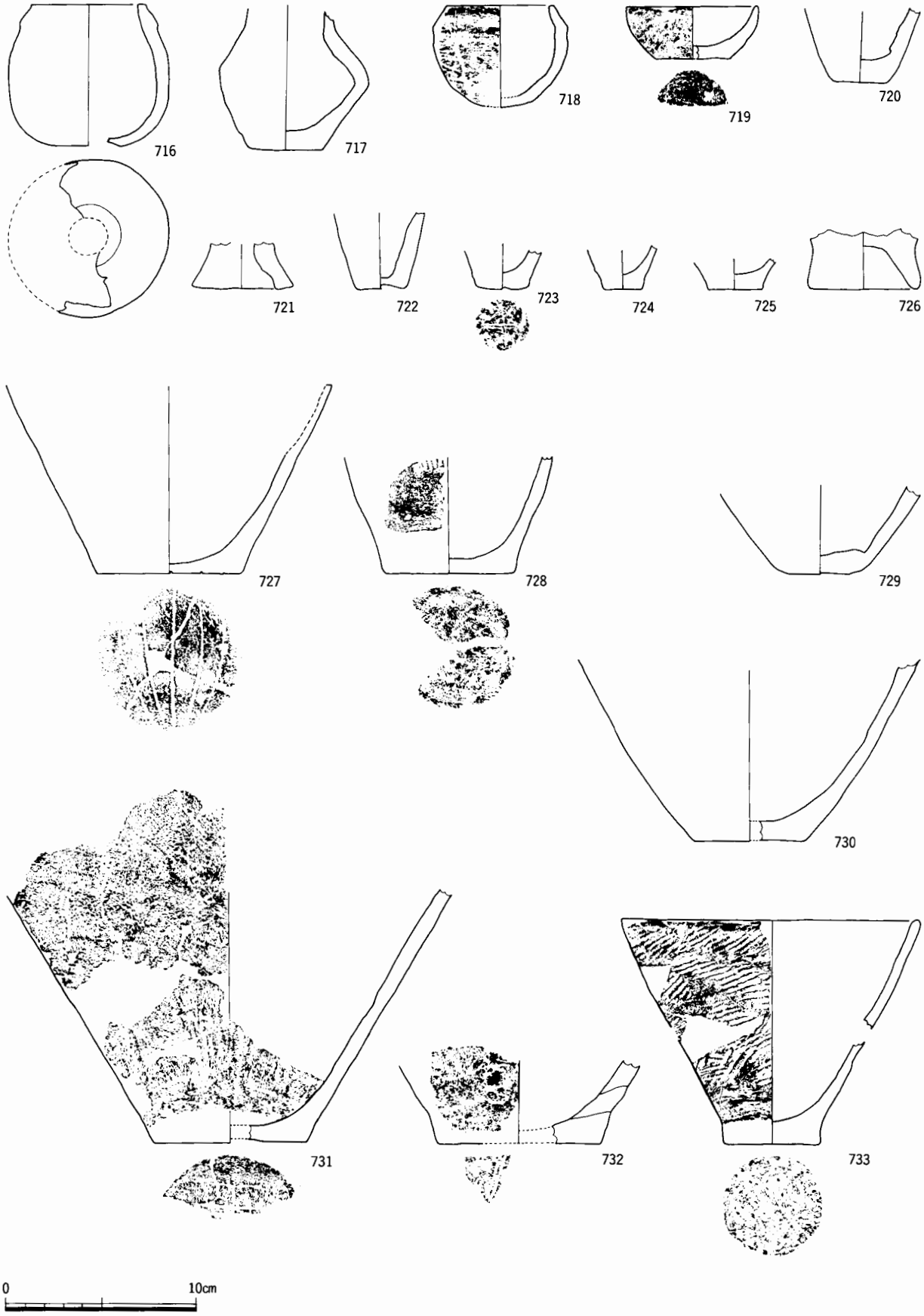
第101図　包含層出土縄文土器IV群(22)

第102図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(23)

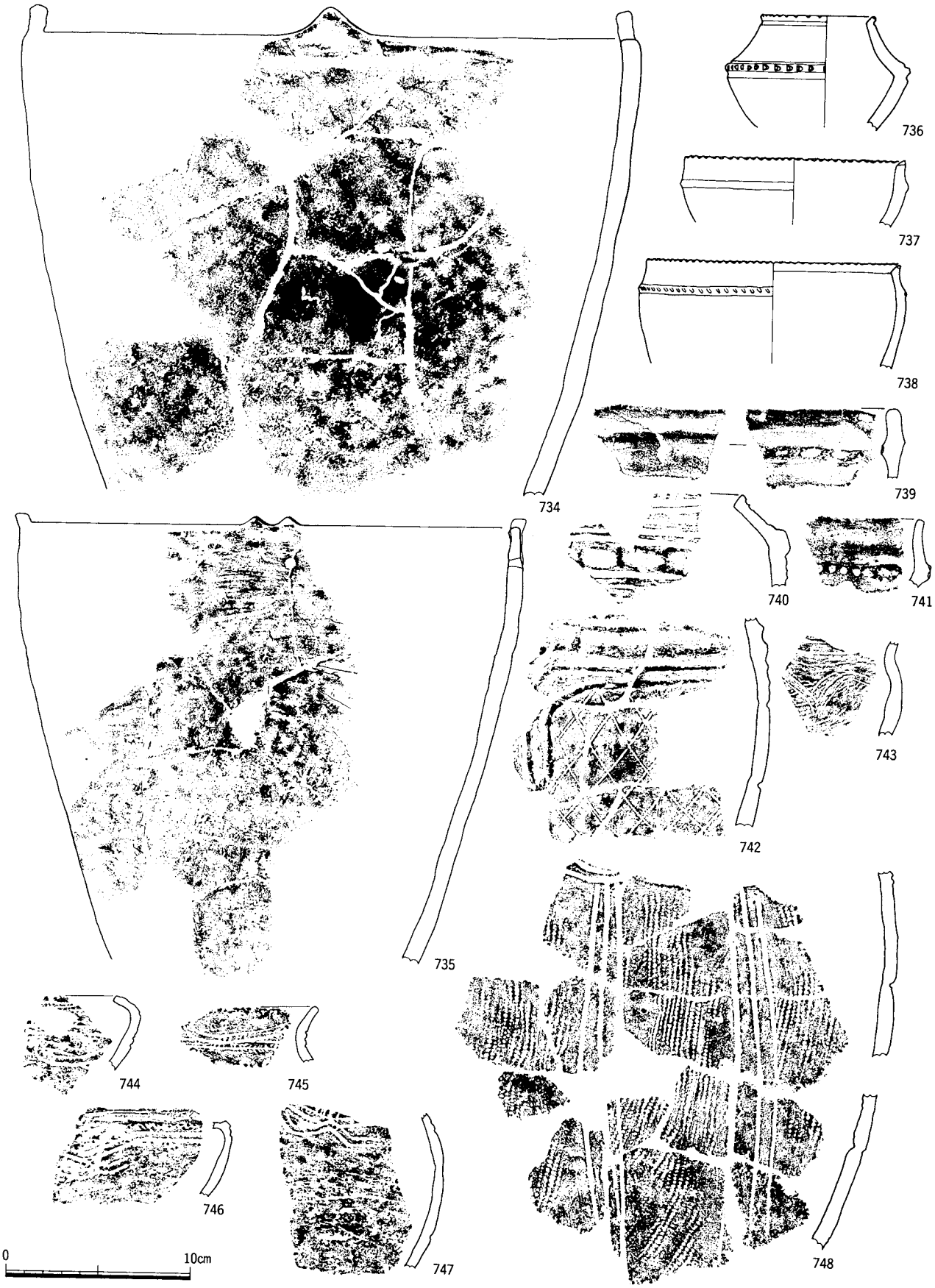
第103図　包含層出土縄文土器IV群(24)



第104図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(25)

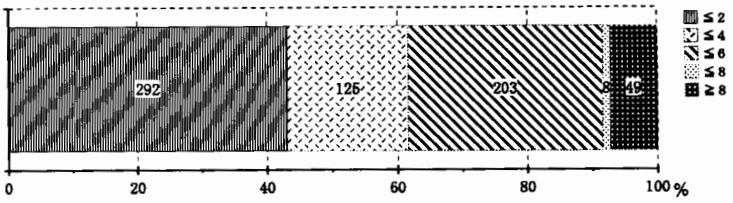


第105図　包含層出土縄文土器Ⅳ群(26)



第106図　包含層出土縄文土器IV群(27)

底部

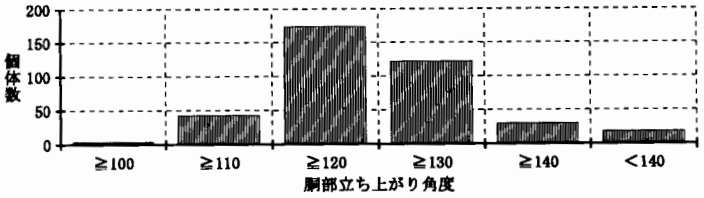


第107図　底部残存率別組成図

本遺跡でII群以降の底部は1016点確認した。このうちA地点からは832点。B・C地点からは183点出土した。多くは破片であり個体数はこれより少ないと思われる。両地点には明確な時間差が認められるため、以下、地点別にその特徴を記述する。

A地点

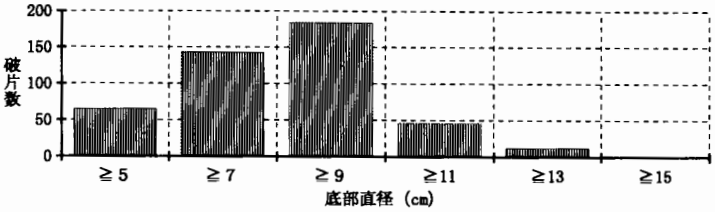
底部から胴部への立ち上がりの角度別にその特徴をみると第108図の如くになる。最も多く確認されたのは120度前後に開く底部で、底部から大きく外傾して立ち上がる深鉢がこれらに該当するものと思われる。110度以下の破片は円筒状に立ち上がる深鉢になると推定され、また、140度より開く破片は浅鉢や皿型土器になると推定されるが、両者とも器形判明分の１割程度を占めている。



第108図　器形別個体数

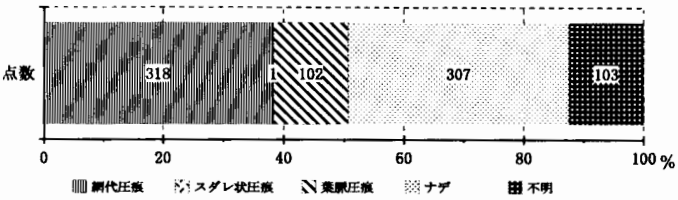
底面形態は平坦な底部、やや窪む底部、上げ底の底部に分類できたがそれぞれ、209点、190点、９点であった。平坦な底部と窪む底部はほぼ同数であるが、これらは残存する底部で判断しているので窪む底部はさらに増える可能性もある。窪む底部は中央凹部には網代圧痕などが残存し、外側凸部はナデられたように無文となるのが多くみられることより、上に粘土を積み上げるに従い自重で内彎した結果と考えられる。反対に平坦な底部は意図的に整形された可能性もある。

底径別の破片数では最も多いのが８cm前後の底部であり、13cmを越えるものは12点に過ぎないなど、全体的に底部が小さいことを特徴に挙げることができる。器形が小型であることもその要因の一つとして考えられるが、胴部から底部に急にすぼまる深鉢のしめる割合が多い事を示している。



第109図　底径別破片数

次に底部にみられる圧痕の特徴をみる。第110図は底部圧痕別の組成である。網代圧痕とナデ調整のみられる底部は共に４割弱である。ナデ調整のある底部には網代圧痕をナデ消したことが看取できるものも含まれているため、網代を用いたものが４割に限られることを示しているのではない。スダレ状圧痕のみられた土器は１点しかなく、この少なさも特筆できる。また、葉脈圧痕102点は比較的多い例と言える。葉脈は80点が網状脈、22点が平行脈であった。



第110図　底部圧痕組成図

網代圧痕ある土器318点の内編み方の推定されたものは135点であった。内訳は以下のようである。

編み方は間隔の狭い方を経条とし、経条に対する緯条の重なり方を「越え、潜り、送り」で分類した。

Ａａ類「１本越え１本潜り１本送り」＝３点

Ａｂ類「２本越え２本潜り１本送り」＝11点（２本１組にして編むものが３点含まれている。）

Ａｃ類「緯条に対して経条が２本越え２本潜りで１本送りと２本送りが交互」＝４点

Ａｄ類「２本越え１本潜り１本送り」＝109点

Ａｅ類「３本越え３本潜り１本送り」＝６点

Ａｆ類「４本越え３本潜り１本送り」＝１点

Ａｇ類「３本越え１本潜り１本送り」＝１点

（Ａｆ類、Ａｇ類は破片で観察された編み方であり、基本としていた編み方は不明である。）

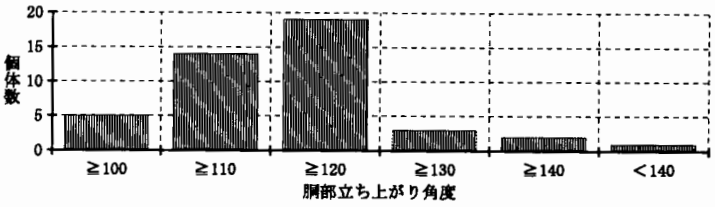
Ａｄ類は後期以降増加した編み方として注目されたが、晩期が主体となる本地点では、８割を越えており、中期に主体であったＡａ類が激減していることが特筆されるべきことであろう。

Ｂ・Ｃ地点

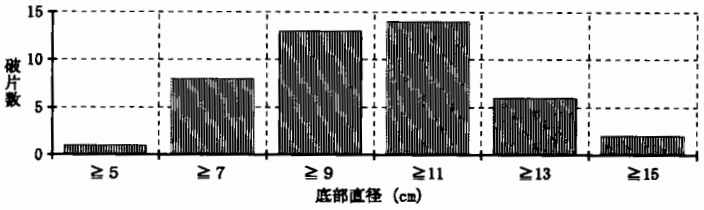
器形別の破片数はＡ地点と比較すると、130度を越えるものが少ない変わりに120度以下のものが主体となり、外傾の度合いの少ない深鉢が主体となるものと考えられる。

底径別の破片数は11cm以下のものが最も多く、15cmを越えるものもあなど、やはりＡ地点と比較すると大型化が顕著であり、土器の大きさ、器形の相違が看取される。

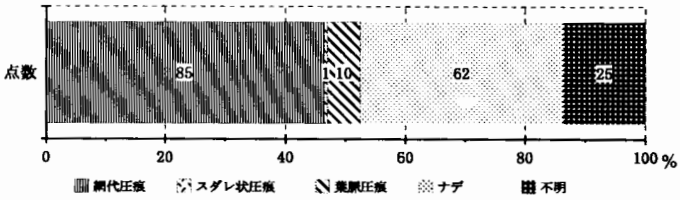
底部圧痕は全体的な傾向はＡ地点に類似しているが、網代圧痕がやや多く、葉脈圧痕が少ない点を相違点として挙げることができる。



第111図　器形別個体数



第112図　底径別破片数



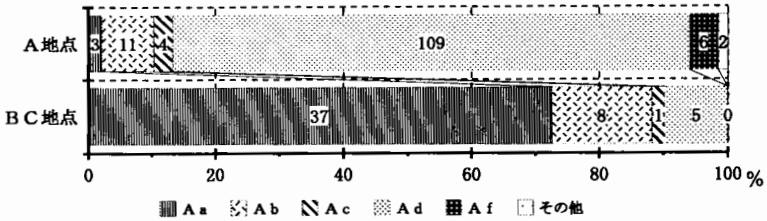
第113図　底部圧痕組成図

網代の種類は次のようである。

Ａａ類＝37点　Ａｂ類＝８点　Ａｃ類＝１点　Ａｄ類＝５点

Ａａ類は７割を越えており、反対にＡｄ類は１割に過ぎない。Ａ地点とＢＣ地点はその主体となる時期が中期と晩期であることからこのような相違は明らかに時間差を示すものである。ＢＣ地点の底部の状況は中期後半の様相を示している。両遺跡の間にある変遷過程は五味原遺跡群の全体の調査を待って再考する。

（谷口和人）



第114図　網代分類別組成図

第４節　包含層出土の石器

遺構および遺物包含層から出土した石器類の総数は、約6700点である。遺構出土の石器については第２節で記述したが、ここでは、遺構出土の分も含めて、器種ごとに概要を記す。分類に関しては、五味原遺跡群の西田遺跡の分類（上原1997）に準じたが、一部異なる部分もある。

石鏃（第115図、図版49）

総数333点出土している。石材は、下呂石133点、チャート140点、黒曜石58点、頁岩２点である。

形態に関しては、尖頭部と基部との組み合わせで分類した。

尖頭部の分類

１類　鋭角な尖頭部を持つもの。

２類　１類と同じく鋭角な尖頭部を持つが、全体が細長いもの（全長が全幅の２倍以上）。

３類　鈍角な尖頭部を持つもの。

４類　先端が小さく尖り、側縁部の肩が張った形状を持つもの。

５類　先端が尖らず、丸いカーブ描くもの。

６類　先端が小さく尖り出しているもの。

基部の分類

Ａ類　基部の中央部がＵ字型に深くえぐられているもの。

Ｂ類　基部の凹状のえぐりが浅く不明瞭なもの。

Ｃ類　基部が凹状のもの。

Ｄ類　いわゆる平基鏃で、基部が直線状になるもの。

Ｅ類　いわゆる円基鏃で、基部が丸みを帯びて突出したもの。

Ｆ類　いわゆる有茎鏃で、基部に茎を持つもの。

Ｇ類　いわゆる片足鏃で、基部に片方しか脚部を持たないもの。もしくは、一方の脚部が非常に小さいもの。

破損、折損の部位による分類

ａ　尖頭部欠損

ｂ　一方の脚部または基部の一部欠損

ｃ　脚部のみ残存

ｄ　尖頭部のみ残存

ｅ　尖頭部と一方の脚部欠損

ｆ　基部から胴部の半身欠損

ｇ　両脚を欠損

ｈ　基部を欠損（胴部と尖頭部が残存）

i　胴部のみ（基部と尖頭部を欠く）

出土地点ごとに石材および形態分類を集計すると第4表のようになる。

石材に関しては、A地点が下呂石の比率が高く、B地点ではチャートの比率が高い。また、分類に関しては、A地点において、1F類・1G類および4F類・4G類が他の地点と比べて目立って多い。やはり、F・G類は縄文後晩期に見られることを反映している。

第4表　石鏃の石材と形態分類

	チャート	下呂石	黒曜石	頁岩	1A類	1B類	1C類	1D類	1E類	1F類	1G類	2C類	3C類	3D類	4F類	4G類	5C類	不明	計
A地点	19	55	14	0	1	6	32	7	0	5	9	2	0	0	7	4	0	15	88
B地点	101	69	39	2	30	25	87	17	3	1	1	2	1	1	0	0	3	40	211
C地点	13	6	2	0	1	3	6	3	1	0	0	0	1	0	0	0	0	6	21
不明	7	3	3	0	1	0	7	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	13
計	140	133	58	2	33	34	132	29	4	6	10	4	2	1	7	4	3	64	333

石錐（第116図、図版49）

84点出土している。下呂石39点、チャート38点、黒曜石6点、凝灰岩1点である。形態分類は以下のようである。

1類　全体の形状が棒状をなすもの。

1A類　両端が尖るもの。

1B類　錐部は一端のみに作られ、他端は鈍頭をなすもの（全面に調整加工を施されるものを原則とする）。

2類　剥片の一端に長い錐部を作り出し、明瞭なつまみ状の頭部を持つもの。

2A類　つまみ状の頭部も全面に調整が施されているもの。

2B類　頭部は素材の剥片の形状を留めるもの。

3類　明瞭なつまみ状の頭部を持つもので、錐部が著しく短いもの。

3A類　頭部に調整加工が施されるもの。

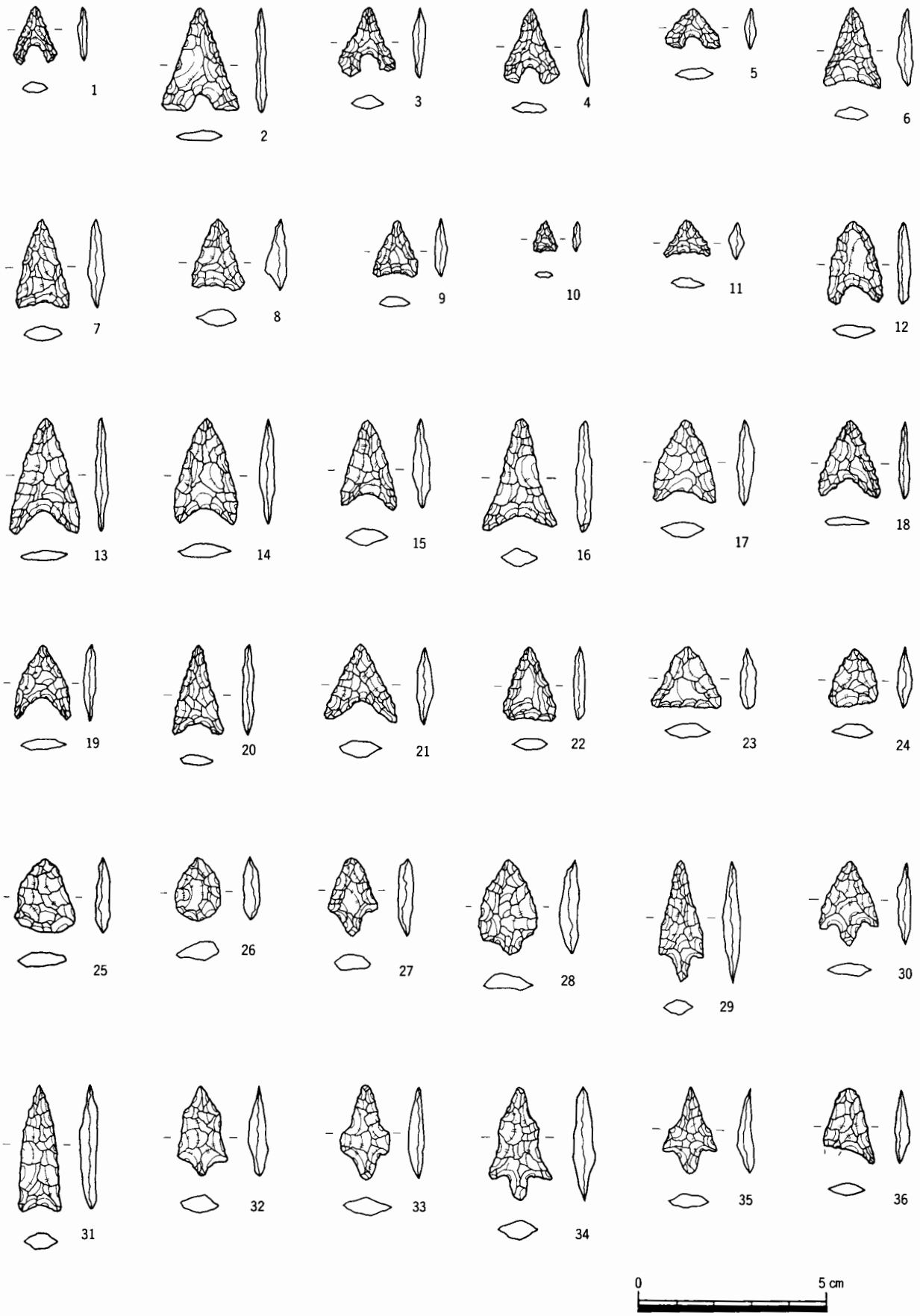
3B類　頭部は素材の剥片の形状をそのまま残すもの。

4類　錐部が次第に広がっていき頭部との区分が不明瞭なもの。

4A類　両面もしくは片面の全体が調整加工を施されているもの。

4B類　錐部の両側縁に調整加工の施されるもので、素材の剥片の形状を留めるもの。

5類　棒状あるいは長い三角形状の剥片の先端に微弱な調整加工を加え、そのまま錐として用いたもの。



第115図　包含層出土石器(1)石鏃

以上の分類によると、1A類7点、1B類14点、2A類4点、2B類2点、3A類1点、3B類1点、4A類4点、5類2点、不明1点である。

出土地点ごとに石材および形態分類を集計すると第5表のようになる。

石材に関しては、石鏃と同様に、A地点が下呂石の比率が高く、B地点ではチャートの比率が高い。また、分類に関しては、A地点において、1B類が他の地点と比べて目立って多く、B地点では、4A類・4B類の比率が高い。

第5表　石錐の石材と形態分類

	チャート	下呂石	黒曜石	頁岩	1A類	1B類	2A類	2B類	3A類	3B類	4A類	4B類	5類	不明	計
A地点	10	19	3	0	2	8	2	2	1	1	5	2	0	9	32
B地点	25	16	3	1	4	5	2	0	0	2	13	10	4	5	45
C地点	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2
不　明	2	3	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	2	5
計	140	133	58	2	33	34	132	29	4	6	10	4	2	64	84

削器（第117図、図版49）

剥片の縁辺に連続的な調整によって刃部を作り出した石器を削器とした。刃部の作出方法により次のように分類する。

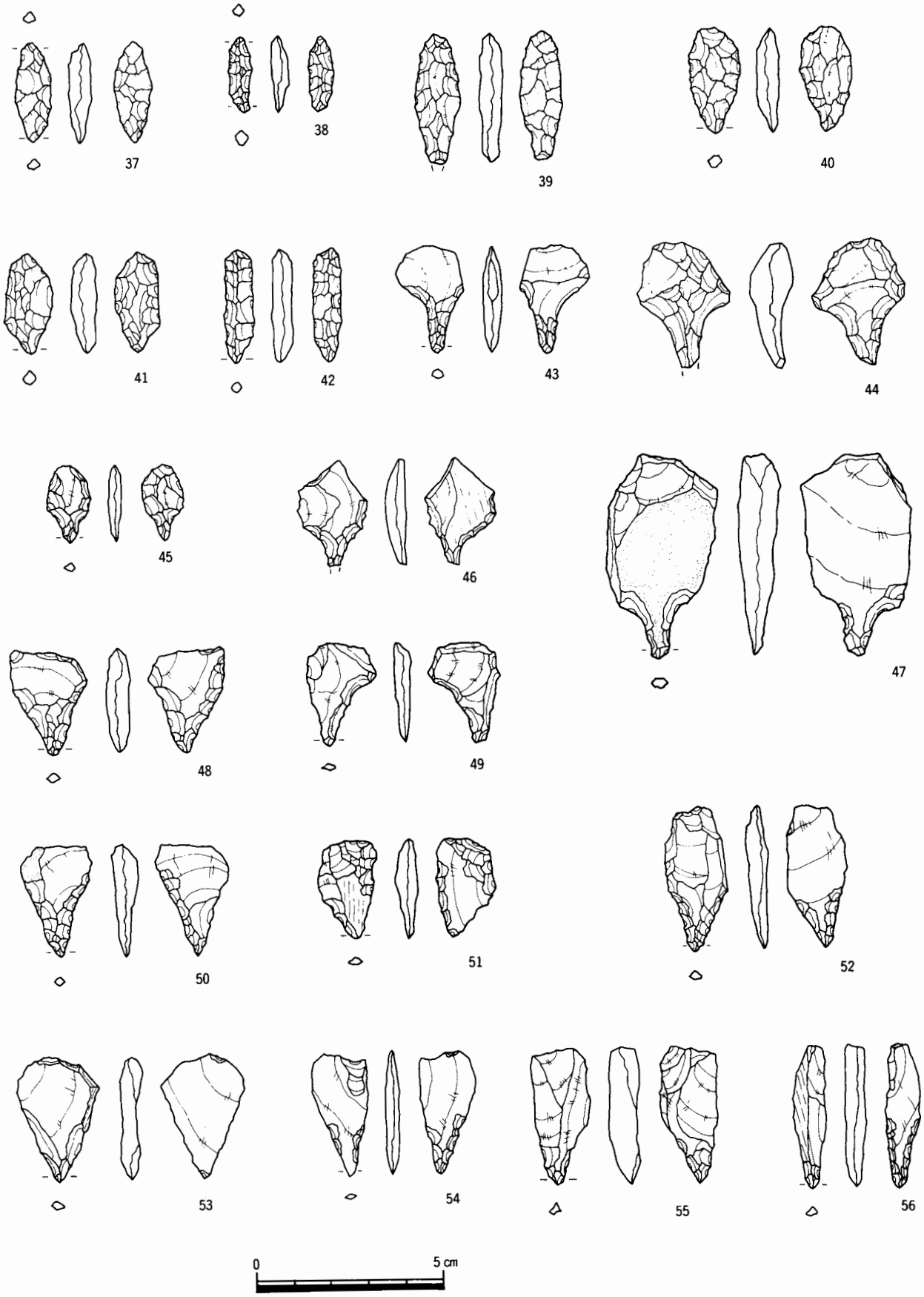
1類　片面加工により刃部を作出したもの。
2類　片面加工により作出された刃部と、両面加工により作出された刃部を合わせ持つもの。
3類　両面加工により刃部を作出したもの。

下呂石9点、チャート42点、黒曜石4点、凝灰岩1点の計56点出土している。形態は1類40点、2類5点、3類11点である。地点別では、A地点7点、B地点42点、C地点7点である。B・C地点出土の1類は縄文早期のものが多いと思われる。

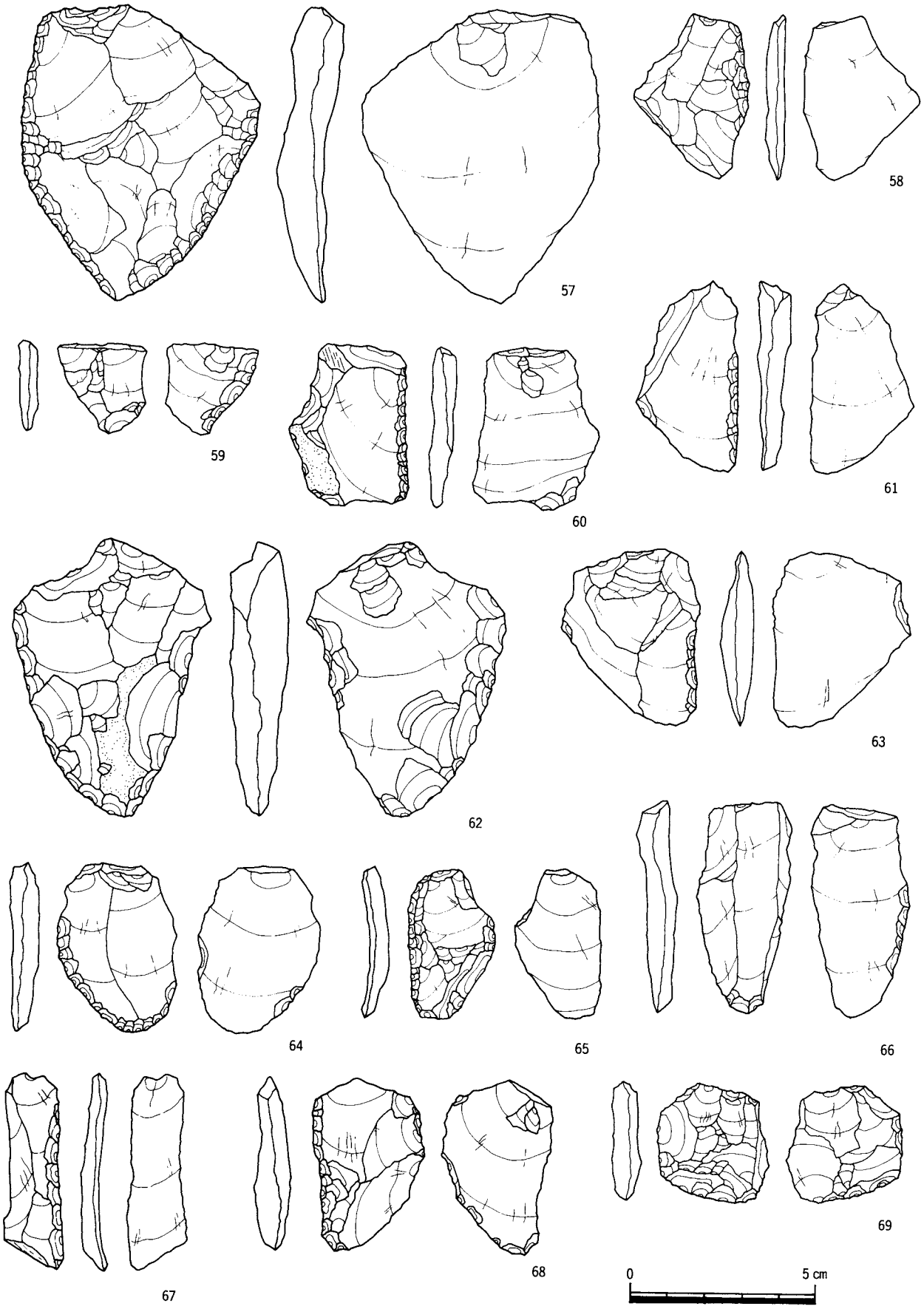
掻器（第118図70～78、図版49）

急角度に調整された刃部を持つ石器を掻器とした。刃部の位置と数により次のように分類する。

1類　素材の全周が刃部となるいわゆるラウンドスクレイパー。
2類　素材の一辺縁を除く三辺縁が刃部となるもの。
3類　縦長剥片が用いられ、その側縁と末端が刃部となるもの。
4類　素材の長軸先端部に刃部を作り出したもの。



第116図　包含層出土石器(2)石錐



第117図　包含層出土石器(3)削器

下呂石９点、チャート38点、黒曜石４点、頁岩１点の計52点出土している。形態は、２類12点、３類３点、４類37点である。地点別では、Ａ地点３点、Ｂ地点46点、Ｃ地点３点である。

石匙（第118図79～82、図版50）

11点出土している。いわゆる縦形は１点のみで、他は横形である。下呂石５点、チャート６点である。地点別では、Ａ地点４点、Ｂ地点６点、不明１点である。

両極剥離痕のある石器（第119図83～87、図版50）

向かい合った二辺ないし四辺の辺縁部に剥離痕やつぶれが認められる石器。大部分がピエス・エスキーユと考えられるが、機能的に異なるものが含まれると推定される。

23点出土しており、石材別では、下呂石11点、チャート７点、黒曜石５点である。地点別では、Ａ地点７点、Ｂ地点14点、Ｃ地点２点である。

二次加工のある剥片（第119図88～100、図版50）

剥片の側縁に大小の剥離痕を連続して施したものを二次加工のある剥片とした。118点出土している。下呂石15点、チャート82点、黒曜石18点、頁岩２点、玉髄１点である。地点別では、Ａ地点13点、Ｂ地点94点、Ｃ地点９点である。

使用痕のある剥片（第120図101～106、図版50）

剥片の側縁に微細な剥離痕が密接して、あるいは不規則に観察されるものを使用痕のある剥片とした。78点出土している。下呂石７点、チャート47点、黒曜石18点、頁岩５点、玉髄１点である。地点別では、Ａ地点15点、Ｂ地点58点、Ｃ地点５点である。

異形石器（第120図107～110、図版50）

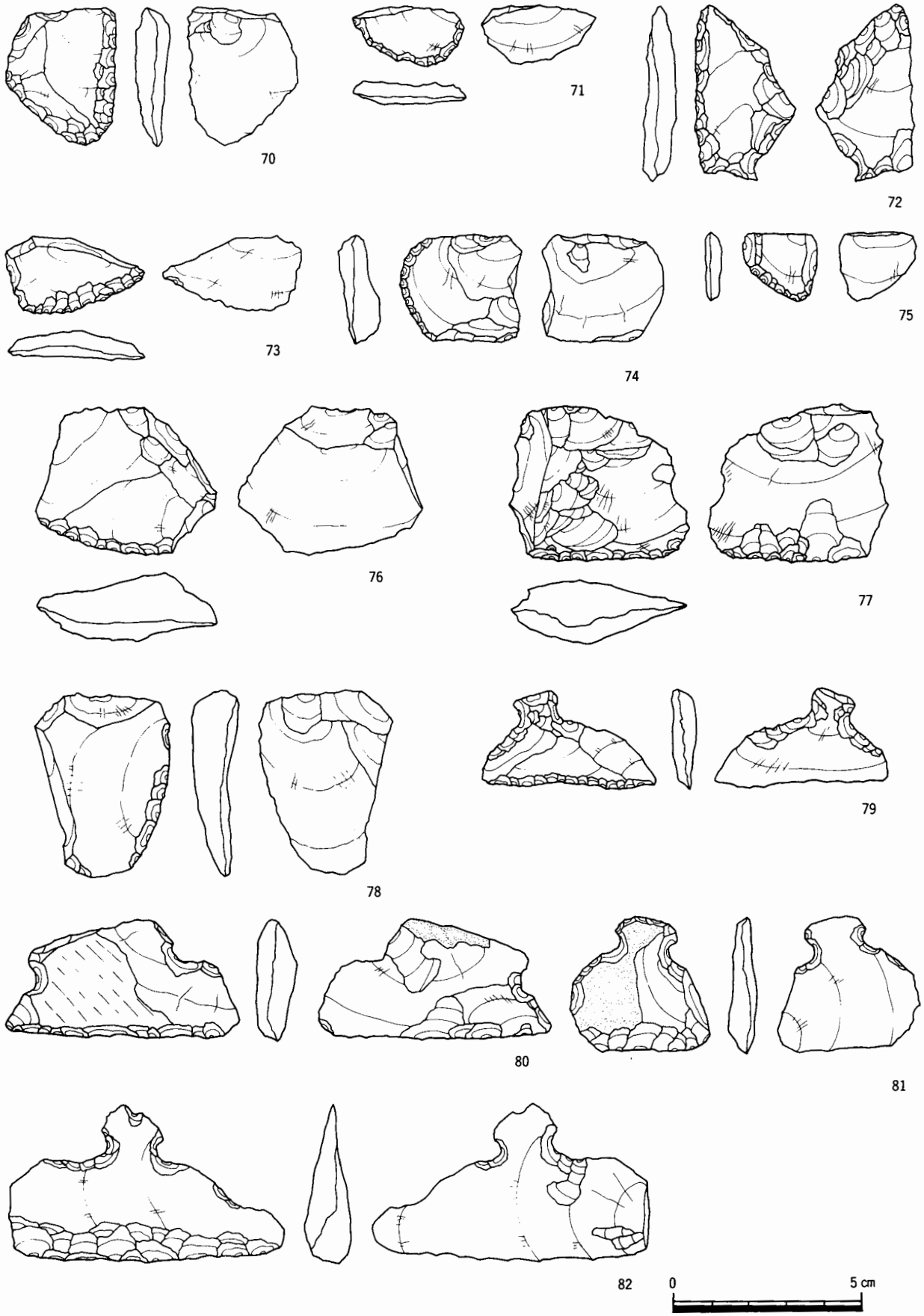
４点出土している。107～109は三日月形石器あるいは釣針形石器と呼ばれているものである。

107は下呂石製で、横長剥片を利用し、頭部を裏面からの折れにより欠失する。108は、チャート製で、貝殻状剥片を利用している。ややノッチ状の調整が施されていてつまみ部を作り出している。裏面湾曲部の調整角度が大きい。109のつまみ部は両面から厚めの剥離で作り出しており、裏面の刃部はごく薄い剥離である。110は分銅形石器と呼ばれているものである。下呂石製で、えぐり部は厚い剥離で作り出している。刃部はそれより薄い剥離である。

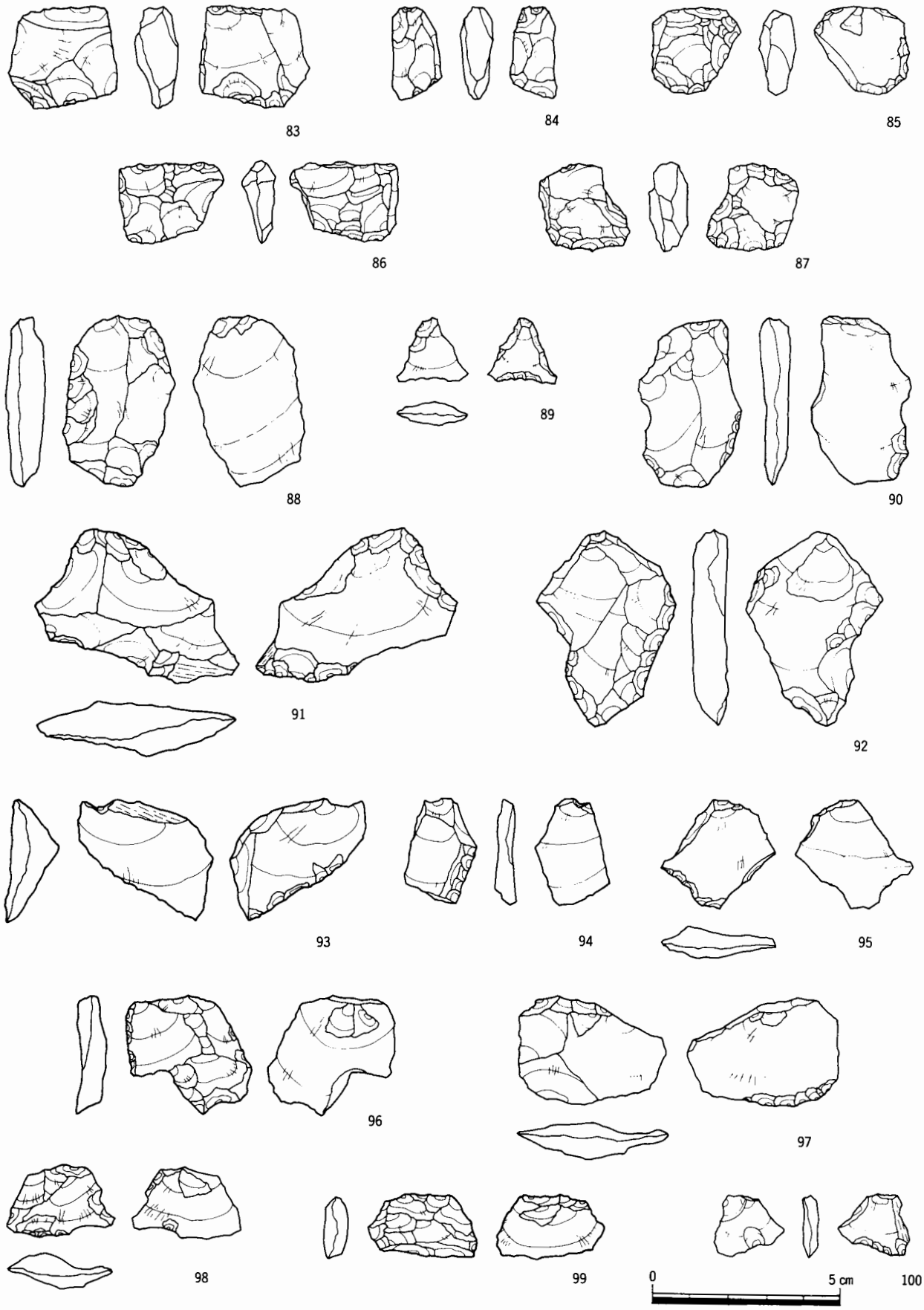
石核（第120図111～113、図版50）

12点出土している。石材は、下呂石３点（111）、黒曜石４点（113）、チャート４点（112）、玉髄１点である。

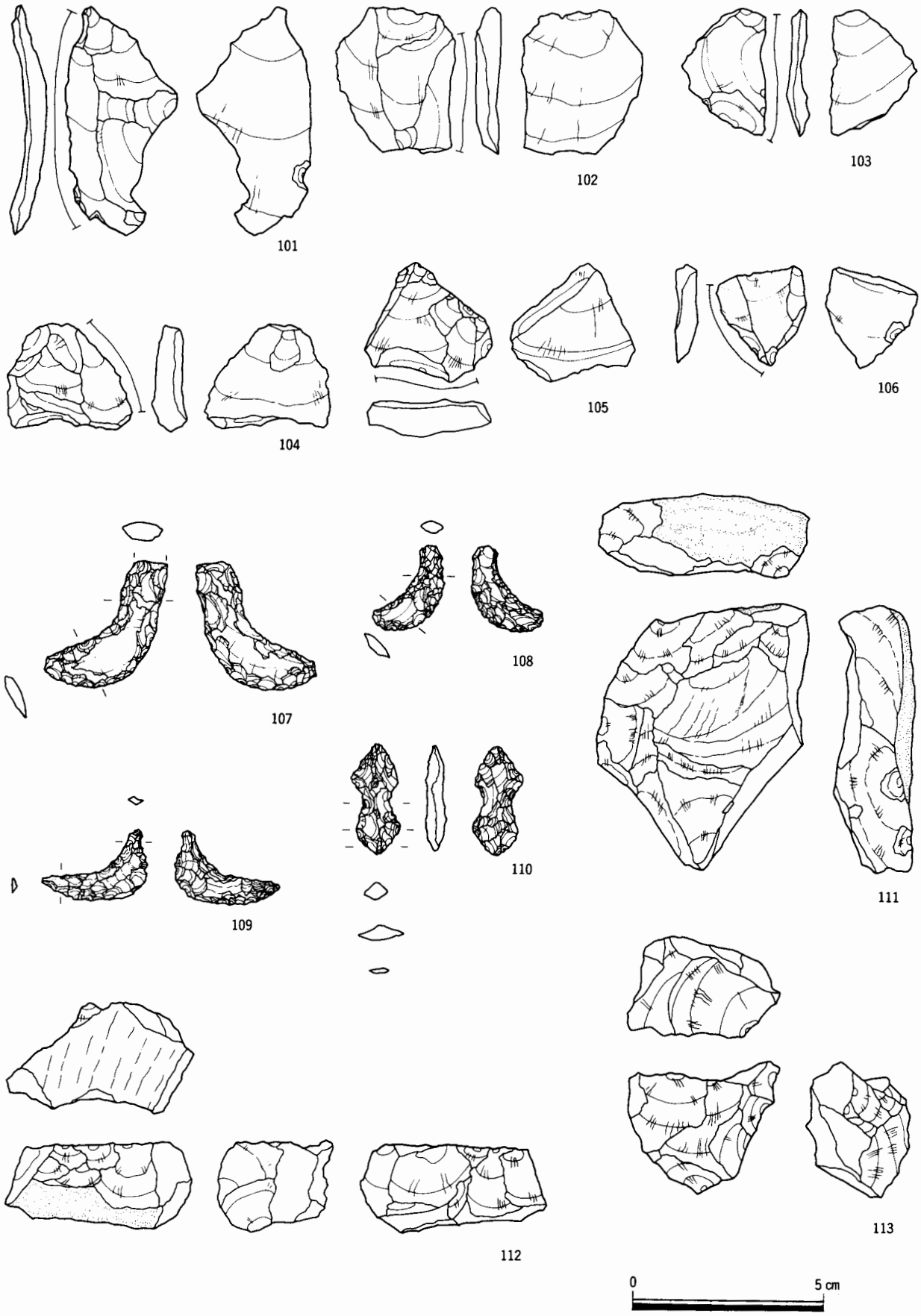
111は厚手の板状剥片を素材とし、打面転移を行いながら剥片剥離作業を行っている。112は摂理面を打面として利用している。113は厚みのある剥片を素材とし、打面転移を行っている。



第118図　包含層出土石器(4)掻器・石匙



第119図　包含層出土石器(5)両極剝離痕のある石器・二次加工のある剝片



第120図　包含層出土石器(6)使用痕のある剝片・異形石器・石核

剝片

包含層から出土した剝片類は、4976点である。石材別では、チャートが2696点、下呂石が1514点、黒曜石が721点、頁岩19点、玉髄24点、凝灰岩２点である。チャートの多さが目立つ。

打製石斧（第121図、図版51）

343点出土している。次のように分類する。

１類　頭部がほぼ平行な、いわゆる短冊形。
２類　胴部がくびれる、いわゆる分銅形。
３類　形状が基部に向かって収束する、いわゆる撥形。

折損部位による分類
a　刃部を欠く
b　基部を欠く
c　基部の一部を欠く
d　胴部のみ（両端を欠く）
e　破片

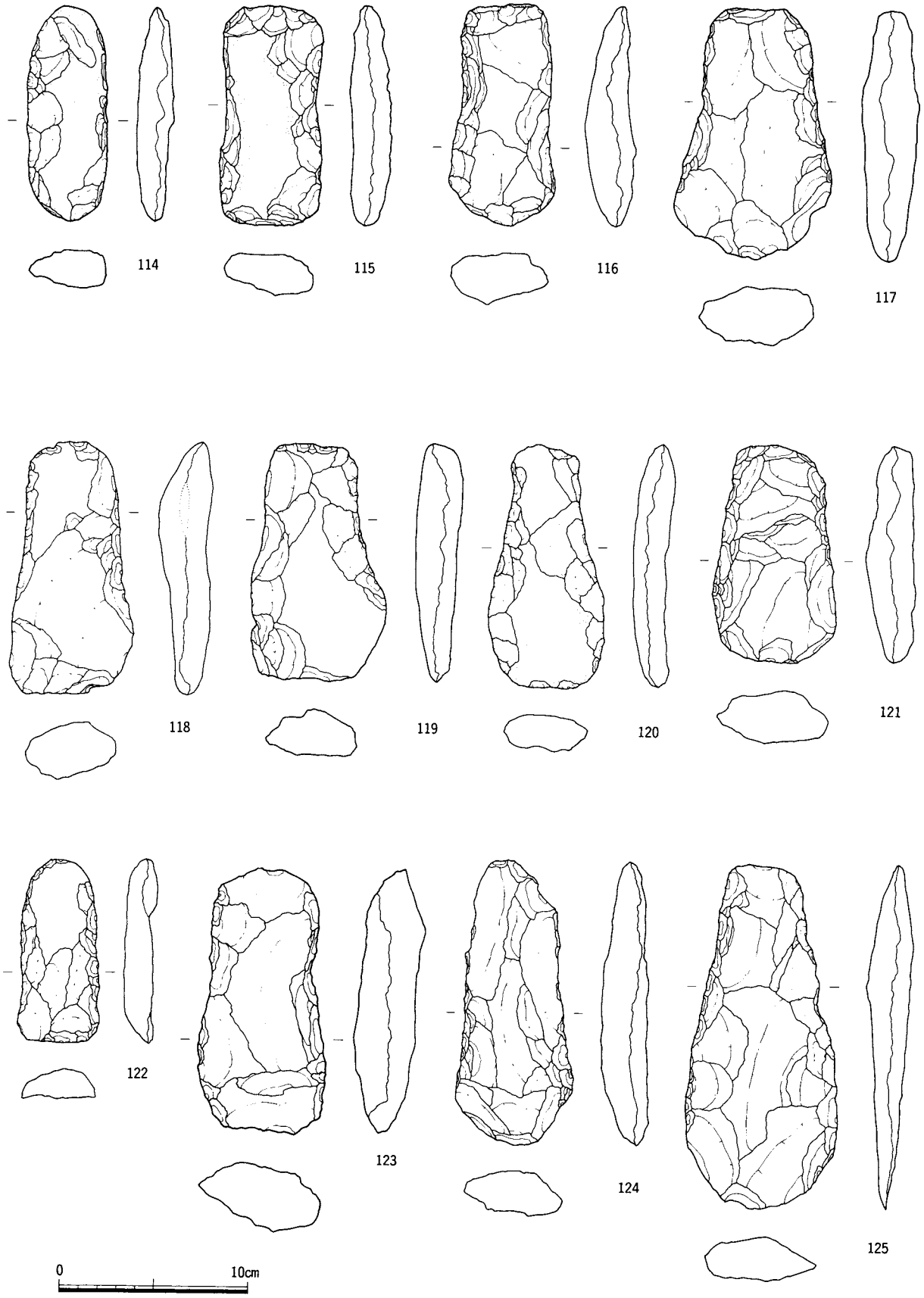
形態別では、１類196点、３類56点、不明91点である。地点別では、Ａ地点203点、Ｂ地点116点、Ｃ地点14点である。

磨製石斧（第122図、図版51）

76点出土している。次のように分類する。

１類　側面が未発達で横断面が方形にならない偏平なもの。
２類　定角式磨製石斧。大きさで４つに細分する。
　２Ａ類　長さが10cm以上のもの。
　２Ｂ類　長さが４cm以上10cm未満で、幅が２cm以上のもの。
　２Ｃ類　長さが４cm以上、幅が２cm未満のもの。
　２Ｄ類　長さが４cm未満のもの。
３類　乳棒状磨製石斧

折損部位による分類
a　刃部を欠く
b　基部を欠く
c　基部の一部を欠く
d　胴部のみ（両端を欠く）



第121図　包含層出土石器(7)打製石斧

e　破片

形態別では、２Ａ類15点、２Ｂ類17点、３類２点、不明42点である。地点別では、Ａ地点56点、Ｂ地点16点、Ｃ地点３点である。

126は偏平で形態が不明確なものであるが、縄文早期のものであろう。

磨石・凹石・敲石類（第123・124図、図版52）

この類の石器では、磨痕・凹痕・敲打痕など複数の痕跡が重複していることが多く、機能も多様であると考えられるが一括して扱うこととする。形態については、まず平面形および断面形によって次のように分類する。

１類　平面形が円形のもの。
２類　平面形が楕円形のもの。
３類　平面形が方形のもの。
１～３類は、その断面形によりさらに４つに細分した。
　Ａ類　断面形が円形のもの。
　Ｂ類　断面形が楕円形のもの。
　Ｃ類　断面形が凸レンズ状のもの。
　Ｄ類　断面形が方形のもの。
４類　角柱状や円柱状の自然礫を用いたもので、断面は多角形（いわゆる特殊磨石）。

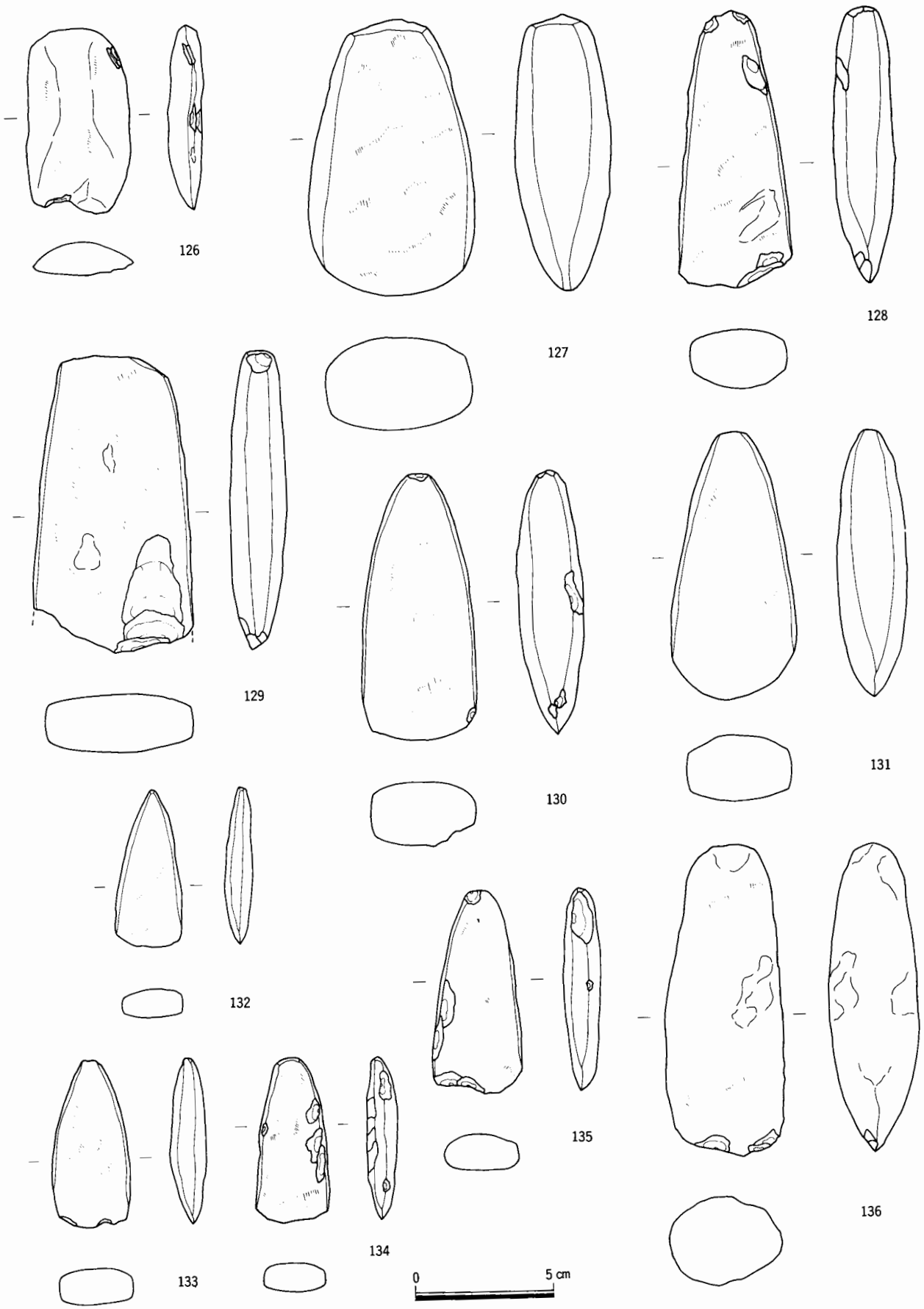
凹痕の数については、いわゆる表面・裏面・その他の面の個数を一覧表に示した。また、凹の形状について、次のア～ウのように分類した。
ア　敲打痕がかたまって浅い凹痕をつくっているもの。
イ　すりばち状のはっきりした凹痕のあるもの。
ウ　右上がり状に広がる細長い凹痕を有するもの。
なお、凹痕のないものについては、磨面や敲打痕の様子を一覧表に記述した。

出土点数は549点である。形態別では、１Ａ類２点、１Ｂ類49点、１Ｃ類２点、１Ｄ類１点、２Ａ類13点、２Ｂ類297点、２Ｃ類45点、２Ｄ類22点、３Ｄ類７点、４類39点、不明72点となっている。地点別では、Ａ地点121点、Ｂ地点340点、Ｃ地点80点である。

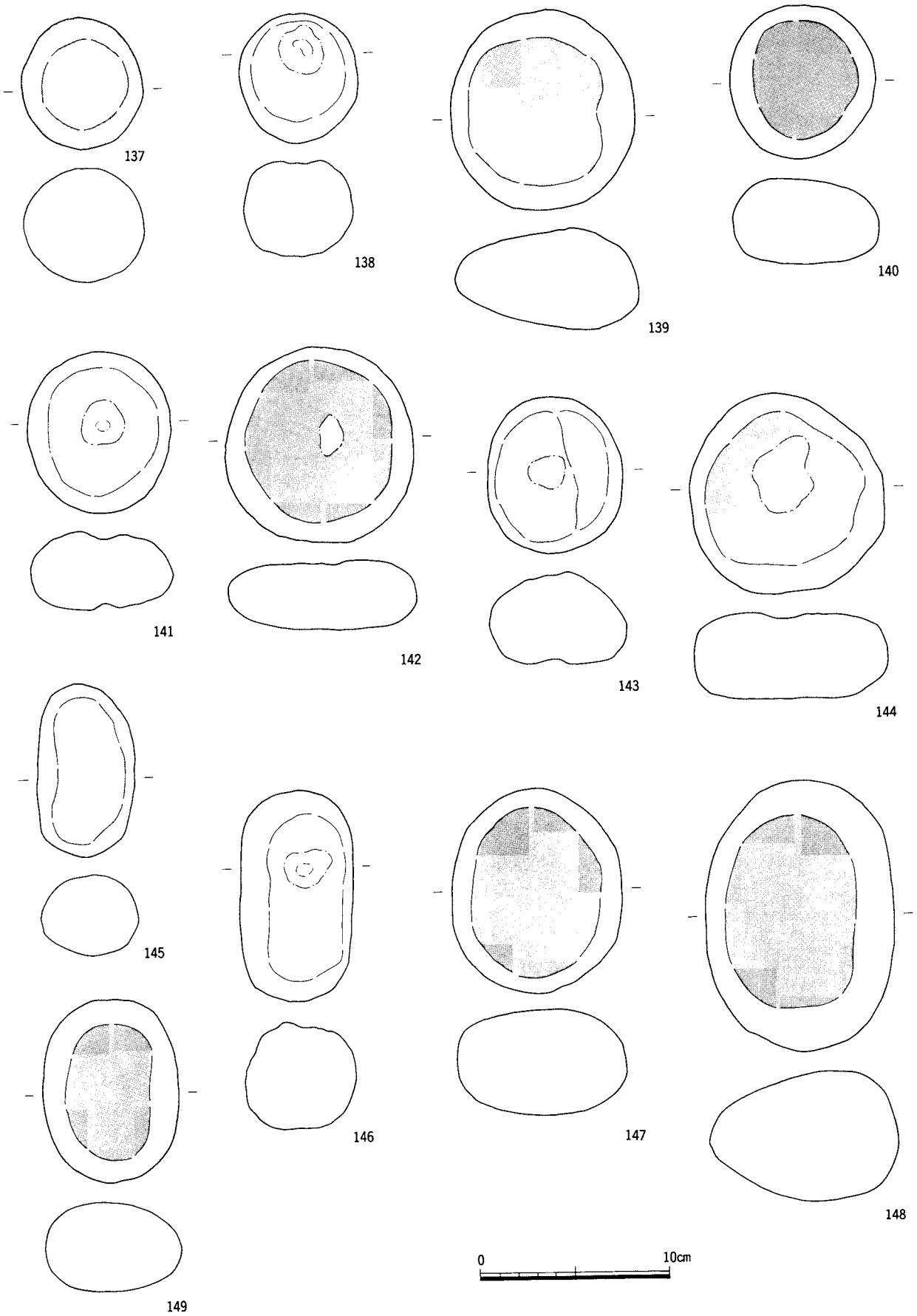
有溝石錘（第125図162～167、図版53）

Ｃ９区より有溝石錘が６点集中的に出土した。切目の断面はいずれもＵ字状である。五味原遺跡群では各遺跡とも石錘の出土は少ない。

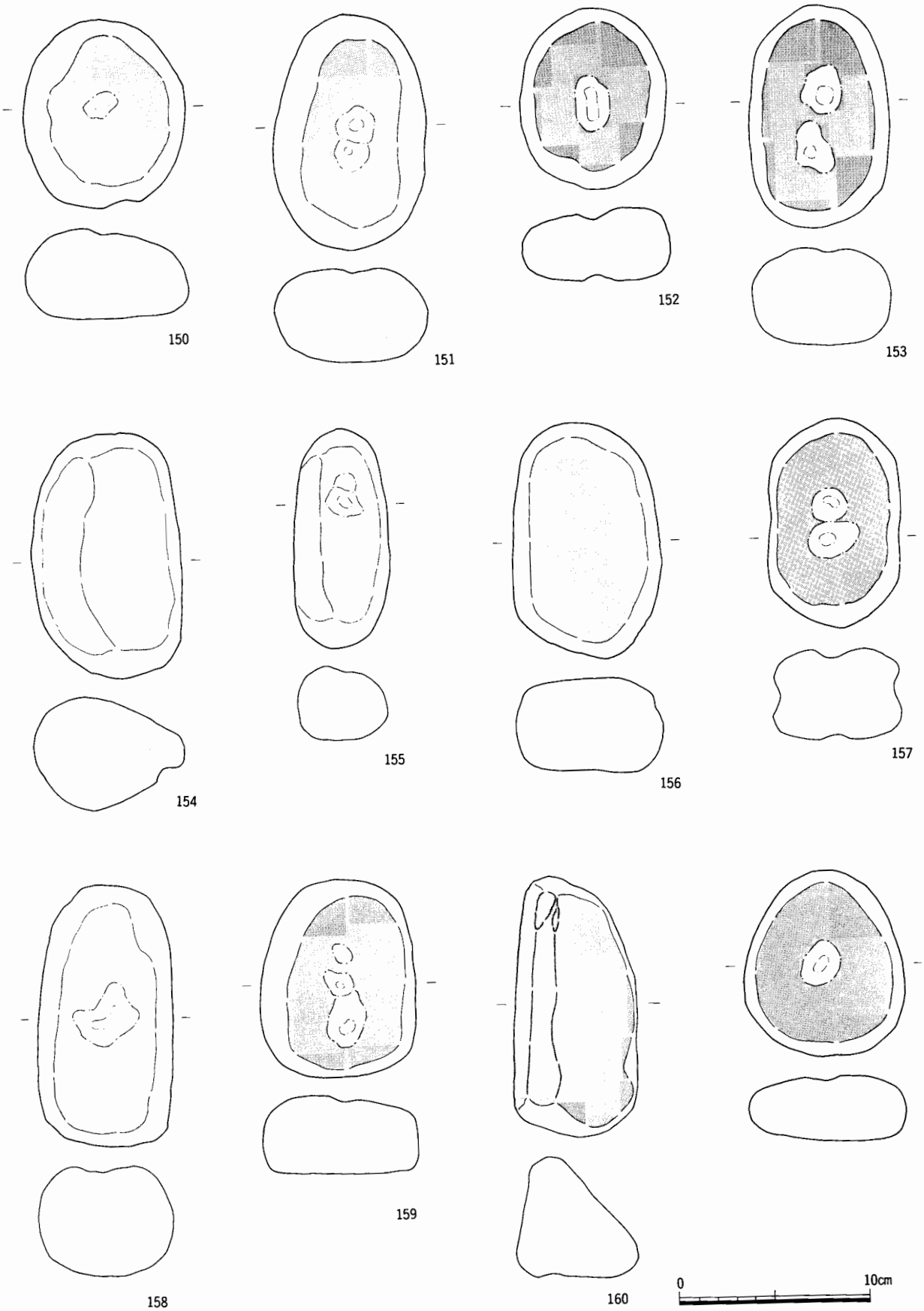
砥石（第125図168・169、図版53）



第122図　包含層出土石器(8)磨製石斧



第123図　包含層出土石器(9)磨石・凹石・敲石類(1)



第124図　包含層出土石器⑽磨石・凹石・敲石類(2)

６点出土している。砂岩が４点、凝灰岩２点である。図示した２点（168・169）はいずれも偏平な石で、両面に擦り面がある。

石皿（第125図170・171、図版53）

石皿は８点出土している。いずれも偏平な石の中央部がややくぼむものである。図示した２点(170・171）は楕円形で中央に溝状の凹みを有するものである。

石製品（第126図、図版53）

１～５は石製装身具である。１はＦ８区から出土している。垂飾で孔は両面穿孔である。２はＮ６区から出土している。垂飾で孔は両面穿孔である。３はＡ８区から出土している。両面穿孔の玉である。４はＣ10区から出土している。管玉で両面穿孔である。半分欠失している。５はＤ10区から出土している。大型品であるが、装身具であろう。

６はＨ11区から出土した。砲弾形石製品と名付けたが用途不明の石製品である。研磨の単位が明瞭に残っている。尖端も小さな面を有する。

７はＧ12区から出土した独鈷石である。端部は面取りして研磨している。全面敲打痕が残るが、隆起部は敲打痕がほとんどない。Ｉ－３もしくはII－２類である（鈴木1981)。

８はＧ12区から出土した環状石斧である。石製品として扱うのはやや不適切かもしれないが、別に項目を作らずにここで記述することにする。長径5.8cm、短径5.7cmで、孔径は1.1cmである。刃部に剝離痕がある。中心孔は両面穿孔である。表面は丁寧な研磨が施されている。環状石斧は縄文時代から弥生時代まで各時期に見られる。飛騨地方で見つかっている環状石斧は17例報告されているが（吉朝1991)、発掘調査により知られたものはほとんどない。

９はＧ12区から出土した。不明の石製品であるが、刻文入り石製品と名付けておく。円礫の上面に線刻されている。短沈線を連続させて施文している。中央部は表面が剝がれている。

10・11は刀剣形石製品である。10は左側縁に刃部を持たないので石剣ではないと思われる。頭部上下にくびれ部を有する。頭部の文様から見て、後期末から晩期初頭の可能性がある。11は石剣である。表裏とも右側の刃部に擦痕が顕著に残る。

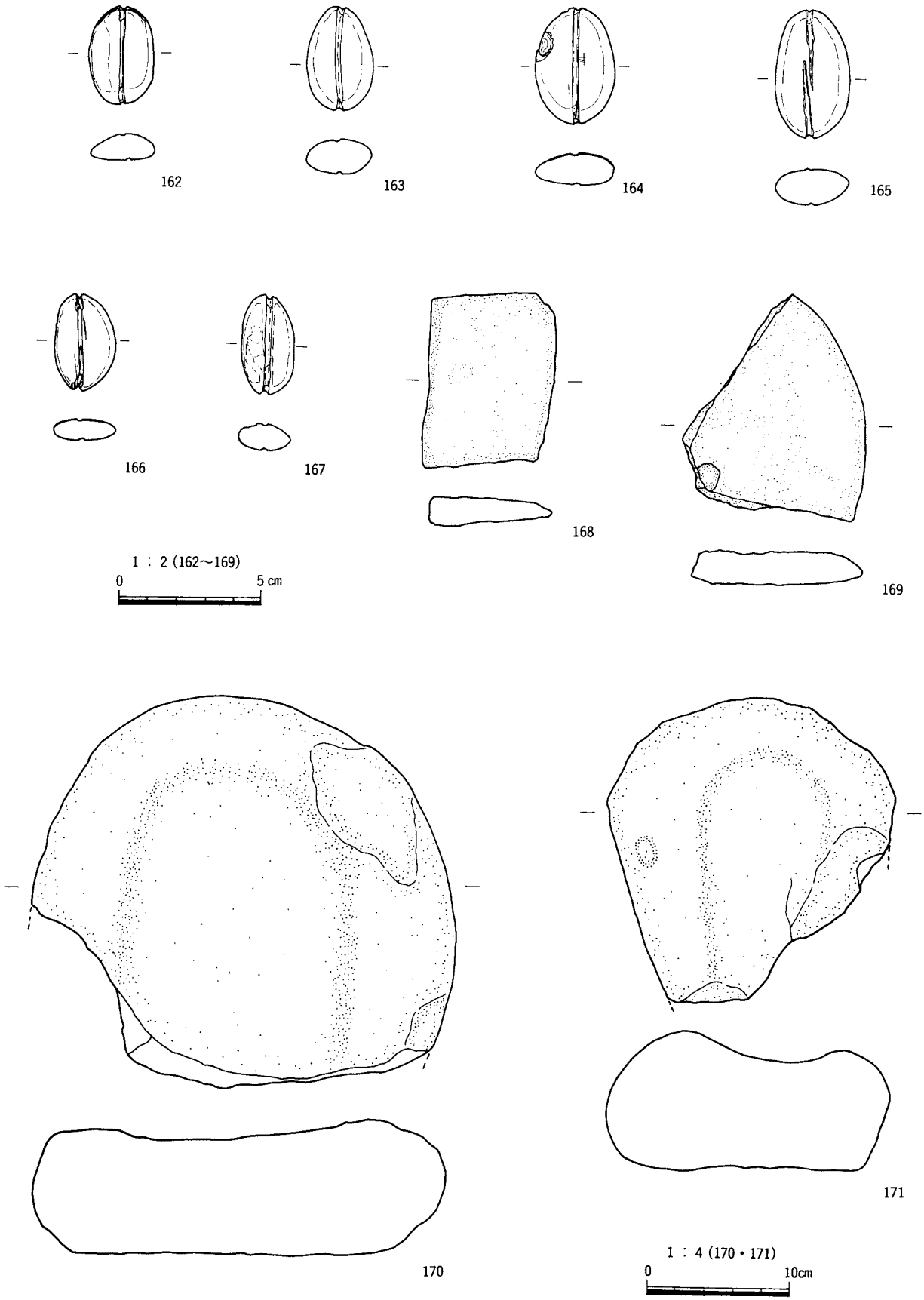
12は不明の石製品である。大型の環状石斧が欠損したような形状を示すが、実測図左下の割れ面には敲打痕がある。全体に敲打痕があり、刃部に相当する部分は面を持つ所がある。

地点別の石器出土状況

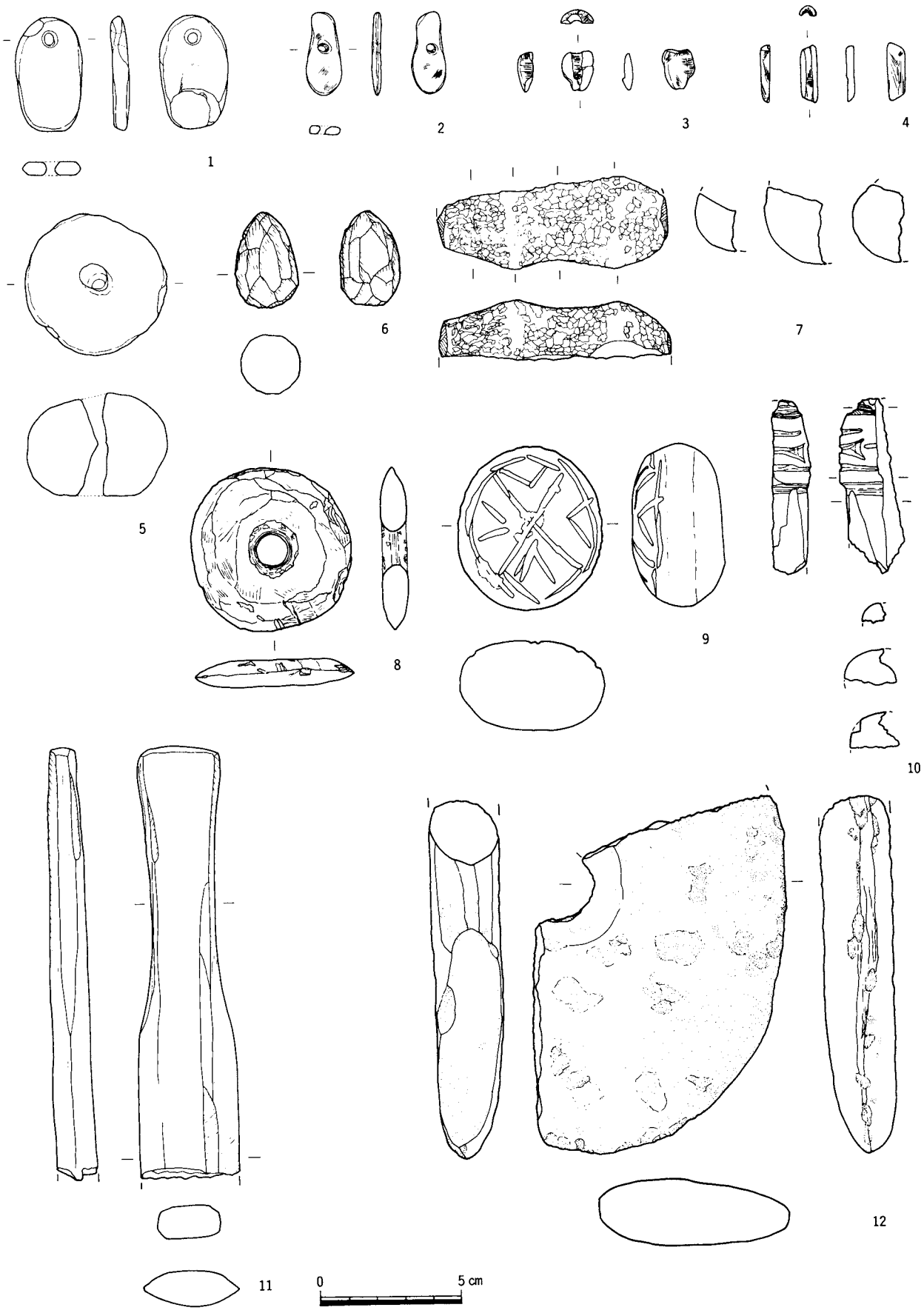
牛垣内遺跡は、地点ごとに大きく時期の異なる土器が出土している。石器に関しては一括して記述したが、Ａ・Ｂ・Ｃの各地点ごとに石器の組成を比べたのが第127図である。

Ａ地点は、縄文後晩期の土器が集中的に出土している地点である。Ｂ地点およびＣ地点は早期と中期の土器が出土する地点であり、早期に関しては様相が異なる地点である。石器に関しては、３地点の比較を試みたが、Ａ地点とＢ・Ｃ地点の差が顕著である。

Ａ地点では、打製石斧および磨製石斧の比率が他の地点に比べて非常に高い。それに対して、Ｂ・Ｃ地点は磨石類が多く、特にＣ地点では、その比率の高さが際立っている。また、Ｂ地点は剝片石器



第125図　包含層出土石器(11)有溝石錘・砥石・石皿

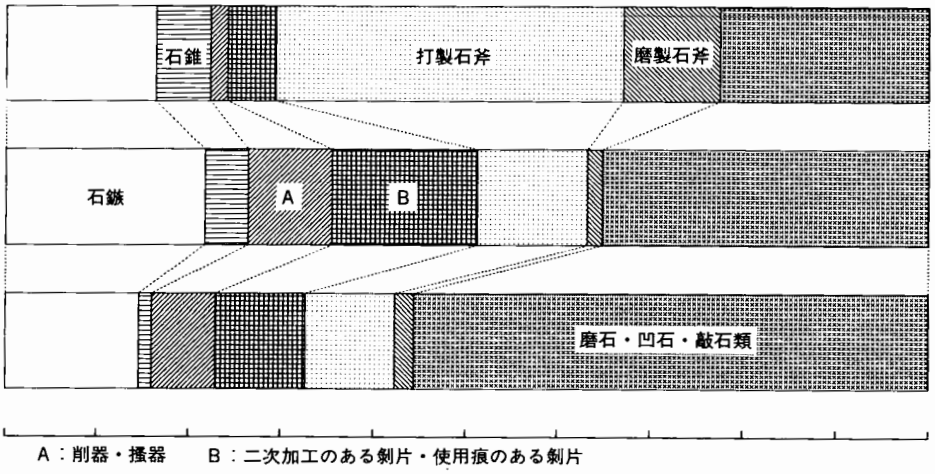


第126図　包含層出土石製品

類が多いようである。

A地点とB・C地点の違いは、時期の違いを反映していると推定される。しかし、場所の問題も検討しなければならない。A地点の打製石斧・磨製石斧の多さは、根茎類の採取や木の伐採などの作業場であったことを示すのかもしれない。B・C地点は、川を挟んで、中期後葉の集落が営まれていたと推定される地点である。食物処理や石器製作の作業場の問題を考慮してもよいであろう。

（上嶋　善治）



第127図　地点ごとの石器組成

第6表　石器一覧表

石鏃

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
1	B12	II	下呂石	2.3	1.4	0.3	0.6	1C			
2	C9		下呂石	1.8	1.5	0.3	0.6	1C			
3	C11	II	下呂石	1.7	(1.3)	0.2	(0.3)	—	b		
4	C11	II	下呂石	2.3	1.5	0.4	0.8	4F			
5	C11	II	下呂石	3.2	1.9	0.3	1.1	1C		115-13	
6	C11	II	黒曜石	2.4	1.5	0.4	0.7	4G		115-35	
7	C11	II	チャート	(2.2)	(1.5)	0.5	(1.5)	—	b		
8	C12	II	下呂石	1.7	1.7	0.4	0.8	1D			
9	D9	II	下呂石	2.7	1.7	0.7	2.4	1F			
10	D9	II	下呂石	2.4	1.4	0.4	1.0	1B		115-7	
11	D11	II	下呂石	1.3	1.4	0.3	0.4	1C			
12	D11	II	チャート	(1.9)	1.6	0.4	(1.0)	1C	a		
13	D12	II	下呂石	2.4	1.4	0.3	0.9	1C			
14	D12	II	下呂石	1.9	1.3	0.3	0.6	1C	b		
15	D12	II	黒曜石	(1.6)	(1.2)	0.5	(0.6)	—	e		
16	D12	II	チャート	1.6	1.5	0.3	0.5	1C			
17	D13	II	下呂石	2.1	1.1	0.3	0.4	1D			
18	E10	I	黒曜石	(1.8)	1.2	0.3	(0.6)	4F	h		
19	E12	II	下呂石	2.0	(1.0)	0.3	(0.5)	—	b		
20	E12	II	チャート	2.2	1.7	0.4	1.1	1C		115-17	
21	E12	II	チャート	2.3	1.4	0.4	1.0	1C			
22	E12	III	下呂石	1.8	1.2	0.3	0.4	1C			
23	E12	II	チャート	2.2	1.7	0.3	0.8	1C			
24	E12	III	チャート	1.8	1.6	0.2	0.4	1C			
25	E13	I	黒曜石	2.5	1.4	0.3	0.7	1C		115-20	
26	E13	II	下呂石	1.2	1.2	0.3	0.4	1C			
27	F7	II	黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.3	1C			
28	F8	II	黒曜石	(1.7)	(1.1)	0.4	(0.6)	—	e		
29	F12	II	チャート	2.7	1.5	0.4	1.3	1C			
30	G7	II	下呂石	2.4	1.4	0.4	0.9	1C		115-15	

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
31	G 7	II	黒曜石	(1.7)	1.6	0.4	(1.0)	—	a		
32	G 8	II	チャート	(2.8)	1.7	0.4	(1.4)	1 G	a		
33	G 9	II	下呂石	1.7	1.1	0.3	0.5	1 C			
34	G 9	II	下呂石	2.8	1.3	0.3	0.6	1 B			
35	G11	II	下呂石	(4.5)	(1.3)	0.5	(2.4)	1 G	a		
36	G12	II	下呂石	3.8	1.6	0.5	2.1	4 G			
37	G12	II	下呂石	2.4	1.5	0.4	1.0	1 C			
38	G12	II	下呂石	1.4	1.3	0.3	0.4	1 C			
39	G12	II	下呂石	1.3	1.4	0.2	0.4	1 C			
40	G12	II	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.5	1 C			
41	G12	II	チャート	2.3	1.5	0.3	0.8	1 F			
42	G12	II	チャート	(1.9)	(1.8)	0.4	(1.2)	1 G	a		
43	H 7	II	チャート	(1.4)	1.4	0.3	(0.5)	—	a		
44	H 8	II	下呂石	2.4	1.8	0.5	1.1	4 F		115-32	
45	H 8	II	下呂石	1.9	1.4	0.4	0.9	1 C			
46	H 8	II	チャート	2.5	1.4	0.6	1.9	1 F			
47	H 8		下呂石	(1.7)	1.4	0.3	(0.6)	—	a		
48	H 8		チャート	1.8	1.4	0.3	0.5	1 A			
49	H11	II	下呂石	(3.0)	(1.3)	0.4	(1.5)	2 C	c		
50	H11	II	下呂石	2.2	1.4	0.4	0.8	1 F		115-27	
51	H11	II	黒曜石	(1.1)	(1.1)	0.2	(0.1)	—	d		
52	H11	II	下呂石	4.3	2.3	1.0	8.0	1 B			
53	H11		下呂石	2.3	1.6	0.3	0.8	1 G		115-30	
54	H11		下呂石	(2.4)	1.1	0.3	0.8	4 F	h		
55	H11		下呂石	2.6	1.3	0.5	1.0	4 F		115-33	
56	H12	II	下呂石	3.1	1.6	0.6	1.5	4 G		115-34	
57	H12	II	下呂石	3.4	1.1	0.5	1.5	2 C		115-31	
58	H12	II	下呂石	(2.2)	1.6	0.4	1.0	1 F	a		
59	H12	II	下呂石	1.9	1.2	0.4	0.6	1 G			
60	H12	II	下呂石	1.6	2.1	0.7	2.7	1 D			
61	H12	II	下呂石	2.5	1.7	0.5	1.3	4 G			
62	H12	II	下呂石	1.7	1.1	0.4	0.5	1 B			
63	H12	II	下呂石	(1.1)	1.4	0.3	(0.4)	1 C	a		
64	H12	II	下呂石	2.4	1.3	0.4	0.9	1 C			
65	H12	II	下呂石	2.1	1.6	0.4	0.9	1 C			
66	H12	II	下呂石	2.3	1.3	0.4	1.2	1 G		115-29	
67	H12	II	下呂石	(2.4)	(1.2)	0.3	(0.6)	—	f		
68	H12	II	下呂石	1.8	2.0	0.7	3.5	1 D			
69	H12	II	下呂石	(2.1)	(1.6)	0.4	(1.0)	—	b		
70	H12	II	黒曜石	(1.3)	1.4	0.3	(0.4)	—	a		
71	H12	II	下呂石	1.8	1.3	0.4	0.8	1 D			
72	H12	II	黒曜石	(1.6)	1.3	0.3	(0.4)	1 C	a		
73	H12	II	チャート	1.6	1.6	0.3	0.6	1 C			
74	H12	II	チャート	2.0	1.4	0.2	0.5	1 C		115-19	
75	H12	II	チャート	(1.6)	1.2	0.3	(0.7)	—	i		
76	H12	II	下呂石	4.4	2.4	0.8	6.6	1 D			
77	H12	II	下呂石	(1.8)	(0.9)	(0.3)	(0.5)	—	d		
78	H12		黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.4	1 B		115-9	
79	H17	II	下呂石	(2.2)	(1.3)	0.3	(0.4)	1 C	b		
80	I 4	II	下呂石	(2.2)	1.6	0.3	(0.8)	1 C	e		
81	I 5	II	チャート	2.2	2.2	0.5	1.7	1 B			
82	I 6	II	下呂石	(2.0)	1.5	0.3	(0.8)	1 C	a		
83	I 6	II	黒曜石	(1.3)	1.3	0.2	(0.3)	1 C	a		
84	I 6	II	チャート	1.6	1.5	0.3	0.5	1 A			
85	I 6	II	チャート	2.0	(1.8)	0.3	(0.7)	1 C	b		
86	I 6	II	チャート	1.8	1.7	0.3	0.6	1 C			
87	I 7	II	下呂石	(1.9)	1.5	0.4	(1.0)	1 B	b		
88	I 8	II	黒曜石	2.0	1.3	0.4	0.7	1 B			
89	J 4	II	下呂石	1.8	(1.1)	0.2	(0.3)	1 C	b		
90	J 5	II	下呂石	2.2	1.7	0.3	1.0	1 D			
91	J 6	II	下呂石	2.5	1.6	0.5	1.7	1 D			
92	J 6	II	下呂石	1.9	1.8	0.6	1.4	1 B			
93	J 6	II	黒曜石	2.0	(1.4)	0.4	(0.7)	5 C	b	115-36	
94	J 6	II	黒曜石	(1.3)	(1.0)	0.2	(0.2)	1 C	h		
95	J 6	II	黒曜石	1.5	1.3	0.4	0.5	1 C			
96	J 6	II	頁岩	2.7	2.2	0.3	1.1	1 A		115-2	
97	J 6	II	チャート	(1.5)	1.5	0.2	(0.4)	—	a		
98	J 6	II	チャート	1.6	1.4	0.3	0.6	1 D			
99	K 5	II	下呂石	2.3	1.1	0.3	0.1	1 C			
100	K 5	II	下呂石	1.7	1.8	0.3	0.6	1 B			

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
101	K 6	II	チャート	1.7	1.5	0.3	0.5	1 B			
102	K 7	II	下呂石	1.8	1.8	0.4	0.8	1 D		115-23	
103	K 8	II	黒曜石	1.4	1.0	0.2	0.2	1 C			
104	L 4		下呂石	1.6	1.5	0.4	0.7	1 C			
105	L 4		チャート	(1.6)	1.5	0.2	(0.6)	1 A	a		
106	L 4		下呂石	1.8	(1.4)	0.5	(0.8)	—	b		
107	L 4		下呂石	2.1	1.6	0.4	0.8	1 B			
108	L 4		黒曜石	1.6	(1.3)	0.3	(0.4)	—	b		
109	L 4		黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.5	1 C		115-24	
110	L 4		黒曜石	1.6	1.2	3.5	0.6	1 D			
111	L 4		チャート	2.0	(1.6)	0.3	(0.7)	—	f		
112	L 4		チャート	2.1	1.4	0.3	0.6	1 B			
113	L 4		チャート	1.7	1.1	0.3	0.4	1 C			
114	L 4		チャート	1.5	1.0	0.2	0.3	1 C			
115	L 4		チャート	1.4	1.6	0.4	0.7	1 B			
116	L 4		チャート	1.8	(1.4)	0.3	(0.5)	1 C	b		
117	L 4		チャート	1.7	1.3	0.2	0.5	1 C			
118	L 5	III	チャート	1.7	(1.1)	0.2	(0.4)	—	b		
119	L 6	II	下呂石	1.8	1.5	0.4	0.8	1 C			
120	L 6	II	下呂石	2.9	1.2	0.4	1.0	2 C			
121	L 6	II	黒曜石	2.1	(1.3)	0.3	(0.6)	—	b		
122	L 6	II	黒曜石	1.3	(1.2)	0.3	(0.3)	1 C	b		
123	L 6	II	チャート	2.2	(1.5)	0.3	(0.4)	1 A	f		
124	L 6	II	チャート	1.7	(1.2)	0.3	(0.3)	1 A	f		
125	L 7	II	下呂石	2.2	1.3	0.4	0.7	1 C			
126	L 7	II	下呂石	1.7	1.0	0.4	0.5	1 C			
127	L 7	II	下呂石	1.8	1.4	0.5	0.9	1 B			
128	L 7	II	下呂石	2.2	(1.9)	0.3	(0.6)	1 A	c		
129	L 7	II	黒曜石	(1.9)	(1.2)	0.3	(0.5)	—	b		
130	L 7	II	黒曜石	1.8	1.4	0.2	0.6	3 D			
131	L 7	II	チャート	2.3	2.1	0.3	1.5	1 C			
132	L 7	II	チャート	1.1	1.5	0.3	0.3	1 A		115-5	
133	L 7	II	チャート	1.9	1.4	0.6	1.1	1 B		115-8	
134	L 7	III	下呂石	1.8	1.5	0.4	0.5	1 C			
135	L 7	III	下呂石	(1.4)	1.6	0.3	(0.7)	—	a		
136	L 7	III	チャート	2.4	1.8	0.5	1.5	1 C			
137	L 7	III	チャート	2.1	1.3	0.2	0.4	1 A			
138	L 7	IV	チャート	1.6	1.3	0.3	0.7	1 C			
139	L 8	II	チャート	2.8	(1.9)	0.5	(1.8)	—	f		
140	L 9		チャート	2.4	1.5	0.2	0.7	1 C			
141	M 6	II	下呂石	2.0	(1.5)	0.3	(0.6)	1 C	c		
142	M 6	II	チャート	(2.1)	1.4	0.4	(1.2)	—	a		
143	M 6	III	チャート	2.1	1.5	0.2	0.5	1 A		115-4	
144	M 7	II	下呂石	2.0	1.6	0.4	1.1	1 E		115-25	
145	M 7	II	黒曜石	2.1	1.5	0.4	0.9	1 B			
146	M 7	II	黒曜石	(0.8)	(1.2)	0.3	(0.3)	—	i		
147	M 7	II	チャート	2.2	1.5	0.4	1.0	1 C			
148	M 7	II	黒曜石	(1.6)	(1.5)	0.3	(0.4)	—	e		
149	M 7	II	チャート	1.6	1.4	0.2	0.4	1 A			
150	M 7	II	チャート	1.2	1.1	0.2	0.3	1 C			
151	M 7	II	チャート	1.6	1.6	0.3	0.5	1 C			
152	M 7	II	チャート	2.1	1.6	0.2	0.6	1 C		115-18	
153	M 7	II	チャート	0.9	1.0	0.2	0.1	1 C			
154	M 7	II	チャート	(2.0)	(1.0)	0.4	(0.5)	—	g		
155	M 7	III	下呂石	(1.9)	1.5	0.5	(1.0)	1 G	a		
156	M 7	III	下呂石	2.0	1.2	0.3	0.5	1 C			
157	M 7	III	下呂石	(2.5)	(1.5)	0.4	(1.0)	1 C	b		
158	M 7	III	下呂石	(2.2)	(1.5)	0.2	(0.3)	1 C	b		
159	M 7	III	下呂石	1.6	1.3	0.2	0.2	1 A		115-1	
160	M 7	III	下呂石	(1.6)	1.9	0.3	(0.6)	1 A	a		
161	M 7	III	下呂石	1.8	(1.4)	0.4	(0.7)	—	b		
162	M 7	III	黒曜石	(2.1)	(1.1)	0.3	(0.6)	—	g		
163	M 7	III	黒曜石	(1.0)	(1.0)	0.3	(0.3)	—	i		
164	M 7	III	黒曜石	(1.3)	(1.4)	0.2	(0.3)	1 C	e		
165	M 7	III	チャート	(1.5)	1.5	0.3	(0.5)	1 A	a		
166	M 7	III	チャート	2.8	2.4	0.6	3.0	1 A			
167	M 7	III	チャート	2.5	(1.4)	0.3	(0.5)	1 A	f		
168	M 7	III	チャート	1.3	(1.2)	0.3	(0.3)	1 A	b		
169	M 8	II	下呂石	(1.1)	(0.8)	0.2	(0.1)	—	b		
170	M 8	II	黒曜石	1.8	1.0	0.2	0.3	1 B			

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
171	M 8	II	チャート	(2.0)	2.0	0.3	(1.0)	1 A	a		
172	M 8	II	チャート	1.5	(1.4)	0.3	(0.5)	1 A	f		
173	M 8	II	チャート	(1.4)	1.6	0.4	(0.8)	—	i		
174	M 8	II	チャート	(2.3)	(1.8)	0.6	(1.9)	—	i		
175	M 8	III	下呂石	2.0	1.5	0.5	1.0	1 C			
176	M 8	III	黒曜石	1.2	1.3	0.2	0.2	1 A			
177	M 8	III	チャート	1.6	(1.0)	0.3	(0.3)	1 A	f		
178	M 9	II	下呂石	2.3	1.7	0.4	1.2	1 D			
179	M 9	II	チャート	1.5	1.1	0.2	0.5	1 D			
180	M 9		下呂石	(2.0)	1.7	0.5	(1.4)	—	a		
181	M 9		下呂石	2.2	1.5	0.4	0.8	1 B		115-6	
182	M 9		下呂石	2.4	2.4	0.8	4.5	1 B			
183	M 9		下呂石	1.8	1.3	0.4	0.6	1 C			
184	M 9		下呂石	2.2	1.3	0.3	0.8	1 C		115-12	
185	M 9		チャート	2.4	2.0	0.5	2.1	1 C			
186	M 9		チャート	2.0	1.7	0.4	0.7	1 C			
187	M 9		チャート	1.6	(1.3)	0.2	(0.4)	—	b		
188	N 5	II	下呂石	(1.9)	(1.8)	0.2	(0.5)	1 C	b		
189	N 5	II	チャート	(1.9)	(1.8)	2.0	(0.4)	1 A	f		
190	N 5	II	下呂石	1.8	(1.4)	0.2	(0.4)	—	f		
191	N 5	II	黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.5	3 C			
192	N 5	II	チャート	2.3	1.5	0.6	1.7	1 D			
193	N 5	II	チャート	3.0	2.1	0.4	1.5	1 C		115-16	
194	N 5	II	チャート	2.2	1.9	0.5	1.3	1 C			
195	N 5	II	チャート	2.4	2.1	0.6	2.3	1 B			
196	N 5	III	チャート	(2.7)	2.1	0.5	(2.2)	1 C	a		
197	N 6	II	下呂石	1.6	1.4	0.5	0.7	1 C			
198	N 6	II	黒曜石	(1.3)	(1.3)	0.3	(0.4)	—	e		
199	N 6	II	チャート	2.5	1.5	0.4	1.7	1 F		115-28	
200	N 6	II	チャート	1.3	1.5	0.3	0.4	1 A			
201	N 6	II	チャート	(1.3)	1.5	0.4	(0.5)	1 B	a		
202	N 6	III	下呂石	2.0	1.3	0.3	0.7	1 D			
203	N 6	III	黒曜石	2.1	1.9	0.4	0.9	1 C		115-21	
204	N 6	III	チャート	2.5	(1.5)	0.4	(0.6)	1 C	b		
205	N 6	III	チャート	2.1	(1.8)	0.3	(0.5)	1 A	b		
206	N 7	II	下呂石	1.6	(1.3)	0.2	(0.2)	—	f		
207	N 7	II	下呂石	2.5	(1.3)	0.2	(0.3)	—	b		
208	N 7	II	下呂石	(1.8)	1.7	0.6	(1.4)	1 B	a		
209	N 7	II	黒曜石	1.3	1.5	0.5	1.3	1 B			
210	N 7	II	黒曜石	1.9	1.6	0.3	0.7	1 D			
211	N 7	II	黒曜石	(1.3)	1.5	0.3	(0.4)	1 C	a		
212	N 7	II	黒曜石	1.6	1.5	0.2	0.3	1 A			
213	N 7	II	チャート	1.9	(1.8)	0.4	(1.1)	1 D	b		
214	N 7	II	チャート	(1.8)	(1.3)	0.3	(0.4)	1 C	b		
215	N 7	II	チャート	2.1	1.9	0.4	1.0	1 C			
216	N 7	III	下呂石	2.6	(1.4)	0.4	(0.9)	—	b		
217	N 7	III	下呂石	2.5	1.7	0.6	1.5	1 C			
218	N 7	III	下呂石	(1.2)	(1.1)	0.3	(0.2)	—	h		
219	N 7	III	チャート	1.5	1.3	0.3	0.5	1 D			
220	N 7	III	黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.4	1 C			
221	N 7	III	黒曜石	0.9	0.6	0.2	0.1	1 B		115-10	
222	N 7	III	チャート	2.1	1.7	0.2	0.8	1 B			
223	N 7	III	チャート	1.1	0.8	0.1	0.1	1 C			
224	N 7	III	チャート	(1.9)	(1.3)	0.3	(0.6)	—	f		
225	N 7	III	チャート	2.2	(0.9)	0.2	(0.2)	—	b		
226	N 7	III	チャート	2.4	1.8	0.4	1.3	1 A			
227	N 7	III	チャート	1.9	1.5	0.3	0.5	1 A			
228	N 7	III	チャート	(1.3)	1.7	0.3	(0.5)	1 C	a		
229	N 7	III	チャート	1.6	(1.3)	0.3	(0.3)	1 C	b		
230	N 7	III	チャート	1.0	1.2	0.3	0.2	1 B		115-11	
231	N 7	III	チャート	(1.3)	(1.1)	0.3	(0.4)	—	i		
232	N 7	III	チャート	1.4	(1.2)	0.2	(0.3)	—	b		
233	N 8	II	黒曜石	(1.5)	2.1	0.2	(0.5)	—	a		
234	N 8	II	チャート	1.9	(1.4)	0.3	(0.5)	—	b		
235	N 8	II	チャート	1.2	(0.8)	0.2	(0.2)	1 C	b		
236	N 8	III	チャート	(1.7)	1.7	0.4	(0.9)	1 A	a		
237	O 5	II	下呂石	2.5	1.2	0.6	1.2	2 C			
238	O 5	II	下呂石	2.0	1.8	0.4	1.0	1 C			
239	O 5	II	チャート	2.4	2.0	0.6	2.0	1 E			
240	O 5	II	チャート	2.0	1.6	0.2	0.6	1 C			

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
241	O 5	II	チャート	(2.8)	(1.6)	0.4	(1.5)	—	h		
242	O 6	II	下呂石	2.5	(1.5)	1.5	(0.9)	—	b		
243	O 6	II	下呂石	(2.0)	(1.4)	0.3	(0.6)	—	b		
244	O 6	II	チャート	2.1	1.9	0.7	2.6	1 D			
245	O 6	II	チャート	1.3	(1.4)	0.2	(0.3)	1 A	b		
246	O 6	II	チャート	(1.8)	(1.7)	0.2	(0.5)	—	f		
247	O 6	II	チャート	1.7	1.2	0.5	1.0	1 E		115-26	
248	O 6	II	チャート	(2.3)	(1.6)	0.5	(1.8)	—	b		
249	O 7	II	チャート	1.6	1.3	0.2	0.3	1 A			
250	O 8	II	黒曜石	1.8	(1.3)	0.3	(0.6)	1 C	b		
251	O 8	II	チャート	1.9	1.5	0.2	0.5	1 A		115-3	
252	O 8	II	チャート	1.2	1.2	0.2	0.2	1 C			
253	O 8	II	下呂石	(1.9)	1.5	0.4	(1.6)	1 D	a		
254	O11	II	チャート	2.1	1.4	0.2	0.6	1 A			
255	O12	II	下呂石	2.9	1.7	0.4	1.2	1 C		115-14	
256	P 9	II	チャート	2.0	1.6	0.3	0.9	1 C			
257	P11	II	下呂石	2.0	1.2	0.3	0.5	1 B			
258	P11	II	黒曜石	1.9	1.5	0.5	0.9	1 B			
259	P11	II	チャート	1.5	(1.1)	0.3	(0.4)	—	b		
260	P11	VI	下呂石	(2.9)	1.9	0.5	(2.1)	—	a		
261	P11	VI	チャート	1.5	1.4	0.2	0.4	1 C			
262	P11	VI	チャート	2.0	(1.4)	0.2	(0.4)	—	f		
263	P12	II	チャート	(2.9)	1.8	0.4	(1.9)	1 C	a		
264	P12	III	下呂石	2.1	1.3	0.3	0.5	1 C			
265	P12	VI	下呂石	(1.8)	(1.1)	0.3	(0.6)	1 B	b		
266	P12	VI	チャート	(2.1)	1.9	0.4	(1.8)	1 E	a		
267	P12	VI	チャート	1.7	(1.0)	0.4	(0.6)	—	b		
268	P13	II	チャート	1.9	(1.5)	0.4	(0.7)	—	b		
269	P13	III	下呂石	2.4	1.5	0.4	1.2	3 C			
270	Q 9	V	黒曜石	2.2	(1.8)	0.3	(0.6)	1 C	b		
271	Q10	VII	チャート	(2.1)	(1.7)	0.3	(0.7)	—	g		
272	Q10	IX	チャート	1.6	1.7	0.4	0.7	1 D			
273	Q11	II	チャート	1.5	1.5	0.3	0.6	1 D			
274	R10	II	チャート	2.0	1.4	0.3	0.8	1 D		115-22	
275	SB 1	II	下呂石	(1.5)	1.8	0.3	(0.7)	—	a		
276	SX 1	II	下呂石	3.0	1.7	0.5	1.7	1 G			
277	SX 1	II	下呂石	(3.7)	1.3	0.5	(2.0)	4 F	h		
278	SX 1	II	チャート	2.4	1.4	0.4	1.0	1 G			
279	SX 1	II	黒曜石	2.4	1.4	0.4	0.8	1 G			
280	SX 1		チャート	2.1	1.5	0.3	0.9	1 D			
281	SX 1		下呂石	(2.7)	1.3	0.5	(1.2)	4 F	h		
282	SX 1		下呂石	2.4	1.7	0.6	1.9	1 C			
283	SB 2		チャート	2.1	1.5	0.3	1.1	1 C		41-141	
284	SB 2		下呂石	1.8	1.6	0.3	0.6	1 C		41-142	
285	SB 2		黒曜石	1.4	1.3	0.4	0.5	1 C		41-144	
286	SB 2		下呂石	1.3	1.2	0.4	0.4	1 C		41-143	
287	SB 2		黒曜石	(1.6)	(1.3)	0.3	(0.4)	1 C	e		
288	SB 2		黒曜石	(1.5)	1.3	0.2	0.3	1 C			
289	SB 2		チャート	1.7	(1.5)	0.3	(0.6)	1 C	b		
290	SB 2		チャート	1.9	1.1	0.2	0.4	1 C			
291	SB 2		チャート	(1.8)	(1.3)	0.5	(1.1)	—	e		
292	SB 2		黒曜石	1.9	1.3	0.4	0.7	1 B			
293	SB 2		下呂石	2.0	(1.4)	0.3	(0.6)	1 C	b		
294	SB 2		下呂石	2.0	(1.5)	0.4	(0.7)	1 C	b		
295	SB 2		下呂石	2.2	(1.5)	0.2	(0.5)	1 C	b		
296	SB 2		下呂石	2.6	(1.4)	0.5	(1.0)	1 C	b		
297	SB 2		下呂石	(2.2)	(1.4)	0.4	(1.2)	—	e		
298	SB 2		下呂石	2.0	(1.6)	0.4	(0.7)	1 C	b		
299	SB 2		下呂石	2.0	(1.4)	0.4	(0.6)	1 C	b		
300	SB 2		チャート	1.8	(1.4)	0.3	(0.5)	1 C	b		
301	SB 2		下呂石	1.7	(1.3)	0.4	(0.7)	1 B	b		
302	SB 6		黒曜石	1.6	1.6	0.3	0.4	1 C		46-53	
303	SB 6		チャート	1.8	(1.2)	0.2	(0.3)	1 C	b		
304	SB 6		下呂石	1.6	(1.0)	0.3	(0.3)	1 C	b		
305	SB 7		下呂石	2.1	(1.2)	0.3	(0.8)	5 C	b		
306	SB 7		チャート	1.9	1.9	0.4	1.1	1 B		51-92	
307	SB 7		下呂石	1.2	1.3	0.4	0.4	1 B			
308	SB 7		下呂石	2.0	(1.4)	0.4	(0.8)	1 C	b	51-93	
309	SB 7		下呂石	2.5	(1.6)	0.6	(1.7)	1 C	f		
310	SB 8		黒曜石	1.4	1.1	0.4	0.4	1 D		55-98	

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
311	SB 8		チャート	2.7	1.9	0.7	1.9	1 C		55-99	
312	SB 8		下呂石	2.6	1.6	0.4	1.0	1 C		55-100	
313	SB 8		チャート	1.9	1.4	0.3	0.7	1 C			
314	SB 8	III	チャート	1.8	1.5	0.4	1.1	1 D			
315	SB 8		黒曜石	1.2	1.0	0.3	0.2	1 C			
316	SB 8		チャート	(1.8)	(1.9)	0.2	(0.6)	1 D	f		
317	SB 8		チャート	(1.4)	(1.2)	0.3	(0.3)	1 C	b		
318	SB 9		頁岩	1.6	1.7	0.4	0.5	1 C			
319	SB 9		黒曜石	2.4	1.8	0.4	1.2	5 C		58-70	
320	SB 9		チャート	2.1	1.7	0.3	0.7	1 C			
321	—		下呂石	1.3	(1.2)	0.2	(0.3)	—	b		
322	—		黒曜石	2.2	(1.2)	0.4	(0.7)	1 C	b		
323	—		黒曜石	1.4	1.2	0.2	0.2	1 C			
324	—		チャート	2.0	1.4	0.3	0.6	1 C			
325	—		チャート	1.4	(1.4)	0.2	(0.4)	—	b		
326	—		チャート	1.7	(1.3)	0.2	(0.4)	1 A	b		
327	表採		下呂石	2.4	1.5	0.7	1.6	1 C			
328	表採		黒曜石	2.4	(1.5)	0.6	(1.3)	1 C	b		
329	表採		チャート	(1.7)	(1.6)	0.3	(0.8)	—	h		
330	表採		チャート	2.3	2.0	0.5	1.7	1 D			
331	表採		チャート	2.2	(1.1)	0.4	(0.7)	1 D	b		
332	表採		チャート	1.8	1.6	0.4	0.7	1 C			
333	表採		下呂石	1.3	1.1	0.2	0.2	1 C			

石錐

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
1	C10	II	下呂石	(1.6)	(0.5)	0.4	(0.5)	—			
2	C11	II	下呂石	(2.0)	(0.9)	0.5	(0.8)	—			
3	C12	II	下呂石	5.1	2.4	1.3	12.7	4 A			
4	D 9	II	下呂石	(3.5)	1.2	0.6	(2.6)	1 B		116-39	
5	D12	II	チャート	(2.4)	0.8	0.6	(1.4)	—			
6	E10	II	下呂石	2.0	0.9	0.4	0.6	1 B			
7	E12	II	下呂石	3.4	2.3	0.4	2.9	4 B		116-53	
8	E12	II	チャート	(2.2)	(0.7)	(0.4)	(0.6)	—			
9	E12	II	チャート	(1.8)	(1.4)	(0.3)	(0.7)	2 A			
10	F 8	II	黒曜石	2.7	1.7	0.5	1.7	4 A		116-51	
11	F12	II	チャート	3.1	0.8	0.6	1.6	1 B		116-42	
12	F12	II	チャート	1.8	0.7	0.5	0.6	1 B			
13	G 7	II	チャート	(3.5)	2.5	1.0	(5.8)	2 B		116-44	
14	G10	II	下呂石	2.1	1.2	0.3	0.7	3 A		116-45	
15	G12	II	チャート	(2.9)	1.9	0.5	(2.6)	3 B		116-46	
16	G12	II	黒曜石	2.0	0.6	0.5	0.6	1 A		116-38	
17	H 8	II	下呂石	(2.8)	1.9	0.4	(1.6)	4 A		116-49	
18	H 8	II	下呂石	(1.9)	0.7	0.5	(0.7)	—			
19	H11	II	黒曜石	1.8	0.7	0.3	0.3	1 A			
20	H12	II	下呂石	(3.0)	1.4	0.6	(2.4)	—			
21	H12	II	下呂石	(3.1)	1.2	0.7	(2.8)	—			
22	H12	II	下呂石	(4.0)	1.2	0.8	(4.4)	1 B			
23	H12	II	下呂石	2.8	1.7	0.5	1.7	1 B			
24	H12	II	チャート	(5.9)	3.1	1.3	(24.1)	2 B			
25	H12	II	下呂石	(2.0)	1.0	0.4	(0.8)	1 B			
26	H12	II	下呂石	2.8	1.3	0.7	2.3	1 B		116-40	
27	H12	II	下呂石	2.2	1.1	0.6	1.5	4 B			
28	H12	II	下呂石	1.5	2.2	0.4	0.6	4 A			
29	H12	II	下呂石	2.2	1.3	0.4	1.1	4 A			
30	H12	II	チャート	(2.4)	(1.8)	(0.6)	(2.0)	—			
31	H12	II	チャート	(2.3)	2.9	0.6	(2.9)	2 A			
32	I 5	II	下呂石	2.3	1.3	0.4	1.2	4 A			
33	I 5	II	凝灰岩	(2.3)	(1.6)	0.6	(1.2)	—			
34	J 4	II	下呂石	3.8	1.6	1.0	4.0	4 B			
35	J 5	II	下呂石	4.6	1.5	0.7	5.0	1 B			
36	J 5	II	チャート	3.0	1.4	0.5	1.7	4 A			
37	K 5	II	下呂石	3.8	1.7	0.8	4.1	5		116-55	
38	L 4		下呂石	(2.5)	1.1	0.7	(1.4)	1 B			
39	L 4		下呂石	2.9	1.4	1.1	3.2	4 B			
40	L 4		黒曜石	3.4	1.9	0.9	3.4	4 A			
41	L 5	II	チャート	2.6	0.6	0.4	0.7	1 B			
42	L 6	II	チャート	2.6	0.8	0.7	1.0	4 A			
43	M 7	II	チャート	(2.2)	(1.5)	0.4	(1.3)	2 A			
44	M 7	III	下呂石	2.8	1.0	0.6	1.4	1 A		116-37	

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
45	M 7	Ⅲ	チャート	3.9	1.7	0.5	3.0	4 A		116-52	
46	M 9	Ⅱ	チャート	2.8	0.9	0.6	1.3	5			
47	M 9	Ⅱ	チャート	3.3	1.1	0.6	2.0	5			
48	M 9	Ⅱ	チャート	1.9	1.3	0.3	0.8	4 A			
49	N 5	Ⅱ	下呂石	5.4	2.8	1.0	16.8	3 B		116-47	
50	N 5	Ⅱ	チャート	(2.7)	1.3	0.6	(2.1)	—			
51	N 5	Ⅱ	チャート	1.9	0.8	0.4	0.7	1 A			
52	N 6	Ⅱ	下呂石	3.5	1.2	0.7	2.7	1 A			
53	N 6	Ⅱ	チャート	3.0	2.0	0.6	2.8	4 A		116-50	
54	N 6	Ⅱ	チャート	3.9	1.0	0.6	1.6	5		116-56	
55	N 6	Ⅱ	チャート	(3.5)	1.7	0.5	(2.3)	4 B			
56	N 6	Ⅲ	下呂石	2.9	2.1	0.7	3.3	4 A		116-48	
57	N 6	Ⅲ	チャート	2.6	2.0	0.4	1.6	4 A			
58	N 7	Ⅱ	下呂石	(6.6)	1.2	0.7	(8.9)	4 B			
59	N 7	Ⅱ	チャート	2.2	1.4	0.5	1.5	4 A			
60	N 7	Ⅱ	チャート	2.7	1.3	0.6	2.4	1 B		116-41	
61	N 7	Ⅱ	チャート	(1.9)	1.6	0.7	(1.8)	4 A			
62	N 7	Ⅱ	チャート	2.7	1.9	0.6	2.9	3 B			
63	N 7	Ⅲ	チャート	(2.3)	1.4	0.4	(1.5)	—			
64	N 7		チャート	2.9	(1.9)	0.4	(2.1)	2 A		116-43	
65	O 6	Ⅱ	チャート	(3.9)	2.4	0.9	(7.4)	4 B			
66	O 7	Ⅱ	下呂石	(2.5)	1.1	0.3	(0.6)	—			
67	O 7	Ⅱ	チャート	(2.4)	2.3	1.1	(5.9)	—			
68	O 8	Ⅱ	下呂石	3.3	1.5	0.3	1.6	4 B		116-54	
69	P11	Ⅵ	下呂石	(5.6)	1.5	0.5	(5.1)	1 B			
70	P12	Ⅱ	チャート	(3.5)	1.0	0.8	(3.3)	—			
71	SX 1	Ⅱ	下呂石	(1.9)	(1.0)	0.3	(0.5)	—			
72	SB 2		チャート	2.7	0.8	0.3	0.8	1 A		41-145	
73	SB 2		下呂石	2.4	0.9	0.5	1.2	1 B			
74	SB 5		チャート	3.0	2.2	0.8	4.6	4 A			
75	SB 6		下呂石	5.3	2.6	0.8	6.6	4 B			
76	SB 6		下呂石	2.3	1.8	0.6	2.6	4 A			
77	SB 6		黒曜石	2.2	1.0	0.5	0.9	4 B		46-54	
78	SB 8		チャート	3.4	2.4	0.9	6.7	4 B		55-101	
79	SB 9		黒曜石	3.4	1.0	0.5	1.7	4 B		58-71	
80	表採		下呂石	2.0	1.6	0.5	1.0	4 A			
81	表採		下呂石	(3.2)	2.5	0.9	(4.7)	4 A			
82	表採		下呂石	2.6	1.0	0.6	1.3	1 A			
83	表採		チャート	(2.5)	(1.9)	0.6	(2.4)	—			
84	表採		チャート	(1.0)	(0.5)	(0.2)	(0.1)	—			

削器

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	挿図番号	備　　考
1	D12	Ⅱ	チャート	2.5	2.3	0.4	2.3	1		
2	D12	Ⅱ	下呂石	3.6	2.2	0.7	5.6	3		
3	D13	Ⅱ	黒曜石	3.1	2.1	0.8	5.2	3		
4	E 7	Ⅱ	下呂石	2.8	2.3	0.5	3.0	1		
5	G12	Ⅱ	黒曜石	1.8	2.0	0.4	0.9	1		
6	H12	Ⅱ	チャート	3.0	2.3	0.3	2.7	1		
7	I 6	Ⅱ	チャート	3.0	3.2	1.0	9.9	2		
8	I 7	Ⅱ	凝灰岩	5.1	4.5	1.3	27.4	3		
9	I 9		チャート	4.5	3.7	0.7	9.6	1	117-60	
10	L 4		チャート	4.5	3.4	0.7	11.2	1	117-64	
11	L 6	Ⅱ	下呂石	6.5	5.5	1.5	51.7	1		
12	L 6	Ⅱ	チャート	6.5	4.4	1.3	39.5	1		
13	L 7	Ⅱ	チャート	7.5	5.0	1.5	55.3	1	117-62	
14	L 7	Ⅱ	チャート	2.5	3.0	0.8	6.2	2		
15	M 6	Ⅱ	チャート	2.7	4.4	0.6	6.5	1		
16	M 6	Ⅱ	下呂石	6.5	2.0	0.8	9.6	1		
17	M 7	Ⅱ	チャート	4.7	3.1	0.9	9.8	1	117-61	
18	M 7	Ⅱ	下呂石	2.9	5.3	0.7	9.9	3		
19	M 7	Ⅱ	チャート	1.4	2.5	0.7	3.0	3		
20	M 9	Ⅱ	チャート	5.4	4.0	0.9	14.0	1		
21	M 9	Ⅱ	チャート	3.4	2.3	0.7	5.9	1		
22	M 9	Ⅱ	チャート	9.0	4.8	1.6	53.5	2		
23	M 9		下呂石	4.0	8.0	2.0	51.8	1		
24	N 5	Ⅱ	チャート	5.6	2.6	0.8	12.9	1	117-66	
25	N 5	Ⅱ	チャート	3.6	4.7	0.7	13.4	1		
26	N 5	Ⅱ	チャート	4.1	3.3	0.8	9.8	1		
27	N 5	Ⅱ	チャート	3.2	2.5	0.6	6.2	1		
28	N 5	Ⅱ	チャート	2.3	1.9	0.3	1.4	1		
29	N 6	Ⅲ	チャート	4.1	2.4	0.4	5.8	2	117-65	
30	N 7	Ⅱ	チャート	4.5	3.5	0.9	15.2	1		

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	挿図番号	備　　考
31	N 7	II	チャート	2.6	4.9	0.7	6.2	1		
32	N 7	II	チャート	5.9	2.4	0.7	8.9	1		
33	N 7	II	チャート	3.2	1.6	0.7	3.6	1		
34	N 7	III	チャート	4.7	4.3	0.9	16.2	1		
35	N 7	III	チャート	6.0	1.2	0.6	9.3	1		
36	N 7	III	チャート	4.4	4.4	0.8	12.0	1	117-63	
37	N 7	III	チャート	3.5	3.2	0.8	9.5	1		
38	N 7	III	チャート	2.5	2.4	0.5	3.1	1	117-59	
39	N 7	III	下呂石	1.8	2.2	0.8	2.8	1		
40	N 7	III	チャート	3.0	2.4	0.5	4.2	1		
41	N12	II	チャート	3.8	3.3	0.5	6.1	1	117-58	
42	O11	II	チャート	4.7	3.4	0.7	11.1	2	117-68	
43	P11	II	チャート	3.0	3.1	0.7	7.1	3	117-69	
44	P11	II	黒曜石	3.7	1.4	0.5	2.5	3		
45	P11	VIII	下呂石	5.4	1.9	0.5	4.5	1	117-67	
46	P11	VIII	チャート	3.0	5.7	0.7	11.3	1		
47	P12	VI	チャート	8.0	6.3	1.2	61.2	1	117-57	
48	SB 2		チャート	2.4	3.7	0.8	8.2	3		
49	SB 2		チャート	3.0	1.7	0.6	3.1	1		
50	SB 2		黒曜石	2.5	1.5	0.5	2.1	3		
51	SB 2		チャート	3.1	2.7	0.7	8.0	3		
52	SB 2		チャート	1.9	2.9	0.5	3.8	1		
53	SB 2		チャート	3.2	2.9	0.7	5.6	3	41-146	
54	SB 2		下呂石	3.7	2.5	0.5	3.3	1		
55	SB 8		チャート	5.2	1.9	0.6	6.8	1	55-102	
56	SB 9		チャート	3.5	4.1	0.6	10.5	1	58-72	

掻器

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	挿図番号	備　　考
1	G 8	II	下呂石	5.6	2.8	0.9	15.6	4		
2	G12	II	チャート	2.5	3.0	0.8	5.1	4		
3	H12	II	黒曜石	1.7	1.6	0.4	1.0	4		
4	I 5	II	下呂石	5.9	4.3	1.1	26.5	4		
5	I 7	II	チャート	4.2	2.7	0.5	5.1	4		
6	J 5	II	頁岩	3.4	4.3	0.7	10.0	4	118-72	
7	J 6	II	チャート	2.1	3.0	0.8	4.5	4		
8	K 6	II	チャート	4.9	3.4	0.8	12.2	4		
9	L 4		チャート	2.0	3.2	0.4	2.1	4		
10	L 4		チャート	1.8	2.7	0.5	2.7	4		
11	L 4		チャート	6.1	4.5	1.3	30.5	4		
12	L 6	II	黒曜石	1.7	2.5	0.4	1.9	4		
13	L 7	II	チャート	4.4	2.5	0.5	5.0	4		
14	L 7	II	チャート	3.9	4.6	1.5	28.4	4	118-76	
15	M 7	II	チャート	3.7	3.0	0.8	10.3	2	118-70	
16	M 7	II	下呂石	3.6	4.2	0.5	8.0	4		
17	M 7	II	チャート	2.7	1.5	0.5	2.6	4		
18	M 8	II	チャート	3.1	2.8	0.6	6.9	2		
19	M 8	II	黒曜石	4.3	4.7	1.4	21.4	4	118-77	
20	M 9	II	チャート	4.2	3.4	0.5	9.2	2		
21	M 9	II	チャート	2.4	3.0	1.1	8.0	2		
22	M 9	II	下呂石	2.7	4.4	0.8	8.2	4		
23	M 9	II	チャート	4.7	2.9	1.1	15.1	4		
24	M 9	II	チャート	4.1	3.2	0.8	12.5	4		
25	M 9	II	チャート	2.7	2.6	0.9	6.4	4		
26	M 9	II	チャート	2.8	3.7	0.9	8.3	4		
27	M 9	II	チャート	3.5	2.2	0.5	4.6	4		
28	N 5	II	チャート	1.6	3.0	0.5	3.2	2	118-71	
29	N 5	II	チャート	3.8	2.0	0.7	5.1	3	118-73	
30	N 5	II	下呂石	4.9	3.5	0.8	15.8	4	118-78	
31	N 5	II	チャート	4.5	2.6	0.8	8.2	4		
32	N 6	II	下呂石	3.0	1.6	0.5	2.9	2		
33	N 6	II	チャート	1.9	2.4	0.6	3.3	4		
34	N 6	III	チャート	4.0	3.0	0.5	5.2	2		
35	N 7	II	チャート	4.2	3.2	0.8	13.0	2		
36	N 7	II	下呂石	2.5	4.0	1.0	9.1	2		
37	N 7	II	チャート	4.2	2.7	0.8	7.6	4		
38	N 7	III	チャート	3.5	3.7	0.6	8.2	4		
39	N12	II	下呂石	4.4	5.0	1.2	22.5	4		
40	O 5	II	チャート	1.8	2.0	0.4	1.7	4	118-75	

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	挿図番号	備　　考
41	O 5	II	チャート	3.0	3.3	0.7	9.4	4	118-74	
42	O 6	II	チャート	2.8	2.2	0.6	4.0	4		
43	O 7	II	チャート	3.7	4.3	1.5	23.5	4		
44	P12	VII	下呂石	4.8	4.4	0.9	10.4	4		
45	Q 9	VII	チャート	5.9	3.0	0.9	16.2	2		
46	SB 2		チャート	2.5	2.2	0.8	5.3	3	41-147	
47	SB 2		チャート	3.6	2.3	0.8	7.9	2		
48	SB 2		黒曜石	2.1	1.9	0.7	2.3	3		
49	SB 2		チャート	3.9	2.5	0.9	7.2	4		
50	SB 2		チャート	4.2	2.9	0.7	11.5	4		
51	SB 2		チャート	3.5	2.9	0.8	9.6	4		
52	SB 2		チャート	2.6	3.8	0.7	8.3	2		

両極石器

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	挿図番号	備　　考
1	C11	II	下呂石	2.0	1.9	0.6	2.5		
2	D12	II	下呂石	2.3	1.4	0.7	2.7		
3	E10	II	下呂石	2.8	2.9	1.0	8.9	119-83	
4	G12	II	下呂石	2.5	1.3	0.9	2.9	119-84	
5	H11	II	黒曜石	2.4	1.3	0.7	2.6		
6	H12	II	黒曜石	3.4	1.6	1.4	6.9		
7	H12	II	黒曜石	2.5	2.0	1.0	5.0	119-87	
8	L 4		下呂石	2.1	1.5	0.6	3.3	119-85	
9	M 7	II	チャート	2.3	2.4	0.8	6.3		
10	M 7	II	チャート	1.7	2.3	0.8	3.4		
11	M 8	II	下呂石	1.9	1.6	0.9	2.5		
12	M 9	II	チャート	3.3	2.8	1.0	10.0		
13	M 9	II	下呂石	3.6	2.9	1.2	12.4		
14	M 9	II	下呂石	2.1	1.8	0.5	2.5		
15	N 7	II	チャート	2.7	2.8	1.3	10.9		
16	N 7	II	チャート	2.5	1.6	1.0	5.2		
17	N 7	III	チャート	2.8	1.6	1.1	4.6		
18	O 6	II	下呂石	2.7	2.0	0.9	5.4		
19	P12	VI	下呂石	3.2	2.2	0.9	5.7		
20	Q11	VII	黒曜石	2.6	1.8	0.7	3.4		
21	SB 2		チャート	2.1	2.8	0.8	4.7	119-86	
22	SB 2		黒曜石	3.0	2.1	1.3	7.6		
23	SB 8		下呂石	2.5	1.6	1.2	3.6		

二次加工のある剥片

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	挿図番号	備　　考
1	C10	II	チャート	4.1	3.5	0.7	8.6		
2	D11	II	黒曜石	1.6	3.7	0.7	3.1		
3	F 8	II	黒曜石	4.0	2.6	1.2	9.8		
4	G 7	II	チャート	2.2	2.7	0.5	4.0		
5	H 7	II	チャート	3.0	4.0	1.0	11.5		
6	H 8	II	チャート	4.3	4.5	1.2	23.9		
7	H12	II	チャート	4.0	3.2	0.8	10.0		
8	H12	II	黒曜石	1.7	2.4	0.5	1.7		
9	H12	II	黒曜石	2.6	2.8	0.6	2.0		
10	H12	II	黒曜石	2.0	2.7	0.9	3.8		
11	H12	II	下呂石	6.4	5.3	2.0	55.5		
12	H12	II	下呂石	3.3	2.1	0.9	4.7		
13	H12	III	下呂石	2.0	2.0	0.6	2.8		
14	I 5	II	下呂石	3.3	6.2	1.0	20.6		
15	I 6	II	チャート	2.5	2.6	0.5	2.9		
16	I 6	II	黒曜石	1.8	2.9	0.6	3.0	119-99	
17	I 6	II	黒曜石	1.8	1.1	0.5	0.6		
18	I 6	II	チャート	2.2	2.1	0.6	2.8		
19	J 5	II	チャート	2.4	2.6	0.6	4.1		
20	J 6	II	チャート	2.5	3.0	0.7	5.9		
21	K 5	II	チャート	6.2	8.0	2.0	106.8		
22	K 5	II	チャート	5.1	3.0	1.0	18.2		
23	L 4		チャート	2.7	2.9	0.7	5.7		
24	L 4		チャート	2.6	3.8	0.5	4.5		
25	L 4		チャート	2.0	2.7	0.8	4.9		
26	L 4		チャート	2.1	1.7	0.6	2.1		
27	L 4		チャート	3.1	1.2	0.6	2.5		
28	L 4		チャート	3.6	5.2	1.2	20.3		
29	L 5	III	チャート	4.6	2.7	0.8	8.8	119-90	
30	L 6	II	チャート	2.7	2.7	0.5	4.0		

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	挿図番号	備　　考
31	L 6	II	下呂石	1.7	1.9	0.6	1.4	119-89	
32	L 7	II	チャート	4.2	2.1	0.8	6.7		
33	L 7	II	チャート	3.3	2.9	0.6	4.7		
34	L 7	II	チャート	3.2	3.7	0.9	9.9		
35	L 7	II	チャート	2.7	1.9	0.3	2.2		
36	L 7	II	チャート	3.4	2.6	0.7	6.3		
37	L 7	II	チャート	2.8	1.5	0.6	2.7		
38	L 8	II	チャート	2.2	2.4	0.5	2.3		
39	M 6	II	チャート	4.1	3.2	0.7	9.3		
40	M 7	II	チャート	3.4	4.7	1.2	22.2	119-91	
41	M 7	II	チャート	1.5	2.9	0.6	3.5		
42	M 7	II	チャート	2.0	2.6	0.6	3.7		
43	M 7	II	下呂石	5.4	3.6	0.8	13.9		
44	M 7	II	下呂石	2.2	4.7	0.7	6.4		
45	M 7	II	下呂石	3.4	2.7	0.5	3.8		
46	M 7	III	チャート	2.2	2.5	0.6	3.6		
47	M 7	III	黒曜石	2.1	1.7	0.6	1.9		
48	M 8	II	チャート	4.6	2.9	1.1	10.6		
49	M 9	II	チャート	4.7	5.8	1.0	32.9		
50	M 9	II	黒曜石	3.0	2.3	1.2	7.4		
51	M 9	II	チャート	2.3	2.0	0.7	3.7		
52	M 9	II	チャート	3.1	1.5	0.4	1.9		
53	M 9	II	チャート	3.0	3.0	0.4	5.6		
54	M 9	II	頁岩	2.8	3.0	0.5	5.0		
55	M 9	II	下呂石	5.4	4.7	1.0	14.4		
56	M 9		黒曜石	3.9	3.0	0.8	10.4		
57	M 9		チャート	4.0	3.9	0.7	9.1		
58	N 5	II	チャート	3.9	2.3	0.7	8.2		
59	N 5	II	チャート	4.3	2.9	0.9	14.7		
60	N 5	II	チャート	2.8	4.0	0.9	7.8	119-97	
61	N 5	II	チャート	2.4	2.0	0.5	3.2		
62	N 5	II	チャート	3.0	1.5	0.8	3.7		
63	N 6	II	チャート	1.7	1.9	0.4	1.2		
64	N 6	II	チャート	2.5	2.1	0.4	2.8		
65	N 6	II	黒曜石	1.9	2.8	0.8	3.2	119-98	
66	N 6	II	チャート	2.8	2.5	0.5	3.6		
67	N 6	III	チャート	2.9	2.1	0.3	2.3	119-94	
68	N 6	III	チャート	2.1	1.8	0.4	1.5		
69	N 7	II	チャート	4.4	3.7	1.2	19.7		
70	N 7	II	チャート	1.9	1.8	0.5	2.0		
71	N 7	II	チャート	2.0	2.3	0.4	1.8		
72	N 7	II	黒曜石	1.9	1.9	0.3	1.2		
73	N 7	II	チャート	3.2	3.4	0.6	6.9	119-69	
74	N 7	II	チャート	2.5	2.3	0.7	4.3		
75	N 7	II	チャート	5.5	4.1	1.2	30.9		
76	N 7	III	チャート	4.6	4.5	1.1	22.0		
77	N 7	III	チャート	3.3	4.5	0.7	11.7		
78	N 7	III	チャート	2.9	3.2	0.8	5.1	119-95	
79	N 7	III	チャート	5.4	4.2	1.0	21.7		
80	N 7	III	チャート	4.7	3.8	1.0	22.2		
81	N 7	III	チャート	2.8	3.3	0.5	5.4		
82	N 7	III	チャート	2.9	2.2	0.3	2.3		
83	N 7	III	下呂石	4.6	2.7	1.0	11.8	119-88	
84	N 8	II	チャート	1.8	2.5	0.7	3.0		
85	N 8	II	玉髄	1.7	1.9	0.4	1.2	119-100	
86	O 5	II	チャート	2.5	2.6	0.6	4.3		
87	O 5	III	チャート	2.4	2.2	0.8	3.3		
88	O 6	II	チャート	4.2	3.2	0.7	6.8		
89	O 6	III	チャート	5.9	3.7	1.3	32.4		
90	O 7	II	チャート	2.5	2.2	0.6	3.6		
91	O12	II	下呂石	3.6	5.8	2.2	22.2		
92	P11	VI	チャート	2.8	2.0	0.8	4.4		
93	P12	II	頁岩	2.7	2.7	0.3	2.9		
94	P12	VII	チャート	4.5	2.5	1.5	12.0	119-93	
95	Q10	II	チャート	5.2	3.5	0.8	15.6	119-92	
96	Q10	II	チャート	2.0	2.7	0.5	3.2		
97	Q10	VII	チャート	2.9	3.6	0.8	8.2		
98	SB 2		下呂石	4.1	2.2	1.2	6.2	41-148	
99	SB 2		下呂石	2.0	1.5	0.6	1.3		
100	SB 2		下呂石	2.1	2.5	0.5	2.4		
101	SB 2		黒曜石	2.0	2.1	0.7	2.1		
102	SB 2		チャート	4.7	2.4	0.7	6.2		

103	SB2		チャート	(1.7)	(1.1)	0.2	(0.4)		
104	SB2		チャート	4.0	2.4	0.6	6.3		
105	SB2		チャート	5.7	3.6	0.8	17.4		
106	SB2		黒曜石	2.2	1.6	0.5	1.4		
107	SB3		チャート	2.2	2.6	0.7	3.2		
108	SB3		下呂石	2.8	2.6	0.9	5.1		
109	SB6		チャート	2.1	2.6	0.8	5.6		
110	SB6		黒曜石	3.0	1.1	0.8	1.8		
111	SB7		黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.8		
112	SB7		チャート	2.8	2.6	0.6	5.2		
113	SB7		チャート	5.6	4.6	0.9	14.2		
114	SB8		チャート	1.9	2.4	0.6	2.0		
115	SB8		チャート	4.8	2.9	1.1	16.5		
116	SB9		黒曜石	2.5	1.7	0.8	2.6		
117	—		チャート	2.2	2.6	0.6	3.9		
118	—		黒曜石	2.9	2.2	0.9	5.0		

使用痕のある剥片

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	挿図番号	備　　考
1	C10	II	黒曜石	3.0	1.7	0.4	1.8		
2	C12	II	下呂石	8.0	5.6	1.1	39.7		
3	E12	II	下呂石	4.6	2.3	0.8	8.5		
4	E12	II	黒曜石	2.4	2.1	0.8	2.6		
5	E12	III	チャート	3.4	2.4	0.5	4.8		
6	G12	II	チャート	2.3	2.3	0.3	1.9		
7	G12	II	黒曜石	1.8	2.2	0.6	1.7		
8	H8	II	チャート	2.5	2.6	0.9	7.6		
9	H8	II	玉髄	2.4	1.6	0.5	1.9		
10	H8		チャート	3.0	4.0	0.3	4.0		
11	H10	II	チャート	3.3	3.2	0.8	6.6		
12	H11	II	チャート	2.5	2.6	0.7	5.5		
13	H11	II	下呂石	2.9	3.3	0.8	6.8	120-104	
14	H12	II	下呂石	5.0	1.8	0.6	4.9		
15	I7	II	チャート	3.7	2.0	0.7	6.2		
16	J5	II	下呂石	3.3	5.4	1.1	15.5		
17	J5	II	頁岩	2.6	2.3	0.4	2.7	120-106	
18	K5	II	下呂石	8.0	5.2	1.2	27.1		
19	K5	II	黒曜石	2.9	1.4	0.3	1.3		
20	K6	II	チャート	4.8	3.4	0.5	5.8		
21	L4		チャート	2.9	3.7	0.4	4.5		
22	L6	II	チャート	4.1	3.3	0.6	9.2	120-102	
23	L8	II	チャート	3.0	1.8	0.4	2.4		
24	L8	II	黒曜石	1.8	1.3	0.5	0.8		
25	M6	II	黒曜石	4.9	1.2	1.1	2.9		
26	M7	II	チャート	3.2	1.6	0.3	2.5		
27	M7	II	チャート	2.5	2.6	0.5	3.7		
28	M7	II	黒曜石	2.1	1.4	0.5	1.0		
29	M7	III	黒曜石	3.1	2.2	0.5	1.7		
30	M8	III	チャート	4.0	3.7	0.7	8.5		
31	M9	II	チャート	6.0	3.1	0.6	8.2		
32	M9	II	チャート	3.1	2.2	0.8	5.9		
33	M9	II	チャート	3.0	2.4	0.3	2.4		
34	M9	II	黒曜石	3.2	3.3	1.3	16.1		
35	M9	II	黒曜石	2.7	1.2	0.4	1.1		
36	M9	II	頁岩	3.0	4.5	1.1	14.0		
37	M9	II	頁岩	3.1	1.9	0.6	3.1		
38	M9		チャート	6.2	3.5	0.6	8.5	120-101	
39	M9		チャート	3.8	3.4	0.8	8.9		
40	M9		チャート	2.8	3.7	0.7	6.2		
41	M9		黒曜石	2.9	3.1	0.8	7.3	120-105	
42	N5	II	チャート	3.3	3.5	1.0	12.0		
43	N5	II	チャート	3.2	3.8	0.8	7.8		
44	N5	II	チャート	1.9	2.8	1.5	4.1		
45	N6	II	チャート	2.9	2.4	0.7	4.4		
46	N6	II	黒曜石	4.9	2.7	1.2	4.7		
47	N6	II	黒曜石	2.6	1.5	0.3	1.5		
48	N6	III	チャート	3.4	2.3	0.3	2.7	120-103	
49	N6	III	チャート	4.3	2.9	0.6	7.4		
50	N6	III	チャート	2.5	3.3	0.8	4.5		
51	N7	II	チャート	2.7	2.2	0.5	2.8		
52	N7	III	チャート	5.0	3.4	1.0	17.9		

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	挿図番号	備　　考
53	N 7	III	チャート	5.0	5.4	0.9	18.9		
54	N 7	III	チャート	6.0	3.5	0.9	16.2		
55	N 7	III	チャート	4.3	2.8	0.5	7.4		
56	N 7	III	チャート	4.2	3.4	0.7	7.8		
57	N 7	III	チャート	2.8	1.9	0.8	4.5		
58	N 8	II	チャート	3.1	3.5	0.7	7.3		
59	N 8	III	チャート	3.6	5.9	1.9	22.9		
60	N 8	III	下呂石	3.7	3.1	0.6	7.6		
61	N 8	III	黒曜石	4.0	1.4	0.5	1.6		
62	N12	II	チャート	4.0	4.0	0.9	11.4		
63	O 5	II	黒曜石	2.1	2.8	0.8	3.5		
64	O 6	II	黒曜石	2.1	2.2	0.7	2.6		
65	O 7	II	チャート	3.9	1.8	0.2	1.4		
66	O12	II	チャート	4.7	2.3	0.6	6.6		
67	P11	VI	チャート	2.3	5.2	0.5	5.9		
68	P11	VI	チャート	2.7	3.9	0.5	4.3		
69	P12	VII	チャート	3.5	5.0	0.3	6.4		
70	SX 1		黒曜石	6.0	4.4	0.6	8.5		
71	SB 2		黒曜石	1.6	2.9	0.4	1.5		
72	SB 2		チャート	4.3	3.6	1.5	19.7	41-149	
73	SB 2		チャート	2.1	1.9	0.5	2.2		
74	SB 2		チャート	2.1	1.7	0.3	1.1		
75	SB 2		チャート	2.1	1.6	0.5	1.7		
76	SB 2		頁岩	5.0	2.9	0.8	9.1		
77	SB 2		頁岩	4.1	3.6	0.5	10.4		
78	SB 6		チャート	3.1	2.9	0.8	6.8		

石匙

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	挿図番号	備　　考
1	B11	II	下呂石	3.2	(2.5)	(0.4)	(2.5)	横形		
2	E12	II	チャート	4.2	3.3	1.1	15.7	縦形		
3	G 8	II	下呂石	4.2	(7.3)	1.1	(24.7)	横形	118-82	
4	H 8	II	チャート	2.6	4.5	0.7	5.7	横形	118-79	
5	I 5	II	下呂石	3.6	(3.7)	(0.7)	(8.5)	横形	118-81	
6	I 6	II	下呂石	3.9	(4.1)	1.2	(16.8)	横形		
7	M 9		下呂石	3.7	3.4	0.8	7.9	横形		
8	N 5	II	チャート	2.2	4.0	0.6	4.8	横形		
9	N 6	II	チャート	3.0	3.8	0.8	6.1	横形		
10	N 7	III	チャート	3.2	6.1	0.9	18.1	横形	118-80	
11	—		チャート	(2.5)	(2.5)	(0.5)	(3.2)	横形		

打製石斧

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
1	B11	II	緑色片岩	(8.9)	5.3	1.3	(94.4)	1	b		
2	B11	II	緑色片岩	(8.7)	4.9	1.5	(84.3)	1	a		
3	B12	II	緑色片岩	10.1	5.5	1.9	141.1	1			
4	B12	II	緑色片岩	8.4	5.2	1.1	68.8	1			
5	C10	II	凝灰岩	10.7	5.2	2.2	162.3	1			
6	C11	II	凝灰岩	(7.0)	4.9	2.4	(76.5)	1	b		
7	C11	II	凝灰岩	(8.6)	5.6	2.4	(140.2)	—	b		
8	C11	II	凝灰岩	(16.1)	10.6	4.2	(941.7)	1			
9	C12	II	凝灰岩	11.4	6.8	2.3	207.5	1			
10	C12	II	凝灰岩	10.6	5.8	2.2	115.8	3			
11	C13	II	凝灰岩	(7.2)	(6.0)	1.9	(100.2)	—	a		
12	C13	II	緑色片岩	(6.9)	5.0	1.6	(74.2)	1	b		
13	C13	II	凝灰岩	9.1	4.4	1.3	70.5	1			
14	D 3	II	凝灰岩	10.5	6.8	2.1	168.2	3			
15	D 9	II	凝灰岩	10.3	4.6	1.4	77.7	1			
16	D 9	II	凝灰岩	(10.2)	4.3	1.5	(65.5)	1	b		
17	D10	II	凝灰岩	(12.8)	8.5	2.8	(477.6)	—	b		
18	D10	II	凝灰岩	(9.6)	8.4	3.9	(374.1)	—	b		
19	D10	II	凝灰岩	(11.2)	6.0	3.1	(235.3)	1	c		
20	D10	II	凝灰岩	(10.2)	5.8	2.9	(182.2)	1	b		
21	D11	II	凝灰岩	(8.1)	(5.8)	1.5	(104.3)	—	a		
22	D11	II	凝灰岩	(9.8)	5.0	1.8	(108.3)	1	b		
23	D11	II	凝灰岩	18.6	8.1	2.2	317.6	3		121-125	
24	D11	II	凝灰岩	14.4	6.8	4.0	369.1	1			
25	D11	II	凝灰岩	11.5	6.3	2.3	175.1	3			
26	D12	II	凝灰岩	10.7	5.4	2.1	148.3	1			
27	D13	II	緑色片岩	(8.0)	(5.0)	1.8	(86.2)	—	a		
28	D13	II	凝灰岩	(9.7)	6.6	2.6	(178.8)	—	b		
29	E 8	II	凝灰岩	(7.0)	8.5	2.8	(207.9)	—	b		
30	E 8	II	凝灰岩	(9.6)	6.0	1.9	(103.3)	3	a		

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
31	E 9	II	凝灰岩	(13.4)	5.2	1.8	(146.0)	1	c		
32	E10	II	凝灰岩	(5.2)	4.8	1.5	(49.5)	—	b		
33	E10	II	凝灰岩	13.4	5.9	2.0	202.2	1			
34	E11	II	凝灰岩	(9.5)	10.6	2.6	(290.8)	—	b		
35	E11	II	凝灰岩	(5.9)	5.2	2.0	(73.6)	—	b		
36	E11	II	結晶片岩	(8.5)	5.6	1.5	(115.9)	1	b		
37	E11	II	凝灰岩	(9.5)	4.3	1.8	(74.7)	1	a		
38	E12	II	凝灰岩	(13.0)	7.4	3.0	(355.3)	—	b		
39	E12	II	凝灰岩	(7.2)	6.9	2.9	(189.2)	—	b		
40	E12	II	凝灰岩	(9.2)	(5.5)	2.3	(124.8)	—	a		
41	E12	II	凝灰岩	10.4	5.7	2.3	142.5	3			
42	E12	II	凝灰岩	13.3	6.3	2.0	165.7	3		121-120	
43	E12	II	緑色片岩	9.3	5.0	1.6	97.0	1	b		
44	E12	II	凝灰岩	(10.2)	8.2	2.3	(247.6)	1	b		
45	E12	II	凝灰岩	(12.6)	7.0	2.8	(335.7)	1	b		
46	E12	II	凝灰岩	(12.0)	(7.8)	3.1	(289.0)	—	a		
47	E12	II	凝灰岩	(7.3)	5.9	2.1	(190.6)	1	b		
48	E12	II	凝灰岩	11.1	4.9	1.6	107.7	1			
49	E12	III	凝灰岩	(7.9)	6.0	2.8	(148.3)	—	a		
50	E13	II	凝灰岩	(5.9)	(5.5)	1.8	(64.8)	—	a		
51	E13	II	緑色片岩	11.3	5.3	2.4	132.2	1			
52	E13	II	凝灰岩	(10.6)	5.3	1.4	(105.8)	3	a		
53	E13	II	凝灰岩	(11.0)	5.2	2.5	(170.9)	1	b		
54	E13	II	凝灰岩	(10.7)	(6.0)	2.5	(180.3)	—	a		
55	E13	II	緑色片岩	(8.5)	4.8	1.1	(67.9)	1	b		
56	E13	II	緑色片岩	9.1	4.0	1.1	50.6	1			
57	E13	II	緑色片岩	10.8	6.0	2.4	196.7	1			
58	F 7	II	凝灰岩	(12.1)	6.7	2.7	(261.4)	1	a		
59	F 7	II	凝灰岩	(6.4)	4.7	1.8	(74.1)	1	b		
60	F 8	II	凝灰岩	(7.2)	4.3	1.9	(83.4)	1	a		
61	F 8	II	凝灰岩	(8.5)	(5.9)	2.2	(129.2)	—	a		
62	F 8	II	凝灰岩	11.9	5.8	1.5	128.8	1			
63	F11	II	凝灰岩	13.2	5.8	3.3	299.7	1			
64	F12	II	凝灰岩	(12.0)	5.5	1.8	(152.1)	1	c		
65	F12	II	凝灰岩	(6.2)	4.1	1.2	(50.0)	1	a		
66	F12	II	凝灰岩	9.4	6.1	1.9	120.4	1			
67	F12	II	凝灰岩	12.1	5.9	2.3	191.7	1		121-116	
68	F12	II	凝灰岩	(9.8)	(6.9)	2.2	(188.7)	—	d		
69	F12	II	凝灰岩	11.7	6.5	2.5	216.8	1		121-121	
70	F12	II	凝灰岩	(9.5)	(5.2)	1.9	(95.2)	—	a		
71	F12	II	凝灰岩	12.0	5.4	2.0	187.6	1		121-115	
72	F12	II	凝灰岩	11.6	5.3	2.4	183.9	1			
73	F18	II	凝灰岩	12.3	5.4	1.8	105.1	3			
74	G 7	II	凝灰岩	(9.0)	7.2	3.4	(220.5)	3	b		
75	G 7	II	緑色片岩	(5.6)	(4.5)	1.1	(31.8)	—	a		
76	G 7	II	凝灰岩	(8.3)	6.5	2.4	(134.8)	—	b		
77	G 7	II	凝灰岩	10.9	6.0	1.9	133.3	3			
78	G 7	III	凝灰岩	8.3	5.5	1.5	74.0	3			
79	G 8	II	凝灰岩	(7.2)	4.8	2.4	(75.8)	1	a		
80	G 8	II	凝灰岩	12.6	4.9	2.0	187.6	1			
81	G 8	II	凝灰岩	15.1	6.5	2.8	332.3	1			
82	G 8	II	凝灰岩	(9.1)	7.1	2.2	(244.5)	—	b		
83	G 8	II	凝灰岩	(7.8)	(5.6)	2.0	(94.9)	—	a		
84	G 9	II	凝灰岩	(9.4)	5.8	3.1	(169.2)	1	a		
85	G 9	II	凝灰岩	(8.4)	(6.5)	3.0	(221.1)	—	a		
86	G 9	II	凝灰岩	(12.0)	9.0	3.3	(455.8)	1	b		
87	G 9	II	凝灰岩	(11.2)	7.4	4.0	(393.2)	—	b		
88	G 9	II	凝灰岩	10.0	5.5	1.3	87.4	1			
89	G10	II	凝灰岩	(12.5)	(7.1)	2.7	(276.3)	3	a		
90	G11	II	凝灰岩	10.8	5.8	3.0	194.2	1			
91	G11	II	凝灰岩	12.7	5.4	3.3	258.9	1			
92	G11	II	凝灰岩	(6.5)	4.1	1.7	(58.5)	1	b		
93	G12	II	凝灰岩	14.2	7.0	2.2	241.9	1			
94	G12	II	凝灰岩	11.4	5.9	2.5	182.2	1			
95	G12	II	凝灰岩	(13.0)	7.8	3.5	(362.0)	1	b		
96	G12	II	凝灰岩	(10.4)	6.7	2.9	(215.5)	1	b		
97	G12	II	凝灰岩	10.1	5.8	2.5	183.9	1			
98	G12	II	凝灰岩	11.3	6.0	2.9	194.9	1			
99	G12	II	凝灰岩	(9.3)	6.0	2.0	(128.9)	1	a		
100	G12	II	凝灰岩	(8.2)	5.1	2.3	(129.3)	1	a		

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
101	G12	II	凝灰岩	(12.8)	9.5	3.9	(488.1)	3	b		
102	G12	II	泥岩	(7.3)	(5.2)	1.5	(79.2)	—	a		
103	G12	II	凝灰岩	(12.0)	(6.0)	3.5	(311.5)	—	b		
104	G12	II	緑色片岩	(6.6)	4.3	1.9	(33.5)	—	b		
105	G12	II	泥岩	(4.6)	(5.5)	1.5	(55.3)	—	b		
106	G12	II	凝灰岩	(9.0)	5.0	2.0	(103.2)	1	b		
107	G12	II	凝灰岩	13.5	7.3	2.9	346.9	3		121-117	
108	G12	II	凝灰岩	12.8	7.4	2.4	245.6	3		121-119	
109	G12	II	凝灰岩	(8.8)	5.2	1.6	(88.1)	1	b		
110	G12	II	凝灰岩	11.5	6.1	2.5	232.6	1			
111	G12	II	凝灰岩	(5.7)	5.0	1.7	(55.7)	1	b		
112	G12	II	凝灰岩	11.6	6.2	1.5	97.1	3			
113	G12	II	凝灰岩	(7.0)	4.4	1.2	(51.1)	1	b		
114	G12	II	凝灰岩	11.2	5.6	1.5	98.3	3			
115	G12	II	凝灰岩	11.0	6.0	2.2	173.7	3			
116	G12		凝灰岩	(9.3)	6.8	2.7	(176.3)	—	d		
117	G12		凝灰岩	11.5	6.0	2.5	203.9	3			
118	H 6	II	凝灰岩	11.0	6.0	2.1	166.1	3			
119	H 6	II	凝灰岩	10.2	5.1	1.8	108.7	3			
120	H 7	II	凝灰岩	(9.7)	5.6	1.5	(151.8)	1	b		
121	H 7	II	凝灰岩	(7.5)	(5.6)	2.6	(103.0)	—	a		
122	H 7	II	凝灰岩	(13.3)	4.5	2.0	(149.2)	1	c		
123	H 7	II	凝灰岩	(8.4)	(7.0)	2.5	(121.1)	—	a		
124	H 8	II	凝灰岩	(6.8)	7.0	3.2	(130.5)	—	b		
125	H 8	II	凝灰岩	(4.9)	8.5	1.6	(80.6)	1	b		
126	H 8	II	凝灰岩	(7.0)	7.0	2.6	(168.8)	—	b		
127	H 8	II	凝灰岩	(7.2)	6.8	2.5	(149.7)	—	b		
128	H 9	II	凝灰岩	8.9	4.0	1.1	46.1	1			
129	H 9	II	凝灰岩	(5.5)	5.5	2.1	(72.1)	—	b		
130	H 9	II	凝灰岩	(11.6)	6.1	2.7	(236.2)	—	a		
131	H11	II	凝灰岩	7.0	4.2	1.5	53.7	1			
132	H11	II	凝灰岩	7.5	6.5	3.0	281.3	1			
133	H11	II	凝灰岩	(10.6)	7.1	2.2	(200.0)	1	a		
134	H11	II	凝灰岩	(9.6)	6.9	2.9	(206.5)	—	b		
135	H11	II	凝灰岩	10.6	6.4	2.9	213.4	3			
136	H11	II	凝灰岩	10.0	5.8	1.8	106.8	3			
137	H11	II	凝灰岩	(12.2)	6.2	2.8	(230.1)	3	a		
138	H11	II	凝灰岩	14.6	6.9	3.2	356.4	1		121-123	
139	H11	II	凝灰岩	10.2	4.7	1.9	119.8	1			
140	H11	II	凝灰岩	(14.0)	8.0	2.8	(352.4)	3	b		
141	H11	II	凝灰岩	(7.3)	5.5	1.8	(79.4)	—	b		
142	H11	II	凝灰岩	13.0	5.9	2.6	219.9	1			
143	H11	II	凝灰岩	(10.0)	6.0	2.1	(111.7)	1	c		
144	H11	II	凝灰岩	(8.6)	6.0	1.6	(103.3)	—	b		
145	H11	II	凝灰岩	(10.0)	5.8	2.5	(189.2)	1	b		
146	H11	II	凝灰岩	(10.0)	6.6	(1.4)	(144.0)	1	b		
147	H11	II	凝灰岩	(8.3)	5.2	1.6	(88.0)	1	b		
148	H11	II	凝灰岩	(10.0)	(6.3)	3.0	(256.3)	—	a		
149	H11	II	凝灰岩	(11.7)	(5.9)	2.5	(218.4)	—	a		
150	H11	II	凝灰岩	(12.8)	8.2	3.6	(521.1)	1	b		
151	H11	II	凝灰岩	(8.5)	5.2	2.8	(176.7)	1	a		
152	H12	II	凝灰岩	(10.7)	6.2	3.0	(225.3)	1	a		
153	H12	II	凝灰岩	9.9	5.0	1.4	107.5	1			
154	H12	II	凝灰岩	(9.4)	6.5	2.5	(196.7)	1	b		
155	H12	II	凝灰岩	12.6	4.9	2.8	198.1	1			
156	H12	II	凝灰岩	11.4	5.0	1.9	102.6	1			
157	H12	II	凝灰岩	10.5	6.8	2.3	160.1	3			
158	H12	II	凝灰岩	(5.3)	5.6	1.8	(78.4)	—	d		
159	H12	II	凝灰岩	(10.1)	(7.9)	3.3	(269.2)	—	a		
160	H12	II	凝灰岩	(10.0)	5.8	3.0	(217.3)	1	a		
161	H12	II	凝灰岩	(11.1)	5.8	2.6	(140.2)	1	c		
162	H12	II	凝灰岩	(10.2)	8.8	3.5	(392.3)	—	b		
163	H12	II	凝灰岩	(7.5)	6.9	2.5	(233.9)	3	b		
164	H12	II	凝灰岩	(12.0)	6.8	2.5	(214.2)	3	d		
165	H12	II	凝灰岩	(9.0)	6.7	2.2	(179.7)	1	b		
166	H12	II	凝灰岩	(9.3)	8.2	2.4	(234.2)	—	b		
167	H12	II	凝灰岩	(7.5)	6.6	2.0	(110.3)	1	b		
168	H12	II	凝灰岩	(10.3)	5.7	3.1	(223.5)	1	a		
169	H12	II	凝灰岩	(8.4)	4.7	1.8	(100.1)	1	b		
170	H12	II	凝灰岩	(8.4)	4.3	2.2	(97.0)	1	a		

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
171	H12	II	凝灰岩	(11.6)	(8.0)	(4.3)	(403.6)	—	a		
172	H12	II	凝灰岩	(10.9)	7.6	3.0	(323.4)	1	b		
173	H12	II	緑色片岩	10.7	5.4	1.7	128.7	1			
174	H12	II	凝灰岩	(8.6)	(4.9)	2.5	(99.7)	3	a		
175	H12	II	凝灰岩	(9.6)	6.1	2.1	(147.6)	1	b		
176	H12	II	凝灰岩	11.5	6.6	2.3	207.1	1			
177	H12	II	緑色片岩	(7.8)	5.8	1.9	97.2	1	b		
178	H12	II	凝灰岩	(11.0)	7.5	3.0	(272.1)	—	b		
179	H12	II	凝灰岩	(11.4)	5.7	1.7	(256.9)	1	a		
180	H12	II	凝灰岩	(11.0)	5.3	3.0	(203.0)	1	b		
181	H12	II	凝灰岩	(5.5)	6.3	1.7	(72.6)	—	d		
182	H12	II	凝灰岩	(6.0)	4.4	2.1	(81.6)	—	a		
183	H12	II	凝灰岩	(8.4)	(5.0)	(1.7)	(67.2)	—	d		
184	H12	II	凝灰岩	(4.2)	(7.4)	(1.8)	(72.0)	—	b		
185	H12	II	凝灰岩	(6.9)	(3.7)	(1.4)	(42.5)	—	e		
186	H12	II	凝灰岩	(8.6)	6.3	2.5	(176.7)	1	b		
187	H12	II	凝灰岩	(6.0)	5.9	1.8	(83.7)	—	b		
188	H12	II	凝灰岩	(9.2)	5.8	2.1	(111.6)	3	b		
189	H12	II	凝灰岩	(5.2)	(6.8)	1.7	(73.5)	—	e		
190	H12	II	凝灰岩	(11.8)	5.7	2.7	(281.9)	1	b		
191	H12	II	凝灰岩	(13.6)	(6.8)	3.2	(250.0)	3	a		
192	H12	II	凝灰岩	(13.3)	7.9	3.2	(373.3)	3	b		
193	H12	II	流紋岩	(10.7)	(7.2)	2.4	(232.5)	—	d		
194	H12	II	凝灰岩	(8.4)	(5.3)	2.5	(131.0)	—	a		
195	H12	II	凝灰岩	(9.7)	5.2	1.7	(89.7)	—	a		
196	H12	II	凝灰岩	(9.7)	4.9	1.7	(107.0)	1	d		
197	H12	II	凝灰岩	(12.8)	(6.7)	2.6	(300.7)	—	a		
198	H12	II	凝灰岩	13.5	5.4	3.5	335.4	1			
199	H12	II	凝灰岩	15.0	6.4	3.4	277.5	1			
200	H12	II	凝灰岩	9.7	6.7	1.6	125.4	3			
201	H12	II	凝灰岩	(11.6)	6.0	3.2	(263.4)	1	b		
202	H12	II	凝灰岩	9.8	4.5	1.5	88.3	1		121-122	
203	H12	III	凝灰岩	8.2	6.2	3.4	331.2	1			
204	I 4	II	緑色片岩	8.8	5.2	1.3	82.2	1			
205	I 4	II	凝灰岩	(5.6)	7.0	1.2	(83.7)	—	b		
206	I 4	II	凝灰岩	(7.7)	4.4	1.2	(54.8)	1	b		
207	I 4	II	凝灰岩	(4.6)	(5.3)	(1.2)	(36.9)	—	b		
208	I 5	II	凝灰岩	(11.3)	4.8	2.0	(144.8)	1	b		
209	I 5	II	凝灰岩	(5.5)	5.2	1.2	(45.5)	1	b		
210	I 6	II	凝灰岩	10.2	7.5	2.5	206.9	1			
211	I 6	II	凝灰岩	(9.6)	7.3	1.9	(203.2)	1	b		
212	I 6	II	凝灰岩	11.7	6.0	2.0	143.9	3			
213	I 7	II	凝灰岩	13.9	5.3	2.4	179.5	1			
214	I 7	II	凝灰岩	(7.2)	(5.3)	1.6	(73.5)	—	a		
215	J 5	II	緑色片岩	(3.6)	2.4	0.7	(12.2)	—	a		
216	J 5	II	凝灰岩	(5.7)	(7.5)	3.0	(147.9)	—	b		
217	J 5	II	凝灰岩	(7.5)	4.8	1.4	(65.9)	—	c		
218	J 5	II	凝灰岩	(6.2)	5.0	2.4	(91.1)	1	b		
219	J 5	II	凝灰岩	(7.2)	4.7	1.4	(69.3)	1	b		
220	J 5	II	凝灰岩	12.3	5.5	1.9	168.0	1			
221	J 5	II	凝灰岩	(7.5)	4.2	1.5	(51.0)	1	a		
222	K 5	II	凝灰岩	(6.1)	4.7	1.0	(28.1)	1	b		
223	K 5	III	凝灰岩	8.4	3.6	1.7	58.2	1			
224	L 4		緑色片岩	13.3	4.9	1.9	155.8	1			
225	L 6	II	凝灰岩	10.8	5.8	2.4	152.5	1			
226	L 7	II	凝灰岩	(9.4)	4.5	1.8	(92.7)	1	c		
227	M 2	II	凝灰岩	(8.3)	5.0	1.2	(71.4)	1	b		
228	M 2	II	凝灰岩	11.5	4.3	1.9	123.8	1		121-114	
229	M 6	III	凝灰岩	(11.7)	5.0	1.6	(124.0)	1	c		
230	M 7	II	凝灰岩	(9.0)	4.1	1.7	(82.3)	1	c		
231	M 7	II	凝灰岩	8.7	(4.3)	1.9	(94.4)	1	c		
232	M 7	II	凝灰岩	(8.6)	5.0	2.2	(133.7)	1	d		
233	M 7	II	凝灰岩	(12.6)	5.8	1.3	(117.7)	3	c		
234	M 8	II	凝灰岩	(10.0)	5.4	1.5	(89.3)	1	c		
235	M 8	II	凝灰岩	8.9	4.6	0.9	46.5	3			
236	M 9	II	凝灰岩	(12.1)	(4.2)	1.2	(72.2)	1	c		
237	M 9	II	凝灰岩	(6.2)	5.5	1.9	(100.5)	1	b		
238	M 9	II	凝灰岩	9.0	5.0	1.9	92.6	3			
239	M 9	II	凝灰岩	(10.0)	6.1	1.9	(151.3)	1	a		
240	M 9	II	凝灰岩	(8.8)	5.0	2.7	(139.9)	1	b		

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
241	M 9	II	凝灰岩	17.1	6.1	1.4	192.4	1			
242	M 9	II	粘板岩	10.0	4.9	1.4	99.1	1			
243	M 9	II	凝灰岩	13.6	6.3	2.5	43.4	3			
244	M 9	II	凝灰岩	10.2	5.0	1.2	71.1	1			
245	M 9	II	凝灰岩	(12.0)	6.0	1.7	(144.2)	1	c		
246	M 9	II	凝灰岩	11.1	6.0	2.1	203.7	1			
247	M 9	II	凝灰岩	11.7	4.9	1.6	112.7	1			
248	M 9	II	凝灰岩	14.8	5.2	2.6	226.0	1			
249	M 9	II	凝灰岩	(5.0)	4.2	1.7	(38.1)	—	a		
250	M 9	II	凝灰岩	11.2	4.9	2.4	111.9	3			
251	M 9	II	凝灰岩	(8.0)	4.8	2.4	(115.8)	1	b		
252	M 9	II	緑色片岩	(3.2)	6.2	0.8	(18.3)	—	e		
253	M 9	II	粘板岩	(9.0)	4.2	1.6	(86.2)	1	b		
254	M 9		緑色片岩	(13.2)	5.6	1.2	(130.4)	1	a		
255	M 9		凝灰岩	(12.2)	7.4	2.9	(286.3)	3	d		
256	M 9		凝灰岩	10.4	4.7	1.8	93.7	1			
257	M 9		凝灰岩	(8.5)	4.8	1.6	(87.7)	1	d		
258	M 9		凝灰岩	(10.2)	9.3	3.3	(400.0)	—	b		
259	M 9		凝灰岩	(7.1)	5.4	1.5	(89.9)	1	b		
260	M 9		凝灰岩	10.6	6.7	1.5	(116.2)	3	c		
261	M 9		凝灰岩	(7.5)	(5.0)	2.0	(109.8)	—	a		
262	M 9		凝灰岩	11.0	5.9	2.8	227.5	3			
263	M 9		凝灰岩	(8.0)	4.8	2.2	(71.3)	1	b		
264	M 9		凝灰岩	9.4	4.5	1.0	60.9	1			
265	M 9		緑色片岩	(8.2)	6.3	1.4	(83.5)	—	b		
266	M 9		凝灰岩	11.7	5.8	1.8	134.4	3			
267	M 9		凝灰岩	11.2	5.1	1.9	128.0	1			
268	M 9		凝灰岩	11.0	4.2	1.8	93.9	1			
269	M 9		凝灰岩	(7.3)	6.6	2.3	(154.4)	—	b		
270	M 9		凝灰岩	(9.0)	5.0	2.3	(125.8)	1	a		
271	M 9		凝灰岩	10.3	6.0	3.0	236.1	1			
272	M 9		凝灰岩	(9.6)	4.8	1.6	(85.1)	1	a		
273	M 9		凝灰岩	16.6	5.0	3.0	276.7	1			
274	M 9		凝灰岩	(8.3)	(5.8)	1.7	(114.1)	—	a		
275	M 9		凝灰岩	(10.0)	5.5	2.0	(144.7)	1	b		
276	M 9		凝灰岩	(5.2)	(5.4)	2.3	(51.6)	—	b		
277	M 9		凝灰岩	(10.4)	4.8	1.7	(89.2)	1	c		
278	M 9		凝灰岩	8.4	4.7	2.4	109.7	1			
279	M 9		凝灰岩	(7.5)	(5.0)	2.7	(95.4)	—	a		
280	M 9		凝灰岩	(3.0)	(4.7)	(0.6)	(9.6)	—	e		
281	M 9		凝灰岩	(11.3)	5.8	2.2	(193.7)	1	a		
282	M12	II	凝灰岩	11.0	5.3	3.2	211.7	1			
283	N 5	II	凝灰岩	(6.5)	5.9	2.0	(77.8)	—	a		
284	N 5	II	凝灰岩	9.8	4.9	1.7	85.8	1			
285	N 6	II	凝灰岩	14.1	6.6	2.7	248.7	1		121-118	
286	N 6	III	凝灰岩	(6.7)	(4.0)	1.4	(44.0)	—	a		
287	N 6	III	凝灰岩	(12.2)	4.6	1.7	(111.1)	1	a		
288	N 6	III	凝灰岩	(11.0)	5.7	2.8	(195.3)	1	a		
289	N 7	III	凝灰岩	11.2	3.9	1.4	78.2	1			
290	N 7	III	凝灰岩	9.1	3.4	1.2	38.4	1			
291	N 8	II	緑色片岩	(9.5)	6.9	1.0	(121.0)	—	d		
292	N 8	II	凝灰岩	12.3	5.5	2.5	179.9	1			
293	N 8	II	凝灰岩	9.2	4.3	1.5	56.6	3			
294	N 8	III	粘板岩	(8.2)	5.8	1.6	(71.4)	—	a		
295	N 8	III	凝灰岩	(5.5)	(4.9)	1.2	(43.2)	—	b		
296	N12	II	凝灰岩	5.0	10.0	2.5	145.5	1			
297	O 5	II	凝灰岩	(15.5)	7.2	4.0	(448.7)	3	c		
298	O 5	II	凝灰岩	14.3	8.2	3.8	422.9	3			
299	O 5	II	蛇紋岩	8.4	3.6	1.0	47.6	1			
300	O 5	III	凝灰岩	(7.9)	4.9	1.8	(89.6)	1	a		
301	O 7	II	凝灰岩	(11.6)	6.0	3.6	(314.7)	—	a		
302	O 8	II	凝灰岩	(7.3)	4.5	1.4	(69.3)	1	b		
303	O 8	II	凝灰岩	10.0	6.0	1.6	95.4	3			
304	O 8	II	凝灰岩	(10.3)	4.8	1.9	(119.5)	1	c		
305	O 8	II	凝灰岩	(6.5)	4.0	1.3	(38.9)	—	b		
306	O 8	II	凝灰岩	(7.4)	(3.9)	2.2	(69.2)	—	a		
307	O 9		凝灰岩	11.5	5.8	2.0	162.0	1			
308	O12	II	凝灰岩	10.5	4.3	1.3	62.0	1			
309	O12	II	凝灰岩	15.0	6.4	2.2	272.5	1		121-124	
310	O12	II	凝灰岩	(11.0)	4.8	1.9	(140.6)	1	a		

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
311	O13	II	凝灰岩	(9.0)	6.2	1.3	(100.9)	—	b		
312	P12	II	凝灰岩	(9.5)	5.0	2.2	(120.4)	1	c		
313	P12	II	凝灰岩	(7.0)	(4.6)	2.1	(80.6)	—	a		
314	P14		凝灰岩	9.6	4.7	1.4	72.5	1			
315	Q10	II	凝灰岩	10.5	4.7	1.1	73.0	1			
316	Q10	II	凝灰岩	(11.4)	7.0	2.8	(253.1)	—	b		
317	R10	II	凝灰岩	13.5	4.9	2.2	165.8	1			
318	R10	III	凝灰岩	13.8	7.3	3.1	324.5	3			
319	SB2	II	凝灰岩	11.8	5.6	1.9	150.6	3		41-151	
320	SB2		凝灰岩	9.8	5.3	1.1	78.0	3			
321	SB2		凝灰岩	(10.0)	5.3	3.6	(213.6)	1	b		
322	SB2		凝灰岩	9.0	4.6	2.2	116.7	1			
323	SB2		凝灰岩	8.7	5.0	1.6	73.2	1	b		
324	SB2		凝灰岩	(8.2)	4.5	2.1	(92.2)	1	a		
325	SB2		凝灰岩	(7.2)	4.5	2.1	(68.4)	1	d		
326	SB3		凝灰岩	(10.4)	5.9	2.0	(127.2)	1	c	42-12	
327	SB7		凝灰岩	(6.8)	4.2	1.3	(43.3)	1	a		
328	SB7		凝灰岩	(9.2)	4.2	1.1	(62.4)	1	c		
329	SB7		凝灰岩	9.2	4.3	2.1	84.6	3		51-91	
330	SB8		凝灰岩	(11.7)	6.0	2.6	(235.3)	1	a		
331	SB8		凝灰岩	8.1	4.2	1.5	51.0	3			
332	SB8		凝灰岩	8.2	4.4	1.5	65.5	3		55-103	
333	SB8		凝灰岩	(5.4)	4.4	1.5	(45.6)	1	a		
334	—		凝灰岩	12.7	6.7	1.9	161.8	3			
335	—		凝灰岩	(8.5)	5.0	1.5	(80.0)	1	b		
336	—		緑色片岩	(8.0)	6.5	1.3	(71.6)	1	b		
337	—		凝灰岩	(8.4)	(5.6)	2.9	(126.6)	3	a		
338	—		凝灰岩	(8.7)	4.5	2.2	(109.8)	1	a		
339	—		凝灰岩	(9.2)	5.9	1.6	(141.6)	—	b		
340	—		凝灰岩	(6.1)	4.8	1.8	(61.6)	—	a		
341	—		緑色片岩	(5.9)	5.5	1.4	(59.3)	1	a		
342	—		凝灰岩	(7.9)	(5.0)	2.2	(100.9)	—	a		
343	—		凝灰岩	(7.0)	4.3	2.2	(78.5)	1	a		

磨製石斧

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
1	B12	II	蛇紋岩	10.0	5.9	3.7	289.3	2 A		122-127	
2	C12	II	蛇紋岩	7.0	3.4	1.8	77.2	2 B			
3	C12	II	凝灰岩	8.8	4.0	2.3	124.9	2 B			
4	C12	II	蛇紋岩	(2.0)	(2.6)	(1.8)	(5.8)	—	e		
5	D10	II	蛇紋岩	(5.8)	3.9	2.3	(69.2)	—	a		
6	D11	II	斑れい岩	(8.8)	4.3	2.2	(122.8)	2 B	a		
7	D11	II	蛇紋岩	9.0	(5.0)	2.3	(130.7)	2 B	a		
8	D12	II	凝灰岩	9.6	4.5	2.4	155.9	2 B		122-131	
9	D12	II	凝灰岩	(6.4)	5.1	3.3	(134.7)	—	a		
10	D12	II	凝灰岩	(3.6)	(2.6)	(0.9)	(13.0)	—	e		
11	D13	II	蛇紋岩	(2.8)	(5.5)	(1.4)	(22.0)	—	e		
12	E 8	II	蛇紋岩	(7.7)	4.6	2.5	(149.1)	—	b		
13	E 9		蛇紋岩	(8.1)	3.9	2.4	(128.0)	3	b		
14	E12	II	蛇紋岩	(3.2)	3.4	1.9	(17.8)	—	b		
15	E12	II	蛇紋岩	(2.6)	(1.8)	0.6	(4.5)	—	a		
16	E13	II	蛇紋岩	(6.5)	5.0	2.4	(138.3)	2	b		
17	E13	II	凝灰岩	(8.5)	5.4	2.8	(154.1)	—	d		
18	F 8	II	蛇紋岩	(7.4)	4.8	2.0	(97.0)	—	b		
19	F 9	II	蛇紋岩	(8.7)	(5.0)	(1.1)	(69.8)	—	e		
20	F10	II	蛇紋岩	(3.4)	3.0	(1.5)	(20.4)	—	a		
21	F11	II	斑れい岩	(9.6)	5.2	2.8	(226.7)	—	a		
22	F11	II	蛇紋岩	6.1	2.6	1.0	24.9	2 B		122-134	
23	F12	II	蛇紋岩	6.9	3.6	2.0	73.3	2 B			
24	F12	II	蛇紋岩	(6.7)	4.8	2.2	(112.1)	—	b		
25	F12	II	蛇紋岩	(10.0)	(3.7)	2.4	(134.1)	2 A	a		
26	F12	II	蛇紋岩	(8.2)	5.5	3.1	(211.8)	2 A	d		
27	F12	II	凝灰岩	(4.9)	4.4	(3.0)	(80.8)	—	a		
28	G 7	II	蛇紋岩	(6.2)	5.0	2.4	(117.7)	—	a		
29	G 8	II	蛇紋岩	5.2	2.8	1.2	29.3	2 B		122-133	
30	G 9	II	凝灰岩	9.8	4.2	2.3	133.2	2 B		122-130	

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	折　損	挿図番号	備　　考
31	G11	II	蛇紋岩	(6.0)	(3.5)	(0.6)	(14.2)	—	e		
32	G12	II	蛇紋岩	(8.5)	5.3	2.8	(126.8)	—	a		
33	G12	II	蛇紋岩	9.3	4.4	2.5	153.2	2 B			
34	G12	II	蛇紋岩	(10.8)	5.6	2.5	(235.6)	2 A	a		
35	G12	II	蛇紋岩	(7.8)	5.3	2.2	(152.4)	—	b		
36	G12	II	蛇紋岩	(4.7)	2.6	1.1	(20.7)	—	b		
37	G12	II	蛇紋岩	(2.8)	(2.7)	(1.1)	(12.9)	—	a		
38	G12	II	凝灰岩	11.5	5.7	3.0	(266.3)	2 A	a		
39	H 7	II	蛇紋岩	(8.4)	5.9	2.8	(211.1)	—	a		
40	H11	II	蛇紋岩	7.5	3.2	1.2	45.6	2 B		122-135	
41	H11	II	凝灰岩	11.5	4.2	3.2	235.1	3		122-136	
42	H12	I	蛇紋岩	(2.1)	(4.8)	(1.3)	(14.7)	—	e		
43	H12	II	蛇紋岩	(3.1)	(1.5)	0.6	(4.6)	2	a		
44	H12	II	蛇紋岩	(5.7)	4.9	1.1	(38.0)	2	b		
45	H12	II	蛇紋岩	(7.9)	4.5	2.2	(113.2)	2 B	a		
46	H12	II	凝灰岩	(11.0)	(4.2)	2.5	(149.4)	2 A	a		
47	H12	II	蛇紋岩	(10.0)	6.0	2.8	(246.5)	2 A	a		
48	H12	II	凝灰岩	12.5	5.0	3.0	274.1	2 A			
49	H12	II	凝灰岩	(10.5)	5.8	2.4	(206.6)	2 A	a		
50	H12	II	凝灰岩	(7.6)	4.2	2.2	(81.5)	—	d		
51	H12	II	凝灰岩	(4.0)	4.5	(3.9)	(73.4)	—	a		
52	H12	II	蛇紋岩	(4.2)	.6.0	(2.3)	(69.5)	—	b		
53	H12	II	凝灰岩	(3.7)	3.3	0.9	(14.1)	—	b		
54	H12		蛇紋岩	(1.5)	(2.2)	(0.5)	(2.8)	—	e		
55	H12		蛇紋岩	9.5	4.5	2.0	130.6	2 B			
56	I 7	II	蛇紋岩	(8.0)	8.4	3.0	(297.2)	—	b		
57	I 8	II	蛇紋岩	(3.6)	3.6	2.0	(52.2)	—	d		
58	J 5	II	砂岩	(9.2)	4.8	2.5	(156.9)	—	d		
59	J 6	II	蛇紋岩	(12.5)	5.8	2.8	(288.3)	2 A	a		
60	M 7	II	凝灰岩	(12.3)	5.4	3.2	(329.3)	—	a		
61	M 8	III	蛇紋岩	(11.8)	5.4	2.7	(357.2)	2 A	b		
62	M 9	II	蛇紋岩	(10.8)	(5.7)	2.1	(230.8)	2 A	a	122-129	
63	M 9	II	凝灰岩	(10.0)	6.0	3.6	(351.0)	2 A	d		
64	M 9	II	蛇紋岩	(5.4)	5.2	2.6	(116.6)	—	a		
65	M 9		蛇紋岩	(5.7)	(3.8)	1.3	(35.8)	2	a		
66	M 9		蛇紋岩	(5.3)	(6.5)	2.6	(81.7)	—	d		
67	N 5	II	泥岩	(4.7)	5.6	2.3	(86.9)	—	b		
68	N 7	III	凝灰岩	9.2	4.9	1.5	74.1	2 B			
69	N 8	III	蛇紋岩	(3.9)	(4.4)	(2.2)	(48.0)	—	e		
70	O 5	II	凝灰岩	11.9	6.0	3.4	357.2	2 A			
71	O 8	II	蛇紋岩	(5.6)	3.4	1.2	(49.3)	—	a		
72	Q10	II	蛇紋岩	8.5	3.5	1.5	82.7	2 B			
73	Q10	II	蛇紋岩	(7.3)	3.8	(1.4)	(66.0)	—	a		
74	R10	III	蛇紋岩	10.0	4.0	2.3	140.4	2 A		122-128	
75	SX 1	II	凝灰岩	5.6	3.2	1.3	34.8	2 B			
76	—		蛇紋岩	5.7	2.4	0.9	16.7	2 B		122-132	

有溝石錘

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	挿図番号	備　　考
1	C 9	II	粘板岩	3.4	2.3	0.9	11.3	125-162	
2	C 9	II	粘板岩	4.0	2.7	1.1	17.0	125-164	
3	C 9	II	凝灰岩	4.5	2.6	1.3	21.3	125-165	
4	C 9	II	凝灰岩	3.5	2.2	1.2	11.2	125-163	
5	C 9	II	凝灰岩	3.4	(1.8)	1.0	(8.4)	125-167	
6	C 9	II	砂岩	3.3	2.1	0.7	7.1	125-166	

三脚石器

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	挿図番号	備　　考
1	SB 2		下呂石	3.6	3.2	0.8	5.5	41-150	

砥石

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	挿図番号	備　　考
1	F 8		凝灰岩	(7.3)	(5.6)	3.2	(152.1)		
2	M 8	III	砂岩	(9.0)	(7.4)	(1.4)	(120.3)		
3	N 7	III	凝灰岩	16.5	8.3	6.4	1151.1		
4	N 8	III	砂岩	(5.9)	(5.0)	(1.0)	(45.7)	125-168	
5	P11	VI	砂岩	(5.1)	(5.0)	(1.4)	(49.5)		
6	P12	VI	砂岩	(7.6)	(6.4)	(1.3)	(90.0)	125-169	

石皿

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	挿図番号	備　　考
1	G12	II	凝灰岩	(13.9)	(11.6)	7.0	(1260.0)		
2	M5	III	凝灰岩	(31.9)	(25.1)	(13.5)	(11690.0)		
3	M7	III	凝灰岩	(19.4)	(10.6)	(7.7)	(1940.0)		
4	SB2		凝灰岩	(16.9)	(14.9)	(6.0)	(1640.0)		
5	SB6		凝灰岩	10.5	8.2	3.6	375.0	46-56	
6	SB10		凝灰岩	37.0	23.5	7.0	5480.0	59-6	
7	—		凝灰岩	(27.4)	(29.3)	(9.5)	(9530.0)	125-170	
8	—		凝灰岩	(21.4)	(19.7)	(9.8)	(4790.0)	125-171	

異形石器

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	挿図番号	備　　考
1	L4		頁岩	1.9	2.7	0.3	1.0	三日月形	120-109	
2	M7	II	下呂石	(3.3)	3.2	0.4	(3.6)	三日月形	120-107	
3	N5	III	下呂石	2.9	1.3	0.6	1.6	分銅形	120-110	
4	—		チャート	2.2	1.9	0.4	1.0	三日月形	120-108	

石製品

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類	挿図番号	備　　考
1	C10	II	滑石	2.0	(0.6)	(0.4)	(0.7)	石製装身具	126-4	
2	D10	II	凝灰岩	5.0	5.0	3.6	53.4	石製装身具	126-5	
3	F8		砂岩	4.0	2.4	0.6	8.8	石製装身具	126-1	
4	H8		滑石	1.4	(1.1)	(0.5)	(0.9)	石製装身具	126-3	
5	N6	II	蛇紋岩	2.9	1.2	0.3	1.6	石製装身具	126-2	
6	Q10	II	粘板岩	(1.7)	(1.8)	(0.2)	(0.9)	石製装身具		
7	G12	II	粘板岩	(8.1)	(3.2)	(2.1)	(63.7)	独鈷石	126-7	
8	D11	II	緑色片岩	(6.2)	(2.0)	(1.2)	(19.1)	刀剣形石製品	126-10	
9	G8	II	緑色片岩	(15.2)	(3.5)	(1.5)	(129.2)	刀剣形石製品	126-11	
10	SB2		凝灰岩	44.6	23.4	19.0	28080.0	石棒	41-154	
11	G12	II	緑色片岩	5.8	5.7	0.9	45.9	環状石斧	126-8	
12	G12	II	流紋岩	5.8	5.0	3.2	99.8	刻文入り石製品	126-9	
13	H11	II	凝灰岩	3.2	2.1	2.0	17.3	砲弾形石製品	126-6	
14	L4		凝灰岩	(12.5)	(9.0)	(2.4)	(379.8)	不明	126-12	

磨石・凹石・敲石類

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類			挿図番号	備　考 (磨面の状況)
								形態	凹みの数と形状			
1	C10	II	凝灰岩	(7.3)	7.0	3.8	(189.4)	2B	1・0・0	2		A
2	C10	II	凝灰岩	(7.3)	(4.7)	(3.5)	(159.7)	—	・・			A
3	C10	II	凝灰岩	10.8	8.2	6.3	919.7	3D	1・1・1	23		A
4	C11	II	凝灰岩	13.3	10.2	4.9	958.9	4	・・			B特殊磨石
5	C11	II	凝灰岩	(9.1)	7.3	5.8	(430.9)	—	・・			A
6	C12	II	凝灰岩	13.0	9.5	5.4	1150.7	2B	1・1・0	1		B
7	C12	II	凝灰岩	(6.0)	(8.8)	4.9	(260.0)	—	・・			B
8	C12	II	凝灰岩	9.2	5.5	3.8	230.5	2B	・・			B
9	C12	II	凝灰岩	9.7	7.6	4.4	437.9	2B	1・0・0	1		A
10	C13	II	凝灰岩	12.2	9.2	8.6	1310.0	2D	・・			B
11	D7	II	凝灰岩	(16.4)	(6.5)	(7.3)	(631.8)	—	・・			B
12	D8	II	凝灰岩	11.6	8.3	5.0	614.8	2B	1・0・0	1		
13	D10	II	凝灰岩	7.5	6.0	3.6	178.7	2B	1・1・1	2		A
14	D10	II	凝灰岩	15.8	7.5	5.6	1008.4	4	・・			B
15	D10	II	凝灰岩	(7.8)	(6.2)	(4.5)	(271.8)	—	・・			A
16	D10	II	凝灰岩	10.5	7.8	3.9	424.0	2B	1・1・0	2		A
17	D11	II	凝灰岩	15.4	8.9	5.7	1112.3	2B	・・			B
18	D12	II	凝灰岩	(11.4)	6.4	4.4	(363.2)	—	1・1・0	2		B
19	D12	II	コーツ	(9.3)	(7.7)	6.0	(664.9)	—	・・			長軸一端に敲打痕
20	D13	II	凝灰岩	9.2	9.0	4.5	504.3	3D	2・1・0	1		A
21	D13	II	凝灰岩	5.7	4.0	3.1	79.0	2C	1・0・0	2		
22	D13	II	凝灰岩	10.0	9.5	5.7	820.2	4	・・			A
23	E8	II	凝灰岩	(10.4)	8.9	6.0	(629.7)	2B	・・			A
24	E8	II	凝灰岩	(5.8)	(7.5)	(7.5)	(402.3)	—	・・			A
25	E9	II	凝灰岩	14.7	10.0	6.7	1560.0	2B	・・		123-148	A
26	E9	II	凝灰岩	10.5	8.0	3.4	455.1	2B	2・1・0	1		B
27	E9	II	凝灰岩	12.4	9.3	2.9	399.5	2B	2・2・0	2		A
28	E11	II	凝灰岩	16.3	7.0	4.2	681.8	2B	1・0・0	1		
29	E12	II	凝灰岩	11.0	10.0	6.2	1045.7	4	1・1・1	1		
30	E12	II	凝灰岩	12.0	7.5	5.6	667.0	2B	・・			A

番号	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	分類 形態	分類 凹みの数と形状		挿図番号	備考（磨面の状況）
31	E12	II	凝灰岩	8.6	7.6	4.3	310.3	1 B	1・1・0	2	123-141	
32	E12	II	花崗岩	9.8	7.2	4.6	569.7	2 B	・・		124-149	B
33	E12	II	凝灰岩	(6.0)	(8.5)	5.0	(357.8)	—	・・			A
34	E12	II	凝灰岩	(11.9)	(8.2)	(4.7)	(372.2)	2 B	3・0・0	2		
35	E12	III	凝灰岩	6.8	5.5	4.5	231.1	2 B	・・			A
36	E12	III	凝灰岩	(8.7)	(7.1)	5.4	(373.1)	—	・・			A
37	E12	II	凝灰岩	8.9	7.8	6.3	517.4	2 B	・・			B
38	E13	II	凝灰岩	10.0	8.0	5.6	650.4	2 B	1・0・0	1		
39	E13	II	凝灰岩	10.3	8.1	5.9	605.2	2 B	1・1・0	1		
40	E13	II	凝灰岩	10.0	8.0	7.8	787.6	2 A	1・0・0	1		
41	E13	III	凝灰岩	(7.8)	(5.9)	(4.9)	(198.8)	—	・・			B被熱
42	F 8	II	凝灰岩	(7.9)	(9.4)	5.8	(483.3)	—	・・			A
43	F 9	II	凝灰岩	11.8	10.5	7.2	1320.0	2 B	・・			A
44	F10	V	凝灰岩	11.0	9.8	4.5	643.0	2 B	1・0・0	1		A
45	F11	II	凝灰岩	11.0	8.2	6.8	924.1	2 D	1・0・1	1		A
46	F12	II	凝灰岩	16.1	8.2	(4.8)	(937.7)	2 D	1・0・1	1		B
47	F12	II	凝灰岩	9.6	7.8	3.6	366.5	2 B	1・1・0	2		A
48	F12	II	凝灰岩	10.2	7.8	5.1	586.4	2 B	1・1・0	2		
49	F12	II	凝灰岩	10.2	7.5	4.0	366.5	2 B	2・2・0	2	124-152	
50	F12	II	凝灰岩	8.0	6.7	4.1	257.6	2 B	・・			B
51	F12	II	凝灰岩	7.5	7.0	5.0	323.5	1 B	・・			A
52	F12	II	凝灰岩	(10.0)	8.3	4.7	(583.0)	—	・・			B
53	F12	II	凝灰岩	11.4	8.7	4.6	619.8	2 B	2・1・0	2		B
54	F12	II	凝灰岩	7.5	7.3	6.8	466.8	1 A	・・			A
55	F12	II	凝灰岩	6.9	6.1	6.0	283.4	1 A	・・		123-137	A
56	F12	II	凝灰岩	14.3	12.6	10.9	2370.0	2 B	・・			A
57	F12	II	凝灰岩	7.5	6.9	4.4	314.3	1 B	1・1・0	2		
58	F12	II	凝灰岩	(7.8)	5.8	4.3	(217.7)	2 B	1・1・0	1		A被熱
59	F12	III	凝灰岩	7.7	5.6	3.8	202.2	2 B	・・			A
60	G 7	II	凝灰岩	12.5	8.8	5.0	719.8	2 B	0・0・1	1		B
61	G 7	II	凝灰岩	10.5	9.4	5.1	661.6	2 B	1・0・0	3		B
62	G 8	II	凝灰岩	10.7	9.7	6.0	858.8	1 B	・・			A
63	G11	II	凝灰岩	6.5	5.8	4.0	231.4	1 B	・・			B
64	G12	II	凝灰岩	10.9	6.8	5.9	590.8	2 C	・・			A
65	G12	II	砂岩	11.1	7.2	5.3	596.7	2 C	・・			B
66	G12	II	凝灰岩	11.0	6.4	3.7	299.0	2 C	1・2・1	2		
67	G12	II	凝灰岩	(8.1)	6.9	4.7	(285.7)	2 B	1・1・0	2		
68	G12	II	凝灰岩	(7.1)	(9.2)	4.2	(387.4)	—	・・			B
69	G12	II	凝灰岩	(10.8)	(8.0)	4.5	(391.9)	2 B	・・			B
70	G12	II	凝灰岩	8.9	7.9	5.7	539.5	1 B	1・1・1	1		
71	G12	II	凝灰岩	13.0	10.5	6.0	1080.5	4	・・			B
72	G12	II	凝灰岩	(8.7)	(4.0)	(6.0)	(227.1)	—	・・			A
73	G12	II	砂岩	10.0	8.4	3.4	447.6	4	1・0・0	2	124-161	B
74	G12	II	凝灰岩	10.6	8.2	4.8	541.4	2 B	2・2・1	2		A
75	G12	II	凝灰岩	10.7	7.9	5.2	693.2	2 B	・・			B
76	G12	II	凝灰岩	14.7	10.2	10.0	1210.0	2 A	1・0・0	2		A
77	G12	II	凝灰岩	11.6	8.5	3.6	422.3	2 B	1・1・0	2		A
78	H 6	II	凝灰岩	10.1	10.0	4.4	474.1	2 B	1・1・0	2		B
79	H 8	III	凝灰岩	11.4	9.4	5.1	691.8	4	・・			A
80	H11	II	凝灰岩	9.4	9.0	7.0	964.8	3 D	1・1・2	1		
81	H11	II	凝灰岩	9.6	(8.0)	5.9	(612.4)	2 B	・・			B
82	H11	II	凝灰岩	13.4	9.7	5.4	850.0	2 B	1・0・0	1		A
83	H11	II	凝灰岩	(10.8)	(5.8)	4.7	(327.8)	—	・・			B
84	H11	II	凝灰岩	10.3	7.0	5.6	551.1	2 B	1・0・0	2		
85	H11	II	凝灰岩	12.0	5.8	4.3	385.7	2 C	1・0・0	1		
86	H11	II	凝灰岩	(7.7)	8.3	4.9	(523.7)	2 D	1・0・0	1		B
87	H11	II	凝灰岩	9.6	9.0	4.5	524.1	1 B	・・			B
88	H11	II	凝灰岩	5.6	5.0	2.7	93.7	2 B	・・			A
89	H12	II	凝灰岩	15.0	9.6	4.1	797.0	2 B	・・			A
90	H12	II	凝灰岩	8.0	6.6	2.4	167.8	2 B	1・0・0	1		
91	H12	II	花崗岩	10.5	(5.2)	6.6	(539.0)	—	・・			B
92	H12	II	凝灰岩	10.0	(4.6)	(8.6)	(474.6)	—	2・0・0	2		
93	H12	II	凝灰岩	7.7	4.5	3.7	137.4	2 B	・・			A
94	H12	II	凝灰岩	9.8	6.7	4.4	335.2	2 B	・・			A
95	H12	II	凝灰岩	8.5	9.0	6.6	1064.5	2 C	・・			B
96	H12	II	凝灰岩	(7.1)	8.3	8.4	(835.5)	—	・・			A被熱
97	H12	II	凝灰岩	11.1	6.3	3.5	354.4	2 D	1・0・0	2		
98	H12	II	凝灰岩	12.5	7.5	5.1	552.5	2 B	・・			B
99	H12	II	凝灰岩	9.5	7.5	7.3	635.8	2 D	・・			A
100	H12	II	凝灰岩	(6.0)	5.8	3.7	(116.2)	—	1・0・0	2		

番号	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	分類			挿図番号	備考（磨面の状況）
								形態	凹みの数と	形状		
101	H12	II	凝灰岩	(11.0)	8.5	6.5	(569.5)	2 B	2・1・0	2		A
102	H12	II	凝灰岩	10.5	10.0	3.5	467.6	1 B	1・0・0	2	123-142	B
103	H12	II	凝灰岩	11.7	9.8	5.2	846.7	2 B	1・1・0	2		A
104	H12		凝灰岩	7.5	6.0	5.9	328.5	2 C	・・			A
105	H12		凝灰岩	10.0	7.0	4.2	417.6	2 B	・・			B
106	H12	II	凝灰岩	9.7	7.3	6.0	502.6	4	1・0・0	1		A
107	H12	II	凝灰岩	10.1	6.9	4.5	399.8	2 B	・・			A
108	H12		凝灰岩	(7.8)	7.6	7.6	(624.8)	2 D	・・			A
109	H12		凝灰岩	13.4	10.8	7.9	1580.0	2 B	・・			A
110	H12	II	凝灰岩	10.7	8.7	5.7	739.0	2 B	1・1・0	2		A
111	H12	II	凝灰岩	(10.1)	5.9	4.5	(324.3)	4	2・1・0	12		
112	H12	II	凝灰岩	(8.0)	(9.9)	4.1	(385.0)	2 B	・・			B
113	H12	II	凝灰岩	8.2	7.3	4.9	346.7	2 B	2・1・0	2		
114	H12	II	凝灰岩	(10.8)	(6.6)	5.0	(511.5)	—	・・			B
115	H12	II	凝灰岩	10.9	9.2	5.8	743.5	2 B	1・0・0	1		A
116	H12	II	凝灰岩	11.9	6.7	4.1	400.3	2 C	1・1・0	1		
117	H12	II	凝灰岩	9.2	8.4	4.6	769.6	2 B	2・2・0	22		B
118	H12	II	凝灰岩	10.5	5.8	3.6	273.0	2 B	2・2・0	2		B
119	H12	II	凝灰岩	(8.8)	(5.7)	4.8	(345.7)	—	・・			A
120	H12		花崗	17.2	9.2	4.9	1370.0	2 B	・・			B
121	I 4	II	花崗岩	10.8	7.1	5.3	649.3	2 B	・・			B
122	I 4	II	凝灰岩	11.0	4.7	3.8	221.0	2 C	2・0・0	2		B
123	I 4	II	凝灰岩	5.8	4.7	4.0	127.8	2 B	1・0・0	1		
124	I 5	II	凝灰岩	10.3	7.7	4.7	487.6	2 B	2・0・0	1		A
125	I 5	II	凝灰岩	11.0	8.8	3.4	406.8	2 B	1・1・0	2		A
126	I 6	II	凝灰岩	9.5	8.8	4.8	520.9	1 B	・・			A
127	I 6	II	凝灰岩	8.0	7.2	2.4	137.2	1 B	・・			A
128	I 7	II	凝灰岩	7.9	6.7	4.6	269.9	2 B	1・1・0	2		
129	I 7	II	凝灰岩	7.1	6.2	3.0	162.1	2 B	・・			A
130	J 5	II	凝灰岩	11.0	5.8	4.2	387.2	2 C	2・2・1	12		A
131	J 5	II	凝灰岩	(11.0)	4.9	5.0	(253.6)	2 C	1・1・1	1		
132	J 5	II	凝灰岩	16.2	8.8	7.0	1330.0	2 B	1・0・0	1		A
133	J 5	II	凝灰岩	10.2	6.5	4.3	364.1	2 C	1・1・0	1		
134	K 5	III	凝灰岩	13.2	9.4	8.4	1390.0	4	・・			A
135	K 5	II	凝灰岩	8.5	5.8	3.6	209.9	2 B	0・0・1	1		A
136	K 6	II	凝灰岩	17.0	10.0	8.1	1890.0	2 C	・・			A
137	K 6	II	凝灰岩	(15.3)	7.1	4.8	(746.2)	4	・・			A特殊磨石
138	L 4		凝灰岩	12.8	7.7	7.8	1059.5	2 A	・・			A
139	L 4		凝灰岩	13.6	7.0	6.3	833.8	2 A	・・			A
140	L 4		凝灰岩	13.1	9.7	4.5	653.1	2 B	1・0・0	1		A
141	L 4		砂岩	(10.0)	9.8	3.6	(453.5)	4	・・			B
142	L 4		凝灰岩	9.2	8.4	4.6	442.6	1 B	1・1・0	1		A
143	L 4		凝灰岩	8.0	6.6	4.4	284.9	2 B	・・			A
144	L 4		凝灰岩	10.6	7.0	5.2	552.5	2 B	1・0・1	1		B
145	L 4		凝灰岩	(6.3)	(6.9)	3.3	(150.1)	—	・・			A
146	L 4		凝灰岩	9.6	8.0	5.2	568.4	2 B	2・1・0	1		B
147	L 4		凝灰岩	12.8	6.2	6.2	775.0	3 D	1・0・0	1		A
148	L 4		凝灰岩	13.5	7.9	4.9	700.4	2 D	2・0・1	22		A
149	L 4		凝灰岩	(14.8)	8.2	5.8	(927.3)	2 C	・・			A
150	L 4		凝灰岩	9.0	6.8	3.2	202.1	2 B	・・			B
151	L 4		凝灰岩	8.1	6.8	4.0	290.0	2 B	2・2・1	1		A
152	L 4		凝灰岩	10.0	8.7	4.1	489.0	2 B	3・2・0	23		A
153	L 4		凝灰岩	14.9	7.8	6.0	902.7	4	1・1・0	2		B
154	L 4		凝灰岩	6.0	6.6	(1.4)	(81.0)	—	・・			B
155	L 4		凝灰岩	8.2	7.6	4.0	244.6	1 B	1・1・0	2		
156	L 4		凝灰岩	8.9	7.6	3.0	226.1	4	1・1・0	2		
157	L 4		凝灰岩	(8.4)	7.7	4.2	(258.2)	—	1・0・0	2		
158	L 4		凝灰岩	9.6	7.9	5.4	567.1	2 B	1・1・0	2		A
159	L 4		凝灰岩	14.5	6.5	6.4	802.6	2 C	・・			A
160	L 5	II	凝灰岩	(8.7)	6.4	3.9	(255.5)	—	1・1・0	1		
161	L 6	II	凝灰岩	10.8	(9.3)	5.0	(626.6)	2 B	1・1・0	1		A
162	L 6	II	凝灰岩	15.5	7.5	5.3	873.3	4	・・			B特殊磨石
163	L 6	II	砂岩	13.8	6.5	6.6	786.8	4	・・		124-160	B特殊磨石
164	L 7	II	凝灰岩	(10.8)	7.8	6.4	(783.9)	2 B	・・			B被熱
165	L 7	III	凝灰岩	8.5	7.3	4.3	359.8	2 B	・・			A
166	L 7	III	凝灰岩	8.5	8.4	4.0	375.8	1 B	・・			A
167	L 7	III	凝灰岩	11.3	9.3	5.6	796.9	2 B	・・			A
168	L 7	II	凝灰岩	8.1	7.4	3.7	311.8	2 B	・・			A
169	L 7	III	凝灰岩	10.3	9.5	5.3	622.5	1 B	・・			A
170	L 7	III	凝灰岩	13.5	8.7	5.4	813.8	2 C	1・0・0	1		A

番号	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	分類 形態	分類 凹みの数と形状	挿図番号	備考（磨面の状況）
171	L 7	II	凝灰岩	(9.5)	8.5	5.1	(453.9)	2 B	・ ・		A
172	L 7	II	凝灰岩	14.0	8.2	5.9	858.9	4	・ ・		A特殊磨石
173	L 8	II	凝灰岩	7.2	6.7	5.0	204.5	1 B	・ ・		A
174	L 8	III	凝灰岩	10.0	8.5	5.1	574.2	2 B	・ ・		A
175	L 8	III	凝灰岩	10.2	8.8	4.2	484.0	2 B	・ ・		A
176	M 5	II	凝灰岩	7.7	6.5	3.4	159.2	2 B	1・1・0	2	
177	M 6	III	凝灰岩	11.4	7.2	6.5	705.0	2 A	・ ・		A
178	M 6	III	凝灰岩	11.5	7.5	4.9	468.5	2 B	・ ・		B
179	M 7	II	凝灰岩	10.0	8.8	5.7	593.9	2 B	・ ・		A
180	M 7	II	凝灰岩	(9.5)	6.7	4.9	(461.0)	2 B	・ ・		A
181	M 7	II	凝灰岩	(6.8)	8.8	4.3	(289.5)	—	・ ・		A
182	M 7	III	凝灰岩	12.1	6.8	7.1	891.4	2 D	・ ・		A
183	M 7	III	凝灰岩	(7.5)	7.0	4.6	(314.4)	2 B	1・1・0	2	
184	M 7	II	凝灰岩	(11.2)	6.4	5.3	(544.6)	—	・ ・		A
185	M 7	II	凝灰岩	(9.4)	7.0	6.8	(637.2)	2 A	・ ・		A
186	M 7	II	凝灰岩	(7.0)	8.1	4.7	(390.3)	—	・ ・		B
187	M 7	II	砂岩	(4.3)	(6.5)	(4.7)	(144.1)	—	・ ・		A
188	M 7	II	凝灰岩	9.5	7.5	4.0	365.0	2 B	3・1・0	2	A
189	M 7	II	凝灰岩	8.5	6.2	3.4	188.7	2 B	1・1・0	1	
190	M 7	II	凝灰岩	7.4	6.2	3.4	200.6	2 B	・ ・		A
191	M 7	II	凝灰岩	(8.0)	(8.1)	(2.7)	(149.3)	—	・ ・		A
192	M 7	II	凝灰岩	7.6	6.5	4.5	285.0	2 B	1・0・0	2	A
193	M 7	II	凝灰岩	(3.9)	4.8	2.6	(52.4)	—	・ ・		A
194	M 7	II	凝灰岩	9.6	7.0	4.5	372.0	2 B	・ ・		A
195	M 7	III	凝灰岩	9.3	8.8	4.2	355.6	1 B	・ ・		A
196	M 7	III	凝灰岩	11.9	8.2	4.9	611.4	2 B	1・0・0	2	A
197	M 7	III	砂岩	9.9	7.3	3.6	331.5	4	・ ・		B
198	M 7	III	凝灰岩	7.2	4.5	2.8	97.6	2 B	1・0・0	1	A
199	M 7	III	凝灰岩	11.5	4.9	3.8	271.0	2 C	1・1・0	1	124-155	A
200	M 7	III	凝灰岩	(6.7)	6.6	3.7	(166.4)	2 B	1・0・0	2		被熱
201	M 7	II	凝灰岩	(9.0)	7.0	6.7	(578.0)	2 A	・ ・		A
202	M 7	II	凝灰岩	10.9	8.7	5.0	595.6	2 B	・ ・		A
203	M 7	II	凝灰岩	10.5	8.5	4.9	530.0	2 B	1・0・0	1	A
204	M 7	II	凝灰岩	(10.2)	(8.1)	4.1	(412.6)	2 B	・ ・		B
205	M 7	II	凝灰岩	9.5	7.0	4.7	455.3	2 B	2・1・0	1	B
206	M 7	II	凝灰岩	9.3	7.9	4.2	491.8	2 B	1・0・0	2	B
207	M 7	III	凝灰岩	6.4	6.4	3.9	183.1	1 B	・ ・		A
208	M 7	III	凝灰岩	(9.3)	7.6	6.2	(471.3)	—	・ ・		A
209	M 8	III	凝灰岩	10.0	8.2	3.8	392.9	4	・ ・		A
210	M 8	III	凝灰岩	(10.4)	7.0	6.6	(580.1)	—	・ ・		A
211	M 8	III	凝灰岩	9.3	7.0	5.2	448.6	2 C	1・1・0	1	
212	M 8	III	凝灰岩	11.6	7.7	5.0	473.2	2 B	1・0・0	2	
213	M 8	II	凝灰岩	12.0	5.2	4.6	361.6	2 C	・ ・		A
214	M 8	II	凝灰岩	11.7	7.0	6.6	501.0	2 A	・ ・		A
215	M 8	II	凝灰岩	12.4	7.5	4.5	665.8	2 D	・ ・	124-156	A
216	M 8	II	凝灰岩	12.8	8.5	6.5	995.0	2 D	2・1・0	2	A
217	M 8	II	凝灰岩	11.4	8.0	3.8	439.7	2 B	・ ・		B
218	M 8	II	凝灰岩	9.5	6.0	4.2	322.8	2 B	1・0・1	1	A
219	M 8	III	凝灰岩	9.4	7.9	3.6	355.7	2 B	1・0・0	2	A
220	M 8	III	凝灰岩	(5.8)	6.7	5.1	(274.6)	—	・ ・		B
221	M 8	III	凝灰岩	11.0	6.7	6.1	528.3	2 A	・ ・		A
222	M 8	III	凝灰岩	12.6	8.5	5.6	908.8	2 B	・ ・		A
223	M 8	III	凝灰岩	11.3	8.2	5.0	594.0	2 B	2・1・0	2	
224	M 9	II	凝灰岩	11.5	6.7	4.1	400.2	2 B	1・1・1	1	
225	M 9	II	凝灰岩	11.4	8.4	4.5	428.5	2 B	1・1・0	1	
226	M 9	II	凝灰岩	(7.6)	7.2	5.4	(331.9)	—	・ ・		A
227	M 9	II	凝灰岩	(6.3)	5.7	4.0	(197.7)	2 B	・ ・		B被熱
228	M 9		凝灰岩	11.7	6.3	5.9	537.7	4	1・0・0	1	
229	M 9		凝灰岩	10.0	8.5	4.8	526.3	2 B	・ ・	124-150	長軸一端に敲打痕
230	M 9		凝灰岩	11.3	6.7	5.6	554.6	2 C	・ ・		長軸一端に敲打痕
231	M 9		凝灰岩	11.3	7.8	4.7	616.1	2 B	2・1・0	2	
232	M 9		凝灰岩	11.0	6.3	4.9	478.2	2 B	・ ・		A
233	M 9		凝灰岩	11.1	6.4	3.2	257.6	2 B	1・1・1	2	
234	M 9		凝灰岩	9.6	8.3	4.1	417.7	1 B	1・0・0	1	
235	M 9		凝灰岩	12.2	(5.2)	4.4	(322.9)	2 B	3・2・0	2	
236	M 9		凝灰岩	8.8	7.1	3.9	314.9	2 B	・ ・		A
237	M 9		凝灰岩	9.0	6.3	4.7	345.0	2 B	・ ・		A
238	M 9		凝灰岩	9.2	5.4	3.5	231.4	2 B	1・0・0	2	
239	M 9		凝灰岩	(5.8)	(9.3)	4.8	(324.3)	—	・ ・		A
240	M 9		凝灰岩	(7.9)	5.4	4.3	(249.0)	2 B	1・1・0	2	

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類			挿図番号	備　考
								形態	凹みの数と	形状		(磨面の状況)
241	M 9		砂岩	(5.9)	8.0	4.8	(340.3)	—	・　・			B
242	M 9		凝灰岩	10.0	7.8	5.0	504.9	2 B	1・0・1	2		A
243	M 9		凝灰岩	11.6	7.8	3.0	422.6	2 D	1・0・0	2		A
244	M 9		凝灰岩	13.6	8.9	4.6	956.8	2 D	・　・			B
245	M 9		凝灰岩	11.0	8.4	5.4	642.5	2 B	1・1・1	12		
246	M 9		凝灰岩	15.5	7.3	5.4	1095.5	2 B	・　・			A
247	M 9		凝灰岩	14.3	7.5	3.7	612.0	2 D	1・0・0	1		A
248	M 9		凝灰岩	11.9	10.9	5.5	997.2	1 B	・　・			A
249	M 9		凝灰岩	10.0	7.0	4.4	351.6	2 B	2・2・1	2		
250	M 9	II	凝灰岩	10.8	8.4	4.9	654.0	2 B	1・1・0	1		A
251	M 9		凝灰岩	10.6	9.0	5.8	867.6	2 B	・　・			B
252	M 9	II	凝灰岩	12.7	7.9	3.4	581.7	2 B	・　・			A
253	M 9	II	凝灰岩	8.4	7.8	4.9	352.7	1 B	1・1・1	1		
254	M 9	II	凝灰岩	9.3	7.3	4.3	397.3	2 B	1・1・0	1		A
255	M 9	II	凝灰岩	10.2	8.6	4.1	474.2	4	1・1・0	1		
256	M 9	II	凝灰岩	12.4	8.4	3.8	533.0	2 B	2・1・0	2		
257	M 9	II	凝灰岩	18.0	9.9	7.3	1670.0	2 C	・　・			A
258	M 9	II	凝灰岩	10.2	5.7	4.7	398.8	2 D	1・0・3	2		B
259	M 9	II	凝灰岩	9.2	5.7	4.1	324.0	2 B	1・0・0	1		A
260	M 9	II	凝灰岩	11.3	8.8	5.0	656.9	2 B	1・0・0	2		A
261	N 5	II	凝灰岩	(9.7)	6.2	4.0	(244.1)	2 B	・　・			A
262	N 5	II	凝灰岩	8.8	7.4	5.9	502.9	2 C	1・0・0	1		A
263	N 5	II	凝灰岩	(5.2)	6.2	5.7	(247.6)	2 B	・　・			A
264	N 5	II	凝灰岩	(10.4)	6.4	7.3	(599.7)	—	・　・			B
265	N 5	II	凝灰岩	7.0	6.0	5.7	299.8	1 B	1・1・0	1	123-138	
266	N 5	II	凝灰岩	13.7	8.2	5.0	635.5	2 B	・　・			A
267	N 5	II	凝灰岩	(13.7)	7.2	5.7	(659.5)	2 B	・　・			A
268	N 5	II	凝灰岩	(10.6)	7.4	4.9	(510.7)	2 B	・　・			B
269	N 5	II	凝灰岩	11.3	9.0	4.8	674.5	2 B	・　・			A
270	N 5	II	凝灰岩	9.3	7.3	4.2	306.8	2 B	1・1・0	12		A
271	N 5	II	凝灰岩	10.9	8.4	4.3	526.8	4	2・2・0	2		A
272	N 5	II	凝灰岩	8.0	(6.5)	4.3	(284.1)	2 B	・　・			A
273	N 5	II	凝灰岩	(5.5)	(7.7)	(7.3)	(353.5)	—	・　・			A
274	N 5	II	凝灰岩	10.7	7.8	3.7	389.4	2 B	2・1・0	2		A
275	N 5	II	凝灰岩	7.4	6.6	3.8	251.0	2 B	・　・			A
276	N 5	II	凝灰岩	10.8	8.5	5.2	567.7	2 B	2・2・0	1		A
277	N 5	II	凝灰岩	11.1	10.8	5.4	851.6	1 B	・　・			A
278	N 5	II	凝灰岩	9.0	7.8	3.6	324.6	2 B	1・1・0	1		A
279	N 5	II	凝灰岩	10.7	9.2	4.3	427.9	2 B	0・0・1	1		A
280	N 5	II	凝灰岩	11.2	6.4	4.6	401.9	2 C	・　・			B
281	N 6	II	凝灰岩	9.4	7.9	4.9	466.1	2 B	・　・			A
282	N 6	II	砂岩	(11.2)	6.8	5.3	(513.0)	—	・　・			B
283	N 6	II	凝灰岩	12.9	9.8	6.5	1136.1	2 B	0・0・1	1		A
284	N 6	II	凝灰岩	12.2	9.7	4.9	792.5	2 B	・　・			A
285	N 6	II	凝灰岩	7.2	5.8	3.1	138.9	4	・　・			A
286	N 6	II	凝灰岩	(8.4)	6.5	3.2	(173.6)	2 B	・　・			A
287	N 6	II	凝灰岩	(5.8)	6.8	4.8	(232.5)	—	・　・			B
288	N 6	II	凝灰岩	11.4	9.3	4.8	641.9	2 B	・　・			A
289	N 6	II	凝灰岩	(5.5)	6.3	5.9	(225.6)	—	・　・			A
290	N 6	II	凝灰岩	12.2	8.8	6.4	750.7	2 C	・　・			A
291	N 6	II	凝灰岩	12.7	8.9	5.2	762.5	2 C	・　・			A
292	N 6	II	凝灰岩	8.8	7.9	5.4	489.6	1 B	・　・			A
293	N 6		凝灰岩	10.9	9.7	5.2	709.2	1 B	・　・		123-139	A
294	N 6	II	凝灰岩	10.0	9.0	4.7	558.6	2 B	・　・			A
295	N 6	II	凝灰岩	9.2	7.5	6.1	533.3	2 B	・　・			A
296	N 6	II	凝灰岩	7.9	6.8	3.5	217.0	2 B	1・0・0	1		A
297	N 6	III	凝灰岩	14.3	11.0	4.0	686.6	2 B	・　・			A
298	N 6	II	凝灰岩	13.6	9.5	5.7	962.3	2 B	・　・			A
299	N 6	II	凝灰岩	13.2	11.3	5.1	940.2	2 B	1・0・0	1		A
300	N 6	II	凝灰岩	8.4	6.5	5.3	354.6	2 B	・　・			A
301	N 6	II	凝灰岩	10.7	8.8	4.3	447.1	2 B	・　・			A
302	N 6	II	凝灰岩	(8.5)	7.5	6.1	(451.7)	—	・　・			B
303	N 6	II	凝灰岩	9.8	6.5	5.2	425.5	2 C	1・0・0	1		
304	N 6	II	凝灰岩	(12.0)	9.5	5.7	(670.2)	2 B	・　・			A
305	N 6	II	凝灰岩	(8.2)	8.2	5.8	(465.4)	2 C	・　・			A
306	N 6	II	凝灰岩	10.4	9.0	4.6	566.1	2 B	1・1・0	2		A
307	N 6	II	凝灰岩	11.3	9.4	4.8	700.0	2 B	・　・			A
308	N 6	II	凝灰岩	8.1	7.2	4.4	306.6	2 B	・　・			A
309	N 6	II	凝灰岩	7.8	6.3	3.8	225.0	2 B	・　・			A
310	N 6	II	凝灰岩	6.6	4.9	2.0	61.0	2 B	・　・			A

番号	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	分類 形態	分類 凹みの数と形状	分類	挿図番号	備考（磨面の状況）
311	N 6	II	凝灰岩	8.5	5.5	3.7	230.0	2 B	1・0・0	1		A
312	N 6	II	凝灰岩	11.3	6.7	4.6	376.7	2 B	1・0・0	1		A
313	N 6	III	凝灰岩	14.3	8.8	6.3	1148.2	2 B	1・1・0	1		A
314	N 6	II	凝灰岩	8.2	7.1	4.2	259.4	2 B	2・2・0	2		A
315	N 6	II	凝灰岩	13.0	8.4	6.1	945.0	2 B	・・			A
316	N 6	II	凝灰岩	12.0	7.0	4.9	544.8	4	2・0・0	2		A
317	N 6	II	凝灰岩	10.0	8.5	5.6	648.8	2 B	・・			A
318	N 6	II	凝灰岩	8.2	6.5	3.1	203.9	2 B	1・0・0	1		
319	N 6	II	凝灰岩	7.7	5.5	3.6	161.4	2 B	1・0・0	2		
320	N 6	II	凝灰岩	6.1	4.6	3.8	130.8	2 B	1・0・0	1		
321	N 6	II	凝灰岩	(5.4)	(7.4)	3.1	(141.9)	—	1・0・0	1		
322	N 6	III	凝灰岩	18.2	9.1	6.1	1330.0	2 C	・・			A
323	N 6	III	凝灰岩	12.9	10.6	3.1	702.3	2 B	・・			A
324	N 6	II	凝灰岩	10.6	7.9	6.2	588.5	2 B	・・			A
325	N 6	II	凝灰岩	(11.5)	9.4	5.0	(682.9)	2 B	・・			A
326	N 6	II	凝灰岩	12.2	8.5	6.0	722.5	2 B	・・			A
327	N 6	II	凝灰岩	11.2	8.5	4.3	505.0	2 B	2・1・0	1		A
328	N 6	II	凝灰岩	9.4	8.7	5.7	491.1	1 B	1・1・0	2		
329	N 6	II	砂岩	(7.5)	7.5	5.6	(361.5)	—	・・			B
330	N 6	II	凝灰岩	9.5	7.0	4.2	273.5	2 B	1・0・1	2		
331	N 6	III	凝灰岩	13.8	12.9	6.9	972.8	2 C	・・			A
332	N 6	III	凝灰岩	11.6	7.2	6.3	716.6	2 C	・・			B
333	N 7	II	凝灰岩	12.7	8.0	4.8	650.0	2 B	1・0・0	2	124-151	A
334	N 7	III	凝灰岩	(8.8)	6.9	5.5	(431.8)	2 D	1・1・0	2		A
335	N 7	III	凝灰岩	9.6	8.0	4.3	430.3	2 B	・・			A
336	N 7	III	砂岩	11.3	9.2	4.1	686.1	4	・・			B
337	N 7	III	凝灰岩	12.6	9.7	5.4	952.5	2 B	1・0・1	1		A
338	N 7	III	凝灰岩	10.0	6.0	3.4	239.6	2 B	1・1・0	1		
339	N 7	III	凝灰岩	8.8	7.7	5.2	442.2	2 B	・・			A
340	N 7	III	凝灰岩	8.6	8.1	4.4	412.3	1 B	1・0・0	1		
341	N 7	III	凝灰岩	9.4	7.7	5.3	515.3	2 B	1・1・0	1		A
342	N 7	II	凝灰岩	11.0	6.0	5.3	389.5	2 B	1・1・0	1		A
343	N 7	II	凝灰岩	10.0	8.1	3.6	409.3	2 B	・・			A
344	N 7	II	凝灰岩	8.6	7.2	3.5	258.5	2 B	・・			A
345	N 7	III	凝灰岩	9.2	7.8	5.4	430.5	2 C	・・			A
346	N 7	III	凝灰岩	13.5	10.2	5.0	713.9	2 C	・・			A
347	N 7	III	凝灰岩	9.8	7.8	5.7	541.5	2 B	1・1・0	1		A
348	N 7	III	凝灰岩	(11.2)	8.5	4.8	(677.0)	2 B	・・			B
349	N 7	III	凝灰岩	13.5	10.4	4.2	798.7	2 B	0・0・1	2		A
350	N 7	II	凝灰岩	(8.5)	7.2	5.1	(446.8)	—	・・			B
351	N 7	III	凝灰岩	7.1	5.2	3.6	166.3	2 B	・・			A
352	N 7	III	凝灰岩	(10.6)	9.5	4.6	(594.3)	2 B	1・1・0	1		A
353	N 7	III	砂岩	(7.9)	5.3	4.6	(299.5)	—	・・			A
354	N 7	III	凝灰岩	6.0	5.1	2.5	76.0	2 B	・・			A
355	N 7	III	凝灰岩	5.3	4.3	2.3	66.1	2 B	1・0・0	1		A
356	N 7	III	凝灰岩	8.0	6.8	3.2	214.1	2 B	1・0・0	1		
357	N 7	III	凝灰岩	(6.7)	(9.6)	6.7	(578.7)	—	・・			A
358	N 7	III	凝灰岩	12.7	6.8	4.0	389.2	4	2・0・0	1		B
359	N 7	III	凝灰岩	9.3	7.2	4.0	329.9	2 B	1・0・0	1		
360	N 7	III	凝灰岩	(6.0)	(9.0)	4.6	(261.8)	—	・・			A
361	N 7	III	凝灰岩	(7.7)	5.5	4.7	(281.7)	2 C	・・			B
362	N 7	III	凝灰岩	9.2	7.5	4.8	419.7	2 B	2・1・0	2		A
363	N 7	III	凝灰岩	7.9	7.5	3.7	235.4	1 B	1・0・0	1		
364	N 7	III	凝灰岩	(6.0)	5.4	3.0	(143.1)	2 B	1・0・0	3		
365	N 7	III	凝灰岩	(4.8)	5.1	4.8	(142.4)	—	・・			A
366	N 7	III	凝灰岩	8.9	7.2	3.8	280.9	2 B	3・2・0	2		A
367	N 7	III	凝灰岩	(9.8)	(7.9)	(2.7)	(208.7)	—	・・			A
368	N 7	III	凝灰岩	8.5	7.3	4.8	375.8	1 C	1・0・0	2	123-143	A
369	N 7	III	凝灰岩	7.0	6.3	4.0	216.8	1 B	・・			A
370	N 7	III	凝灰岩	10.9	7.0	3.1	250.1	2 B	2・1・0	2		B
371	N 7	III	凝灰岩	11.4	9.4	4.6	664.9	2 B	2・0・0	2		A
372	N 7	III	凝灰岩	7.5	6.2	3.4	219.2	2 B	・・			B
373	N 7	III	凝灰岩	8.9	7.2	5.2	401.3	2 B	・・			A
374	N 7	III	凝灰岩	10.5	9.0	5.1	629.2	2 B	1・1・0	1		A
375	N 7	III	凝灰岩	8.9	5.5	3.0	160.7	2 B	1・1・0	2		
376	N 7	III	凝灰岩	(9.8)	7.0	4.3	(387.3)	—	1・0・0	1		A特殊磨石
377	N 8	II	凝灰岩	10.3	8.8	5.9	708.4	2 B	1・1・0	2		
378	N 8	II	凝灰岩	11.5	4.7	4.1	320.2	4	・・			B
379	N 8	II	凝灰岩	11.6	9.6	5.7	834.9	2 B	1・0・0	1		A
380	N 8		凝灰岩	10.0	7.8	4.1	372.4	2 B	1・0・0	2		

番号	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	分類			挿図番号	備考（磨面の状況）
								形態	凹みの数と形状			
381	N 8	II	凝灰岩	10.0	8.3	4.7	482.0	2 B	1・0・0	2		
382	N 8	II	凝灰岩	(7.9)	8.6	4.4	(351.4)	2 B	・・			A
383	N 8	III	凝灰岩	10.7	10.3	4.4	660.7	1 D	1・0・0	1	123-144	A
384	N 8	III	凝灰岩	(10.8)	9.0	5.1	(614.5)	2 B	・・			A
385	N 8	III	凝灰岩	6.2	5.2	4.0	143.0	2 B	・・			A
386	N 8	III	凝灰岩	8.8	7.7	3.4	218.5	2 B	2・0・0	2		A
387	N 8	III	凝灰岩	(7.8)	5.6	5.0	(313.2)	—	・・			A特殊磨石
388	N12	II	凝灰岩	10.5	6.1	4.4	355.6	2 C	・・			A
389	O 5	II	凝灰岩	16.7	6.1	5.1	694.5	4	・・			B
390	O 5	II	凝灰岩	10.9	9.2	4.2	541.4	2 B	・・			A
391	O 5	II	凝灰岩	9.8	8.1	4.9	374.2	2 B	・・			A
392	O 5	II	凝灰岩	7.7	6.7	4.5	295.6	2 B	・・			A
393	O 5	II	凝灰岩	12.1	9.5	4.8	925.8	2 B	・・			B
394	O 5	II	凝灰岩	8.3	5.5	4.4	229.5	2 B	・・			A
395	O 5	II	凝灰岩	13.6	12.5	4.8	1057.0	1 B	・・			A
396	O 5	II	凝灰岩	10.4	8.4	5.0	576.3	2 B	・・			A
397	O 5	II	凝灰岩	9.2	7.9	4.4	367.9	2 B	1・1・0	1		
398	O 5	II	凝灰岩	14.0	6.0	5.4	477.2	4	・・			B特殊磨石
399	O 5	II	凝灰岩	15.2	(5.8)	5.4	(619.0)	—	・・			B特殊磨石
400	O 5	II	凝灰岩	8.5	5.9	4.5	297.1	2 B	1・1・0	1		
401	O 5	II	凝灰岩	7.1	6.9	4.9	285.3	1 B	・・			A
402	O 5	II	凝灰岩	11.0	7.0	4.6	530.4	2 D	2・2・4	2	124-157	B
403	O 5	II	凝灰岩	10.0	9.4	4.4	507.9	1 B	2・1・0	1		A
404	O 5	II	凝灰岩	8.5	7.7	3.8	282.3	2 B	1・0・0	1		A
405	O 5	II	砂岩	(11.3)	7.2	6.7	(686.2)	—	・・			B特殊磨石
406	O 6	II	凝灰岩	10.0	8.9	5.6	594.9	1 C	1・1・0	1		
407	O 6	II	凝灰岩	11.5	9.9	4.4	791.2	2 B	1・1・0	1		A
408	O 7	II	凝灰岩	8.1	6.7	5.5	361.5	2 B	1・0・0	1		
409	O 7	II	凝灰岩	8.8	4.6	3.1	169.7	2 D	・・			A
410	O 7	II	凝灰岩	11.2	9.8	4.5	466.1	2 B	・・			A
411	O 7	II	凝灰岩	11.0	7.8	3.7	463.0	4	0・0・1	1		B
412	O 8	II	凝灰岩	10.5	7.5	3.7	371.1	2 B	・・			A
413	O 8	II	凝灰岩	11.7	9.8	4.5	551.3	2 B	1・0・0	1		A
414	O 8	II	凝灰岩	10.6	8.0	6.2	703.5	2 B	2・2・0	13		
415	O 8	II	凝灰岩	9.9	7.6	4.2	385.5	2 B	1・1・0	2		A
416	O 8	II	凝灰岩	(7.3)	7.8	4.0	(318.4)	2 B	・・			A
417	O 8	II	凝灰岩	9.8	8.7	4.1	439.3	1 B	1・1・0	1		A
418	O 8	II	凝灰岩	(8.4)	(5.7)	3.9	(181.2)	—	・・			A
419	O 8	II	凝灰岩	9.5	8.9	(6.0)	(509.0)	1 B	・・			A
420	O11	II	凝灰岩	9.6	6.6	4.1	339.7	2 B	1・1・0	2		
421	O11	II	砂岩	9.3	6.8	4.2	377.8	2 B	1・0・0	1		
422	O11	II	凝灰岩	13.5	8.8	7.8	1360.0	2 A	・・			A
423	O11	III	凝灰岩	14.4	8.4	6.4	1012.8	4	・・			A
424	O11		凝灰岩	17.0	6.8	5.0	622.7	2 C	・・			A
425	O11	III	凝灰岩	14.9	10.3	4.9	987.5	4	1・0・0	2		A
426	O11		凝灰岩	11.8	6.3	4.9	445.3	2 B	0・0・1	1		A
427	O11	II	凝灰岩	11.4	5.9	5.5	478.0	2 A	1・0・1	1	123-146	
428	O11	III	凝灰岩	8.1	(6.7)	3.7	(234.5)	2 B	・・			A
429	O11	VII	凝灰岩	12.4	8.5	5.3	765.6	2 B	1・0・0	1		A
430	O12	II	砂岩	10.0	6.5	3.7	378.7	4	1・0・0	3		B
431	O12		凝灰岩	10.0	9.5	4.0	489.5	2 B	1・0・0	1		A
432	O12		凝灰岩	12.4	5.6	4.1	281.8	2 C	3・2・1	2		
433	O13	II	凝灰岩	11.4	8.4	4.4	639.8	2 B	0・0・1	1		B
434	P 9	III	凝灰岩	10.3	8.6	4.2	442.6	2 B	・・			B
435	P 9	II	凝灰岩	10.4	8.0	4.4	427.7	2 B	1・0・0	1		A
436	P10	VI	凝灰岩	10.0	5.5	3.4	203.1	2 B	1・1・1	1		
437	P10	VI	凝灰岩	9.4	5.2	4.1	220.7	2 A	・・		123-145	A
438	P10	IV	凝灰岩	10.5	9.3	4.5	569.1	2 B	1・0・0	1		
439	P10	V	凝灰岩	10.5	8.8	4.2	431.5	2 B	1・0・0	1		A
440	P10	V	凝灰岩	12.3	7.5	4.7	641.9	2 D	2・1・0	2		A被熱
441	P11	II	凝灰岩	9.7	7.4	5.4	468.1	2 B	・・			A
442	P11	VI	凝灰岩	13.8	5.4	2.9	380.9	3 D	2・1・0	1		
443	P11	VI	凝灰岩	(10.7)	6.5	4.7	(388.8)	2 B	・・			A
444	P11	VI	凝灰岩	(7.0)	7.3	3.6	(217.6)	2 B	・・			A
445	P11	VI	凝灰岩	10.0	9.0	4.0	475.3	1 B	・・			A
446	P11	VI	凝灰岩	10.5	7.2	4.8	405.8	2 B	1・1・0	12		
447	P11	VI	凝灰岩	9.4	7.6	3.8	296.5	2 B	1・0・0	1		A
448	P11	VI	凝灰岩	11.7	10.4	5.5	876.0	1 B	・・			A
449	P11	VI	凝灰岩	11.3	8.8	4.6	633.0	2 B	・・			A
450	P11	VIII	凝灰岩	13.7	6.4	4.8	601.2	2 C	・・			B

番号	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	分類			挿図番号	備考（磨面の状況）
								形態	凹みの数と形状			
451	P11	IX	砂岩	8.5	6.9	5.3	450.6	2B	・　・			B
452	P11	II	凝灰岩	8.1	7.3	3.8	311.7	1B	・　・			A
453	P11	II	凝灰岩	12.1	6.9	5.0	567.2	2C	1・0・1	1		A
454	P11	VI	凝灰岩	13.5	6.7	5.7	650.3	2C	・　・			B
455	P11	VI	砂岩	8.3	7.7	4.6	446.2	1B	・　・		123-140	A
456	P11	VI	凝灰岩	(8.2)	10.0	4.3	(453.2)	—	2・0・0	1		A被熱
457	P11	VI	凝灰岩	10.1	8.6	4.1	442.7	2B	1・0・0	1		A
458	P11	VI	凝灰岩	14.8	8.0	5.6	852.2	2C	1・1・0	12		A
459	P11	VI	凝灰岩	13.6	6.9	6.2	938.2	3D	1・1・0	1	124-158	A
460	P11	VI	凝灰岩	9.7	8.9	4.3	470.8	1B	1・1・0	1		A
461	P11	VI	凝灰岩	(7.6)	6.0	4.7	(231.2)	2C	・　・			A特殊磨石
462	P11	VI	凝灰岩	7.2	7.0	3.6	215.5	2B	1・1・0	12		
463	P11	VI	凝灰岩	(10.2)	5.5	4.6	(361.7)	2A	・　・			A
464	P11	VI	砂岩	10.5	8.1	4.0	618.5	3D	1・0・0	1	124-159	B
465	P11	VIII	凝灰岩	(11.3)	8.7	5.7	(811.6)	—	・　・			B
466	P11	II	凝灰岩	10.4	8.4	4.9	517.1	2B	1・0・0	1		
467	P11	II	凝灰岩	15.6	6.8	4.8	709.3	2B	・　・			B
468	P11	II	凝灰岩	(9.1)	7.1	5.9	(435.4)	—	・　・			A
469	P11	IV	凝灰岩	(10.5)	7.5	5.8	(621.6)	—	・　・			A
470	P11	VI	凝灰岩	(7.9)	(9.3)	4.6	(420.4)	—	・　・			A
471	P11	VI	凝灰岩	10.5	9.2	5.0	601.7	2C	1・0・0	1		
472	P12	III	凝灰岩	10.0	6.7	5.3	493.0	2B	・　・			A
473	P12	III	凝灰岩	10.1	6.5	5.4	448.1	2B	・　・			A
474	P12	V	凝灰岩	10.0	9.7	3.3	362.0	1B	・　・			A
475	P12	VI	凝灰岩	10.1	7.0	4.2	397.8	2B	1・0・0	1		A
476	P12	II	凝灰岩	9.8	9.8	4.8	580.4	1B	・　・			B
477	P12	III	凝灰岩	9.5	7.7	4.0	315.1	2B	1・0・0	1		A
478	P12	V	凝灰岩	10.0	8.3	4.0	457.0	2B	1・0・0	1		A
479	P12	V	凝灰岩	9.5	5.9	4.5	266.7	4	2・0・0	2		
480	P12	VI	凝灰岩	(6.3)	(8.0)	(5.7)	(269.5)	—	・　・			A
481	P12	VI	凝灰岩	8.0	6.5	4.1	221.3	2B	1・1・0	12		A
482	P12	VI	凝灰岩	(8.8)	5.6	5.7	(354.4)	—	・　・			A
483	P12	VI	砂岩	13.0	7.9	5.3	659.6	4	・　・			B
484	P12	VI	凝灰岩	9.2	8.4	5.3	508.6	2B	1・1・1	1		
485	P13	III	凝灰岩	(8.2)	8.0	3.6	(255.7)	—	・　・			A
486	Q10	VI	凝灰岩	8.5	6.5	4.4	285.2	2B	・　・			A
487	Q10	VIII	凝灰岩	9.5	7.8	3.8	331.4	2B	・　・			A
488	Q10	II	凝灰岩	(9.5)	7.9	4.3	(298.8)	—	・　・			A
489	Q10	II	凝灰岩	12.3	4.4	3.0	220.9	2C	2・1・0	1		B
490	Q10	II	凝灰岩	(9.4)	(7.3)	6.2	(507.7)	2B	・　・			A
491	Q10	VI	凝灰岩	(4.3)	(6.5)	(4.0)	(105.3)	—	・　・			B
492	Q10	V	凝灰岩	11.3	8.8	5.4	663.7	2B	1・1・0	1		A
493	Q11	II	凝灰岩	9.1	8.4	3.7	297.0	1B	1・1・0	2		
494	Q11	II	凝灰岩	7.4	6.4	4.7	233.8	2B	1・1・0	2		
485	Q11	VI	凝灰岩	9.5	8.8	3.5	292.4	1B	1・1・1	2		
496	R10	II	凝灰岩	9.0	7.6	4.2	360.7	2B	1・1・2	2		
497	R10	III	凝灰岩	9.5	7.0	4.3	359.0	2B	1・1・0	1		A
498	SX1	II	凝灰岩	7.6	7.4	3.4	244.7	1B	・　・			A
499	SX1	II	凝灰岩	8.3	6.0	2.6	141.4	2B	1・1・0	1		B
500	SB2		凝灰岩	(11.4)	10.0	5.6	(826.0)	2B	・　・			A
501	SB2		凝灰岩	11.0	9.5	4.5	549.5	2B	・　・			B
502	SB2		凝灰岩	(7.2)	(6.8)	6.1	(326.1)	—	・　・			B
503	SB2	II	凝灰岩	9.2	7.9	5.6	533.2	2B	1・1・0	1		A
504	SB2	II	凝灰岩	9.1	8.6	4.8	475.0	1B	1・0・0	1	41-152	
505	SB2	II	凝灰岩	13.0	7.4	4.9	714.3	2B	・　・		41-153	A
506	SB2	II	凝灰岩	9.5	6.7	3.4	285.6	2B	・　・			A
507	SB2		凝灰岩	(6.8)	(6.5)	(6.2)	(274.1)	—	・　・			A
508	SB2		凝灰岩	9.6	7.9	6.0	483.0	2B	1・1・0	2		A
509	SB2		凝灰岩	11.1	8.6	6.1	712.0	2B	・　・			A
510	SB2		凝灰岩	12.4	7.0	6.2	774.9	2D	・　・			A
511	SB2		凝灰岩	7.7	6.3	4.6	275.4	2B	1・1・0	2		
512	SB5		凝灰岩	9.4	5.9	4.0	273.4	2B	1・0・0	1		
513	SB6		凝灰岩	9.1	8.6	3.6	369.3	1B	・　・			A
514	SB6		凝灰岩	12.0	6.7	5.3	564.8	2B	・　・			A
515	SB6		凝灰岩	9.6	8.0	4.3	446.5	2B	1・0・0	1		B
516	SB6		凝灰岩	8.7	7.6	4.4	380.2	2B	1・0・0	1	46-55	
517	SB6		凝灰岩	11.9	6.2	5.9	573.0	4	・　・			A
518	SB7		凝灰岩	11.5	8.4	4.8	564.4	2B	1・0・0	1		A
519	SB7		凝灰岩	12.7	7.6	5.1	592.3	2B	・　・			A
520	SB7		凝灰岩	10.1	8.2	5.1	658.2	2D	1・1・0	1		

番号	出土区	層位	石　材	長　さ	幅	厚　さ	重　さ	分　類			挿図番号	備　考（磨面の状況）
								形態	凹みの数と形状			
521	SB 7		凝灰岩	7.2	6.6	3.4	192.1	1 B	・　・			A
522	SB 7		凝灰岩	9.0	8.5	3.9	(391.2	1 B	・　・			A
523	SB 7		凝灰岩	6.7	5.1	2.6	100.4	2 B	・　・			A
524	SB 7		凝灰岩	8.5	(7.8)	4.7	(332.8)	2 B	1・0・0	1		
525	SB 7		凝灰岩	10.9	8.8	4.9	560.8	2 B	2・0・0	2		B
526	SB 8		凝灰岩	14.1	7.1	5.5	789.1	2 C	・　・			A
527	SB 8		凝灰岩	(8.1)	7.6	5.7	(411.8)	—	1・0・0	2		A
528	SB 8		凝灰岩	8.9	7.4	4.4	384.3	2 B	1・0・0	1		A
529	SB 8		凝灰岩	10.2	7.4	4.0	374.1	2 B	・　・			A
530	SB 8		凝灰岩	8.5	6.4	3.5	183.6	2 B	2・1・0	2	55-104	
531	SB 8		凝灰岩	13.3	7.9	4.9	655.8	2 B	・　・			A
532	SB 8		凝灰岩	(9.7)	7.4	4.8	(386.6)	—	・　・			B
533	SB 9	II	凝灰岩	9.5	8.6	5.9	645.9	1 B	1・0・0	1		A
534	SB 9	II	凝灰岩	(8.2)	(6.7)	4.6	(315.0)	—	1・1・0	2		
535	SB 9		凝灰岩	12.0	7.2	5.2	650.7	2 B	2・2・0	1	124-153	B
536	SB 9		凝灰岩	15.2	7.1	6.3	818.0	4	・　・			A
537	SF 1		凝灰岩	10.2	5.5	4.0	255.6	2 D	2・0・0	1		A
538	SF 2		凝灰岩	11.6	10.8	4.2	662.2	1 B	・　・			A被熱
539	SF 2		凝灰岩	12.3	10.7	4.4	788.4	2 B	・　・			A被熱
540	SF 3		凝灰岩	10.1	8.9	5.0	598.7	2 B	・　・			A被熱
541	SF 3		凝灰岩	15.1	10.6	5.2	1200.0	4	・　・			A被熱
542	—		凝灰岩	9.3	6.9	2.9	224.6	2 B	1・1・0	1		A
543	—		凝灰岩	8.4	6.7	4.5	323.7	2 B	2・1・0	1		
544	—		凝灰岩	10.9	8.9	5.2	808.9	2 B	・　・		123-147	B被熱
545	—		凝灰岩	8.5	7.7	3.9	231.1	4	2・1・0	2		
546	—		凝灰岩	9.7	7.7	4.4	423.0	2 B	2・1・0	2		B
547	—		凝灰岩	9.2	7.7	4.6	419.1	2 B	1・1・0	1		A
548	—		凝灰岩	13.2	7.8	5.7	775.9	2 C	・　・		124-154	A特殊磨石
549	—		凝灰岩	11.0	8.6	5.3	610.9	2 B	・　・			B被熱

第5節　その他の遺物

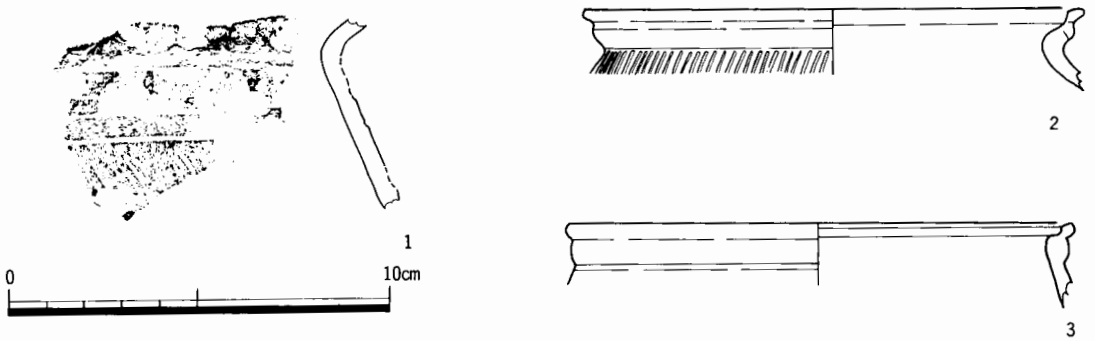
1　弥生土器（第128図1、図版48）

弥生時代前期のいわゆる遠賀川系の弥生土器である。1点のみ確認された。当遺跡に隣接する丸山遺跡では弥生中期末から後期初頭の中部高地に系譜をたどれる土器が数点検出されている。

2　土師器（第128図2・3、図版48）

いわゆるS字状口縁の土師器である。4世紀から5世紀前葉にかけて伊勢湾沿岸に分布の中心を置く土師器である。この時期の遺物として確認されたものはこの2点である。

（伊藤　秀雄）



第128図　包含層出土弥生土器・土師器

３　土製品

本遺跡からは土偶５個体、土製装飾品２点、有孔土製品１点、焼成粘土塊６点が出土している。このうち一部はすでに別途記載した。

土偶（第129図１～５、図版54）

１はＩ６区縄文晩期遺物包含層より出土した。頭部片である。耳朶貫通孔を有する。孔は直径3.5～４㎜ほどで、孔内に残る砂粒、粘土の引きずりから、左右ともに表から穿孔がなされたことが判る。鼻は大きめの粘土を貼付して表出されているが、高さはなくのっぺりとしている。鼻穴が刺突により表現されているが、貼付された粘土は頭部まで伸びており、一部粘土が剝離した痕跡が認められる。これより、粘土は表出に限って貼付されたものではなく、本土偶においても口や顎といって表現がなされていた可能性が考えられる。また本来目のあるべき箇所には、横位楕円形に穴が開けられている。穴は幅２㎜ほどのヘラ状の工具を用いて作出されており、実測図正面からみて右から左、あるいは表から裏に砂粒、粘土の引きずれが観察できる。穴の断面は凹レンズ状を呈するが、擦痕の残り方から穿孔は正面側からなされた可能性が高い。後頭部側の頸部にはゆるやかな粘土の隆起が認められ、同箇所に横位のヘラナデ調整痕が明瞭に残っている。これは土偶の製作過程に関わるものであると考えられるが、おそらく粘土芯（それが頭部に属するものか、胴部に属するものかを判断することはできない）に粘土を付け足して頭部を形成したと思われる。にぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。焼成普通。

２はＦ12区晩期遺物包含層より出土した。右脚部片と思われる。破損面に直径６㎜ほどの縦位貫通孔が認められる。全体に磨耗気味ではっきりしない箇所もあるが、孔はかろうじて足裏に抜けている。また破損面の観察から、脚部と足部は別個の粘土塊から成り、脚部粘土塊に対して足部粘土塊をつま先をつくる要領で前よりに合わせてあることが判る。足部に幅１㎜ほどの工具圧痕が認められたが、これが表現に関わる意図的なものであるのか否かの判断はできなかった。足部の整形は丁寧ではない。褐色（10YR4/5）を呈する。焼成普通。

３はＥ12区晩期遺物包含層より出土した。遺物整理過程で２点が接合し、本類と判明したもので、出土状況の詳細は不明である。右脚部に移行する部分の胴部破片であると思われるが、部位の詳細は不明である。板状のつくりで前後の厚みは約1.5㎝、短軸３㎜×長軸８～９㎜ほどの縦位貫通孔を有する。孔の断面は楕円形を呈するが、これが穿孔に用いた工具形態によるものであるのか、穿孔の仕方によるものであるのかの判断はできなかった。また孔内には開口部付近で上向きに砂粒の引きずれが認められたが、孔内はやや痛みが目立ち、これが穿孔方向に一致するものであるとの判断はできない。文様構成は側面に沿って２本、股間のカーブに沿って２本浅い沈線が走り、その間に３本の沈線が斜めに引かれているが、左右シンメトリーだとすれば「へ」の字に描かれていたのではないかと思われる。赤褐色（5YR4/6）を呈する。焼成普通。

４はＦ12区晩期遺物包含層より出土した。遺物整理過程で本類と判明したもので、出土状況の詳細は不明である。脚部片であるが左右は定かではない。にぶい黄橙色を呈する。焼成普通。

５はＥ13区晩期遺物包含層より出土した。遺物整理過程で本類と認定したものであるが、詳細は不明である。土偶の四肢部分の破片と思われる。にぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。焼成普通。

有孔土製品（第129図6、図版54）

6はG8区後晩期遺物包含層より出土した。楕円形を有し、長軸方向に穿孔されている。孔は直径約5～6㎜である。断面は球形に近い。管状土錘の可能性がある。本土製品は約2分の1を欠損しているが、現存部分の重量は11.1ｇである。にぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。焼成普通。

焼成粘土塊（第129図9・10、図版54）

7はQ10区早期遺物包含層より出土した。全体に磨耗しており、詳細不明である。87.9ｇ。

8・9は粘土紐の切れ端といった感じのものである。8はN7区中期遺物包含層より出土した。指で押さえたような痕が認められる他、粘土紐をつないだ痕が明瞭に残る。焼成の具合も良く、にぶい黄色（2.5Y6/3）を呈する。6.4ｇ。9はL8区中期遺物包含層より出土した。端に粘土を折り返した（あるいは合わせた）ような箇所が認められる。SB3から複数の粘土紐をゆるやかにねじったものが出土しているが、本品も明確な剝離痕は見られないが、所謂“ねじり棒”などの土器装飾部分に相当するものである可能性が高い。にぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。1.5ｇ。

10は粘土の折り重なりが明瞭なものである。N7区中期遺物包含層より出土した。にぶい赤褐色(5YR5/4）を呈する。6.8ｇ。　（古田　奈緒子）

4　木杭（第130図、図版6）

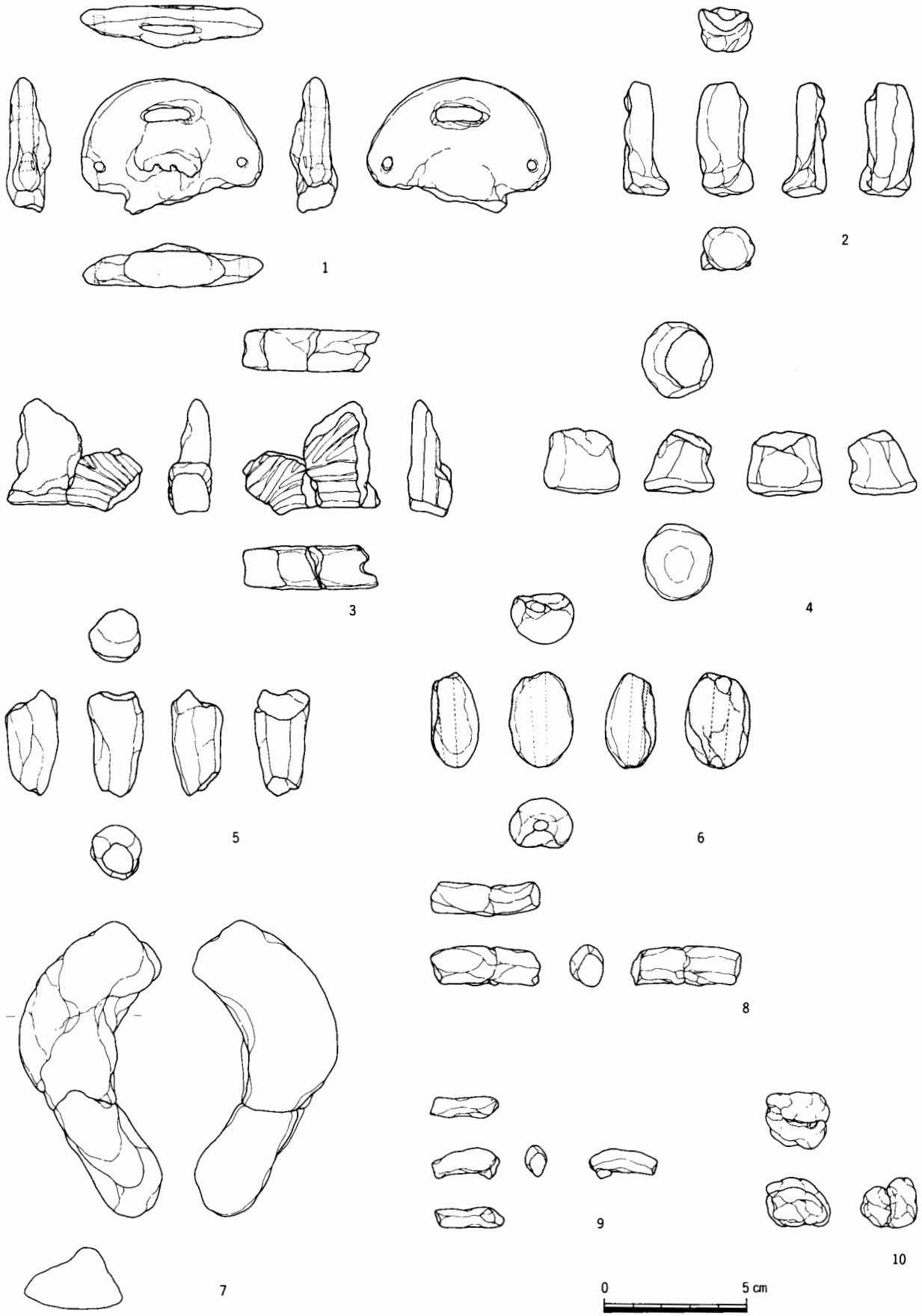
出土地点はM9区で水田（沼田）下約170㎝で検出された。楢か櫟の木を縦に中央で半割してあり長さ43.5㎝、厚さ12.5㎝、幅19.0㎝である。年輪ははっきり見えるが樹齢を数えることは困難である。半割された面には、磨製石斧で加工されたと思われる痕跡を数か所確認することができる。杭の先は斜めに削られ尖っており、ここでも加工された痕跡をうかがうことができる。

樹皮も表面に3分の2程残存していて、保存度は数千年を経過したと思えないほど良い。ただ、頭部は摩滅したと思われ滑らかな状態である。時期は近くから出土した土器片より、縄文中期後葉であると考えられる。

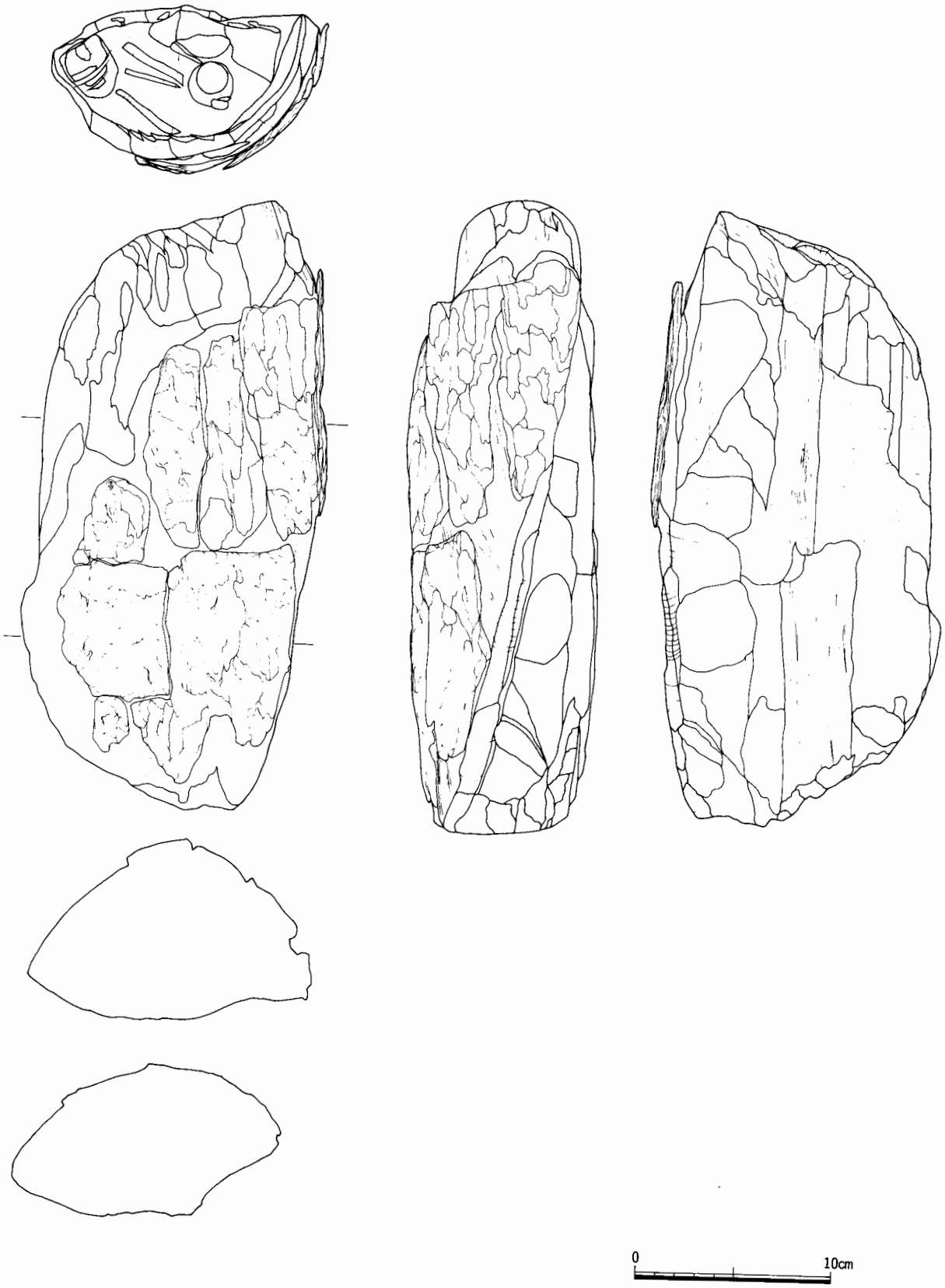
帝京大学山梨県文化財研究所保存修復研究室にて、保存処理をしていただいた。　（野村　宗作）

5　木製品（第131図、図版54）

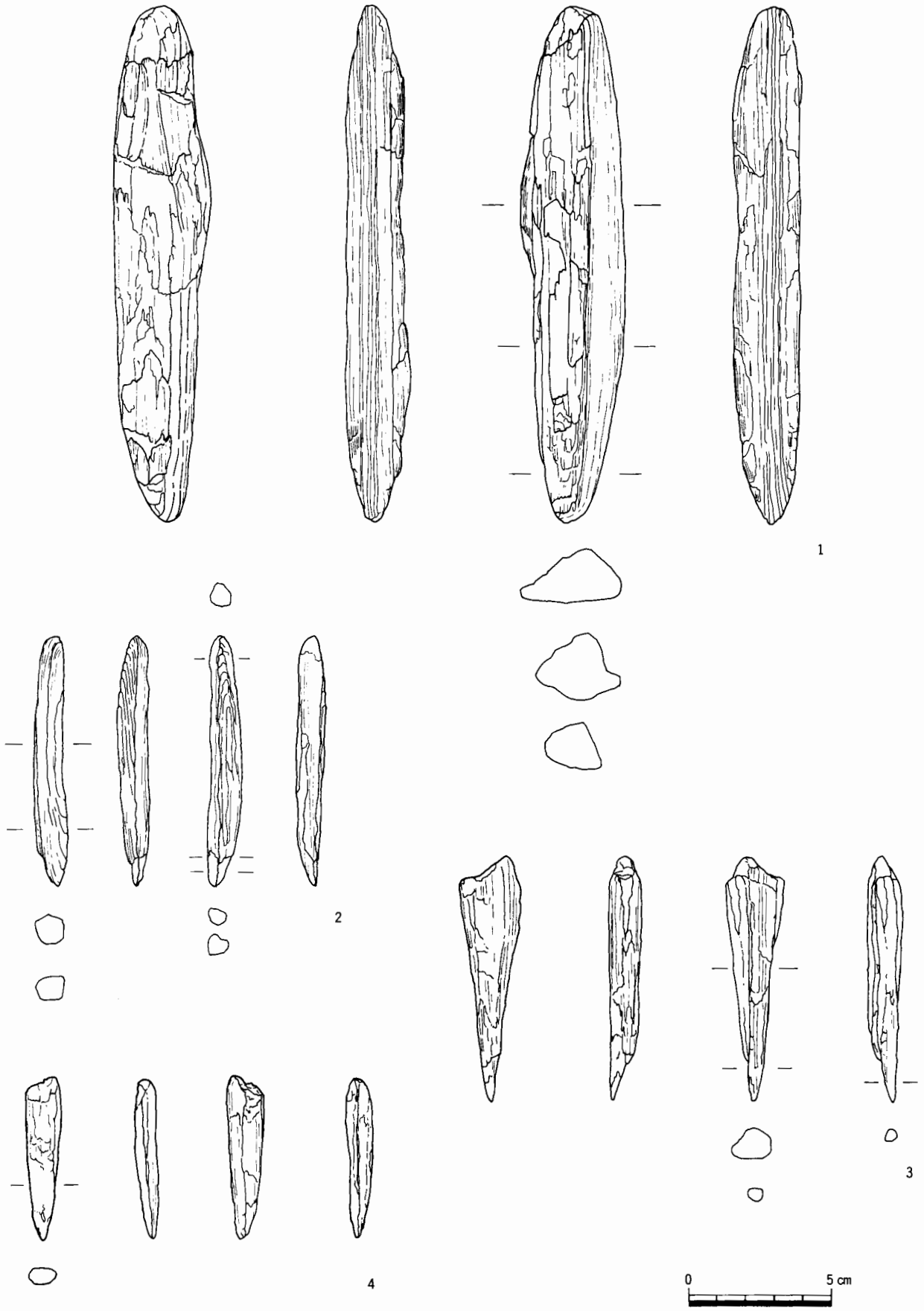
G12区の砂礫層より、縄文晩期の土器とともに木片が出土した。いずれも加工痕が認められる。1は長さ18.2㎝、幅3.6㎝、厚さ2.3㎝で、断面三角形である。2は長さ8.8㎝、幅1.2㎝、厚さ1.1㎝、3は長さ8.6㎝、幅2.1㎝、厚さ1.1㎝、4は長さ5.8㎝、幅1.3㎝、厚さ0.9㎝である。　（上嶋　善治）



第129図　包含層出土土製品



第130図　木杭



第131図　包含層出土木製品

6　植物遺体

(1)　はじめに

岐阜県文化財保護センター飛騨出張所より調査の機会を与えられた植物遺体は、同県大野郡丹生川村牛垣内遺跡より1995年に発掘されたものである。資料は第7表に記す19件であるが、それらは2群に分けられる。

第1群は1件で第7号住居跡出土資料、第2群は18件で遺構外出土資料である。それらの時期は縄文中期後半である。

(2)　植物遺体の種類

判明した植物遺体は、次の4種の種子類である（図版55）。

1．くるみ科オニグルミ　Juglans mandshurica subsp. Sieboldiana Maxim.
2．ぶな科クリ　Castanea crenata Sieb et Zucc.
3．ぶな科コナラ属　Quercus sp.
4．とちのき科トチノキ　Aesclus trubinata Blume

4種のうちいわゆるドングリ類であるコナラ属のみは、西南日本の照葉樹林帯にも種を異にして分布するが、いずれも東北日本の落葉広葉樹林帯の代表的な樹木であり、縄文時代の大事な食料資源であった。クリは甘みがありすぐ食べることができ、縄文早期より食されている。これに対しオニグルミは、一定期間乾燥させる必要があるが、旧石器時代後期より食されている。

ドングリ類の大部分、特に東北日本を主に分布する種類（クヌギ・ナラ類など）は、アク抜きをしないと食べられない。そして近年の研究では縄文草創期より食されているのであり、そのアク抜きのために縄文土器が発達したと考えられるようになった(渡辺1987)。またトチの実はアク抜きはドングリ類より難しく、その技術が習得されて食用化できるようになったのは縄文中期からである。以後現代に至るまで、程度の差ことあれ重要なデンプン源であった。飛騨地方においても、トチモチなどの郷土食としてその伝統が今日まで伝わっている。

4種のうちオニグルミ・クリは多いが、トチ・コナラ属は少ない。その数量は第7表に示すとおりである。

(3)　若干の検討

もっとも多いクリは、第7号住居跡ほぼ床面にやや集中して出土した。このうち完形品は7点あり、遺構外からも1点出土した。それらのサイズは小型で、平均の高さ1.44cm、幅1.63cm、厚さ0.93cmであるが、破片の中には高さ1.84cm、幅2.40cm以上のものもみられ注目される。

また、平均重量は0.81gであり、第7号住居跡の破片総量をこれで割ると、34個体以上の存在が推定される。

(4)　おわりに

以上の植物遺体は、縄文時代の重要な食料資源であった。特にトチやドングリ類は主食的な位置を占めていたし、クリやオニグルミもそれに準じる位置を占めていたのである。ただ本遺跡のばあい、前者の出土が意外に少ないことは注意されることである。

資料の残存条件には種々な要因があり、出土量と食された量とが常に対応しているとは考えられない。しかし幸いにもそれらの多くはアク抜きを必要とする種類であり、今後そのアク抜きなどの加工・

調理に関連する遺構・遺物との関係が、重要な検討課題になってくるであろう。そのような検討を経て、残りにくいクズ・ワラビ・ウバユリなどについてもその利用状況が明らかになり、縄文時代の食料問題がもっと正確に理解されるようになると考えられる。　（渡辺　誠）

引用文献

渡辺　誠，1987：日韓におけるドングリ食と縄文土器の起源。名古屋大学文学部研究論集，史学33．1～15頁。名古屋。

第7表　植物遺体一覧表（単位：g）

番号	地区	層位	日付	オニグルミ	クリ	コナラ属	トチ	トチ種皮	備考	図版
	7号住			2.55	31.92	0.24	1.36	0.04	クリ完形7を含む	55―1～11
12963	D12	III	950606	0.59						
12202	E13	II	940907				0.87		混入	
16014	L7	II	950726				3.05	0.37		同15・16
19736	L7	II	950929		0.44					
19738	L7	III	950929		0.59					
15367	M6		950719		1.64					
15305	M6	II	950719		1.32				クリ完形1	同14
15306	M6	II	950719		0.43					
15509	M6	II	950724		1.07					
15369	M7		950719		0.32					
14040	M7	III	950629		1.94					
14307	M7	III	950630	0.64						同12
14062	M7	III	950629		0.20					
15804	M8	II	950725					0.29		
16665	N7	III	950801	0.80						同13
12965	O12	III	950606	1.30						
12966	O12	III	950606		0.82					
	P22			1.80						
計				7.68	40.69	0.24	5.28	0.70		

第8表　クリ計測値一覧表（単位：cm、g）

	高さ	幅	厚さ	重量	図版番号
7号住1	1.59	1.80	1.24	0.74	55―1
同　2	1.30	1.84	1.02	1.25	同　2
同　3	1.52	1.32	0.80	0.44	同　3
同　4	1.35	1.59	0.81	0.60	同　4
同　5	1.46	1.76	0.97	0.83	同　5
同　6	1.26	1.43	0.93	0.64	同　6
同　7	1.32	1.56	0.68	0.65	同　7
M 6 II	1.70	1.75	1.01	1.32	同　14
平　均	1.44	1.63	0.93	0.81	

第５章　自然科学的分析

自然科学的分析としては、第10号住居跡の埋甕内外の土壌試料について脂肪の分析を行った。以下はその報告である。

牛垣内遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科　　中野益男
㈱ズコーシャ総合科学研究所　　中野寛子、長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと[1]、古代遺跡から出土した約２千年前のトウモロコシ種子[2]、約５千年前のハーゼルナッツ種子[3]に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した[4]。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合を持つ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて牛垣内遺跡から出土した土器の性格を解明しようとした。

１．土壌試料

岐阜県大野郡丹生川村に所在する牛垣内遺跡の第10号住居跡入口付近から出土した埋甕内外の土壌試料を分析した。この土器は縄文時代中期後葉のものと推定されており、上部口径が22.5cm、底部口径が10cm、高さが27cmくらいの大きさであった。遺跡内での第10号住居跡と住居内での埋甕の出土地点および埋甕内外での試料採取地点を第132図-１～２-　に示す。試料No.１を埋甕内底部から、No.２を

住居跡内ではあるが埋甕から30cmくらい離れた地点から、それぞれ採取した。

2．残存脂肪の抽出

土壙試料717ｇと227ｇに３倍量のクロロホルム―メタノール（２：１）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム―メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに２回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に１％塩化バリウムを全抽出溶媒の４分の１容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を第９表に示す。抽出率は試料№１が0.0034％、試料№２が0.0015％、平均0.0025％であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100％の範囲内のものではあるが、低めであった。しかし、埋甕内外の残存脂肪の抽出率を比較すると埋甕内試料№１の方が、埋甕外の試料№２よりも約２倍高かった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3．残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに５％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で２時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサン―エチルエーテル―酢酸（80：30：１）またはヘキサン―エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した[5]。

残存脂肪の脂肪酸組成を第133図に示す。残存脂肪から９種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：０）、ステアリン酸（C18：０）、オレイン酸（C18：１）、リノール酸（C18：２）、アラキジン酸（C20：０）、ベヘン酸（C22：０）、リグノセリン酸（C24：０）の７種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー―質量分析により同定した。

試料中での脂肪酸組成パターンを見ると、２試料がほぼ同一の組成パターンを示していた。このうち炭素数18までの中級脂肪酸は、主要な脂肪酸がパルミチン酸で、次いでオレイン酸、ステアリン酸の順に多かった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら３つの合計含有率が試料№１で約27％、試料№２で約25％であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノ

セリン酸の高級脂肪酸3つの合計含有率は約4～10%であるから、2試料中での高級脂肪酸含有量は多かった。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分が含まれている場合とがある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかはコレステロールの分布割合によって決めることができる。

以上、牛垣内遺跡の試料中にはパルミチン酸が主要な脂肪酸として含まれており、高級脂肪酸も多いことがわかった。

4．残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン―エチルエーテル―酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン―無水酢酸（1：1）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第134図に示す。残存脂肪から23種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー―質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No.1に約7%、No.2に約10%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2～6%分布している。従って、試料No.2のコレステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土中でよりも若干多かった。

植物由来のシトステロールは試料No.1に約23%、No.2に約14%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、2試料中でのシトステロール含有量は通常の遺跡出土土壌の植物腐植土中でよりも少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールはカンペステロールが試料No.1に約4%、No.2に約3%、スチグマステロールがNo.1に約8%、No.2に約6%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1～10%分布している。従って、試料中に含まれているカンペステロール、スチグマステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは2試料中に1%前後分布していた。これは土壌微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.1に約3%、No.2に約2%分布していた。コプロスタノールは通常の植物腐植土壌中には分布してないが、1%程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールはその分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合があるが[6]、今回は含まれていても約3%以下のため、それらの判定はできなかった。しかし、コプロスタノールが含まれているということは、試料中に哺乳動物由来の脂肪が残存している可能性があることを示唆している。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6

以上[7]、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる[8,9]。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を第10表に示す。表からわかるように、分布比は試料№.1が0.30、№.2が0.75であった。従って、試料№.2には動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性があることを示唆している。

以上、牛垣内遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールが埋甕外試料№.2に若干多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比は埋甕外試料№.2が0.6以上を示し、この試料中に動物遺体または動物由来の脂肪があまり残存していることを示唆していた。埋甕内試料№.1はコレステロール含有量はやや少ないが、コプロスタノールが分布することから、哺乳動物遺体の存在の痕跡が認められる。

5．脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪酸の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各資料の類似度を調べた。同時に同じ岐阜県内の遺跡で出土土壌に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪試料と類似していると判定した家の下遺跡[10]、西田遺跡[11]、出土した埋甕に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪、もしくはヒトの胎盤試料と類似していると判定した岡前遺跡[12]、長野県屋代遺跡[13]、静岡県内の遺跡で出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した原川遺跡[14]、出土土壙を土壙墓と判定した兵庫県寺田遺跡[15]、ヒトの体脂肪、出土土壙を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡[16]、ヒトの骨油、イノシシ、ニホンジカ、タヌキ、イヌのような動物、モズ、ツグミのような野鳥、クリ、クルミのような植物試料など、各種遺跡試料や現生動植物試料などに残存する脂肪酸の類似度とも比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが第135図である。

図からわかるように、牛垣内遺跡の2試料は岡前遺跡、西田遺跡、屋代遺跡の試料と共に相関行列距離0.05以内でA群を形成し、非常によく類似していた。他の対照試料はB～G群を形成した。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.1の所にあり、よく類似していた。また、A～C群も相関行列距離0.15以内の所にあり、互いに類似している。

以上、牛垣内遺跡の試料中に残存する脂肪は、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの胎盤試料、イノシシ、ニホンジカのような動物試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。

6．脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16パルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比較をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒトの胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動

物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を第136図に示す。図からわかるように、2試料は第1象限内の原点から離れたY軸に近い所に分布した。この分布位置は試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等の特殊な部分に由来することを示唆している。

以上、牛垣内遺跡の試料中に残存する脂肪は高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等の特殊な部分に由来することがわかった。

7．総括

牛垣内遺跡から出土した土器の性格を判定するために、埋甕内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料中の主要な脂肪酸はパルミチン酸で、高級脂肪酸も多いことがわかった。この高級脂肪酸ステロール分析の結果も考え合わすと、高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等の特殊な部分に由来するものと思われる。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果クラスター分析からは、試料中に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの胎盤試料、イノシシ、ニホンジカのような動物試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。種特異性相関からは試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等の特殊な部分に由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールが埋甕外試料に若干多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比は埋甕外試料が0.6以上を示し、この試料中に動物遺体または動物由来の脂肪が残存していることを示唆していた。埋甕内試料No.1はコレステロールの分布はやや少ないが、コプロスタノールが分布することから哺乳動物遺体の存在の痕跡が認められる。

以上の成績から、牛垣内遺跡の住居跡内の埋甕に残存している脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの胎盤試料、イノシシ、ニホンジカのような哺乳動物試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。土器の出土地点や形状、大きさを考え合わすとヒトの胎盤を埋納した可能性も推測される。動物遺体の明確な確認のためには、抗原抗体反応による免疫学的手法を用いて試料を精査する必要がある。また、埋甕の内外の試料の傾向に殆ど差がなく、埋甕外試料の方にも動物脂肪が残存していたのは、埋甕外試料採取地点が住居跡内のため、生活に伴う動物脂肪が混入してきたと推測される。

参考文献

(1) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle:「Food identification of samples from archaeological sites」,『Archaeo Physika』, 10巻、1979、pp260。

(2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold:「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」,『Nature』, 292巻、1981、pp146。

(3) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle:「Analyse frühgeshichtlicher Gefä βinhalte」,『Naturwissenschaften』, 70巻、1983、pp33。

(4) 中野益男：「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、1984、pp124。

(5) M. Nakano and W. Fischer:「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」,『Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem』, 358巻、1977、pp1439。

(6) 中野益男：「残留脂肪酸による古代復元」、『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』、田中　琢、佐原　眞編、クバプロ、1995、pp148。

(7) 中野益男、伊賀　啓、根岸　孝、安本教傅、畑　宏明、矢吹俊男、佐原　眞、田中　琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp40。

(8) 中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」、『真脇遺跡―農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団、1986、pp401。

(9) 中野益男、根岸　孝、長田正宏、福島道広、中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」、『ヘロカルウス遺跡』、北海道文化財研究所調査報告書、第３集、1987、pp191。

(10) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男：「家の下遺跡の土壙に残存する脂肪の分析」、『未発表』、岐阜県吉城郡宮川村教育委員会。

(11) 中野益男、中野寛子、長田正宏：「西田遺跡から出土した土壙に残存する脂肪の分析」、『未発表』、㈶岐阜県文化財保護センター。

(12) 中野益男、中野寛子、長田正宏：「岡前遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」、『未発表』、㈶岐阜県文化財保護センター。

(13) 中野益男、中野寛子、菅原利佳、長田正宏：「屋代遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」、『未発表』、㈶長野県埋蔵文化財センター。

(14) 中野益男、幅口　剛、福島道広、中野寛子、長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」『原川遺跡Ⅰ―昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』、第17集、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp79。

(15) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏：「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、兵庫県芦屋市教育委員会。

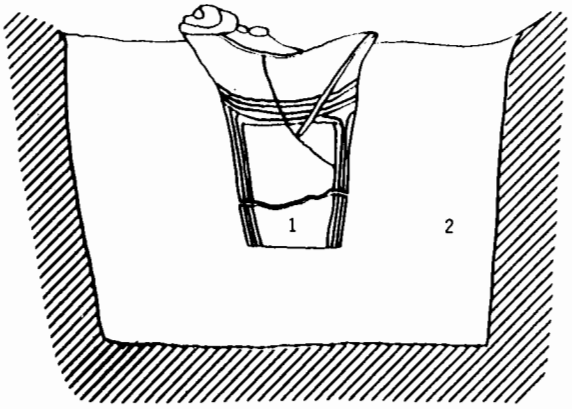
(16) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、宮城県教育委員会。

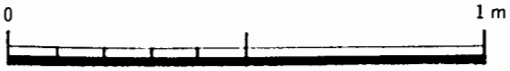
第9表　試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	埋甕内底部	717.3	24.1	0.0034
2	埋甕外	227.3	3.5	0.0015

第10表　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

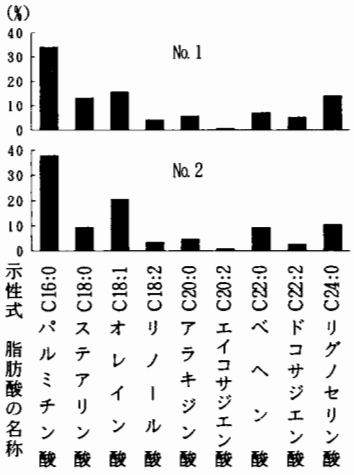
試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
1	7.01	23.31	0.30
2	10.35	13.87	0.75



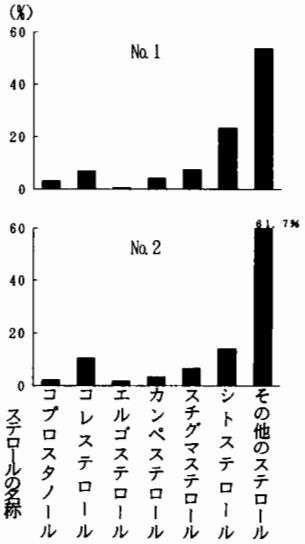


1　埋甕内底部
2　埋甕外部

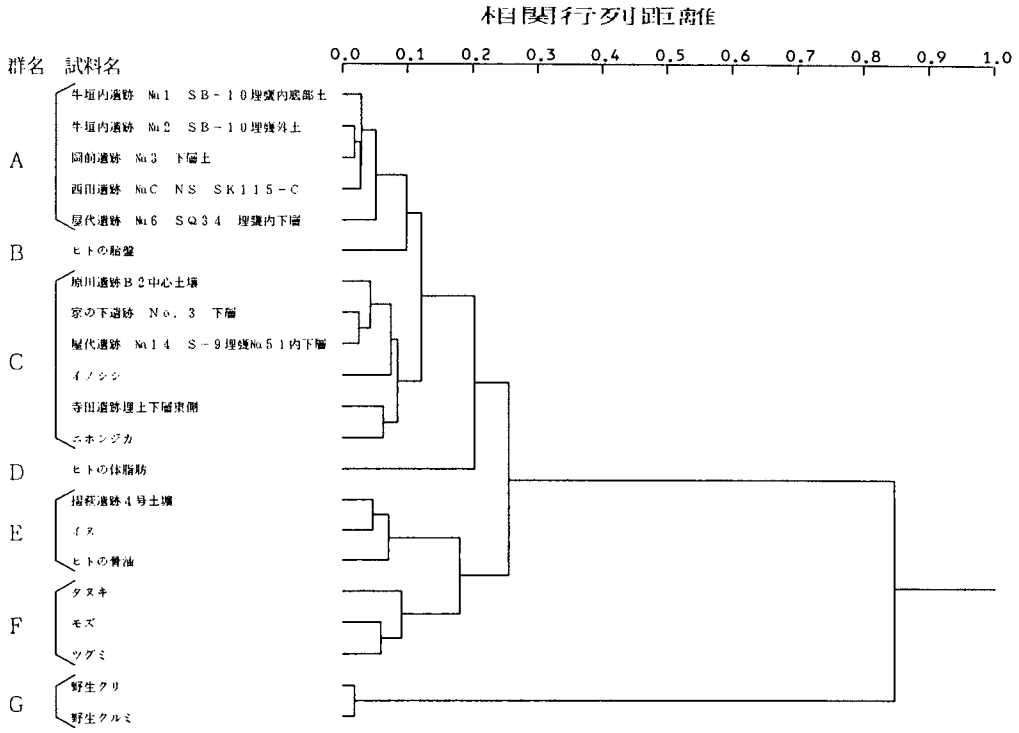
第132図　脂肪酸分析のため土壌を採取した場所



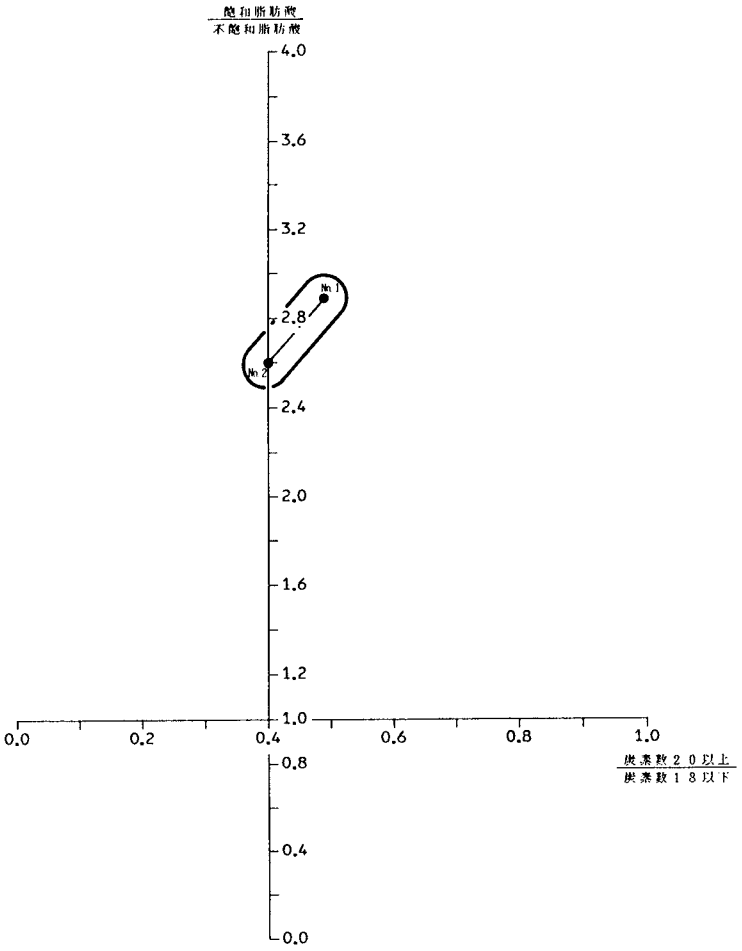
第133図　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成



第134図　試料中に残存する脂肪のステロール組成



第135図　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図



第136図　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

第6章　考　　察

牛垣内遺跡の発掘調査の概要は、前章までで述べた通りである。本章では、縄文早期および後晩期の土器の検討を行い、さらに、編布圧痕の土器に関する渡辺誠名古屋大学文学部教授の論考を掲載する。

第1節　押型文土器を中心とする縄文早期の土器群について

本遺跡出土の押型文土器群は多型式が混在しているが、B地点とC地点の地点差は明確である。また、近接する西田遺跡（谷口1997）で出土した押型文土器は細久保段階の土器＝ＩＡ－２類（以下西田Ｉ期と略す）と塞ノ神段階の土器＝ＩＡ－３類（以下西田II期と略す）がまとまりをみせていた。本遺跡ではこの時期は希薄であり、両遺跡の差が明確になってきた。以上の状況や周辺遺跡との比較などから、本遺跡の押型文土器の編年的位置づけはおおよそ下表に示すようになると考えられる[1]。13の細分は、本遺跡内や五味原遺跡群内、飛騨地方内における様相の違いを型式差ととらえて分類を試みたものであるが、資料不足である現段階では本遺跡は６時期に包括して考えている。

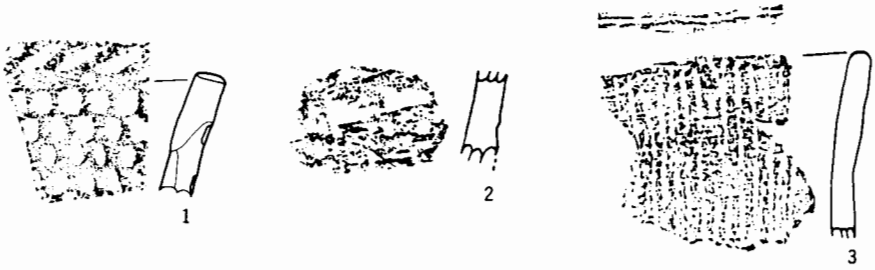
第11表　土器分類編年対応表

牛垣内遺跡の時期区分	牛垣内遺跡分類	対比型式		同類土器の認められる飛騨の遺跡	
				主な遺跡	その他の遺跡
１期	１ａ	大鼻			
	１ｂ	大川			江名子糠塚、四美湯屋
２期	１ｃ、１ｄ	神宮寺	立野	糠塚Ｂ	峰一合、宮ノ下
３期	（３ａ）	神並上層		牛垣内？	
	２ｂ　６類		樋沢Ｉ	牛垣内Ｉ	はつや
	２ａ			沢	はつや、宮ノ下、下田、中道、岡前
	２ｃ		樋沢II		宮ノ下
４期	３ａ			牛垣内II	宮ノ下
	３ｂ			宮ノ下	巾通り
	３ｃ	（黄島）	細久保	西田Ｉ	ひじ山、向野、水口、岡前
	３ｄ　６類			牛垣内III	西田
５期	４ａ		塞ノ神	西田II	岡前、鷹ノ巣Ｂ
６期	４ｂ　５類	高山寺		向畑	糠塚、堂之上、山本
	４ｃ	（穂谷）	相木	向畑	長瀬上野、堂之上、巾通り

１・２期はネガティブ系の押型文を主体とする時期である。

１ａ類は、器厚が薄いなど異質な点も多いが、角頭状の口唇に縄文を施文する特徴から、大鼻式に併行する可能性がある。他の押型文土器と地点を異にしている。飛騨地方においては類例をみない。

１ｂ類は大川式に併行する。類例は四美湯屋遺跡（萩原町）で表採された１点と[2]、江名子糠塚遺跡１号土坑で報告されている（田中ほか1992）土器片が可能性がある。



第137図　Ⅰ期の土器（１：四美湯屋　２・３：江名子糠塚）

同土坑内からは撚糸文土器が出土しており、原田氏はこの撚糸文を東海経由でもたらされた撚糸文（「若宮型」）とした上で「ほぼ撚糸文土器第４様式後半から５様式初頭、在地の土器では沢式併行に位置付けても大過ないものと考える」としている（原田1995）。この土坑の一括性は必ずしも高くないが、飛騨における早期前半の一様相を示した資料として両者の在り方は注目される。これらを搬入と考えると江名子糠塚遺跡の報告書にはこれに併行する在地の土器はみられない。本遺跡でも１ｂ類の１点も他の押型文土器群とは別地点より出土しており共伴土器は不明である。

１ｃ・ｄ類は舟形沈文など特徴としており神宮寺式に併行する。類似した土器は宮ノ下遺跡（吉朝1988）、峰一合遺跡（大江1995）、糠塚遺跡（吉朝ほか1982）に報告例がある。宮ノ下遺跡は本遺跡同様、混在の様相を呈しているが、峰一合遺跡と糠塚遺跡Ｂ区は市松文の形状などで相違点はみられるがほぼ立野式に併行すると考えられ[3]、両遺跡とも本遺跡２類以降の土器は出土していない。また、峰一合遺跡に近接する上ヶ平遺跡からは沢式土器のみが出土した住居跡と遺物包含層が確認されており[4]、両遺跡は共存しないと考えられる。

以上、１期は飛騨地方の遺跡をみても（現段階では）あくまで客体的な在り方をしており、２期になって増加傾向が看取される。しかし、依然として３期以降との確実な接点は不明である。

３期は沢式に代表される帯状施文の土器群の展開期である。２ａ類はいわゆる沢式土器である。飛騨では24遺跡から出土している。黒鉛を含まない帯状施文土器（２ｂ類）と併行に考えられることもある（片岡1980、中島1987など）。２ｂ類は帯状直交施文であるが、破片では識別は困難である。仮に原体幅以上の広い無文帯を安定してもつ土器を２ｂ類とすると、飛騨地方の上記の遺跡の中では２ｂ類が共伴する遺跡は少ない。沢遺跡では「黒鉛を含まないものは少ない」とされているほか、下田遺跡、岡前遺跡、上ケ平遺跡などでは帯状施文は黒鉛入りに限られる。にも関わらず、本遺跡の出土量は２ｂ類が２ａ類を凌駕している。また、本類は小型の山形文に限られ、直線的な山形文も多く存在する。一方、沢式には多くのバリエーションあること[5]、帯状施文でない施文方法も存在すること[6]、大振りな山形文も存在することなどが指摘される。飛騨では２ｂ類のみが出土した遺跡は管見にないが、飛騨における両者の在り方は系統差もしくは時間差と考えられ、２ａ類は２ｂ類をベースに飛騨で成立した土器群であると考えられるとともに、牛垣内遺跡はその発生期的様相を持つ。

２ｃ類は破片では西田Ⅰ期との峻別は困難である。また、これを単純に出土した遺跡はなく、３類に包括される可能性もある。現段階では樋沢Ⅱ式に比定させ、無文帯を残す牛垣内３期に含めた。

また、３ａ類に含めた平行線状文311等（第69図）は３ａ類と弁別される可能性がある。未完成な山形文を持つ共通性から２ｂ類に先行する可能性もある。

また無文土器の一部は３期に属する可能性がある。無文土器は押型文土器群２、３類と同地点同層

から出土した。比較的薄く砂粒の混入が少ない一群と、器壁が厚く砂粒の混入が多い一群に分けられる。前者はやや外反する器形などからも２ｂ類に共通点を見いだすことができる。向陽台遺跡(小林・会田1988) ３号住居では沢式土器に共伴する多量の無文土器が報告されているが、当地方の押型文遺跡では、はつや遺跡（吉朝1989）で無文土器が数点報告されて程度であり様相は不明瞭である。また、後者は４期の３ｄ類に胎土が類似しており、やや後出的である。

４期は重複しない全面施文へ移行した時期である。おおよそ細久保段階にあたる。

山形文が組成の大半をしめる３ａ類は飛騨地方では初見である。本類には施文周期をずらして作られた楕円文（328など）と、同一原体で山形文の周期をずらして作られた楕円文（335など）が存在する。また、単位の確立していない楕円文も存在する(341)。矢野氏が宮ノ下遺跡で指摘する(矢野1993)ように、ここに西田Ｉ期に通ずる楕円文の発生をみることができ、３ａ類は３ｃ類に先行する可能性を指摘できる。山形文が主体という点で福沢遺跡や神並遺跡上層との関連が窺えるが、楕円文の発生を考えると２ｂ・ａ類に後続する時期に位置付けられるであろう。

３ｂ類は宮ノ下遺跡に代表される。３ａ類で発生する楕円文は２単位の山形文から生まれたことから基本的に２単位の楕円文で、これが西田Ｉ期以降の押型文土器に受け継がれている。ところが３ｂ類は原体を３単位に刻む鋸歯文的な文様が主体となり、３単位の連珠文や密接な楕円文がみられる。３単位楕円文はその後の主流にはなっていないことから位置づけには検討を要するが、西田遺跡からも本遺跡３ｂ類が数点確認されていることや施文方法が３ｃ類に類似することなどから考えると、これらが異系統として共存していたかもしくは、３ｃ類にわずかに先行していた可能性がある。

３ｄ類は狭い無文帯を残して施文する土器もあるが重複傾向にあり、一部には繊維を含み、器厚が厚いなど、後出的要素が看取される。西田遺跡との比較から別類としたものである。

５・６期は文様の粗大化、器形の大型化などが顕著になる時期である。

５期は基本的には西田II期が該当するが、西田II期と比較すると粗大な文様が目立っておりより高山寺式的様相が強い。本遺跡では４ｂ類とは明らかに弁別される土器として６期に位置付けた。

６期は本遺跡では断片的であるため一括した。４ｂ類では内面に沈線を持つ土器の他、内面に連続刺突を持つ土器や、同様の胎土で表裏施文のある撚糸文土器の存在も注目される。向畑遺跡は該期の代表的な遺跡である。本遺跡とは様相が異なるため時期差も想定されるが、これに伴うと考えられる沈線文系の土器群は類似性からは近似した時期に位置付けられる。ただし、向畑遺跡の押型文土器は高山寺式と相木式が出土しており、沈線文系土器群も２群に分けられる。本遺跡は向畑遺跡の古段階に併行している沈線文系土器群が多い。また、西田遺跡からは牛垣内と向畑新段階とは異なる沈線文系土器群が出土している。以上の３タイプは何れも器形やモチーフなどからは田戸上層式に併行すると考えられるが、西田・牛垣内・向畑にみられる３タイプの様相は、押型文土器の異なる様相が反映されたものである可能性も高く、この点から西田→牛垣内・向畑古→向畑新の変遷が予察される。本遺跡の遺物出土量でみる限り６期の主体は押型文より沈線文である。飛騨における押型文系土器群の終末期から子母口式段階への移行を考える上で興味深い事実であり、該期の遺物が出土している中切上野遺跡（高山市)、的場遺跡（萩原町）など関連資料の報告が待たれる。

１）矢野健一氏の変遷案（矢野1993等）を基にしたものであるが、同氏より糠塚→沢→宮ノ下→西田と変遷す

る可能性が指摘された。

２）上原真昭（当センター）教示による。

３）矢野氏はこれを立野式百駄刈段階に併行させている（矢野1993）。

４）上ヶ平遺跡は現在発掘調査中。調査担当の八賀哲夫、伊藤秀雄（当センター）より教示を得た。

５）魚骨文・格子目文（はつや遺跡）、菱目文（岡前遺跡）などがある。

６）宮ノ下遺跡では口縁横位２条、頸部以下縦位にほとんど無文帯を残さず施文する例がある。

７）岡前遺跡では表面は褐色を呈し、断面のみで黒鉛の含有を確認できた土器もあった。

（谷口　和人）

第２節　縄文後晩期の土器について

Ⅳ群土器は、平成６年度に調査を行ったＡ地区で出土したものである。そのほとんどが縄文時代後期前半から晩期終末にかけてのものである。出土状況は第30図に示したようである。特に、北側の土器が集中して出土した地点は、黒色土層下が礫層で、湧水が見られた。そのため調査段階においては自然流路に沿っての土器の流れ込みを想定していた。整理段階での観察では土器の摩耗が少なく流れ込みとは考えにくいと判断した。この土器の集中の意味については該期の遺構が検出されなかったことから明確な断定はできないが土器捨て場的要素が強いと言える。調査区外には縄文時代後期から晩期にかけての遺構が残されている可能性が高い。

また、Ａ地区内における後期前半から晩期終末までの時期ごとの地点的まとまりがないか整理段階で検証してみたが時期ごとにまとまる傾向はなかった。

Ａ地区で出土した土器片はおよそ２万点を数える。そのほとんどが無文部である。後述するように文様帯が口縁または胴部に限られる。晩期後半の有文土器の存在を考えると、無文の土器片の多少によって判断することは、正確ではないかもしれないが、粗製土器の比率の高さを予想させる。また、５類粗製土器で示したように、口縁部破片の多さからも粗製土器の比率の高さを窺うことができる。しかし、後期前半から晩期終末までのどの時期に比定されるか詳細は不明である。

以下、Ａ地区出土の後期前半から晩期終末の土器について概観してみたい。

１類の後期前半の資料は、他の類のものに比べて少量で掲載したものは15点である。口縁部を内折させその部分に文様帯を持つ縁帯文系のものや堀之内式期に属すると思われるもの、加曽利Ｂ式に比定されるものなどがある。

２類の後期後半の資料は１類に比べ多い。掲載点数は約70点である。大波状口縁土器や凹線文土器が主体を占める。その中に瘤を有するものや矢羽状沈線を有するものがあり融合的な要素を感じさせる。

３類の晩期前半の資料は中葉に位置付けられるものが多くなる傾向がある。三叉文や玉抱き三叉・入り組み文を有する御経塚式に比定されるものから中屋式段階への流れを追うことができる。中屋式段階として位置付けたものは口縁部が「く」の字状に屈曲し胴部が膨らむ深鉢を代表とする。文様構成は、沈線間の列点（列点のみのものもある）と鍵手文あるいはその類型で構成され、地文に擬縄文を施すものがある。口唇を刻むものが含まれる。文様を持たない粗製土器のなかにも同種の器形のものがあり該期のものと考えられる。鍵手文の形態などから中屋式のなかでも比較的新しい段階のもの

と考える。

3ｄ類とした第84図130から第85図171までは、列点間に「工字文」や「入り組風工字文」を有するもので上述の北陸系のものとは異なる系譜をもつものである。長野県佐野遺跡出土の土器に類例を見ることができる。いわゆる佐野Ⅱ式段階のものであろう。口縁部に文様帯を持つものと胴部上部に文様帯を持つものがある。口縁部に文様帯があるものは内彎する口縁を持つ深鉢、胴部上部に文様帯を持つものは頸部でくびれ口縁が外反する鉢状のものであると推定される。内面に凹線を巡らせるものやそれに伴う「枝状」の加飾が見られることから中屋式期に一部並行しながら後続するものという想定ができる。

3ｅ類とした第85図172から第86図202までのものは3ｄ類の「工字文」や「入り組風工字文」を有しながらも列点を欠くものである。また「工字文」は沈線化する傾向にある。列点が欠如するという点で3ｄ類に後続し次の浮線文期との間を結ぶものと考える。

4類は晩期後半の土器で主に浮線文土器である。小片が多く詳細は不明である。浮線文の特徴である彫刻的な技法という点に関しては粗雑なものが多く、浮線文の文様構成だけを真似たものも多い。文様帯構成から晩期終末を3段階に分けた石川1985や設楽1990などによる変遷を当遺跡出土のものの中にも追うことができるだろう。しかし、小片が多く器形復元できる個体が少ないことなどから時期細分はできなかった。

飛騨地方では該期の資料が出土している遺跡は少ない。阿弥陀堂遺跡出土の資料は当地方の晩期終末を代表するものとされている。その中に突起部を刻むもの、吸盤状となるもの、茸状突起を有するものなどがあり、当遺跡出土のものも共通する要素を持っている。しかし、文様構成においては阿弥陀堂に見られるいわゆる「流水文」と呼ばれる構成のものは少ないことや胴部下半の無文部に細密な条痕が多く見られることから系譜を異にするのかもしれない。無文土器片のなかで条痕文のものは比較的多く見られるが、細密な条痕のものが目に付き貝殻条痕文のものは少ない。このことから該期の土器の系譜が中部高地に求められる可能性は高い。特に3ｄ類以降一貫して中部高地からの影響をみることができる。

4ｉ類とした斜傾短沈線・羽状沈線を有する土器については不明な点が多い。当遺跡の4類を概観するなかでは比較的新しい段階のものにその手法が使われるかとも思われる。

以上、Ａ地区で出土した後期前半から晩期終末までの土器について概観してみた。ほぼ途切れることなく編年的時間推移を追うことができる。力不足のため大ざっぱな分類となってしまったが詳細なる編年的位置付けについては今後の研究に期待したい。

（伊藤　秀雄）

第3節　編布圧痕の土器について

1．資料の時期

ここに報告する編布（アンギン）圧痕は、岐阜県文化財保護センター飛騨出張所によって1994～95年に発掘されたところの、同県大野郡丹生川村牛垣内遺跡より出土した縄文土器に確認されたものである。その時期は中期後半で、従来底部に付いている場合が圧倒的に多いのに対し、本遺跡例は口縁部に付いている点が注目される。

このことは縄文土器の製作技法について新しい知見をもたらすものであり、かつ岐阜県最古の編布資料としても重要である。

２．資料の検討

資料は次の２点である。ともに口径約30cmの大型キャリパー形深鉢の口縁部破片で、内側に強く「く」の字状に肥厚し、本来同一個体に属するものと推定される。

第１例（遺物番号：UG―Ｌ６Ⅱ・13636、図版56―１・２）

残存する大きさは、高さ6.0、幅5.8、厚さ1.0cmで、黒褐色～褐色を呈す。外面には断面三角形の隆帯による渦巻文がみられるが、その口唇よりの上半が偶然剝落することによって、その下に編布圧痕のあることが判明した。そこには渦巻の隆帯間の黒色に変色した部分があり、それをたどると少なくとも３周して、渦巻文が口唇端にまで達していたことが分かる。口唇直下にはわずかながら隆帯の一部である高まりが残存している。

編布圧痕は、剝落した高さ2.7、幅4.6cmの範囲にみられる。そして布としての糸のタテ・ヨコは、土器のそれとは直交している。すなわち編布は、口縁部に鉢巻のように回っていたのである。確認できるタテ糸の本数は19本で密集しており、１cmに７本みられ、タテ糸の間隔（中心間の距離）は1.4mmである。

タテ糸が密集しているためヨコ糸は見えないが、左下がりのもじりの粒数でみると、良好な部分で１cmに４個みられ、その間隔（中心間の距離）は2.5mmである。なお撚りの傾きは圧痕ではなく、本来の形を示すモデリング陽像にしたがって記す。

第２例（遺物番号：UGSB６・13710、図版56―３・４）

残存する大きさは、高さ2.9、幅5.9、厚さ1.0cmで、褐色を呈す。本例には剝落の痕跡はみられず、本来無文部分であったとみることができる。

編布圧痕はほぼ全面にみられるが、右端が上に傾斜しているのが特徴的である。糸のタテ・ヨコの関係は、第１例と同様である。確認できるタテ糸の本数は16本で、１cmに７本みられ、タテ糸の間隔は1.4mmである。

ヨコ糸は見えないが、左下がりのもじりの粒数でみると、良好な部分で１cmに４個みられ、その間隔は2.5mmである。

タテ・ヨコの糸の間隔は一致しており、土器の形状とともに本来同一のものであることが明らかである。これを従来知られている資料と比較するときわめて細かく、タテ糸の間隔５mm以下の典型的な細密な編布であることが分かる（第138図）。土器に巻き付けられたためタテ方向に引っ張られ、その結果タテ糸はより密接し、ヨコ糸の間隔はやや開き気味になっていることを考慮しても、もっとも細密な例として注目される。

これに匹敵する実物資料は、縄文晩期の秋田県南秋田郡五城目町中山遺跡資料のみで、タテ糸の間隔同じく1.4mm、ヨコ糸の間隔0.8mmである（図版56―５）。

3．資料の重要性

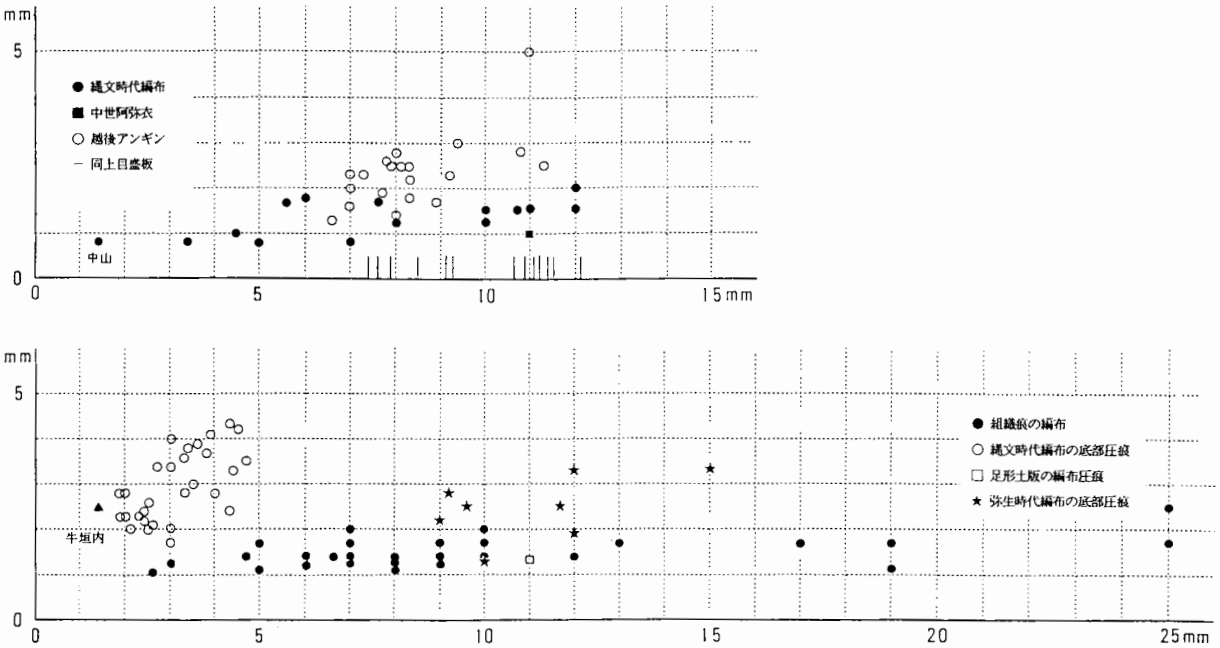
本遺跡例の重要性は次の3点である。

第1は、岐阜県最古の編布資料であることである。本遺跡例縄文中期後半のものであるが、全国的には前期まで逆上る。したがって本県下においても、さらに古い資料を十分期待することができる。そして従来その圧痕は底部に集中していたが、本例のように口縁部にも存在することが判明すると、可能性の範囲が大きく広がってきたことになり、編布の研究にはずみをつけることが期待される。

第2は、きわめて細密な編布であることである。これによって衣服の存在ばかりでなく、トチやドングリ類のアク抜きなどに関連する道具として、その作業の実体を明らかにしてくれたことである。粗目の編布ではそれらの粉が漏れてしまうのである。

第3は、口縁部に鉢巻状に巻かれていたことである。これは口径約30cmの大型の土器の文様を施文する過程での乾燥を防ぐための工夫を示唆している。これによって縄文土器製作の実際を、一段と生き生きと復元することができるようになった。資料2では右端が上に傾斜しているが、それはこの部分から編布が巻き付けられ始めたことを示しているといえよう。

（渡辺　誠）



第138図　各種の編布（上）・同圧痕（下）のタテ糸とヨコ糸の間隔（下段▲印：牛垣外遺跡例）

参考文献

渡辺　誠，1985：編布の研究。日本史の黎明．169～207頁。六興出版・東京。
———，1985：編布の変遷。衣生活と民具．7～23頁。雄山閣出版・東京。

引用・参考文献

赤木　清　1936 「江名子ひじ山の石器時代遺蹟」『ひだびと』 4 ― 4 ほか

石川県穴水市教育委員会　1983 『上田うまばち遺跡報告書』

石川県埋蔵文化財センター　1983 『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告書（IV）』

1989 『米泉遺跡報告書』

1995 『金沢市近岡遺跡』

石川日出志　1985 「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』37― 4

1991 「縄文時代晩期浮線文土器出現期の編年と諸様相」『北越考古学』第 4 号

伊藤秀雄　1997 「第 2 章遺跡の環境第 2 節歴史的環境」『西田遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター

岩花秀明　1991 「飛騨地域の概要」『東日本における稲作の受容』

岩花秀明ほか　1995 『南垣内遺跡』国府町教育委員会

上原真昭　1997 「第 5 章縄文時代の遺物第 2 節石器」『西田遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター

宇野治幸・佐野康雄　1991 『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』岐阜県教育委員会

王滝村教育委員会　1997 『大岩橋緊急発掘調査報告書』

大江　命　1958 『上宝の先史時代』

1965 『飛騨の考古学Ｉ』

1975 「飛騨における貝殻沈線文系土器について」『岐阜県考古』 4

1987 『下田遺跡』河合村教育委員会

1995 「南飛騨における二遺跡の押型文土器について」『飛騨と考古学』飛騨考古学会

大野郡丹生川村史編纂委員会　1962 『丹生川村史』

大野政雄・佐藤達雄 「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』53-2

大原正義　1981 「北信濃山ノ神遺跡出土の土器について」『信濃』33-4

大参義一ほか　1972 『岐阜県史』通史編　原始

岡谷市教育委員会　1986 『梨久保遺跡』

1996 『花上寺遺跡』

小熊博史　1997 「卯ノ木遺跡出土土器の研究Ｉ」『研究紀要』32号別冊　長岡市立科学博物館

各務原市教育委員会　1973 『炉畑遺跡』

片岡　肇　1980 「樋沢式土器の再検討―長野・岐阜両県を中心として―」『信濃』32-4

1982 「押型文土器」『縄文文化の研究』 3

1988 「異形押型文土器の再検討」『朱雀』

加藤三千雄　1988 「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観』 3

角川日本地名大辞典編集委員会　1978 『角川日本地名大辞典』21岐阜県

可児町北裏遺跡発掘調査団　1973 『北裏遺跡』

可児通宏　1969 「押型文土器の変遷過程」『考古学雑誌』第55巻第 2 号

金子直行ほか　1992 「田戸遺跡資料」『山内清男考古資料 4 』奈良県国立文化財研究所史料第35冊

神村　透　1996 「波状口縁櫛形文土器を追う」『長野県の考古学』

狩野　睦・神保孝造　1995 『東黒牧上野遺跡Ａ地区』大山町教育委員会

岐阜県教育委員会　1962 『岐阜県遺跡目録』

1990 『改定版　岐阜県遺跡地図』

倉敷考古館　1971 『里木貝塚』

紅村　弘　1979 『東海先史文化の諸段階（資料編II）』

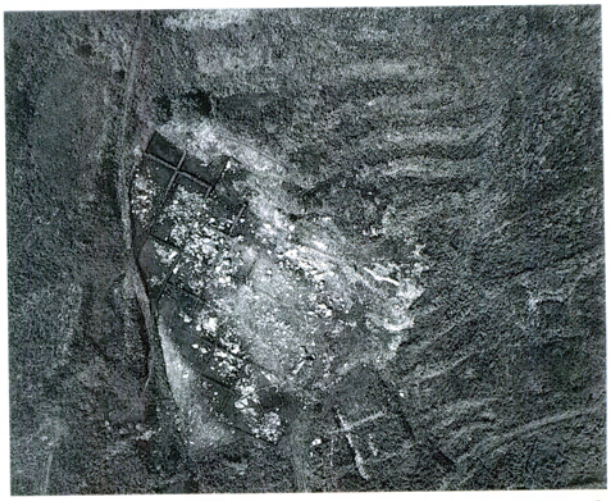
小林知生・早川正一　「岐阜県根方岩陰」『日本の洞穴遺跡』
小林康男　1985　『堂の前・福沢・青木沢』塩尻市教育委員会
小林康男・会田進　1988　『向陽台遺跡』塩尻市教育委員会
財団法人岐阜県文化財保護センター　1994　『荒城神社遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1993　『阿弥陀堂・深作裏垣内』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1997　『カクシクレ遺跡』
設楽博己　1990　「第III章　遺構と遺物　第3節　上層の土器群について」『一津』大町市教育委員会
上嶋善治　1995　『岡前遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター
縄文セミナーの会　1992　『縄文晩期の諸様相』第5回縄文セミナー
鈴木道之助　1981　『図録石器の基礎知識III』
大門町教育委員会　1994　『串田新遺跡VII』
高山市教育委員会　1987　『飛騨の考古学遺物集成』II
　　1988　『寺東遺跡、西保木（対岸）遺跡発掘調査報告書』
　　1991　『垣内遺跡発掘調査報告書』
多治見市教育委員会　1990　『明和古窯跡群掘調査報告書』
田中　彰　1992　「垣内遺跡にみる飛騨の縄文集落」『飛騨のあけぼの』
　　1993　『前平山稜遺跡・赤保木遺跡発掘調査報告書』
田中　彰・吉朝則富　1990　『鷹ノ巣遺跡A・B地点　鷹ノ巣古墳発掘調査報告書』高山市教育委員会
　　1992　『江名子糠塚・無手無冠農場遺跡発掘調査報告書』高山市教育委員会
谷口和人ほか　1997　『西田遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター
谷口康浩　1986　「縄文時代「集石遺構」に関する試論」『東京考古』4
中部高地縄文土器集成グループ　1979　『中部高地縄文土器集成』第1集　縄文中期後半の部その1
戸沢充則　1955　「樋沢押型文遺跡」『石器時代』2
戸沢充則編　1994　『縄文時代研究事典』
戸沢充則・会田進編　1987　「樋沢押型文遺跡調査報告書」『郷土の文化財』16　長野県岡谷市教育委員会
戸田哲也　1982　「飛騨における晩期縄文土器の様相」『信濃』34-4
　　1993　「飛騨を中心とした縄文後期前半土器の様相」『先史考古学研究』第4号
戸田哲也・大野政雄ほか　1997　『堂之上遺跡』久々野町教育委員会
中沢道彦　1991　「長野県の概要」『東日本における稲作の受容』
　　1991　「氷式土器をめぐる研究史」『信濃』43-5
中島栄一・渡邊朋和　1988　「浮線網状文系土器様式」『縄文土器大観』4
中島　宏　1987　「中部地方における押型文土器編年の再検討」『埼玉の考古学』
　　1990　「細久保2類a群についての覚書」『縄文時代』1
中津川市教育委員会　1985　『阿曽田遺跡発掘調査報告書』
中野山越遺跡発掘調査団　1993　『中野山越遺跡発掘調査報告書』
長野県　1988　『長野県史』考古資料編
永峯光一　1969　「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』9
永峯光一ほか　1967　『佐野』長野県考古学会研究報告書3
長屋幸二　1995　『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター
日本考古学会　1971　「下野」『考古学雑誌』56-4
丹生川村史編集委員会　1997　『丹生川村史』資料編一
能登　健ほか　1985　「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』37-4ほか
野村宗作　1998　「牛垣内遺跡の刻文入り石器について」『どっこいし』第57号

林　直樹　1995 『国道 360号線バイパス改修工事に伴う発掘調査概報』
東日本埋蔵文化財研究会　1991 『東日本における稲作の受容』
飛騨考古土俗学会　編　1935 『飛騨石器時代遺蹟地名表』
藤本健三　1994 「細越出土の弥生土器について」『どっこいし』第45号
増子康真　1981 「第3章　東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階』本文編　補足改定版
松沢亜生　1957 「細久保遺跡の押型文土器」『石器時代』4
三上徹也　1988 「唐草文系土器様式」『縄文土器大観』第3巻
南　久和　1985 『北陸の縄文時代中期の編年　他9編』
　　1989 「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観』第4巻
八尾町教育委員会　1985 『長山遺跡発掘調査報告書』
家根祥多・中村豊　1997 「長野市宮崎遺跡の発掘調査」『信濃』48-4
矢野健一　1993a 「押型文土器の起源と変遷」『考古学雑誌』78-4
　　1993b 「押型文土器の起源と変遷に関する新視点」『研究紀要』2　三重県埋蔵文化財
山内清男　1930 「所謂亀ケ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1－3
横山浩一　1989 「刷毛目技法に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』
吉朝則富　1985 「あまいだ平の水神平式土器」『どっこいし』第19号
　　1988 『宮ノ下遺跡』国府町教育委員会
　　1989 『はつや遺跡』清見村教育委員会
　　1991 「飛騨の弥生時代石器(7)　十、環状石斧」『どっこいし』第37号
　　1993 「異形石器考」『どっこいし』第42号
吉朝則富ほか　1982 『糠塚遺跡』高山市教育委員会
六合村教育委員会　1984 『熊倉遺跡』
渡辺　誠　1984 『増補　縄文時代の植物食』

図　　版

1

2



3

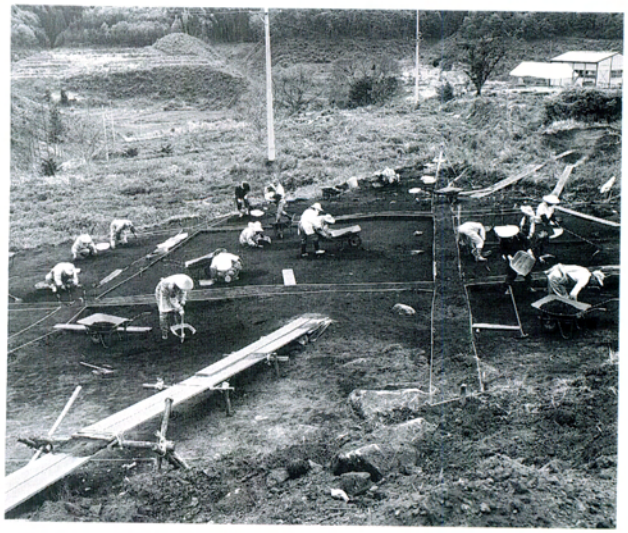
4

5

1．遺跡遠景　2．遺跡全景　3．A地点全景　4．B地点全景　5．C地点全景

図版２

1



2

3

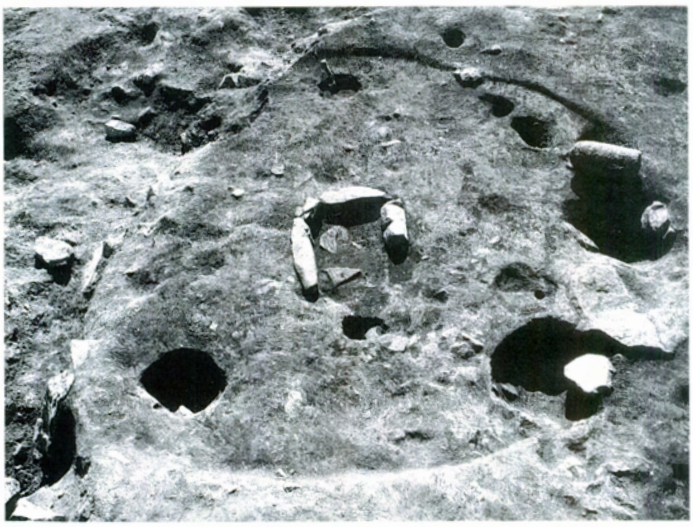
4

5

１．作業風景（平成６年度）　２．作業風景（平成７年度）　３．土層断面Ｇ－７～９
４．土層断面Ｐ－12北壁　５．遺物出土状況

1

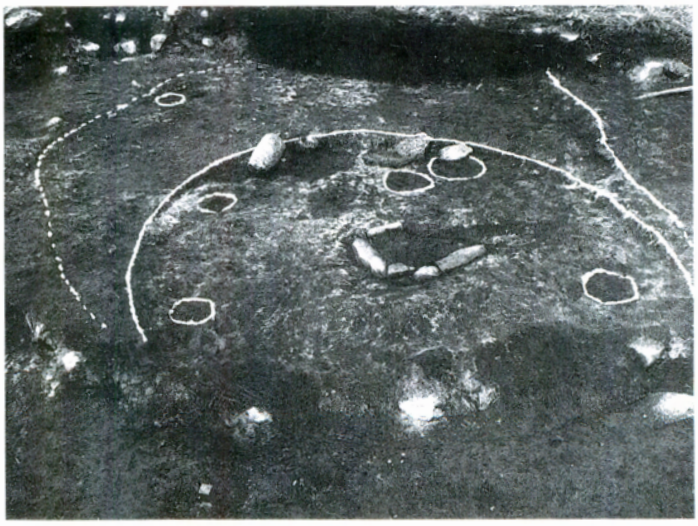
2



3

4

5



6

1．第１号住居跡　2．第１号住居跡竈　3．第２号住居跡　4．第２号住居跡炉
5．第２号住居跡石棒出土状況　6．第２号住居跡と第９号住居跡

図版 4

1

2

3

4

5

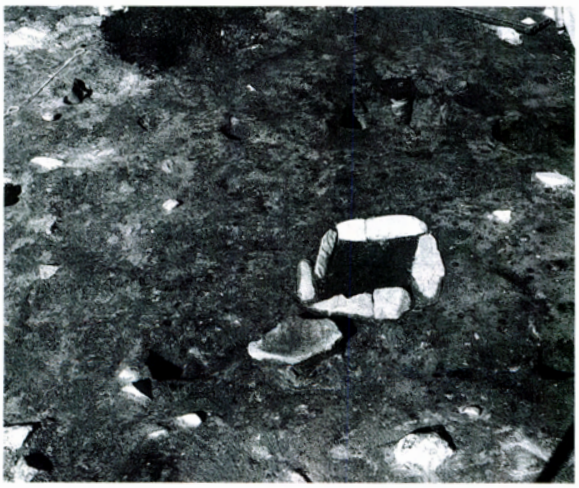
6

1．第 3 号住居跡　2．第 3 号住居跡埋設土器　3．第 4 号住居跡　4．第 5 号住居跡
5．第 6 号住居跡表土　6．第 6 号住居跡

1

2

3



4

5

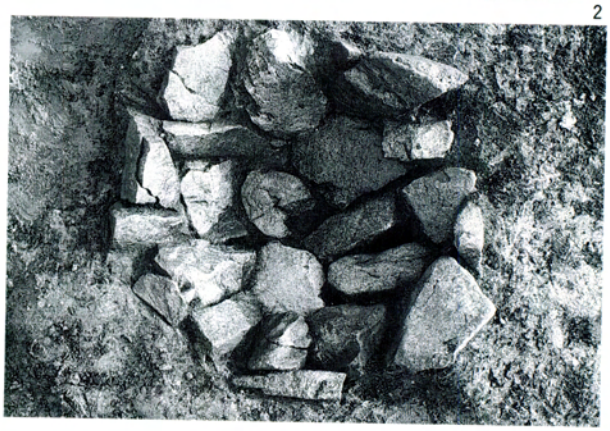
1．第７号住居跡　2．第８号住居跡　3．第８号住居跡炉　4．第10号住居跡
5．第10号住居跡埋甕

図版 6

1

2

3


4

5

6

7

8

1．SF 1　2．SF 4　3．SF 2 上層　4．SF 2　5．SF 3 上層　6．SF 3
7．木杭　8．竈跡

1

2

3

4

1～4．灰釉陶器

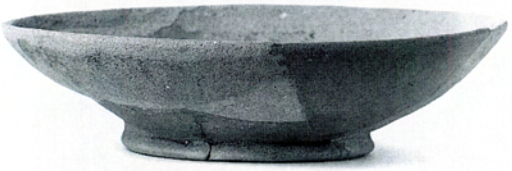
図版 8

1

2

3

4



5

6

7

8

1～8．灰釉陶器

1

2

3

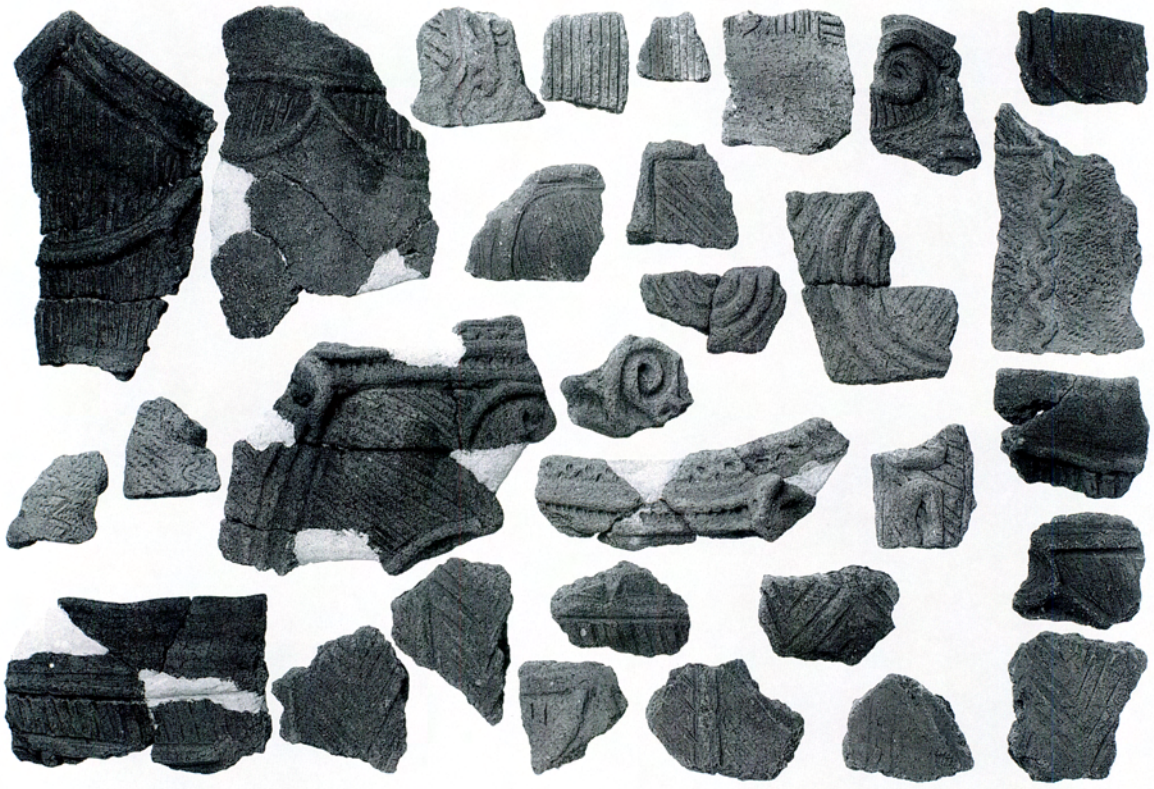
4

5

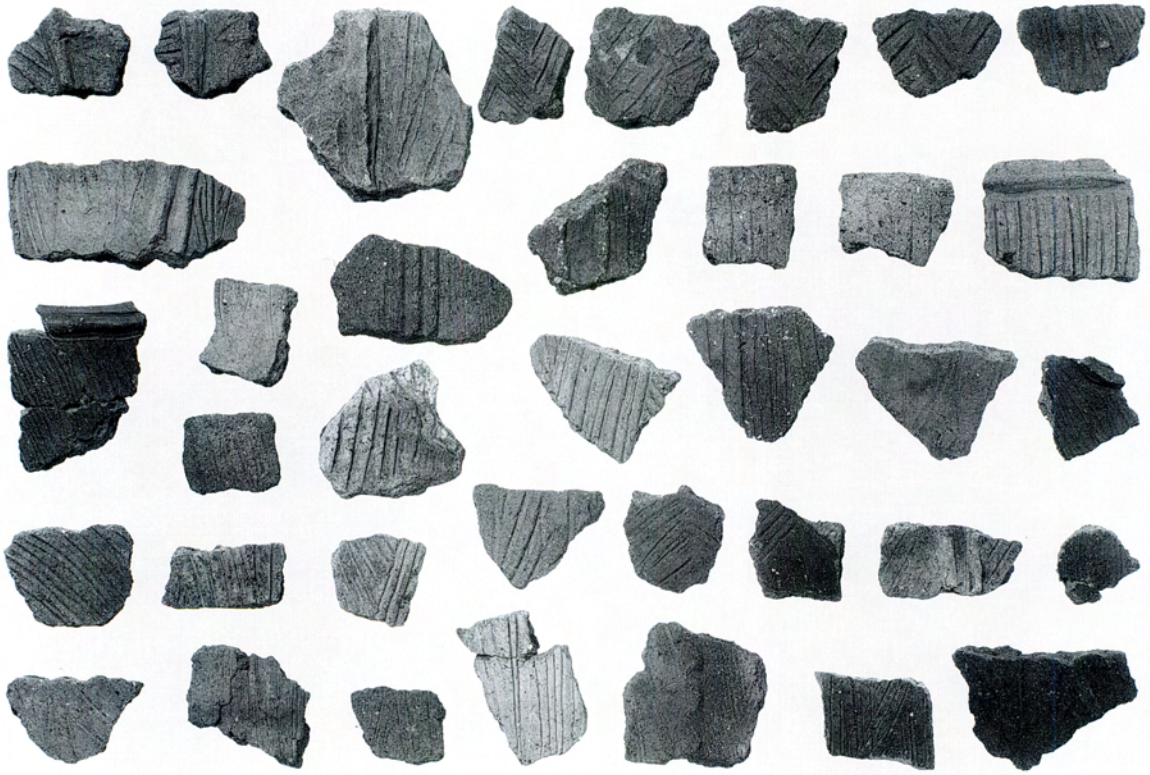
6

1～6．第２号住居跡出土縄文土器

図版10



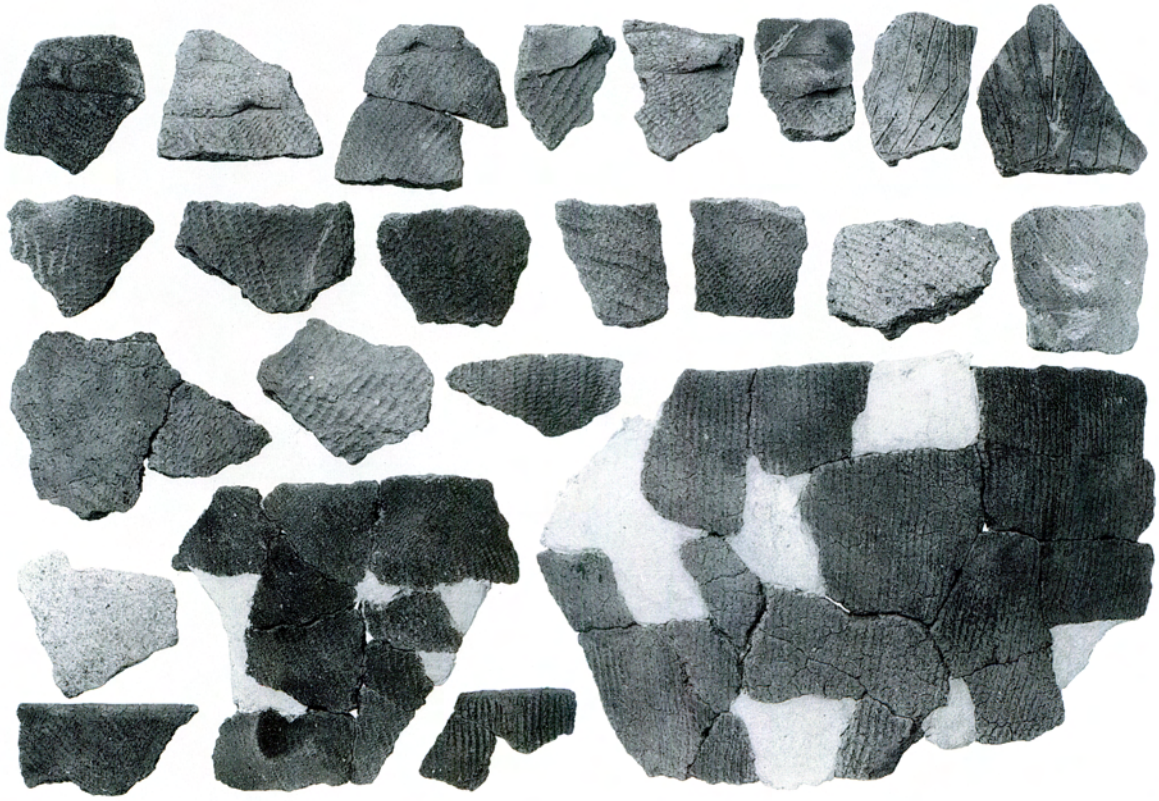
1



2

1・2．第2号住居跡出土縄文土器

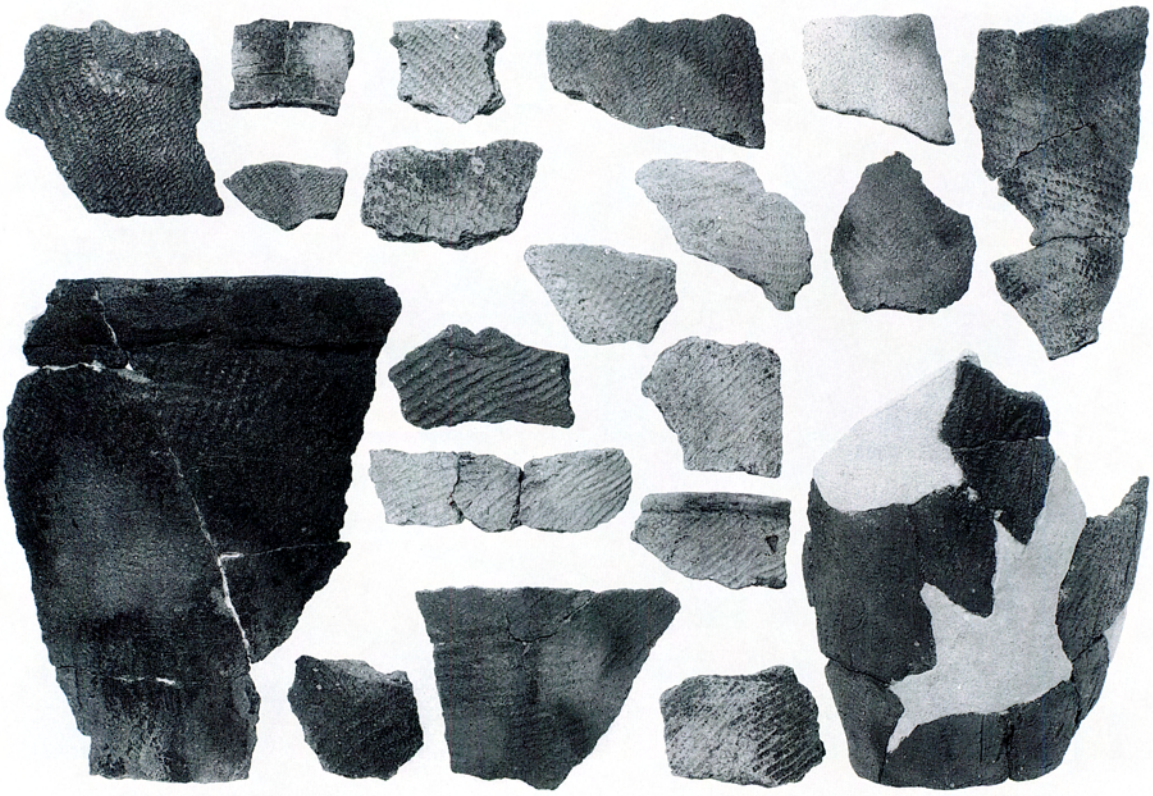
1



2

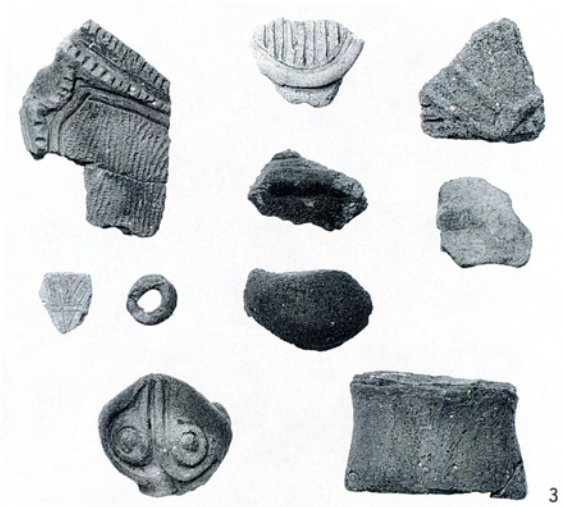
1・2．第２号住居跡出土縄文土器

図版12



1

2



3

4

1．第２号住居跡出土縄文土器　2．第２号住居跡出土土製品
3．第３号住居跡出土縄文土器　4．第５号住居跡出土縄文土器

1

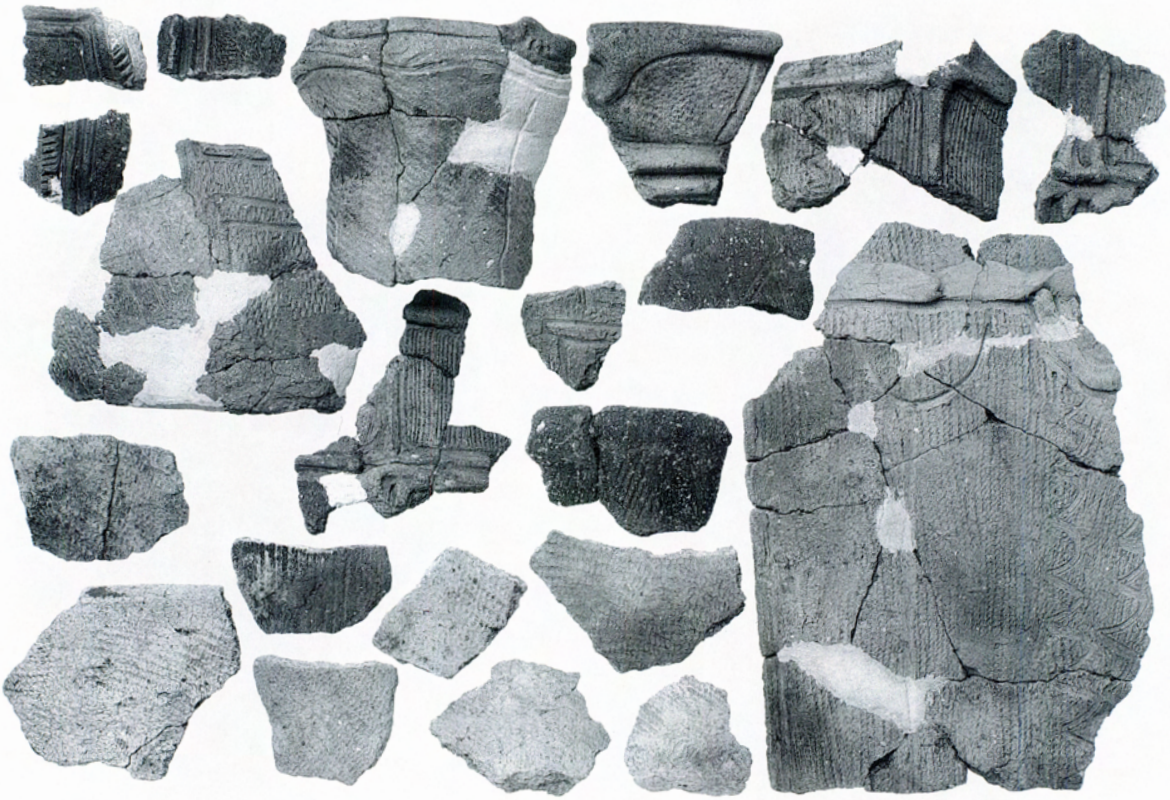
2

3

4

1～4．第６号住居跡出土縄文土器

図版14



1

2

3

1．第６号住居跡出土縄文土器　２・３．第７号住居跡出土縄文土器

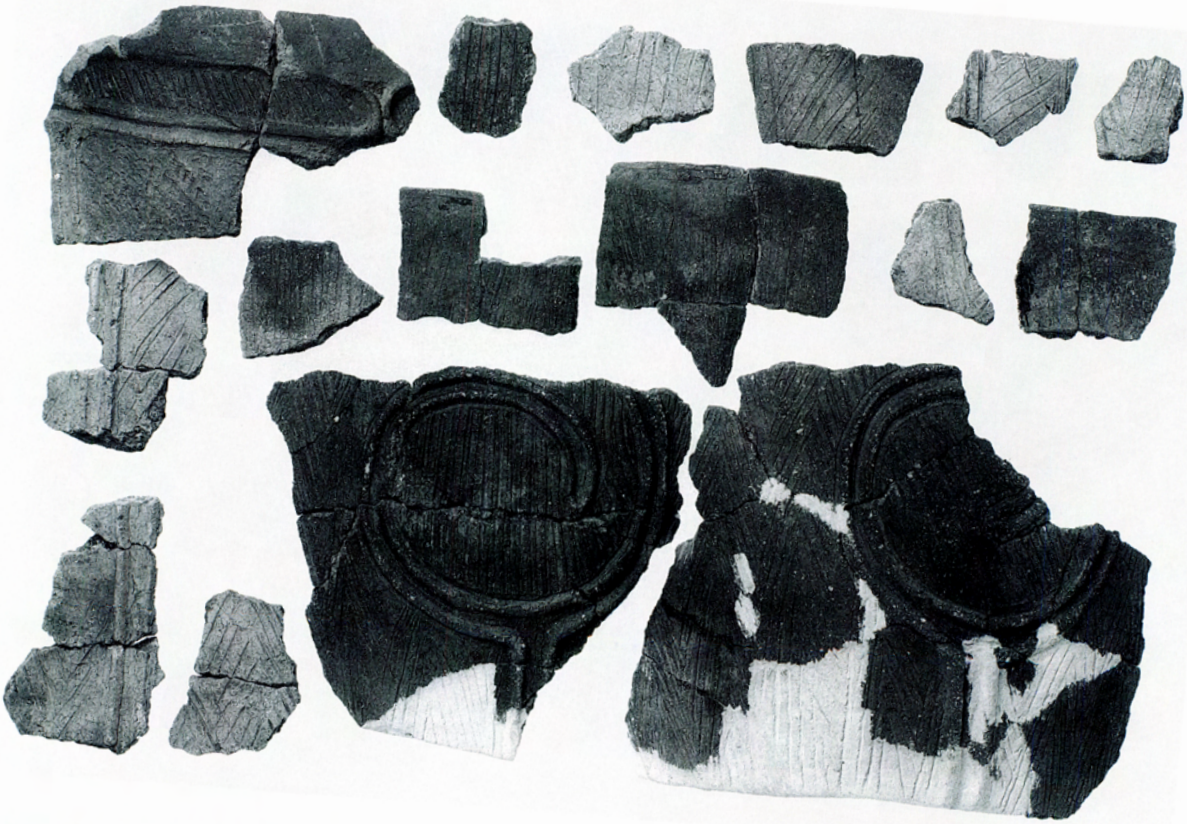
1

2

3

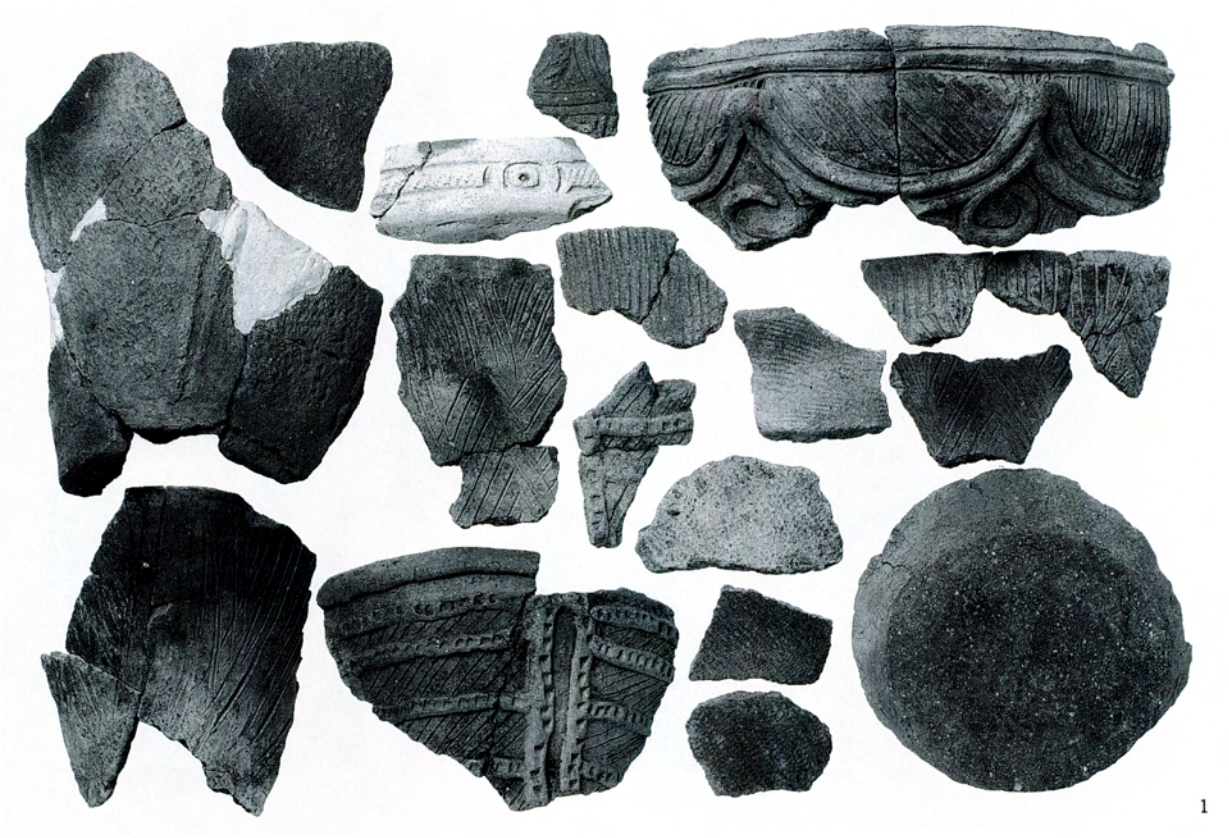
1～3．第７号住居跡出土縄文土器

1



2

1・2．第7号住居跡出土縄文土器

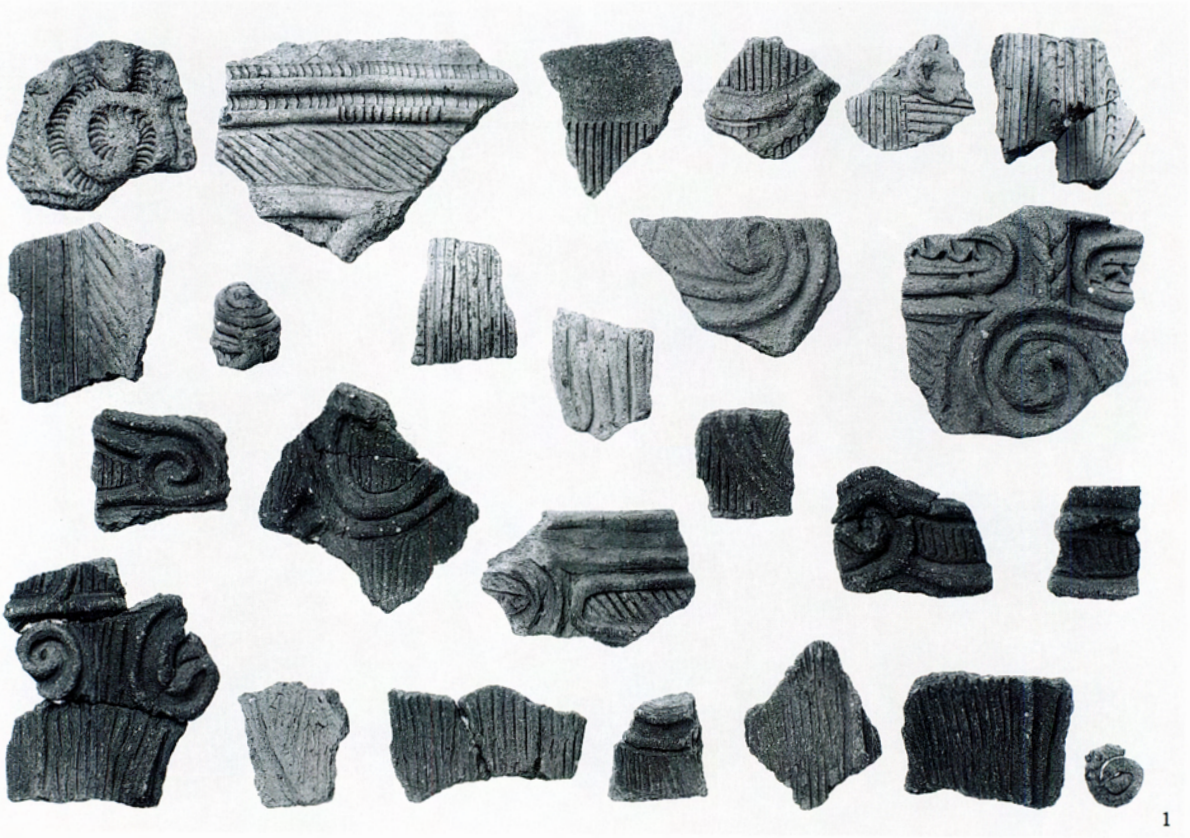


1

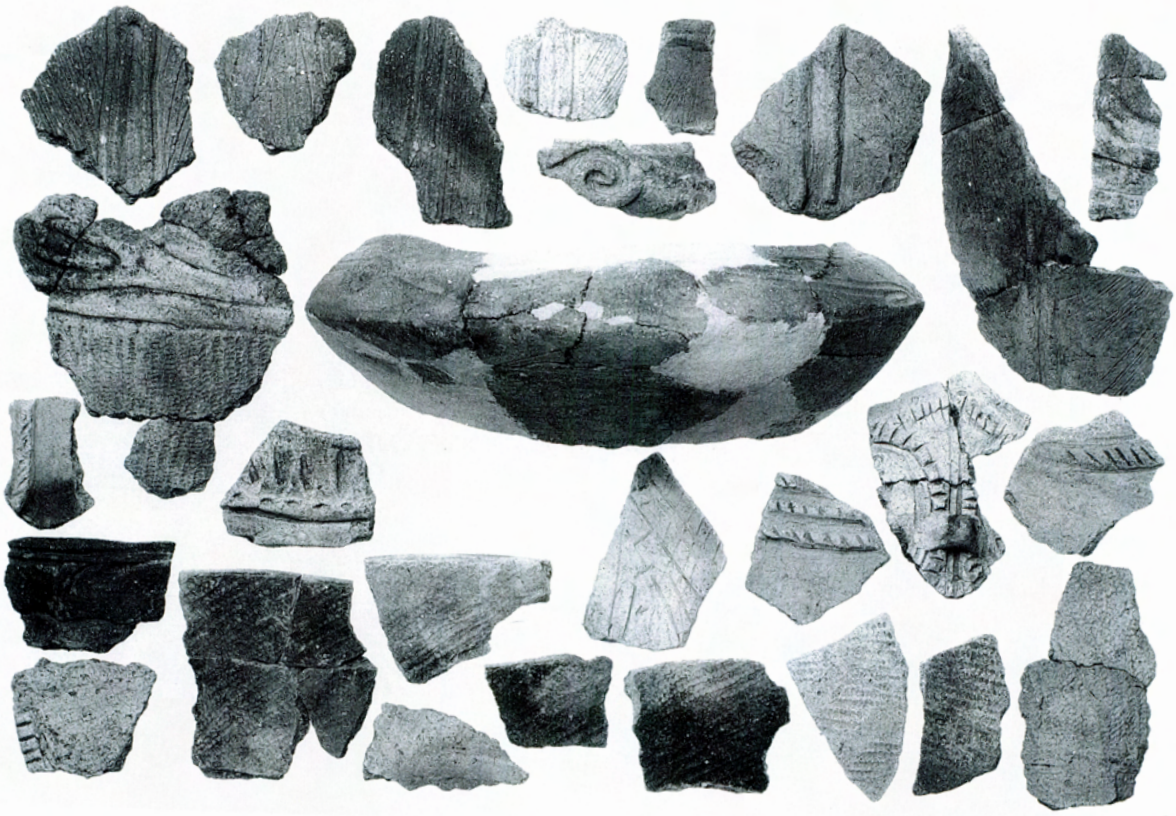
2

3

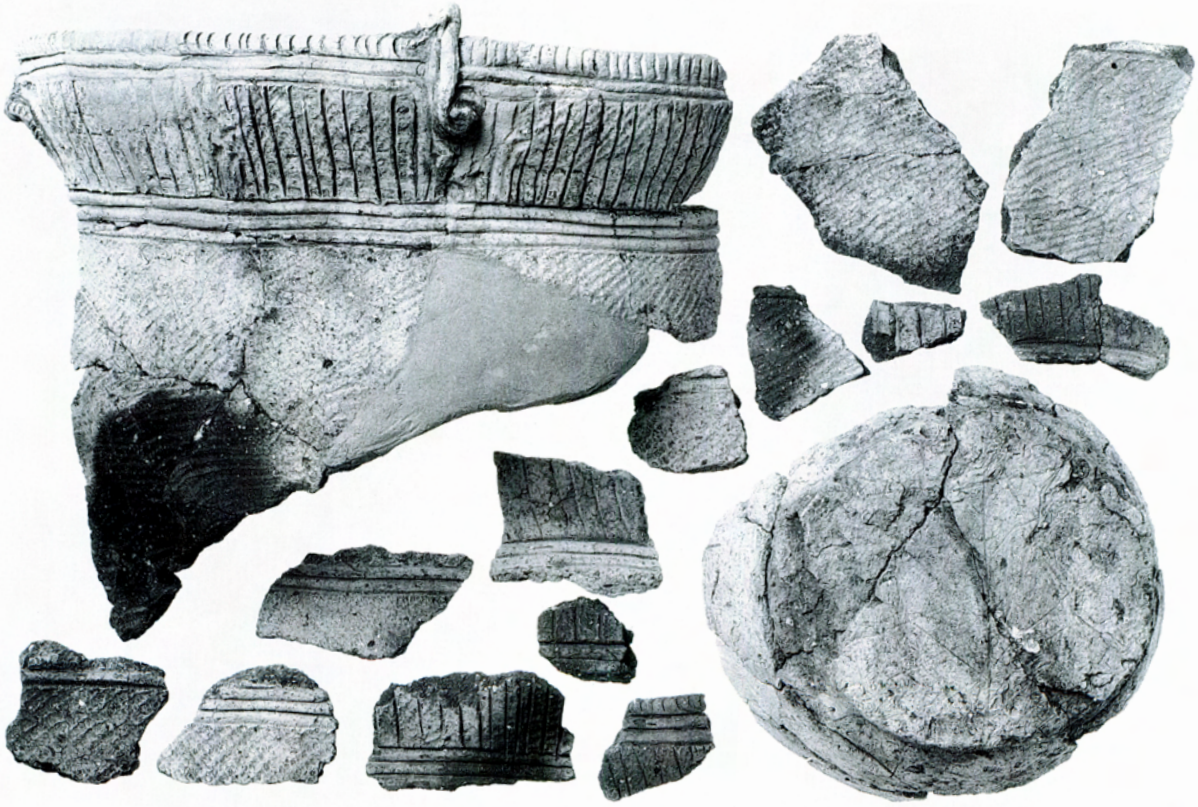
1．第７号住居跡出土縄文土器　2．第８号住居跡出土縄文土器
3．第９号住居跡出土縄文土器



1・2．第８号住居跡出土縄文土器



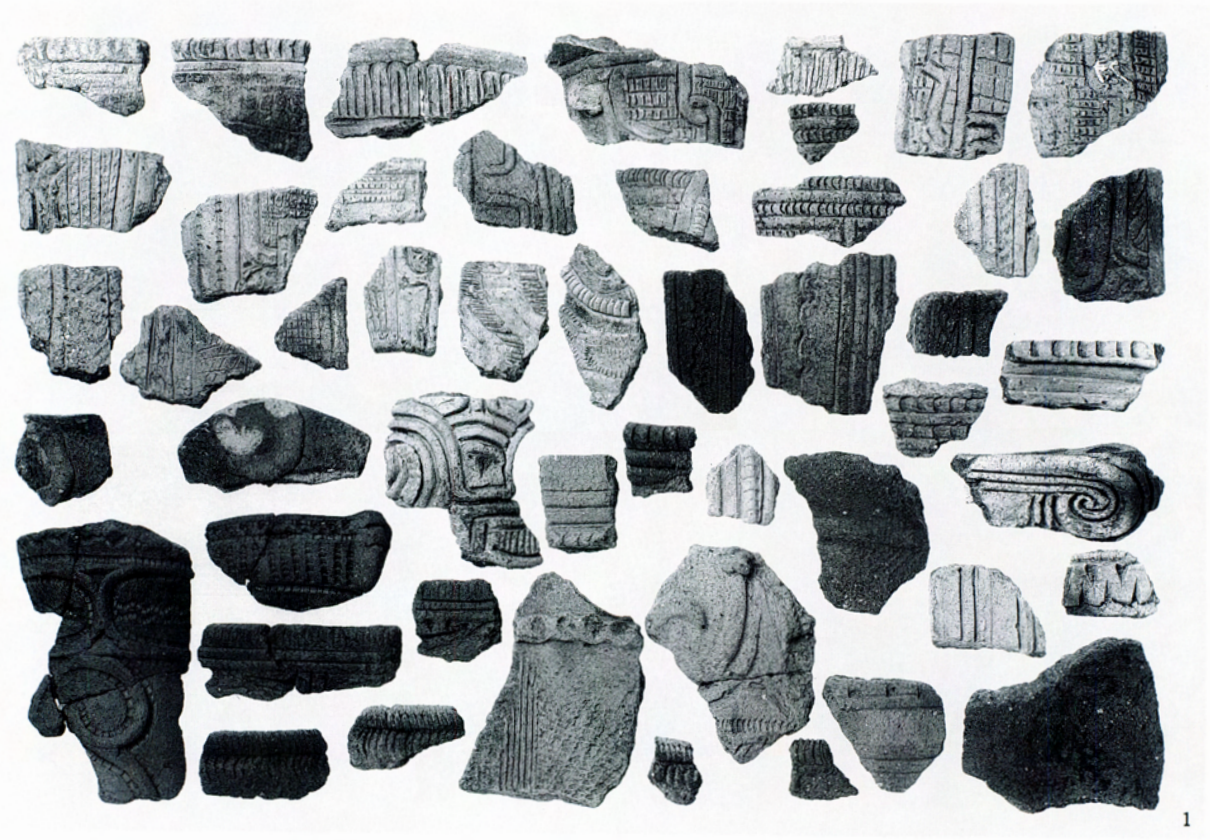
1



2

1．第８号住居跡出土縄文土器　2．第９号住居跡出土縄文土器

図版20



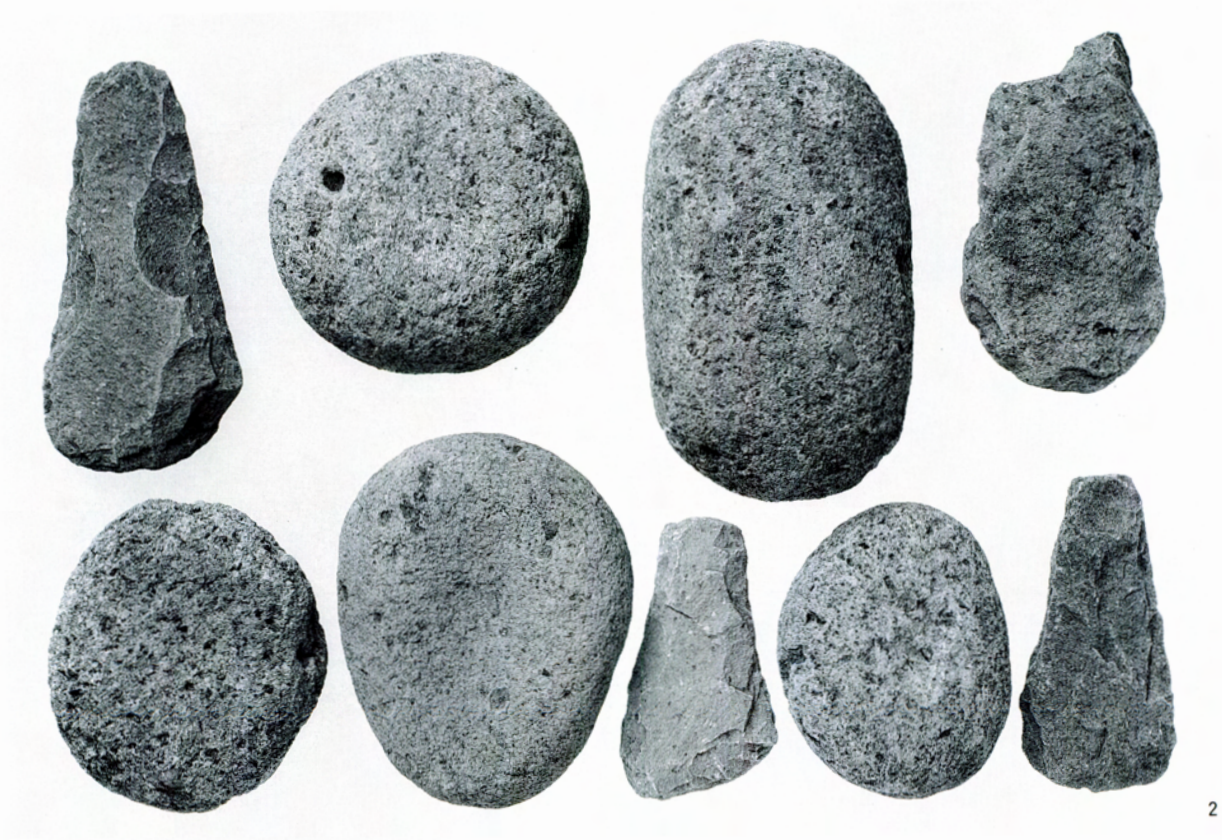
1

2

3

1．第９号住居跡出土縄文土器　２・３．第10号住居跡出土縄文土器

1



2

1・2．住居跡出土石器

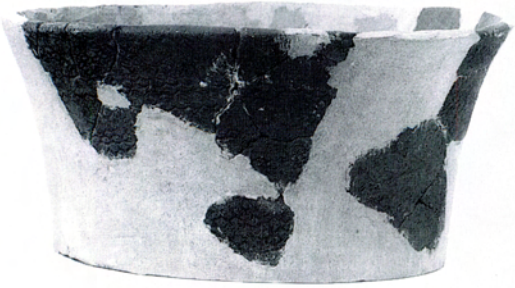
図版22

1

2

3

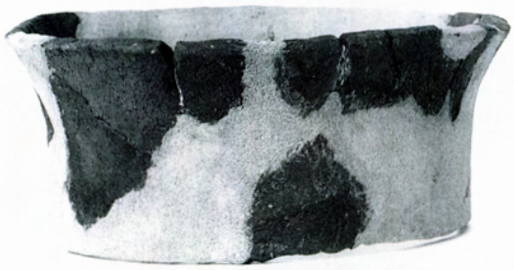
4



5

6

1～6．包含層出土縄文土器Ⅰ群



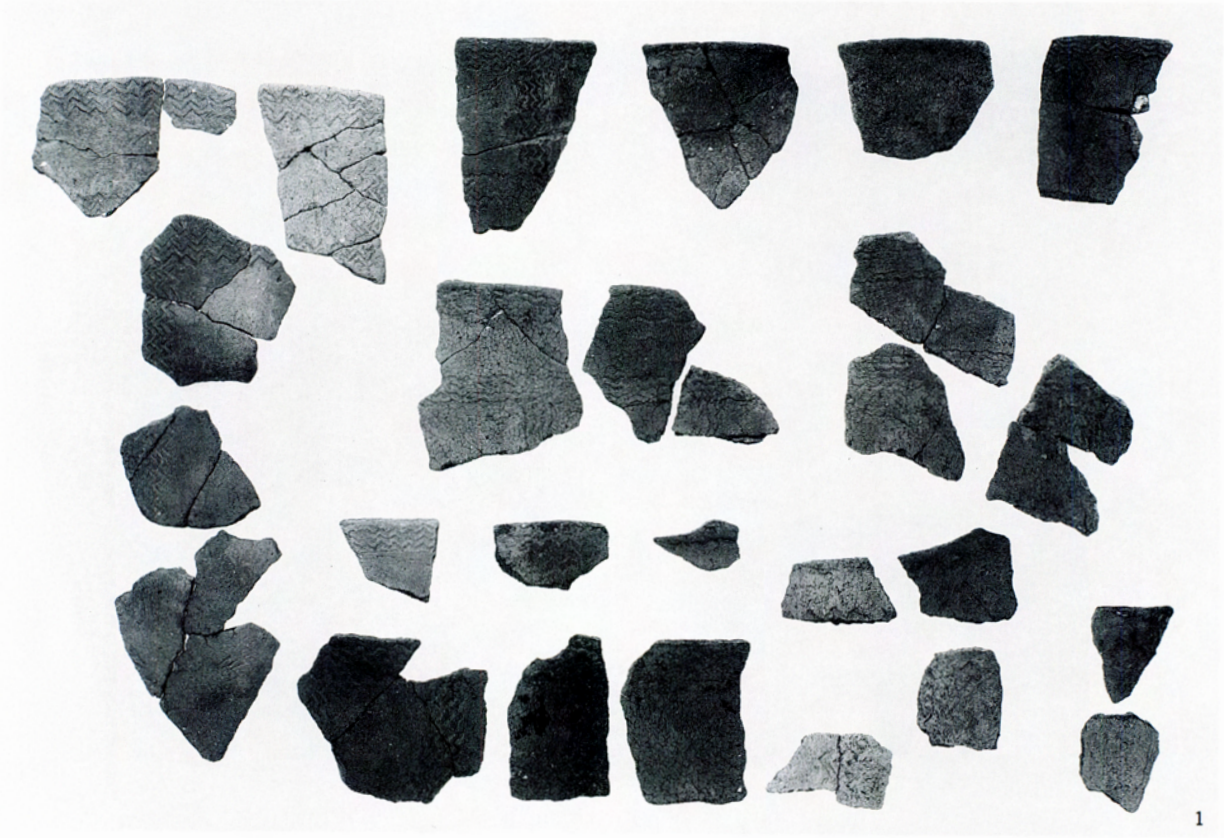
1

2

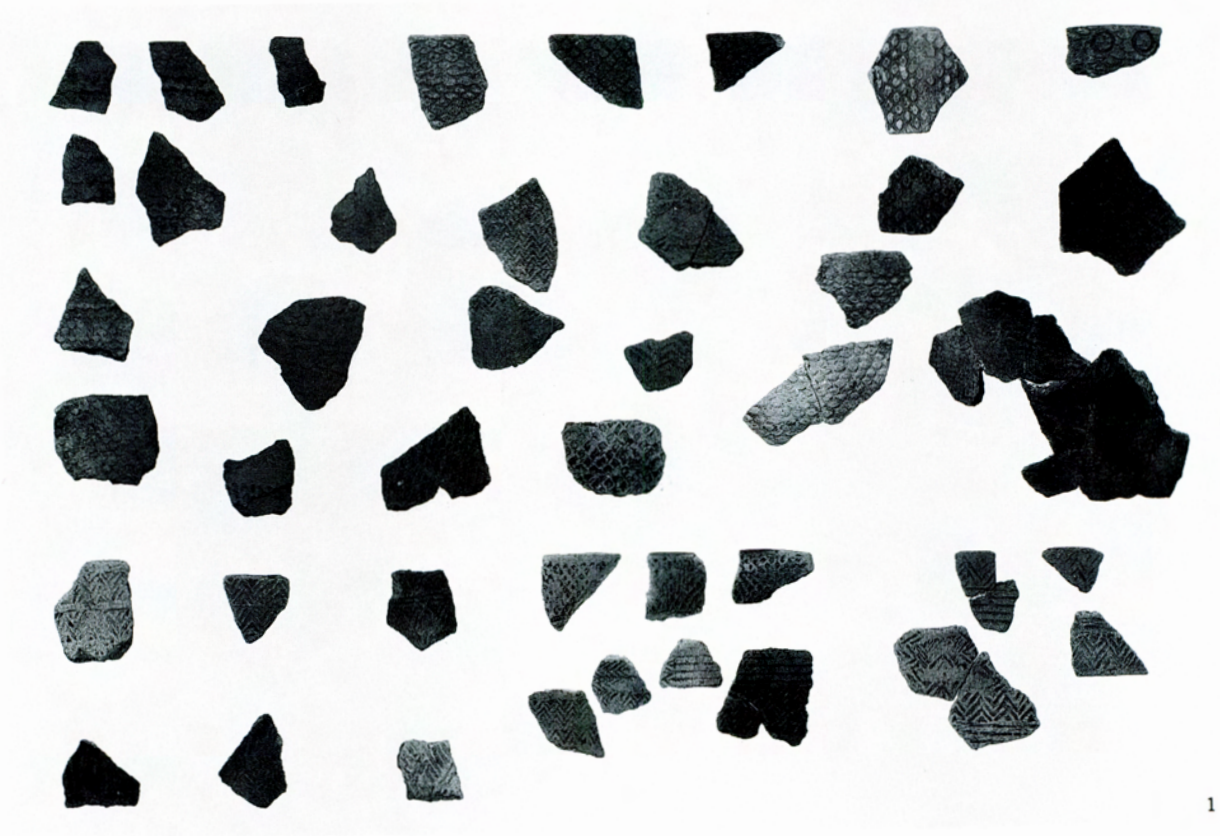
3

4

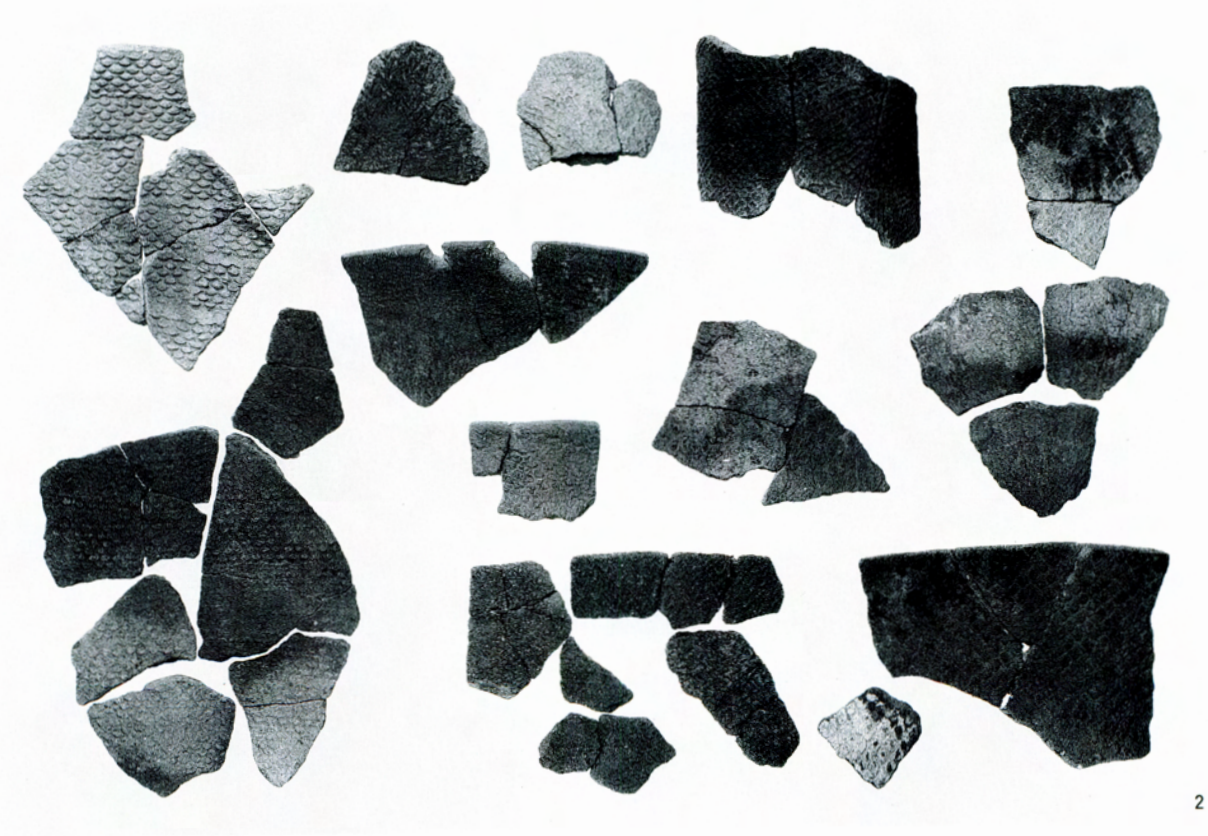
1～4．包含層出土縄文土器Ⅰ群



1・2．包含層出土縄文土器Ⅰ群



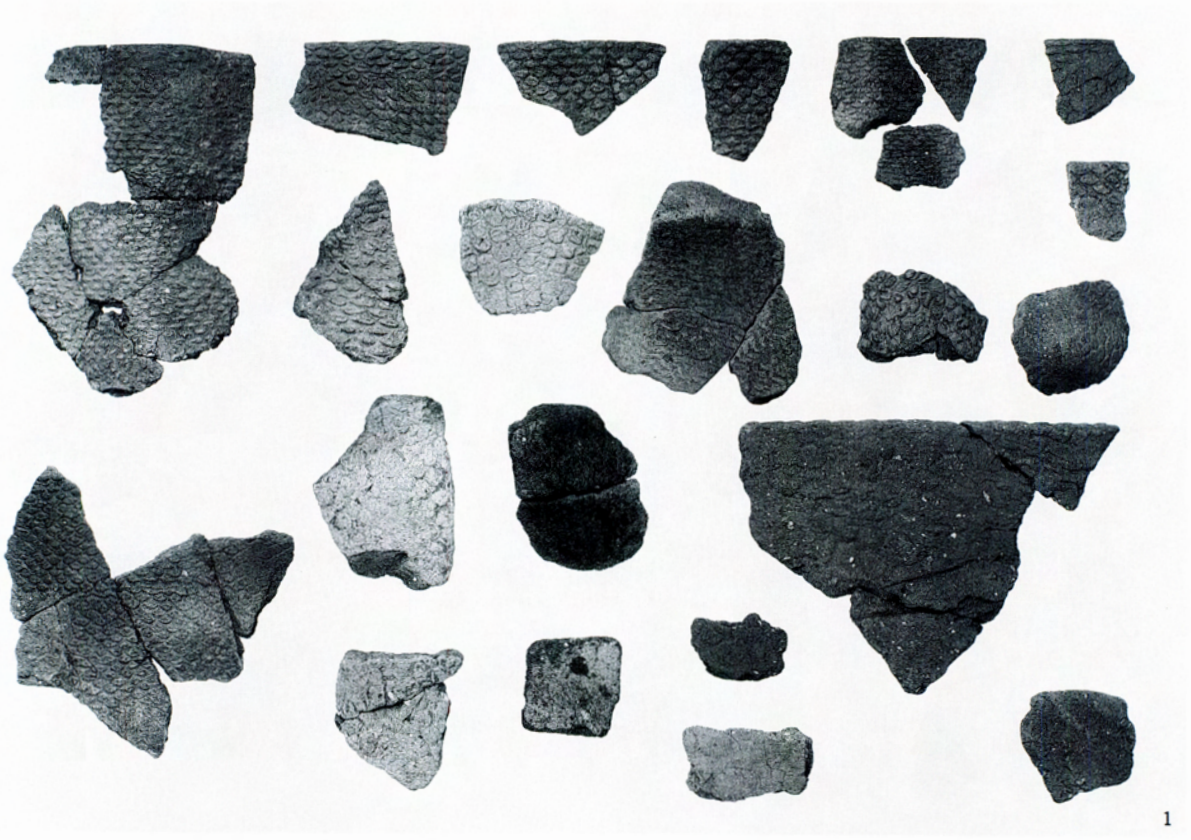
1

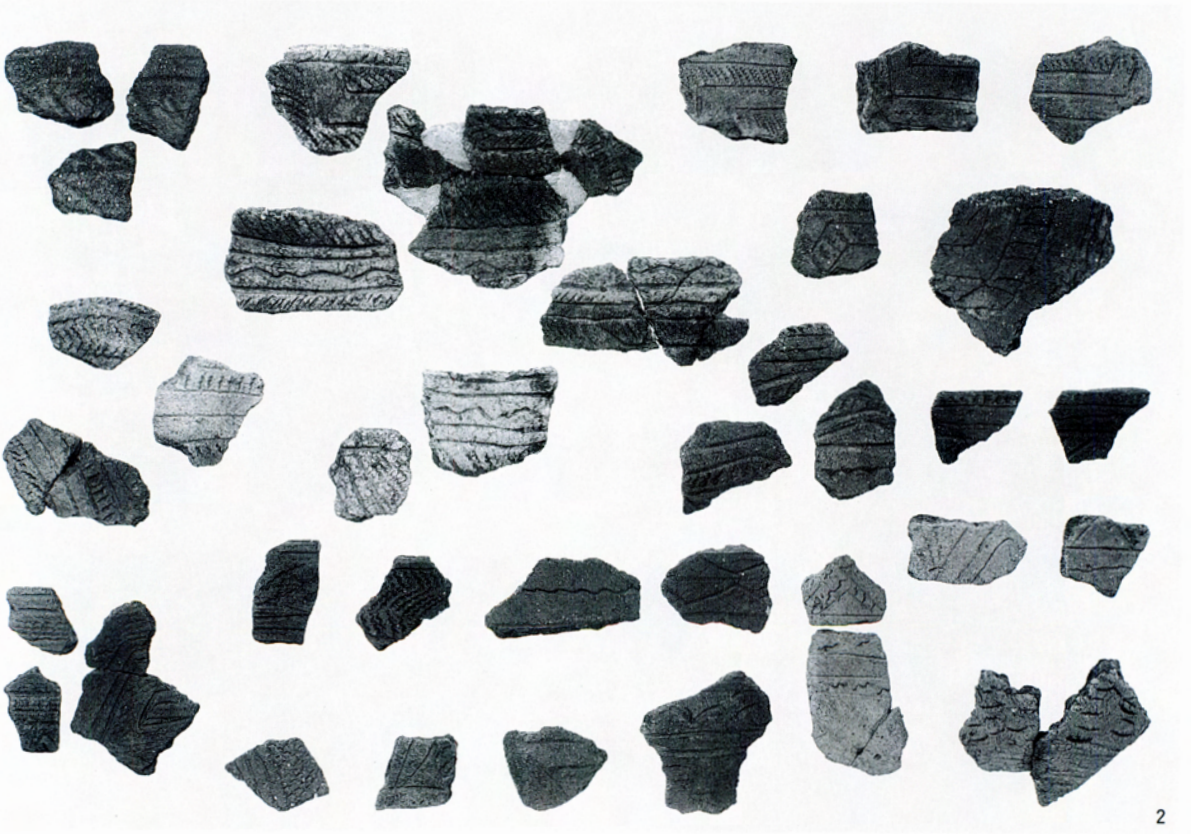


2

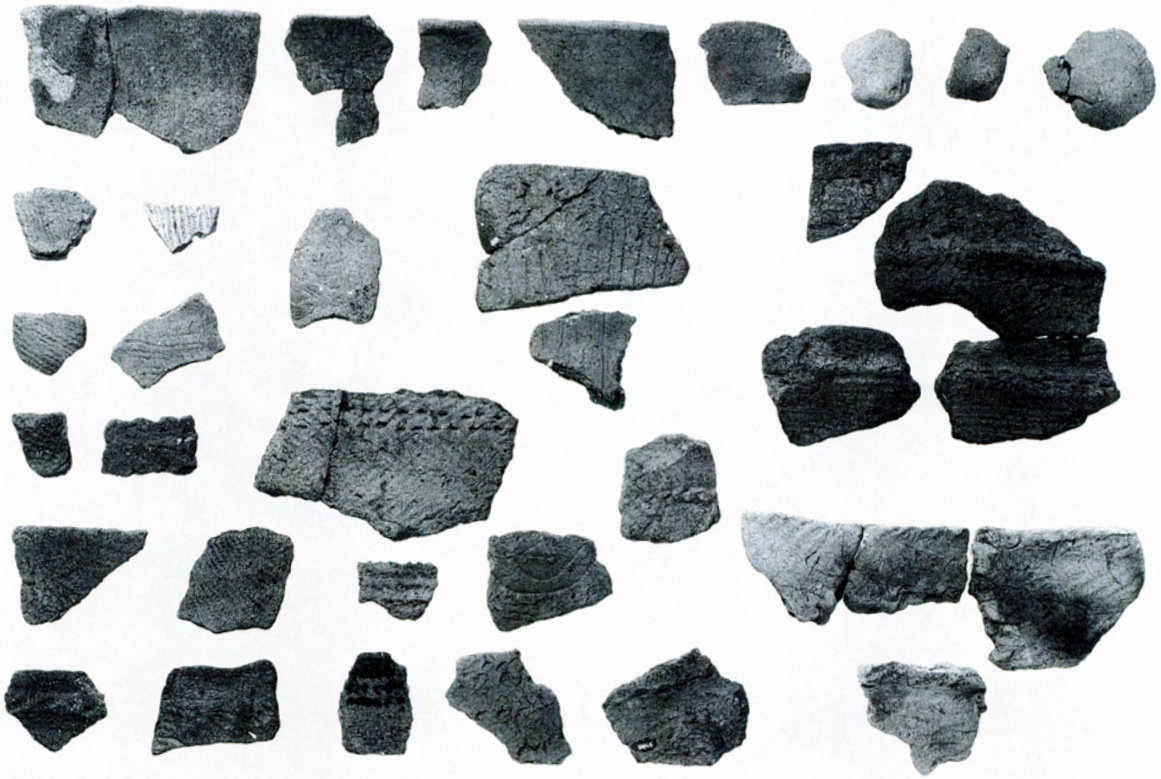
1・2．包含層出土縄文土器Ⅰ群

図版26

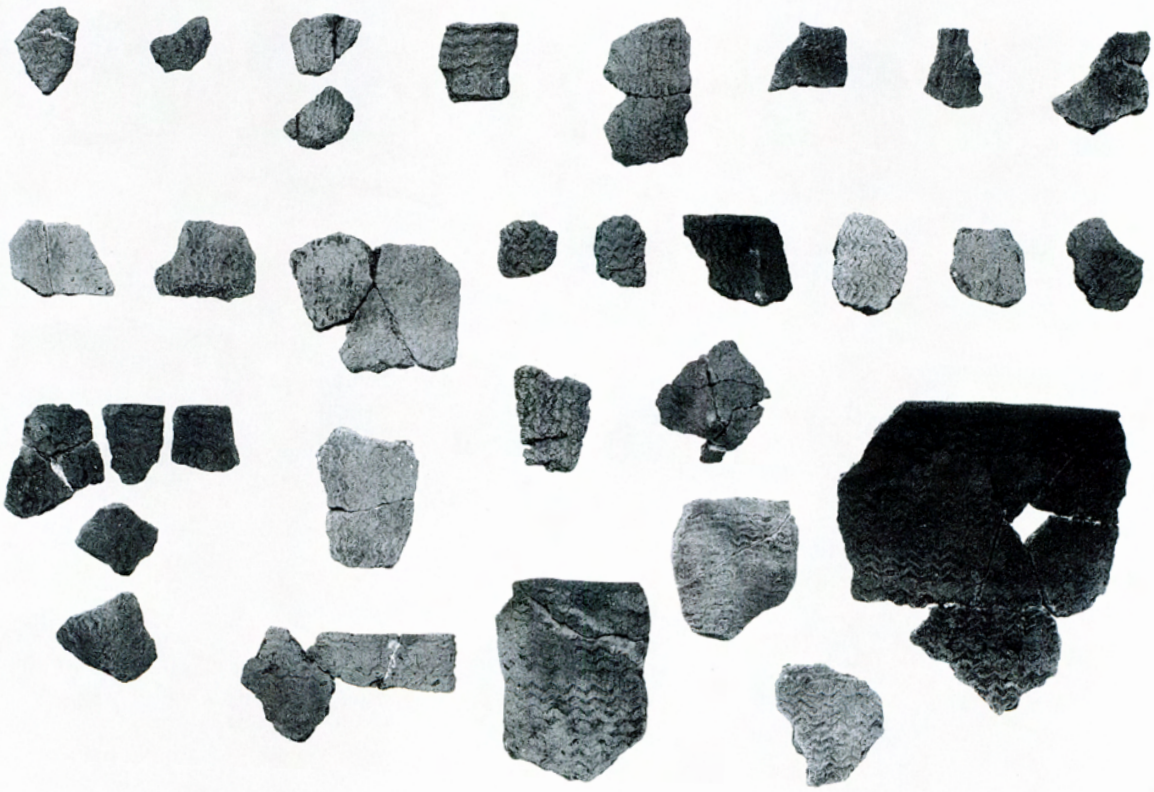




1・2．包含層出土縄文土器Ⅰ群



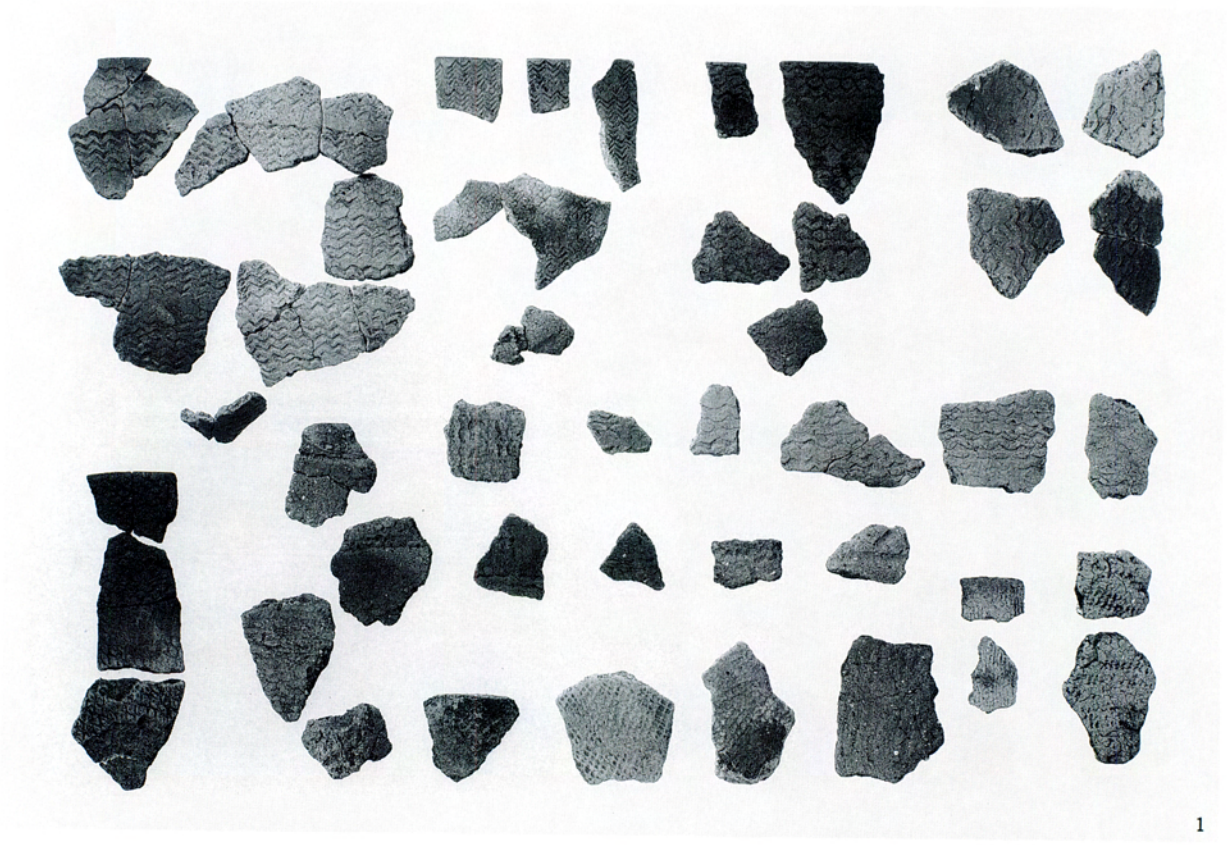
1



2

1・2．包含層出土縄文土器Ⅰ群

図版28

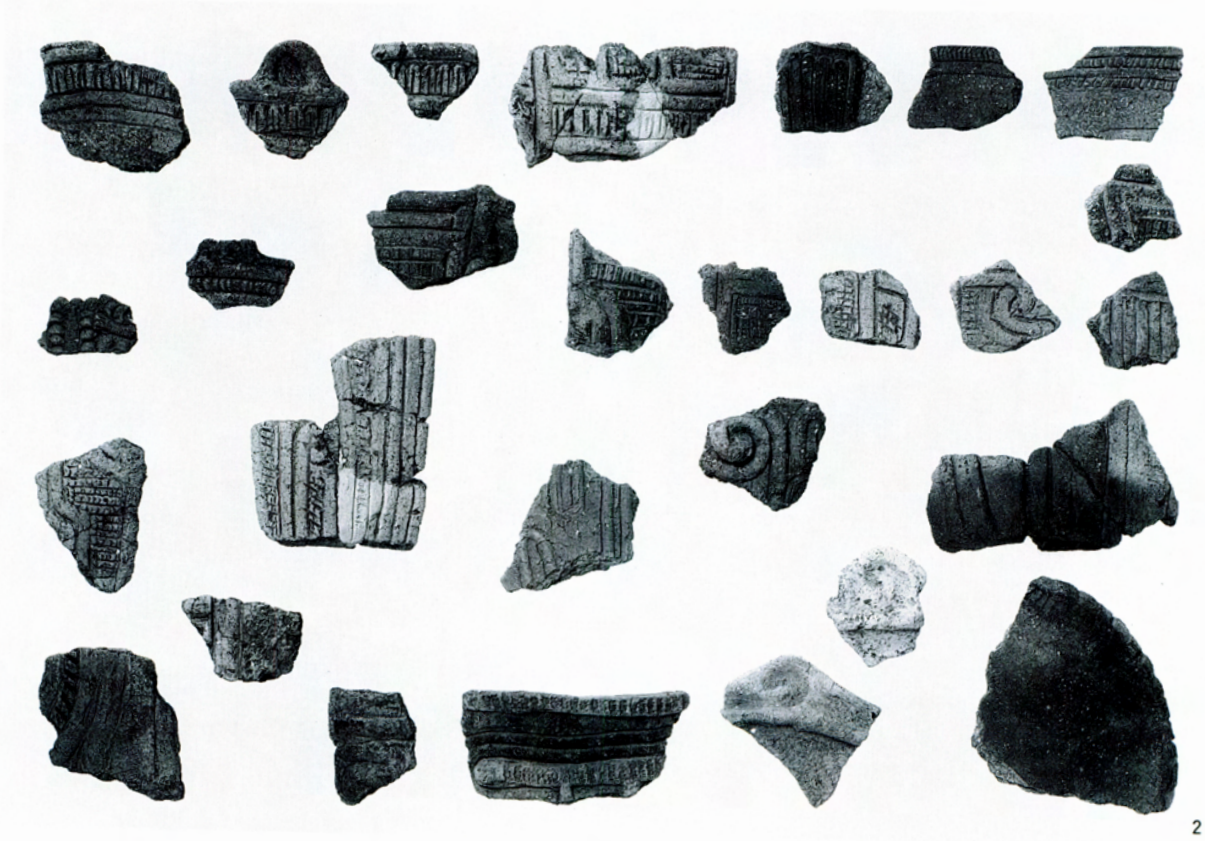


1

2

1．包含層出土縄文土器Ⅰ群　2．包含層出土縄文土器Ⅱ群

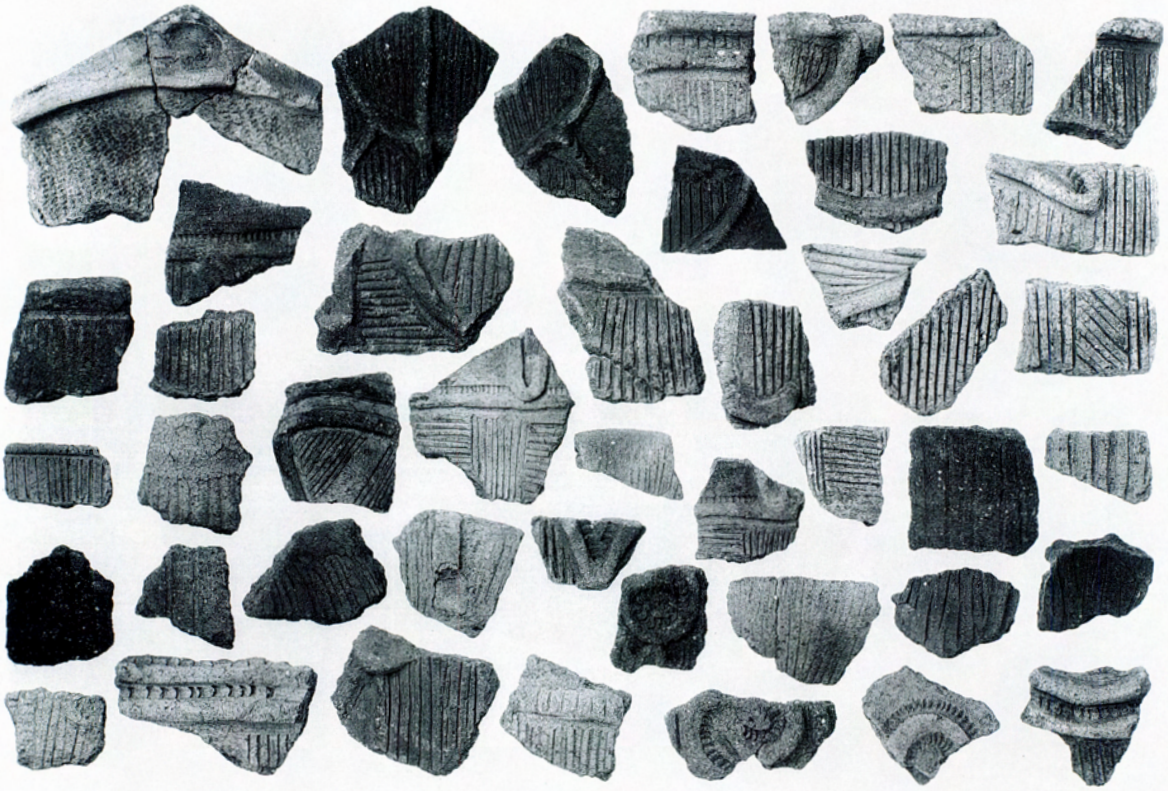
1



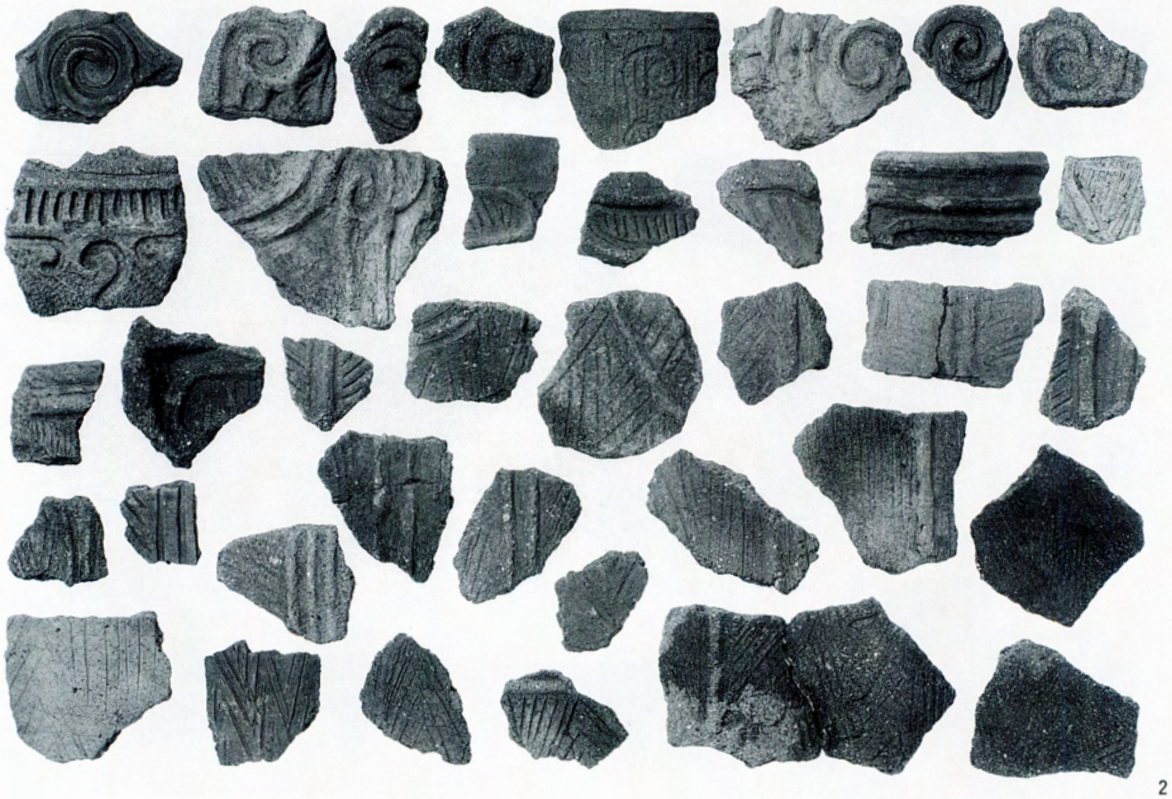
2

1．2．包含層出土縄文土器Ⅲ群1～4類

図版30

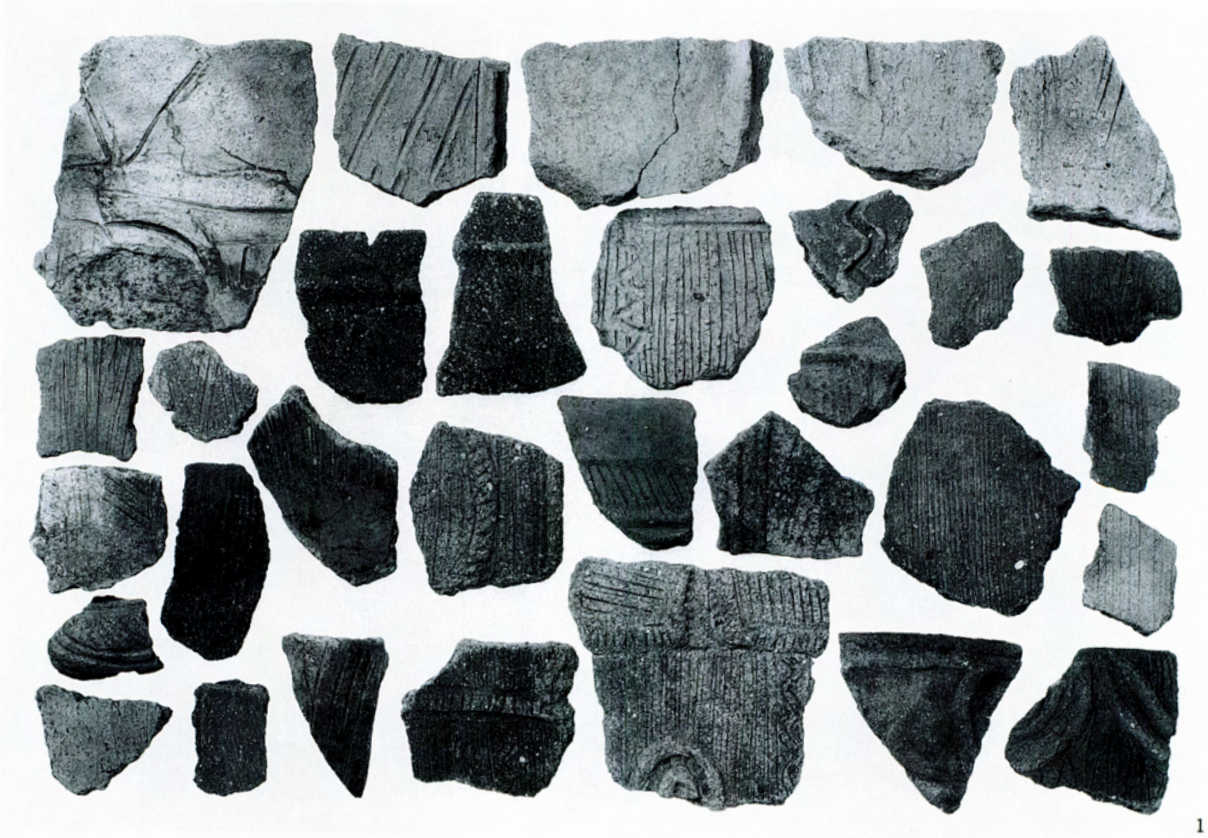


1

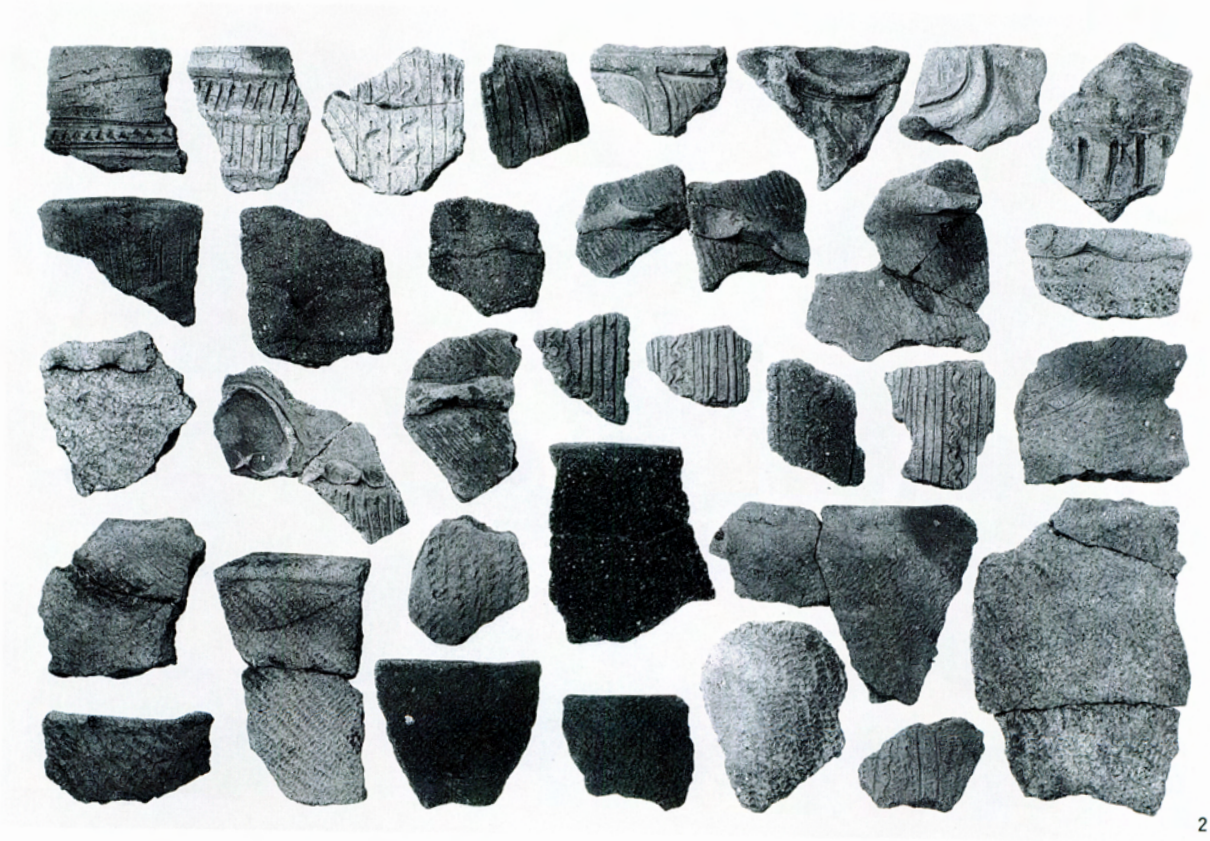


2

1．2．包含層出土縄文土器Ⅲ群５類

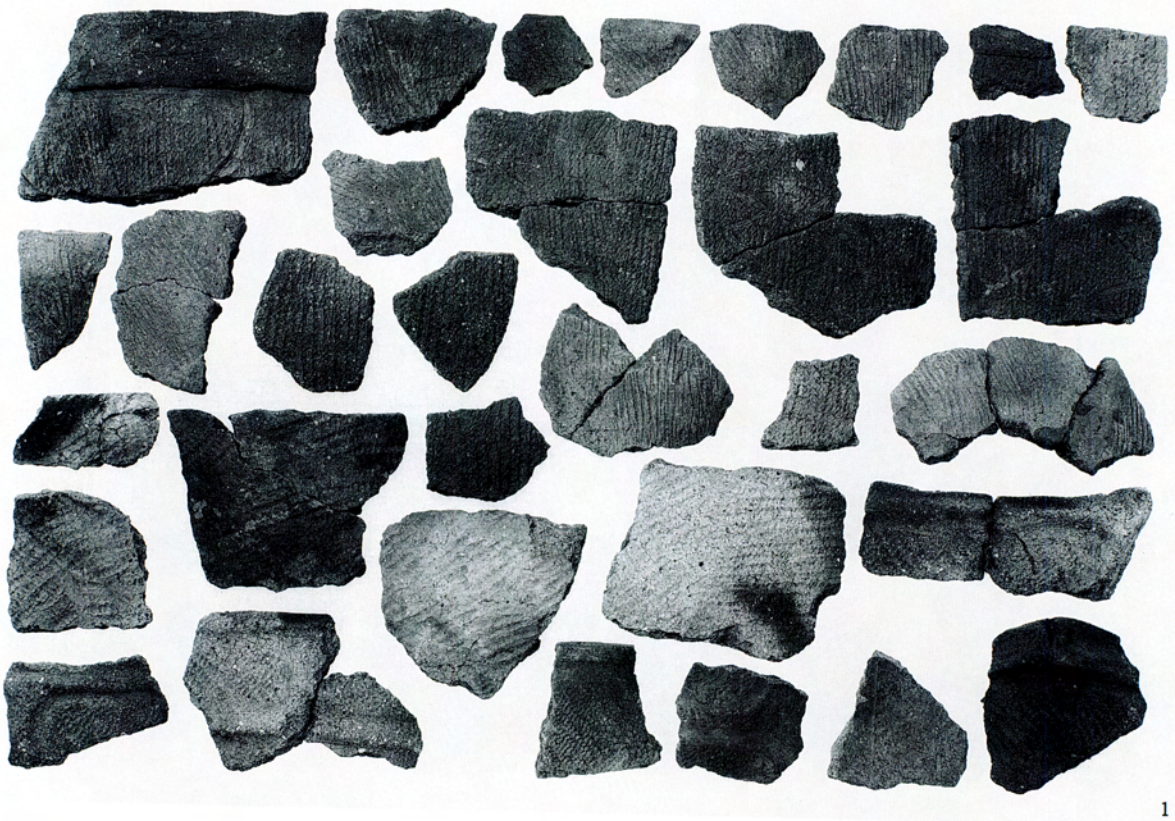


1



2

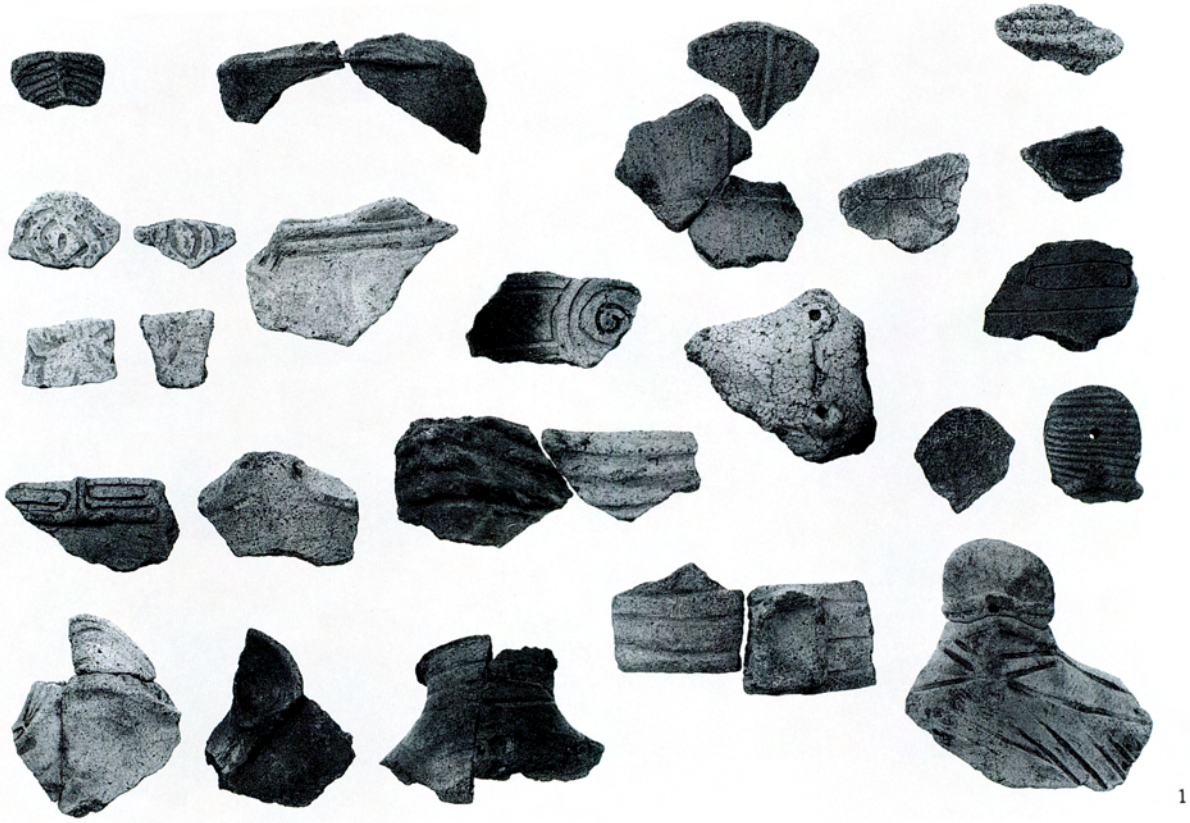
1．2．包含層出土縄文土器Ⅲ群5～9類



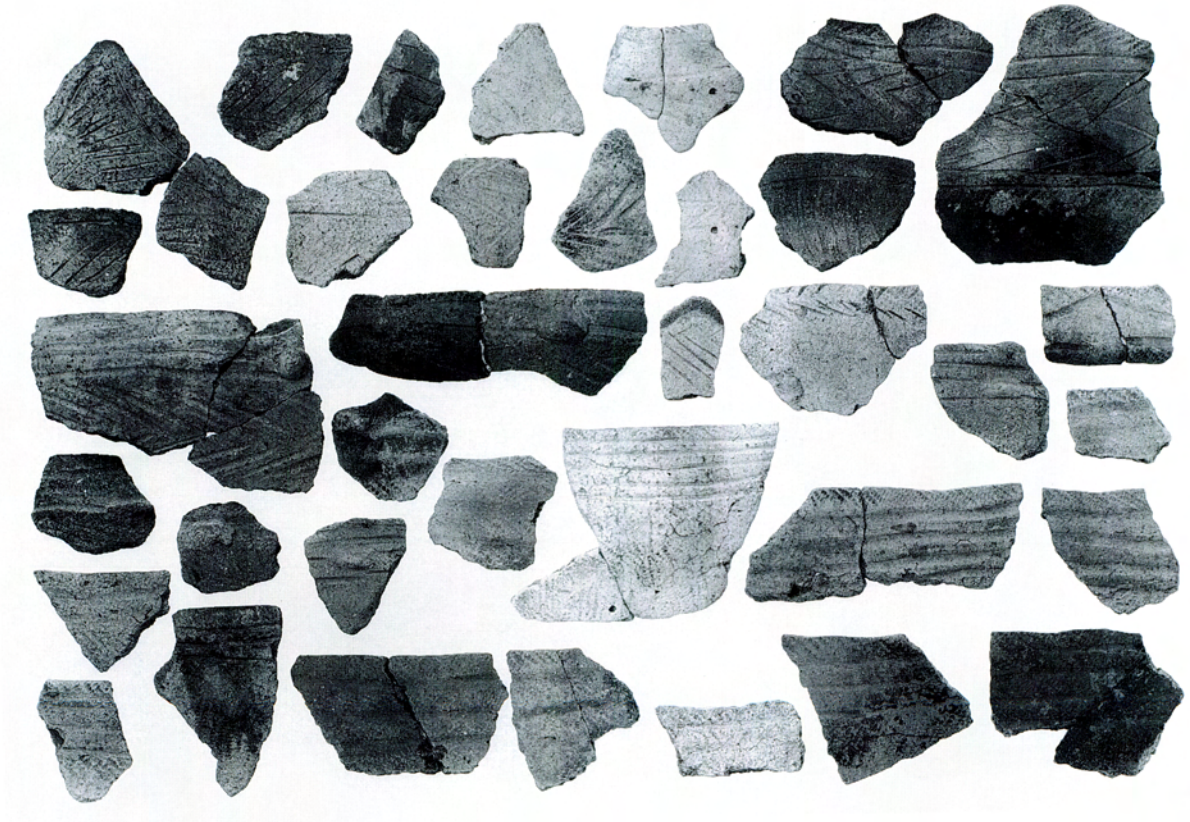
1

2

1．2．包含層出土縄文土器III群9・10類



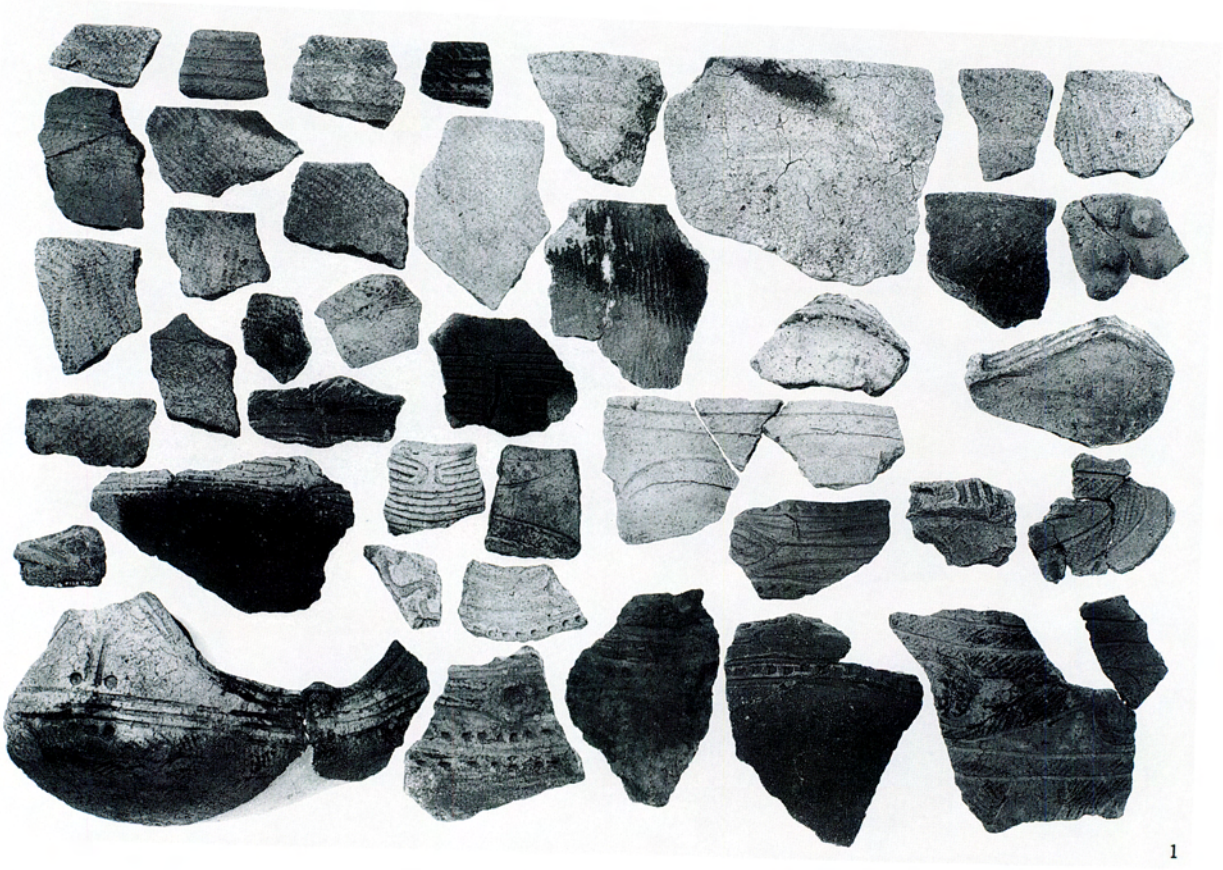
1



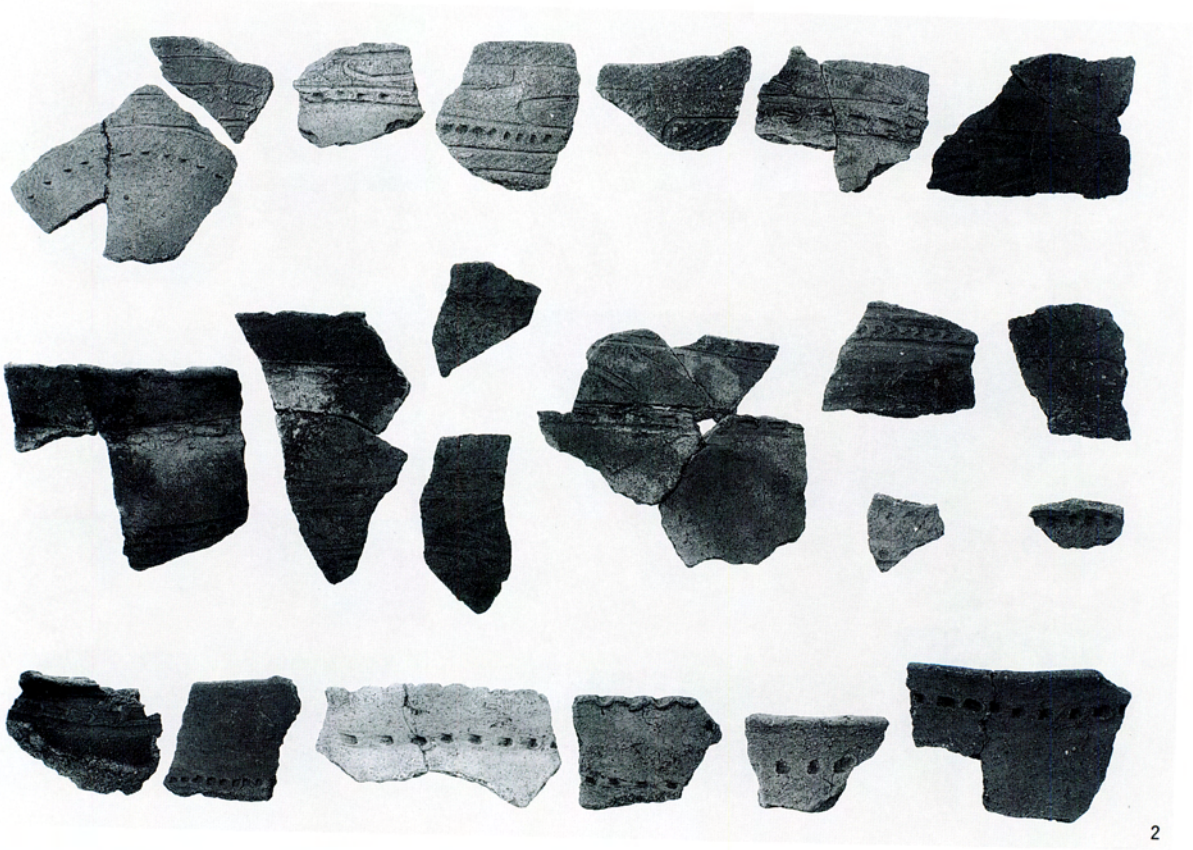
2

1．包含層出土縄文土器Ⅳ群１・２類　２．包含層出土縄文土器Ⅳ群２類

図版34



1



2

1．包含層出土縄文土器Ⅳ群２・３類　2．包含層出土縄文土器Ⅳ群３類

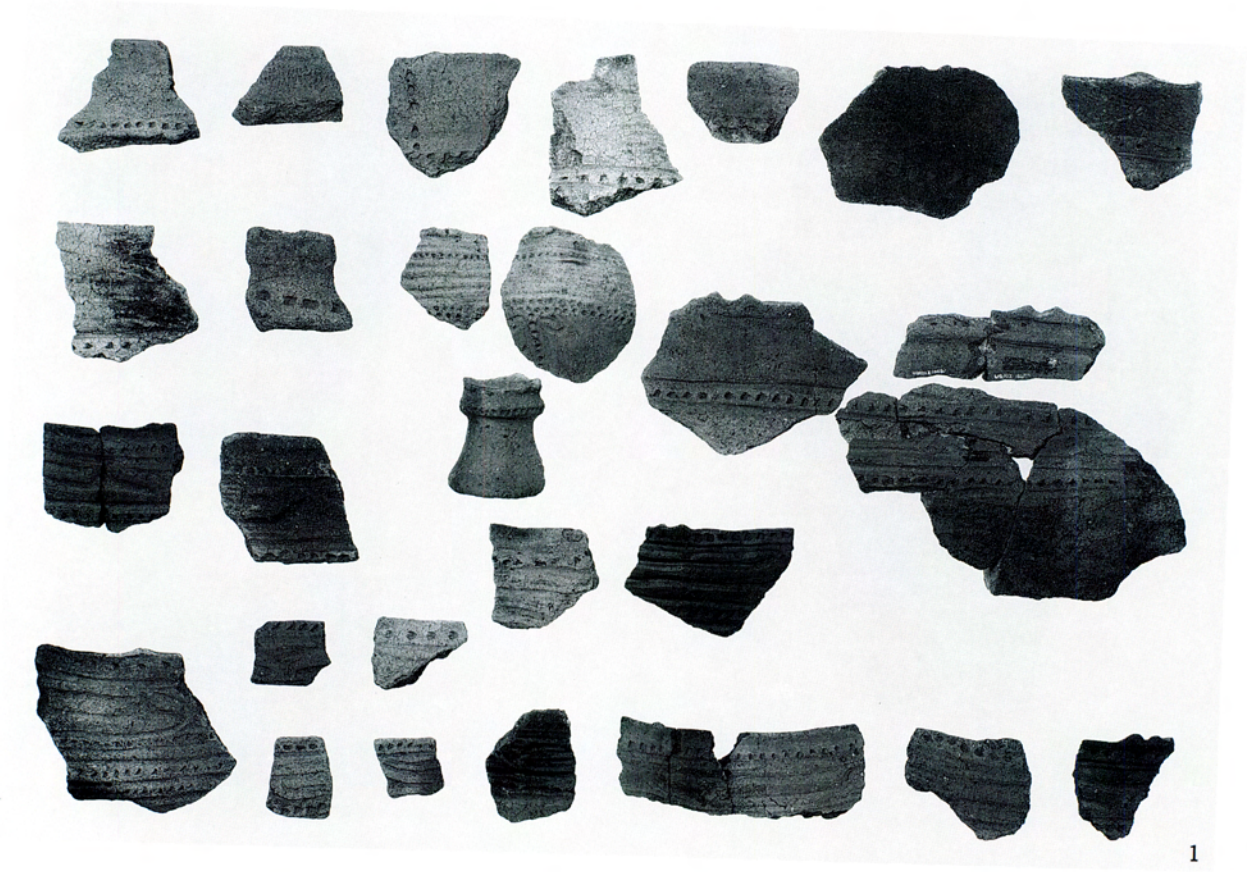
1

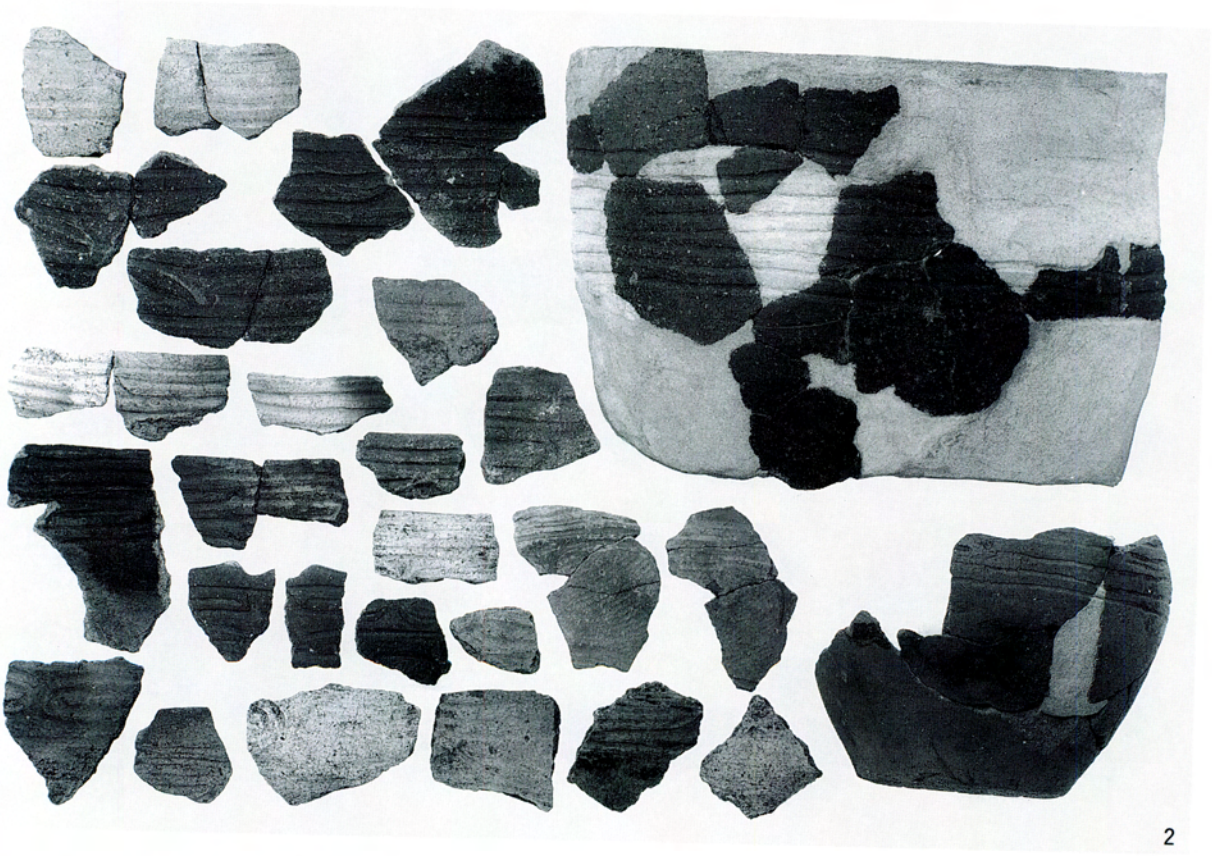
2

3

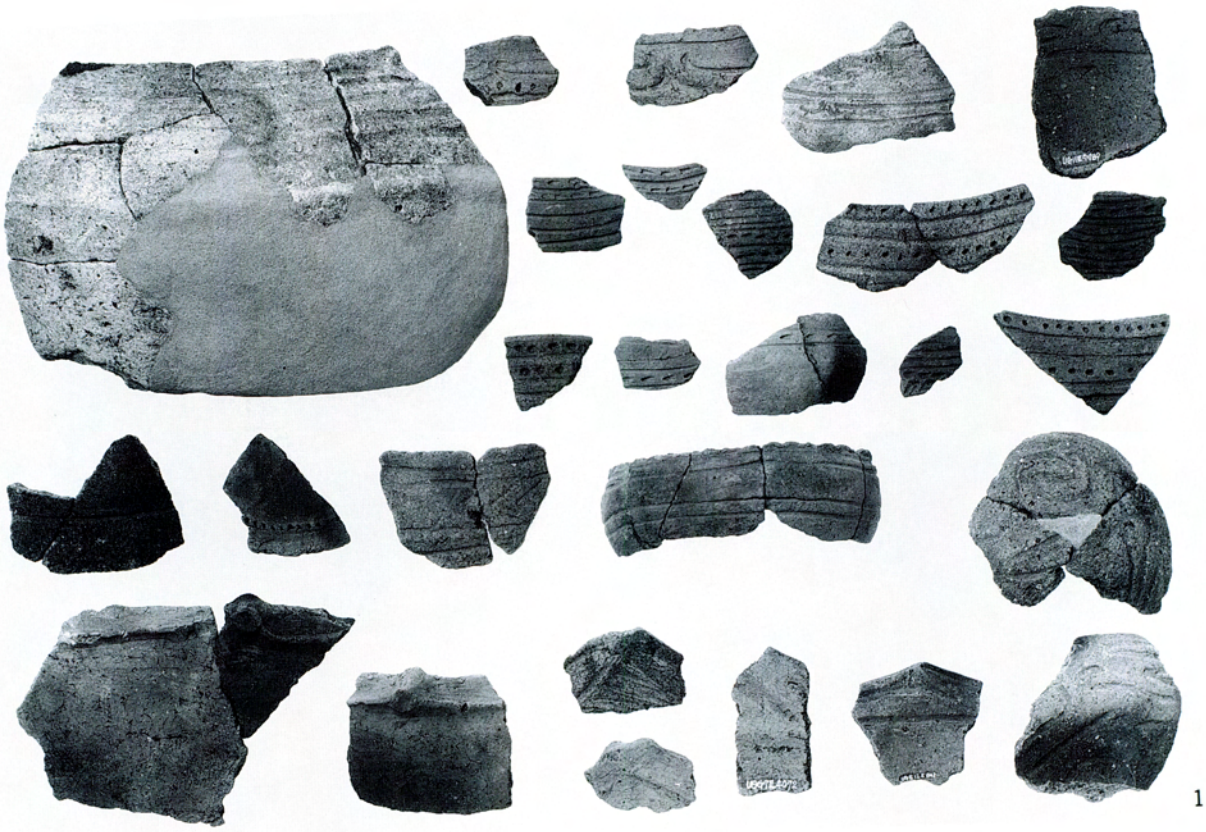
4

1～4．包含層出土縄文土器Ⅳ群３類





1・2．包含層出土縄文土器Ⅳ群３類



1

2

1・2．包含層出土縄文土器Ⅳ群３類

図版38

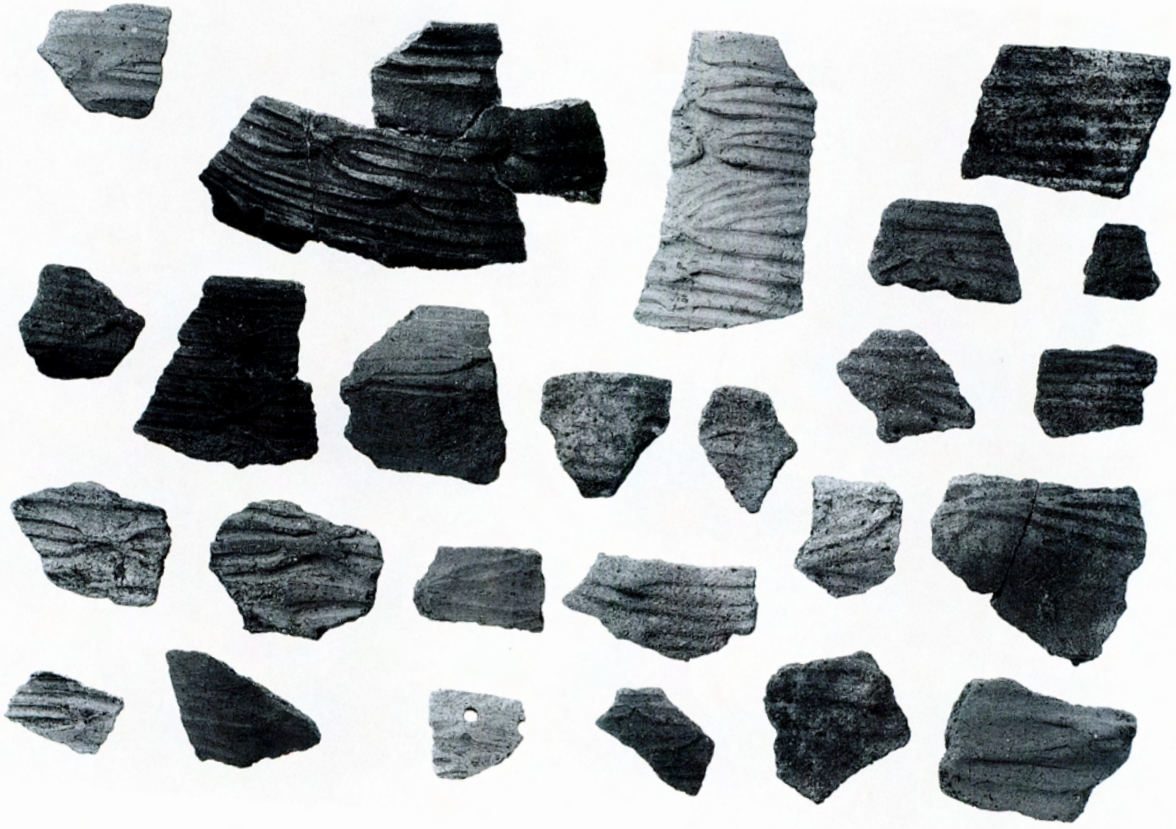
1

2

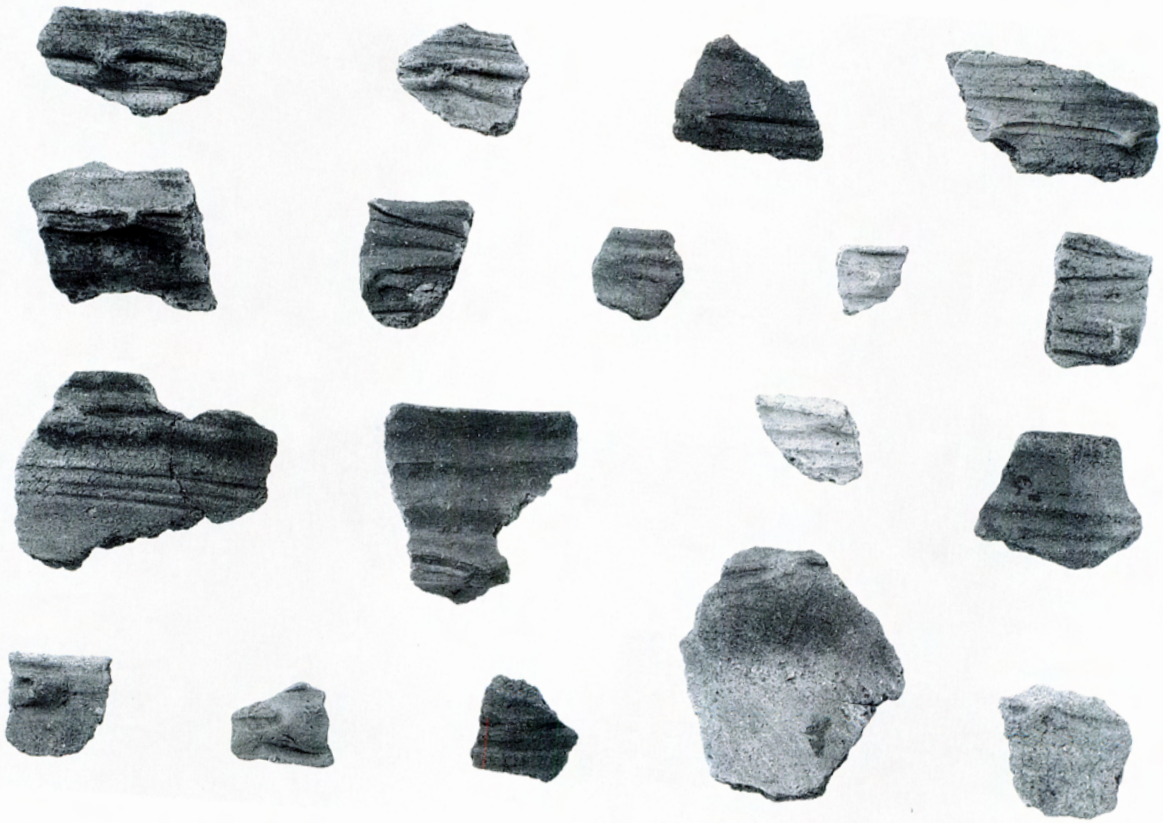
3

4

1～4．包含層出土縄文土器Ⅳ群３類

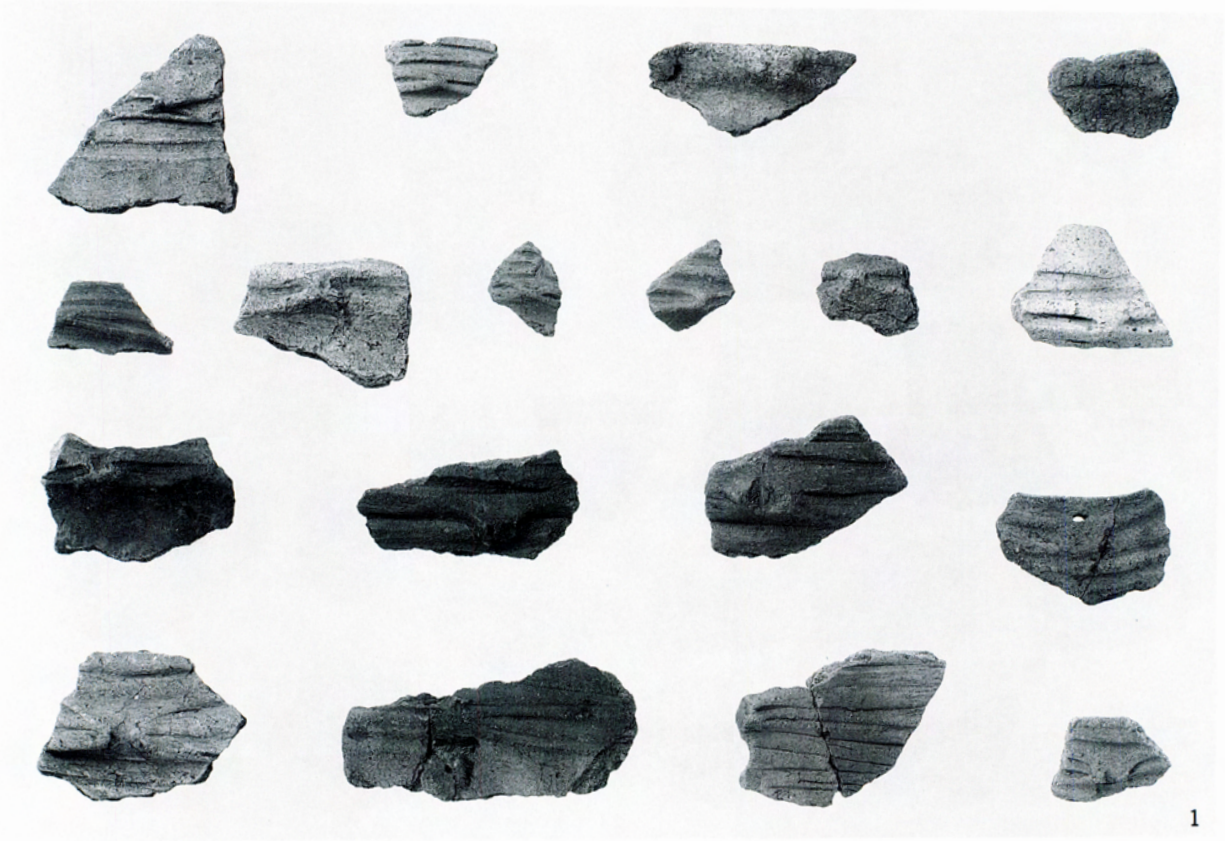


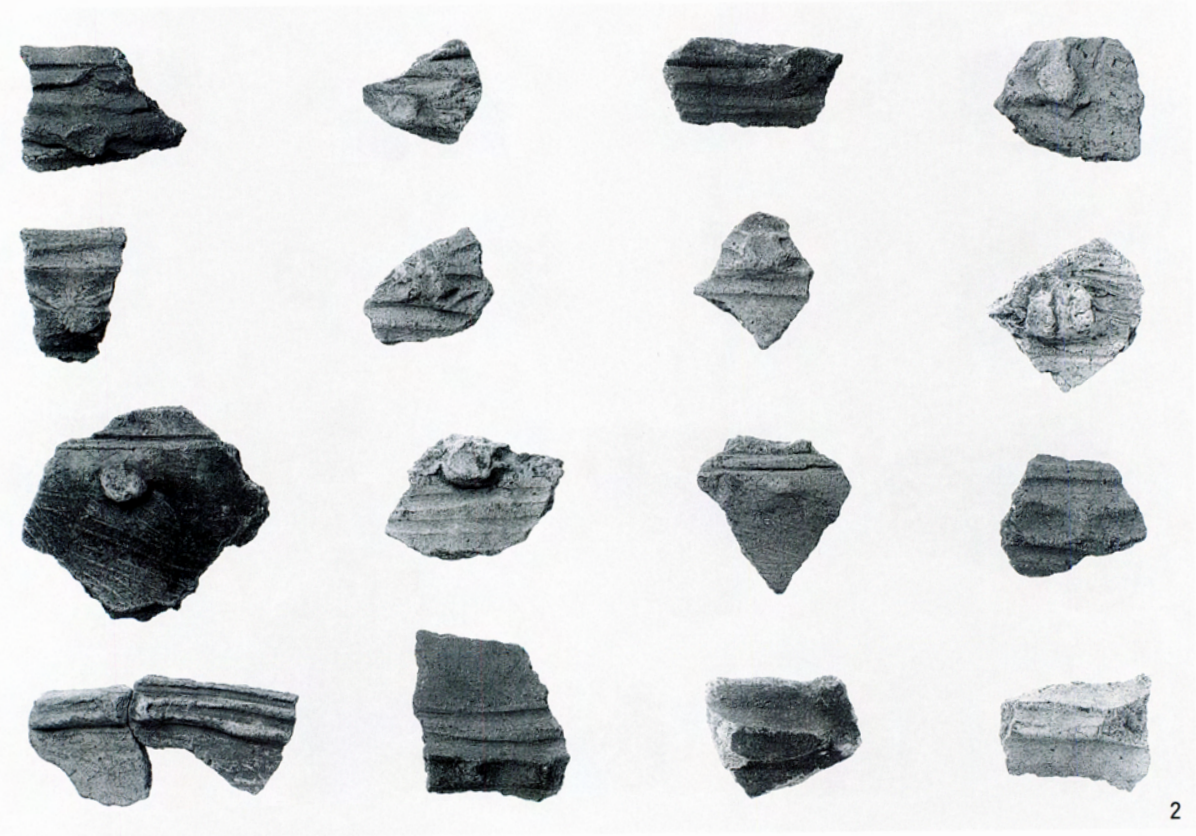
1



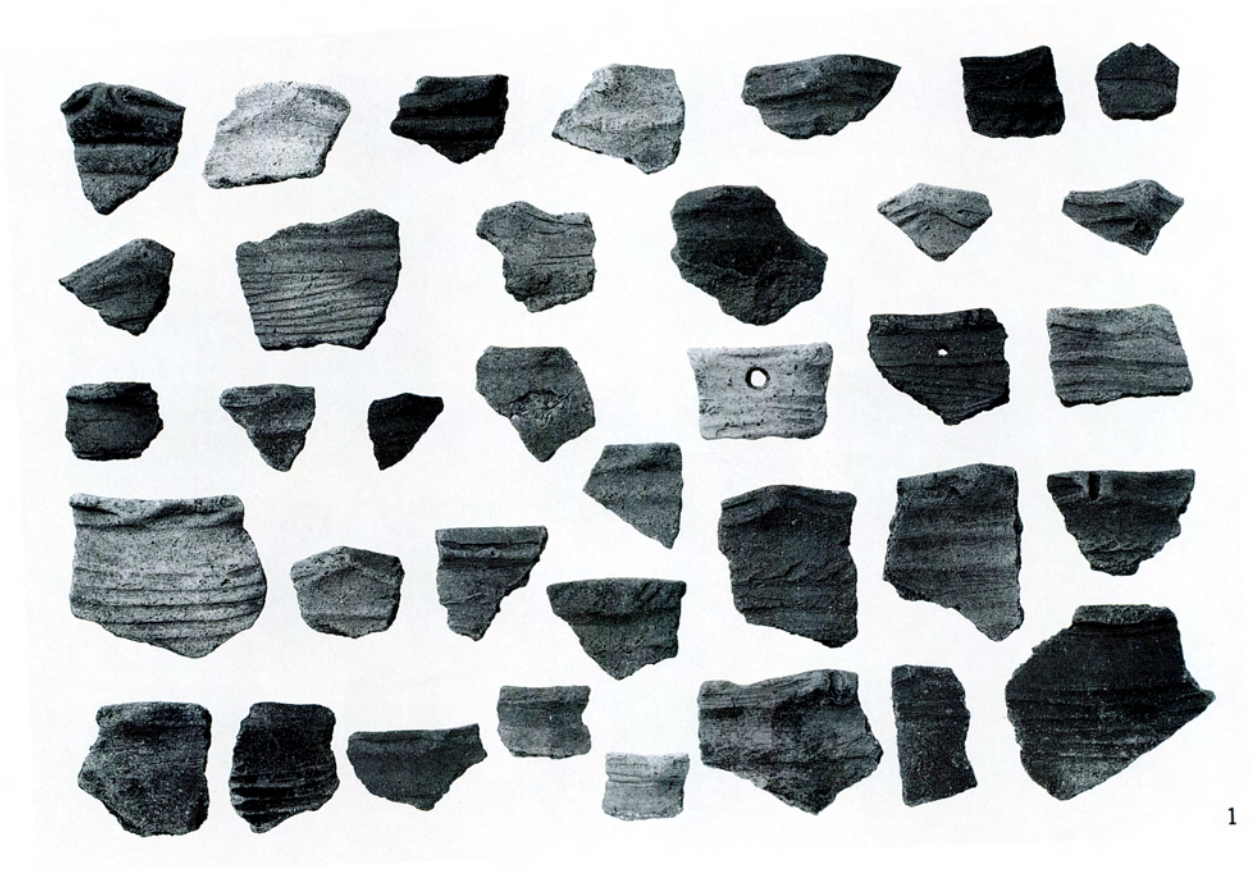
2

1・2．包含層出土縄文土器Ⅳ群４類

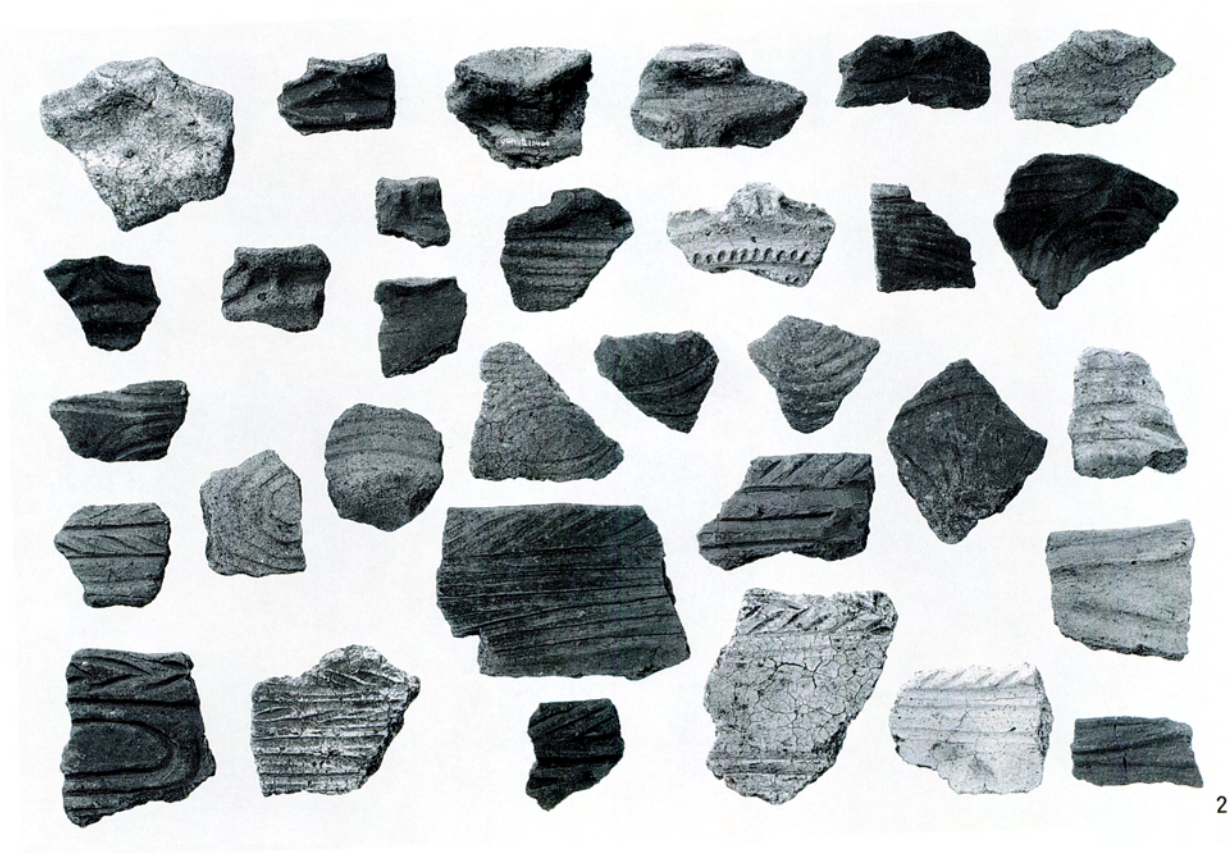




1・2．包含層出土縄文土器Ⅳ群４類

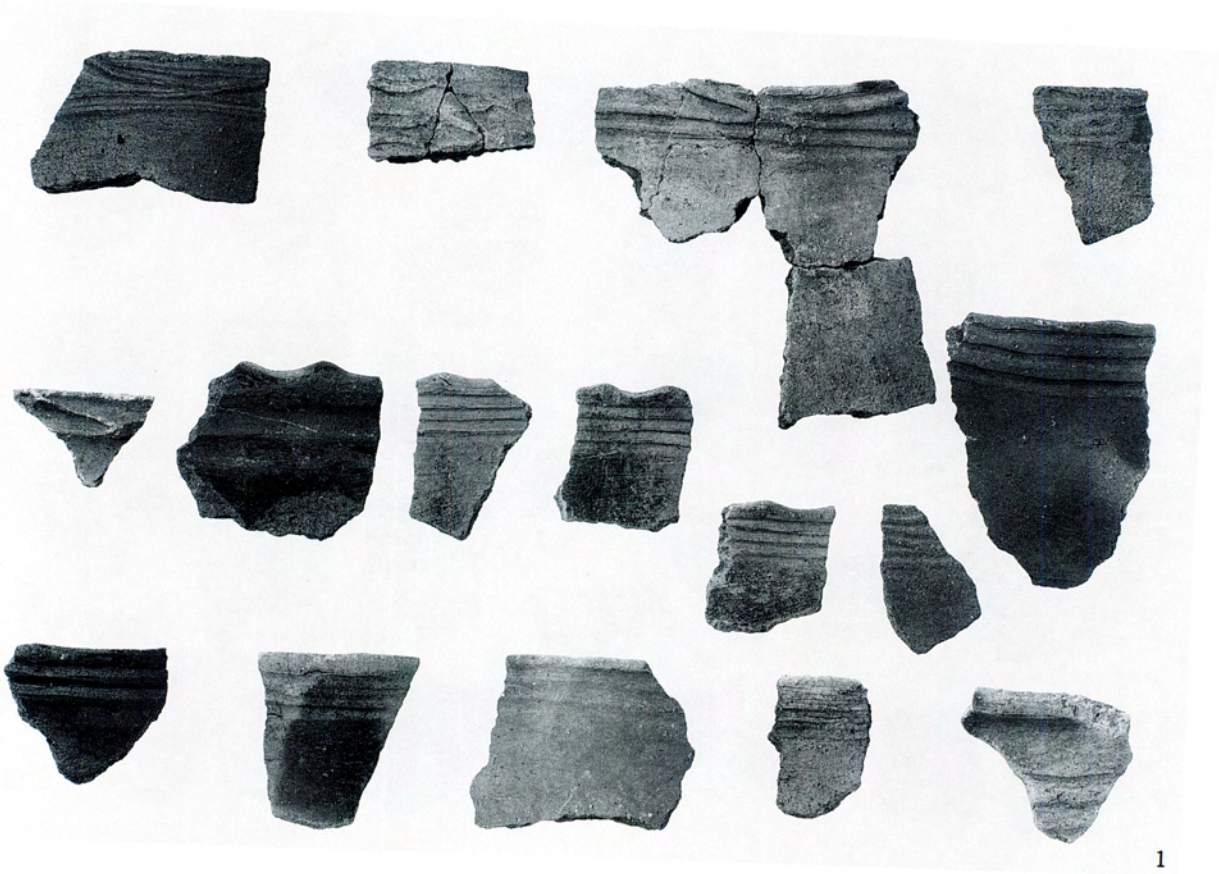


1

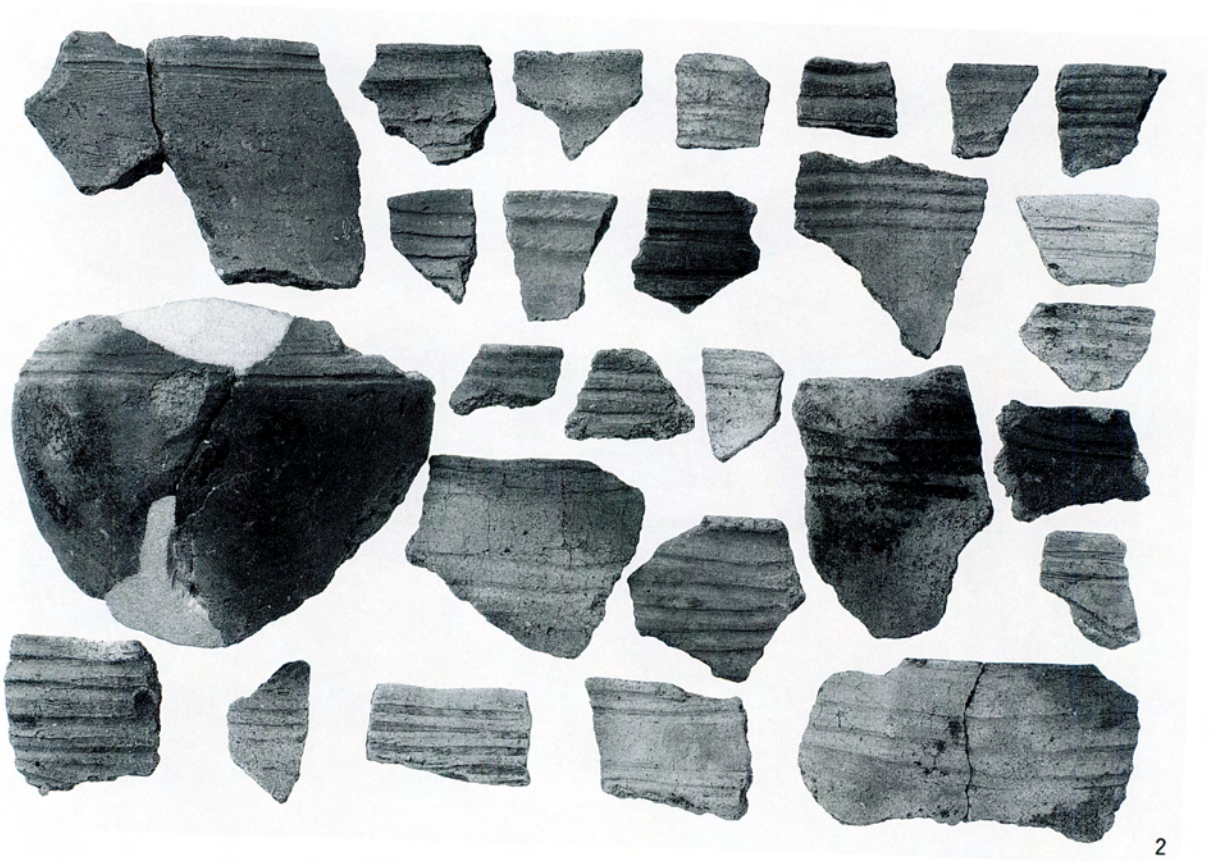


2

1・2．包含層出土縄文土器Ⅳ群４類



1



2

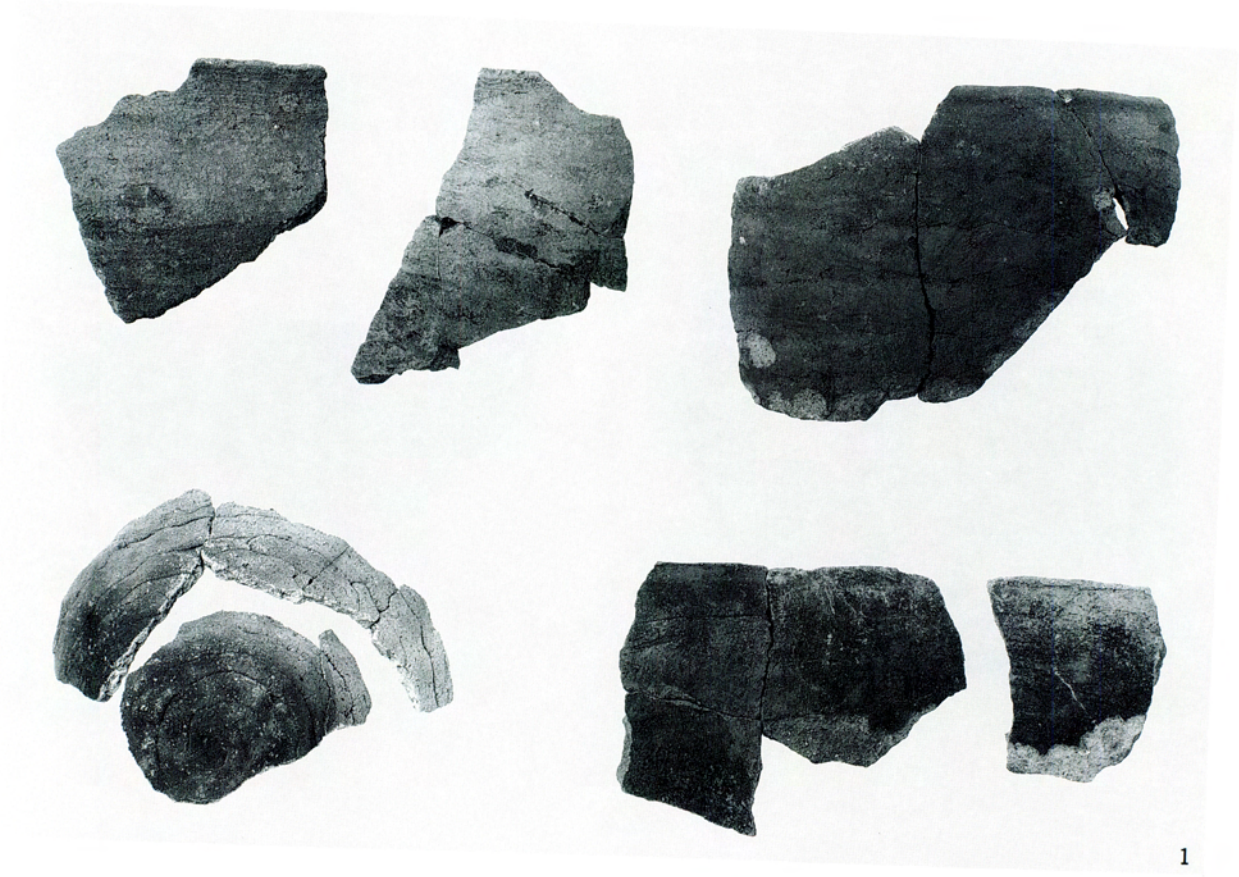
1・2．包含層出土縄文土器Ⅳ群４類

1

2

3

1・2．包含層出土縄文土器Ⅳ群４類　3．包含層出土縄文土器Ⅳ群５類



1～3．包含層出土縄文土器Ⅳ群５類

1

2

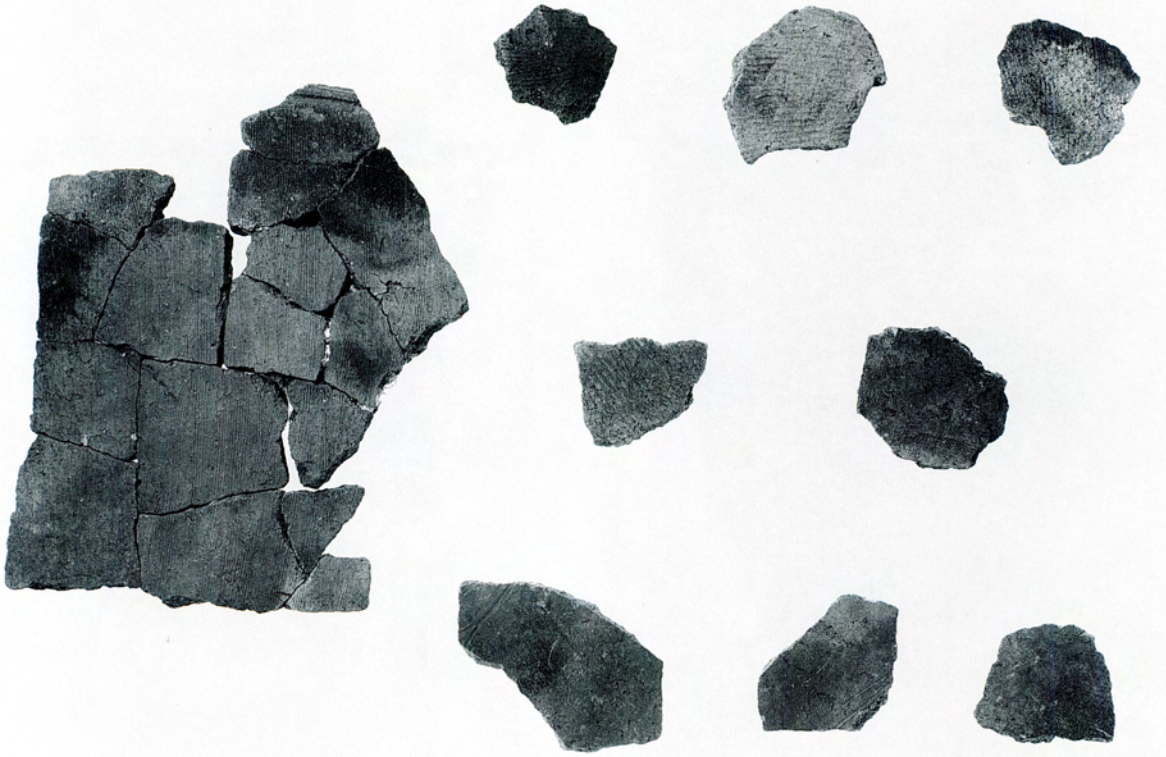
3

4

1～4．包含層出土縄文土器Ⅳ群５類

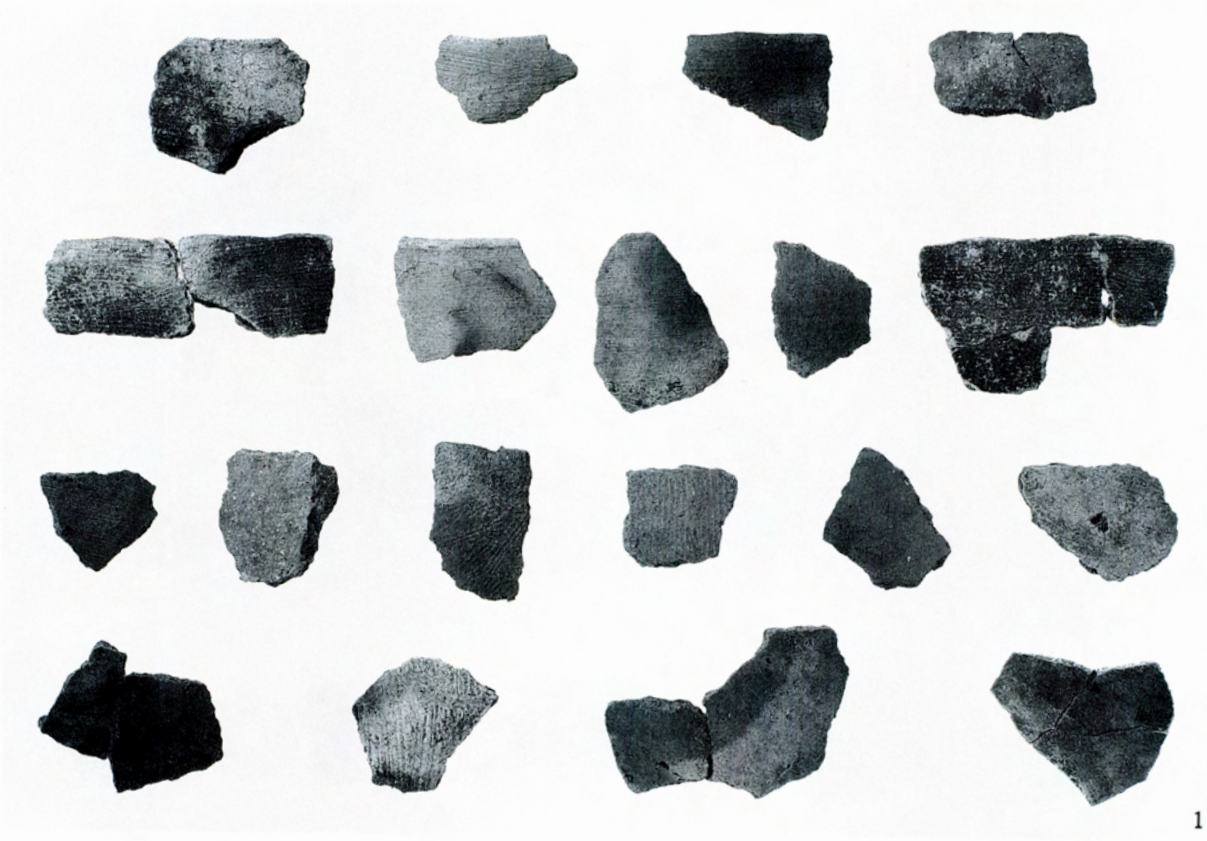
1

2

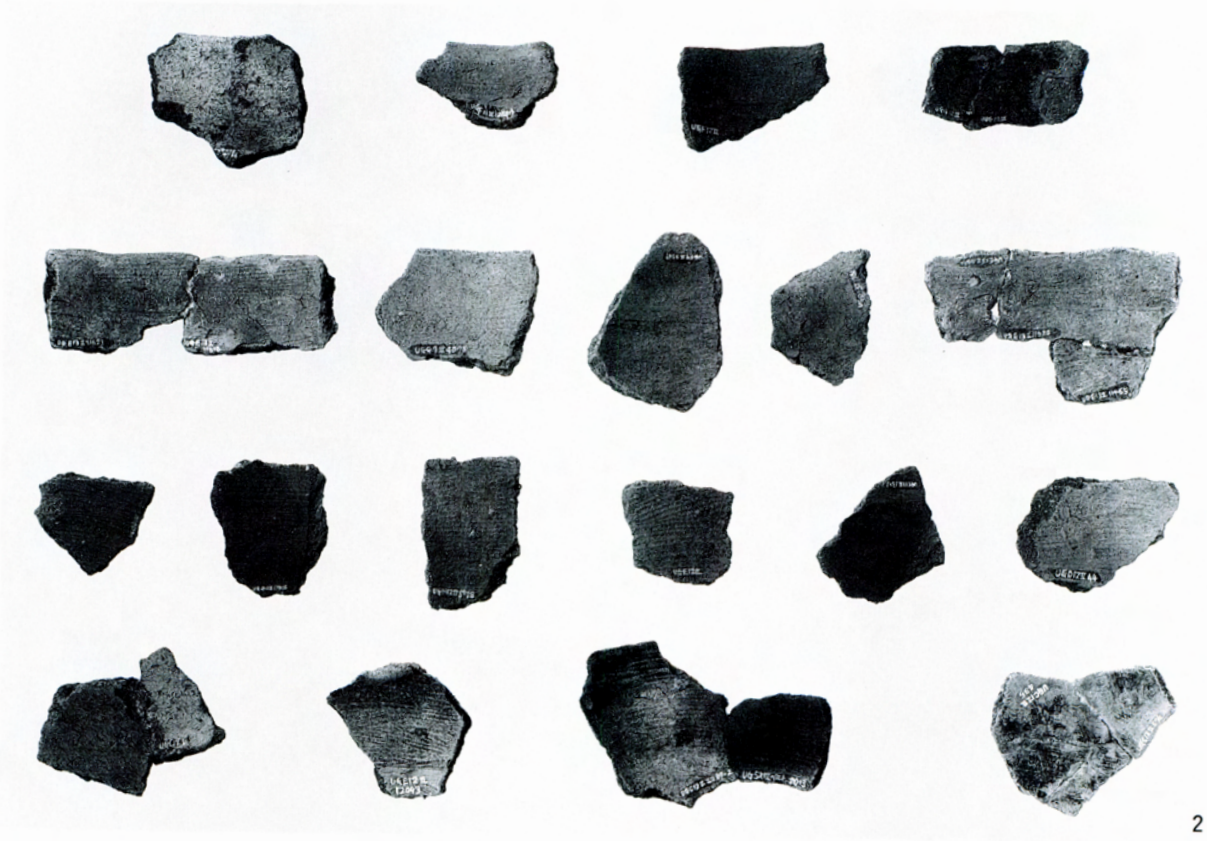


3

1～3．包含層出土縄文土器Ⅳ群５類



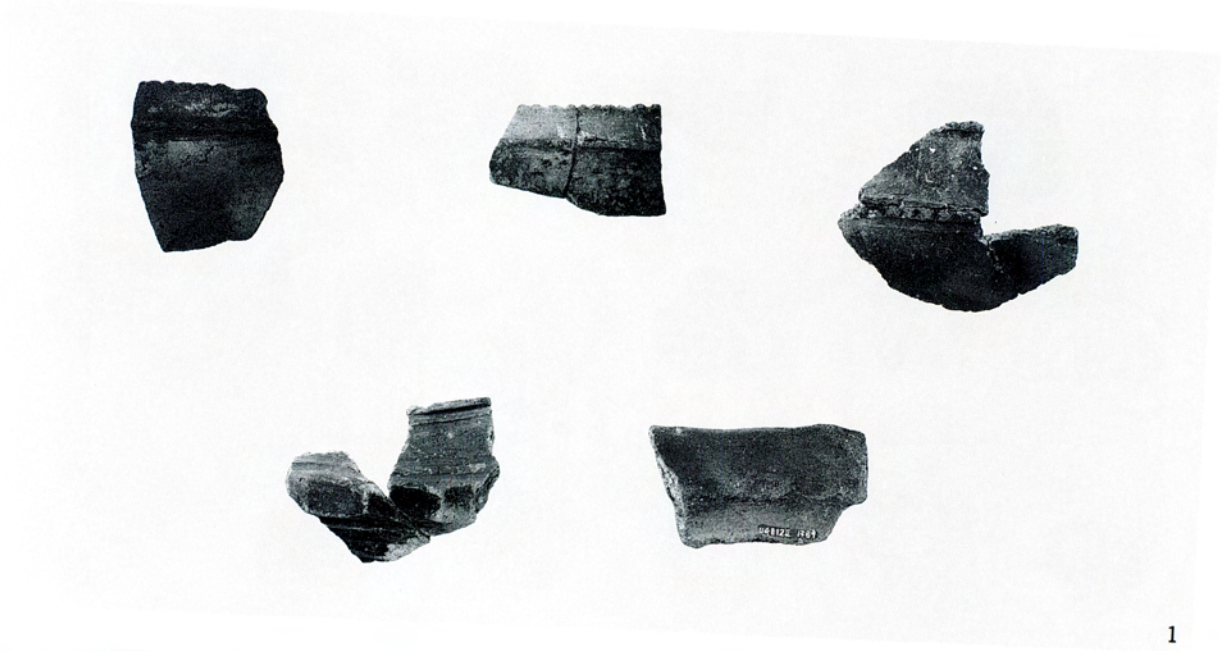
1



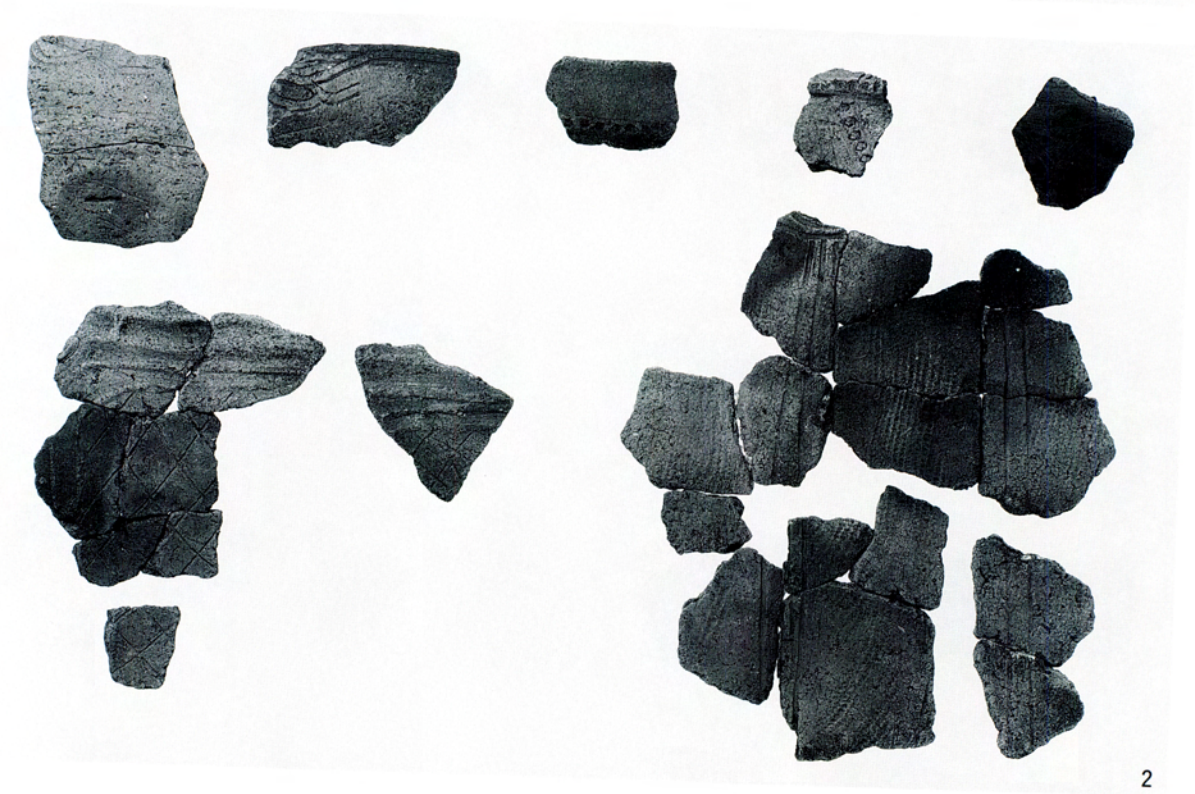
2

1・2．包含層出土縄文土器Ⅳ群５類

図版48



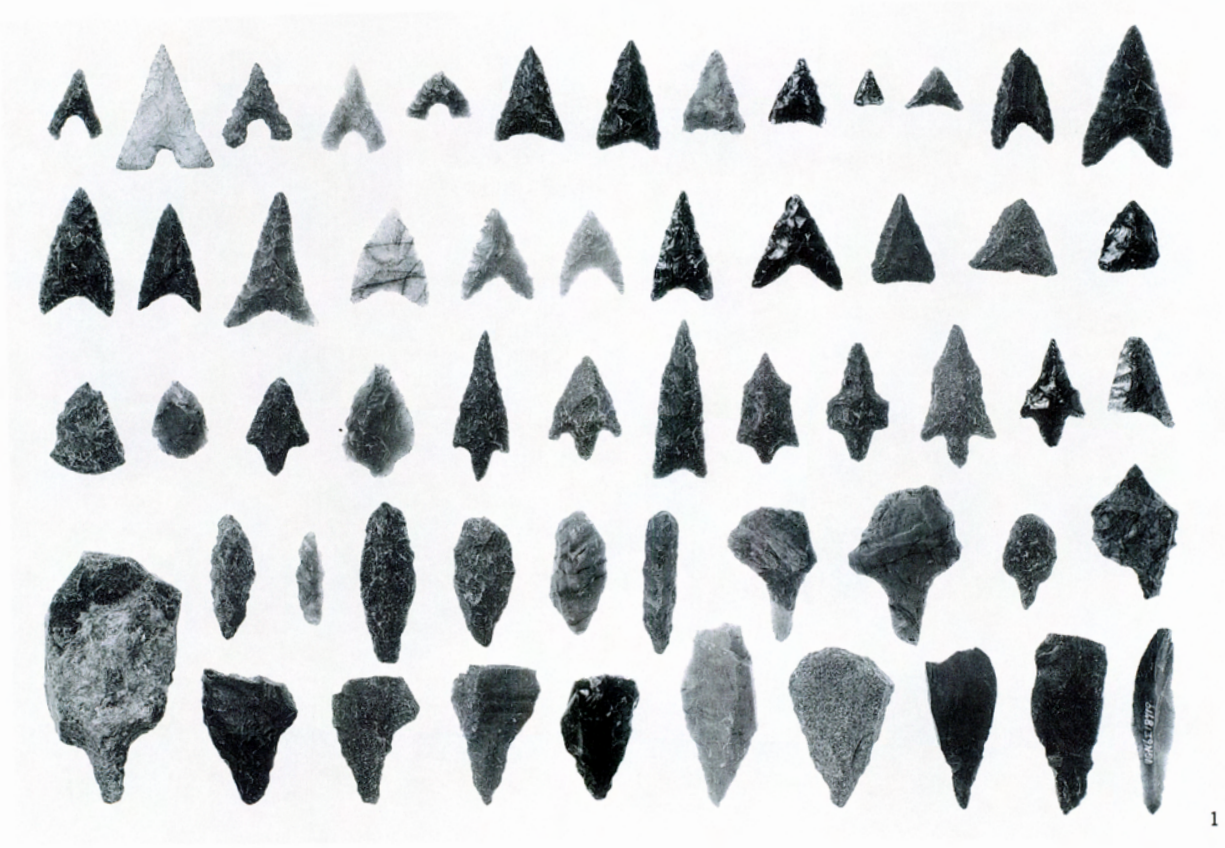
1



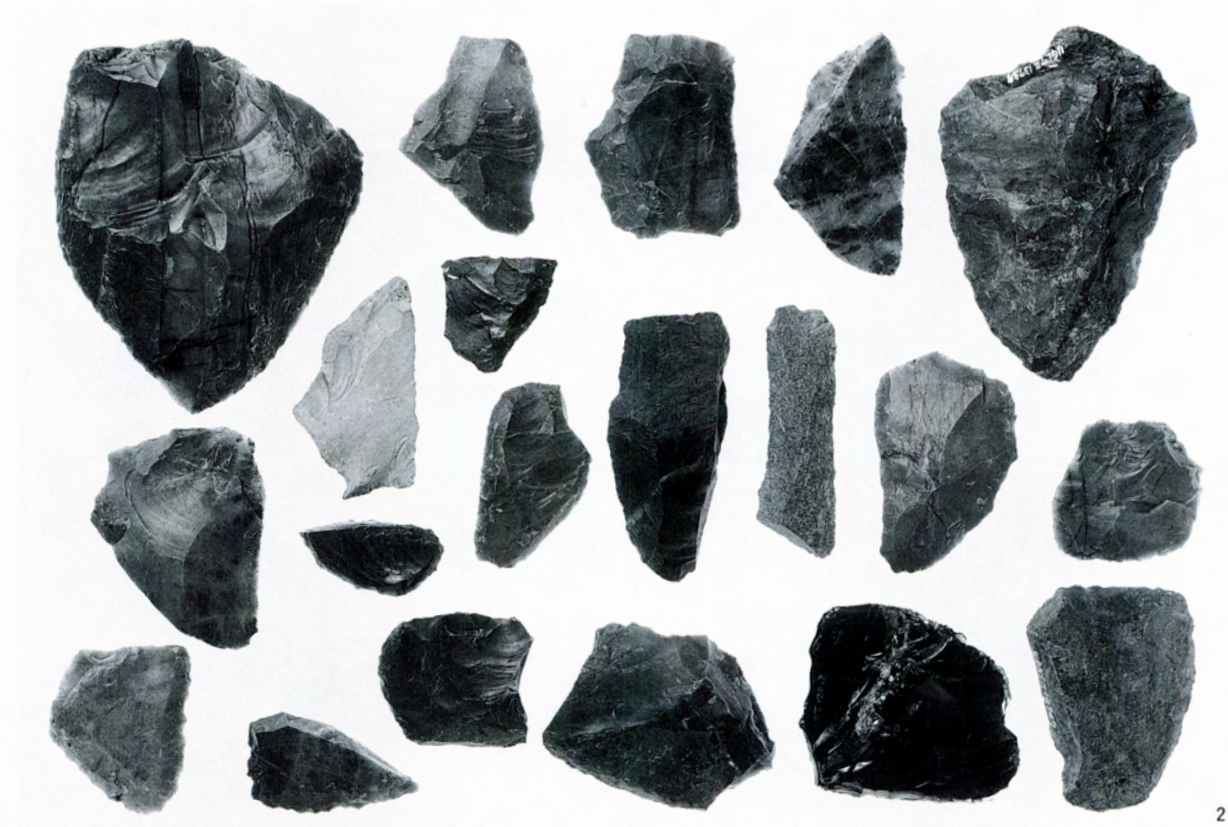
2

3

1．包含層出土縄文土器Ⅳ群６類　2．包含層出土縄文土器Ⅳ群７類
3．弥生土器・土師器



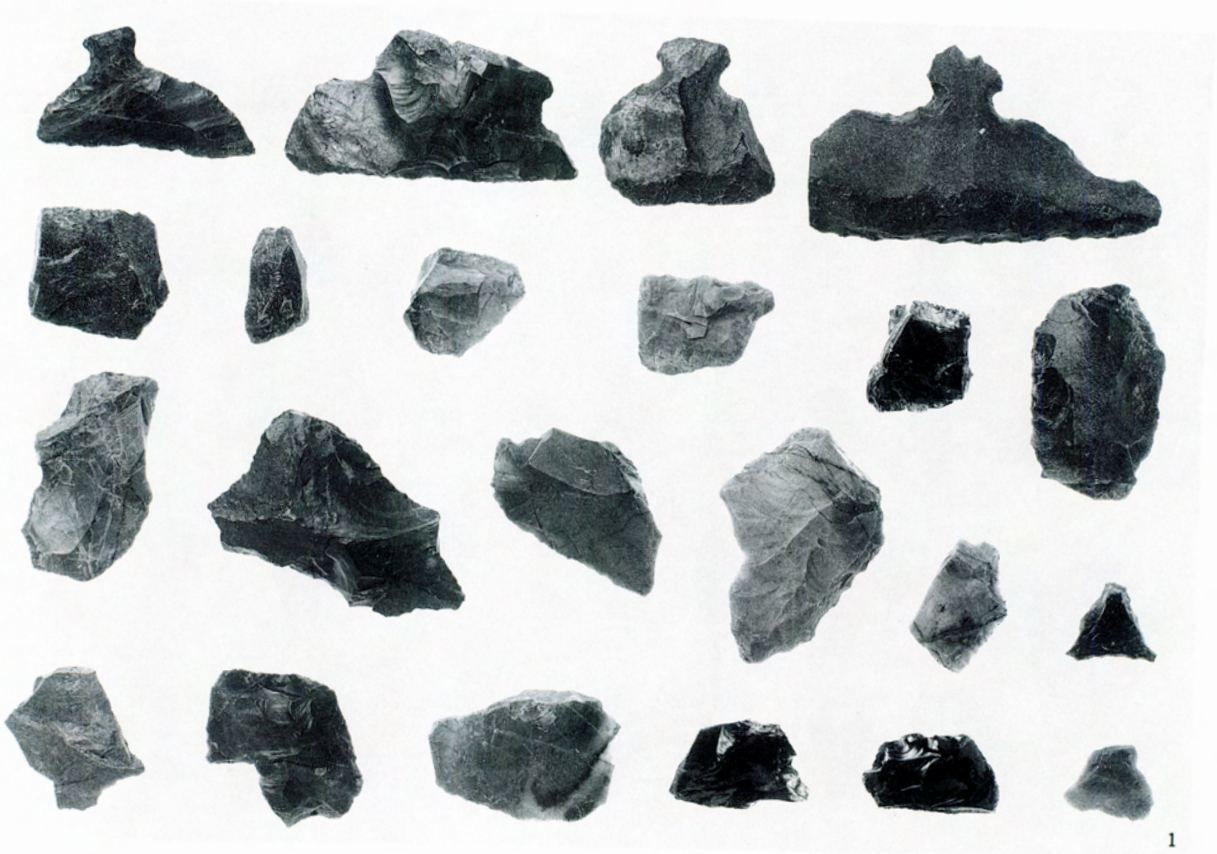
1



2

1．包含層出土石器　石鏃・石錐　2．包含層出土石器　削器・掻器

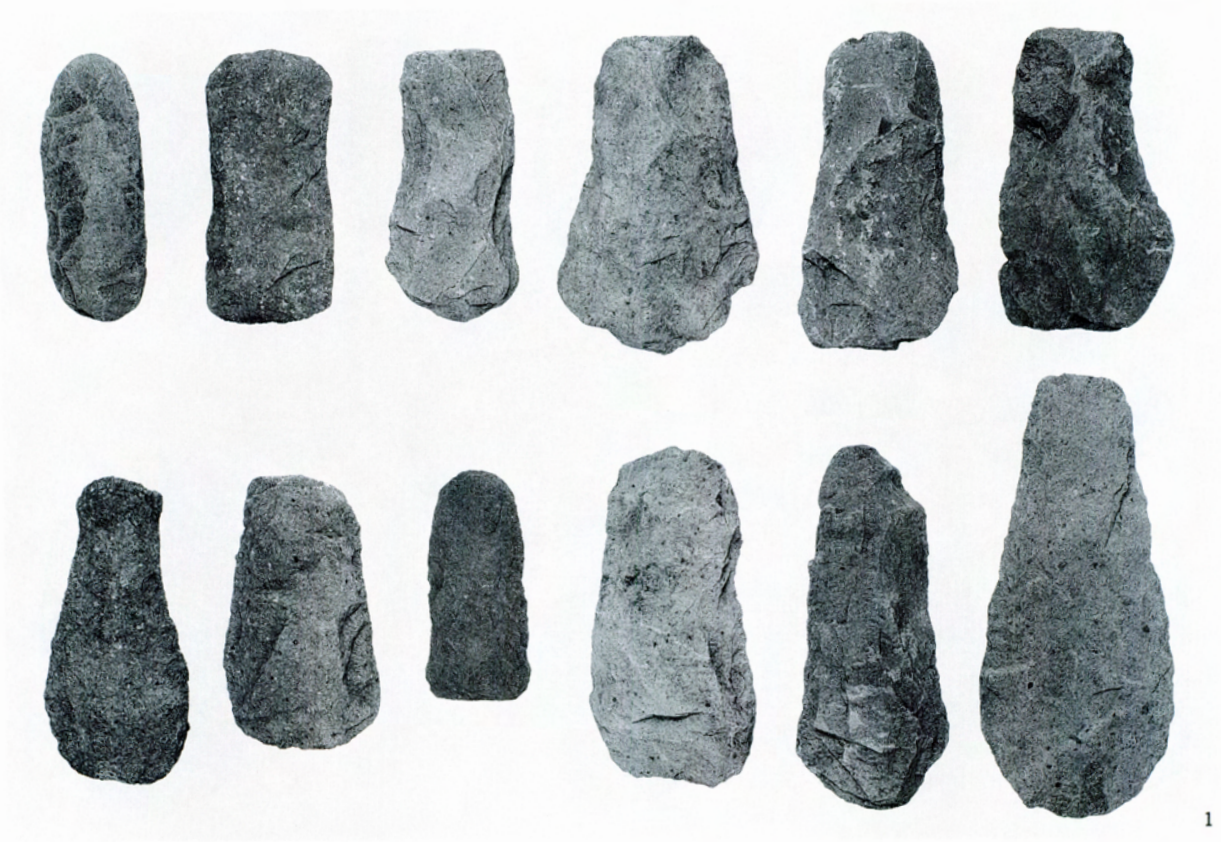
図版50



1

2

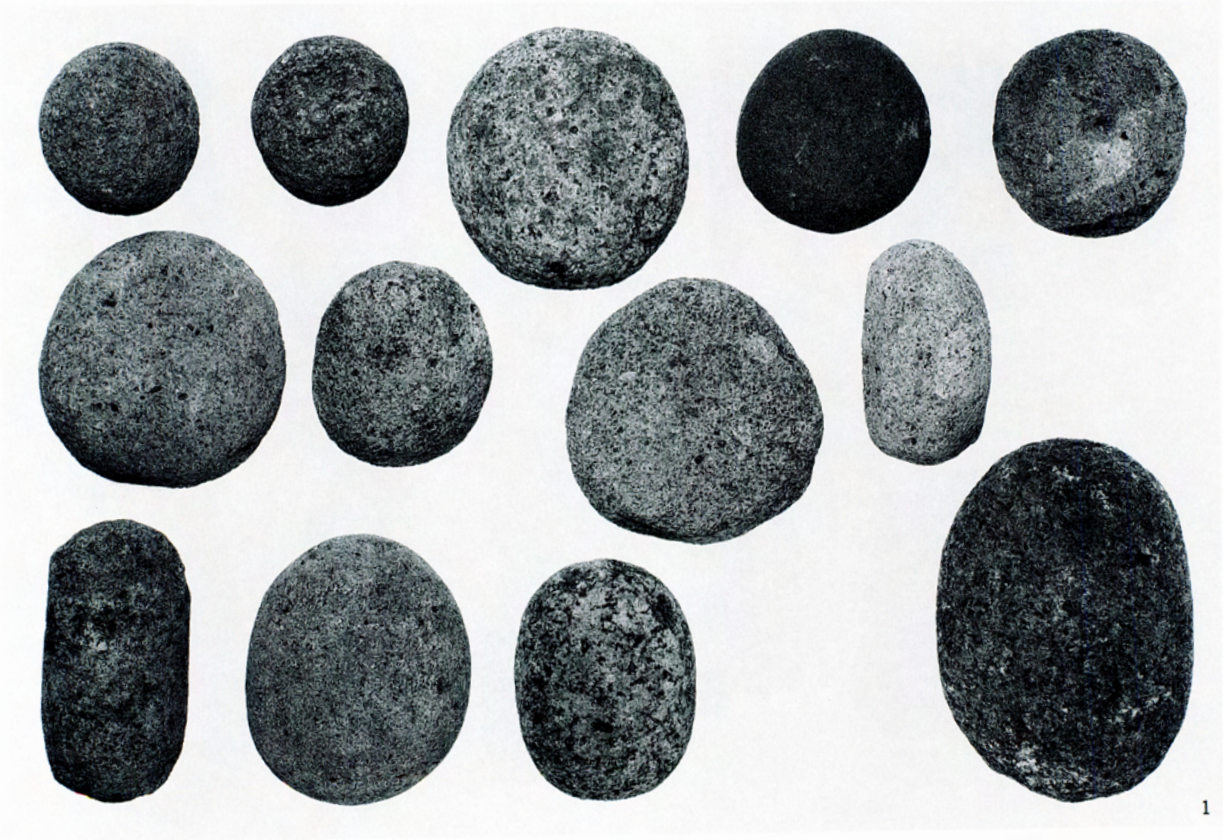
1．包含層出土石器　石匙・両極剝離痕のある石器・二次加工のある剝片
2．包含層出土石器　使用痕のある剝片・異形石器・石核



1

2

1．包含層出土石器　打製石斧　2．包含層出土石器　磨製石斧



1・2．包含層出土石器　磨石・凹石・敲石類

1

2

3

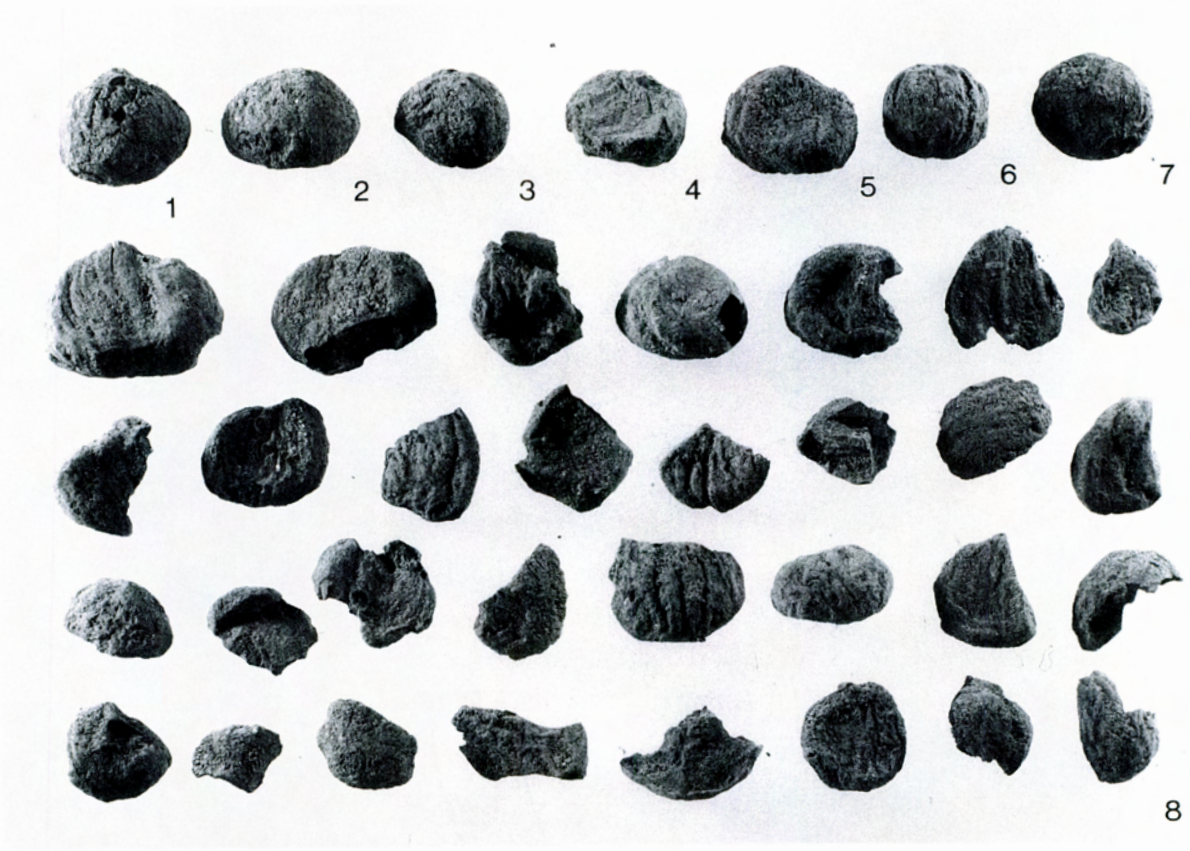
1．包含層出土石器　有溝石錘・砥石　2．包含層出土石器　石皿　3．石製品

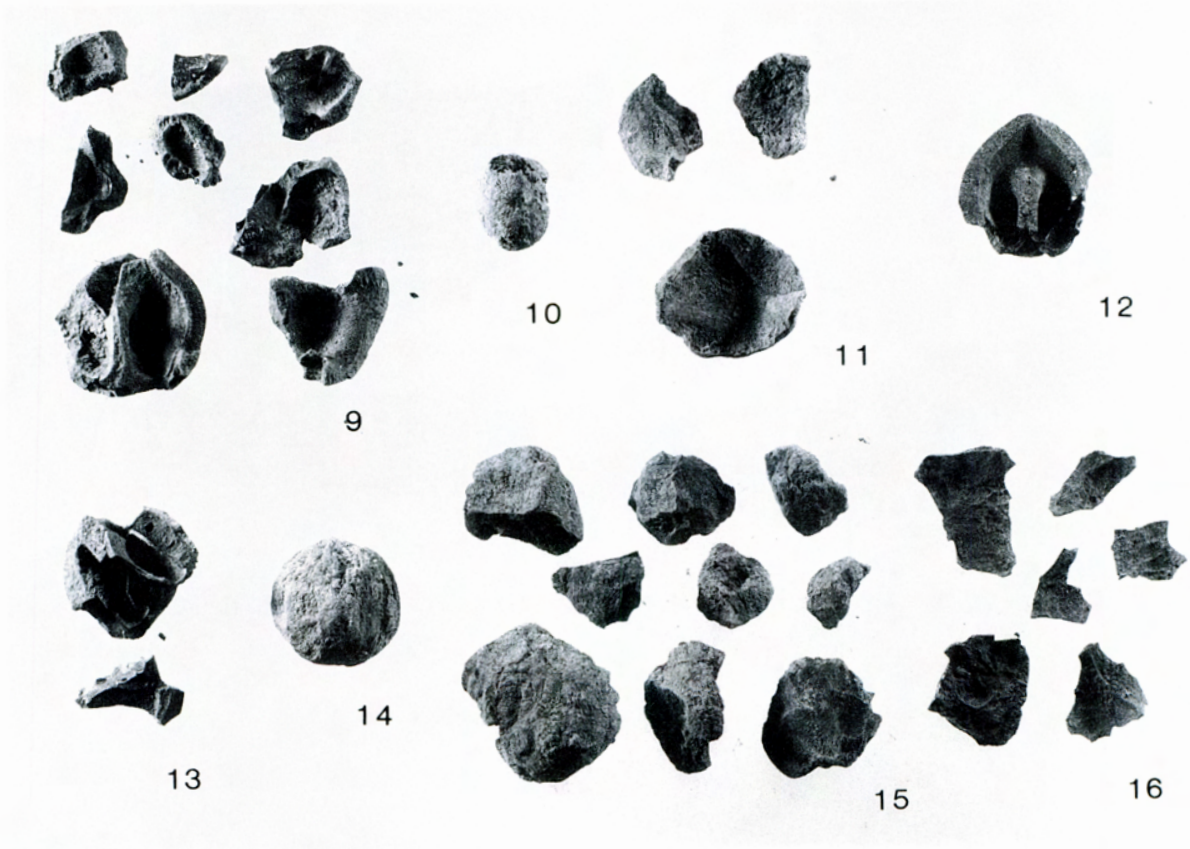
図版54

1

2

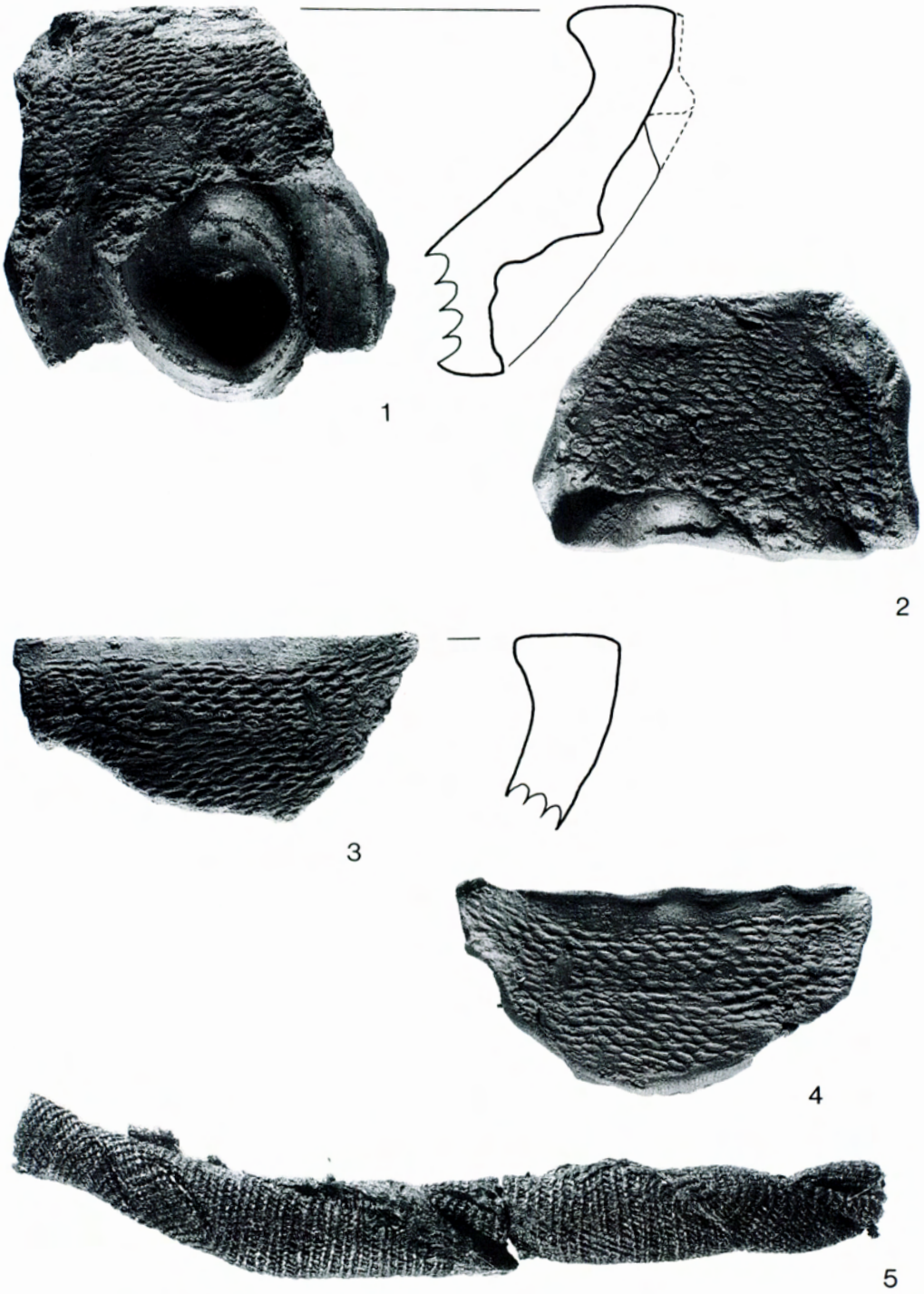
1．土製品　2．木製品





植物遺体（縮尺：実大）
1～8・14：クリ子葉、9・12・13：オニグルミ核、10：コナラ属子葉、11・15：トチ子葉、16：同種皮（1～11：第7号住居址、12～16：遺構外出土）

図版56



編布圧痕と参考資料（縮尺：実大）
1．資料1、2：同モデリング陽像、3：資料2、4：同モデリング陽像、5：秋田県中山遺跡出土編布。

報　告　書　抄　録

ふ り が な	うしがいといせき
書　　名	**牛垣内遺跡**
副　書　名	丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第３集
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第44集
編著者名	野村宗作　伊藤秀雄　谷口和人　上嶋善治　渡辺　誠　岩田　修　古田奈緒子 中野益男　中野寛子　長田正宏
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所　在　地	〒500-8708　岐阜県岐阜市司町１（岐阜総合庁舎内）TEL058-(264)-1111(814)
発行年月日	西暦1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
うしがいといせき 牛垣内遺跡	ぎふけんおおのぐん 岐阜県大野郡 にゅうかわむらおしきじ 丹生川村折敷地	21601	00315	36° 13′ 00″	137° 22′ 42″	19940509 ～ 19941114 19950522 ～ 19951117 4,600㎡	丹生川ダム建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
牛垣内遺跡	集落	縄文 平安	竪穴住居跡10軒 焼礫集積遺構 4基 竈跡 木杭 ピット	縄文土器 石器 土製品 木製品 弥生土器 土師器 灰釉陶器	竪穴住居跡は、縄文時代が９軒、平安時代が１軒。 縄文早期の押型文土器、中期から後晩期の土器が多く出土している。

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第44集

牛　垣　内　遺　跡

丹生川ダム水没地区（五味原遺跡群）埋蔵文化財発掘調査報告書　第3集

1998年3月25日　印刷
1998年3月31日　刊行

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1（岐阜総合庁舎内）
印　　刷　西濃印刷株式会社